宮城県文化財調査報告書第174集

山 王 遺 跡 V

－第2分冊（伏石地区・考察）－

平 成 9 年 3 月

宮 城 県 教 育 委 員 会
建設省東北地方建設局

第301図　伏石地区調査区

第Ⅴ章　伏　石　地　区

伏石地区には、道路跡1条、掘立柱建物跡107棟、竪穴住居跡2棟、工房跡2棟、井戸跡9基、区画施設14条、整地跡1、屋敷跡1、小溝状遺構群5面、溝跡89条、土壙跡285基などがある。以下、主要なものについて説明する。

A　道路跡

【ＳＸ3900道路跡】（第302・303図）

両側に素掘りの側溝を持つ東西道路で、調査区北端で北側溝を3m程、南側溝を10m程検出した。西4道路跡より東側の北2道路跡にあたる。

〔重複〕（古）ＳＤ3906　（新）ＳＤ3907

〔変遷〕北側溝に３時期（Ａ：ＳＤ3658ｃ→Ｂ：ＳＤ3658ｂ→Ｃ：ＳＤ3658ａ）、南側溝に３時期（Ａ：ＳＤ3203ｃ→Ｂ：ＳＤ3203ｂ→Ｃ：ＳＤ3203ａ）の重複がある。このうち、ＳＤ3658ａとＳＤ3203ａは堆積土中に灰白色火山灰のブロックを含んでいることから、同じ時期に機能していたと考えられる（Ｃ期）。これらとの重複状況から、これらより古いＳＤ3658ｂ・ＳＤ3203ｂ（Ｂ期）やさらに古いＳＤ3658ｃ・ＳＤ3203ｃ（Ａ期）は同じ時期に機能していた可能性が考えられる。したがって、本道路には少なくともＡ～Ｃの３時期の変遷があったと考えられる。

〔路面〕路幅は、Ａ期は後続するＢ・Ｃ期に壊されているため不明である。Ｂ・Ｃ期については側溝心心でＢ期が5.4m程、Ｃ期は5.3m程である。

路面舗装の痕跡は特に見られなかったが、路面の側溝に近い部分には炭化物を含む褐灰色の砂質シルトの自然堆積層が広がっており、人為的に埋め戻されたＳＤ3906を覆っている。また、Ｂ・Ｃ期の側溝がこの堆積層を掘り込んでいることから、この堆積層はＡ期の機能時に路面に堆積したものと思われる。

〔北側溝〕Ａ～Ｃの3時期の変遷がある。調査区北端にあるため、各時期とも幅や方向は不明である。

Ａ期は深さ0.3mで、埋土は地山のブロックを含む褐灰色シルトで、人為的に埋め戻されている。

Ｂ期は深さ0.6mで、埋土は地山のブロックを多く含む黒褐色シルトなどで、人為的に埋め戻されている。

Ｃ期は深さ0.5mであり、堆積土は灰白色火山灰のブロックと炭化物を含む黒褐色シルトなどで、自然堆積である。

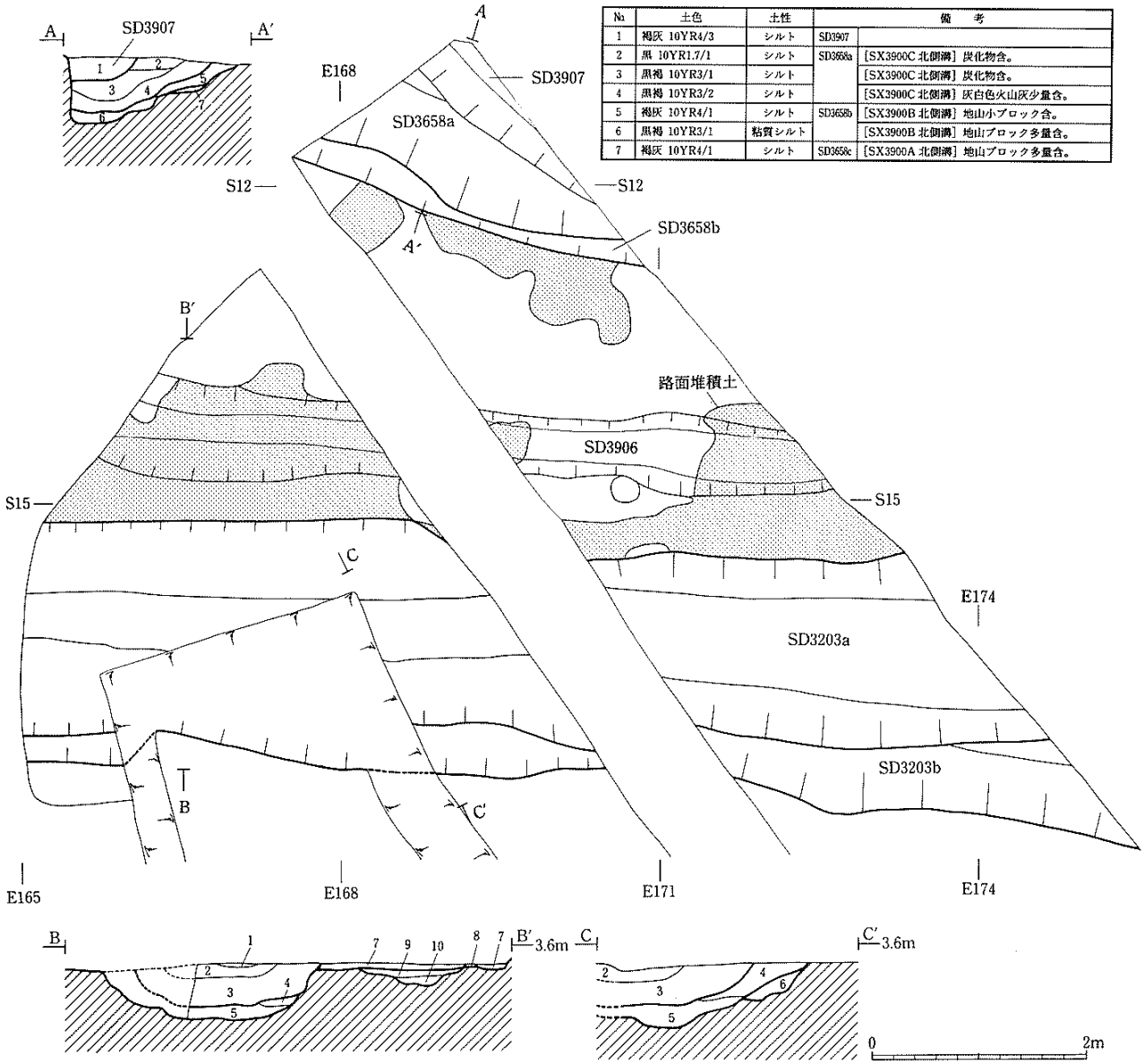
〔南側溝〕Ａ～Ｃの3時期の変遷がある。

Ａ期は後続する側溝に壊されており、幅や方向は不明である。深さは0.4mであり、埋土は地山ブロックを多く含む褐灰色粘質シルトで、人為的に埋め戻されている。

Ｂ期は後続する側溝に壊されているため、上幅は不明である。下幅は0.6～1.1m程で、深さ0.5mである。方向はＥ－5°－Ｓであり、横断面形は上が開く「Ｕ」字形である。埋土は地山のブロックを多く含む灰黄褐色砂質シルトで、人為的に埋め戻されている。

C期は上幅が1.6～2.1m、下幅が0.5～1.0mで、深さは0.4mである。方向はE－3°－Sであり、横断面形は皿状である。堆積土は自然堆積の黒色や褐灰色シルトなどで、肩際から底面にかけて灰白色火山灰がブロック状に含まれる。

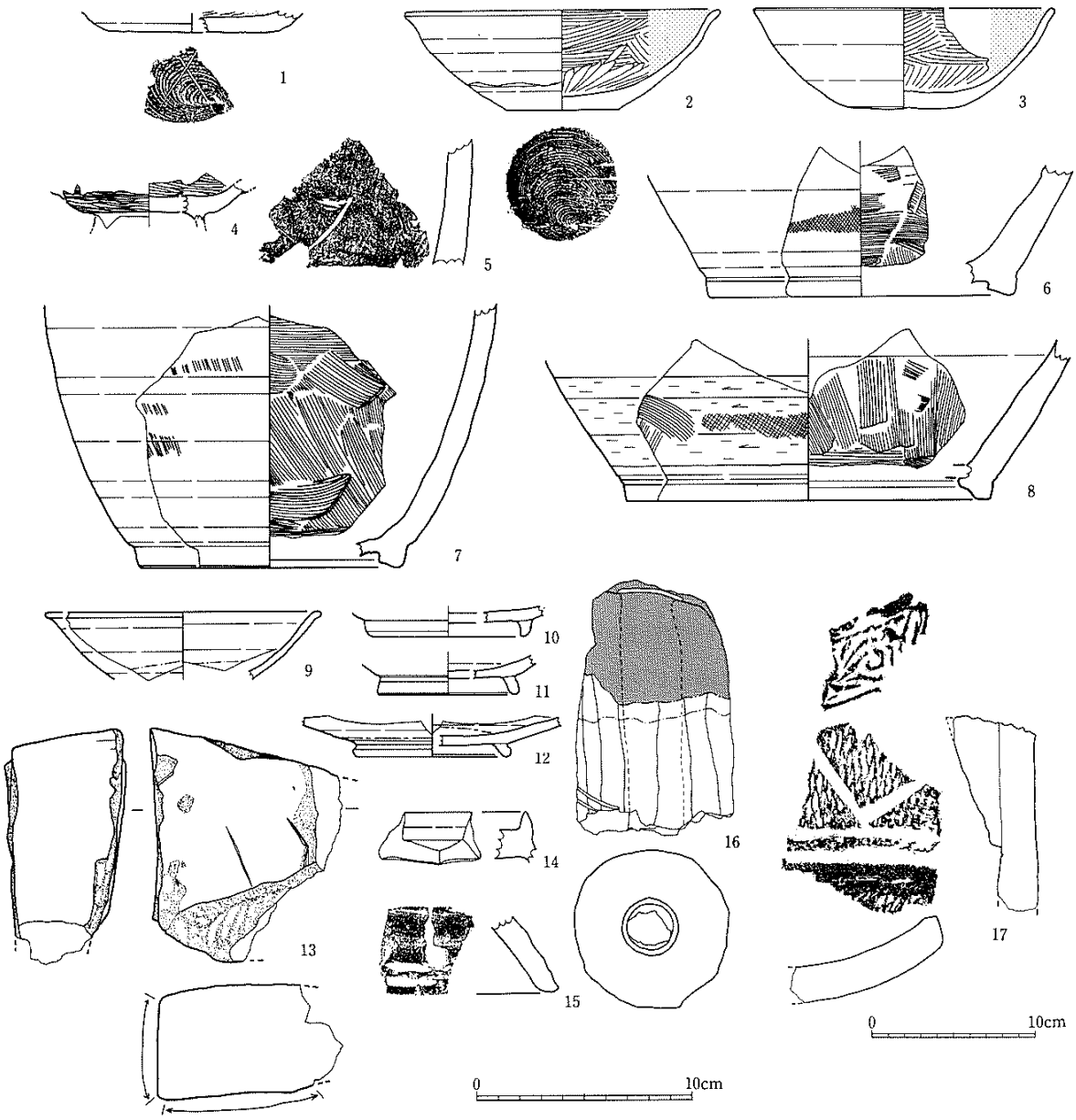
〔出土遺物〕北側溝からは土師器、須恵器、赤焼土器、平瓦、丸瓦、羽口などが出土しており、赤焼土器はB・C期の側溝のみから出土している。南側溝からは土師器、須恵器、灰釉陶器、平瓦、丸瓦などの他、B期側溝から赤焼土器、軒平瓦、砥石、C期側溝から赤焼土器、円面硯、転用硯、砥石、ウマ歯なども出土している。



№	土色	土性	備考	
1	褐灰 10YR4/3	シルト	SD3907	
2	黒 10YR1.7/1	シルト	SD3658a	[SX3900C 北側溝] 炭化物含。
3	黒褐 10YR3/1	シルト		[SX3900C 北側溝] 炭化物含。
4	黒褐 10YR3/2	シルト		[SX3900C 北側溝] 灰白色火山灰少量含。
5	褐灰 10YR4/1	シルト	SD3658b	[SX3900B 北側溝] 地山小ブロック含。
6	黒褐 10YR3/1	粘質シルト		[SX3900B 北側溝] 地山ブロック多量含。
7	褐灰 10YR4/1	シルト	SD3658c	[SX3900A 北側溝] 地山ブロック多量含。

№	土色	土性	備考	
1	黒 10YR1.7/1	シルト	SD3203a	[SX3900C 南側溝] 炭化物少量含。
2	褐灰 10YR4/1	シルト		[SX3900C 南側溝] 炭化物少量含。
3	褐灰 10YR4/1	シルト		[SX3900C 南側溝]灰白色火山灰ブロック少量含。
4	灰黄褐 10YR4/2	砂質シルト	SD3203b	[SX3900B 南側溝] 地山土多量含。
5	灰黄褐 10YR5/2	砂質シルト		[SX3900B 南側溝] 地山ブロック多量含。
6	褐灰 10YR4/1	粘質シルト	SD3203c	[SX3900A 北側溝] 地山ブロック多量含。
7	褐灰 10YR4/1	砂質シルト	路面堆積	地山土少量含。炭化物若干含。
8	暗灰黄 10YR4/1	砂質シルト	SD3906	黒褐色 [10YR3/2] のシルトブロック多量含。
9	褐灰 10YR4/1	シルト		黒褐色 [10YR3/2] のシルトブロック少量含。
10	褐灰 10YR4/1	シルト		黒褐色 [10YR3/2] のシルトブロック多量含。

第302図　SX3900 道路跡



No	種類	側溝	特　　徴	口径	底径	器高	残存	備　　考	写真図版	登録No
1	土師器・坏	南1層	外：ロクロナデ 底：回転糸切り 内：ミガキ→黒色処理	—	(8.1)	—	一部	ヘラ書「×」		203-7
2	土師器・坏	南1層	外：ロクロナデ 底：回転糸切り 内：ミガキ→黒色処理	(14.6)	5.2	4.7	1/4			203-1
3	土師器・坏	南1層	外：ロクロナデ 底：回転糸切り 内：ミガキ→黒色処理	(14.0)	5.0	4.7	1/3			203-2
4	須恵器・双耳坏	南1層	内外：ロクロナデ→ミガキ	—	—	—	一部			203-16
5	須恵器・甕	南2層	外：タタキ→ナデ 内：オサエ（無文）	—	—	—	一部	ヘラ書		203-3
6	須恵器・瓶	南3層	外：ロクロナデ 内：ヘラナデ	—	(14.0)	—	一部	大戸		203-10
7	須恵器・瓶	南3層	外：タタキ→ロクロナデ 底：ロクロナデ 内：ヘラナデ	—	(12.0)	—	一部	大戸		203-9
8	須恵器・瓶	南3層	外：ロクロナデ→回ケズリ 内：ロクロナデ→ナデ	—	(16.8)	—	一部	大戸		203-13
9	灰釉陶器・椀	南1層	内外：ロクロナデ 重ね焼き。	(12.8)	—	—	一部			203-8
10	灰釉陶器	南3層	内外：ロクロナデ 三日月高台 重ね焼き	—	(7.0)	—	一部	硯に転用。		203-6
11	灰釉陶器	南3層	内外：ロクロナデ 三日月高台 重ね焼き	—	(6.4)	—	一部	胎土：緻密		203-4
12	灰釉陶器・皿	南3層	内外：ロクロナデ 三日月高台 重ね焼き	—	(7.4)	—	一部	胎土：緻密		203-5
13	砥石	南5層	砂岩	長10.0	幅8.6	厚5.1	一部			203-11
14	円面硯	南3層		—	—	—	一部	大戸		203-14
15	円面硯	南3層		—	—	—	一部			203-15
16	羽口	北		—	—	—	一部		27-14	658-1
17	軒平瓦	南5層	均整唐草文。凸：縄タタキメ 凹：糸切り痕	—	—	—	一部	多賀城分類721A	26-10	203-12

第303図　SX3900 道路跡出土遺物

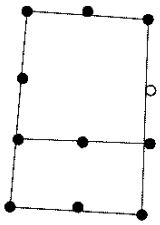
B　掘立柱建物跡

掘立柱建物跡は107棟あり、便宜的にＳＤ3014より北側のものと南側のものとに分けて、本調査したものを中心に、主要なものについて説明する。

北側のグループ

【ＳＢ3340掘立柱建物跡】（第304・305図）

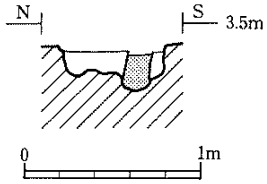
桁行3間、梁行2間の南北棟である。東側柱列がＳＢ3786の西側柱列と柱筋をほぼ揃える。南から1間目の棟通り下には間仕切りの柱穴がある。



〔重複〕（新）ＳＤ3300・3301・3302　（不明）ＳＢ3341・3812、ＳＫ3314

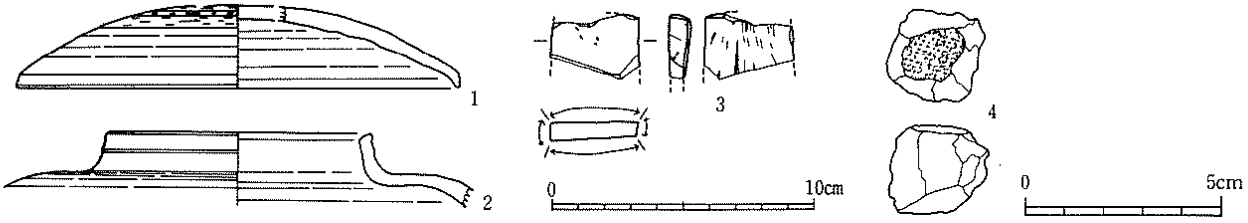
〔柱穴〕隅丸方形や楕円形で、直径0.4～0.6mであり、深さは最も深いもので0.3mである。埋土は地山のブロックを多量に含む黒褐色の砂質シルトである。

〔柱痕跡〕直径15cm前後の円形で、堆積土は黒褐色の粘質シルトである。



〔柱間・方向〕柱間は、桁行が西側柱列で南から1.9m・1.7m・1.9mで、総長は5.5mであり、梁行が北妻で西から1.7m・1.7mで総長3.4mである。方向は東側柱列でN－3°－Eである。

〔出土遺物〕柱穴から土師器、須恵器坏が少量出土した。

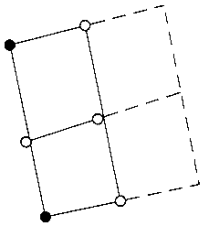


№	種類	遺構	特　　徴	口径	底径	器高	残存	備　　考	写真図版	登録No.
1	須恵器・蓋	SB3340	外：ロクロナデ→回ケズリ 内：ロクロナデ	(16.9)	－	－	1/5			340-1
2	須恵器・短頸壺	SB3340	内外：ロクロナデ	(10.1)	－	－	一部			340-2
3	砥石	SB3341	凝灰岩	長2.5	幅3.3	厚0.6	一部			341-1
4	土製円盤	SB3341	瓦を転用	長2.3	幅2.3	厚2.3	一部			341-2

第304図　SB3340・3341 建物跡出土遺物

【ＳＢ3341掘立柱建物跡】（第304・305図）

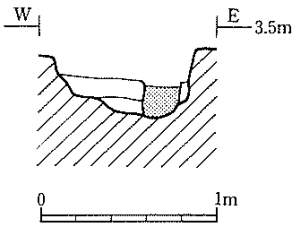
南北２間、東西１間以上の建物跡である。攪乱を挟んで東に柱列がないので、東西は２間までであり、総柱建物跡の可能性がある。



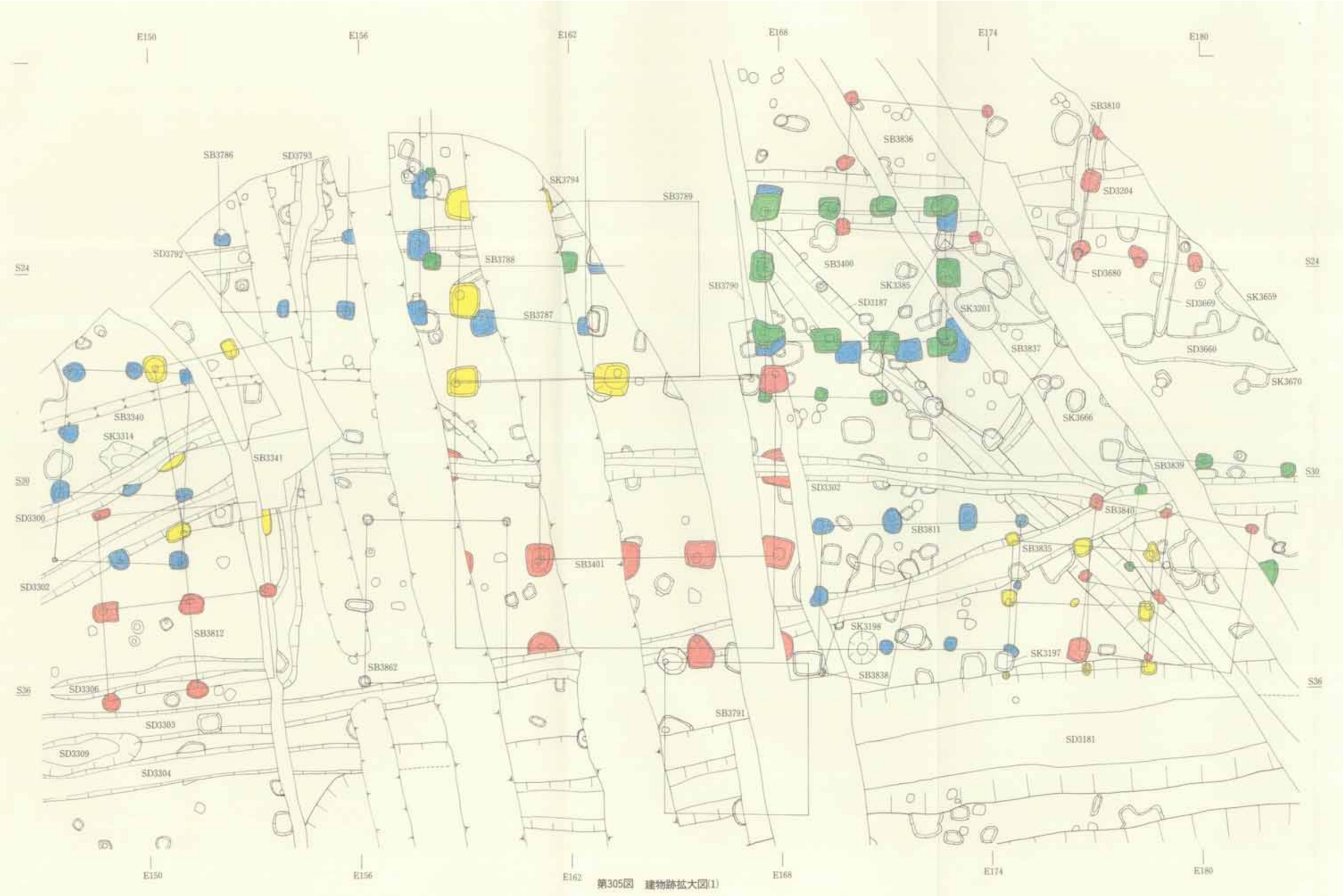
〔重複〕（新）ＳＤ3300・3301・3302　（不明）ＳＢ3340・3812

〔柱穴〕隅丸方形で、一辺が 0.4～0.8mで、深さは最も深いもので 0.4mである。埋土は炭化物と地山の小ブロックを含む黒色や黒褐色の粘質シルトである。

〔柱痕跡〕直径 20cm 前後の円形で、堆積土は炭化物を少量含む黒褐色などの粘質シルトである。



〔柱間・方向〕柱間は、南北が西側柱列で南から 4.8m（2 間分）であり、東西は北側柱列で 2.2mである。方向は西側柱列でN－11°－W



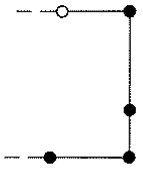
第305図　建物跡拡大図(1)

である。

〔出土遺物〕柱穴埋土中からロクロ調整の土師器、須恵器の他、土製円盤、砥石などが少量出土した。坏類は土師器、須恵器ともに回転糸切り無調整のものが比較的多い。

【ＳＢ3343掘立柱建物跡】（第306図）

南北3間、東西2間以上の建物跡で、北側柱列の東から3番目の柱穴はＳＢ3342Ａ・Ｂに壊されていると思われ、建物跡の西半部は調査区外に延びる可能性もある。



〔重複〕（新）ＳＢ4432Ａ・Ｂ　（不明）ＳＫ3321

〔柱穴〕隅丸方形や楕円形で、一辺が0.3～0.6mであり、深さは最も深いもので0.3mである。埋土は地山ブロックを含む黒褐色のシルトである。

〔柱痕跡〕長径15㎝前後の円形で、堆積土は炭化物を少量含む黒褐色の粘質シルトである。

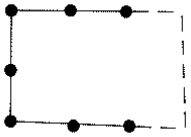
〔切取り穴〕北東隅の柱穴で確認された。埋土は地山ブロックを多量に含む黒褐色の砂質シルトである。

〔柱間・方向〕柱間は、南北が東側柱列で南から1.2m・2.5m（2間分）で、総長3.7mであり、東西は南側柱列で東から2.0m・以下不明である。方向は東側柱列でN－1°－Eである。

〔出土遺物〕遺物は出土していない。

【ＳＢ3344掘立柱建物跡】（第306図）

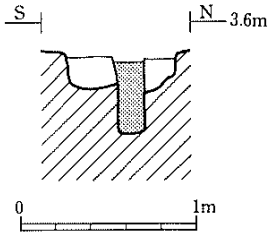
桁行3間以上、梁行2間の東西棟で、東側柱列は攪乱によって壊されている。攪乱の東側には柱穴が無いことから桁行は3間と考えられる。



〔重複〕（古）ＳＢ3841、ＳＩ3799　（新）ＳＤ3307　（不明）ＳＤ3177

〔柱穴〕隅丸方形で、一辺が0.4～0.8mであり、深さは最も深いもので0.3mである。埋土は地山のブロックを多量に含む黒褐色のシルトである。

〔柱痕跡〕直径10～20㎝の円形で、堆積土は炭化物を若干含む黒褐色シルトである。

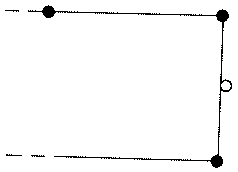


〔柱間・方向〕柱間は、桁行が北側柱列で西から1.5m・1.4m・不明である。梁行は西妻で北から1.5m・1.3mで、総長2.8mである。方向は北側柱列でE－0°－N・Sである。

〔出土遺物〕遺物は出土していない。

【ＳＢ3345掘立柱建物跡】（第306図）

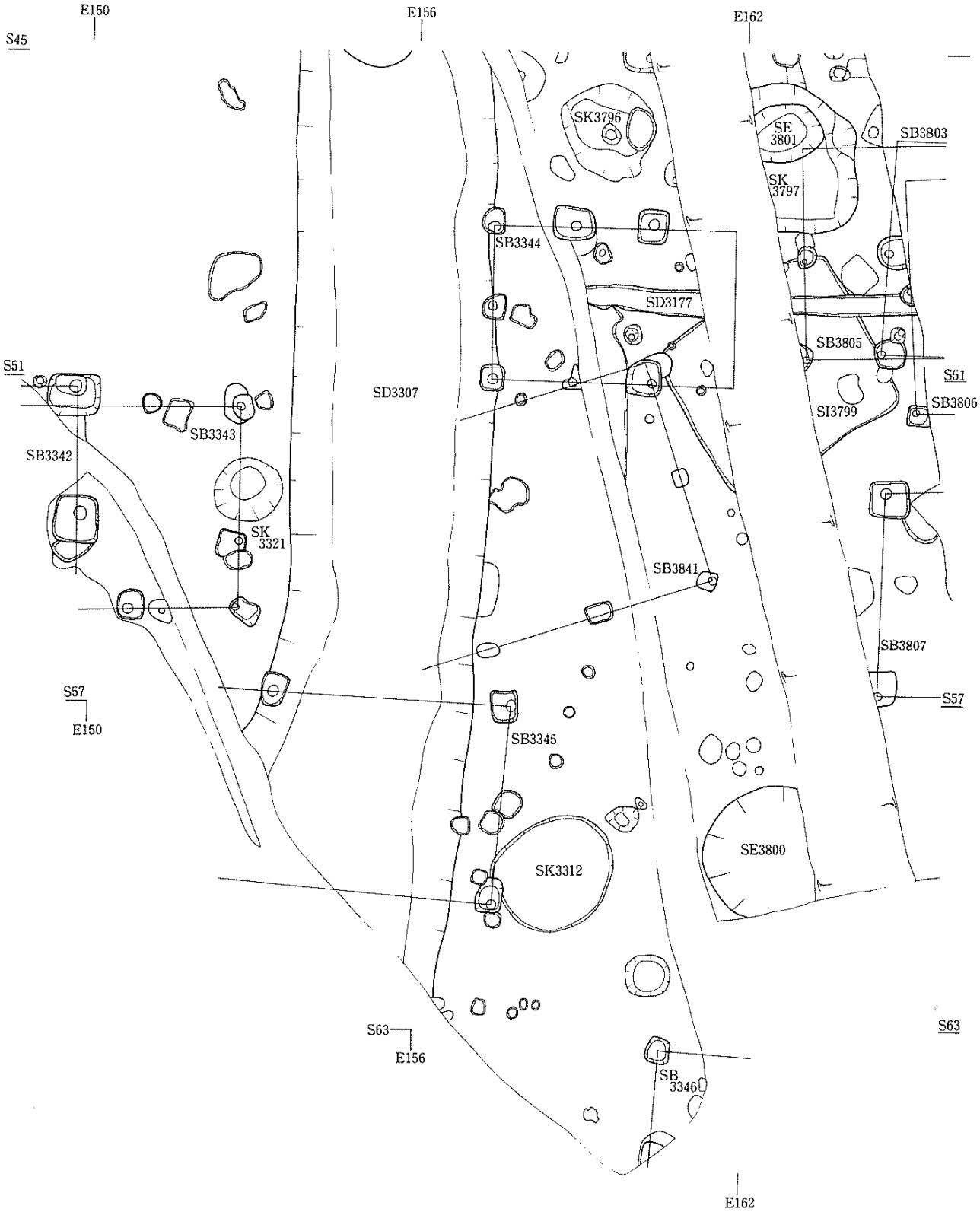
南北2間、東西2間以上の建物跡で、西側は調査区外に延びる可能性がある。東から2番目の柱穴はＳＤ3307に壊されている。



〔重複〕（古）ＳＫ3312　（新）ＳＤ3307

〔柱穴〕隅丸方形で一辺が0.5～0.6mであり、深さは最も深いもので0.5mである。埋土は地山のブロックを多く含む黒褐色の粘質シルトである。

〔柱痕跡〕直径20㎝程の円形で、堆積土は地山の粒を若干含む黒褐色の



第306図　建物跡拡大図(2)

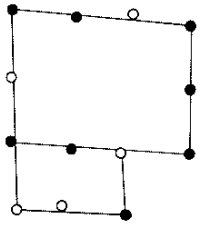
粘質シルトである。

〔柱間・方向〕柱間は、東西が北側柱列で 4.4m（2 間分）であり、南北は東側柱列で北から 1.8m・1.9mで、総長3.7mである。方向は北側柱列でＥ－3°－Ｓである。

〔出土遺物〕柱穴から土師器が少量出土した。坏には回転糸切り無調整・手持ちヘラケズリのものがある。

【ＳＢ3400Ａ・Ｂ掘立柱建物跡】（第 305・307 図）

桁行 3 間、梁行 2 間の東西棟で、同位置で 1 度建て替えられている。また、Ｂ期の建物には南側に 2 間分の廂が付けられており、柱は切取りあるいは抜取られている。また、南側柱列はＳＢ3787 の南側柱列と柱筋が揃う。

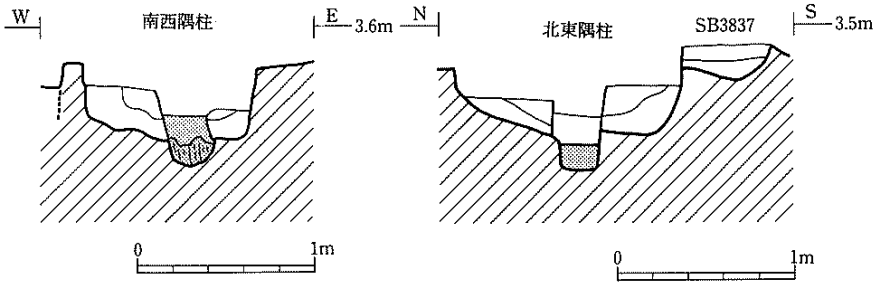


〔重複〕（古）ＳＢ3836・3837、ＳＤ3187・3204　（新）ＳＢ3401　（不明）ＳＢ3790

〔柱穴〕Ａ期は隅丸方形や楕円形で、一辺が 0.6～1.1mであり、深さは最も深いもので 0.5mである。Ｂ期は隅丸方形で、一辺が 0.6～0.9mであり、深さは最も深いもので 0.6mである。廂の柱穴は身舎に較べて小さい。埋土はＡ・Ｂ期ともに地山のブロックを含む黒褐色や暗褐色のシルトである。

〔柱痕跡〕Ａ期はＢ期の柱穴に壊されており不明である。Ｂ期は直径 25㎝ 程の円形で、堆積土は黒色のシルト質粘土である。南西隅の柱穴では柱根も残っていた。

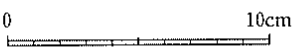
〔切取り・抜取り穴〕Ｂ期について切取り穴を 4 ヵ所、抜取り穴を 3 ヵ所検出した。埋土はいずれも地山のブロックを含む黒褐色のシルト質粘土である。



〔柱間・方向〕Ａ期は後続するＢ期に壊されているため判然としないが、Ｂ期とほぼ同様と思われる。Ｂ期は桁行が北側柱列で西から 1.8m・1.7m・1.7mで、総長は 5.2mである。梁行は東妻で南から 1.8m・2.0mで、総長は 3.8mである。廂の出は 1.8mである。方向は北側柱列でＥ－4°－Ｓである。

〔出土遺物〕Ｂ期の柱穴や抜取り穴から土師器、須恵器、平瓦が出土した。土師器にはロクロ調整のものが含まれており、須恵器坏はヘラ切り無調整のものが多い。

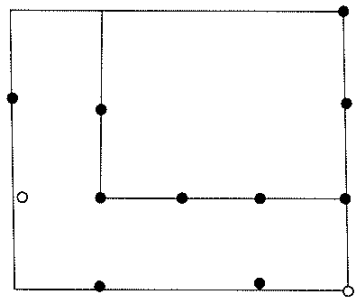
No	種類	層位	特　徴	口径	底径	器高	残存	写真図版	登録No
1	須恵器・瓶	掘方	外：回ケズリ 底：回ケズリ？ 内：ロクロナデ	－	8.8	－	一部		400-1



第307図　SB3400 建物跡出土遺物

【ＳＢ3401 掘立柱建物跡】（第 305 図）

桁行 4 間、梁行 3 間の東西棟で、1 間分の廂が南と西につく建物跡である。後続する建物跡や溝跡、



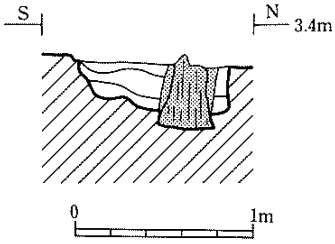
攪乱によって多くの柱穴が壊されている。

〔重複〕（古）ＳＢ3400・3434・3790　（新）ＳＢ3789・3791、ＳＤ3302・3303

〔柱穴〕身舎、廂ともに隅丸方形や楕円形で、一辺が0.8～1.1mであり、深さは最も深いもので0.6mである。埋土は地山のブロックと炭化物・焼土を多く含む黒褐色のシルト質粘土である。

〔柱痕跡〕身舎は直径20～30㎝程の円形で、堆積土は地山の小ブロックを含む黒色のシルト質粘土である。北東隅の柱穴では柱根が残っていた。廂は直径20～30㎝程の円形で、堆積土は地山の小ブロックと少量の灰白色火山灰を含む黒色のシルト質粘土である。

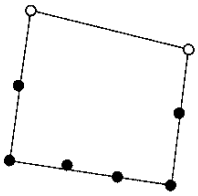
〔柱間・方向〕柱間は、桁行が南入側柱列で東から2.5m・2.2m・2.3mであり、廂の出が身舎の棟通り下で2.6mで、総長は9.5m程と思われる。梁行は東妻で北から2.6m・2.7mであり、廂の出が東から1間目で2.4mで、総長は7.7m程と思われる。方向は南入側柱列でＥ－1°－Ｎである。



〔出土遺物〕柱穴や柱痕跡から土師器、須恵器、赤焼土器、平瓦、丸瓦が出土した。

【ＳＢ3402掘立柱建物跡】（第308図）

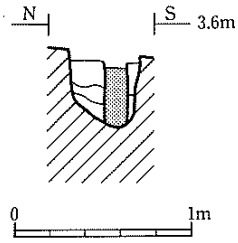
桁行3間、梁行2間の東西棟で、北側柱列の東から2番目と3番目の柱穴はＳＤ3178に壊されている。また、北西隅の柱は抜取られている。



〔重複〕（新）ＳＤ3178

〔柱穴〕楕円形や隅丸長方形で、長径0.2～0.4mであり、深さは最も深いもので0.4mである。埋土は地山のブロックを多量に含む黒褐色のシルト質粘土である。

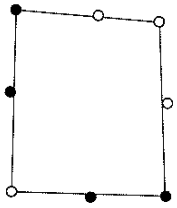
〔柱痕跡〕直径10㎝程の円形で、堆積土は黒色のシルト質粘土である。



〔柱間・方向〕柱間は、桁行が南側柱列で東から1.5m・1.4m・1.6mで、総長4.5mである。梁行は西妻で南から2.1m・2.2mで、総長4.3mである。方向は南側柱列でＥ－7°－Ｓである。

〔出土遺物〕遺物は出土していない。

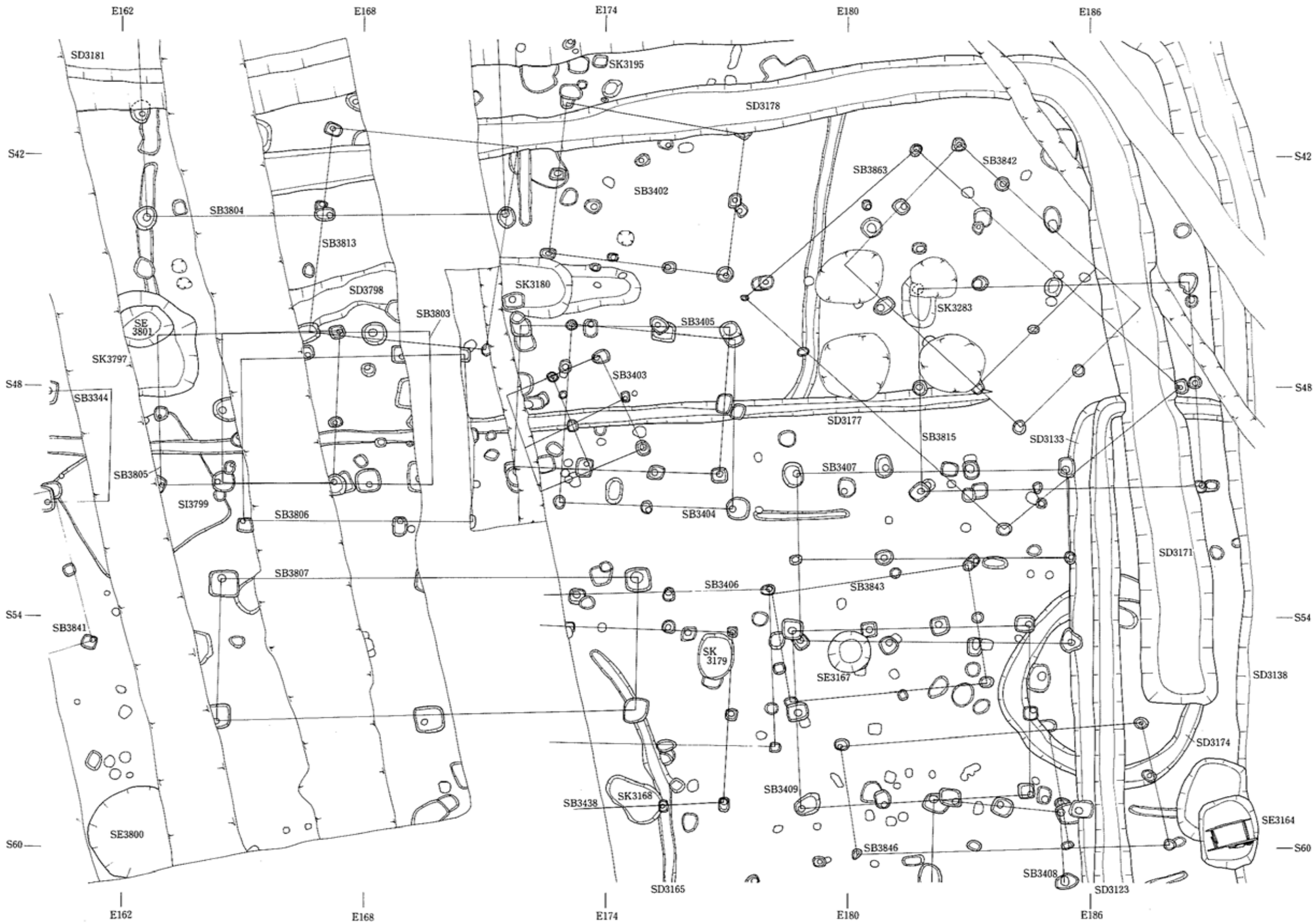
【ＳＢ3404掘立柱建物跡】（第308図）



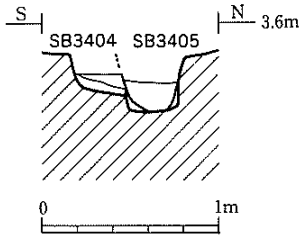
桁行2間、梁行2間の建物跡で、西側柱列の北から2番目の柱穴は柱痕跡のみを検出した可能性がある。

〔重複〕（古）ＳＤ3177　（新）ＳＢ3405　（不明）ＳＢ3403

〔柱穴〕隅丸長方形や楕円形で、一辺が0.3～0.6mであり、深さは最も深いもので0.2mである。埋土は地山のブロックを多量に含む黒褐色の粘土質シルトである。



第308図　建物跡拡大図(3)



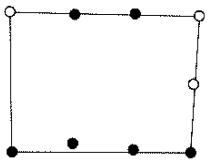
〔柱痕跡〕直径10～15㎝の円形で、堆積土は黒褐色のシルトである。

〔柱間・方向〕柱間は、桁行が南側柱列で東から2.1m・2.2mで、総長4.3mである。梁行は西妻で北から1.8m・2.8mで、総長3.6mである。方向は西側柱列でN－4°－Eである。

〔出土遺物〕柱穴から土師器がごく少量出土した。

【ＳＢ3405掘立柱建物跡】（第308図）

桁行3間以上、梁行2間の東西棟で、西側は排水溝に壊されていると思われる。さらに西側へは延びないので、桁行は3間程と思われる。また、南東隅以外の隅柱は抜取られている。なお、南側柱列はＳＢ3407の北側柱列と柱筋が揃う。



〔重複〕（古）ＳＢ3403・3404、ＳＤ3177　（不明）ＳＢ3814

〔柱穴〕隅丸方形で、一辺が0.3～0.5mであり、深さは最も深いもので0.3mである。埋土は地山のブロックを含む黒褐色の粘土質シルトである。

〔柱痕跡〕直径15㎝前後の円形で、堆積土は炭化物を若干含む黒褐色の粘土質シルトである。

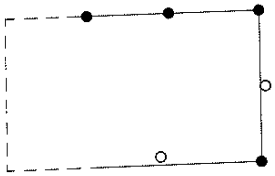
〔抜取り穴〕南東隅以外の隅柱で確認された。埋土は地山の粒を含む黒色の粘土質シルトである。

〔柱間・方向〕柱間は、桁行が南側柱列で東から1.6m・1.7m・1.8mで、総長5.1mである。梁行は東側柱列で南から1.9m・1.9mで、総長3.8mである。方向は南側柱列でE－1°－Sである。

〔出土遺物〕柱穴から土師器、須恵器がごく少量出土した。土師器にはロクロ調整のものも含まれている。

【ＳＢ3406掘立柱建物跡】（第308図）

「コ」字状に並ぶ6個の柱穴から推定されるもので、西隣の調査区からは柱穴が検出されていないので桁行3間、梁行2間の東西棟と思われる。



〔重複〕（古）ＳＢ3843　（不明）ＳＢ3438・3807、ＳＤ3165、ＳＫ3179

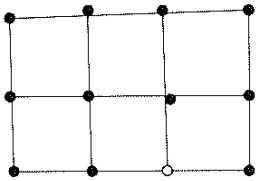
〔柱穴〕隅丸長方形で、一辺が0.3～0.5mであり、深さは最も深いもので0.2mである。埋土は地山のブロックを多く含む黒褐色のシルトである。

〔柱痕跡〕直径15㎝前後の円形で、堆積土は炭化物を含む黒褐色のシルトである。

〔柱間・方向〕柱間は、桁行が北側柱列で東から2.5m・2.3m・不明であり、梁行は東妻で北から2.1m・2.1mで、総長4.2mである。方向は北側柱列でE－2°－Nである。

〔出土遺物〕柱穴から土師器がごく少量出土した。

【ＳＢ3407掘立柱建物跡】（第308図）



桁行3間、梁行2間の東西棟総柱建物跡である。一部の柱は切取りあるいは抜取られている。また、北側柱列はＳＢ3405の南側柱列と柱筋が揃う。

〔重複〕（古）ＳＤ3133　（新）ＳＢ3409・3843　（不明）ＳＢ3815・3864・3174

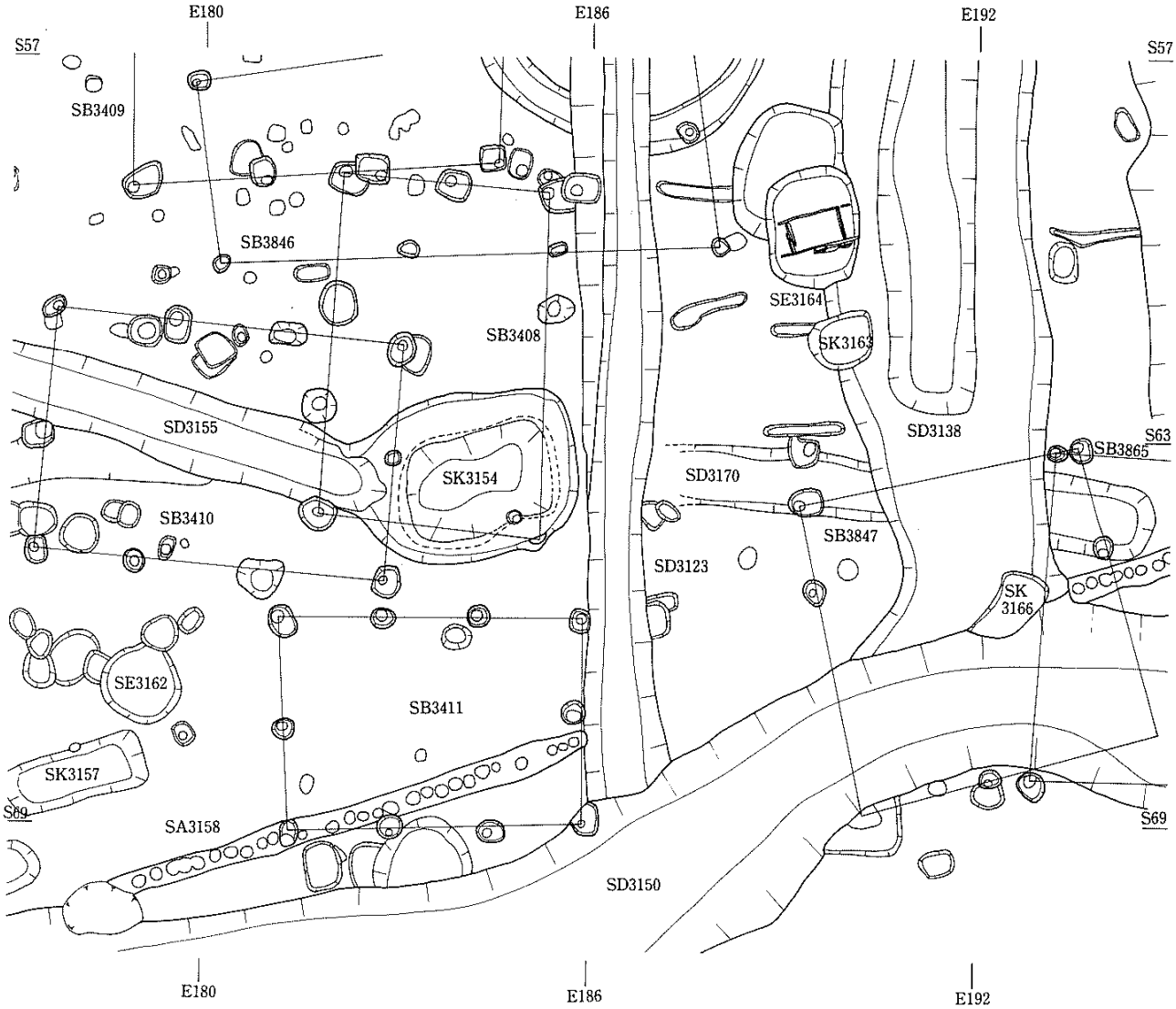
〔柱穴〕隅丸長方形で、一辺が0.2～0.6mであり、深さは最も深いもので0.5mである。埋土は地山のブロックを多く含む黒褐色のシルトである。

〔柱痕跡〕直径15～20㎝程の円形で、堆積土は炭化物を含む黒褐色のシルトである。

〔切取り・抜取り穴〕北西隅の柱穴と南側柱列の東から2番目の柱穴で確認された。埋土は地山のブロックを含む黒褐色のシルトである。

〔柱間・方向〕柱間は、桁行が北側柱列で西から2.2m・2.1m・2.4mで、総長6.6mある。梁行は西側柱列で北から2.2m・2.1mで、総長4.3mである。方向は北側柱列でＥ－1°－Ｎである。

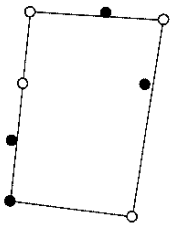
〔出土遺物〕柱穴から土師器、須恵器がごく少量出土した。



第309図　建物跡拡大図(4)

【ＳＢ3408掘立柱建物跡】（第309図）

桁行3間、梁行2間の南北棟で、南東部の柱穴の多くはＳＫ3154・ＳＤ3155に壊されている。



〔重複〕（新）ＳＢ3409、ＳＫ3154、ＳＤ3155　（不明）ＳＢ3410・3845・3846・3864

〔柱穴〕楕円形や隅丸長方形で、長径は0.4～0.7mであり、深さは最も深いもので0.6mである。埋土は地山のブロックを多量に含む黒褐色のシルトである。

〔柱痕跡〕直径10～20㎝程の円形で、堆積土は地山のブロックを含む黒褐色のシルトである。

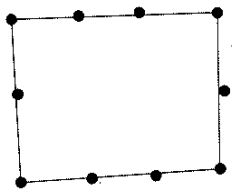
〔柱間・方向〕柱間は、桁行が西側柱列で南から1.7m・1.6m・2.0mで、総長5.3mである。梁行は北妻で西から1.6m・1.7mで、総長3.3mである。方向は西側柱列でN－5°－Eである。

〔出土遺物〕柱穴から土師器と製塩土器が少量出土した。

【ＳＢ3409掘立柱建物跡】（第308図）

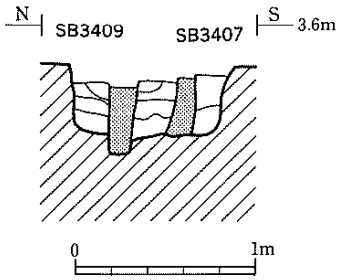
桁行3間、梁行2間の東西棟である。

〔重複〕(古)ＳＢ3407・3408・3843、ＳＤ3174　（新）ＳＫ3167　（不明）ＳＢ3846・3864



〔柱穴〕隅丸方形で、一辺が0.4～0.5mであり、深さは最も深いもので0.6mである。埋土は地山のブロックを含む黒褐色のシルトである。

〔柱痕跡〕直径15～20㎝程の円形で、堆積土は炭化物を含む黒褐色のシルトである。

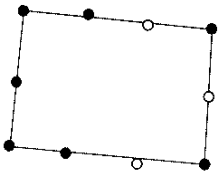


〔柱間・方向〕柱間は、桁行が北側柱列で西から1.9m・1.7m・2.2mで、総長5.8mである。梁行は西側柱列で北から2.1m・2.5mで、総長4.6mである。方向は北側柱列でE－2°－Nである。

〔出土遺物〕柱穴から土師器が少量出土した。

【ＳＢ3410掘立柱建物跡】（第309図）

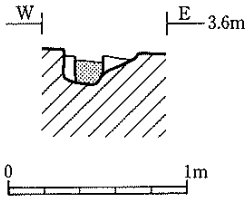
桁行3間、梁行2間の東西棟である。北側柱列の東から2番目の柱は抜取られている。



〔重複〕（新）ＳＫ3154、ＳＤ3155　（不明）ＳＢ3408

〔柱穴〕隅丸長方形や楕円形で、一辺が0.3～0.6mであり、深さは最も深いもので0.3mである。埋土は地山のブロックを多く含む黒褐色のシルトである。

〔柱痕跡〕直径20㎝前後の円形で、堆積土は炭化物や焼土、地山のブロックを含む黒褐色のシルトである。



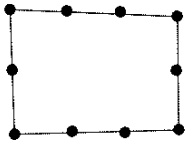
〔柱間・方向〕柱間は、桁行が北側柱列で西から1.9m・1.7m・1.8mで、総長5.1mである。梁行は西妻で北から2.0m・1.9mで、総長3.9mである。方向は北側柱列でE－6°－Sである。

〔出土遺物〕柱抜取り穴から平瓦が出土した。

【ＳＢ3411掘立柱建物跡】（第309図）

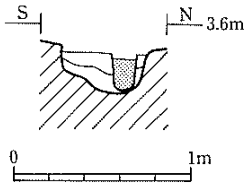
桁行3間、梁行2間の東西棟である。北東隅の柱は切取られている。

〔重複〕（古）ＳＡ3158　（新）ＳＤ3123・3133・3150



〔柱穴〕楕円形や隅丸方形で、長径が0.3～0.5mであり、深さは最も深いもので0.3mである。埋土は地山のブロックと炭化物を含む黒褐色のシルトである。

〔柱痕跡〕直径10～20cmの円形で、堆積土は炭化物や地山の粒を含む黒褐色のシルト質粘土である。

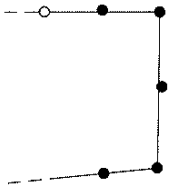


〔柱間・方向〕柱間は、桁行が北側柱列で西から1.6m・1.5m・1.6mで、総長4.7mである。梁行は西妻で北から1.7m・1.8mで、総長3.5mである。方向は北側柱列でＥ－0°－Ｎ・Ｓである。

〔出土遺物〕柱穴から土師器、須恵器、鎹が出土した。

【ＳＢ3438掘立柱建物跡】（第308・310図）

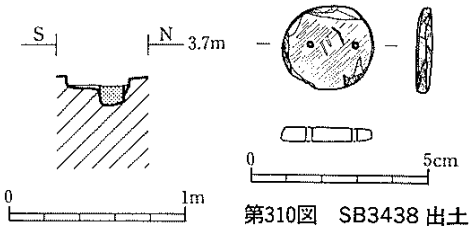
「コ」字状にならぶ6個の柱穴から推定されるもので、西隣の調査区からは柱穴が検出されていないので桁行3間、梁行2間の東西棟と思われる。



〔重複〕（古）ＳＤ3165、ＳＫ3168　（新）ＳＫ3179　（不明）ＳＢ3406

〔柱穴〕隅丸長方形や楕円形で、一辺が0.2～0.4mであり、深さは最も深いもので0.2mである。埋土は地山のブロックを多量に含む褐灰色のシルトである。

〔柱痕跡〕直径10～15cmの円形で、堆積土は炭化物を含む黒色のシルトである。



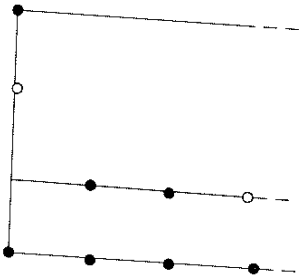
第310図　SB3438 出土

〔柱間・方向〕柱間は、桁行が北側柱列で東から1.6m・1.6m・不明であり、梁行は東妻で北から2.1m・2.3mで、総長4.4mである。方向は東妻でＮ－3°－Ｅである。

〔出土遺物〕柱穴から土師器、須恵器、石製模造品が少量出土した。

【ＳＢ3446掘立柱建物跡】（第311図）

「Ｌ」字形に並ぶ柱穴から推定した建物跡で、桁行3間以上、梁行2間の東西棟の身舎に、1間分の廂が南につく建物跡であると思われる。南西隅の柱穴は攪乱に壊されていると思われる。また、廂部分の西端の柱穴は柱痕跡のみを検出した可能性がある。なお、西妻はＳＢ3415・3865の東側柱列と柱筋が揃う。さらに、11～12m程西にあるＳＤ3123・3133はこの建物跡と方向がほぼ揃う。

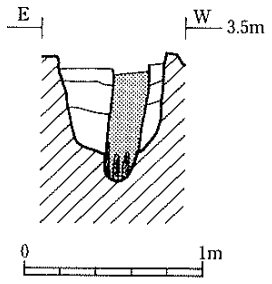


〔重複〕（古）ＳＤ3064・3187　（新）ＳＤ3150、ＳＫ3751　（不明）ＳＢ3817

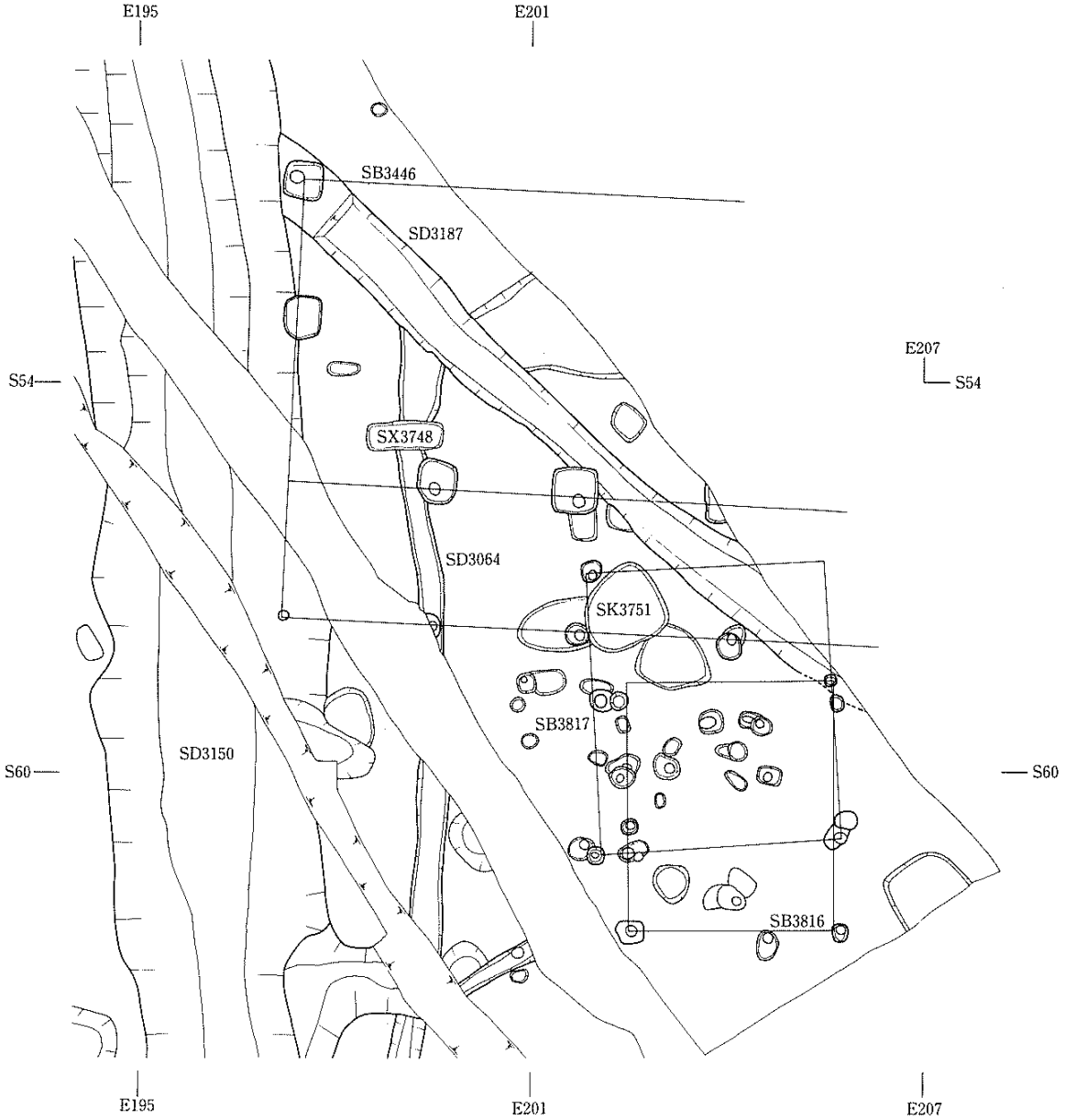
〔柱穴〕身舎は隅丸方形で、一辺が0.5～0.7mであり、深さは最も深いもので0.6mである。廂は楕円形

で、長径が0.3〜0.4mであり、深さは最も深いもので0.5mである。埋土は身舎、廂ともに地山のブロックと炭化物を含む黒褐色の粘質シルトである。

〔柱痕跡〕身舎は直径20㎝程の円形で、堆積土は炭化物と地山の粒を含む黒色の粘質シルトである。北西隅の柱穴には柱根が残っていた。廂は直径15㎝前後の円形で、堆積土は褐灰色の粘質シルトである。



〔柱間・方向〕柱間は、桁行が南側柱列で西から2.3m・2.2m・2.4mである。梁行は西妻で北から2.2m・4.6m（2間分）で、総長6.8mである。廂の出は西から1間目で2.1mである。方向は南側柱列でＥ−3°−Ｓである。



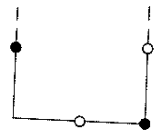
第311図　建物跡拡大図(5)

〔出土遺物〕柱穴から土師器、須恵器が少量出土した。

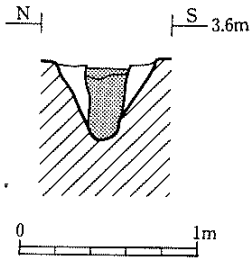
【ＳＢ3786掘立柱建物跡】（第305図）

「コ」字状に並ぶ4個の柱穴から推定されるもので、東西2間、南北2間以上の建物跡と思われる。南側柱列はＳＢ3400・3787の南側柱列と柱筋が揃う。

〔重複〕（古）ＳＤ3792　（不明）ＳＤ3793



〔柱穴〕隅丸方形で、一辺が0.4～0.5mであり、深さは最も深いもので0.4mである。埋土は多量の地山の土と炭化物を若干含む黒褐色のシルト質砂である。



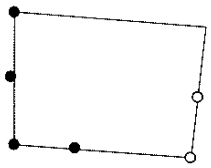
〔柱痕跡〕直径20㎝前後の円形で、堆積土は黒褐色の砂質シルトである。

〔柱間・方向〕柱間は、東西が南側柱列で1.8m・不明で、総長は南から1間目の柱列で3.7mである。南北は東側柱列で2.1m・以下不明である。方向は柱穴が少ないので確定できない。

〔出土遺物〕柱穴から土師器がごく少量出土した。

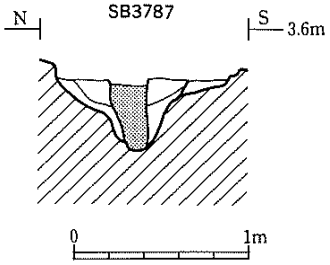
【ＳＢ3787掘立柱建物跡】（第305図）

調査区北端で「コ」字状にならぶ6個の柱穴から推定されるもので、東西3間、南北2間以上の建物跡と思われる。南側柱列の東から2番目の柱穴は攪乱に壊されていると思われる。なお、南側柱列はＳＢ3400・3786の南側柱列と柱筋が揃う。



〔重複〕（古）ＳＤ3792　（新）ＳＢ3788・3789・3790　（不明）ＳＫ3794

〔柱穴〕隅丸方形や隅丸長方形で、一辺が0.5～0.9mであり、深さは最も深いもので0.6mである。埋土は地山の土と炭化物、焼土を含む黒褐色の砂質シルトである。なお、南側柱列の西から2番目の柱穴では礎板が検出された。



〔柱痕跡〕直径20～24㎝の円形で、堆積土は炭化物を若干含む黒褐色の砂質シルトである。

〔柱間・方向〕柱間は、東西が南側柱列で西から1.7m・3.2m（2間分）で、総長4.9mである。南北は西側柱列で南から1.9m・1.8m・以下不明である。方向は南側柱列でＥ－4°－Ｓである。

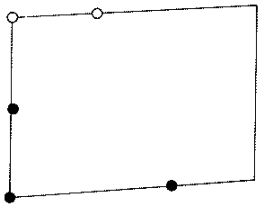
〔出土遺物〕柱穴から土師器、須恵器がごく少量出土した。

【ＳＢ3789掘立柱建物跡】（第305・312図）

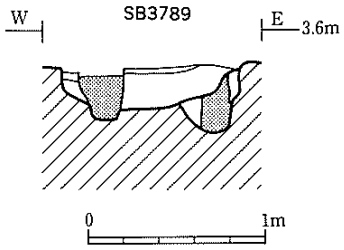
「コ」字状にならぶ5個の柱穴から推定されるもので、東隣の調査区からは柱穴が検出されていないため、桁行3間、梁行2間の東西棟と思われる。南側柱列の西から2番目の柱穴は攪乱に壊されていると思われる。

〔重複〕（古）ＳＢ3787・3788・3790・3401、ＳＫ3794　（不明）ＳＤ3792

〔柱穴〕隅丸方形や隅丸長方形で、一辺が0.9～1.0mであり、深さは最も深いもので0.5mである。埋土



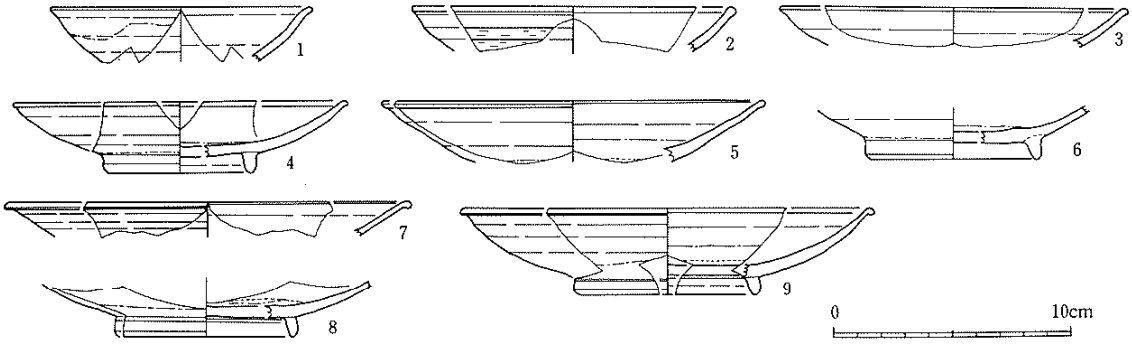
は地山のブロックと炭化物を多量に含む黒褐色の砂質シルトである。



〔柱痕跡〕直径20～25㎝の円形で、堆積土は炭化物を比較的多く含む黒色の砂質シルトである。

〔柱間・方向〕柱間は、桁行が南側柱列で西から4.6m（2間分）・不明であり、梁行は西妻で南から2.5m・2.6mで、総長5.1mである。方向は南側柱列でE－3°－Nである。

〔出土遺物〕柱穴から土師器、須恵器、赤焼土器、灰釉陶器、丸瓦などが出土した。特に、南西隅の柱穴からは灰釉陶器椀・皿が多く出土しており、猿投窯黒笹90号窯式の第3型式（斎藤；1989）のものも含まれている。

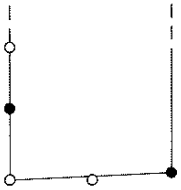


No.	種類	層位	特徴	口径	底径	器高	残存	備考	写真図版	登録No.
1	灰釉陶器・椀	抜取穴	内外：ロクロナデ	(11.0)	－	－	一部	胎土：緻密		789-1
2	灰釉陶器・椀	－	内外：ロクロナデ	(13.6)	－	－	一部	胎土：緻密		789-3
3	灰釉陶器・皿	柱痕？	内外：ロクロナデ	(14.6)	－	－	一部			789-4
4	灰釉陶器・皿	－	内外：ロクロナデ 重ね焼き	(14.2)	(6.0)	3.0	一部	硯に転用　胎土：緻密	26-2	789-6
5	灰釉陶器・皿	－	内外：ロクロナデ 重ね焼き	(16.0)	－	－	一部			789-9
6	灰釉陶器・皿	掘方	内外：ロクロナデ 重ね焼き	－	(7.0)	－	一部	硯に転用　胎土：緻密		789-7
7	灰釉陶器・皿	－	内外：ロクロナデ	(17.2)	－	－	一部	胎土：緻密		789-2
8	灰釉陶器・皿	－	内外：ロクロナデ 重ね焼き	－	(7.4)	－	一部			789-5
9	灰釉陶器・皿	－	内外：ロクロナデ 重ね焼き	(17.4)	(7.4)	3.7	1/6	胎土：緻密	26-3	789-8

第312図　SB3789 建物跡出土遺物

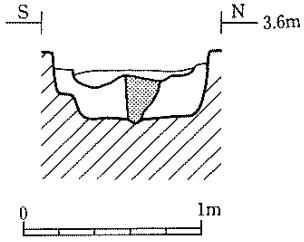
【ＳＢ3790掘立柱建物跡】（第305図）

未調査部分を挟み「L」字状にならぶ5個の柱穴から推定されるもので、桁行3間程、梁行2間の南北棟と思われる。西側柱列の南から2番目の柱は切り取られている。



〔重複〕（古）ＳＢ3787　（新）ＳＢ3789・3401　（不明）ＳＢ3788・3400

〔柱穴〕隅丸長方形で、一辺が0.5～1.0mであり、深さは最も深いもので0.4mである。埋土は炭化物と多量の地山のブロックを含む黒褐色の粘質シルトである。



〔柱痕跡〕直径15～20㎝の円形で、堆積土は黒褐色の砂質シルトである。

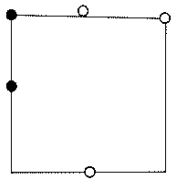
〔柱間・方向〕柱間は、桁行が西側柱列で南から2.0m・1.7mであり、梁行は南妻で西から2.3m・2.3mで、総長2.5mである。方向は西側柱列でN－1°－Wである。

〔出土遺物〕柱穴や切取り穴から土師器、須恵器が少量出土した。

【ＳＢ3791掘立柱建物跡】（第305図）

5個の柱穴から推定されるもので、東西2間、南北2間の平面形が正方形の建物跡と思われる。西側柱列はＳＢ3803・3807の西側柱列と柱筋が揃う。

〔重複〕（古）ＳＢ3811・3838　（新）ＳＤ3303・3304・3181　（不明）ＳＢ3401



〔柱穴〕隅丸方形や楕円形で、一辺が0.7～0.8mであり、深さは最も深いもので0.2mである。埋土は多量の地山のブロックと若干の炭化物及び焼土を含む黒褐色のシルトである。

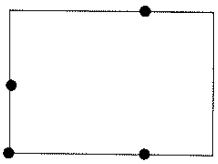
〔柱痕跡〕直径15～20㎝の円形で、堆積土は炭化物を若干含む黒褐色のシルトである。

〔柱間・方向〕柱間は、東西が北側柱列で西から2.0m・2.3mで、総長4.3mである。南北は西側柱列で北から2.0m・不明で、総長は西から1間目の柱列で4.4mである。方向は北側柱列でＥ－0°－N・Ｓである。

〔出土遺物〕柱穴からロクロ調整の土師器、須恵器が少量出土した。

【ＳＢ3803掘立柱建物跡】（第308図）

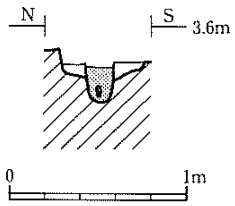
攪乱を挟み「コ」字状にならぶ4個の柱穴から推定されるもので、東隣の調査区からは柱穴が検出されていないため、桁行3間、梁行2間の東西棟と思われる。北側柱列の西から1番目と2番目の柱穴、及び南側柱列の西から2番目の柱穴は攪乱に壊されていると思われる。なお、西側柱列はＳＢ3791・3807の西側柱列と柱筋が揃う。



〔重複〕（古）ＳＩ3799　（不明）ＳＢ3805・3806・3813・3814、ＳＤ3177

〔柱穴〕隅丸方形や楕円形で、一辺が0.6m程であり、深さは最も深いもので0.2mである。埋土は比較的多くの地山のブロックと若干の炭化物を含む黒褐色のシルトである。

〔柱痕跡〕直径15～20㎝の円形で、堆積土は黒褐色の粘質シルトである。南西隅の柱穴では断片的に柱根が残っていた。



〔柱間・方向〕柱間は、桁行が南側柱列で西から3.8m（2間分）・不明であり、梁行は西側柱列で南から1.8m・不明であり、西から2間目の柱列で4.0mである。方向は南側柱列でＥ－1°－Nである。

〔出土遺物〕遺物は出土していない。

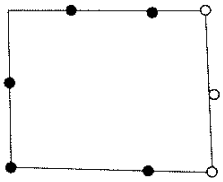
【ＳＢ3806掘立柱建物跡】（第308図）

桁行3間、梁行2間の東西棟で、南側柱列の西から2番目と北西隅の柱穴は攪乱に壊されている。

〔重複〕（古）ＳＤ3177　（不明）ＳＢ3803・3805・3813・3814

〔柱穴〕隅丸長方形で、一辺が0.4～0.5mであり、深さは最も深いもので0.4mである。埋土は地山のブ

ロックと炭化物を含む黒褐色のシルトである。



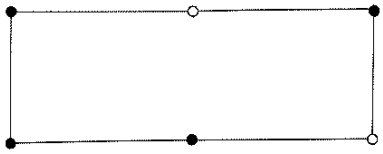
〔柱痕跡〕直径15㎝前後の円形で、堆積土は黒褐色のシルトである。

〔柱間・方向〕柱間は、桁行が南側柱列で西から3.9m（2間分）・1.8mで、総長5.7mである。梁行は東側柱列で北から2.1m・2.2mで、総長4.3mである。方向は南側柱列でＥ－1°－Ｎである。

〔出土遺物〕遺物は出土していない。

【ＳＢ3807掘立柱建物跡】（第308図）

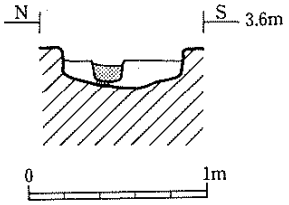
未調査部分と攪乱を挟んで並ぶ6個の柱穴から推定されるもので、桁行4間、梁行1間の東西棟と思われる。西から1間目の柱穴は攪乱に壊されていると思われる。



〔重複〕（新）ＳＢ3438、ＳＤ3165　（不明）ＳＢ3406

〔柱穴〕隅丸方形で、一辺が0.6～0.7mであり、深さは最も深いもので0.2mである。埋土は地山のブロックを含む黒褐色のシルトである。なお、北西隅の柱穴では礎板が検出された。

〔柱痕跡〕直径13～30㎝の円形で、堆積土は炭化物や焼土、灰白色火山灰を含む黒褐色のシルトである。

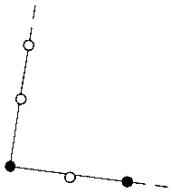


〔柱間・方向〕柱間は、桁行が北側柱列で西から5.0m（2間分）・5.2m（2間分）で、総長10.2mである。梁行は西妻で3.7mである。方向は北側柱列でＥ－1°－Ｎである。

〔出土遺物〕ロクロ調整の土師器、須恵器、中心部に穴を穿った用途不明の木製品などが出土した。土師器坏は回転糸切り無調整のものが多い。

【ＳＢ3810掘立柱建物跡】（第305図）

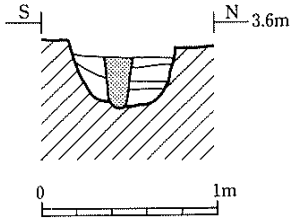
「Ｌ」字状にならぶ5個の柱穴から推定されるもので、東西・南北ともに2間以上の建物跡で、北・東側は調査区外と思われる。南側柱列の柱は切取られている。また、南側柱列はＳＢ3836の南側柱列と柱筋が揃う。



〔重複〕（古）ＳＤ3204・3680　（不明）ＳＤ3669

〔柱穴〕隅丸長方形や楕円形で、一辺が0.4～0.6mであり、深さは最も深いもので0.4mである。埋土は地山のブロックを多く含む黒褐色シルトまたは暗褐色砂質シルトである。

〔柱痕跡〕直径15㎝前後の円形で、堆積土は灰白色火山灰の粒や炭化物、地山の砂ブロックを若干含む黒褐色のシルトである。



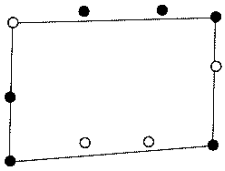
〔切取り穴〕南側柱列すべてで検出した。埋土は灰白色火山灰の粒や炭化物、地山の砂ブロックを若干含む黒褐色の粘性のあるシルトである。

〔柱間・方向〕柱間は、東西が南側柱列で西から1.7m・1.6mであり、南北が西側柱列で南から2.0m・1.5mである。方向は南側柱列でＥ－8°－Ｓである。

〔出土遺物〕柱穴から須恵器がごく少量出土した。

【ＳＢ3811掘立柱建物跡】（第305図）

桁行3間、梁行2間の東西棟である。南西隅の柱穴は柱痕跡のみを検出した可能性がある。掘り下げは行わなかった。



〔重複〕（古）ＳＤ3187　（新）ＳＢ3791、ＳＤ3303　（不明）ＳＢ3835・3838、ＳＫ3198

〔柱穴〕隅丸長方形や楕円形で、一辺が0.4～0.7mである。埋土は地山のブロックと炭化物を含む黒褐色のシルトである。

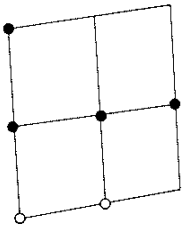
〔柱痕跡〕直径15～25㎝の円形で、堆積土は黒褐色のシルトである。

〔柱間・方向〕柱間は、桁行が北側柱列で東から1.5m・2.2m・2.1mで、総長5.8mである。梁行は東側柱列で北から1.5m・2.2mで、総長3.7mである。方向は北側柱列でＥ－1°－Ｎである。

〔出土遺物〕柱穴から土師器、須恵器、平瓦、石製模造品（剣形）などが出土した。

【ＳＢ3812掘立柱建物跡】（第305図）

南北2間、東西2間の総柱建物跡である。南東隅と北側柱列の西から1・2番目の柱穴は溝や攪乱に壊されていると思われる。掘り下げは行わなかった。



〔重複〕（新）ＳＤ3793　（不明）ＳＢ3340・3341、ＳＤ3301・3302・3306

〔柱穴〕楕円形や隅丸長方形で、長径は0.3～0.7mである。埋土は地山のブロックと炭化物を含む黒褐色のシルトである。

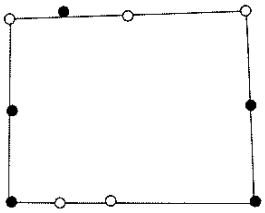
〔柱痕跡〕円形で直径は15～20㎝程である。

〔柱間・方向〕柱間は、南北が西側柱列で北から2.8m・2.6mで、総長5.4mである。東西は中央の柱列で西から2.5m・2.2mで、総長は4.6mである。方向は西側柱列でＮ－4°－Ｗである。

〔出土遺物〕柱穴から土師器、須恵器、平瓦などが少量出土した。

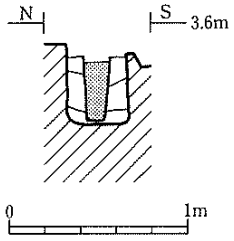
【ＳＢ3815掘立柱建物跡】（第308図）

桁行4間、梁行2間の東西棟で、東妻から1間目の柱穴はＳＤ3171に壊されていると思われる。



〔重複〕（古）ＳＤ3177　（新）ＳＢ3864、ＳＤ3123・3133・3171　（不明）ＳＢ3407・3842、ＳＫ3283

〔柱穴〕隅丸長方形や楕円形で、一辺が0.3～0.5mであり、深さは最も深いもので0.5mである。埋土は地山のブロックを多量に含む黒褐色のシルトである。



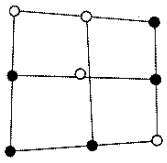
〔柱痕跡〕直径15㎝前後の円形で、堆積土は地山の粒と炭化物を含む黒褐色のシルトである。

〔柱間・方向〕柱間は、桁行が南側柱列で西から1.4m・1.4m・4.0m（2間分）で、総長6.9mである。梁行は西側柱列で南から2.6m・2.7mで、総長5.3mである。方向は南側柱列でＥ－1°－Ｎである。

〔出土遺物〕柱穴埋土や柱痕跡から土師器、須恵器が少量出土した。土師器には内面に漆の付着したものがある。

【ＳＢ3835掘立柱建物跡】（第305図）

東西2間、南北2間のやや東西に長い総柱建物跡である。南西隅の柱穴は柱痕跡のみを検出したと思われる。掘り下げは行わなかった。



〔重複〕（古）ＳＤ3187　（新）ＳＤ3303・3304　（不明）ＳＢ3811・3839・3840

〔柱穴〕隅丸長方形で、一辺が0.3～0.6m程である。埋土は地山のブロックを含む黒褐色のシルトである。

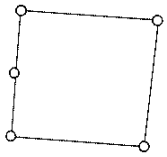
〔柱痕跡〕直径15～20㎝程の円形で、堆積土は黒褐色のシルトである。

〔柱間・方向〕柱間は、東西が南側柱列で西から2.3m・1.8mで、総長4.1mである。南北は西側柱列で北から1.8m・2.0mで、総長3.8mである。方向は南から1間目の柱穴でＥ－2°－Ｓである。

〔出土遺物〕柱穴から土師器、須恵器、平瓦、石製模造品（剣形）などが出土した。

【ＳＢ3836掘立柱建物跡】（第305図）

東西1間、南北2間の平面形がほぼ正方形の建物跡で、南北両側柱列の柱穴が排水溝に壊されているとすれば東西は2間と思われる。掘り下げは行わなかった。



〔重複〕（古）ＳＤ3204　（不明）ＳＢ3400・3837

〔柱穴〕隅丸長方形や楕円形で、一辺が0.3～0.5mである。埋土は地山のブロックと若干の炭化物を含む黒褐色あるいは暗褐色のシルトである。

〔柱痕跡〕検出されていない。

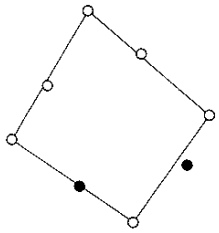
〔柱間・方向〕柱間は、東西が南側柱列で3.9m（2間分？）である。南北は西側柱列で南から1.8m・1.9mで、総長3.7mである。方向は南側柱列でＥ－9°－Ｓである。

〔出土遺物〕柱穴から土師器がごく少量出土した。

【ＳＢ3837掘立柱建物跡】（第305図）

東西2間、南北2間の平面形がほぼ正方形の建物跡である。

〔重複〕（古）ＳＤ3204　（新）ＳＢ3400、ＳＫ3201



〔柱穴〕楕円形や隅丸長方形で、長径は0.3～0.9mである。埋土は地山のブロックと炭化物を含む暗褐色のシルトである。

〔柱痕跡〕直径20㎝の円形で、堆積土は炭化物を含む黒褐色のシルトである。

〔柱間・方向〕柱間は、東西が南側柱列で西から2.3m・1.8mで、総長4.1mである。南北は西側柱列で南から1.8m・2.4mで、総長4.2mである。方向は南側柱列でＥ－33°－Ｓである。

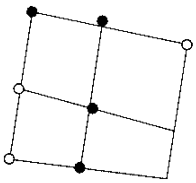
〔出土遺物〕柱穴から土師器、須恵器、灰釉陶器、平瓦、砥石などが出土した。

【ＳＢ3840掘立柱建物跡】（第305図）

東西2間、南北2間のやや東西に長い総柱建物跡で、南東隅の柱穴は排水溝に壊されている。また、南側柱列の西から2番目の柱穴は柱痕跡のみを検出したと思われる。掘り下げは行わなかった。

〔重複〕（古）ＳＤ3187　（新）ＳＤ3183・3303・3304　（不明）ＳＢ3835・3839

〔柱穴〕隅丸長方形や楕円形で、一辺が0.3～0.7mである。埋土は地山のブロックと少量の炭化物を含む黒褐色のシルトである。



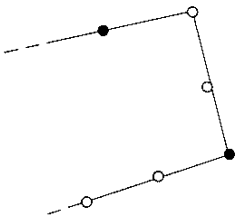
〔柱痕跡〕直径15～20㎝程の円形で、堆積土は黒褐色の粘質シルトである。

〔柱間・方向〕柱間は、東西が北側柱列で西から2.0m・2.5mで、総長4.5mである。南北は西側柱列で北から2.2m・2.0mで、総長4.2mである。方向は西から1間目の柱穴でN－7°－Eである。

〔出土遺物〕柱穴から土師器がごく少量出土した。

【ＳＢ3841掘立柱建物跡】（第306図）

南北2間、東西2間以上の東西棟で、西半部はＳＤ3307に壊されていると思われる。ＳＤ3307より西側では柱穴が検出されていないので、東西は3間までと考えられる。掘り下げは行わなかった。



〔重複〕（古）ＳＤ3799　（新）ＳＢ3344・ＳＤ3307

〔柱穴〕隅丸長方形や楕円形で、一辺が0.3～0.5m程である。埋土は地山のブロックと少量の炭化物を含む黒褐色または暗褐色のシルトである。

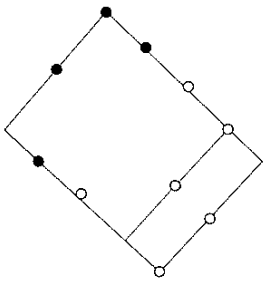
〔柱痕跡〕直経15㎝程の円形で、堆積土は黒褐色土である。

〔柱間・方向〕柱間は、南北が東側柱列で北から2.1m・2.0mで、総長4.1mである。東西は南側柱列で東から2.1m・2.1mである。方向は南側柱列でW－18°－Sである。

〔出土遺物〕遺物は出土していない。

【ＳＢ3842掘立柱建物跡】（第308図）

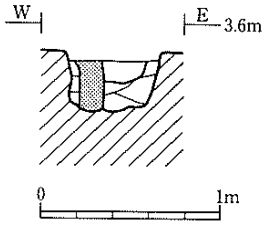
桁行4間、梁行2間の建物跡で、東から1間目の棟通り下には間仕切りの柱穴がある。北東隅と南西隅の柱穴は溝や攪乱に壊されている。南側柱列の西から2番目の柱は切取られている。なお、建物跡の方向は3.0m程北側にあるＳＤ3187とほぼ一致する。



〔重複〕（新）ＳＤ3171　（不明）ＳＢ3815、ＳＤ3177、ＳＫ3283

〔柱穴〕楕円形や隅丸長方形で、長径が0.3～0.5mであり、深さは最も深いもので0.4mである。埋土は地山のブロックを多量に含む黒褐色の粘性のあるシルトである。

〔柱痕跡〕直径15㎝前後の円形で、堆積土は黒褐色または黒色の粘性のあるシルトである。



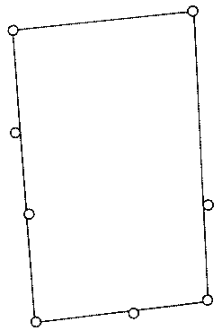
〔柱間・方向〕柱間は、桁行が南側柱列で東から1.5m・1.6m・1.5m・不明であり、梁行は西妻で北から2.1m・不明である。方向は南側柱列でE－42°－Sである。

〔出土遺物〕遺物は出土していない。

【ＳＢ3864掘立柱建物跡】（第308図）

桁行3間、梁行2間の南北棟で、北妻中央と東側柱列の北から2番目の柱穴は検出されなかった。

掘り下げは行わなかった。



〔重複〕（新）ＳＢ3815　（不明）ＳＢ3406・3407・3408・3409・3843・3846

〔柱穴〕楕円形や隅丸長方形で、径0.2～0.5mである。埋土は地山の粒を含む黒褐色のシルトである。

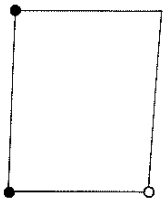
〔柱痕跡〕検出されていない。

〔柱間・方向〕柱間は、桁行が西側柱列で北から2.8m・2.3m・3.1mで、総長8.3mである。梁行は南妻で西から2.8m・2.2mで、総長5.0mである。方向は西側柱列でＮ－4°－Ｗである。

〔出土遺物〕遺物は出土していない。

【ＳＢ3865掘立柱建物跡】（第309図）

「Ｌ」字状にならぶ3個の柱穴から推定される南北棟で、他の柱穴はＳＤ3150に壊されている。東・西側柱列はともにＳＢ3415の東・西側柱列と柱筋が揃う。



〔重複〕（新）ＳＤ3150　（不明）ＳＡ3158、ＳＢ3847、ＳＤ3170

〔柱穴〕楕円形や隅丸長方形で、長径が0.3～0.6mであり、深さは最も深いもので0.1mである。埋土は地山のブロックを多く含む黒褐色のシルトである。

〔柱痕跡〕直径15～20㎝の円形で、堆積土は黒褐色のシルトである。

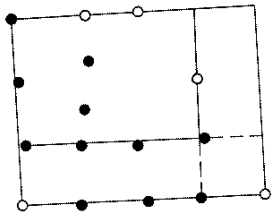
〔柱間・方向〕柱間は、桁行が西側柱列で5.1mであり、梁行が南妻で3.9mである。方向は西側柱列でＮ－3°－Ｅである。

〔出土遺物〕柱穴から土師器がごく少量出土した。

南側のグループ

【ＳＢ3413掘立柱建物跡】（第313・315図）

桁行4間以上、梁行3間の東西棟で、1間分の廂が南につく。西から3間目の棟通り下の柱穴を東妻中央の柱穴とすれば、東廂が付くことになるが、間仕切りの柱穴の可能性も考えられる。身舎の西妻から1間目には間仕切の柱穴がある。なお、西妻はＳＢ3417の東側柱列と柱筋が揃う。また、15m程西にあるＳＤ3123・3133はこの建物跡と方向がほぼ揃う。

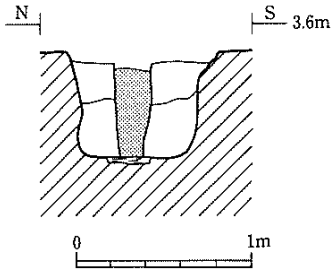


〔重複〕（古）ＳＢ3848、ＳＤ3014・3129　（新）ＳＤ3055・3131、ＳＫ3627

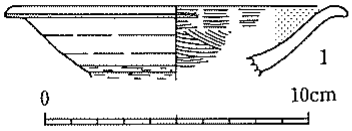
〔柱穴〕身舎は隅丸方形や楕円形で、一辺が0.7～0.9mであり、深さは最も深いもので0.6mである。北西隅と南西隅の柱穴では礎板が検出された。廂は隅丸方形や楕円形で、一辺0.4～0.7mであり、深さは最も深いもので0.3mである。埋土は両者とも地山のブロックと炭化物を含む黒褐色の粘質シルトである。

〔柱痕跡〕身舎、廂ともに直径20㎝前後の円形で、堆積土は黒褐色の粘質シルトである。

〔柱間・方向〕柱間は、桁行が南入側柱列で西から1.6m・1.6m・1.9mであり、西廂の出は南側柱列で1.8m程と思われる。梁行は西妻で北から1.8m・1.8mであり、廂の出が1.7mで、総長は5.3mである。方向は南入側柱列でE－2°－Nである。



〔出土遺物〕柱穴から土師器、須恵器、平瓦、釘などが出土した。土師器坏はロクロ調整で、底部切離し後、手持ちヘラケズリや回転ヘラケズリされるものが多い。須恵器坏は、ヘラ切り無調整と手持ちヘラケズリされるものがほぼ同数である。

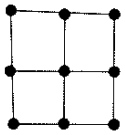


No	種類	層位	特　　徴	口径	底径	器高	残存	写真図版	登録No
1	土師器・高台皿	掘方	外：ロクロナデ→回ケズリ 内：ミガキ→黒色処理	(11.3)	－	－	一部		413-1

第313図　SB3413 建物跡出土遺物

【ＳＢ3414掘立柱建物跡】（第315図）

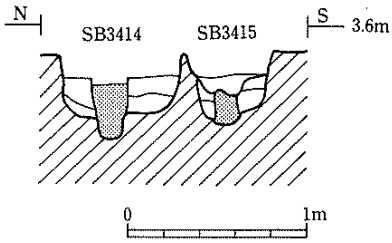
東西2間、南北2間の平面形がほぼ正方形の総柱建物跡である。3m程西にあるＳＤ3123・3133はこの建物跡と方向がほぼ揃う。



〔重複〕（古）ＳＤ3014　（不明）ＳＢ3415

〔柱穴〕隅丸方形や楕円形で、一辺が0.5～0.7mであり、深さは最も深いもので0.4mである。埋土は地山のブロックを多く含む黒褐色の粘質シルトである。

〔柱痕跡〕直径15～20cmの円形で、堆積土は黒色や黒褐色の粘質シルトである。

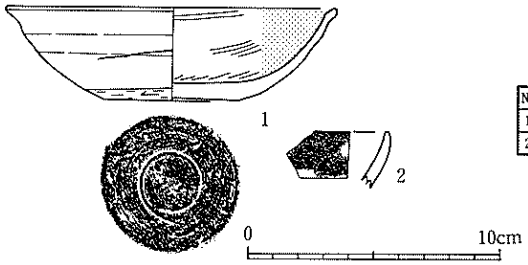


〔柱間・方向〕柱間は、東西が北側柱列で西から1.5m・1.4mで、総長2.8mである。南北は東側柱列で北から1.6m・1.5mで、総長3.0mである。方向は東側柱列でN－1°－Wである。

〔出土遺物〕遺物は出土していない。

【ＳＢ3415掘立柱建物跡】（第314・315図）

桁行3間、梁行2間の南北棟である。東側柱列はＳＢ3446の西妻と柱筋が揃う。また、東・西側柱列はＳＢ3865の東・西側柱列と柱筋が揃う。さらに、6m程西にあるＳＤ3123・3133はこの建物跡と方向がほぼ揃う。

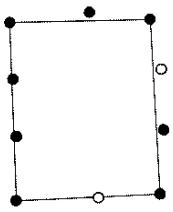


No	種類	層位	特　　徴	口径	底径	器高	残存	写真図版	登録No
1	土師器・坏	－	外：ロクロナデ→回ケズリ 底：回ケズリ 内：ミガキ→黒色処理	13.2	5.4	3.7	3/4	16-1	415-1
2	土師器・坏	掘方	外：ケズリ 内：ミガキ→黒色処理 墨付着	－	－	－	一部		415-2

第314図　SB3415 建物跡出土遺物

第315図　建物跡拡大図(6)

〔重複〕（古）ＳＤ3014・3120、ＳＫ3117・3121　（不明）ＳＢ3414



〔柱穴〕隅丸方形や楕円形で、一辺が0.3～0.6mであり、深さは最も深いもので0.4mである。埋土は地山のブロックと炭化物を含む黒褐色のシルトである。なお、南西隅の柱穴では礎板、南東隅の柱穴では礎板の代わりと思われる石が検出された。

〔柱痕跡〕直径15～20㎝の円形で、堆積土は地山ブロックを含む黒褐色シルトである。

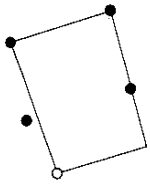
〔柱間・方向〕柱間は、桁行が西側柱列で北から1.6m・1.6m・1.8mで、総長5.1mである。梁行は北妻で2.2m・1.7mで、総長3.9mである。方向は西側柱列でＮ－2°－Ｗである。

〔出土遺物〕柱穴からロクロ調整の土師器、須恵器が少量出土した。土師器坏は内面に漆が付着したものがある。

【ＳＢ3416掘立柱建物跡】（第315図）

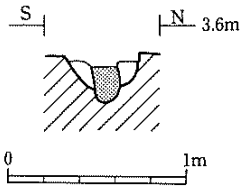
桁行2間、梁行1間の南北棟で、北から1間目の棟通り下には床束の柱穴がある。南東隅の柱穴はＳＫ3111に壊されていると思われる。

〔重複〕（古）ＳＤ3140　（新）ＳＤ3097・3120、ＳＫ3111



〔柱穴〕楕円形や隅丸長方形で、長径が0.3～0.6mであり、深さは最も深いもので0.2mである。埋土は地山のブロックと炭化物を含む黒褐色のシルトである。

〔柱痕跡〕直径20㎝程の円形で、堆積土は地山ブロックと炭化物を含む黒褐色のシルトである。



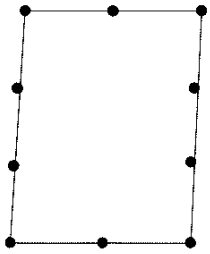
〔柱間・方向〕柱間は、桁行が西側柱列で北から1.7m・1.7mで、総長3.4mである。梁行は北妻で2.9mである。方向は西側柱列でＮ－10°－Ｗである。

〔出土遺物〕遺物は出土していない。

【ＳＢ3417Ａ・Ｂ掘立柱建物跡】（第315・316図）

桁行3間、梁行2間の南北棟で、同位置で1度建て替えられている。東側柱列はＳＢ3413の西妻と柱筋が揃う。また、Ｂ期の四隅の柱穴からは礎板が検出された。

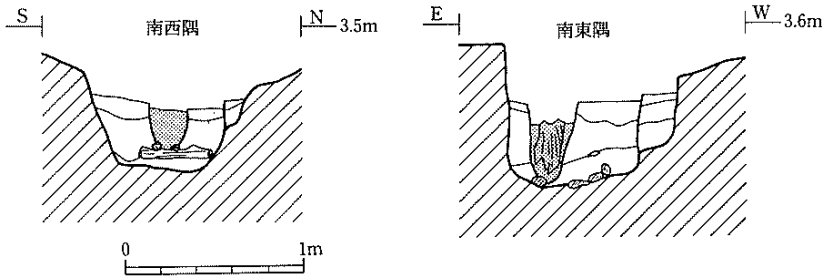
〔重複〕（古）ＳＤ3064・3096　（新）ＳＤ3097・3140



〔柱穴〕Ａ期は隅丸方形で、一辺が0.7～0.9mであり、深さは最も深いもので0.6mである。Ｂ期は隅丸方形で、一辺が0.7～0.8mであり、深さは最も深いもので0.8mである。堆積土はＡ・Ｂ期ともに炭化物と多量の地山ブロックを含む黒褐色の粘質シルトである。Ｂ期の四隅の柱穴から検出された礎板は、長さ40㎝、径5～12㎝程の丸材を3～4本平行に並べたもので、南西隅の柱穴ではその上にさらに2本の丸材を下の丸材の方向と直角になるように並べ重ねている。それ以外の柱穴は掘り下げていないため、礎板が存在するかどうかは不明である。

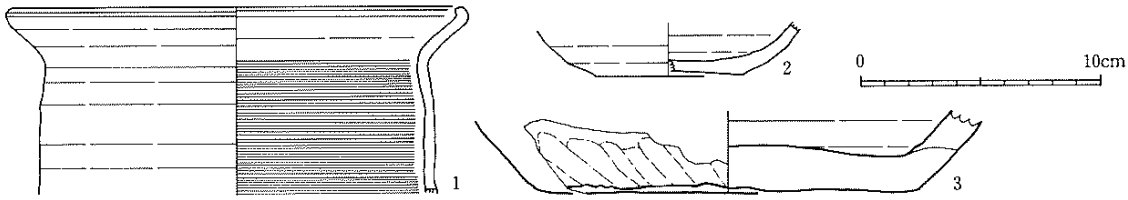
〔柱痕跡〕Ａ期はＢ期の柱穴に壊されており不明である。Ｂ期は直径15～28㎝の円形で、堆積土は炭化物と地山の小ブロックを含む黒色の粘土である。東側柱列の南から1番目と2番目の柱穴では径13㎝

程の柱根も残っていた。



〔柱間・方向〕A期は後続するB期に壊されているため判然としないが、B期とほぼ同様と思われる。B期は、桁行が東側柱列で北から2.2m・2.1m・2.3mで、総長は6.5mである。梁行は南妻で西から2.6m・2.5mで、総長5.1mである。方向は東側柱列でN－2°－Eである。

〔出土遺物〕柱穴から土師器、須恵器、平瓦、丸瓦などが出土している。土師器坏はロクロ調整で、底部切離し後手持ちヘラケズリされるものや、回転糸切り無調整のものが多い。

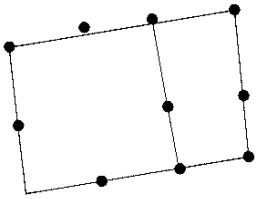


No	種類	層位	特　　徴	口径	底径	器高	残存	備　　考	写真図版	登録No
1	土師器・甕	抜取穴	外：ロクロナデ 内：ロクロナデ→ヘラナデ	(19.2)	—	—	一部			417-1
2	須恵器・坏	掘方	内外：ロクロナデ 底：回転糸切り	—	(6.2)	—	1/4			417-2
3	須恵器・甕	掘方	外：ナデ 底：ナデ 内：ロクロナデ	—	(16.0)	—	一部	大戸		417-3

第316図　SB3417 建物跡出土遺物

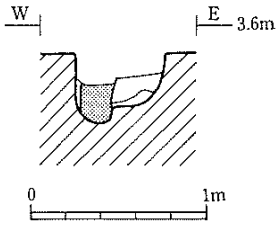
【ＳＢ3418 掘立柱建物跡】（第315図）

桁行3間、梁行2間の東西棟である。南西隅の柱穴はＳＫ3084に壊されている。東から1間目の棟通り下には間仕切の柱穴がある。また、南東隅の柱は切取られている。



〔重複〕（新）ＳＤ3088、ＳＫ3084　（不明）ＳＢ3850、ＳＤ3471

〔柱穴〕隅丸方形や楕円形で、一辺が0.5～0.7mであり、深さは最も深いもので0.3mである。埋土は地山のブロックを多く含む黒褐色のシルトである。



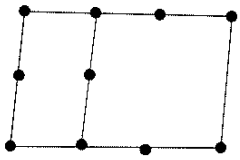
〔柱痕跡〕直径15～20㎝の円形で、堆積土は地山ブロックと炭化物を含む黒褐色のシルトである。

〔柱間・方向〕柱間は、桁行が北側柱列で西から2.2m・1.9m・2.3mで、総長6.4mである。梁行は東妻で北から2.2m・1.9m・2.3mで、総長6.4mである。梁行は東妻で北から2.2m・1.7mで、総長4.0mである。方向は北側柱列でＥ－7°－Ｎである。

〔出土遺物〕柱穴から土師器、須恵器がごく少量出土した。

【ＳＢ3419掘立柱建物跡】（第328図）

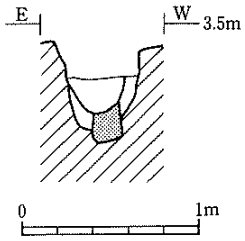
桁行3間、梁行2間の東西棟である。北妻中央の柱穴はＳＤ3084に壊されていると思われる。西から1間目の棟通り下には間仕切の柱穴がある。また、南東隅と北西隅の柱は切取りあるいは抜取られている。



〔重複〕（新）ＳＤ3031・3055・3063・3065、ＳＫ3040・3047・3056・3067　（不明）ＳＢ3441

〔柱穴〕隅丸方形や楕円形で、一辺が0.4～0.6mであり、深さは最も深いもので0.5mである。埋土は地山のブロックを多く含む褐灰色のシルトである。

〔柱痕跡〕直径15㎝前後の円形で、堆積土は地山の小ブロックと炭化物を若干含む褐灰色のシルトである。

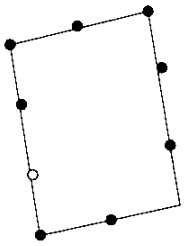


〔柱間・方角〕柱間は、桁行が北側柱列で西から2.0m・1.8m・2.0mで、総長5.8mである。梁行は西妻で北から1.8m・2.0mで、総長3.8mである。方向は北側柱列でＥ－0°－Ｎ・Ｓである。

〔出土遺物〕柱穴から土師器、須恵器、丸瓦が少量出土した。

【ＳＢ3420掘立柱建物跡】（第328図）

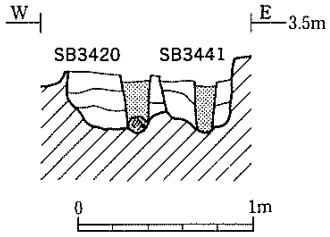
桁行3間、梁行2間の南北棟で、南東隅の柱穴は攪乱に壊されている。東・西側柱列の南から2番目の柱と南妻中央の柱は切取られている。



〔重複〕（新）ＳＢ3441、ＳＤ3064、ＳＫ3054、ＳＢ3909　（不明）ＳＢ3419・3421、ＳＤ3065・3073、ＳＦ3908

〔柱穴〕隅丸長方形で、一辺が0.6～0.9mであり、深さは最も深いもので0.5mである。埋土は地山のブロックを多量に含む褐灰色や黒褐色のシルトである。北東隅の柱穴からは礎板が検出された。

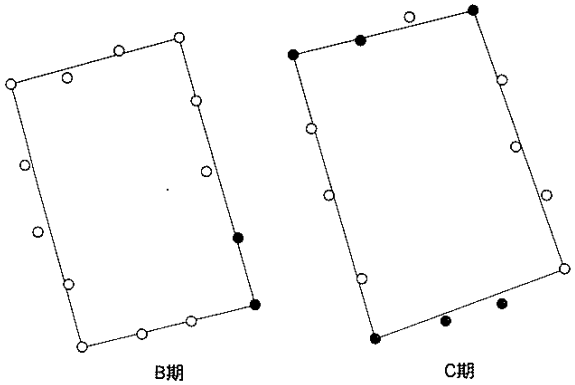
〔柱痕跡〕直径15～20㎝の円形で、堆積土は地山の小ブロックを含む黒褐色のシルトである。



〔柱間・方向〕柱間は、桁行が西側柱列で北から1.7m・2.0m・1.7mで、総長5.5mである。梁行は北妻で西から2.0m・2.0mで、総長4.0mである。方向は西側柱列でＮ－8°－Ｗである。

〔出土遺物〕柱穴から土師器、須恵器がごく少量出土した。

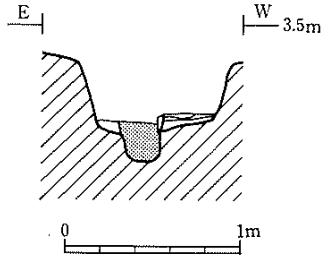
【ＳＢ3421Ａ・Ｂ・Ｃ掘立柱建物跡】（第317・320図）



桁行4間、梁行3間（Ａ期の北妻は2間）の南北棟で、同位置で2度建て替えられている。Ｃ期の南東隅と北妻の東から2番目の柱は切取られている。なお、2.5m程西側にあるＳＤ3075はこの建物跡と方向をほぼ揃えている。

〔重複〕（新）ＳＢ3423・3445、ＳＤ3064・3077・

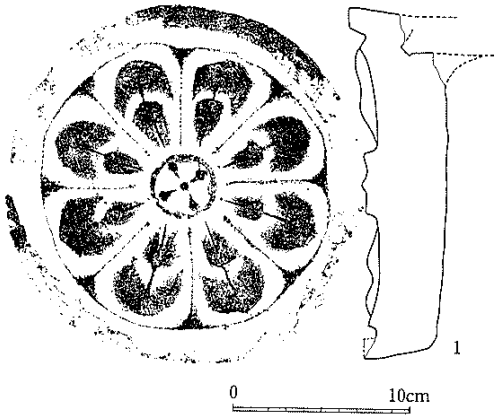
3510、ＳＦ3908・3909　（不明）ＳＢ3420



〔柱穴〕Ａ・Ｂ・Ｃ期ともに隅丸長方形や隅丸方形である。Ａ期は一辺が0.4～0.8mであり、深さは最も深いもので0.4mである。Ｂ期は一辺が0.4～0.8mであり、深さは最も深いもので0.6mである。南妻の東から2番目の横穴では礎板が検出された。Ｃ期は一辺が0.4～0.7mであり、深さは最も深いもので0.7mである。北妻の東から2番目の柱穴では、礎板の代わりとして置かれたと思われる軒丸瓦が検出された。埋土はＡ・Ｂ・Ｃ期ともに炭化物と多くの地山ブロックを含む黒褐色あるいは褐灰色のシルトである。

〔柱痕跡〕Ａ・Ｂ・Ｃ期ともに直径15～28㎝程の円形で、堆積土は炭化物と地山の小ブロックを含む黒褐色のシルトである。

〔柱間・方向〕Ａ期はＢ・Ｃ期に壊されているため判然としないが、北妻以外はＢ・Ｃ期とほぼ同様と思われる。Ｂ期は、桁行が東側柱列で北から1.8m・2.0m・2.1m・2.0mで、総長は7.9mである。梁行は南妻で東から1.9m・1.4m・1.7mで、総長は5.1mである。方向は東側柱列でＮ－13°－Ｗである。Ｃ期は、桁行が東側柱列で北から2.2m・1.9m・1.6m・2.1mで、総長は7.9mである。梁行は南妻で東から2.0m・1.7m・2.1mで、総長は5.7mである。方向は東側柱列でＮ－16°－Ｗである。



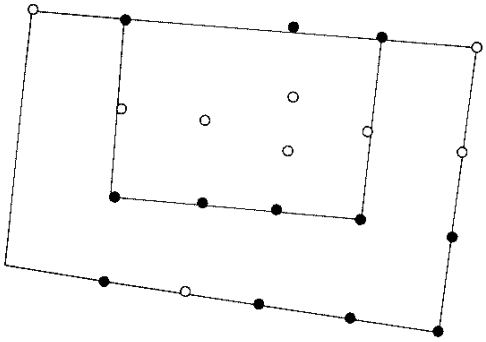
No.	種類	層位	特　徴	写真図版	登録No.
1	軒丸瓦	掘方	重弁蓮花文軒丸瓦　礎盤に転用	26-9	085-1

第317図　SB3421 建物跡出土遺物

〔出土遺物〕Ａ～Ｃ期の柱穴から土師器、須恵器、軒丸瓦、平瓦、ウマ歯が少量出土した。軒丸瓦は多賀城跡政庁第Ⅰ期の重弁蓮華文軒丸瓦である。

【ＳＢ3423掘立柱建物跡】（第319・320図）

桁行5間、梁行3間の東西棟で、1間分の廂が東・西・南の3面につく建物跡である。西廂の北から2～4番目の柱穴は調査区外にあると思われる。また、柱は切取りあるいは抜き取られている。身舎の内側には床束の柱穴がある。なお、15m程西にあるＳＤ3026はこの建物跡と方向が揃う。



〔重複〕（古）ＳＢ3421・3437・3445・3821・3851、ＳＤ3075・3083　（新）ＳＦ3908・3909

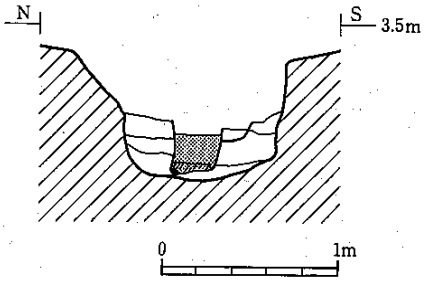
〔柱穴〕身舎は隅丸方形や隅丸長方形で、一辺が1.0～1.3mであり、深さは最も深いもので0.7mである。廂は隅丸方形や隅丸長方形、及び楕円形で、一辺が0.5～0.8mであり、深さは最も深いもので0.6mである。埋土は身舎、廂ともに地山のブロックを多く含む黒褐色の粘質シルト及びシルト質粘土である。なお、身舎と廂の南東隅の柱穴では礎板が検出

された。

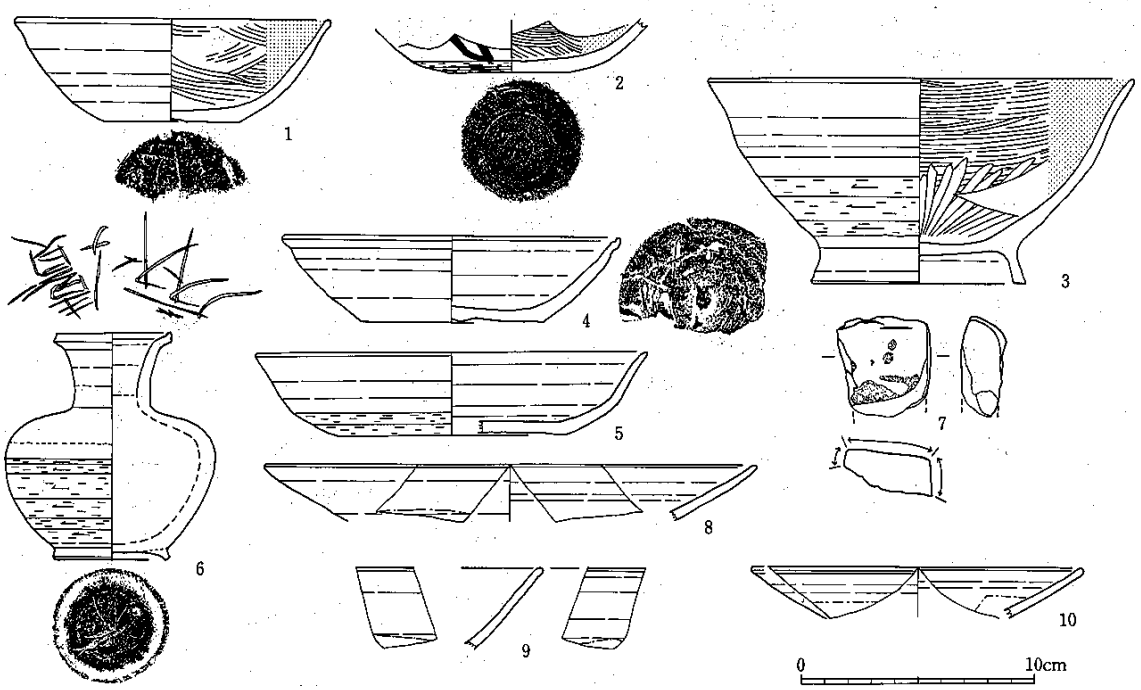
〔柱痕跡〕身舎が直径25～30㎝程の円形であり、廂は直径15～20㎝程の円形である。堆積土は身舎、廂ともに黒色または黒褐色の粘土や粘質シルトである。なお、身舎の北西隅と南西隅の柱穴では径25㎝程の柱根が残っていた。

〔切取り穴〕3ヶ所で確認された。埋土は地山の小ブロックや炭化物を含む黒褐色の粘質シルトなどである。

〔柱間・方向〕柱間は、身舎の桁行が北側柱列で西から2.4m・2.4m・2.5mで、廂の出が西が2.6m、東が2.8mであり、総長は12.7mである。梁行は西妻で北から2.6m・2.5mで、廂の出が2.4mであり、総長は7.5mである。方向は北側柱列でE－6°－Sである。

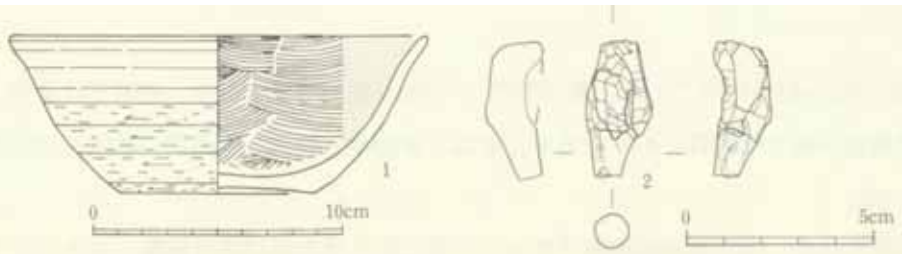


〔出土遺物〕柱穴埋土から平瓦、丸瓦、砥石、刀子、鉄滓が、柱抜取り穴からは赤焼土器、砥石が出土した。この他、いずれとも決められないが、土師器、須恵器、緑釉陶器、灰釉陶器などが出土した。



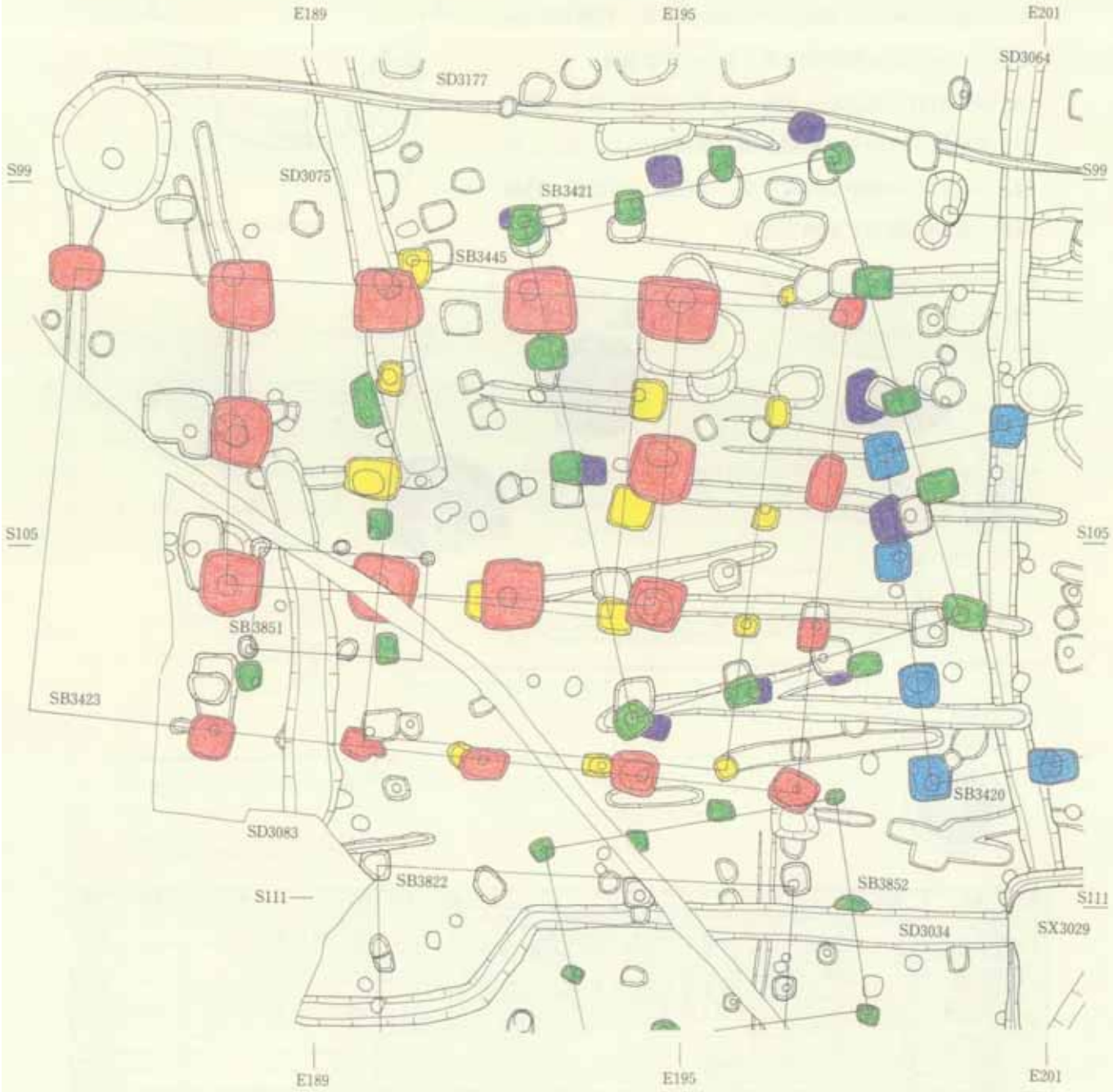
No.	種類	層位	特徴	口径	底径	器高	残存	備考	写真図版	登録No.
1	土師器・坏	抜取穴	外：ロクロナデ 底：手ケズリ 内：ミガキ→黒色処理	(13.5)	(5.8)	4.4	1/2		16-4	423-4
2	土師器・坏	掘方	外：ロクロナデ→回ケズリ 底：回ケズリ 内：ミガキ→黒色処理	—	5.3	—	1/4	金雲母少量 墨書		423-6
3	土師器・高台椀	掘方	外：ロクロナデ→回ケズリ 底：ロクロナデ 内：ミガキ→黒色処理	(18.2)	(9.0)	8.8	2/3		16-5	423-5
4	須恵器・坏	掘方	内外：ロクロナデ 底：ヘラ切	(14.5)	(7.8)	3.7	1/4			423-2
5	須恵器・坏	掘方	外：ロクロナデ→回ケズリ 底：静・糸→回ケズリ 内：ロクロナデ	(16.8)	(9.6)	3.5	1/7			423-1
6	須恵器・小瓶	抜取穴	外：ロクロナデ→回ケズリ 底：回ケズリ 内：ロクロナデ	4.9	4.8	9.6	≒完	ヘラ書「麻□」	16-6	423-3
7	砥石	抜取穴	粘板岩？	長2.3	幅3.8	厚1.6	一部			423-9
8	灰釉陶器・皿	抜取穴	内外：ロクロナデ	(21.0)	—	—	一部			423-7
9	灰釉陶器	抜取穴	内外：ロクロナデ 重ね焼き	—	—	—	一部			423-8
10	灰釉陶器・皿	掘方	内外：ロクロナデ 重ね焼き	(14.2)	—	—	一部			422-1

第318図 SB3423 建物跡出土遺物



No.	種類	層位	特徴	口径	底径	器高	残存	備考	写真図版	登録No.
1	土師器・椀	抜取穴	外：ロクロナデ→回ケズリ 底：回ケズリ 内：ミガキ→黒色処理	(16.8)	(7.6)	6.3	2/5			424-1
2	不明石製品	—	凝灰岩	長3.6	幅1.8	厚1.4	一部			424-2

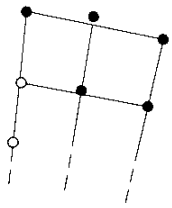
第319図　SB3424 建物跡出土遺物



第320図　建物跡拡大図 (7)

【ＳＢ3424掘立柱建物跡】（第319図）

東西2間、南北2間以上の建物跡で、南側は調査区外に延びている。北から1間目の中央には柱穴があり、総柱建物跡の可能性がある。北側柱列の柱穴はすべて切取られている。なお、東側柱列はＳＢ3860の西側柱列と柱筋がほぼ揃う。



〔重複〕（新）ＳＢ3425　（不明）ＳＢ3426・3831・3832、ＳＫ3019

〔柱穴〕隅丸方形や隅丸長方形で、一辺が0.3～0.6mであり、深さは最も深いもので0.4mである。埋土は地山のブロックを多く含む黒褐色または褐灰色のシルト質粘土である。

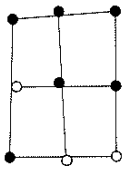
〔柱痕跡〕直径12～22㎝の円形で、堆積土は地山の小ブロックと炭化物を含む黒色の粘土である。

〔柱間・方向〕柱間は、東西が北側柱列で西から1.9m・2.1mで、総長4.0mである。南北は西側柱列で北から2.1m・1.8mである。方向は北側柱列でＥ－9°－Ｓである。

〔出土遺物〕柱穴埋土や柱抜取り穴から土師器、須恵器、用途不明の凝灰岩の製品が出土した。

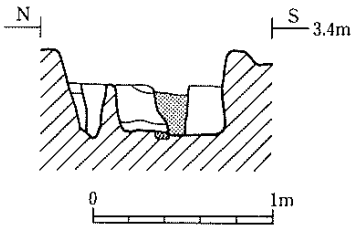
【ＳＢ3425Ａ・Ｂ掘立柱建物跡】（第321・322図）

桁行2間、梁行2間の南北棟総柱建物跡で、同位置で1度建て替えられている。Ｂ期の北東隅の柱は抜取られている。なお、北側柱列はＳＢ3433の北妻と柱筋が揃う。



〔重複〕（古）ＳＢ3424・3831・3832・3833、ＳＫ3019　（不明）ＳＤ3026

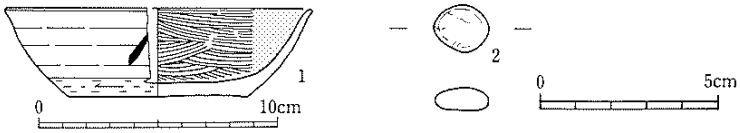
〔柱穴〕Ａ・Ｂ期ともに隅丸長方形や隅丸方形である。Ａ期は一辺が0.5～0.8mであり、深さは最も深いもので0.4mである。Ｂ期は一辺が0.6～1.0mであり、深さは最も深いもので0.5mである。Ｂ期の北東隅と北西隅、中央の柱穴では礎板が検出された。埋土はＡ・Ｂ期とも地山ブロックを多く含む黒褐色の粘質シルトである。



〔柱痕跡〕Ａ・Ｂ期ともに直径20～25㎝前後の円形で、堆積土は黒色のシルト質粘土である。

〔柱間・方向〕Ａ期は後続するＢ期に壊されているため判然としないが、Ｂ期とほぼ同様と思われる。Ｂ期は、桁行が西側柱列で北から1.9m・2.0mで、総長は3.9mである。梁行は北妻で西から1.3m・1.6mで、総長は2.9mである。方向は西側柱列でＮ－1°－Ｅである。

〔出土遺物〕柱穴から土師器、須恵器、平瓦が出土した。土師器にはロクロ調整されたものがある。

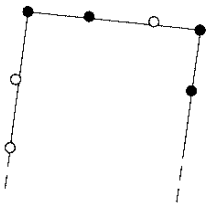


No	種類	層位	特　徴	口径	底径	器高	残存	備　考	写真図版	登録No
1	土師器・坏	抜取穴	外：ロクロナデ→回ケズリ 底：回ケズリ 内：ミガキ→黒色処理	(12.9)	7.3	3.7	2/5	金雲母多量　墨書		425-1
2	碁石	掘方		長1.5	－	厚0.7	一部		28-25	425-2

第321図　SB3425 建物跡出土遺物

【ＳＢ3426掘立柱建物跡】（第322図）

調査区南際で「コ」字状にならぶ7個の柱穴から推定されるもので、東西3間、南北2間以上の建物跡と思われる。柱の一部は抜取りあるいは切取られている。なお、北側柱列はＳＢ3427の北側柱列と柱筋が揃う。



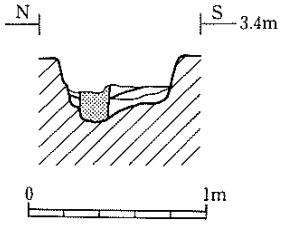
〔重複〕（新）ＳＤ3017・3020　（不明）ＳＢ3424・3831・3832

〔柱穴〕隅丸方形や隅丸長方形で、一辺が0.4～0.9mであり、深さは最も深いもので0.4mである。埋土は地山のブロックを多く含む黒褐色のシルト質粘土である。

〔柱痕跡〕直径12～19㎝の円形で、堆積土は黒褐色の粘土である。

〔抜取り・切取り穴〕北東隅の柱穴と西側柱列の北から2番目の柱穴の2ヶ所で確認された。埋土は地山の小ブロックを含む黒褐色のシルト質粘土である。

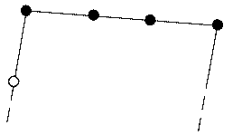
〔柱間・方向〕柱間は、東西が北側柱列で西から1.7m・1.8m・1.4mで、総長4.8mである。南北は西側柱列で北から1.9m・1.9mである。方向は北側柱列でＥ－4°－Ｓである。



〔出土遺物〕柱穴埋土や抜取り穴などから土師器、須恵器が少量出土した。

【ＳＢ3427掘立柱建物跡】（第322図）

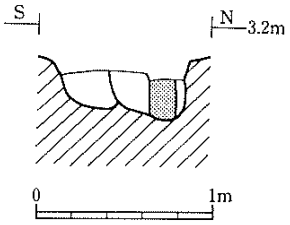
調査区南際で「Ｌ」字状にならぶ5個の柱穴から推定されるもので、東西3間、南北1間以上の建物跡と思われる。北側柱列はＳＢ3426の北側柱列と柱筋が揃う。



〔重複〕（古）ＳＤ3440

〔柱穴〕隅丸方形や隅丸長方形で、一辺が0.4～1.0mであり、深さは最も深いもので0.4mである。埋土は地山のブロックを多く含む黒褐色または褐灰色の粘質シルトである。なお、北西隅の柱穴では礎板が検出された。

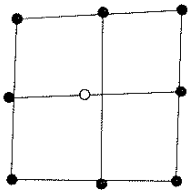
〔柱痕跡〕直径15～20㎝の円形で、堆積土は炭化物を若干含む黒褐色の粘土である。



〔柱間・方向〕柱間は、東西が北側柱列で西から1.9m・1.7m・1.9mで、総長5.5mである。南北は西側柱列で2.0mで、以下は不明である。方向は北側柱列でＥ－4°－Ｓである。

〔出土遺物〕柱穴から土師器がごく少量出土した.

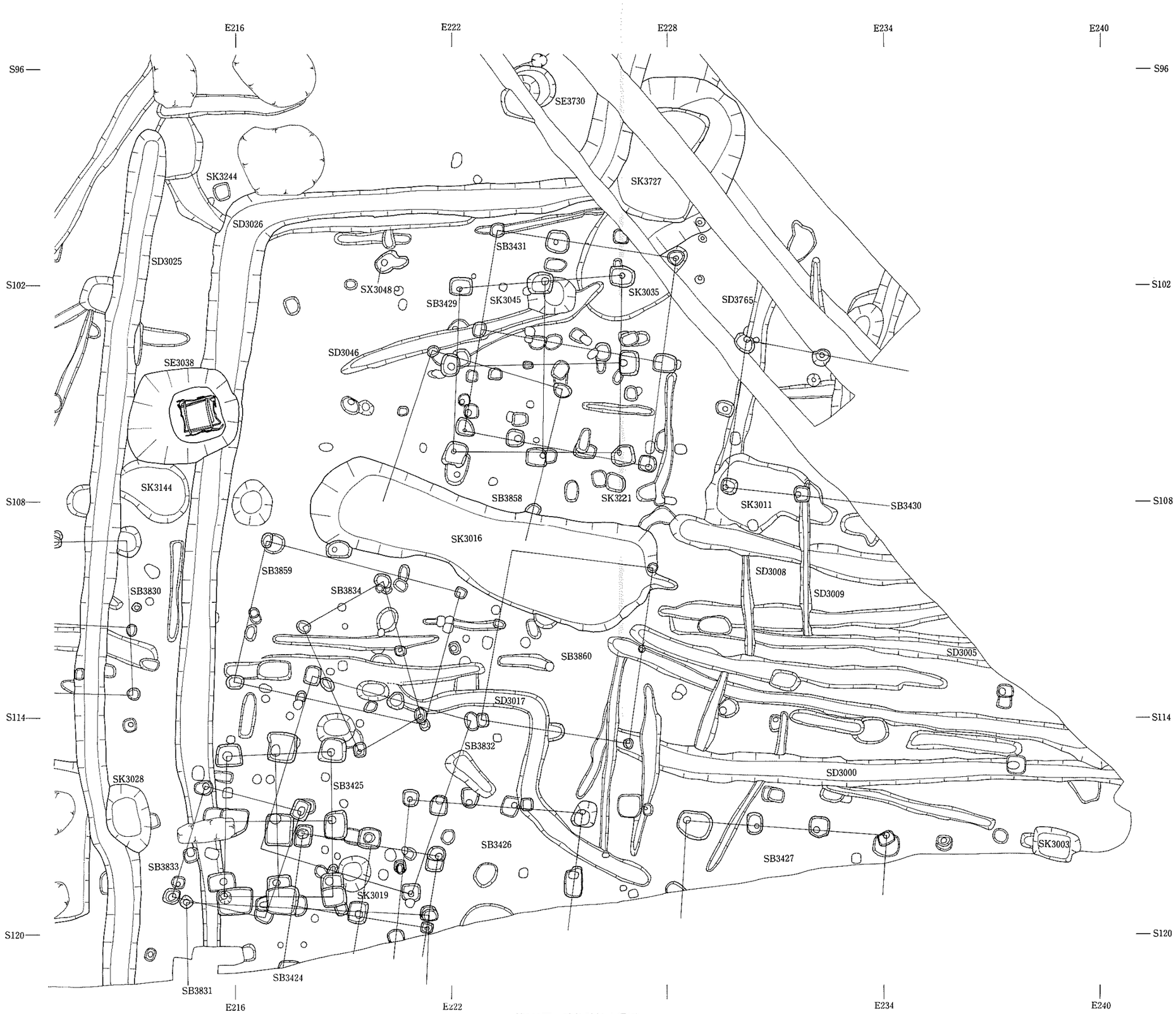
【ＳＢ3429掘立柱建物跡】（第322・323図）



南北2間、東西2間の平面形が正方形の総柱建物跡で、中央の柱穴は柱痕跡のみを検出した可能性がある。南西隅の柱は切取られている。

〔重複〕（古）ＳＢ3858、ＳＫ3035　（不明）ＳＢ3431、ＳＤ3046、ＳＫ3045

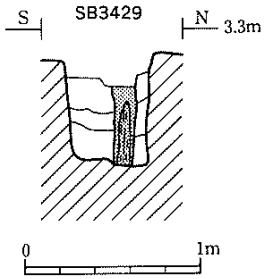
〔柱穴〕隅丸長方形や隅丸方形で、一辺が0.5～0.7mであり、深さは最も深いもので0.7mである。埋土は地山ブロックを多く含む黒褐色の粘土である。



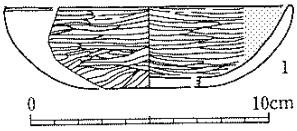
第322図　建物跡拡大図(8)

〔柱痕跡〕直径14～20㎝の円形で、堆積土は黒色の粘土である。なお、北西隅と南西隅の柱穴では柱根が残っていた。

〔柱間・方向〕柱間は、南北が東側柱列で北から2.4m・2.5mで、総長は4.9mである。東西は北側柱列で西から2.4m・2.2mで、総長は4.6mである。方向は東側柱列でN－1°－Eである。



〔出土遺物〕柱穴から丸瓦、鉄滓が、柱抜取り穴からは羽口が出土した。この他、いずれとも決められないが、土師器、須恵器などが出土した。土師器にはロクロ調整のものが含まれる。

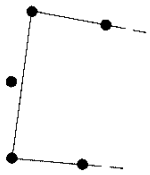


No	種類	層位	特徴	口径	底径	器高	残存	写真図版	登録No
1	土師器・坏	－	外：ミガキ 内：ミガキ→黒色処理	(12.1)	－	3.4	1/7		429-1

第323図　SB3429 建物跡出土遺物

【ＳＢ3430掘立柱建物跡】（第322図）

調査区東際で「コ」字状にならぶ5個の柱穴から推定されるもので、南北2間、東西2間以上の建物跡と思われる。南側柱列はＳＢ3431の南側柱列と柱筋がほぼ揃う。



〔重複〕（新）ＳＤ3009　（不明）ＳＤ3765・3766、ＳＫ3011

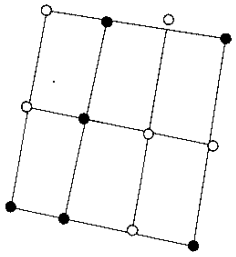
〔柱穴〕隅丸方形や楕円形で、一辺が0.4～0.6mであり、深さは最も深いもので0.5mである。埋土は地山のブロックと炭化物を含む黒褐色のシルト質粘土である。

〔柱痕跡〕直径15～18㎝の円形で、堆積土は黒色または黒褐色の粘土である。

〔柱間・方向〕柱間は、南北が西側柱列で北から2.0m・2.2mで、総長4.2mである。東西は南側柱列で西から2.0m・不明である。方向は西側柱列でN－9°－Eである。

〔出土遺物〕遺物は出土していない。

【ＳＢ3431掘立柱建物跡】（第324・322図）



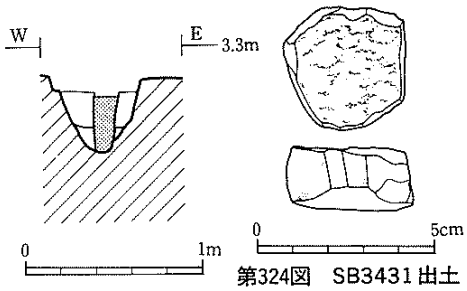
桁行3間、梁行2間の東西棟総柱建物跡である。一部の柱は切取られている。南側柱列はＳＢ3430の南側柱列と柱筋がほぼ揃う。また、西妻はＳＢ3426の西側柱列と柱筋がほぼ揃う。

〔重複〕（古）ＳＢ3429・3858、ＳＤ3046、ＳＫ3035・3045　（新）ＳＤ3051

〔柱穴〕隅丸方形や隅丸長方形で、一辺が0.4～0.6mであり、深さは最も深いもので0.4mである。埋土は地山のブロックを含む黒褐色シルト質粘土である。

〔柱痕跡〕直径10～16㎝の円形で、堆積土は地山の小ブロックと炭化物を含む黒色の粘土である。

〔切取り穴〕北側柱列の西から2番目の柱穴で確認された。埋土は地山の小ブロックと炭化物、焼土を含む黒色の粘土である。



第324図　SB3431 出土

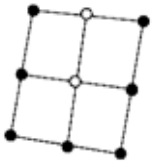
〔柱間・方向〕柱間は、桁行が南側柱列で西から1.5m・1.9

m・1.8mで、総長5.2mである。梁行は東妻で北から2.9m・2.9mで、総長5.8mである。方向は南側柱列でＥ－8°－Ｓである。

〔出土遺物〕柱穴や柱抜取り穴から土師器、須恵器、丸瓦、土製円盤が出土した。

【ＳＢ3432掘立柱建物跡】（第328図）

南北2間、東西2間の南北にやや長い総柱建物跡である。一部の柱は切取られている。

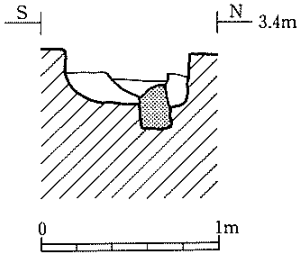


〔重複〕（古）ＳＸ3029　（新）ＳＤ3031

〔柱穴〕隅丸長方形や隅丸方形で、一辺が0.6～0.9mであり、深さは最も深いもので0.5mである。埋土は地山ブロックを多く含む黒褐色の粘質シルトである。

〔柱痕跡〕直径20～25㎝の円形で、堆積土は黒色または黒褐色のシルト質粘土である。

〔切取り穴〕北側柱列の東から1番目と2番目の柱穴で確認された。埋土は黄灰色の粘土質シルトである。



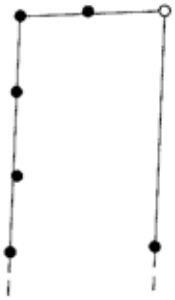
〔柱間・方向〕柱間は、南北が東側柱列で北から1.8m・1.7mで、総長は3.5mである。東西は南側柱列で西から1.6m・1.5mで、総長3.1mである。方向は東側柱列でＮ－8°－Ｅである。

〔出土遺物〕柱穴から土師器、須恵器、丸瓦、鎹などが出土した。土師器にはロクロ調整のものが含まれている。

【ＳＢ3433掘立柱建物跡】（第325・328図）

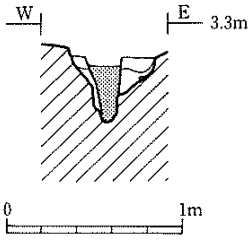
桁行3間以上、梁行2間の南北棟で、南半は調査区外に延びている。北東隅の柱は抜取られている。なお、北妻はＳＢ3425の北側柱列と柱筋がほぼ揃う。

〔重複〕（新）ＳＸ3024・3029　（不明）ＳＢ3828、ＳＫ3032



〔柱穴〕隅丸方形で、一辺が0.5～0.8mであり、深さは最も深いもので0.5mである。埋土は地山のブロックと炭化物を含む黒褐色または褐灰色の粘質シルトである。

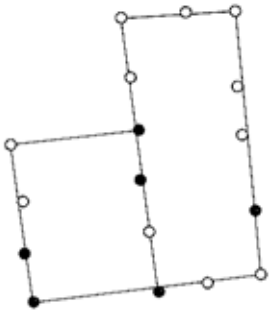
〔柱痕跡〕直径13～20㎝の円形で、堆積土は地山の小ブロックを含む黒色の粘質シルトである。



〔柱間・方向〕柱間は、桁行が西側柱列で北から2.0m・2.2m・2.0mであり、梁行は北妻で西から1.8m・2.0mで総長3.8mである。方向は西側柱列でＮ－3°－Ｅである。

〔出土遺物〕柱穴から土師器、須恵器、灰釉陶器が出土した。

【ＳＢ3441掘立柱建物跡】（第325・328図）



桁行5間（東側は4間）、梁行2間の南北棟の身舎の南西部に、東西1間、南北3間分の張り出しがつく建物跡である。一部の柱は抜取られている。

〔重複〕（古）ＳＢ3420　（新）ＳＢ3442、ＳＤ3064・3077・3510、ＳＫ3047　（不明）ＳＢ3419・3443

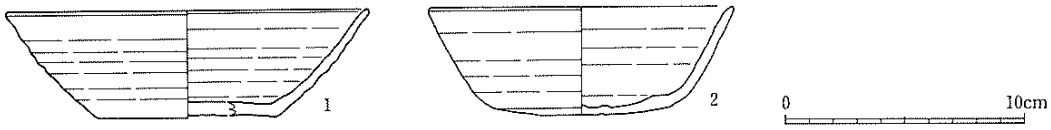
〔柱穴〕隅丸方形や楕円形で、一辺が0.3～0.8mであり、深さは最も深いもので0.4mである。埋土は地山の小ブロックと炭化物を含む黒褐色や褐灰色のシルトである。

〔柱痕跡〕直径15㎝前後の円形で、堆積土は地山の小ブロックと炭化物を含む黒色のシルトである。

〔抜取り穴〕身舎の西側柱列の南から2番目と4番目、及び張り出し部の北西隅の柱穴で確認された。埋土は地山の小ブロックと炭化物を少量含む黒褐色のシルトである。

〔柱間・方向〕柱間は、身舎の桁行が西側柱列で南から1.6m・1.4m・1.3m・1.4m・1.6mで、総長7.4mである。梁行は南妻で東から1.4m・1.4mで、総長2.8mである。張り出し部は、東西が3.3mで、南北が南から1.3m・1.4m・1.6mで、総長4.3mである。方向は身舎の西側柱列でN－5°－Wである。

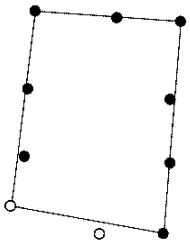
〔出土遺物〕柱穴から土師器、須恵器が少量出土した。



№	種類	遺構	特徴	口径	底径	器高	残存	備考	写真図版	登録№
1	須恵器・坏	SB3433	内外：ロクロナデ 底：回転糸切り	(15.2)	(7.4)	4.5	2/5	抜取穴	16-2	433-1
2	須恵器・坏	SB3441	内外：ロクロナデ 底：ヘラ切り→ナデ	12.8	7.4	4.5	1/4	掘方		595-1

第325図　SB3433・3441 建物跡出土遺物

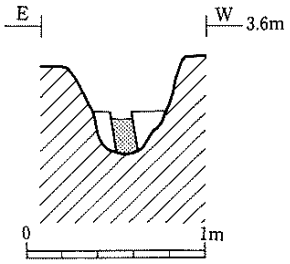
【ＳＢ3442掘立柱建物跡】（第315・328・326図）



桁行3間、梁行2間の南北棟である。

〔重複〕（古）ＳＢ3441　（新）ＳＤ3064・3495、ＳＫ3082　（不明）ＳＢ3443、ＳＤ3077

〔柱穴〕隅丸方形や楕円形で、一辺が0.3～0.9mであり、深さは最も深いもので0.5mである。埋土は地山のブロックと炭化物を含む黒褐色または褐灰色のシルトである。

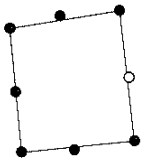


〔柱痕跡〕直径15㎝前後の円形で、堆積土は炭化物を含む黒褐色または褐灰色の粘質シルトである。

〔柱間・方向〕柱間は、桁行が東側柱列で北から2.2m・1.8m・2.0mで、総長6.0mである。梁行は北妻で西から2.3m・1.8mで、総長4.1mである。方向は東側柱列でN－5°－Eである。

〔出土遺物〕柱穴から土師器、須恵器、製塩土器、丸瓦が出土した。

【ＳＢ3443掘立柱建物跡】（第315・326図）



桁行2間、梁行2間の平面形が正方形の建物跡である。

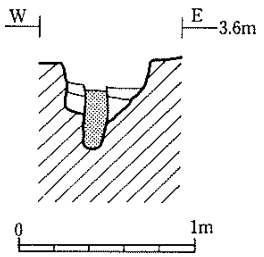
〔重複〕（新）ＳＤ3064、ＳＫ3082・3089　（不明）ＳＢ3441・3442、ＳＤ3495

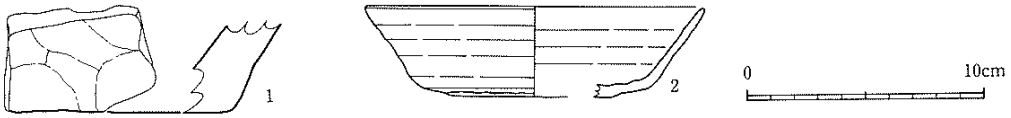
〔柱穴〕楕円形で、長径が0.4～0.6mであり、深さは最も深いもので0.5mである。埋土は地山のブロックと炭化物を含む黒褐色または褐灰色のシルトである。

〔柱痕跡〕直径15㎝前後の円形で、堆積土は炭化物を若干含む褐灰色のシルトである。

〔柱間・方向〕柱間は、東西が南側柱列で西から1.5m・1.7mで、総長3.2mである。南北は東側柱列で北から1.7m・1.8mで、総長3.5mである。方向は東側柱列でN－5°－Wである。

〔出土遺物〕柱穴から土師器、須恵器が少量出土した。



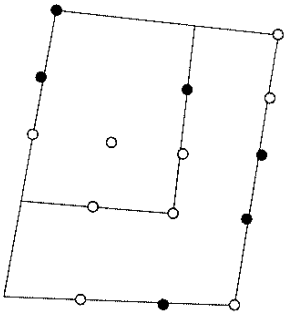


No	種類	層位	特　　徴	口径	底径	器高	残存	備　考	写真図版	登録No
1	製塩土器	SB3442	内外：ナデ 底：ナデ？ 色調：浅黄橙色	－	－	－	一部			069-1
2	須恵器・坏	SB3443	内外：ロクロナデ 底：ヘラ切り	(14.4)	(9.6)	3.8	1/4		23-11	494-1

第326図　SB3442・3443 建物跡出土遺物

【ＳＢ3445掘立柱建物跡】（第320・327図）

桁行4間、梁行3間の南北棟で、東・南側に廂が付く建物跡である。また、身舎の北から2間目の棟通り下には間仕切りの柱穴がある。身舎の北妻の東側の2個の柱穴と東南隅の柱穴、南廂の西端の柱穴は重複する建物跡によって壊されている。

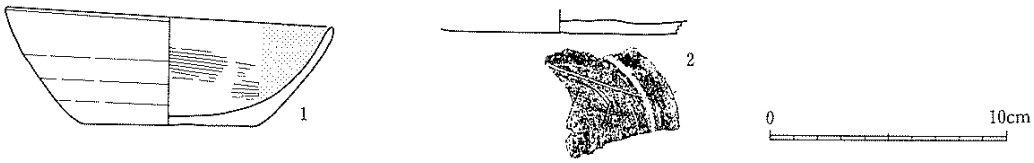


〔重複〕（古）ＳＢ3421Ａ・Ｂ・Ｃ、ＳＤ3075　（新）ＳＢ3423、ＳＦ3908・3909　（不明）ＳＢ3821・3851

〔柱穴〕身舎は、方形や隅丸方形で、一辺が0.5～0.9mであり、深さは最も深いもので0.4mである。廂は、方形や楕円形で、一辺が0.3～0.5mであり、深さは最も深いもので0.5mである。身舎の柱穴は廂の柱穴より規模が大きい。埋土は、地山のブロックと炭化物を含む黒褐色または褐灰色のシルトである。

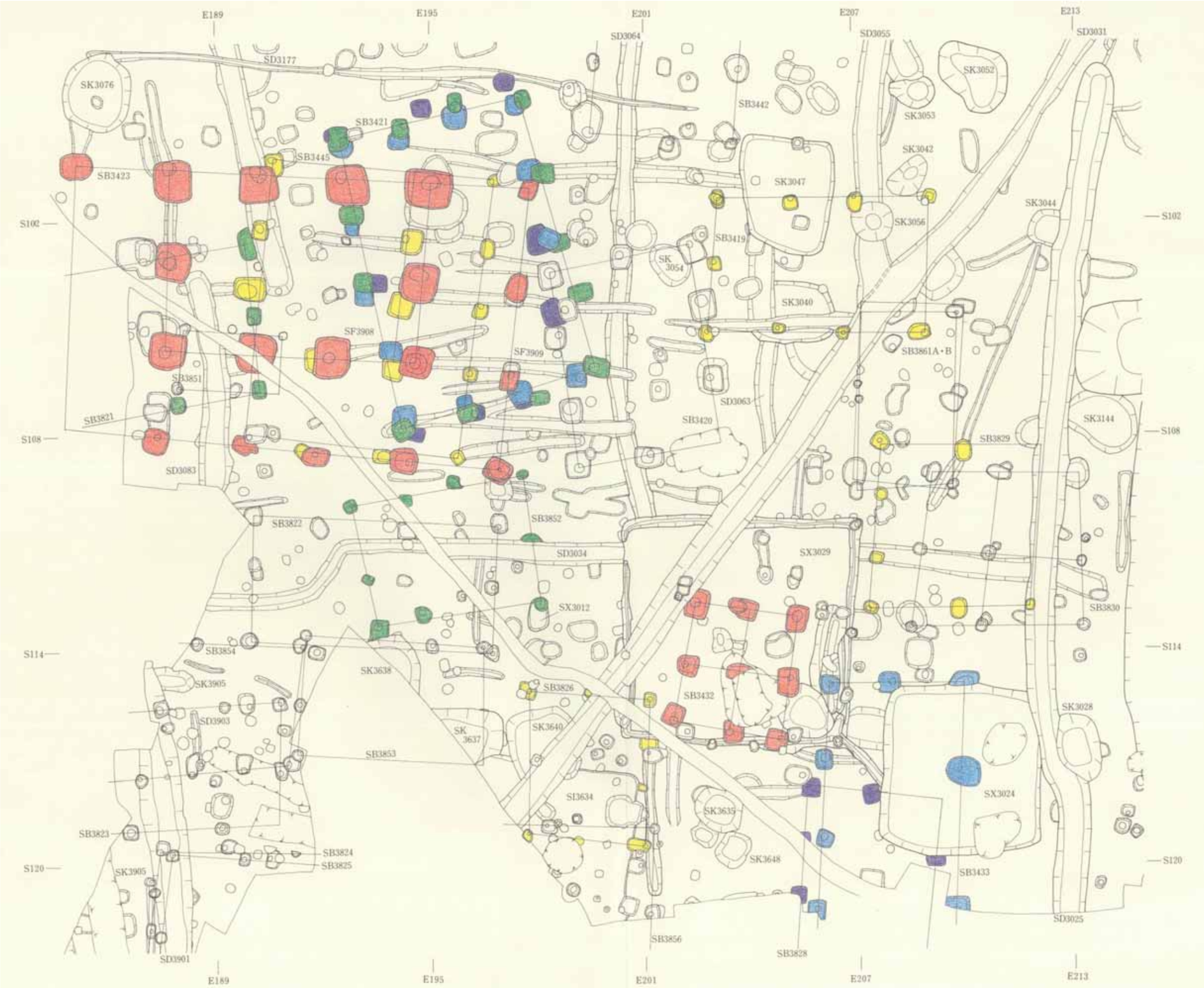
〔柱痕跡〕身舎が直径20cm前後で、廂が直径15cm前後の円形であり、堆積土は黒褐色シルトである。

〔柱間・方向〕柱間は、桁行が東入側柱列で北から不明・1.9m・1.9mで、南側の廂の出が2.5mである。梁行は身舎の南妻で西から不明・2.2mで、東側の廂の出が2.2mである。方向は東側柱列でN－7°－Eである。



No	種類	層位	特　　徴	口径	底径	器高	残存	備　考	写真図版	登録No
1	土師器・坏	抜取穴	外：ロクロナデ 底：回転糸切→手ケズリ？ 内：ミガキ→黒色処理	14.0	7.3	4.6	½完		16-3	605-1
2	須恵器・坏	掘方	底：回ケズリ 内：ロクロナデ	－	－	－	一部	ヘラ書		518-1

第327図　SB3445 建物跡出土遺物

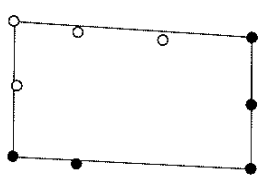


第328図　建物跡拡大図(9)

〔出土遺物〕柱穴から土師器、須恵器、土錘が少量出土した。須恵器坏には底部にヘラ書きされたものもある。

【ＳＢ3822 掘立柱建物跡】（第 328 図）

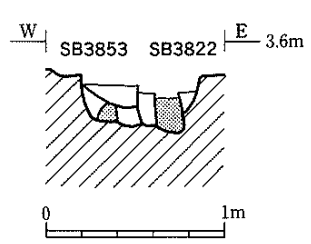
桁行３間、梁行２間の東西棟で、桁行の東から１間目に間仕切りの柱穴がある。南側柱列の東から２番目の柱穴は検出されなかった。



〔重複〕（古）ＳＢ3853・3854　（不明）ＳＢ3852、ＳＤ3034・3705、ＳＫ3638

〔柱穴〕隅丸方形や楕円形で、一辺が 0.4～0.6mであり、深さは最も深いもので 0.3mである。埋土は地山のブロックや炭化物を含む灰褐色や黒褐色のシルトである。

〔柱痕跡〕直径 15㎝ 前後の円形で、堆積土は黒色や黒褐色のシルトである。

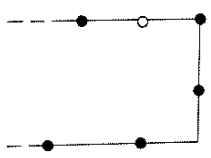


〔柱間・方向〕柱間は、桁行が北側柱列で西から 1.9m・2.5m・2.5mで、総長 6.9mである。梁行は東妻で北から 1.7m・1.8mで、総長 3.5mである。方向は南側柱列でＥ－3°－Ｓである。

〔出土遺物〕柱穴から土師器、須恵器、平瓦などが出土した。

【ＳＢ3823 掘立柱建物跡】（第 328 図）

桁行３間以上、梁行２間の東西棟で、西半は調査区外である。南東隅の柱穴は検出されなかった。



〔重複〕（新）ＳＢ3854、ＳＤ3901・3902　（不明）ＳＤ3903

〔柱穴〕隅丸方形や楕円形で、一辺が 0.3～0.5mであり、深さは最も深いもので 0.5mである。

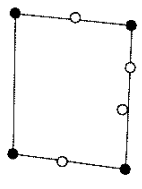
〔柱痕跡〕直径 15㎝ 前後の円形である。

〔柱間・方向〕柱間は、桁行が北側柱列で東から 1.6m・1.7m・以下不明であり、梁行は東妻で北から 2.0m・不明である。方向は北側柱列でＷ－3°－Ｓである。

〔出土遺物〕遺物は出土していない。

【ＳＢ3826 掘立柱建物跡】（第 328・329 図）

桁行３間、梁行２間の南北棟で、西側柱列の中央部の柱穴は検出されなかった。



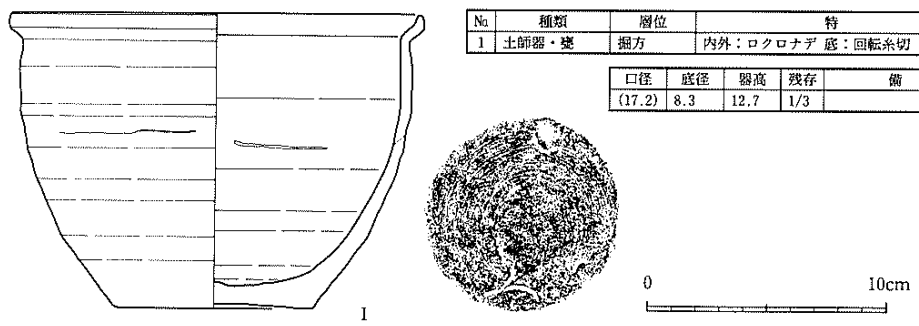
〔重複〕（古）ＳＩ3634、ＳＸ3029、ＳＤ3064　（新）ＳＢ3824、ＳＤ3031、ＳＫ3640（不明）ＳＢ3855・3856

〔柱穴〕隅丸方形や楕円形で、一辺が 0.3～0.6mであり、深さは最も深いもので 0.8mである。埋土は地山のブロックと炭化物を含む黒褐色や褐灰色のシルトである。

〔柱痕跡〕直径 10㎝ 前後の円形で、堆積土は黒褐色や褐灰色の粘質シルトである。

〔柱間・方向〕柱間は、桁行が東側柱列で北から 1.3m・1.2m・1.7mで、総長 4.1mである。梁行は北妻で西から 1.7m・1.7mで、総長 3.4mである。方向は東側柱列でＮ－2°－Ｅである。

〔出土遺物〕柱穴から土師器、灰釉陶器がごく少量出土した。



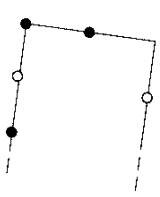
No.	種類	層位	特　　徴
1	土師器・甕	掘方	内外：ロクロナデ 底：回転糸切

口径	底径	器高	残存	備　考	写真図版	登録No.
(17.2)	8.3	12.7	1/3		16-7	672-1

第329図　SB3826 建物跡出土遺物

【ＳＢ3828 掘立柱建物跡】（第 328 図）

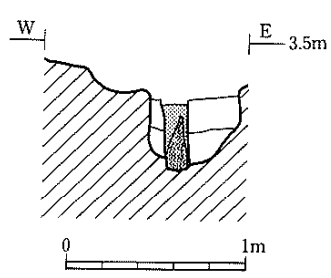
東西2間、南北2間以上の建物跡で、南半は調査区外である。



〔重複〕（新）ＳＸ3024　（不明）ＳＢ3433

〔柱穴〕方形で、一辺が0.5～0.6mであり、深さは最も深いもので0.5mである。埋土は地山のブロックを含む黒褐色のシルトである。

〔柱痕跡〕直径20㎝程の円形で、堆積土は黒褐色や褐灰色の粘質シルトである。

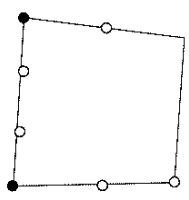


〔柱間・方向〕柱間は、東西が北側柱列で西から1.8m・不明であり、南北は西側柱列で北から1.5m・1.6mである。方向は西側柱列でN－4°－Eである。

〔出土遺物〕柱穴から土師器がごく少量出土した。

【ＳＢ3829掘立柱建物跡】（第328図）

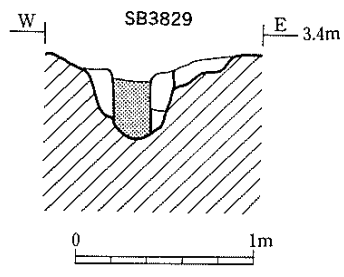
桁行3間、梁行2間の南北棟で、東側柱列の北側の柱穴は検出されなかった。



〔重複〕（古）ＳＢ3034、ＳＫ3143　（新）ＳＢ3830、ＳＤ3025・3026

〔横穴〕楕円形で、長径が0.4～0.6mであり、深さは最も深いもので0.5mである。埋土は地山のブロックや炭化物を含む黒褐色や褐灰色の粘質シルトである。

〔柱痕跡〕直径15㎝前後の円形で、堆積土は炭化物を含む黒褐色のシルトである。



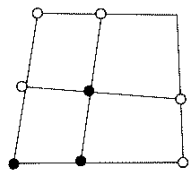
〔柱間・方向〕柱間は、桁行が西側柱列で北から1.5m・1.8m・1.5mで、総長4.7mである。梁行は南妻で西から2.5m・2.0mで、総長4.5mである。方向は西側柱列でN－4°－Eである。

〔出土遺物〕柱穴から土師器、須恵器、鉄滓などが少量出土した。

【ＳＢ3830Ａ・Ｂ掘立柱建物跡】（第328図）

東西2間、南北2間の平面形が正方形の総柱建物跡で、ほぼ同位置で1度建て替えられている。

〔重複〕（古）ＳＢ3829、ＳＤ3034　（新）ＳＤ3025　（不明）ＳＤ3026



〔柱穴〕A期は大半がB期に壊されており、規模などは不明だが、平面形は方形や楕円形である。B期では楕円形や方形で、長径が0.3～0.7mであり、深さは最も深いもので0.2mである。埋土は地山のブロックや炭化物を含む黒褐色や褐灰色のシルトである。

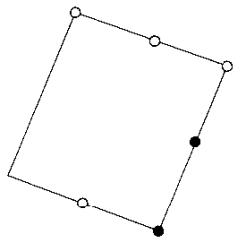
〔柱痕跡〕B期では直径15㎝前後の円形で、堆積土は黒褐色のシルトである。

〔柱間・方向〕A期は後続するB期とほぼ同様と思われる。B期の柱間は、南北が西側柱列で北から2.2m・2.2mで、総長4.4mであり、東西は南側柱列で西から1.9m・2.9mで、総長4.8mである。方向は南側柱列でE－0°－N・Sである。

〔出土遺物〕柱穴から土師器、須恵器、丸瓦などが少量出土した。

【ＳＢ3832掘立柱建物跡】（第322・330図）

桁行2間、梁行2間の南北棟で、西側柱列の南側の2個の柱穴は検出されなかった。

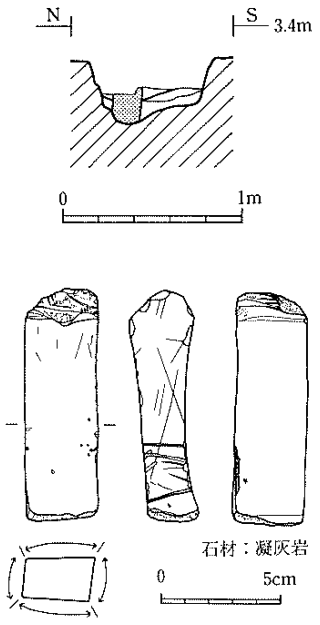


〔重複〕（新）ＳＢ3425Ａ・Ｂ・3834・3860（不明）ＳＢ3424・3426・3833・3859、ＳＤ3020、ＳＫ3019

〔柱穴〕方形や楕円形で、一辺が0.3～0.6mであり、深さは最も深いもので0.4mである。埋土は地山のブロックを含む黒褐色や褐灰色のシルトである。

〔柱痕跡〕直径20㎝前後の円形で、堆積土は黒褐色の粘質シルトである。

〔柱間・方向〕柱間は、桁行が東側柱列で北から2.3m・2.7mで、総長5.0mである。梁行は北妻で西から2.4m・2.2mで、総長4.6mである。方向は東側柱列でN－19°－Eである。



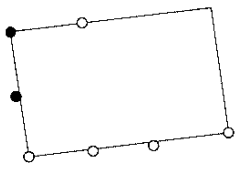
第330図　SB3832 建物跡出土遺物

〔出土遺物〕柱穴から須恵器、砥石が出土した。

【ＳＢ3848掘立柱建物跡】（第315図）

桁行3間、梁行2間の東西棟で、北側柱列東側と東妻北側の柱穴は検出されなかった。

〔重複〕（古）ＳＤ3014　（新）ＳＢ3413、ＳＤ3064・3131　（不明）ＳＫ3134・3135



〔柱穴〕楕円形や方形で、直径が0.2～0.5mであり、深さは最も深いもので0.3mである。埋土は地山のブロックや炭化物を含む黒褐色や暗褐色のシルトである。

〔柱痕跡〕直径15㎝前後の円形で、堆積土は暗褐色のシルトである。

〔柱間・方向〕柱間は、桁行が南側柱列で東から2.1m・1.7m・1.8mで、総長は5.6mであり、梁行は西妻で北から1.8・1.7mで、総長3.5mである。方向は南側柱列でE－5°－Nである。

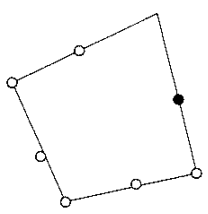
〔出土遺物〕柱穴から土師器、須恵器がごく少量出土した。

【ＳＢ3850掘立柱建物跡】（第315図）

東西2間、南北2間の平面形が正方形の総柱建物跡で、北東隅の柱穴は検出されなかった。

〔重複〕（新）ＳＤ3087　（不明）ＳＢ3418、ＳＤ3086・3088、ＳＫ3529

〔柱穴〕方形や楕円形で、一辺が0.3～0.6mである。埋土は地山のブロックや炭化物を含む黒褐色や暗褐黄色のシルトである。



〔柱痕跡〕直径20㎝の円形で、堆積土は黒褐色のシルトである。

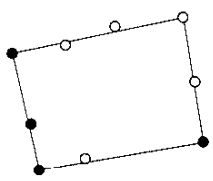
〔柱間・方向〕柱間は、南北が西側柱列で北から2.3m・1.5mで、総長3.7mであり、東西は南側柱列で西から2.1m・1.8mで、総長3.9mである。方向は南側柱列でＥ－16°－Ｎである。

〔出土遺物〕柱穴から土師器、須恵器がごく少量出土した。

【ＳＢ3852掘立柱建物跡】（第328・331・332図）

桁行3間、梁行2間の東西棟で、南側柱列の東から2番目の柱穴は検出されなかった。

〔重複〕（古）ＳＸ3012　（新）ＳＢ3822・3853、ＳＤ3034・3705　（不明）ＳＫ3638

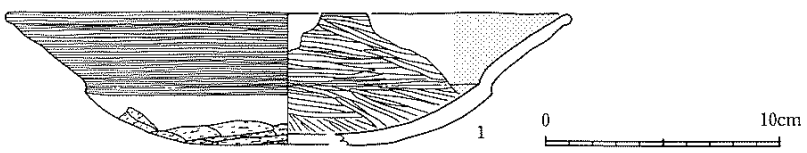


〔柱穴〕方形や楕円形で、一辺が0.3～0.5mである。埋土は地山のブロックや炭化物を含む黒褐色や褐灰色のシルトである。

〔柱痕跡〕直径12～20㎝の円形で、堆積土は黒褐色や褐灰色のシルトである。

〔柱間・方向〕柱間は、桁行が北側柱列で西から1.5m・1.5m・1.9mで、総長は4.8mであり、梁行は西妻で北から2.1・1.4mで、総長3.4mである。方向は南側柱列でＥ－8°－Ｎである。

〔出土遺物〕柱穴から土師器、須恵器、平瓦、丸瓦が出土した。土師器はほとんどが非ロクロ調整である。



№	種類	層位	特徴	口径	底径	器高	残存	備考	写真図版	登録№
1	土師器・坏	―	外：ケズリ 内：ミガキ→黒色処理	(24.0)	―	(5.6)	1/6			702-1

第331図　SB3852 建物跡出土遺物

【ＳＢ3858掘立柱建物跡】（第322図）

東西2間、南北2間以上の建物跡で、南半は土壙によって壊されている可能性がある。

〔重複〕（新）ＳＢ3429・3431、ＳＤ3046、ＳＫ3016

〔柱穴〕方形や楕円形で、一辺が0.3～0.5mである。埋土は地山のブロックや炭化物を含む黒褐色や褐灰色のシルトである。

〔柱痕跡〕直径8㎝の円形である。

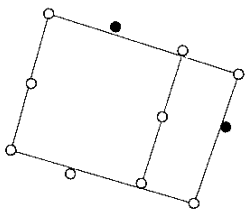
〔柱間・方向〕柱間は、南北が東側柱列で北から1.9m・1.6mであり、東西は北側柱列で西から1.9m・1.9mで、総長3.7mである。方向は北側柱列でＷ－17°－Ｎである。

〔出土遺物〕柱穴から土師器がごく少量出土した。

【ＳＢ3859掘立柱建物跡】（第322図）

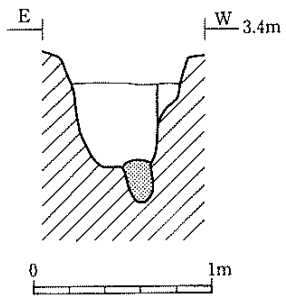
桁行3間、梁行2間の東西棟で、東から1間目の棟通り下には間仕切りの柱穴がある。

〔重複〕（古）ＳＤ3020、ＳＫ3016　（新）ＳＢ3834、ＳＤ3030　（不明）ＳＢ3832、ＳＤ3017



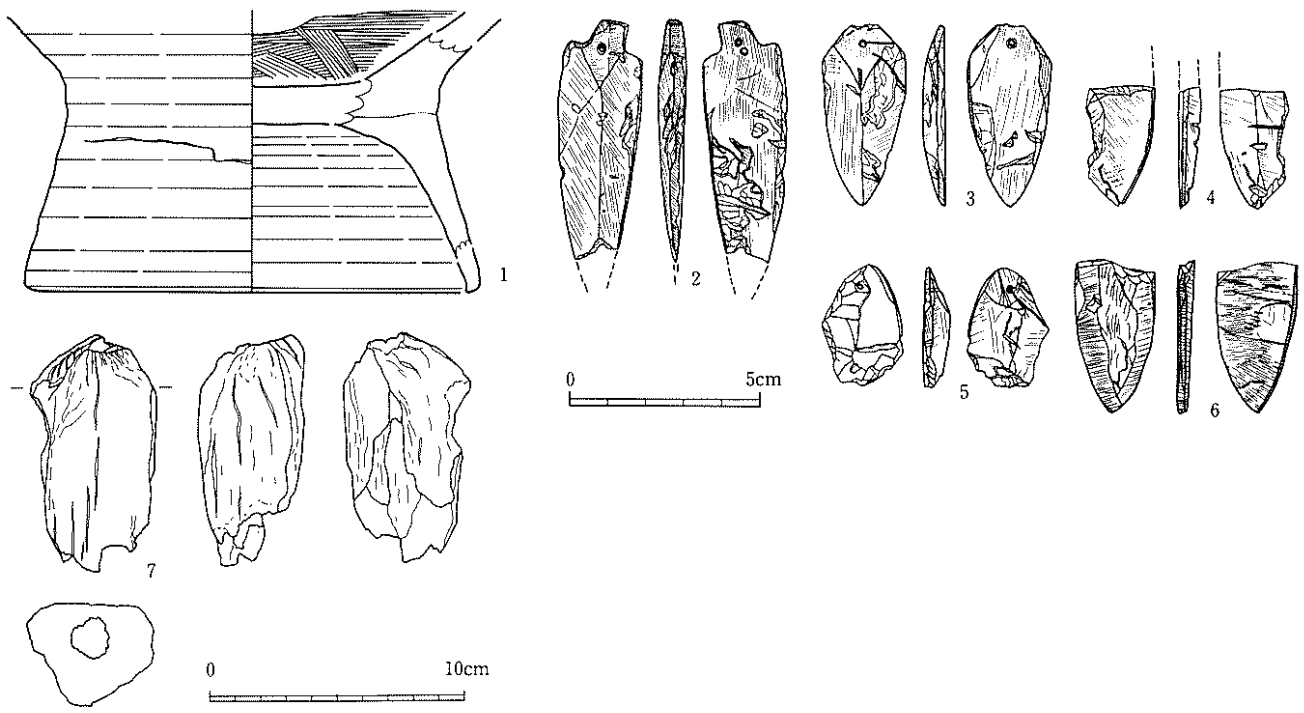
〔柱穴〕楕円形や方形で、一辺が0.3～0.7mである。深さは最も深い部分で0.4mであるが、柱痕跡の部分だけさらに0.4m程深くなっているものもある。埋土は地山のブロックや炭化物を含む黒褐色や褐灰色、暗褐色シルトである。

〔柱痕跡〕直径15cmの円形で、堆積土は黒褐色のシルトである。



〔柱間・方向〕柱間は、桁行が北側柱列で西から1.9m・2.0m・1.7mで、総長は5.6mであり、梁行は西妻で北から2.0・2.0mで、総長4.0mである。方向は北側柱列でＥ－15°－Ｓである。

〔出土遺物〕柱穴から須恵器がごく少量出土した。



No.	種類	層位	特　　徴	口径	底径	器高	残存	備　考	写真図版	登録No.
1	赤焼土器・台付鉢	SX3646	外：ロクロナデ 内：(鉢)ヘラナデ(台)ロクロナデ	－	(18.0)	－	一部			646-1
2	石製模造品	SX3646	剣 粘板岩	長6.0	幅2.2	厚1.0	一部		28-16	646-2
3	石製模造品	SB3403	剣 粘板岩	長4.8	幅2.2	厚0.6	一部		28-12	176-1
4	石製模造品	SB3811	剣 粘板岩	長3.2	幅1.8	厚0.6	一部		50-8	199-1
5	石製模造品	SB3835	剣 粘板岩	長3.2	幅2.1	厚0.7	一部		28-9	211-1
6	石製模造品	SB3843	剣 粘板岩	長4.0	幅2.1	厚0.4	一部		28-14	292-1
7	管状木製品	SB3807		長9.3	幅4.2	孔1.4				P208-1

第332図　その他の建物跡等出土遺物

C　竪穴住居跡

調査区の北側と南側で1軒ずつ、2軒検出した。

【ＳＩ3634竪穴住居跡】（第328・333・334図）

調査区南西隅にあり、西南部は調査区外に延びている。

〔重複〕（古）ＳＫ3637　（新）ＳＢ3826・3827・3856、ＳＤ3031、ＳＫ3639・3640

〔規模・平面形〕東西4.6m、南北4.2m以上で、ほぼ正方形を呈すると思われる。

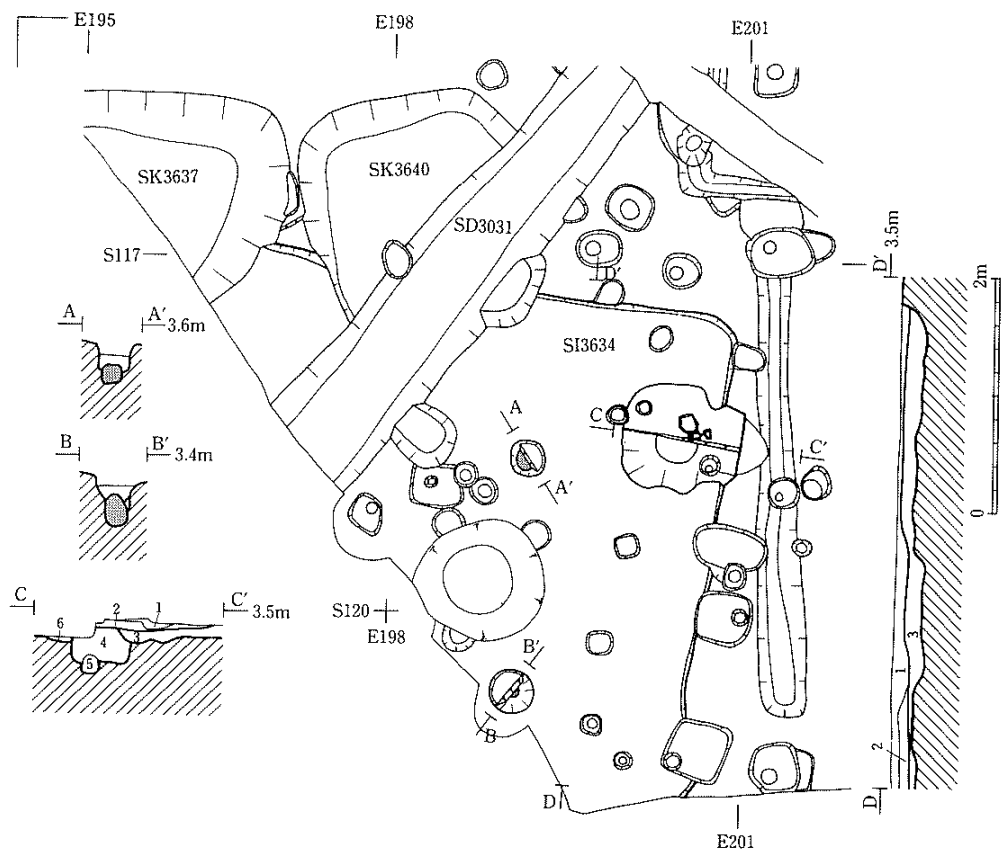
〔床面〕掘方を掘り、地山ブロックを多く含む黒褐色シルトで貼床しており、上面には若干の凹凸が認められる。周溝は検出されていない。

〔カマド〕東辺のやや北寄りに、燃焼部の焼面がある。側壁や煙道は残存していない。

〔主柱穴〕東側の2個を確認しており、柱は切取られている。切取り穴は長径が0.4m程の楕円形で、深さは0.2m程である。柱痕跡は径20㎝程の円形である。柱の間隔は約2.0mである。

〔壁〕最も高い部分で15㎝残存しており、ほぼ直立する。

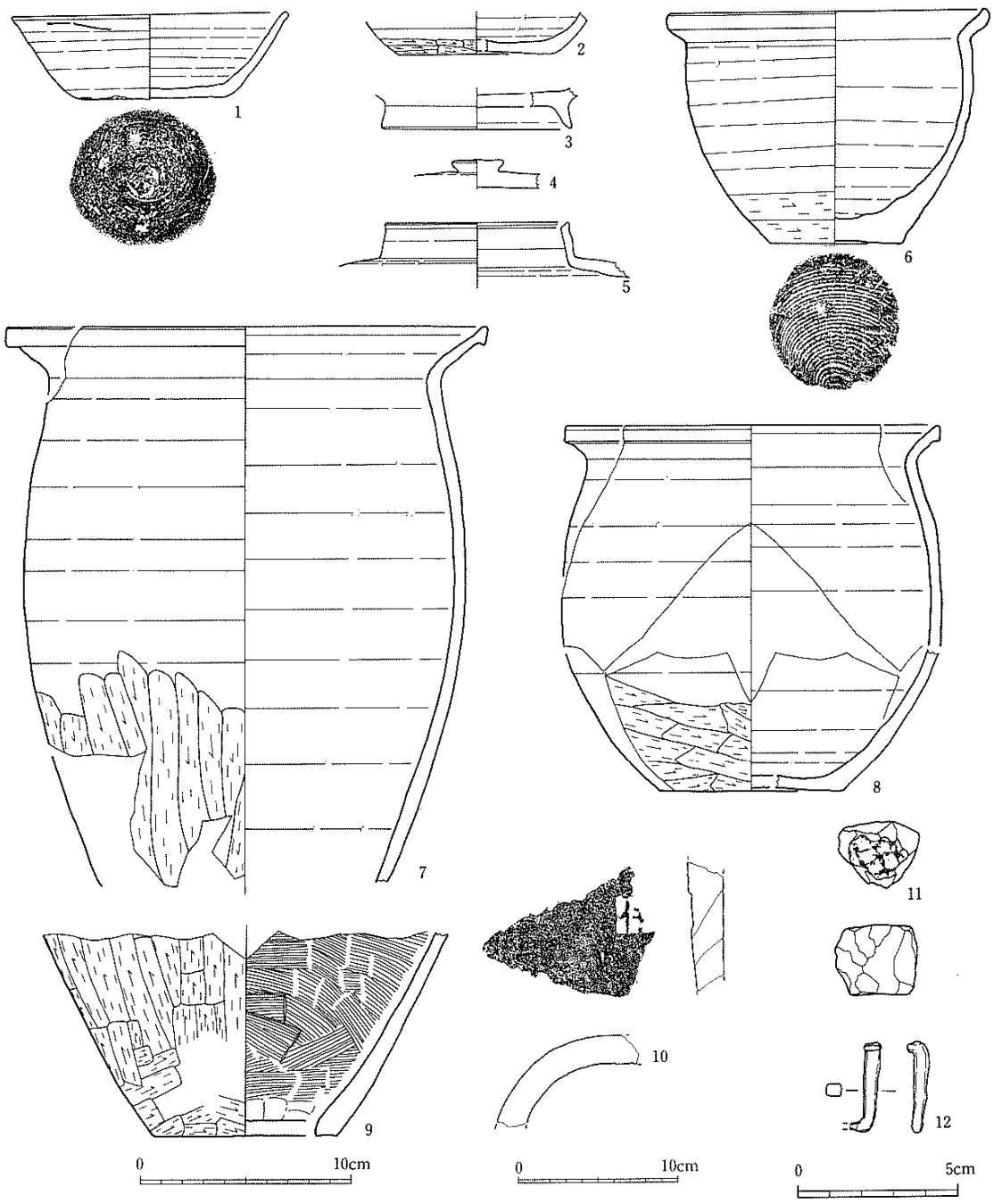
〔堆積土〕炭化物、焼土、地山ブロックを少量含む黒褐色シルトである。



№	土色	土性	備　考	
1	明褐 7.5YR5/6	焼土	SI3634	[カマド内堆積土]
2	褐灰 10YR4/1	シルト		[　〃　] 炭化物多量含。灰と焼土含。
3	黒褐 10YR3/2	シルト		[掘方埋土] 地山ブロック多量含。
4	黒褐 10YR3/2	シルト	SD3064	地山ブロックと酸化鉄含。
5	黒褐 10YR3/1	シルト	Pit	地山ブロック多量含。
6	褐灰 10YR4/1	粘質シルト		地山ブロック若干含。

№	土　色	土性	備　考
1	黒褐 10YR3/2	シルト	[住居内堆積土] 炭化物若干含。焼土若干含。
2	黒褐 10YR3/2	シルト	[住居内堆積土] 地山ブロック多量含。
3	黒褐 10YR3/2	シルト	[掘方埋土] 地山ブロック多量含。

第333図　SI3634 住居跡



No	種類	層位	特　　徴	口径	底径	器高	残存	備　　考	写真図版	登録No
1	須恵器・坏		内外：ロクロナデ 底：ヘラ切り→手ケズリ	13.1	6.8	4.1	完形	カマド周辺	16-10	634-1
2	須恵器・坏	床面	外：ロクロナデ→手ケズリ 底：ヘラ切り→手ケズリ 内：ロクロナデ	—	(9.4)	—	一部			634-10
3	須恵器・高台坏	1層	内外：ロクロナデ 底：回転糸切り→ロクロナデ	—	(9.2)	—	一部			634-7
4	須恵器・蓋	2層	内外：ロクロナデ	—	—	—	一部			634-8
5	須恵器・短頸壺	1層	内外：ロクロナデ	(8.6)	—	—	一部			634-9
6	土師器・甕	カマド2層	内外：ロクロナデ 底：回転糸切り	15.3	6.2	11.1	完形		16-8	634-2
7	土師器・甕	—	外：ロクロナデ→手ケズリ 内：ロクロナデ	(22.8)	—	—	1/3		16-12	634-5
8	土師器・甕	カマド2層	外：ロクロナデ→手ケズリ 底：手ケズリ 内：ロクロナデ	(17.8)	(8.8)	—	一部	R634-6と接合	16-9	634-3
9	土師器・甑	—	外：手ケズリ 内：ヘラナデ	—	(8.8)	—	一部			634-4
10	丸瓦	掘方	凹：布目 凸：縄タタキメ→ロクロナデ	—	—	—	一部	刻印「伊」		634-11
11	土製円盤	1層	瓦を転用	長2.1	幅2.5	厚2.2	一部		27-48	634-12
12	釘？	1層		—	—	—	一部			634-13

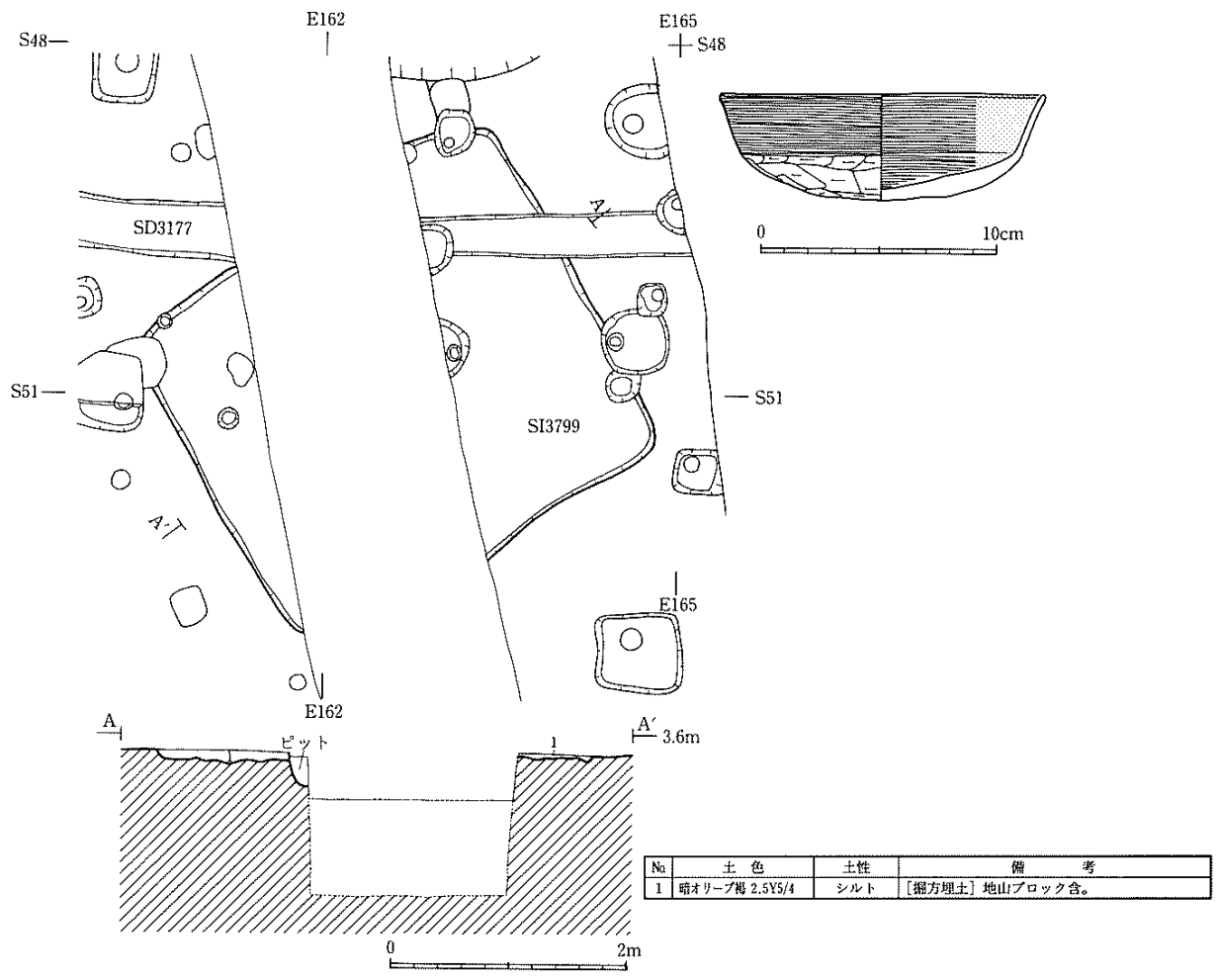
第334図　SI3634住居跡出土遺物

〔方向〕東辺でN－8°－Eである。

〔出土遺物〕土師器坏・甕・甑、須恵器坏・高台坏・蓋・短頸壷の他、住居内堆積土から平瓦、丸瓦、土製円盤、釘、掘方埋土からは「伊」の刻印瓦などが出土している。

床面出土の土師器甕はロクロ調整で長胴形と鉢形がある。長胴形の甕は口径22.8㎝の大型品で最大径は口縁部にあり、胴部上半に張りがあるものである。鉢形の甕は口径推定17.3㎝、器高推定17.5㎝で最大径が胴部中央にあるものと、口径15.3㎝、器高11.1㎝の小型品で最大径が口縁部にあり、胴部上半が張るものがある。土師器甑は非ロクロ調整で無底のものである。調整は体部外面にヘラケズリ調整が施されている。また、土師器坏は、すべて小破片のため図示できるものはないが、堆積土出土のものを含めて非ロクロ調整の破片が多く、ロクロ調整のものは少ない。

須恵器坏は底部から直線的に立ち上がっており、ヘラ切り後手持ちヘラケズリ調整が施されている。



No	土　色	土性	備　　考
1	暗オリーブ褐 2.5Y5/4	シルト	［掘方埋土］地山ブロック含。

No	種類	層位	特　　徴	口径	底径	器高	残存	備　　考	写真図版	登録No
1	土師器・坏	掘方	外：手ケズリ→ヨコナデ 内：ヨコナデ→黒色処理	13.9	－	4.5	¼完	内外面に黒斑	16-11	799-1

第335図　SI3799 住居跡

【ＳＩ3799竪穴住居跡】（第306・335図）

ＳD3307溝跡の西側にあり、中央部は排水溝に壊されている。床面まで削平されており、掘方のみが検出されたと思われる。

〔重複〕（新）ＳB3803・3805・3841、ＳD3177　（不明）ＳB3344

〔規模・平面形〕一辺3.2～3.5mの、ほぼ正方形を呈する。

〔床面〕掘方を掘り、地山ブロックを多く含む、暗オリーブ褐色シルトで貼床している。床面は削平により残存していない。

〔周溝・カマド・主柱穴〕検出されていない。

〔方向〕東辺でN－29°－Wである。

〔出土遺物〕掘方埋土から非ロクロ調整で有段丸底の土師器坏が1点出土した。

D　工房跡

遺構の検出状況や遺物の出土状況から鍛冶工房と考えられるものが1棟検出され、その可能性が考えられるものが1棟ある。

【ＳX3029工房跡】（第328・336・337図）

調査区南西隅にある。平面形や堆積土などは竪穴住居跡に類似するが、カマドは付設されておらず、床面にある土壙などから多量の鉄滓や炉壁が出土していることから、竪穴工房跡と考えられる。

〔重複〕（古）ＳB3433、ＳK3032・3034・3041・3143・3574、ＳD3064・3233　（新）ＳB3432・3826、ＳD3031、ＳX3024

〔規模・平面形〕東西8.3m、南北7.6mで、ほぼ正方形を呈し、西壁南側に幅20㎝程の張り出し部を有する。

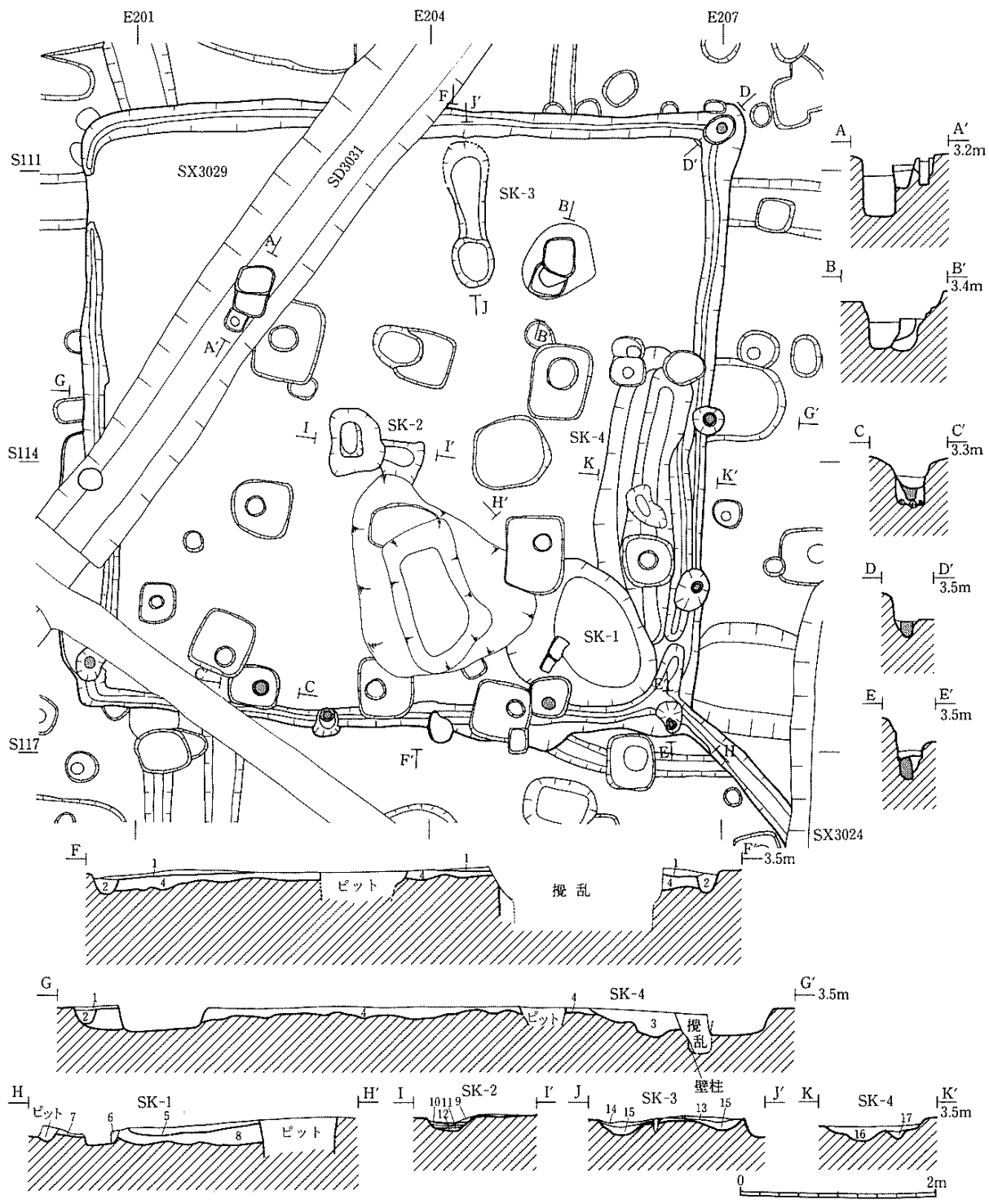
〔床面〕掘方を掘り、地山ブロックや酸化鉄を多く含む黒褐色シルトで貼床している。床面は平坦で、やや堅く、しまっている。

〔周溝・外延溝〕ほぼ全周しており、南東隅で工房外に延びている。幅は15～30㎝程で、深さは3～12㎝あり、横断面形は「U」字形である。

〔主柱穴〕4個確認した。南側の2個は壁際に寄っている。掘方は一辺が0.4～0.5mの隅丸方形で、深さは0.4～0.6m程である。柱痕跡は径15㎝程の円形で、柱の間隔は南側で東西3.0m、東側で南北4.6mである。柱はいずれも抜き取られていた。

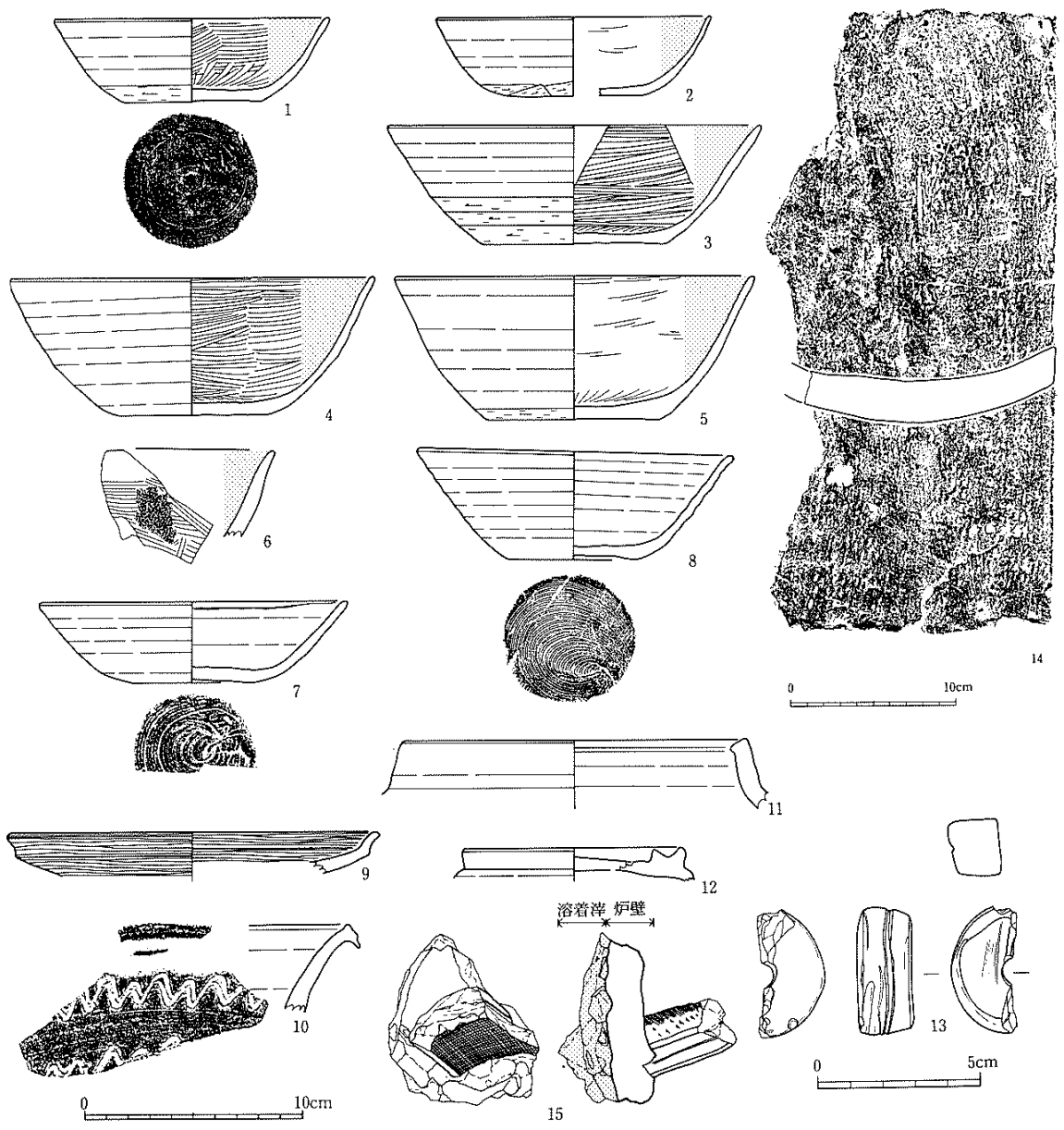
〔壁柱穴〕南・東壁で7個確認した。掘方は長辺が0.3～0.4mの楕円形で、深さは0.2～0.6mである。柱痕跡は径10㎝前後の円形である。柱の間隔は1.2m～3.0mとばらつきがある。

〔土壙〕主に工房跡の中央～東側にかけて、深さ10㎝前後の、浅い不整形の掘り込みを4個所確認した。土壙1は東南隅にあり、長径0.8㎡程の楕円形である。土壙2・3はやや深い部分と浅い部分が連続しているもので、据えてあったものを抜き取ったような状況である。土壙4は溝状で、壁際に沿って延びており、土壙1と連続する。幅は0.4m程で、長さは1.5mである。いずれも堆積土は炭化物や焼土が主体で、鍛冶関連の施設と考えられる。



No	土色	土性	備考	No	土色	土性	備考
1	黒褐 10YR3/1	シルト	[工房内堆積土] 炭化物と焼土若干含。	10	黒 10YR1.7/1	炭化物層	[SK2 埋土] 焼土若干含。地山粒少量含。
2	褐灰 10YR4/1	シルト	[周溝埋土] 地山ブロック含。炭化物若干含。	11	褐灰 10YR6/1	灰層	[SK2 埋土] 焼土若干含。
3	褐灰 10YR4/1	粘質シルト	[SK4 埋土] 酸化鉄と地山ブロック多量含。	12	黒褐 10YR3/1	砂質シルト	[SK2 埋土] 焼土と地山粒若干含。
4	黒褐 10YR3/1	シルト	[掘方埋土] 地山土多量含。酸化鉄少量含。	13	黒褐 10YR3/1	シルト	[SK3 埋土] 炭化物と焼土少量含。灰少量含。
5	黒 10YR1.7/1	炭化物層	[SK1 埋土] 地山ブロックと焼土を少量含。	14	黒 10YR1.7/1	炭化物層	[SK2 埋土] 地山ブロック多量含。焼土少量含。
6	褐灰 10YR4/1	シルト	[周溝埋土] 地山ブロック含。炭化物若干含。	15	黒褐 10YR3/1	シルト	[SK3 埋土] 地山ブロック多量含。炭化物少量含。
7	黒褐 10YR3/2	シルト	[外延溝埋土] 地山ブロック多量含。	16	褐灰 10YR4/1	粘質シルト	[SK4 埋土] 酸化鉄と地山ブロック多量含。
8	褐灰 10YR4/1	シルト	[SK1 埋土] 地山ブロック多量含。炭化物少量含。	17	褐灰 10YR4/1	シルト	[周溝埋土] 地山ブロック含。炭化物若干含。
9	黒 10YR1.7/1	炭化物層	[SK2 埋土] 灰との互層。				

第336図　SX3029 工房跡



No.	種類	層位	特徴	口径	底径	器高	残存	備考	写真図版	登録No.
1	土師器・坏	K1-3層	外：ロクロナデ→回ケズリ 底：回ケズリ 内：ミガキ→黒色処理	(12.7)	6.4	3.9	3/5	金雲母多量	17-1	029-5
2	土師器・坏	1層	外：ロクロナデ→回ケズリ 底：回ケズリ 内：ミガキ→黒色処理	(12.6)	(6.2)	3.7	2/5	金雲母多量		029-7
3	土師器・椀	K1-3層	外：ロクロナデ→回ケズリ 底：回ケズリ 内：ミガキ→黒色処理	(17.2)	8.5	5.5	1/3			029-9
4	土師器・椀	K1-2層	外：ロクロナデ 底：回転糸切→手ケズリ 内：ミガキ→黒色処理	16.8	7.1	6.3	5/6		17-2	029-8
5	土師器・椀	1層	外：ロクロナデ→回ケズリ 底：回ケズリ 内：ミガキ→黒色処理	(16.5)	(7.9)	(6.6)	1/5	金雲母多量		029-6
6	土師器・坏	—	外：ミガキ 内：ミガキ→黒色処理	—	—	—	一部	内面に漆付着		029-12
7	須恵器・坏	K1-3層	内外：ロクロナデ 底：回転糸切り	(14.2)	(5.5)	3.2	1/2	灰白色	17-4	029-1
8	須恵器・坏	K1-2層	内外：ロクロナデ 底：回転糸切り	5.0	14.5	6.0	4/5		17-3	029-2
9	須恵器・盤	底直上	外：ロクロナデ→回ケズリ→ミガキ 内：ロクロナデ→ミガキ	(17.0)	—	—	一部			029-14
10	須恵器・甕	1層	外：ロクロナデ→櫛描波状文 内：ロクロナデ	—	—	—	一部			029-4
11	須恵器・短頸壺	床面	内外：ロクロナデ	(15.8)	—	—	一部			029-3
12	円面硯	K1-3層		10.2	—	—	一部			029-11
13	紡錘車	K1-2層	凝灰岩	長3.9	—	厚1.7	一部		28-22	029-13
14	平瓦	K1-3層	外：縄タタキメ→ナデ 内：布目→ナデ	—	—	—	一部	Ⅰ Aa類		029-10
15	炉壁	—		—	—	—	一部			029-15

第337図　SX3029 工房跡出土遺物

〔壁〕最も高い部分で床面から5㎝残存しており、ほぼ直立する。
〔堆積土〕炭化物、焼土、地山ブロックを少量含む黒褐色シルトである。
〔方向〕東辺でN－0°－Eである。
〔出土遺物〕床面や工房内の土壙から土師器、須恵器、円面硯、平瓦、丸瓦、紡錘車の他、鉄滓が多量に出土しており、鉄滓は特に工房西壁南側の張り出し部分からの出土量が多い。掘方埋土や堆積土中からは灰釉陶器、漆付着土器なども出土している。

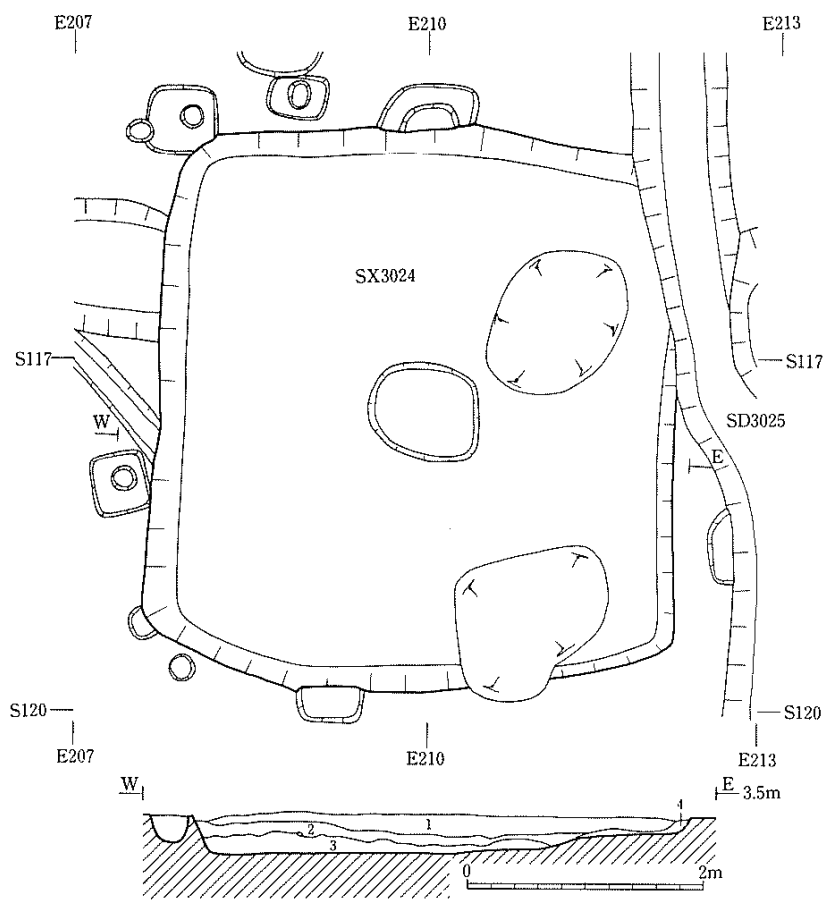
土師器坏・椀は切り離し後、回転ヘラケズリや手持ちヘラケズリされるものが多く、胎土に金雲母を多く含むものがある。須恵器はヘラ切り無調整や回転糸切り無調整がやや多い。

また、土壙4からは、瓦を差し込んだ炉壁の一部が出土しており、鉄滓とともに本遺構が鍛冶工房的な性格の遺構であることを示している。

【ＳＸ3024工房跡】（第328・338・339図）

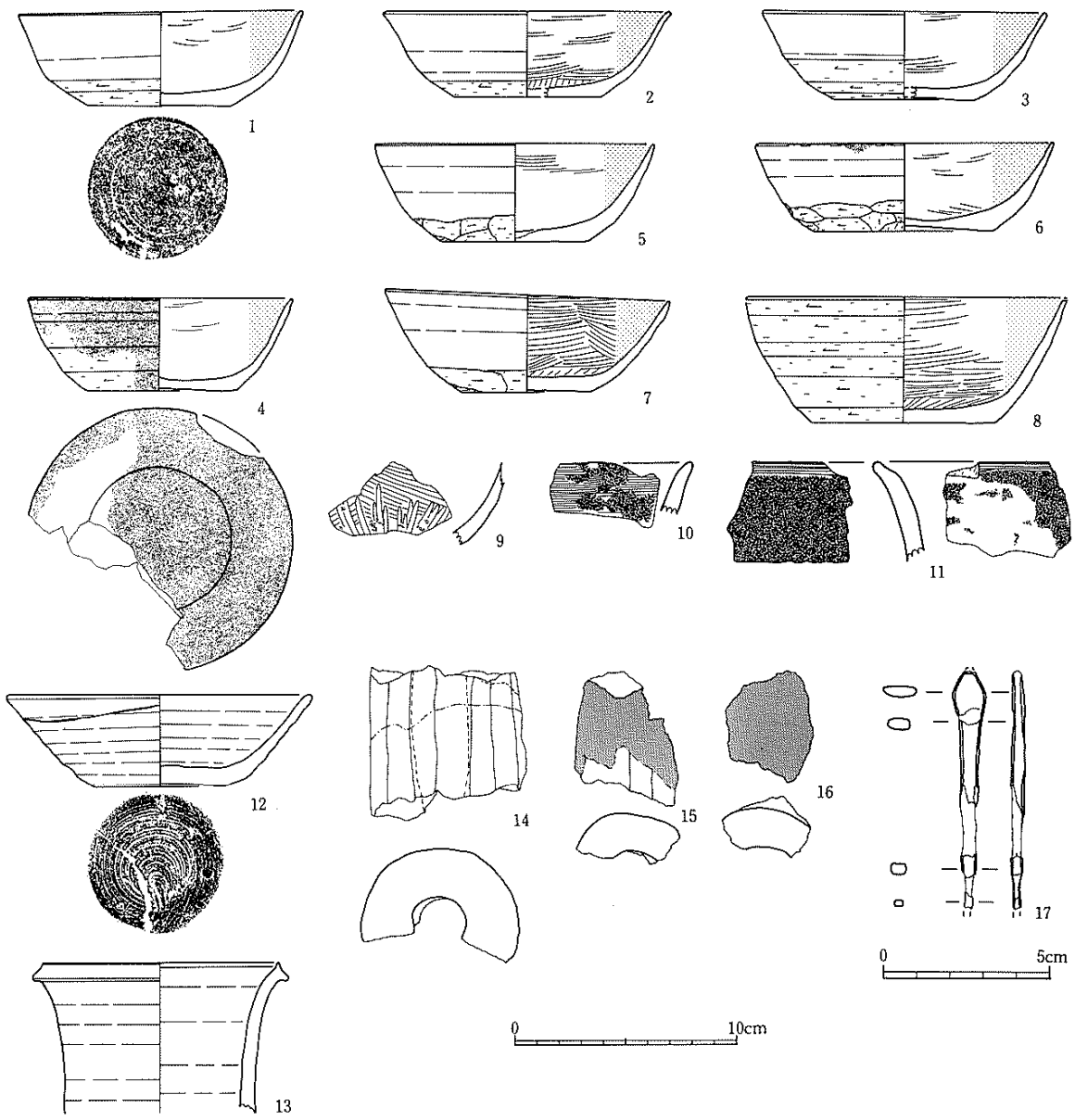
ＳＸ3029工房跡の南東に位置する竪穴状の遺構で、床面を作っていることや、カマドなどの生活施設がないことから、工房もしくは作業所である可能性が考えられる。

〔重複〕（古）ＳＢ3422・3828、ＳＸ3029、ＳＫ3032・3570　（新）ＳＤ3025



第338図　SX3024 工房跡

〔規模・平面形〕一辺4.5m程の正方形である。
〔床面〕掘方を掘り、地山ブロックを多く含む黒褐色シルトで貼床している。
〔壁〕最も高い部分で床面から20㎝程残存しており、ほぼ直立する。
〔堆積土〕炭化物を含む黒・黒褐色シルトである。
〔出土遺物〕主に堆積土から土師器坏・椀・鉢・甕、須恵器坏・高台坏・蓋・甕・長頸瓶、平瓦、丸瓦の他、鉄鏃、鉄滓、羽口、砥石などが出土している。



No.	種類	層位	特　　徴	口径	底径	器高	残存	備　　考	写真図版	登録No.
1	土師器・坏	1・2層	外：ロクロナデ→回ケズリ 底：回ケズリ 内：ミガキ→黒色処理	12.8	6.4	4.3	3/4		17-7	024-1
2	土師器・坏	1・2層	外：ロクロナデ→回ケズリ 底：手ケズリ 内：ミガキ→黒色処理	(13.0)	(6.7)	3.9	2/5	金雲母多量		024-3
3	土師器・坏	1・2層	外：ロクロナデ→回ケズリ 底：回ケズリ 内：ミガキ→黒色処理	(12.8)	6.4	4.0	2/5	金雲母少量		024-4
4	土師器・坏	1・2層	外：ロクロナデ→回ケズリ 底：回転糸切→回ケズリ 内：ミガキ→黒色処理	12.0	6.7	4.2	3/5	金雲母多量 油煙付着	17-5	024-7
5	土師器・坏	1・2層	外：ロクロナデ→手ケズリ 底：手ケズリ 内：ミガキ→黒色処理	(12.6)	(6.6)	4.4	1/4	金雲母多量		024-8
6	土師器・坏	床面	外：ロクロナデ→手ケズリ 底：回・糸→手ケズリ 内：ミガキ→黒色処理	(13.4)	8.0	4.0	1/2	金雲母多量 油煙付着	17-8	024-2
7	土師器・坏	1・2層	外：ロクロナデ→手ケズリ 底：手ケズリ 内：ミガキ→黒色処理	12.9	5.8	4.4	4/5		17-6	024-6
8	土師器・椀	1・2層	外:ロクロナデ→回ケズリ 底:回転糸切り 内:ミガキ→黒色処理	(14.6)	8.2	(5.7)	1/2	金雲母多量	17-10	024-5
9	土師器・坏	床面	外：ロクロナデ 内：ミガキ→黒色処理	—	—	—	一部	内面に漆付着		024-17
10	土師器・甕	1・2層	内外：ロクロナデ	—	—	—	一部	内面に漆付着		024-16
11	土師器・鉢	1・2層	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ・ヘラケズリ	—	—	—	一部	外面に漆付着		024-18
12	須恵器・坏	1・2層	内外：ロクロナデ 底：回転糸切り	13.8	5.9	4.2	3/4		17-9	024-9
13	須恵器・長頸瓶	1・2層	内外：ロクロナデ	(10.8)	—	—	一部	大戸		024-10
14	羽口	1・2層		—	—	—	一部			024-12
15	羽口	1・2層		—	—	—	一部			024-11
16	羽口			—	—	—	一部			024-13
17	鉄鏃	—		—	—	—	一部		27-1	024-15

第339図　SX3024 工房跡出土遺物

土師器をみると、坏類はロクロ調整のものが多く、切り離し後、底部や体部に再調整を加えるものが主体を占める。また、胎土に金雲母を多く含むのが特徴である。甕は逆に非ロクロ調整のものが多く、これらの中には漆が付着したものも含まれる。

須恵器坏はヘラ切りや回転糸切り無調整のものが多い。

E　井戸跡

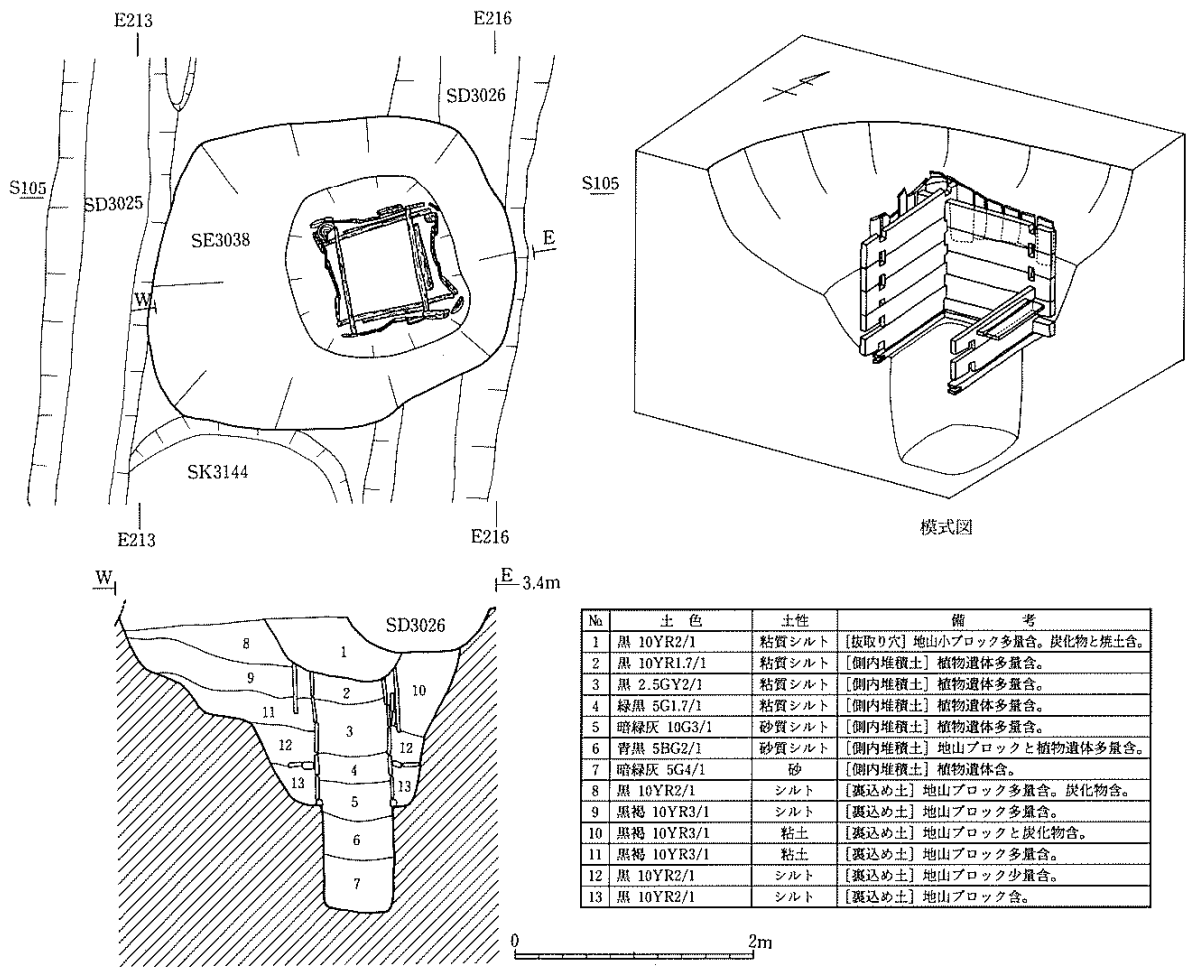
井戸跡は9基確認された。以下、完掘したものを中心に説明する。

【ＳＥ3038井戸跡】（第322・340～343図）

掘方を掘り、井戸側を据えたもので、上部の東半部はＳＤ3026溝跡によって壊されている。また、井戸側の上部は抜取られている。

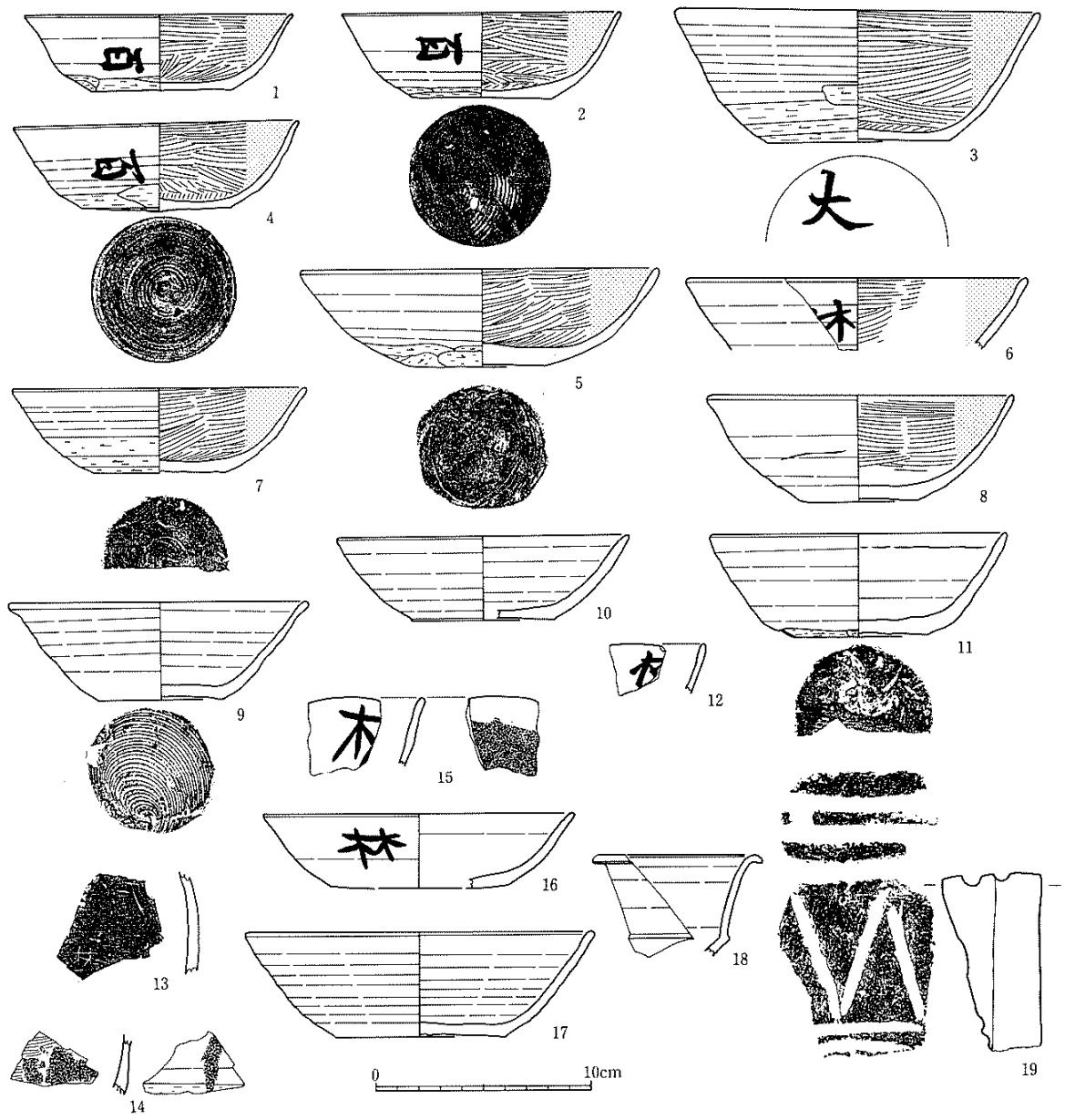
〔重複〕（新）ＳＤ3025・3026、ＳＫ3144

〔掘方〕長径3.2m、短径2.6mの楕円形で、深さは2.7mである。裏込め土は地山のブロックを多量に含む黒色のシルトや黒褐色の粘土などである。



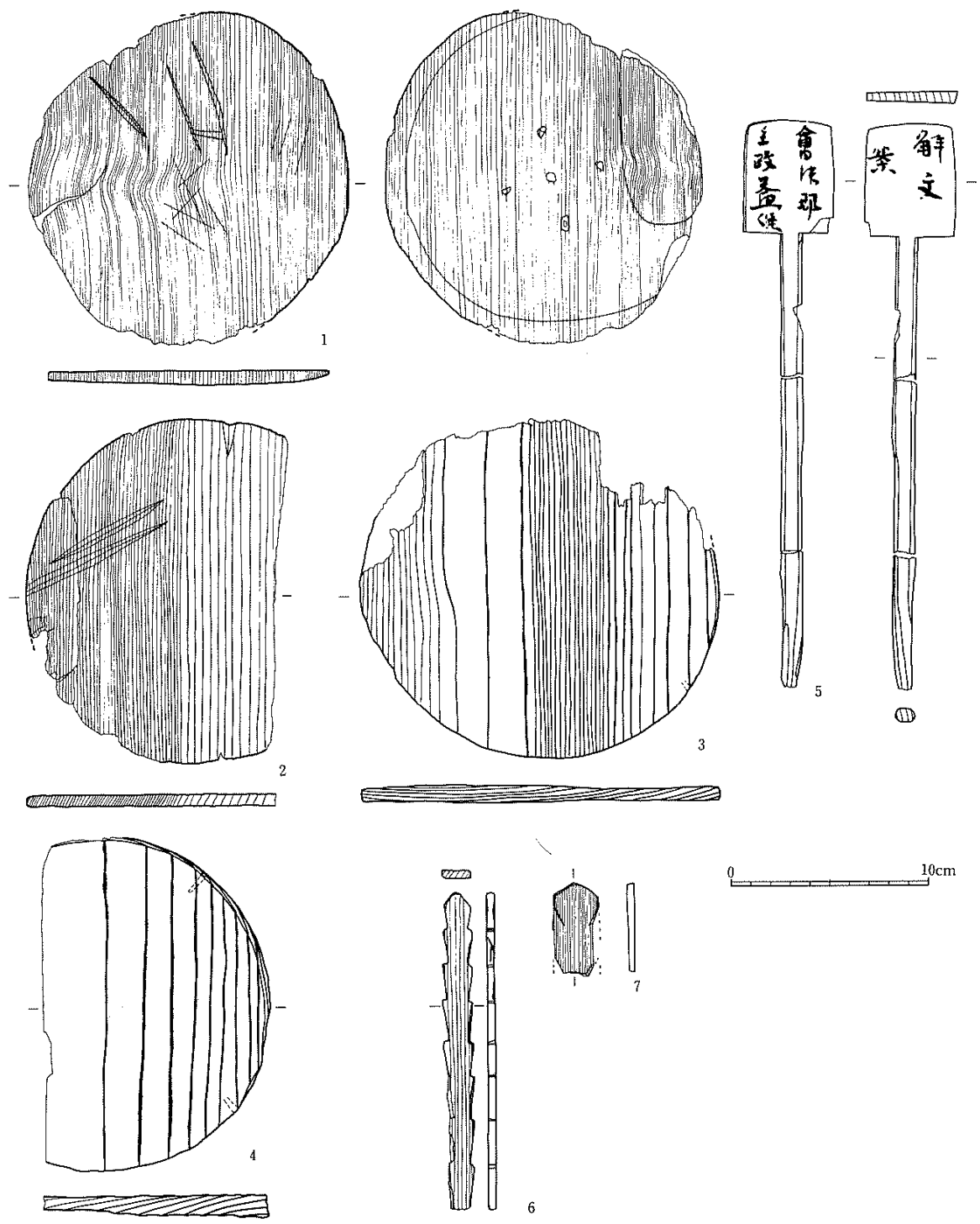
№	土　色	土性	備　　考
1	黒 10YR2/1	粘質シルト	［抜取り穴］地山小ブロック多量含。炭化物と焼土含。
2	黒 10YR1.7/1	粘質シルト	［側内堆積土］植物遺体多量含。
3	黒 2.5GY2/1	粘質シルト	［側内堆積土］植物遺体多量含。
4	緑黒 5G1.7/1	粘質シルト	［側内堆積土］植物遺体多量含。
5	暗緑灰 10G3/1	砂質シルト	［側内堆積土］植物遺体多量含。
6	青黒 5BG2/1	砂質シルト	［側内堆積土］地山ブロックと植物遺体多量含。
7	暗緑灰 5G4/1	砂	［側内堆積土］植物遺体含。
8	黒 10YR2/1	シルト	［裏込め土］地山ブロック多量含。炭化物含。
9	黒褐 10YR3/1	シルト	［裏込め土］地山ブロック多量含。
10	黒褐 10YR3/1	粘土	［裏込め土］地山ブロックと炭化物含。
11	黒褐 10YR3/1	粘土	［裏込め土］地山ブロック多量含。
12	黒 10YR2/1	シルト	［裏込め土］地山ブロック少量含。
13	黒 10YR2/1	シルト	［裏込め土］地山ブロック含。

第340図　SE3038 井戸跡



№	種類	層位	特　　徴	口径	底径	器高	残存	備　　考	写真図版	登録№
1	土師器・坏	底面	外：ロクロナデ→手ケズリ 底：手ケズリ 内：ミガキ→黒色処理	12.5	6.4	3.5	完形	金雲母多 墨書「百」	18-5	038-5
2	土師器・坏	底面	外：ロクロナデ→手ケズリ 底：回・糸→手ケズリ 内：ミガキ→黒色処理	13.0	6.5	4.0	≒完	金雲母多 墨書「百」	18-4	038-4
3	土師器・椀	底面	外：ロクロナデ→回ケズリ 底：回ケズリ 内：ミガキ→黒色処理	17.1	8.5	6.1	≒完	底部に墨書「大」	18-9	038-2
4	土師器・坏	7層	外：ロクロナデ→回ケズリ 底：回ケズリ 内：ミガキ→黒色処理	13.3	6.9	4.1	≒完	金雲母多 墨書「百」	18-3	038-3
5	土師器・坏	7層	外：ロクロナデ→手ケズリ 底：手ケズリ 内：ミガキ→黒色処理	16.7	6.1	4.6	4/5		18-10	038-10
6	土師器・坏	7層	外：ロクロナデ 内：ミガキ→黒色処理	(16.0)	—	—	一部	外面に墨書「林」?		038-20
7	土師器・坏	—	外：ロクロナデ→回ケズリ 底：回ケズリ 内：ミガキ→黒色処理	(13.6)	(6.0)	4.0	1/3	金雲母多量	18-1	038-16
8	土師器・坏	6層	外：ロクロナデ 底：回転糸切り 内：ミガキ→黒色処理	14.3	5.6	5.0	2/3			038-15
9	須恵器・坏	底面	内外：ロクロナデ 底：回転糸切り	14.0	5.8	4.6	≒完		18-12	038-13
10	須恵器・坏	底面	内外：ロクロナデ 底：回転糸切り	(13.6)	(6.6)	3.9	1/3		18-13	038-14
11	須恵器・坏	6層	外：ロクロナデ→手ケズリ 底：手ケズリ 内：ロクロナデ→ナデ	13.8	6.4	4.8	1/4	浅黄色（硬質）	18-11	038-12
12	須恵器・坏	7層	内外：ロクロナデ	—	—	—	一部	墨書「林」?		038-19
13	土師器・坏	裏込土	内外：ミガキ→黒色処理	—	—	—	一部	内：線刻「林」		038-22
14	土師器・甕?	裏込土	外：ロクロナデ→ヘラケズリ 内：ミガキ→黒色処理	—	—	—	一部	内外面漆付着		038-28
15	須恵器・坏	裏込土	内外：ロクロナデ	—	—	—	一部	墨書「林」? 漆付着		038-18
16	須恵器・坏	裏込土	内外：ロクロナデ 底：ヘラ切り	(14.5)	(8.2)	(3.5)	1/5	墨書「林」焼はじけ		038-17
17	須恵器・坏	裏込土	内外：ロクロナデ 底：ヘラ切り→ナデ	(16.2)	(7.8)	4.9	1/4			038-1
18	須恵器・稜椀	1層	内外：ロクロナデ	—	—	—	一部			038-36
19	軒平瓦	裏込土	凹→ナデ 二重弧文軒平瓦	—	—	—	一部	多賀城Ⅰ期	26-11	038-24

第341図　SE3038 井戸跡出土遺物(1)－井戸側内・掘り方埋土－



No.	種類	層位	特　　徴	口径	底径	器高	残存	備　　考	写真図版	登録No.
1	挽物・盤	－		径16.2		厚0.7		内面に刃物傷あり		038-33
2	釘結合曲物	裏込土	底板	径17.6		厚0.6		釘穴1ヶ所		038-30
3	釘結合曲物	－	底板	径18.2		厚0.9		釘穴1ヶ所		038-31
4	釘結合曲物	裏込土	底板	径17.0		厚1.1				038-29
5	木簡	裏込土	形状：3断片 下端折れ 061形式（題箋軸）樹種：モミ属 木取：柾目	長28.9	幅4.6	厚1.1		表：解文案 裏：会津郡主政益継	31-1	038-35
6	斎串	裏込土		長16.1	幅1.5	厚0.4				038-32
7	斎串？	裏込土		長4.6	幅2.3	厚0.3	一部			038-34

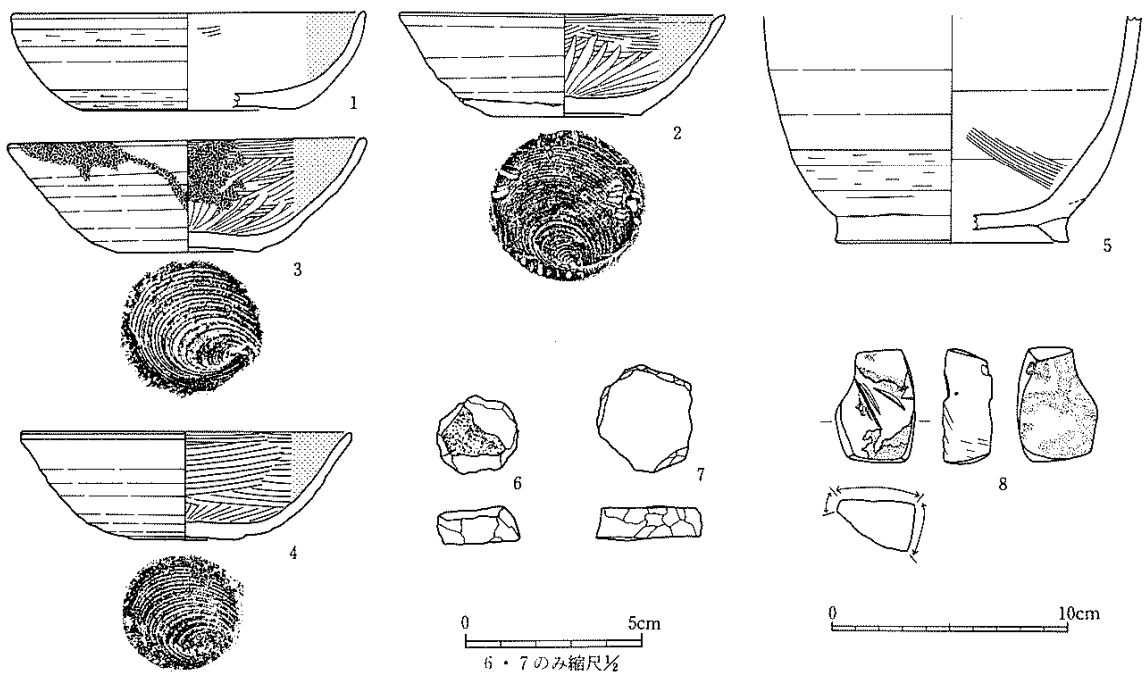
第342図　SE3038 井戸跡出土遺物(2)－裏込め土－

〔井戸側〕上部と下部で組み方が異なっている。下部は横板を井桁状に組んだもので、高さ1.0m程が残っていた。内法は1辺0.6～0.7mの方形である。残存している井戸側は5段あり、上部の3段は上下両端に溝状の切込みをつけた板材を、下部の2段は、下方にのみ溝状の切込みをつけた板材を方形に組んだものである。その下には沈下を防ぐためとみられる角材を目違いほぞで方形に組んで敷いている。また、下部の上の段の周囲には角材や板材が横に置かれており、一旦、井戸側をここまで組み上げたあと、周囲を埋め戻して補強のために敷かれたものと思われる。

上部は、下部の井戸側の外側に、四隅に柱を建て、その間に板材を横と縦に差し込んだものである。縦に差し込まれた板材は一面につき6～9枚程あり、高さ0.5m程残っていた。

〔堆積土〕2～4層は植物遺体を多く含む黒色の粘質シルトや暗緑灰の砂質シルトで、井戸廃絶後の自然堆積である。6層には崩落土とみられる地山のブロックが多く含まれている。7層は井戸機能時の堆積層で、植物遺体を含む暗緑灰の砂である。

〔抜取り穴〕炭化物や焼土及び地山の小ブロックを含む黒色の粘質シルトで人為的に埋め戻されている。



No.	種類	層位	特徴	口径	底径	器高	残存	備考	写真図版	登録No.
1	土師器・坏	抜取穴	外：ロクロナデ→回ケズリ 底：手ケズリ 内：ミガキ→黒色処理	4.2	(15.1)	(9.2)	1/4		18-2	038-11
2	土師器・坏	抜取穴	外：ロクロナデ 底：回転糸切り 内：ミガキ→黒色処理	4.4	13.9	6.6	≒完		18-7	038-9
3	土師器・坏	確認面	外：ロクロナデ 底：回転糸切り 内：ミガキ→黒色処理	15.3	5.9	4.8	2/3	内外面漆付着	18-8	038-8
4	土師器・坏	確認面	外：ロクロナデ 底：回転糸切り 内：ミガキ→黒色処理	(14.1)	4.9	4.6	3/5		18-6	038-7
5	須恵器・瓶	抜取穴	外：ロクロナデ→回ケズリ 内：ロクロナデ→ナデ	－	(9.8)	－	一部			038-6
6	土製円盤	抜取穴	須恵器坏を転用	縦2.2	横2.3	幅0.9	一部		27-44	038-27
7	土製円盤	抜取穴	灰釉陶器を転用	縦2.7	横3.0	幅8.5	一部		27-33	038-26
8	砥石	抜取穴	凝灰岩	長4.8	幅3.3	厚2.1	一部			038-23

第343図　SE3038 井戸跡出土遺物(3)－抜取り穴埋土－

〔出土遺物〕土師器、須恵器、平瓦、丸瓦の他、井戸側抜取り穴からは製塩土器、軒平瓦、土製円盤、羽口、砥石、井戸側内堆積土からは鉄滓、ウマ骨、裏込め土からは円面硯、挽物の盤、曲物底板、斎串、題箋軸などが出土しており、特に井戸側内の底面からは完形に近い土師器や須恵器の坏がまとまって出土している。また、坏類には「百」や「林」などの墨書土器や線刻土器が含まれている。

井戸側底面および裏込め土出土の土師器坏は、ロクロ調整で切り離し後、手持ちヘラケズリや回転ヘラケズリされるものが多く、特に底面出土の坏は、胎土に金雲母を多く含むのが特徴である。須恵器坏はヘラ切り無調整が多い。

抜取り穴出土の土師器坏は回転糸切り無調整、須恵器坏は回転糸切り無調整やヘラ切り無調整が多い。

【ＳＥ3162井戸跡】（第309図）

中世の屋敷の南側にある円形の素堀の井戸である。

〔規模・堆積土〕直径は1.2m、深さは1.4mである。堆積土は黒褐色粘質シルトと黒色粘土の互層で自然堆積であるが、3・4層には投棄されたとみられる貝類などの自然遺物が多く含まれている。

〔出遺物〕土師器、須恵器がごく少量出土している。

【ＳＥ3164井戸跡】（第309・344・345図）

掘方を掘り、井戸側を据えた井戸跡で、井戸側上部は抜取られている。

〔重複〕（新）ＳＤ3138

〔掘方〕短辺1.4m×長辺1.9mの隅丸長方形で、深さ1.5m程である。裏込め土は地山ブロックを多く含む、暗褐色シルトや黄灰色粘質シルトである。

ところで、北側には、短辺1.7m×長辺2.2mの隅丸長方形で、深さ45㎝程の土壙があり、井戸の掘方と同時に埋め戻されている。これについては、①掘方を途中で掘りなおした、②構築時の足場のための平坦面とした、などの可能性が考えられる。

〔井戸側〕下部の高さ1.2m程が残っている。南側と北側を横板組みにし、西側と東側を縦板組みにして、内法が長辺0.8m、短辺0.5mの長方形に組んだものである。横板材は縦板によって固定されており、縦板材は内側に横桟を入れて国定されている。また、横板材の外側には、数枚の長方形の板が縦に置かれ、補強がなされている。これらの井戸側材には、ほぞ穴や溝状の切り込みなどがみられない。

〔堆積土〕植物遺体を多く含む黒色砂質シルトや、炭化物を多く含む緑黒色砂質シルトである。

〔抜取り穴〕直径が1.1m程の円形であり、深さは0.4mである。埋土は炭化物や地山のブロックを含む、暗オリーブ灰・黒褐色粘質シルトで、人為約に埋め戻されている。

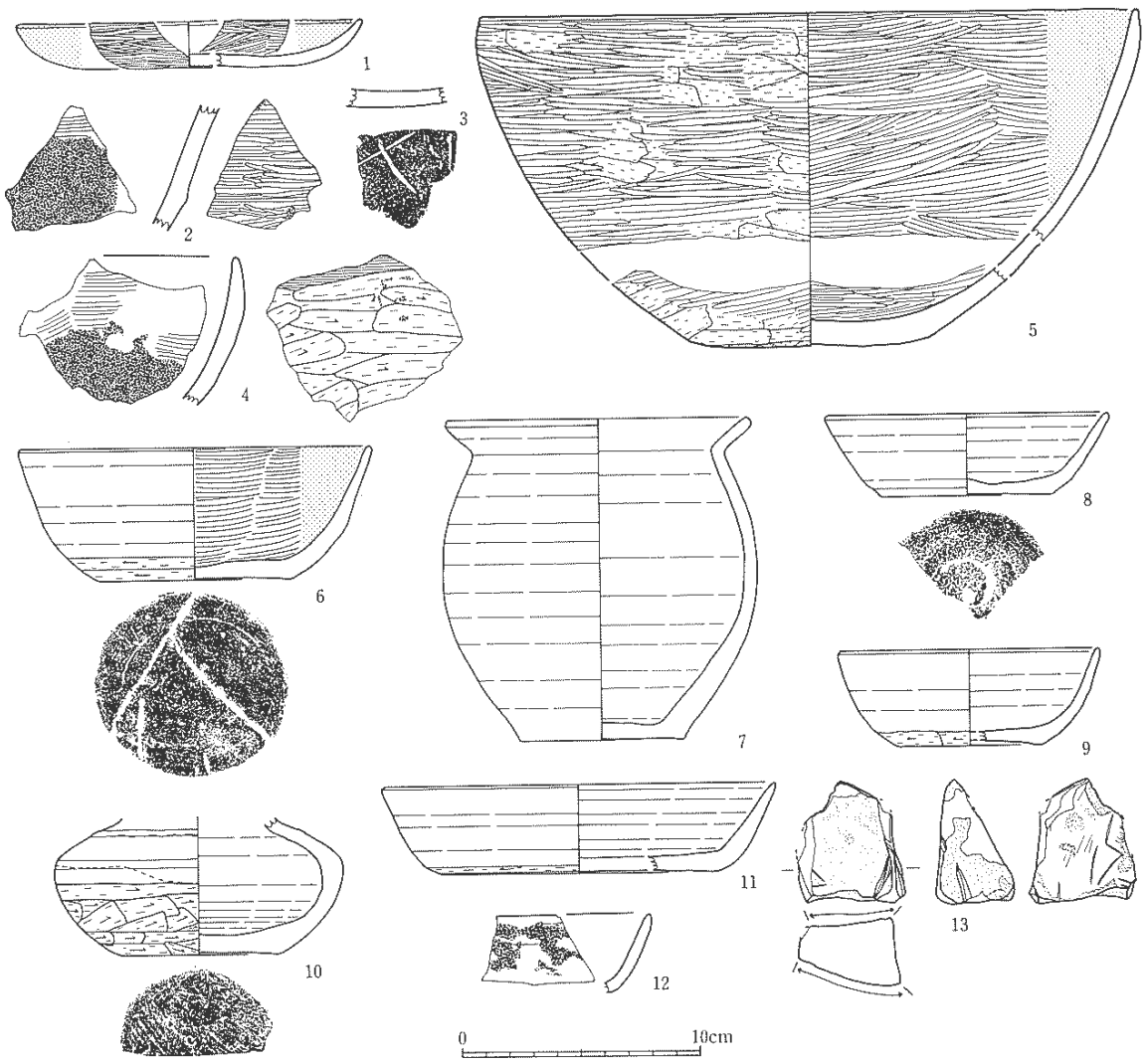
〔出土遺物〕主に裏込め土や井戸側抜取り穴から、土師器坏・椀、須恵器坏の他、平瓦、丸瓦、砥石などが出土しており、獣骨（ウマ）、モモ核、オニグルミ、クリ、アサ、サンショウ、トチ種子などの動植物遺体も少量出土している。確認面からはロクロ調整の土師器坏、甕や須恵器坏、壷などが出土している。

裏込め土出土の土師器坏は、無段平底で器高2.5㎝とやや皿状を呈するものである。調整は内外面共にヘラミガキ後黒色処理が施されている。椀は口径推定27.6㎝、器高推定10㎝の大形品で、外面はヘ

ラケズリ後ヘラミガキ、内面はヘラミガキ後黒色処理が施されている。

須恵器坏は底部が大きめて底部には回転ヘラケズリ調整が施されている。

また、破片をみると、土師器はほとんどが非ロクロ調整で、ロクロ調整のものは確認面からごく少量出土したのみである。須恵器坏は切離し後、回転ヘラケズリや手持ちヘラケズリされるものが多い。



№	種類	層位	特　　徴	口径	底径	器高	残存	備　　考	写真図版	登録№
1	土師器・皿	裏込土	内外：ミガキ→黒色処理	(14.4)	(9.0)	2.5	1/6			164-6
2	土師器・椀	裏込土	内外：ミガキ→黒色処理	－	－	－	一部	内外面漆付着		164-11
3	土師器・椀	裏込土	外：不明 内：ミガキ→黒色処理	－	－	－	一部	ヘラ書「×」?		164-9
4	土師器・椀	裏込土	外：ヨコナデ→ヘラケズリ 内：ミガキ	－	－	－	一部	内外面漆付着		164-12
5	土師器・鉢	裏込土	外：手ケズリ→ミガキ 底：手ケズリ 内：ミガキ→黒色処理	(27.6)	(10.0)	－	1/4		17-12	164-5
6	土師器・坏	確認	外：ロクロナデ→回ケズリ 底：回ケズリ 内：ミガキ→黒色処理	(14.8)	(8.0)	5.6	1/2		17-11	164-7
7	土師器・甕	確認	内外：ロクロナデ 底：ナデ	(12.7)	6.8	13.6	3/5		17-13	164-8
8	須恵器・坏	1層	内外：ロクロナデ 底：ヘラ切り	(12.0)	(7.2)	3.5	1/5			164-2
9	須恵器・坏	3層	外：ロクロナデ→手ケズリ 底：回転糸切り 内：ロクロナデ	(11.1)	(5.8)	4.1	1/6			164-1
10	須恵器・小壺	－	外：ロクロナデ→手ケズリ 底：静止糸切り→ナデ 内：ロクロナデ	－	(6.8)	－	1/4			164-4
11	須恵器・坏	裏込土	外：ロクロナデ→回ケズリ 底：回ケズリ 内：ロクロナデ	(16.6)	(11.4)	3.7	1/4			164-3
12	須恵器・坏	2層	内外：ロクロナデ 底：手ケズリ	－	－	－	一部	内面に漆付着		164-13
13	砥石	－		長4.9	幅4.4	厚2.8	一部			164-10

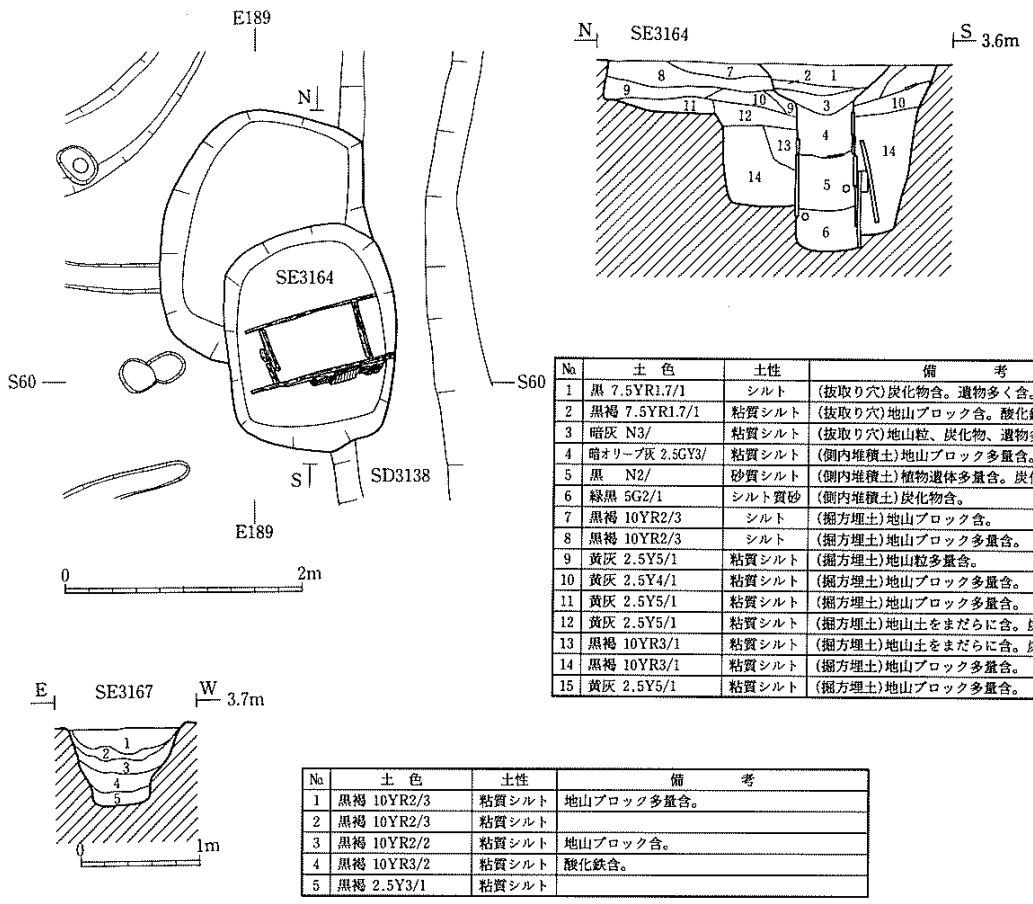
第344図　SE3164 井戸跡出土遺物

【ＳＥ3167井戸跡】（第308・345図）

中世の屋敷内にある、円形の素掘りの井戸である。他遺構との重複はない。

〔規模・堆積土〕直径1.1mで、深さは0.7mである。堆積土は部分的に地山ブロックを含む黒褐色粘質シルトなどで、自然堆積である。

〔出土遺物〕遺物は出土していない。



№	土　色	土性	備　　考
1	黒 7.5YR1.7/1	シルト	(抜取り穴)炭化物含。遺物多く含。
2	黒褐 7.5YR1.7/1	粘質シルト	(抜取り穴)地山ブロック含。酸化鉄多く含。
3	暗灰 N3/	粘質シルト	(抜取り穴)地山粒、炭化物、遺物多く含。
4	暗オリーブ灰 2.5GY3/	粘質シルト	(側内堆積土)地山ブロック多量含。
5	黒　N2/	砂質シルト	(側内堆積土)植物遺体多量含。炭化物含。
6	緑黒 5G2/1	シルト質砂	(側内堆積土)炭化物含。
7	黒褐 10YR2/3	シルト	(掘方埋土)地山ブロック含。
8	黒褐 10YR2/3	シルト	(掘方埋土)地山ブロック多量含。
9	黄灰 2.5Y5/1	粘質シルト	(掘方埋土)地山粒多量含。
10	黄灰 2.5Y4/1	粘質シルト	(掘方埋土)地山ブロック多量含。
11	黄灰 2.5Y5/1	粘質シルト	(掘方埋土)地山ブロック多量含。
12	黄灰 2.5Y5/1	粘質シルト	(掘方埋土)地山土をまだらに含。炭化物含。
13	黒褐 10YR3/1	粘質シルト	(掘方埋土)地山土をまだらに含。炭化物含。
14	黒褐 10YR3/1	粘質シルト	(掘方埋土)地山ブロック多量含。
15	黄灰 2.5Y5/1	粘質シルト	(掘方埋土)地山ブロック多量含。

№	土　色	土性	備　　考
1	黒褐 10YR2/3	粘質シルト	地山ブロック多量含。
2	黒褐 10YR2/3	粘質シルト	
3	黒褐 10YR2/2	粘質シルト	地山ブロック含。
4	黒褐 10YR3/2	粘質シルト	酸化鉄含。
5	黒褐 2.5Y3/1	粘質シルト	

第345図　SE3164・3167 井戸跡

【ＳＥ3310井戸跡】（第346・347図）

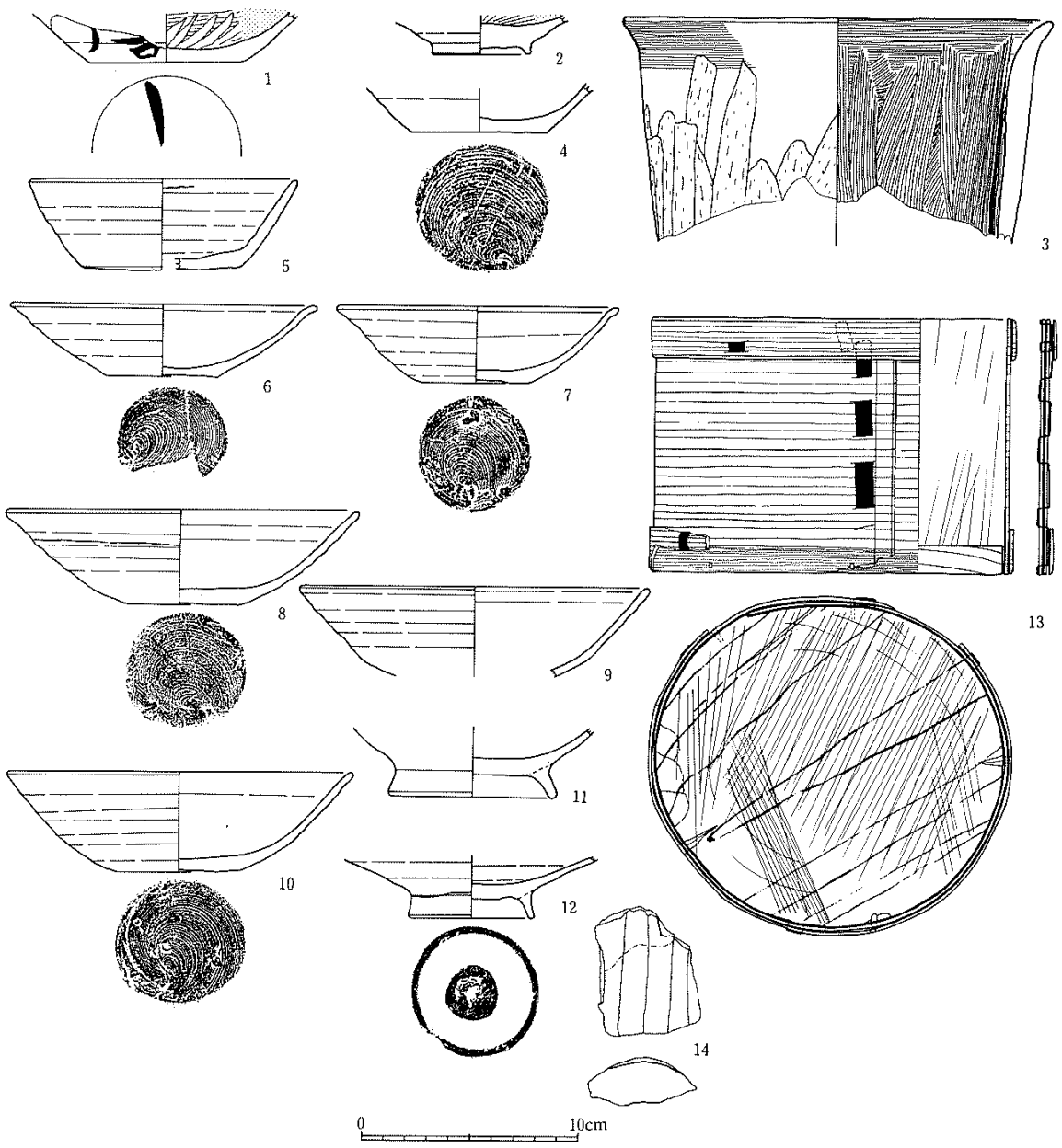
掘方を掘り、井戸側を据えたもので、上部をＳＤ3307溝跡によって壊されている。

〔重複〕（古）ＳＥ3728、ＳＫ3729　（新）ＳＤ3307

〔掘方〕直径2.5m程の円形で、深さは2.4mである。裏込め土は炭化物や灰白色火山灰ブロックを含む黒褐色シルトなどである。

〔井戸側〕下部の高さ1.5m程が残っている。四隅に柱を建て半載した丸太や板材を1面に5本程度、縦に並べ、内法が1辺1.0mの正方形に組んだものである。材は内側に横桟を入れて固定されており、横桟は柱と打抜ほぞで組み合わされている。

〔堆積土〕8層に細分され、1～5層が地山ブロックや炭化物、灰白色火山灰粒などを含む黒褐色粘質



№	種類	層位	特　　徴	口径	底径	器高	残存	備　　考	写真図版	登録№
1	土師器・坏	2層	外：ロクロナデ 底：回転糸切り 内：ミガキ→黒色処理	－	(6.8)	－	一部	墨書		310-12
2	土師器・高台皿	1層	外：ロクロナデ 内：ミガキ→黒色処理	－	4.6	－	一部			310-3
3	土師器・甕	最下層	外：ヨコナデ→ヘラケズリ 内：ヨコナデ→ハケメ	(19.8)	－	－	一部	使用痕あり		310-4
4	須恵器・坏	7層	内外：ロクロナデ（内平滑）底：回転糸切り	－	6.2	－	一部	灰白色 器壁内部黒色		310-2
5	須恵器・坏	最下層	内外：ロクロナデ 底：ヘラ切り→ナデ？	(12.4)	(7.3)	4.2	1/4			310-1
6	赤焼土器・坏	7層	内外：ロクロナデ（内平滑）底：回転糸切り	(14.2)	5.0	3.4	1/4	浅黄色 器壁内部黒色	17-14	310-6
7	赤焼土器・坏	4層	内外：ロクロナデ（内平滑）底：回転糸切り	13.0	5.0	3.6	完形	浅黄色	17-16	310-10
8	赤焼土器・坏	7層	内外：ロクロナデ 底：回転糸切り	16.3	5.3	4.4	5/6	内外面に黒斑 浅黄色	17-15	310-5
9	赤焼土器・坏	3層	内外：ロクロナデ（内平滑）	(16.2)	－	－	1/4	浅黄色		310-7
10	赤焼土器・坏	4層	内外：ロクロナデ（内平滑）底：回転糸切り	16.0	5.8	4.7	3/4	内外面に黒斑	17-17	310-11
11	赤焼土器・高台坏	2層	内外：ロクロナデ（内平滑）底：回転糸切り→ナデ	－	7.8	－	1/3	浅黄色		310-8
12	赤焼土器・高台坏	1層	内外：ロクロナデ（内平滑）底：回転糸切り	－	5.9	－	1/2	浅黄色		310-9
13	釘結合円形曲物	2層		径16.9	－	高11.8		外面に刃物傷 内面に漆付着		310-14
14	羽口	3層		－	－	－	一部			310-13

第346図　SE3310 井戸跡出土遺物

シルトで、人為的に埋め戻されており、6～8層が砂混じりの暗オリーブ灰色シルトで、自然堆積である。

〔出土遺物〕井戸側内堆積土から、土師器、須恵器、赤焼土器の他、灰釉陶器、平瓦、丸瓦、羽口、砥石、曲物、獣骨（シカ）などが出土している。

赤焼土器は坏と高台坏があり、口径は13～16.5㎝程で、内面は平滑に仕上げられている。

【ＳＥ3311井戸跡】（第347図）

中世の屋敷の西側にある、円形の素掘りの井戸である。他遺構との重複はない。

〔規模・堆積土〕直径1.3mで、深さは0.7mである。堆積土は地山ブロックや炭化物を含む黒色やオリーブ黒色のシルトなどで、自然堆積である。

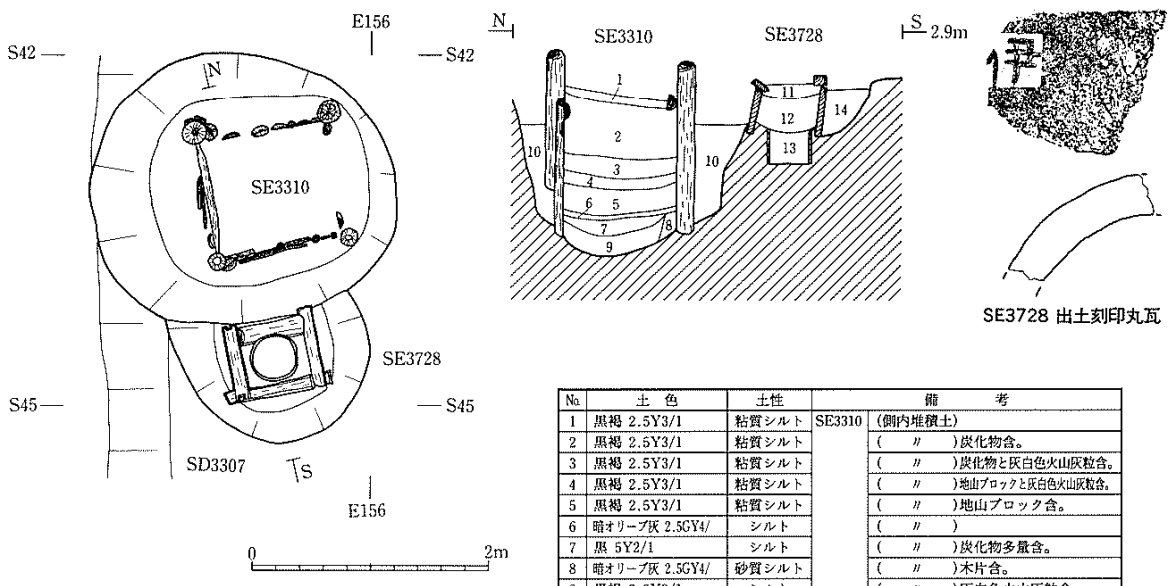
〔出土遺物〕土師器、須恵器がごく少量出土している。

【ＳＥ3728井戸跡】（第347図）

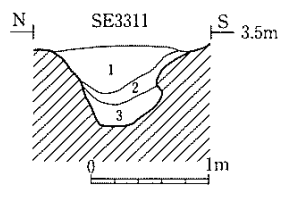
掘方を掘り、井戸側を据えたもので、北側をＳＥ3310井戸跡によって壊されている。

〔重複〕（古）ＳＫ3729　（新）ＳＥ3310、ＳＤ3307

〔掘方〕長径1.5m以上、短径1.5mの楕円形で、深さは1.7mである。裏込め土は地山のブロックを含む



No	土　色	土性		備　　考
1	黒褐 2.5Y3/1	粘質シルト	SE3310	(側内堆積土)
2	黒褐 2.5Y3/1	粘質シルト		(　〃　)炭化物含。
3	黒褐 2.5Y3/1	粘質シルト		(　〃　)炭化物と灰白色火山灰粒含。
4	黒褐 2.5Y3/1	粘質シルト		(　〃　)地山ブロックと灰白色火山灰粒含。
5	黒褐 2.5Y3/1	粘質シルト		(　〃　)地山ブロック含。
6	暗オリーブ灰 2.5GY4/	シルト		(　〃　)
7	黒 5Y2/1	シルト		(　〃　)炭化物多量含。
8	暗オリーブ灰 2.5GY4/	砂質シルト		(　〃　)木片含。
9	黒褐 2.5Y3/1	シルト		(　〃　)灰白色火山灰粒含。
10	黒褐 10YR3/1	シルト		(掘方埋土)炭化物と灰白色火山灰含。
11	黒褐 10YR2/2	粘質シルト	SE3728	(側内堆積土)
12	黒褐 10YR2/2	粘質シルト		(　〃　)地山ブロック含。
13	黒褐 10YR3/1	粘質シルト		(　〃　)
14	黒褐 2.5Y3/1	シルト		(掘方埋土)地山土含。



No	土　色	土性	備　　考
1	黒 5Y2/1	シルト	炭化物と地山土含。
2	灰 7.5Y4/1	シルト	酸化鉄と1層の土を含。
3	オリーブ黒 5Y2/2	シルト	炭化物含。

第347図　SE3310・3311・3728 井戸跡

黒褐色シルトなどである。

〔井戸側〕井戸側と水溜部が残っている。井戸側は1段残存しており、高さ0.5mで、一辺0.4～0.5mの板材を「相欠きほぞ」によって、内法約0.4mの正方形に組んだものである。上部には長方形の板材が、各辺に平らに並べられており、四隅には、ほぞ穴が切られていることから、ここに柱を立てて、上部を組み上げていったものと推測される。水溜は直径0.4mの曲物を据えたもので、深さは0.4mである。

〔堆積土〕地山ブロックを含む黒褐色の粘質シルトで、人為的に埋め戻されている。

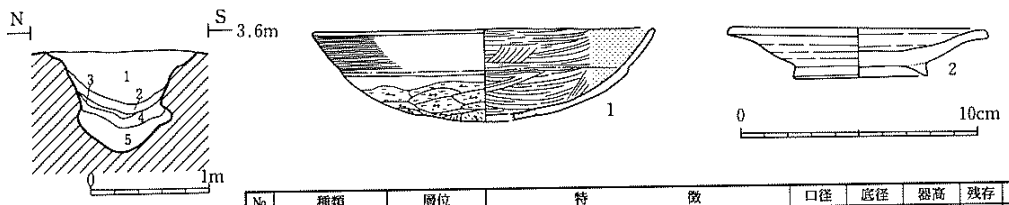
〔出土遺物〕井戸側堆積土や裏込め土から土師器、須恵器、平瓦、丸瓦などが少量出土している。また、井戸側堆積土からは赤焼土器も出土しており、土師器には漆が付着した坏、丸瓦には「伊」の刻印瓦などが含まれている。

【ＳＥ3730井戸跡】（第322・348図）

円形と思われる素掘りの井戸で、西側を土壙や排水溝によって壊されている。

〔規模・堆積土〕直径1.3m以上で、深さは0.9mである。堆積土は上層が地山ブロックや炭化物を含む灰黄褐色シルトで、人為的に埋め戻されており、下層が炭化物を含む黒褐色シルトや砂と褐灰色粘質シルトの互層などで、自然堆積である。

〔出土遺物〕土師器、須恵器、赤焼土器、平瓦、丸瓦などが出土している。



№	種類	層位	特　　徴	口径	底径	器高	残存	登録№
1	土師器・坏	1層	外：手ケズリ→ナデ　内：ミガキ→黒色処理	(14.4)	—	(3.9)	1/4	730-2
2	赤焼土器・高台皿	2層	内外：ロクロナデ　底：ヘラ切り	(10.8)	5.5	2.1	1/4	730-1

№	土　色	土性	備　　考
1	灰黄褐 10YR4/2	シルト	地山ブロックと酸化鉄少量含。
2	黒褐 10YR3/1	シルト	灰との互層。地山小ブロック少量含。
3	黒 10YR1.7/1	炭化物層	
4	黒褐 10YR3/1	粘質シルト	炭化物少量含。地山小ブロック若干含。
5	褐灰 10YR4/1	粘質シルト	ややグライ化した地山土との互層。

第348図　SE3730 井戸跡

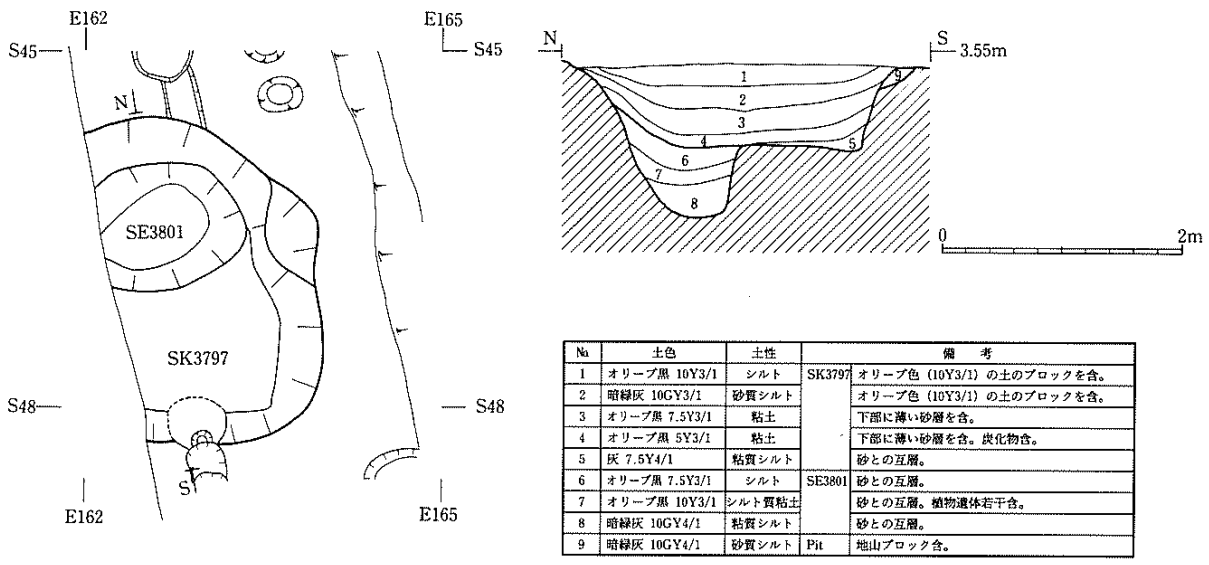
【ＳＥ3801井戸跡】（第308・349図）

楕円形の素掘りの井戸で、上部をＳＫ3797土壙跡によって壊されている。

〔重複〕（新）ＳＫ3797　（不明）ＳＢ3805、ＳＤ3795

〔規模・堆積土〕直径1.2m以上、短辺1.1m、深さ1.3mで、堆積土は砂とオリーブ黒色粘質シルトの互層で、自然堆積である。

〔出土遺物〕遺物は出土していない。



No	土色	土性	備考	
1	オリーブ黒 10Y3/1	シルト	SK3797	オリーブ色（10Y3/1）の土のブロックを含。
2	暗緑灰 10GY3/1	砂質シルト		オリーブ色（10Y3/1）の土のブロックを含。
3	オリーブ黒 7.5Y3/1	粘土		下部に薄い砂層を含。
4	オリーブ黒 5Y3/1	粘土		下部に薄い砂層を含。炭化物含。
5	灰 7.5Y4/1	粘質シルト		砂との互層。
6	オリーブ黒 7.5Y3/1	シルト	SE3801	砂との互層。
7	オリーブ黒 10Y3/1	シルト質粘土		砂との互層。植物遺体若干含。
8	暗緑灰 10GY4/1	粘質シルト		砂との互層。
9	暗緑灰 10GY4/1	砂質シルト	Pit	地山ブロック含。

第349図　SE3801 井戸跡

F　区画施設

材木塀跡と溝跡で、両者が一体となって区画しているものもある。

【ＳＡ3158材木塀跡とＳＤ3014溝跡】（第350図）

両者はおよそ5m程の距離で、平行して東西に延びており、一体となって本地区を区画していると思われる。塀跡と溝跡の位置関係から、区画施設の南辺を検出したものと思われる。東西両側の市調査区でこれらの延長が検出されており（東側では2号溝と5号溝、西側ではＳＤ5633とＳＡ5636）、総長約190mである。方向はＥ－18°－Ｎである。

【ＳＡ3158材木塀跡】（第309・350図）

溝状の掘方を掘り、材木を密接して建て並べたもので、ＳＤ3014の5m程北を、中世の堀などによって分断されながら東西に延びている。方向はＥ－18°－Ｎである。長さは、ＳＤ3123の西側が7.5m以上で、ＳＤ3138の東側は7.8m以上である。

〔重複〕（新）ＳＢ3411、ＳＤ3123・3138・3150　（不明）ＳＢ3847、ＳＤ3064・3170、ＳＫ3166

〔掘方〕上幅0.3～0.5m、下幅0.2～0.4mで、深さは0.1～0.3mである。横断面形は「U」字状である。埋土は地山のブロックを含む褐灰色のシルトなどである。

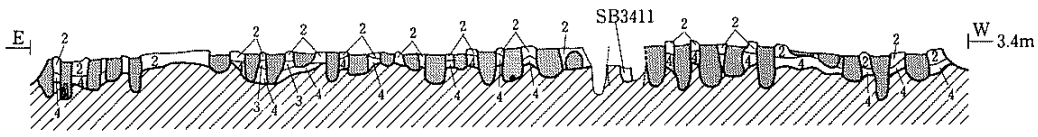
〔材痕跡〕直径15㎝前後の円形で、10～20㎝程の間隔で確認された。堆積土は黒色の粘質シルトまたは褐灰色のシルトである。

〔出土遺物〕掘方埋土から石製模造品（剣形）が出土している。

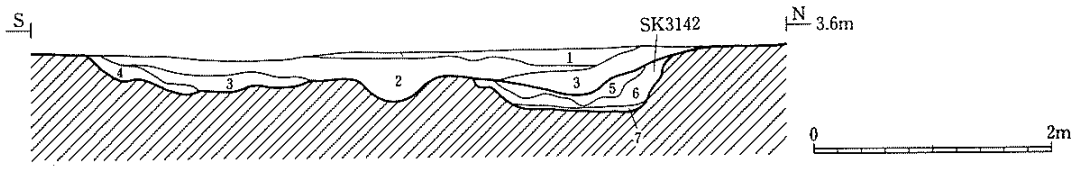
【ＳＤ3014溝跡】（第315・350図）

素掘りの東西溝で、方向はＥ－19°－Ｎであり、長さは15m以上である。

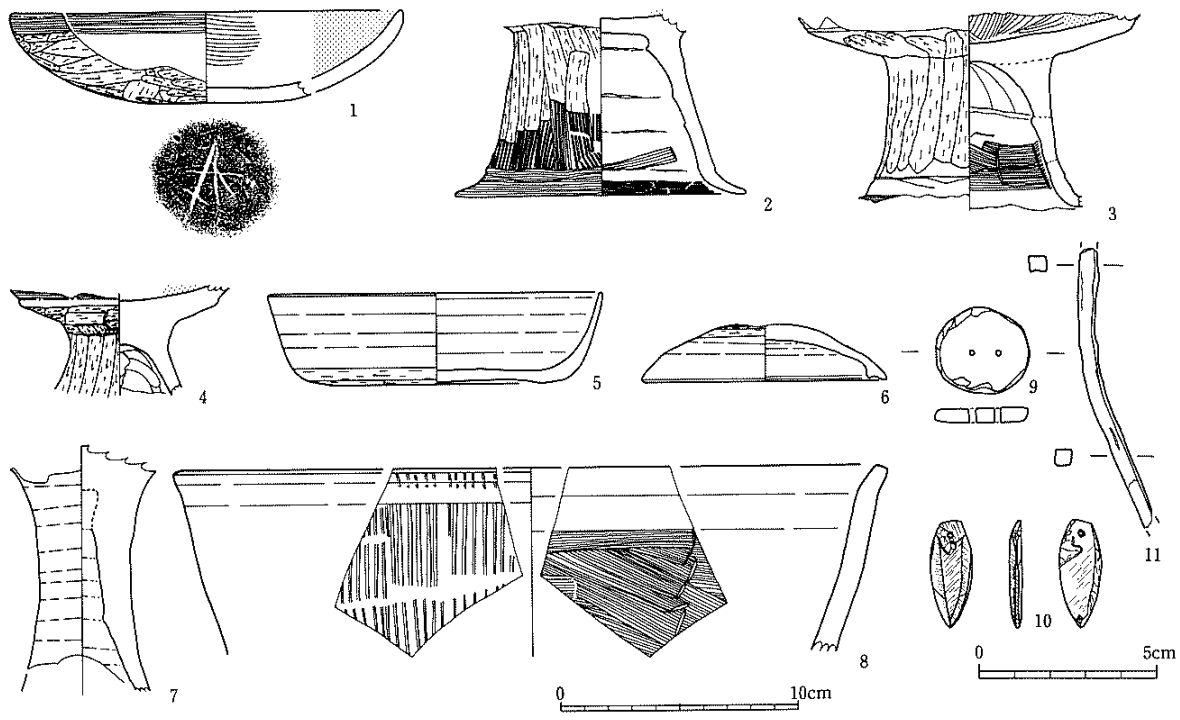
〔重複〕（古）ＳＫ3142　（新）ＳＢ3413・3414・3415・3848、ＳＤ3064・3123・3129・3133・3150、Ｓ



No	土　色	土性	備　　考
1	黒 10YR2/1	粘質シルト	地山ブロック含。
2	褐灰 10YR4/1	シルト	地山ブロック含。
3	黒褐 10YR3/1	シルト	地山ブロック含。
4	褐灰 10YR4/1	シルト	地山ブロック多量含。



No	土色	土性	備　　考	
1	黒褐 10YR3/1	シルト	SD3014	炭化物少量含。
2	褐灰 10YR4/1	シルト		地山ブロック少量含。炭化物若干含。
3	褐灰 10YR4/1	シルト		地山ブロック多量含。
4	褐灰 10YR4/1	シルト		地山ブロック多量含。
5	黒褐 10YR3/1	粘質シルト	SK3142	地山ブロック若干含。
6	褐灰 10YR4/1	粘質シルト		地山砂との互層。
7	黒 2.5Y2/1	粘土		



No	種類	遺構	特　　徴	口径	底径	器高	残存	備　　考	写真図版	登録No
1	土師器・坏	SD3014	外：ヨコナデ→手ケズリ 内：ミガキ→黒色処理	(16.6)	—	3.9	1/3		18-15	014-4
2	土師器・高坏	SD3014	(坏) 内：ミガキ→黒色処理 (脚) 外：ハケメ→ヨコナデ・ヘラケズリ 内：ハケメ・ヘラナデ→黒色処理	—	—	—	一部		18-14	014-7
3	土師器・高坏	SD3014 底面	(坏) 外：ヨコナデ・ヘラケズリ 内：ミガキ→黒色処理 (脚) 外：ヨコナデ・ヘラケズリ 内：ナデ・ヘラナデ	—	—	—	一部			014-8
4	土師器・高坏	SD3014	(坏) 外：ヨコナデ・ヘラケズリ 内：ミガキ→黒色処理 (脚) 外：ヘラケズリ 内：ナデ	—	—	—	一部			014-6
5	須恵器・坏	SD3014	外：ロクロナデ→回ケズリ 底：静止糸切り→回ケズリ 内：ロクロナデ	14.0	8.8	3.9	4/5		18-17	014-1
6	須恵器・蓋	SD3014 底	外：ロクロナデ→回ケズリ 内：ロクロナデ　かえり付	10.4	—	—	与完		18-16	014-3
7	須恵器・高坏	SD3014	内外：ロクロナデ	—	—	—	一部			014-5
8	須恵器・甑？	SD3014	外：タタキ→ロクロナデ 内：ヘラナデ→ロクロナデ	(30.0)	—	—	一部			014-2
9	石製模造品	SD3014	鏡 粘板岩	長2.4	幅2.7	厚0.4	一部		28-3	014-10
10	石製模造品	SA3158	剣 粘板岩	長3.0	幅3.2	厚0.4	一部		28-6	158-1
11	釘	SD3014		—	—	—	一部		27-4	014-9

第350図　SA3158 材木列跡・SD3014 溝跡

K3134・3146・3657

〔規模・堆積土〕上幅4.3～6.0m、下幅3.4～4.0m程で、深さは0.4mである。横断面形は浅い皿状で、中央部はさらに一段「U」字状に掘り込まれている。「U」字状に掘り込まれた部分の上幅は0.3～0.4m、下幅0.2～0.3m程で、深さは0.2mである。堆積土は上下2層に大別され、上層は炭化物を少量含む黒褐色のシルトで、自然堆積であり、下層は地山ブロックを含む褐灰色や黒褐色のシルトで、人為的に埋め戻されている。

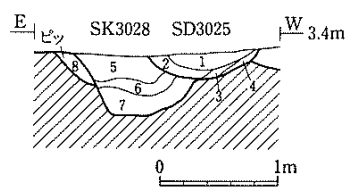
〔出土遺物〕土師器坏・高台坏・高坏・甕、須恵器坏・高台坏・蓋・甕・甑、平瓦、丸瓦、釘、石製模造品（鏡形）などが出土している。土師器は非ロクロ調整で、坏には口縁部と体部との境に段を有するものと無段のものとがある。後者がやや多く、これらの中には内外両面を黒色処理したものも含まれている。須恵器は土師器に比べて、量は少ない。坏は切り離し後、回転ヘラケズリ調整が施されるものが主である。

また、底面直上からは、ツマミを欠くものの、径10.4㎝で、カエリの付く須恵器蓋や、坏部有段の土師器高坏が出土している。

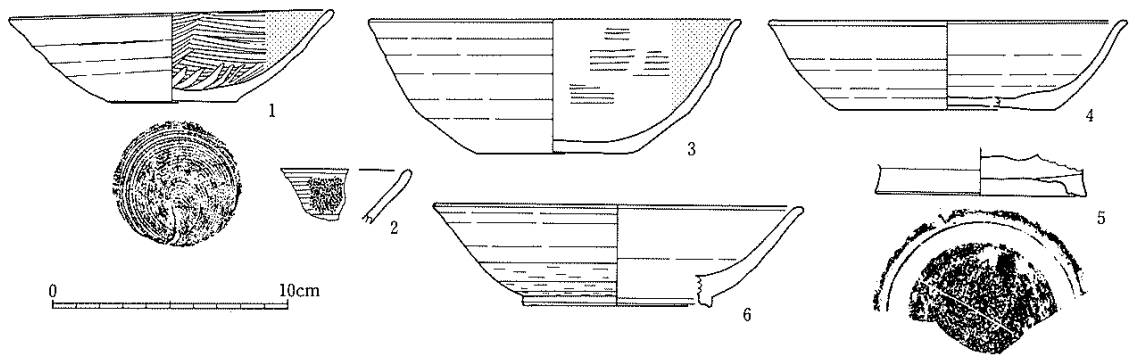
【ＳＤ3025溝跡】（第322・351図）

調査区南東部をほぼ直線的に延びる素掘りの南北溝である。調査区南際付近で若干蛇行したあと、さらに調査区外に延びている。方向はN－6°－Eで、長さは24m以上である。

この溝は、方向がＳＸ3900道路跡と直交することや、直線的に延びること、同時期に存在していたと考えられることから、道路で区切られた区画をさらに小区画に分割する区画溝であると考えられる。



No	土色	土性	備考	
1	褐灰 10YR4/1	シルト	SD3025	炭化物含。
2	黒褐 10YR3/1	シルト		炭化物含。地山ブロック含。
3	黒 10YR2/1	粘土		
4	黒 10YR2/1	粘土		地山ブロック多量含。
5	黒褐 10YR2/2	シルト	SK3028	炭化物含。地山小ブロック含。
6	黒 10YR2/1	粘質シルト		炭化物含。地山ブロック含。
7	黒 10YR2/1	粘質シルト		地山ブロック多量含。
8	褐灰 10YR4/1	粘質シルト	Pit	地山ブロック含。



No	種類	層位	特徴	口径	底径	器高	残存	備考	写真図版	登録No
1	土師器・坏	－	外：ロクロナデ 底：回転糸切 内：ミガキ→黒色処理	13.9	5.6	3.9	完形		18-18	025-3
2	土師器・坏	－	外：ロクロナデ 内：ミガキ→黒色処理	－	－	－	一部	内面に漆付着		025-6
3	土師器・坏	－	外：ロクロナデ→手ケズリ 底：回転糸切 内：ミガキ→黒色処理	(15.8)	(6.2)	5.7	1/4	海綿骨針多量	18-19	025-2
4	須恵器・坏	－	内外：ロクロナデ 底：ヘラ切り	(15.2)	(9.2)	(3.8)	1/3			025-1
5	須恵器・瓶	－	内外：ロクロナデ	－	9.2	－	一部	ヘラ書「一」大戸		025-4
6	灰釉陶器・椀	－	外：ロクロナデ→回ケズリ 内：ロクロナデ 角高台	(15.8)	(8.0)	4.3	1/8		26-1	025-5

第351図　SD3025 溝跡

なお、3m程東側にあるＳＤ3026は調査区南際からほぼ並行して延びており、この溝と同時期に機能していた可能性がある。

〔重複〕（古）ＳＢ3829、ＳＸ3024、ＳＤ3034、ＳＥ3038、ＳＫ3028・3044・3144・3243・3624　（不明）ＳＢ3830

〔規模・埋土〕上幅0.8～1.0m、下幅0.4～0.6mで、深さは0.4mである。横断面形は「U」字状である。埋土は地山のブロックや炭化物を含む黒褐色のシルトなどである。

〔出土遺物〕土師器、須恵器、灰釉陶器、平瓦、丸瓦、円面硯、砥石などが出土している。土師器が最も多く、坏はロクロ調整で、回転糸切り無調整のものが多い。

【ＳＤ3026溝跡】（第322・352～354図）

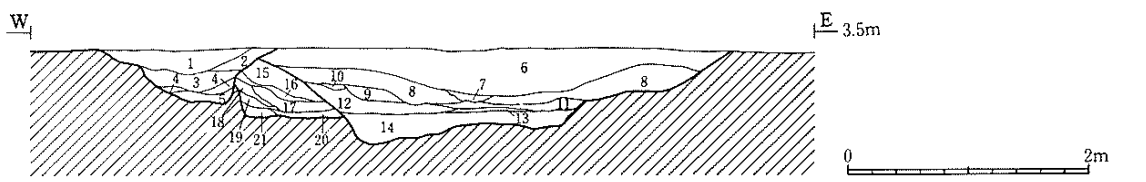
調査区南東部を屈曲しながら延びる素掘りの南北溝である。調査区の南からＳＤ3025の3m程東側をほぼ並行して北に延び、ＳＤ3025が途切れる少し手前でほぼ直角に東に折れ曲がり、10m程延びて、北東方向に再び屈曲して調査区外に延びている。方向は南半で北に延びる部分がN－5°－E、東に折れた部分がE-3°－N、北東方向に抜ける部分がN－14°－Eで、長さは35m以上である。

この溝は南半がＳＤ3025溝跡と近い位置で並行することから、ＳＤ3025溝跡と同様に道路で区切られた区画をさらに小区画に分割する区画溝であると思われる。また、ＳＤ3025溝跡と平行することから、ＳＤ3025溝跡と同時期に機能していた可能性がある。

〔重複〕（古）ＳＢ3425・3833、ＳＤ3033・3049・3764、ＳＥ3038、ＳＫ3243・3727　（不明）ＳＢ3831

〔規模・堆積土〕上幅0.5～1.4m、下幅0.3～1.0mで、深さは0.4mである。横断面形は逆台形状である。堆積土は炭化物を含む黒褐色シルトなどで、調査区東際に近い部分の断面観察では最上部に灰白色火山灰の堆積がみられた。

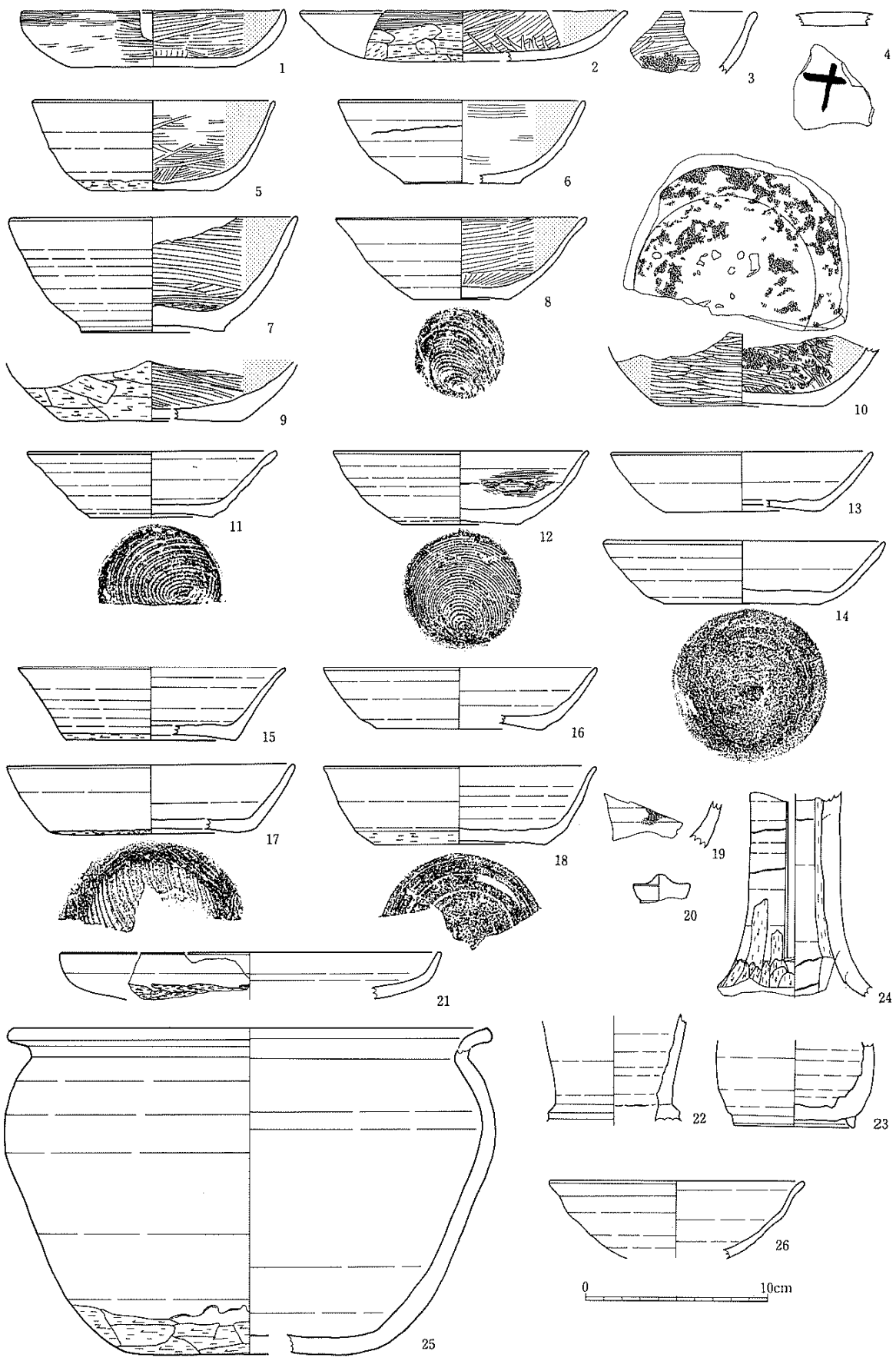
〔出土遺物〕土師器、須恵器、赤焼土器、灰釉陶器、平瓦、丸瓦、風字硯、転用硯、鉄滓、砥石などが出土している。赤焼土器は1層にのみごく少量認められる。土師器や須恵器などは比較的、多量に出土しているが非ロクロ調整の土師器坏や、ヘラケズリによる再調整が施された須恵器坏などを多く含んでおり、土器全体の一括性は極めて薄いといえよう。



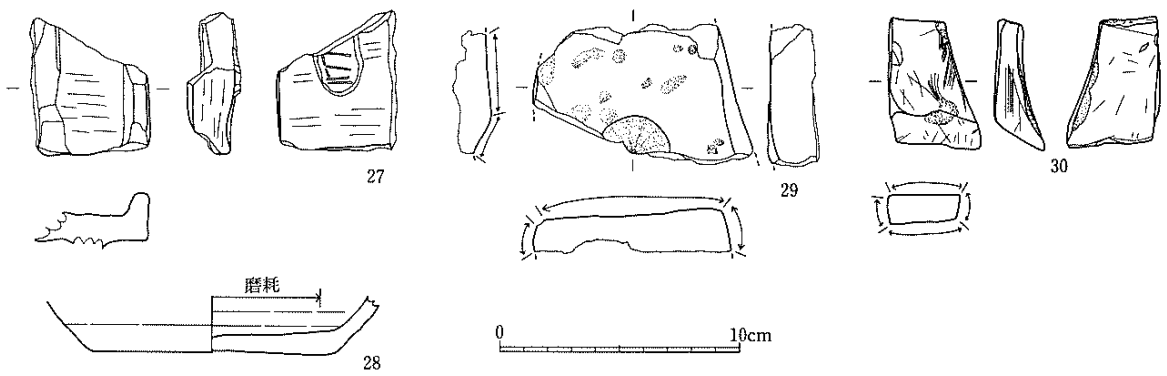
No.	土色	土性	備考	
1	黒褐 10YR2/2	シルト	SD3026	炭化物と焼土粒含。
2	黒褐 10YR2/2	シルト		炭化物と焼土粒若干含。
3	黒褐 10YR3/1	シルト		炭化物粒多量含。地山粒少量含。
4	黒褐 10YR3/1	シルト		炭化物粒若干含。地山粒少量含。
5	黄褐 2.5Y5/3	砂		4層の土との互層。
6	黒 2.5Y2/1	シルト	SK3727	炭化物多量含。地山粒少量含。
7	黒 2.5Y2/1	粘質シルト		炭化物と地山粒少量含。
8	黒褐 2.5Y3/1	シルト		炭化物少量含。
9	黒褐 2.5Y3/1	粘質シルト		炭化物粒と地山粒少量含。
10	黒褐 2.5Y3/1	粘質シルト		地山ブロック多量含。
11	黒褐 2.5Y3/2	砂質シルト		地山ブロック多量含。

No.	土色	土性	備考	
12	黒褐 2.5Y3/1	シルト	SK3727	炭化物少量含。
13	黒褐 2.5Y3/1	粘質シルト		炭化物少量含。
14	黄灰 2.5Y4/1	砂質シルト		地山ブロック多量含。
15	黒褐 2.5Y3/1	シルト	SD3764	炭化物粒と地山粒多量含。
16	黄灰 2.5Y4/3	砂		1層の土と炭化物少量含。
17	黒 2.5Y2/1	粘質シルト		炭化物粒多量含。
18	黒褐 2.5Y3/1	シルト		炭化物粒と地山粒多量含。
19	黄灰 2.5Y4/3	砂		1層の土と炭化物少量含。
20	黒褐 2.5Y3/1	粘土		
21	黄灰 2.5Y4/3	砂		1層の土と炭化物少量含。

第352図　SD3026・3764 溝跡、SK3727 土壙跡断面図



第353図　SD3026 溝跡出土遺物(1)



No.	種類	層位	特　　徴	口径	底径	器高	残存	備　　考	写真図版	登録No.
1	土師器・坏	－	外：ミガキ 底：手ケズリ 内：ミガキ→黒色処理	(14.6)	(9.4)	3.1	1/5	海綿骨針	19-1	026-18
2	土師器・坏	1層	外：ヨコナデ→手ケズリ 底：手ケズリ 内：ミガキ→黒色処理	(18.0)	2.8	－	一部			026-17
3	土師器・坏	－	外：ロクロナデ 内：ミガキ→黒色処理	－	－	－	一部	内面に漆付着		026-30
4	土師器・坏	1層	外：手ケズリ 内：ミガキ→黒色処理	－	－	－	一部	墨書「＋」		026-23
5	土師器・坏	1層	外：ロクロナデ→手ケズリ 底：手ケズリ 内：ミガキ→黒色処理	(13.4)	7.0	5.0	2/3		19-3	026-21
6	土師器・坏	1層	外：ロクロナデ 底：回転糸切り 内：ミガキ→黒色処理	(13.6)	(6.4)	4.6	1/2			026-16
7	土師器・坏	1層	外：ロクロナデ 底：回転糸切り→手ケズリ 内：ミガキ→黒・処	(15.8)	(7.8)	6.4	1/2		19-4	026-22
8	土師器・坏	1層	外：ロクロナデ 底：回転糸切り 内：ミガキ→黒色処理	(13.8)	5.2	4.5	2/3		19-2	026-15
9	土師器・椀？	－	外：手ケズリ 底：手ケズリ 内：ミガキ→黒色処理	－	(10.0)	－	一部			026-19
10	土師器・椀	1層	内外：ミガキ→黒色処理 底：手ケズリ→ミガキ→黒色処理	－	(9.0)	3.2	一部	内面に漆付着 焼けはじけ		026-20
11	須恵器・坏	1層	内外：ロクロナデ 底：回転糸切り	(13.8)	(6.8)	3.7	3/5			026-5
12	須恵器・坏	1層	内外：ロクロナデ 底：回転糸切り	(14.0)	6.4	4.1	3/5		19-7	026-2
13	須恵器・坏	1層	内外：ロクロナデ 底：ヘラ切り	(14.4)	(8.4)	3.3	1/3	海綿骨針		026-4
14	須恵器・坏	1層	内外：ロクロナデ→回ケズリ 底：回ケズリ 内：ロクロナデ	(14.6)	(9.4)	4.1	1/3		19-5	026-7
15	須恵器・坏	1層	内外：ロクロナデ 底：ヘラ切り	(15.0)	(9.2)	3.4	1/5	海綿骨針		026-3
16	須恵器・坏	1層	内外：ロクロナデ 底：ヘラ切り	(15.4)	7.8	3.5	1/2			026-1
17	須恵器・坏	1層	内外：ロクロナデ 底：静止糸切りり→手ケズリ	(15.9)	(11.4)	3.8	1/4	灰白色		026-8
18	須恵器・坏	1層	外：ロクロナデ→回ケズリ 底：回ケズリ 内：ロクロナデ	(15.0)	(9.4)	4.3	1/3			026-6
19	須恵器・坏	－	外：ロクロナデ→手ケズリ 内：ロクロナデ	－	－	－	一部	破損部漆付着		026-31
20	須恵器・蓋	1層		－	－	－	一部			026-11
21	須恵器・盤	－	内外：ロクロナデ 底：手ケズリ	(21.0)	－	－	一部			026-10
22	須恵器・高坏脚	1層	外：ロクロナデ→ヘラケズリ 内：ロクロナデ	－	－	－	一部			026-12
23	須恵器・長頸瓶	1層	内外：ロクロナデ	－	－	－	一部	大戸		026-25
24	須恵器・壺	1層	内外：ロクロナデ 底：回転糸切り→ロクロナデ	－	6.6	－	一部			026-24
25	土師器・鉢	－	外：ロクロナデ→手ケズリ 底：手ケズリ 内：ロクロナデ	(26.0)	(14.0)	(18.1)	1/3		19-6	026-14
26	赤焼土器・坏	1層	内外：ロクロナデ	(14.0)	－	－	一部	浅黄橙色		026-13
27	風字硯	－		－	－	－	一部		26-12	026-29
28	転用硯	1層	内外：ロクロナデ 底：ヘラ切り→手ケズリ	－	10.0	－	一部	須恵器坏を転用		026-28
29	砥石	－	砂岩	長5.1	幅8.4	厚1.8	一部			026-26
30	砥石	1層	凝灰岩	長5.2	幅3.0	厚1.2	一部		28-32	026-27

第354図　SD3026 溝跡出土遺物(2)

【ＳＤ3064溝跡】（第311・315・328・355図）

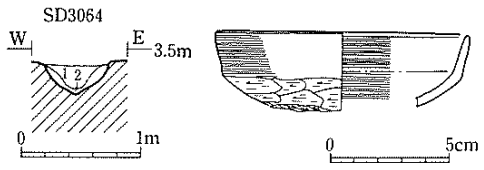
調査区南半を緩く蛇行しながらもほぼ直線的に延びる素掘りの南北溝で、方向はN－2°－EからN－12°－Wである。南端はＳＸ3029のやや南側であり、北端はＳＤ3187付近で、総長は約67mである。

この溝は、方角が東西道路とほぼ直交し、直線約に延びることから、道路による区画をさらに小区画に分割する区画溝であると思われる。

〔重複〕（古）ＳＢ3420・3421・3443・3492・3848、ＳＤ3014・3495・3510　（新）ＳＢ3417・3446・3826・3827・3856、ＳＸ3029、ＳＤ3077・3096・3097・3140・3150、ＳＸ3082・3128・3592、ＳＦ3909（不明）ＳＢ3441、ＳＤ3031・3187

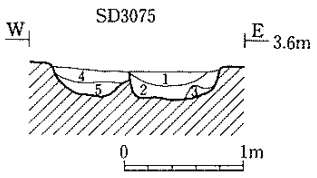
〔規模・堆積土〕上幅0.3～0.7m、下幅0.1～0.6mで、深さは0.3mである。横断面形は「U」字状である。堆積土は地山のブロックや酸化鉄を含む黒褐色のシルトである。

〔出土遺物〕土師器、須恵器、丸瓦が少量出土している。土師器坏には口縁部と体部との境に稜を持ち、内面がナデ調整された関東系土器が含まれている。

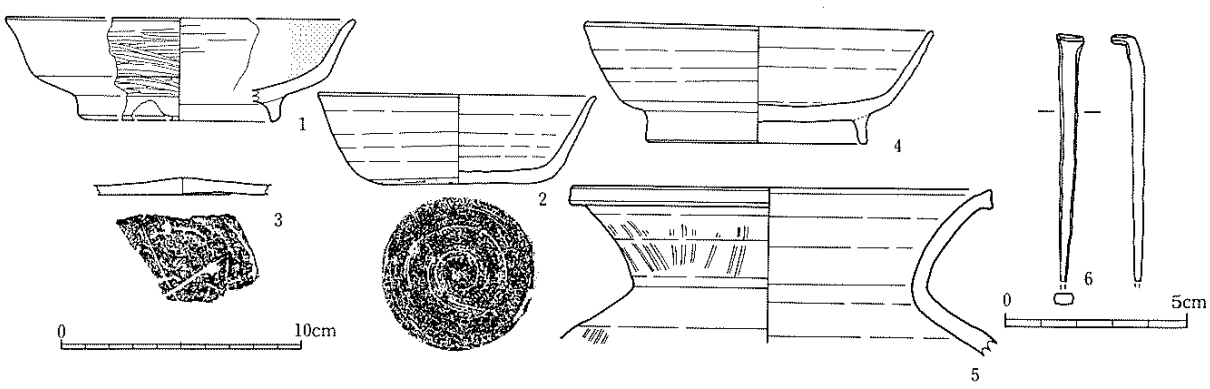


No	土　色	土性	備　　考
1	黒褐 10YR2/3	シルト	地山ブロックと炭化物含。
2	黒褐 10YR2/3	シルト	地山ブロックと炭化物多量含。

No	種類	遺構	特　　徴	口径	底径	器高	残存	写真図版	登録No.
1	土師器・坏	SD3064	外：ヨコナデ→手ケズリ　内：ヨコナデ	(10.6)	－	－	1/4	21	092-1



No	土　色	土性	備　　考	
1	黒褐 10YR3/2	シルト	SD3075	炭化物・酸化鉄含。
2	黒褐 10YR3/2	シルト		地山ブロックと酸化鉄含。
3	黒褐 10YR3/2	シルト		地山ブロック多量含。酸化鉄含。
4	暗褐 10YR3/3	シルト	SD	炭化物・酸化鉄含。
5	暗褐 10YR3/3	シルト		地山ブロックと酸化鉄含。



No	種類	層位	特　　徴	口径	底径	器高	残存	備　　考	写真図版	登録No.
1	土師器・高台坏	2層	外：ミガキ　内：ミガキ→黒色処理	(14.6)	(7.6)	4.3	一部			075-4
2	須恵器・坏	1層	内外：ロクロナデ　底：回ケズリ	11.6	6.4	3.8	≒完		19-8	075-1
3	須恵器・坏	1層	底部：ヘラ切り　内：ロクロナデ	－	－	－	一部	ヘラ書「×」		075-5
4	須恵器・高台坏	1層	内外：ロクロナデ　底：回ケズリ→ロクロナデ	14.6	9.3	5.0	5/6		19-9	075-2
5	須恵器・甕？	1層	外：タタキメ→ロクロナデ　内：ロクロナデ	18.4	－	－	一部			075-3
6	釘	1層		－	－	－	一部		27-5	075-6

第355図　SD3064・3075 溝跡

【ＳＤ3075 溝跡】（第 315・320・355 図）

ＳＤ3123 溝跡も南の屈曲点から南へ延びる素掘りの南北溝である。方向はN－14°－Wで、長さは22m以上である。

またこの溝は、直接接続はしないが、北側にあるＳＤ3014 と方向がほぼ直行することから、ＳＤ3014 に規制された区画の溝である可能性がある。

なお、2.5m程東側にあるＳＢ3421と方向が一致することから、両者は同時期に存在した可能性が考えられる。

〔重複〕（古）ＳＢ3821、ＳＫ3084　（新）ＳＢ3423・3445、ＳＤ3077・3087・3097・3123

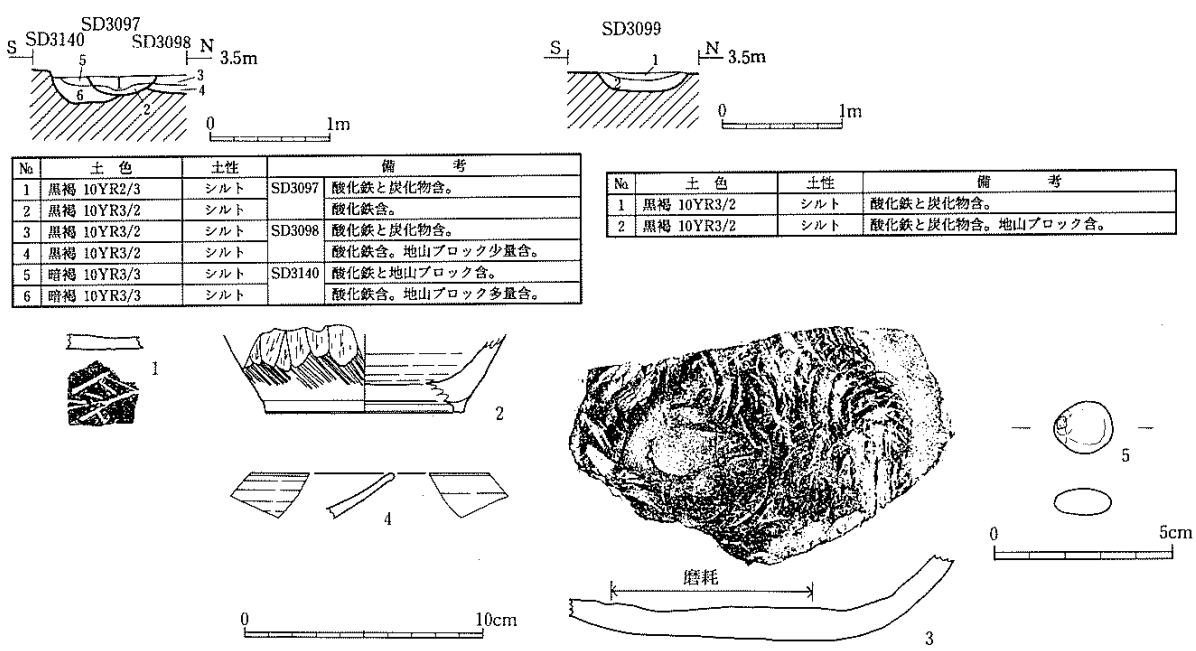
〔規模・堆積土〕上幅0.5～1.2m、下幅0.3～0.9mで、深さは0.3mである。横断面形は逆台形状である。堆積土は酸化鉄や炭化物を含む黒褐色のシルトなどである。

〔出土遺物〕土師器、須恵器、平瓦、丸瓦、釘などが出土している。土師器で図示できたものはロクロ調整の高台坏1点のみだが、破片をみると坏・甕ともに非ロクロ調整が多く、ロクロ調整のものは極めて少ない。坏では非ロクロ調整で口縁部と体部との境に段を持たず、平底のものが多い。須恵器坏は底部に手持ちヘラケズリ調整や回転ヘラケズリ調整されるものが多い。

【ＳＤ3097溝跡】（第315・356図）

ＳＤ3014の南側を、調査区の西から東までやや北に膨らみながら横断する素堀りの東西溝である。東西とも調査区外に延びている。方向は、調査区西際からＳＤ3123溝跡の南の屈曲点付近までがＥ－9°－Ｎ、ＳＫ3108付近までがＥ－0°－Ｎ・Ｓ、調査区東際までがＥ－13°－Ｓである。長さは36m以上である。

なお、西側の市調査区で検出された西4道路東側溝に取り付く溝（ＳＤ5632）は、方向から見てこの溝と一連となる可能性がある。また、この場合、この溝は道路による区画をさらに小区画に分割す



No	土色	土性	備考	
1	黒褐 10YR2/3	シルト	SD3097	酸化鉄と炭化物含。
2	黒褐 10YR3/2	シルト		酸化鉄含。
3	黒褐 10YR3/2	シルト	SD3098	酸化鉄と炭化物含。
4	黒褐 10YR3/2	シルト		酸化鉄含。地山ブロック少量含。
5	暗褐 10YR3/3	シルト	SD3140	酸化鉄と地山ブロック含。
6	暗褐 10YR3/3	シルト		酸化鉄含。地山ブロック多量含。

No	土色	土性	備考
1	黒褐 10YR3/2	シルト	酸化鉄と炭化物含。
2	黒褐 10YR3/2	シルト	酸化鉄と炭化物含。地山ブロック含。

No	種類	層位	特徴	口径	底径	器高	残存	備考	写真図版	登録No
1	土師器・坏？	－	内：ミガキ→黒色処理	－	－	－	一部	ヘラ書「■」		097-2
2	須恵器・瓶	－	外：タタキ→手ケズリ・ナデ　底部：ロクロナデ　内：ロクロナデ(コテ)	－	(8.4)	－	一部			097-1
3	転用硯	－		－	－	－	一部	須恵器・甕		097-4
4	灰釉陶器・皿	－		－	－	－	一部	刷毛塗り		097-3
5	碁石	1層		長1.6	－	厚0.8	一部		28-29	097-6

第356図　SD3097・3099・3140 溝跡

る区画溝であると思われる。

〔重複〕（古）ＳＢ3416・3417、ＳＤ3064・3075・3098・3123・3133・3140、ＳＫ3108・3121・3122・3124、ＳＸ3114　（新）ＳＤ3055　（不明）ＳＫ3111

〔規模・堆積土〕上幅0.5～0.8m、下幅0.2～0.6m程で、深さは0.2mである。横断面形は「U」字状である。堆積土は酸化鉄と炭化物を含む黒褐色や褐灰色のシルトで、自然堆積である。

〔出土遺物〕土師器、須恵器の他、1層から灰釉陶器、平瓦、丸瓦、転用硯、棒状鉄製品、碁石、2層から丸瓦などが出土している。土器類は主に1層から出土しており、土師器が圧倒的に多い。土師器坏は、回転糸切り無調整が主で、ヘラ書土器も含まれている。

【ＳＤ3099溝跡】（第315・356図）

ＳＤ3097の3m程南側を、ＳＫ3108の南から東に延びる素掘りの東西溝で、さらに調査区外へ延びている。方向はＥ－14°－Ｓで、長さは12m以上である。

この溝はＳＤ3097に近接してほぼ平行に延びており、ＳＤ3097と同様に、道路で仕切られた区画をさらに小区画に分割する区画溝の可能性が考えられる。

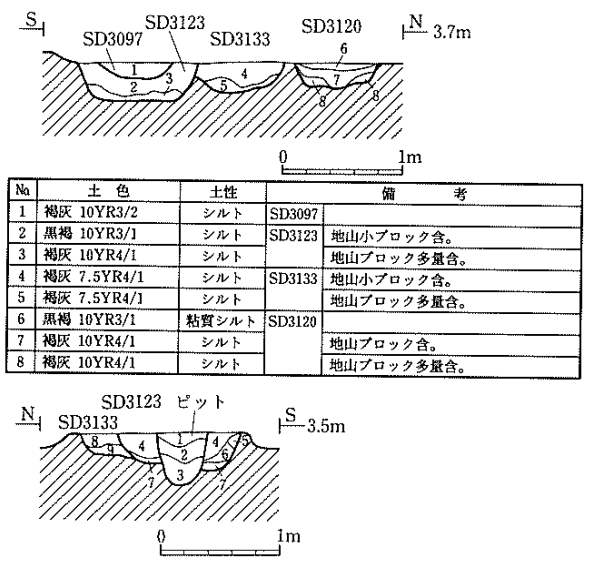
〔重複〕（古）ＳＢ3857、ＳＤ3105・3125・3251・3259、ＳＫ3116・3253・3255　（新）ＳＤ3055・3115

〔規模・堆積土〕上幅0.8～1.1m、下幅0.4～0.7mで、深さは0.2mである。横断面形は逆台形状である。堆積土は地山ブロックと炭化物、及び酸化鉄を含む黒褐色のシルトである。

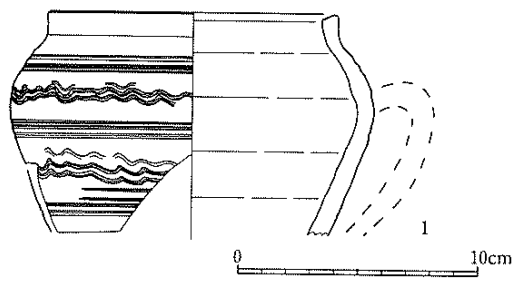
〔出土遺物〕土師器、須恵器、灰釉陶器、丸瓦などが出土している。

【ＳＤ3120溝跡】（第315・357図）

ＳＤ3097の2m程北側を、やや北に膨らみながら延びる素堀りの東西溝である。調査区西際からＳＤ3123・3133による断絶を挟んでＳＫ3121まで延びている。方向は、ＳＤ3123・3133の西側がＥ－11°－Ｎ、東側がＥ－3°－Ｓで、長さは16m以上である。



№	土色	土性	備考	
1	褐灰 10YR3/2	シルト	SD3097	
2	黒褐 10YR3/1	シルト	SD3123	地山小ブロック含。
3	褐灰 10YR4/1	シルト		地山ブロック多量含。
4	褐灰 7.5YR4/1	シルト	SD3133	地山小ブロック含。
5	褐灰 7.5YR4/1	シルト		地山ブロック多量含。
6	黒褐 10YR3/1	粘質シルト	SD3120	
7	褐灰 10YR4/1	シルト		地山ブロック含。
8	褐灰 10YR4/1	シルト		地山ブロック多量含。

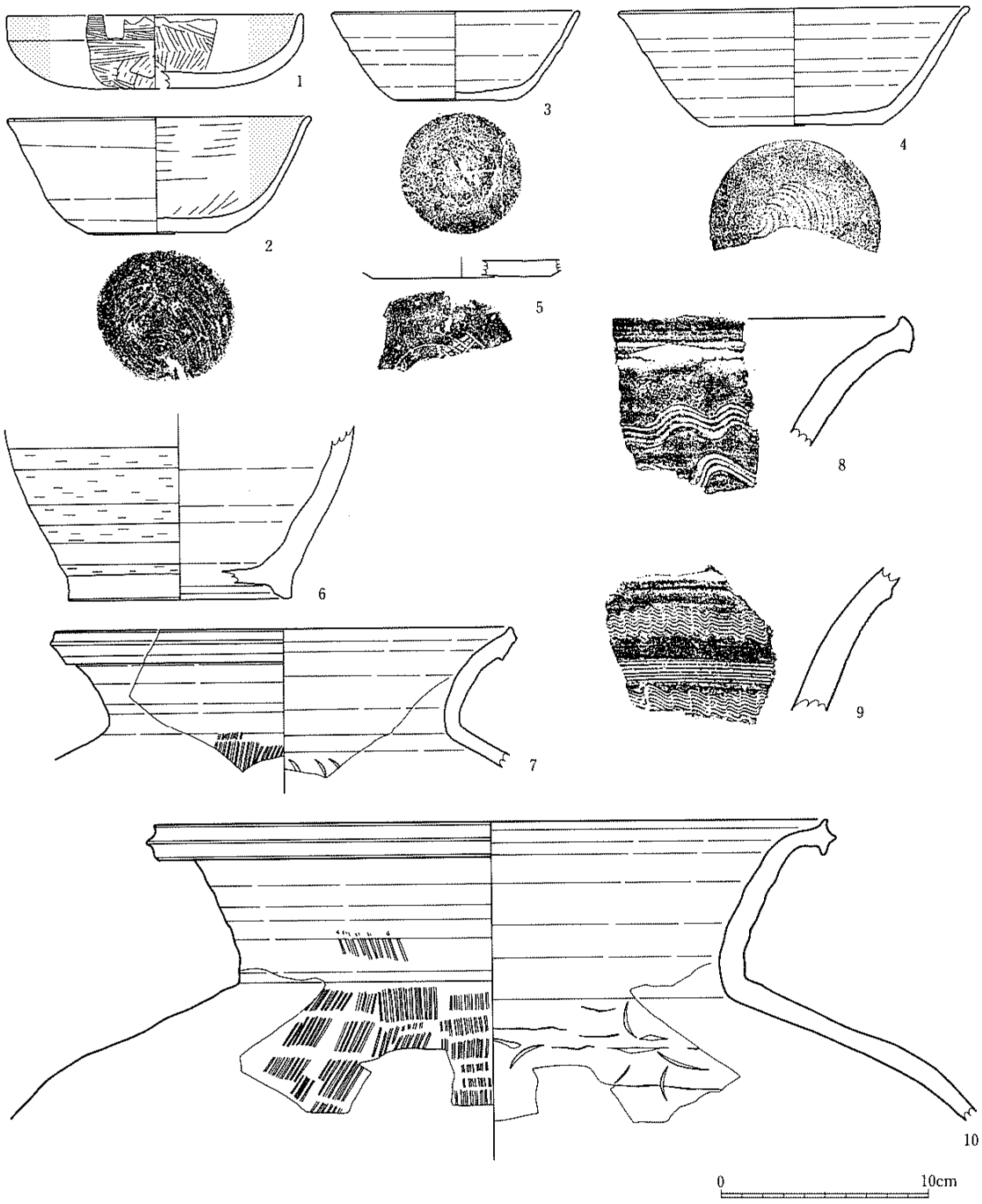


№	種類	層位	特徴
1	須恵器・把手付椀	－	外：ロクロナデ→櫛歯波状紋　内：ロクロナデ。軟質

口径	底径	器高	残存	写真図版	登録№
(12.2)	－	－	1/3	19-10	120-1

№	土色	土性	備考	
1	灰白 2.5Y7/1	火山灰	pit	
2	黒褐 10YR3/1	シルト		灰白色火山灰粒含。
3	褐灰 10YR4/1	シルト		
4	褐灰 10YR4/1	シルト	SD3123	炭化物と地山ブロック少量含。
5	褐灰 10YR4/1	シルト		地山ブロック多量含。
6	褐灰 10YR4/1	シルト	SD3123	炭化物と地山ブロック含。
7	褐灰 10YR4/1	シルト		炭化物と地山ブロック多量含。
8	黒褐 10YR3/1	粘質シルト	SD3133	
9	褐灰 10YR4/1	シルト		地山ブロック多量含。

第357図　SD3120・3123・3133 溝跡



No	種類	層位	特　　徴	口径	底径	器高	残存	備　　考	写真図版	登録No.
1	土師器・坏	—	外：手ケズリ→ミガキ→黒色処理 底：手ケズリ 内：ミガキ→黒色処理	(14.4)	—	3.6	1/4	海綿骨針		123-9
2	土師器・坏	—	外：ロクロナデ 底：回転糸切り 内：ミガキ→黒色処理	14.6	6.8	5.7	2/3		19-12	123-8
3	須恵器・坏	—	内外：ロクロナデ　底：ヘラ切り	12.0	5.6	4.4	1/2		19-13	123-1
4	須恵器・椀	—	内外：ロクロナデ 底：回転糸切り→手ケズリ	(17.0)	8.4	5.7	1/2		19-14	123-2
5	須恵器・坏	—	底：ヘラ切り→ナデ 内：ロクロナデ	—	(8.4)	—	一部	ヘラ書「卌」		123-10
6	須恵器・瓶	—	外：ロクロナデ→回ケズリ 内：ロクロナデ	—	(10.8)	—	一部			123-7
7	須恵器・甕	—	外：ロクロナデ→タタキ 内：オサエ→ロクロナデ	22.0	—	—	一部			123-4
8	須恵器・甕	—	外：ロクロナデ→櫛描波状文 内：ロクロナデ	—	—	—	一部			123-5
9	須恵器・甕	—	外：ロクロナデ→櫛描波状文 内：ロクロナデ	—	—	—	一部			123-6
10	須恵器・甕	—	外：ロクロナデ→タタキ 内：ロクロナデ→オサエ	(32.6)	—	—	一部		19-11	123-3

第358図　SD3123 溝跡出土遺物(1)

ＳＤ3097に近接してほぼ平行に延びていることからみて、ＳＤ3097と同様に、道路による区画をさらに小区画に分割する区画溝と思われる。

〔重複〕（古）ＳＢ3416　（新）ＳＢ3415、ＳＤ3123・3133、ＳＫ3121

〔規模・堆積土〕上幅0.5～0.8m、下幅0.3～0.6mで、深さは0.2mである。横断面形は逆台形状である。堆積土は褐灰色シルトなどで、自然堆積である。

〔出土遺物〕須恵器の把手付椀の他、土師器、須恵器がごく少量出土したのみである。

【ＳＤ3123溝跡】（第308・309・315・357～359図）

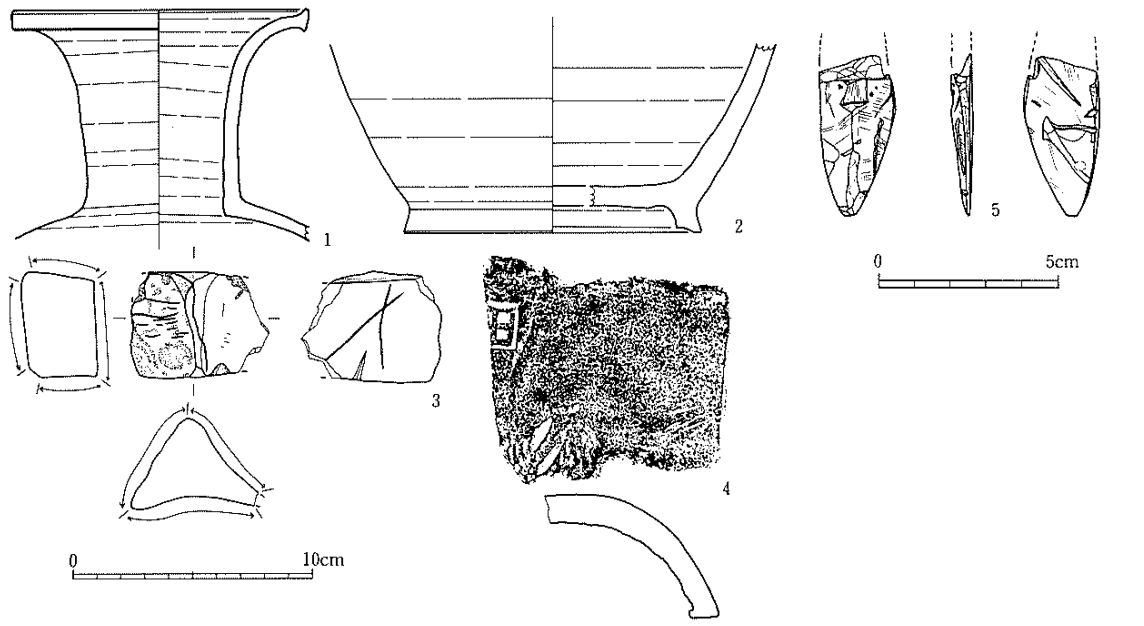
調査区の中央部を調査区西際から2ヶ所で屈曲し、クランク状に延びる素掘りの溝跡である。調査区西際からＳＤ3097の北側にそって東に延びたあと、方向をほぼ真北に変えてＳＤ3014を跨ぎ、再び方向を東に変えてＳＤ3138まで延びている。方向は、調査区西際から最初の屈曲点までがＥ－17°－N、次の屈曲点までがN－2°－W、最後のＳＤ3138までがＥ－17°－Ｓである。長さは44m以上である。

この溝は、方向が道路跡とほぼ一致し、ＳＤ3097などの他の区画溝とほぼ同位置にあることから、道路による区画をさらに小区画に分割する区画溝の可能性が考えられる。

〔重複〕（古）ＳＡ3158、ＳＢ3416・3815・3863、ＳＤ3014・3075・3120・3133・3174、ＳＫ3173　（新）ＳＤ3097・3138・3150・3171

〔規模・堆積土〕上幅0.5～1.3m、下幅0.2～0.9mで、深さは0.4mである。横断面形は逆台形状である。堆積土は炭化物と地山の小ブロックを含む黒褐色や褐灰色のシルトで、自然堆積である。

〔出土遺物〕土師器、須恵器、灰釉陶器、平瓦、丸瓦、石製模造品（剣形）、砥石、ウマ骨などが出土し



No	種類	層位	特　　徴	口径	底径	器高	残存	備　　考	写真図版	登録No
1	灰釉陶器・長頸瓶	－	内外：ロクロナデ	(12.4)	－	－	一部		26-4	123-12
2	須恵器・瓶	－	内外：ロクロナデ 底：回ケズリ→ロクロナデ	－	(12.4)	－	一部	自然釉		123-11
3	砥石	－		長4.4	幅5.3	厚3.0	一部			123-13
4	丸瓦	－	凹面：布目 凸面：縄叩き→ロクロナデ	－	－	－	一部	刻印「田」A		123-14
5	石製模造品	－	剣 粘板岩	長4.3	幅2.1	厚0.6	一部		28-13	123-15

第359図　SD3123 溝跡出土遺物(2)

ている。土師器坏はロクロ調整で、回転糸切り無調整や、切り離し後、手持ちヘラケズリされるものが多い。

【ＳＤ3133溝跡】（第308・309・315・357図）

ＳＤ3123と同位置で、同様に延びる素掘りの溝跡である。ＳＤ3123に壊されているため、方向や長さは不明であるが、ＳＤ3123とほぼ同様と思われる。

この溝についてもＳＤ3123と同様に、小区画に分割する区画溝の可能性が考えられる。

〔重複〕（古）ＳＢ3407・3408・3815・3863、ＳＤ3014・3120・3174　（新）ＳＤ3123　（不明）ＳＢ3846、ＳＤ3097

〔規模・堆積土〕ＳＤ3123に壊されているため明確ではないが、比較的残りの良いところでは、上幅が0.6m程、下幅が0.3～0.5mで、深さは0.3mである。横断面形は上部がやや開く「U」字状である。堆積土は黒褐色や褐灰色のシルトで、自然堆積である。

〔出土遺物〕土師器、須恵器、平瓦、丸瓦などが少量出土している。

【ＳＤ3140溝跡】（第315・360図）

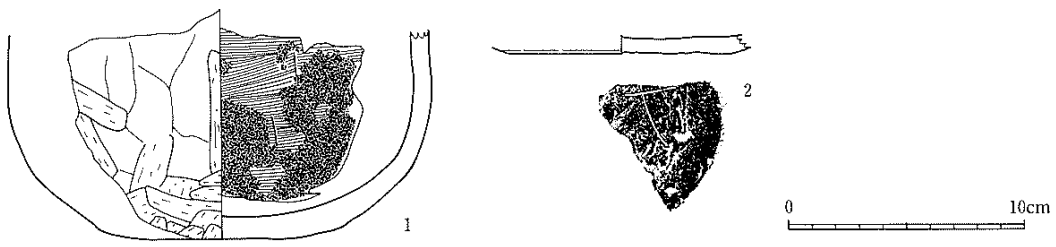
ＳＤ3097のすぐ南側（調査区東部では北側）を延びる素堀りの東西溝で、東側は調査区外に延びている。方向はＥ－1°－Ｎで、長さは25m以上である。

この溝は、ＳＤ3097とほぼ同位置にあることから、ＳＤ3097と同様に、小区画に分割する区画溝と思われる。

〔重複〕（古）ＳＢ3417、ＳＤ3064、ＳＫ3107・3122、ＳＸ3114　（新）ＳＢ3416、ＳＤ3055・3097、ＳＫ3111

〔規模・堆積土〕上幅0.6～0.8m、下幅0.3～0.5mで、深さは0.2mである。横断面形は「U」字形である。堆積土は酸化鉄を含む黒褐色シルトで、自然堆積である。

〔出土遺物〕土師器、須恵器、丸瓦、羽口などが出土している。土師器や須恵器は小破片が多く、図示できるものは少ないが、非ロクロ調整の土師器漆壷やヘラ書きされた須恵器坏などが出土している。また、小破片の中には回転糸切り無調整の土師器坏も含まれている。



No	種類	層位	特　　徴	口径	底径	器高	残存	備　　考	写真図版	登録No
1	土師器・壺	－	外：ナデ→手ケズリ　底：手ケズリ　内：ヘラナデ	－	－	－	一部	(内) 漆付着		113-2
2	須恵器・坏	－	内外：ロクロナデ　底：ヘラ切	－	(9.4)	－	一部	ヘラ書「×」		113-1

第360図　SD3140 溝跡出土遺物

【ＳＤ3170溝跡】（第309図）

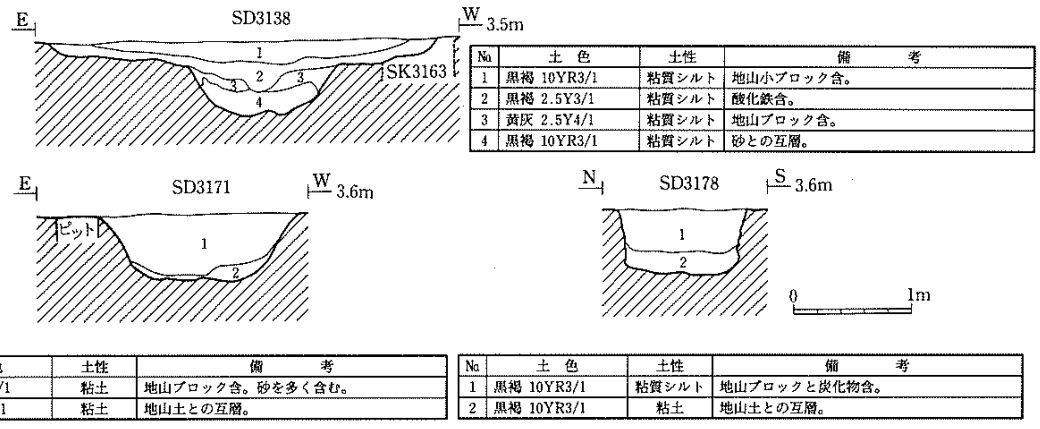
素掘りの東西溝で、西側は調査区外に延びている。方向はＥ－6°－Ｓで、長さは19.6m以上である。

区画溝であるＳＤ3120と約18m間隔で平行することから、区画面を小区画に分離する区画溝と考えられる。
〔重複〕（古）ＳＤ3165　（新）ＳＢ3410・3847、ＳＤ3123・3138・3155
〔規模・埋土〕上幅0.5～1.2m、下幅0.4～0.8mで、深さは0.1mである。埋土は地山ブロックを含む黒褐・褐灰色シルトで、人為的に埋め戻されている。
〔出土遺物〕土師器、丸瓦が少量出土している。
【ＳＤ3177溝跡】（第308図）
素掘りの東西溝である。攪乱などにより分断されているが、ＳＤ3123・3133が東に屈曲する手前まで延びている。方向はＥ－3°－Ｎで、長さは24.5mである。
この溝は、区画溝であるＳＤ3123・3133の北側の東西方向の部分の西延長上にあることから、これと一体となって区画内をさらに分割する区画溝であると思われる。
〔重複〕（古）ＳＢ3403・3863、ＳＩ3799　（新）ＳＢ3404・3405・3806・3815　（不明）ＳＢ3344・3803・3805・3814・3842
〔規模・堆積土〕上幅0.3～0.5m、下幅0.1～0.4mで、深さは0.2mである。横断面形は「U」字状である。堆積土は黒褐色のシルトである。
〔出土遺物〕土師器、須恵器が少量出土している。

G　屋敷跡

堀によって方形に区画されたもので、東辺（ＳＤ3138・3150）、南辺（ＳＤ3150）、西辺（ＳＤ3307）、北辺（ＳＤ3181）の堀を検出した。南西部は調査区外である。重複状況などから2時期の変遷があったと考えられ（A→B期）、東に拡張されている。
また、東辺と北辺については、堀と平行して、3m程内側を巡る一連の溝（東：ＳＤ3171、北：ＳＤ3178）が検出された。位置関係から東辺ではＳＤ3138に伴うものと思われ、A期のものとみられる。

A期
東辺（ＳＤ3138）が検出された。南・北・西辺は改修の痕跡が見られないが、横断面形がＳＤ3138に類似していることから、A期に掘られたものがB期まで維持されていたと思われる。全体の規模や平面形は、一辺が35m程の方形になると思われる。
また、この時期には東辺と北辺の内側を巡る溝があり、二重に区画されていたとみられる。
【ＳＤ3138溝跡】（第308・309・361・362図）
素掘りの溝で、北端と南端はともに西に曲がりはじめるあたりでB期の北辺と南辺に壊されている。方向はＮ－7°－Ｗで、長さは28m以上である。
〔重複〕（古）ＳＡ3158、ＳＢ3847・3865、ＳＥ3164、ＳＤ3123・3170・3187、ＳＫ3163・3166
（新）ＳＤ3150・3181
〔規模・堆積土〕上幅2.5～3.3m、下幅0.4～0.8mで、深さは0.7mである。横断面形は上部が開いた「U」



No	土色	土性	備考
1	黒褐 10YR3/1	粘質シルト	地山小ブロック含。
2	黒褐 2.5Y3/1	粘質シルト	酸化鉄含。
3	黄灰 2.5Y4/1	粘質シルト	地山ブロック含。
4	黒褐 10YR3/1	粘質シルト	砂との互層。

No	土色	土性	備考
1	黒褐 10YR3/1	粘土	地山ブロック含。砂を多く含む。
2	黒褐 2.5Y3/1	粘土	地山土との互層。

No	土色	土性	備考
1	黒褐 10YR3/1	粘質シルト	地山ブロックと炭化物含。
2	黒褐 10YR3/1	粘土	地山土との互層。

第361図　SD3138・3171・3178溝跡断面図

字状であり、途中に段がつく。堆積土は、下層が砂を含む黒褐色の自然堆積の粘質シルトなどで、上層は地山のブロックを含む黒褐色の粘質シルトで人為的に埋め戻されている。

〔出土遺物〕土師器、須恵器、平瓦、丸瓦などが出土しており、上層からは軒丸瓦、土製円盤、下層からは鉄滓、砥石、永楽通寶、ウマ歯など出土している。

【ＳＤ3171溝跡】（第308・361・362図）

屋敷の最も内側を巡る素掘りの溝で、南北部分がＳＤ3171、東西部分がＳＤ3178である。方向はN－8°－Wで、長さは約17mである。

〔重複〕（古）ＳＢ3815・3842・3863、ＳＤ3123・3174・3187

〔規模・堆積土〕上幅1.3～1.8m、下幅0.6～1.0mで、深さは0.6mである。横断面形は上部が開いた「U」字形である。堆積土は下層が地山のシルトと互層をなす黒褐色の自然堆積の粘土で、上層は地山のブロックを含む黒褐色の砂質粘土で人為的に埋め戻されている。

〔出土遺物〕土師器、須恵器、赤焼土器、灰釉陶器、平瓦、丸瓦などが出土している。

【ＳＤ3178溝跡】（第308・361・362図）

ＳＤ3171と一連の素掘りの溝である。方向はＥ－9°－Nで、長さは21m程である。

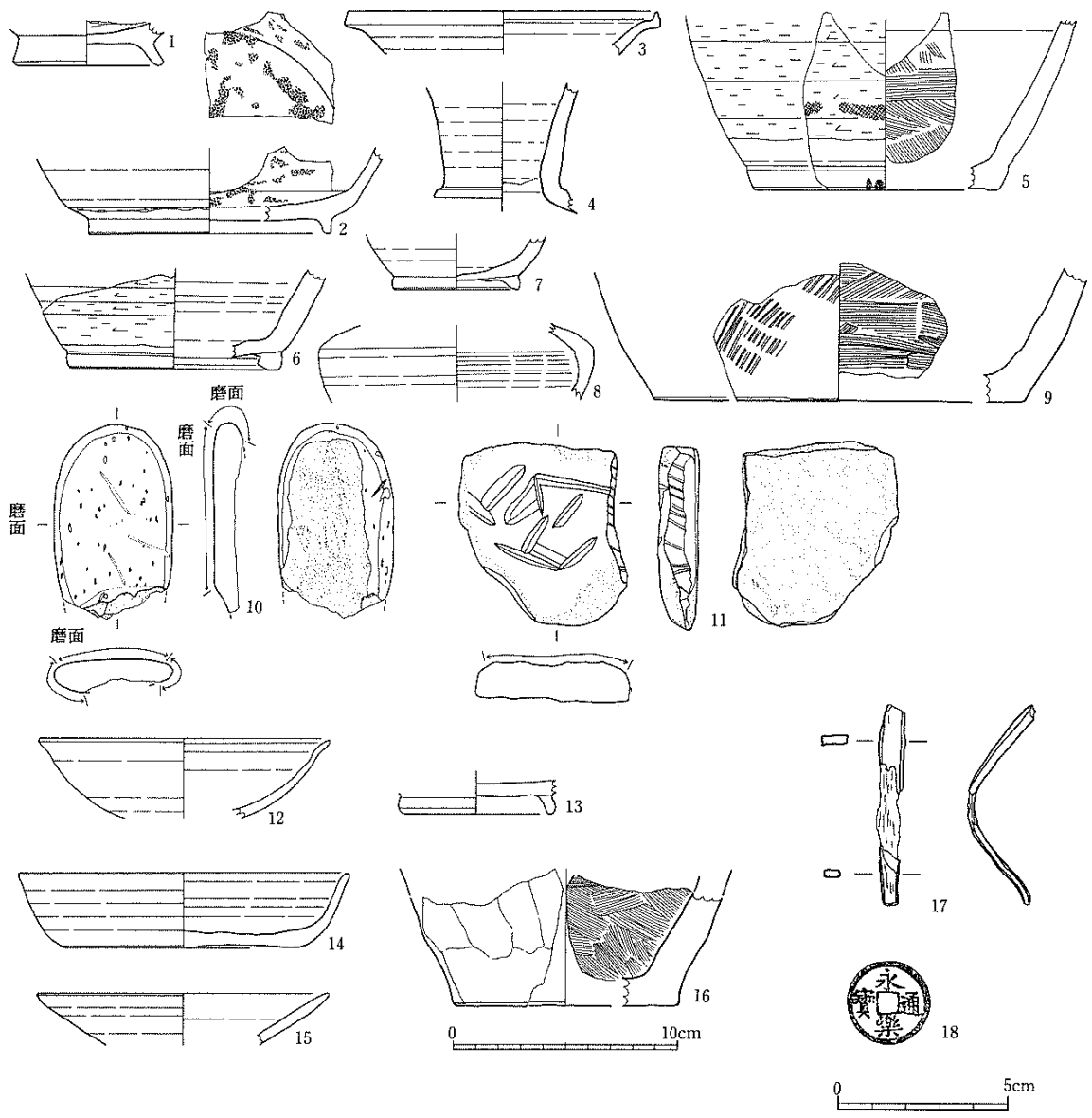
〔重複〕（古）ＳＢ3402・3813、ＳＤ3187・3194　（不明）ＳＢ3804

〔規模・堆積土〕上幅0.9～1.3m、下幅0.6～1.0mで、深さは0.6mである。横断面形は「U」字形である。堆積土は下層が地山のシルト及び褐灰色の砂質粘土と互層をなす黒褐色の自然堆積の粘土で、上層は地山のブロックと炭化物を含む黒褐色の粘質シルトで人為的に埋め戻されている。

〔出土遺物〕陶器、土師器、須恵器、緑釉・灰釉陶器、青磁、平瓦、丸瓦、鉄滓、用途不明の鉄製品などが出土している。

B期

東辺・南辺（ＳＤ3150）、北辺（ＳＤ3181）、西辺（ＳＤ3307）が検出された。平面形は東西が40m、南北が35m程の長方形と思われる。



№	種類	遺構-層位	特　　徴	口径	底径	器高	残存	備　　考	写真図版	登録№
1	土師器・高台坏	3138確認	内：ロクロナデ 底：ミガキ→黒色処理		6.3		一部	金雲母多量		138-11
2	須恵器・高台坏	3138-3・4	外：ロクロナデ→回ケズリ 底：回ケズリ→ロクロナデ 内：ロクロナデ	—	(10.8)	—	一部	内面に漆付着		138-1
3	須恵器・長頸瓶	3138-3・4	内外：ロクロナデ	13.8	—	—	一部	大戸		138-7
4	須恵器・長頸瓶	3138-1・2	内外：ロクロナデ	—	—	—	一部	大戸		138-6
5	須恵器・瓶	3138-3・4	外：ロクロナデ→回ケズリ 底：ロクロナデ 内：ロクロナデ・ヘラナデ	—	10.2	—	一部	大戸		138-8
6	須恵器・瓶	3138-1・2	外：回ケズリ→ロクロナデ 底：ロクロナデ 内：ロクロナデ	—	9.4	—	一部	大戸		138-3
7	須恵器・小瓶	3138-1・2	内外：ロクロナデ 底：ロクロナデ	—	5.6	—	一部	大戸		138-4
8	須恵器・瓶	3138-3・4	外：ロクロナデ 内：ロクロナデ（工具痕）	—	—	—	一部			138-2
9	須恵器・甕	3138-3・4	外：タタキ→ナデ 内：ヘラナデ	—	(16.6)	—	一部	大戸		138-5
10	砥石	3138-1・2	粘板岩	長8.5	幅5.3	厚1.4	一部		28-39	138-10
11	砥石	3138-1・2	砂岩	長8.0	幅6.9	厚1.7	一部			138-9
12	赤焼土器・坏	SD3171	内外：ロクロナデ（内面平滑）	(13.0)	—	—	1/4			171-1
13	灰釉陶器	SD3171	内外：ロクロナデ 三日月高台 重ね焼き	—	(6.6)	—	一部			171-2
14	須恵器・坏	SD3178	内外：ロクロナデ 底：ヘラ切→ナデ	(14.7)	(10.4)	3.4	1/4		19-15	178-1
15	青磁・皿	SD3178	内外：ロクロナデ 貫入	(13.0)	—	—	一部			178-2
16	中世陶器	SD3178	内外：ナデ	(10.1)	—	—	一部			178-4
17	不明鉄製品	SD3178		—	—	—	一部			178-3
18	古銭	SD3138	永楽通宝 永楽6／1408年～	径2.5	—	—	—			138-12

第362図　SD3138・3171・3178 溝跡出土遺物

【ＳＤ3150溝跡】（第309・311・363・364図）

東辺及び南辺の堀で、東辺は方向がＮ－9°－Ｗで、長さは30m程であり、南辺は方向がＥ－19°－Ｎで、長さは22m以上である。

〔重複〕（古）ＳＡ3158、ＳＢ3411・3446・3847・3865、ＳＤ3123・3138・3187、ＳＫ3166・3388・3502・3767・3768

〔規模・堆積土〕上幅2.2～3.8m、下幅0.6～2.0mで、深さは0.6～1.2mである。横断面形は上部が開いた「U」字形あるいは皿状で、東辺では軽い段がつく。堆積土は炭化物と地山のシルトが混じる黒色の粘土などで、自然堆積である。

〔出土遺物〕土師器、須恵器、平瓦、丸瓦、土製円盤、砥石、砂岩製の用途不明の石製品などが出土している。

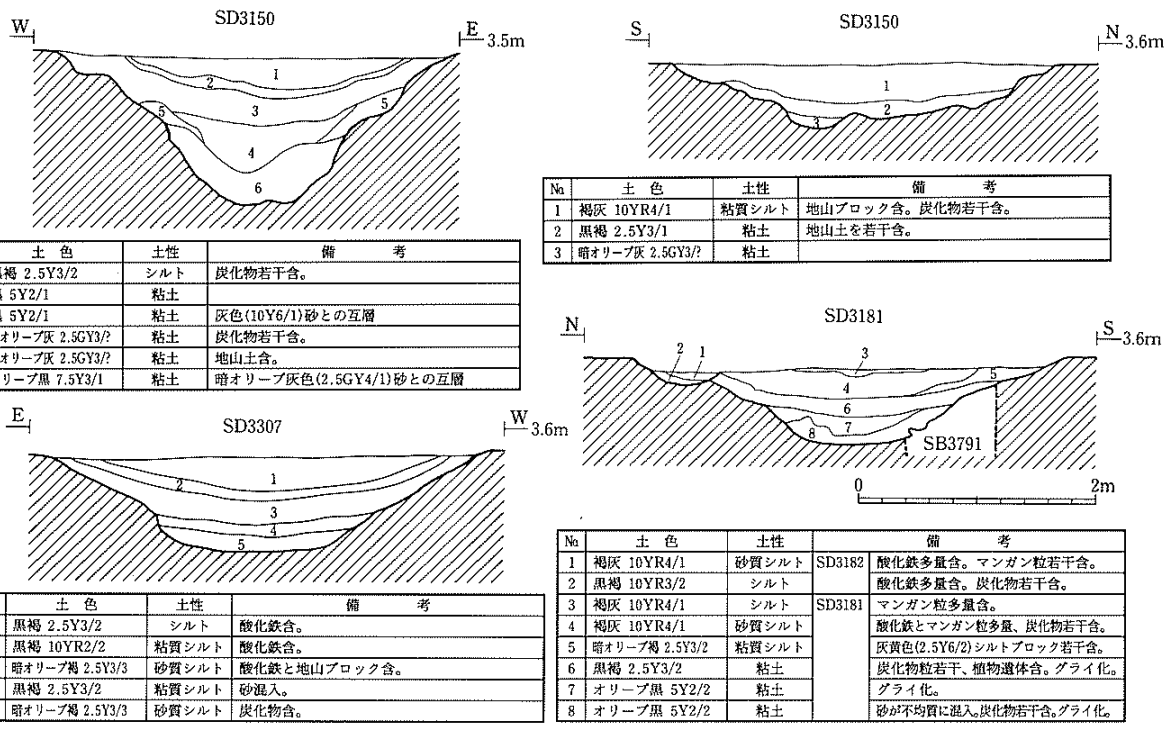
【ＳＤ3181溝跡】（第305・363・364図）

北辺の堀で、方向はＥ－5°－Ｎで、長さは37m程である。

〔重複〕（古）ＳＢ3791・3804・3835・3838、ＳＤ3138・3187・3795、ＳＫ3196・3272・3273　（不明）ＳＢ3840、ＳＤ3304

〔規模・堆積土〕上幅2.8～3.4m、下幅0.7～2.0mで、深さは0.7mである。横断面形は上部が開いた皿状で、一部で軽い段がつく。堆積土は炭化物や砂などを含むオリーブ黒色の粘土などで、自然堆積である。

〔出土遺物〕陶器、土師器、須恵器、赤焼土器、緑釉・灰釉陶器、平瓦、丸瓦、木鏃、鉄滓、石製模造品（剣形）、砥石、羽口、ウマ歯などが出土している。



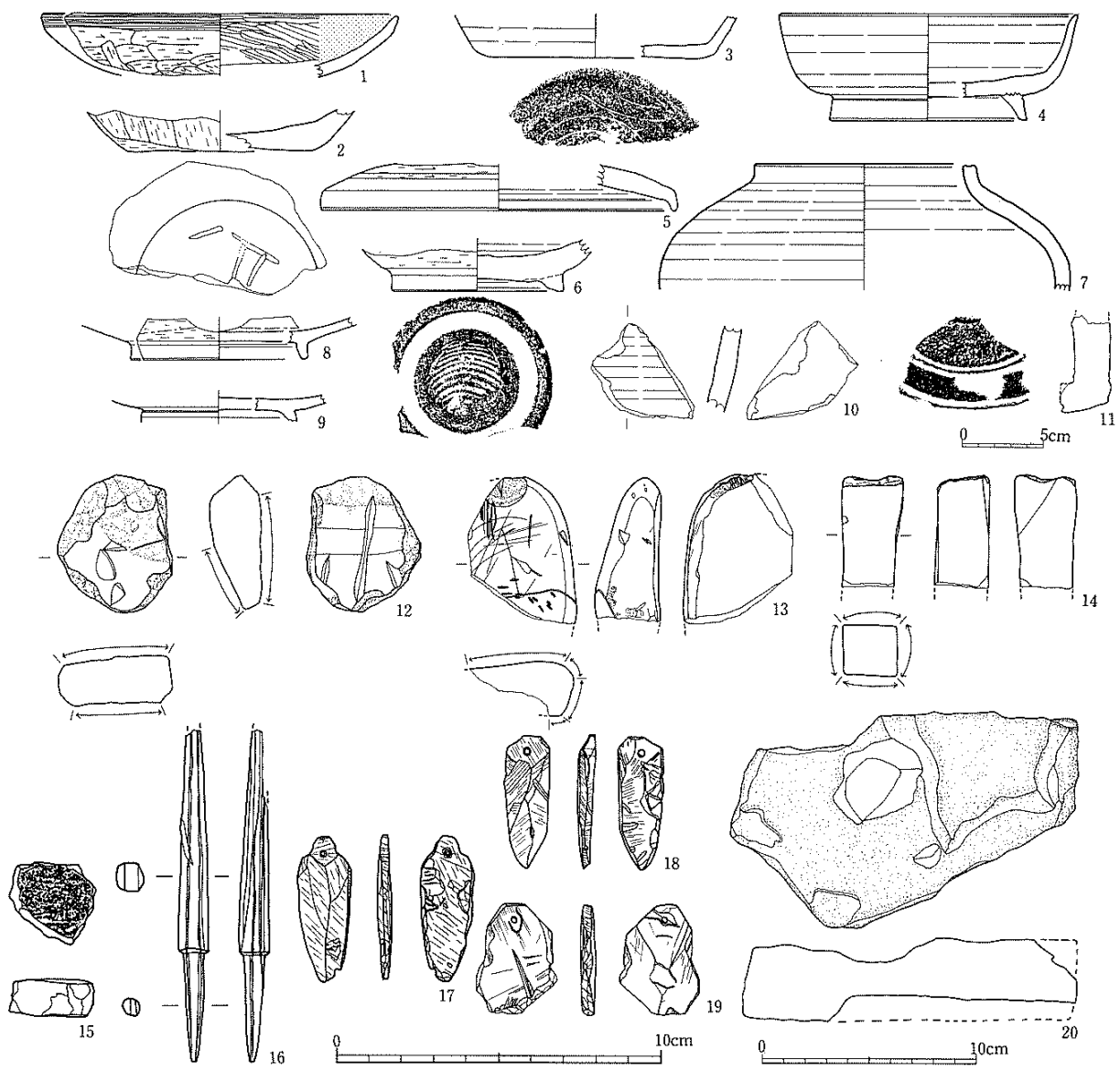
No	土色	土性	備考
1	黒褐 2.5Y3/2	シルト	炭化物若干含。
2	黒 5Y2/1	粘土	
3	黒 5Y2/1	粘土	灰色(10Y6/1)砂との互層
4	暗オリーブ灰 2.5GY3/?	粘土	炭化物若干含。
5	暗オリーブ灰 2.5GY3/?	粘土	地山土含。
6	オリーブ黒 7.5Y3/1	粘土	暗オリーブ灰色(2.5GY4/1)砂との互層

No	土色	土性	備考
1	褐灰 10YR4/1	粘質シルト	地山ブロック含。炭化物若干含。
2	黒褐 2.5Y3/1	粘土	地山土を若干含。
3	暗オリーブ灰 2.5GY3/?	粘土	

No	土色	土性	備考
1	黒褐 2.5Y3/2	シルト	酸化鉄含。
2	黒褐 10YR2/2	粘質シルト	酸化鉄含。
3	暗オリーブ褐 2.5Y3/3	砂質シルト	酸化鉄と地山ブロック含。
4	黒褐 2.5Y3/2	粘質シルト	砂混入。
5	暗オリーブ褐 2.5Y3/3	砂質シルト	炭化物含。

No	土色	土性	備考	
1	褐灰 10YR4/1	砂質シルト	SD3182	酸化鉄多量含。マンガン粒若干含。
2	黒褐 10YR3/2	シルト		酸化鉄多量含。炭化物若干含。
3	褐灰 10YR4/1	シルト	SD3181	マンガン粒多量含。
4	褐灰 10YR4/1	砂質シルト		酸化鉄とマンガン粒多量、炭化物若干含。
5	暗オリーブ褐 2.5Y3/2	粘質シルト		灰黄色(2.5Y6/2)シルトブロック若干含。
6	黒褐 2.5Y3/2	粘土		炭化物粒若干、植物遺体含。グライ化。
7	オリーブ黒 5Y2/2	粘土		グライ化。
8	オリーブ黒 5Y2/2	粘土		砂が不均質に混入。炭化物若干含。グライ化。

第363図　SD3150・3181・3307 溝跡断面図



No.	種類	層位	特　　徴	口径	底径	器高	残存	備　考	写真図版	登録No.
1	土師器・坏	3307-3～5	外：ヨコナデ→手ケズリ 内：ミガキ→黒色処理	(16.6)	—	—	1/5		49	307-4
2	土師器・甕	3307	外：手ケズリ 底：手ケズリ 内：ナデ	—	(8.6)	—	一部	ヘラ書		307-5
3	須恵器・坏	3307-3～5	内外：ロクロナデ 底：ヘラ切り→ナデ	—	(11.2)	—	一部	ヘラ書		181-2
4	須恵器・高台坏	3307-2層	内外：ロクロナデ 底：ロクロナデ	(13.8)	(9.0)	5.0	1/4			181-1
5	須恵器・蓋	3307-1層	外：ロクロナデ→回ケズリ 内：ロクロナデ	(16.3)	—	—	1/5			307-1
6	須恵器・高台坏	3307-1層	外：ロクロナデ→回ケズリ 底：回転糸切→ロクロナデ 内：ロクロナデ	—	(8.0)	—	一部			307-2
7	須恵器・短頸壺	3307-3～5	内外：ロクロナデ	(10.3)	—	—	一部		19-16	307-3
8	灰釉陶器・皿	3307-3～5	外：ロクロナデ→回ケズリ 内：ロクロナデ 三日月高台 重ね焼き	—	(8.3)	—	一部			307-6
9	緑釉陶器	3181-3・4	内外：ミガキ	—	(7.2)	—	一部	胎土：硬質		181-3
10	中世陶器	3181-1・2	内：ロクロナデ	—	—	—	一部			181-12
11	軒丸瓦	3307	重圏文軒丸瓦 多賀城II期	—	—	—	一部			307-8
12	砥石	3181-1・2	砂岩	長6.4	幅5.2	厚2.2	一部			181-4
13	砥石	3181-5・6	粘板岩	長6.5	幅4.8	厚2.5	一部			181-7
14	砥石	3307-5層	砂岩	長5.0	幅2.5	厚2.4	一部		28-36	307-7
15	土製円盤	3150-2・3	須恵器甕を転用	長2.5	幅2.1	厚1.0	一部		27-45	150-1
16	木鏃？	3181底面		長10.2	幅0.9	—	一部			181-11
17	石製模造品	3181	剣 粘板岩	長4.5	幅1.7	厚0.5			28-10	181-10
18	石製模造品	3181	剣 粘板岩	長4.1	幅1.4	厚0.5			28-7	181-9
19	石製模造品	3181-1・2	剣 粘板岩	長3.4	幅2.5	厚0.5			28-15	181-8
20	不明石製品	3150-4～6	砂岩	長9.6	幅15.6	厚3.5				150-2

第364図　SD3150・3181・3307 溝跡出土遺物

【ＳＤ3307溝跡】（第306・364図）

西辺の堀で、方向はＮ－2°－Ｅで、長さは25m以上である。

〔重複〕（古）ＳＢ3344・3345・3841、ＳＥ3310・3728、ＳＫ3729

〔規模・堆積土〕上幅3.2～4.0m、下幅2.0～2.5mで、深さは0.8mである。横断面形は上部が開いた皿状で、軽い段がつく。堆積土は黒褐色の粘質シルトと暗オリーブ褐色の砂質シルトの互層で、自然堆積である。

〔出土遺物〕土師器、須恵器、灰釉陶器、軒丸瓦、平瓦、丸瓦、砥石などが出土している。

Ｈ　小溝状遺構群

畑跡と考えられる。小溝が平行して数条存在するもので、調査区南側を中心に5面ある。ほかに、可能性の考えられる溝跡があり、実数はより多かったと思われる。主要なものについて説明する。

【ＳＦ3908小溝状遺構群】（第328図）

調査区の南西に位置し、東西方向に4本平行する小溝跡である。

〔重複〕（古）ＳＢ3421・3423・3445、ＳＦ3909

〔規模〕幅0.3～0.4mで、長さ3.5～5.5mであり、深さは最も深いもので16㎝ある。横断面形は浅い皿状である。それぞれの間隔は0.6～1.8mでバラつきがある。

〔堆積土〕地山を含む、自然堆積の褐灰色シルトである。

〔方向〕Ｅ－3°－Ｎである。

〔出土遺物〕遺物は出土していない。

【ＳＦ3909小溝状遺構群】（第328図）

調査区の南西に位置し、東西方向に4本平行する小溝跡である。

〔重複〕（古）ＳＢ3420・3421・3423・3441・3443・3445、ＳＫ3076・3486、ＳＤ3075・3064　（新）ＳＦ3908

〔規模〕幅0.2～0.5mで、長さ3.2～9.3mであり、深さは最も深いもので14㎝ある。横断面形は浅い皿状で、それぞれの間隔は1.7～2.1mである。これらを一枚の畑のものとすると、面積は約42㎡である。

〔堆積土〕地山を含む、自然堆積の褐灰色シルトである。

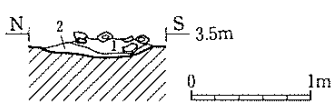
〔方角〕Ｅ－4°－Ｎである。

〔出土遺物〕遺物は出土していない。

Ｉ　土器溜

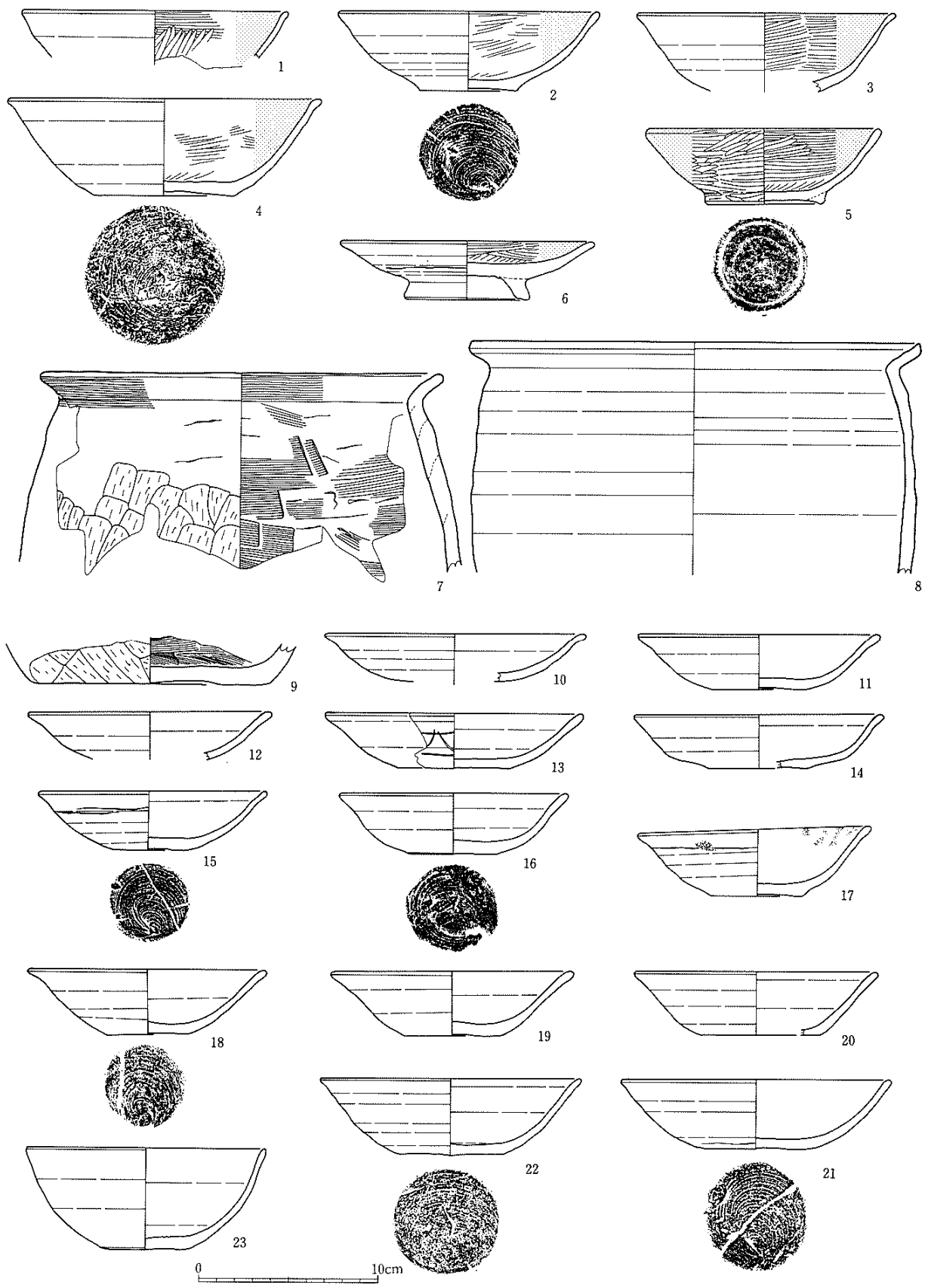
【ＳＸ3012土器溜】（第328・365～367図）

ＳＸ3029工房跡の西側に位置し、多量の土器が一括廃棄された楕円形の土壙である。

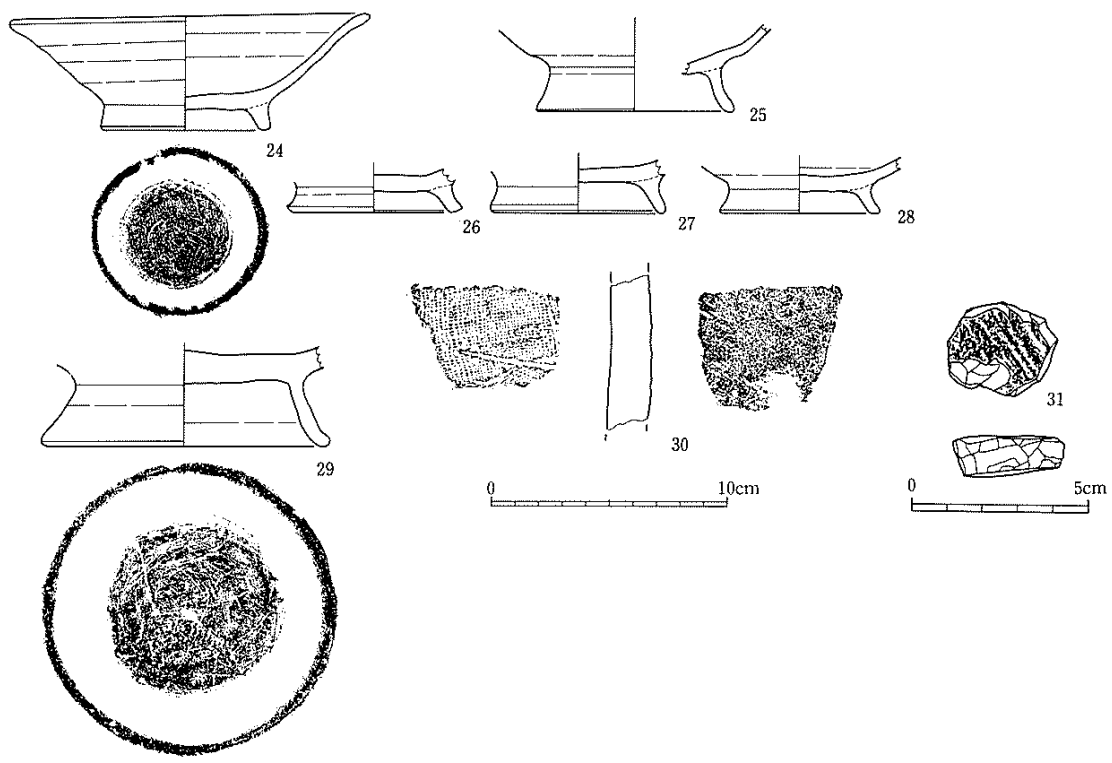


No	土　色	土性	備　　考
1	黒 10YR1.7/1	粘質シルト	炭化物と灰多量含。遺物多量含。
2	灰黄褐 10YR4/2	粘質シルト	地山ブロック多量含。

第365図　SX3012 土器溜断面図



第366図　SX3012 土器溜出土遺物(1)



No.	種類	層位	特徴	口径	底径	器高	残存	備考	写真図版	登録No.
1	土師器・坏	－	外：ロクロナデ 内：ミガキ→黒色処理	14.8	－	－	1/3			012-3
2	土師器・坏	－	外：ロクロナデ 底：回転糸切 内：ミガキ→黒色処理	(14.6)	5.4	4.5	1/3		20-6	012-1
3	土師器・坏	－	外：ロクロナデ 内：ミガキ→黒色処理	14.4	－	－	1/3			012-2
4	土師器・坏	－	外：ロクロナデ 底：回転糸切 内：ミガキ→黒色処理	(17.5)	7.6	5.5	2/5		20-4	012-4
5	土師器・高台坏	－	内外：ミガキ→黒色処理 底：回転糸切→ロクロナデ	13.2	6.8	4.3	2/3		20-7	012-5
6	土師器・高台皿	－	外：ロクロナデ 底：ロクロナデ 内：ミガキ→黒色処理	(14.2)	7.0	3.3	1/2		20-12	012-6
7	土師器・甕	－	外：ヨコナデ→ヘラケズリ 底：ナデ 内：ヨコナデ・ヘラナデ	(22.4)	(13.2)	－	一部	012-8と同一個体か		012-31
8	土師器・甕	－	内外：ロクロナデ	(25.0)	－	－	一部			012-7
9	土師器・甕	－	外：ヘラケズリ 底：ナデ 内：ナデ	－	(13.2)	－	一部		20-5	012-8
10	赤焼土器・坏	－	内外：ロクロナデ 内面平滑	(14.6)	－	－	1/5	淡黄橙色		012-16
11	赤焼土器・坏	－	内外：ロクロナデ 底：回転糸切 内面平滑	(13.4)	5.2	3.1	1/4	淡黄橙色		012-14
12	赤焼土器・坏	－	内外：ロクロナデ 内面平滑	(13.6)	－	－	1/4	淡黄橙色		012-15
13	赤焼土器・坏	－	内外：ロクロナデ 底：回転糸切	(14.4)	6.4	3.1	1/5	淡黄橙色 線刻「四」?		012-26
14	赤焼土器・坏	－	内外：ロクロナデ 底：回転糸切 内面平滑	(14.0)	(5.6)	3.0	1/5	淡黄色		012-18
15	赤焼土器・坏	－	内外：ロクロナデ 底：回転糸切 内面平滑	12.7	4.0	3.3	1/2	淡黄色	20-8	012-9
16	赤焼土器・坏	－	内外：ロクロナデ 底：回転糸切	(12.8)	5.0	3.4	1/2	淡黄橙色		012-13
17	赤焼土器・坏	－	内外：ロクロナデ 底：回転糸切	13.0	5.4	3.8	≒完	淡黄橙色 口縁部に油煙	20-9	012-25
18	赤焼土器・坏	－	内外：ロクロナデ 底：回転糸切 内面平滑	(13.3)	4.6	3.7	1/3	淡黄橙色		012-12
19	赤焼土器・坏	－	内外：ロクロナデ 底：回転糸切 内面平滑	(13.6)	(5.4)	3.6	1/3	淡黄色		012-11
20	赤焼土器・坏	－	内外：ロクロナデ 底：回転糸切	(13.6)	(6.2)	3.5	1/4	淡黄橙色		012-19
21	赤焼土器・坏	－	内外：ロクロナデ 底：回転糸切 内面平滑	(15.1)	5.6	3.9	1/3	淡黄橙色	20-11	012-10
22	赤焼土器・坏	－	内外：ロクロナデ 底：回転糸切 内面平滑	(14.6)	5.8	4.3	1/2	淡黄橙色	20-10	012-27
23	赤焼土器・坏	－	内外：ロクロナデ 底：回転糸切 内面平滑	(13.4)	(5.0)	5.7	1/5	淡黄橙色		012-17
24	赤焼土器・高台坏	－	内外：ロクロナデ 底：回転糸切→ロクロナデ 内面下半平滑	14.8	7.2	4.9	3/4	淡黄橙色	20-13	012-28
25	赤焼土器・高台坏	－	内外：ロクロナデ 底：ロクロナデ	－	(8.4)	－	一部	淡黄橙色		012-23
26	赤焼土器・高台坏	－	内外：ロクロナデ 底：回転糸切→ロクロナデ	－	7.4	－	一部	橙色		012-20
27	赤焼土器・高台坏	－	内外：ロクロナデ 底：回転糸切→ロクロナデ 内面平滑	－	6.4	－	一部	淡黄色		012-22
28	赤焼土器・高台坏	－	内外：ロクロナデ 底：回転糸切 内面平滑	－	6.8	－	一部	橙色		012-21
29	赤焼土器・台付鉢	－	内外：ロクロナデ 底：回転糸切→ロクロナデ	－	12.2	－	一部	淡黄橙色	20-14	012-24
30	丸瓦	－		－	－	－	一部	ヘラ書		012-29
31	土製円盤	－	須恵器甕を転用	長2.6	幅3.1	厚1.0	一部		27-35	012-30

第367図　SX3012 土器溜出土遺物(2)

〔重複〕（新）ＳＢ3952

〔規模・堆積土〕長径1.0m、短辺0.6mで、深さは0.2mである。底面付近のみが残存し、上部は大きく削平されている。埋土は2層に細分され、1層が土器を多量に含む、炭化物や灰混じりの黒色粘質シルト、2層が地山ブロックを多く含む、灰黄褐色シルトである。

〔出土遺物〕土師器、須恵器、赤焼土器、瓦、土製円盤などが出土している。特に赤焼土器は多量で、口径12.7～15.1㎝の、比較的残りの良いものが多い。

土師器坏はロクロ調整で、底部調整は回転糸切り無調整である。高台坏はロクロ調整で、高さ5㎜程の低い高台が付く。内外両面にヘラミガキ後黒色処理が施されている。高台皿はロクロ調整で皿部の器形が底部から内湾して立ち上がり、口縁部で外反しており、高さ1㎝程の高台が付く。調整は内面にヘラミガキ後黒色処理が施されている。甕は非ロクロ調整とロクロ調整とがある。いずれも体部上半、あるいは底部を残すのみで全体の器形を知り得るものはないが口径が20㎝を越す大型品で長胴形を呈するものと考えられる。非ロクロ調整の甕は外面はヘラケズリ、内面はヘラナデ調整である。

赤焼土器には坏と高台坏があり、その多くは内面が平滑に仕上げられている。坏には、器高3㎝前後で、やや皿状を呈するものがある。底部調整は回転糸切り無調整である。高台坏には高さ1㎝以上の高台が付く。

Ｊ　土器埋設遺構

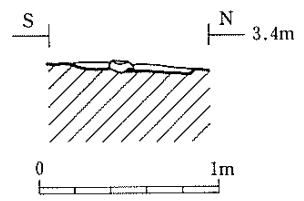
【ＳＸ3048土器埋設遺構】（第322・368図）

掘方を掘り、須恵器の坏1個体を伏せて埋設したものである（第368図）。他遺構との重複はない。

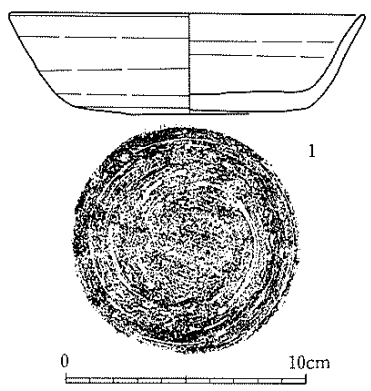
〔位置〕道路によって区画される敷地内の南東側に位置し、ＳＤ3026溝跡が東西に延びる部分の南側にある。

〔掘方・埋土〕楕円形で、長径0.7m、短径0.5mで、深さは約4㎝程で、削平により底面付近のみが残存する。埋土は地山ブロックを多く含む、黒褐色シルトである。

〔埋設土器〕埋設された須恵器坏は底部から直線的に立ち上がり、回転ヘラケズリ調整されている。また、底径／口径比は0.65とやや大きめである。



No	土　色	土性	備　　考
1	黒褐 10YR3/1	シルト	地山ブロック多量含。



No.	種類	特　　徴	口径	底径	器高	残存	写真図版	登録No
1	須恵器・坏	内外：ロクロナデ 底：回ケズリ	14.8	9.6	4.2	4/5	20-3	048-1

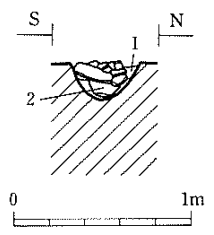
第368図　SX3048 土器埋設遺構

【ＳＸ3091土器埋設遺構】（第315・369図）

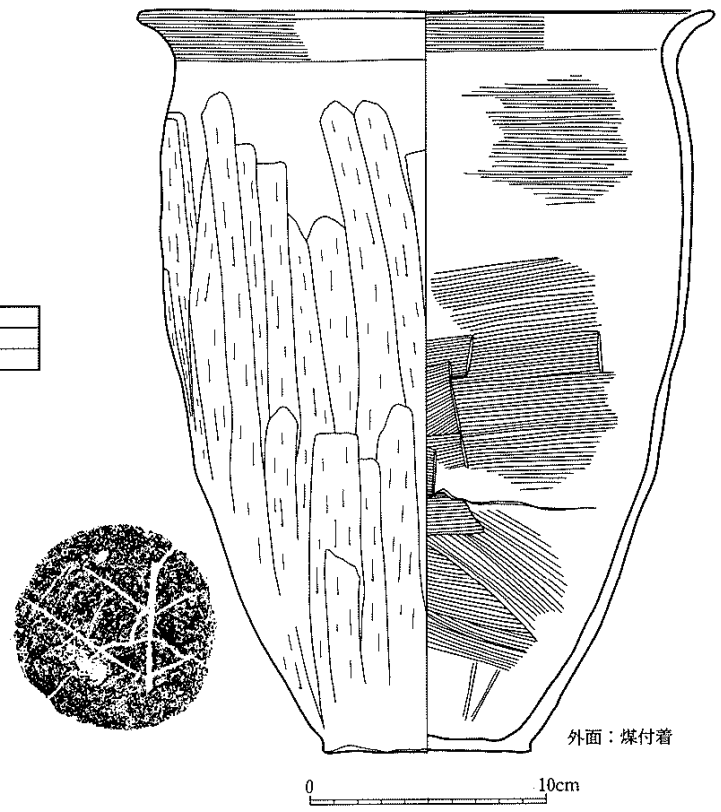
掘方を掘り、土師器の甕1個体を正位に埋設したものである（第369図）。

〔位置〕道路によって区画される敷地内のほぼ中央部に位置し、ＳＤ3064溝跡のすぐ西側にある。

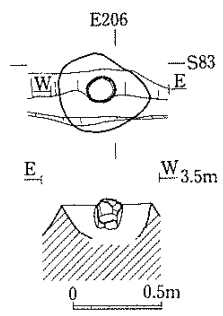
〔掘方・埋土〕円形で、径0.5m、深さは0.2m程残存する。埋土は炭化物、地山ブロックを含む、褐灰・黒褐色シルトである。

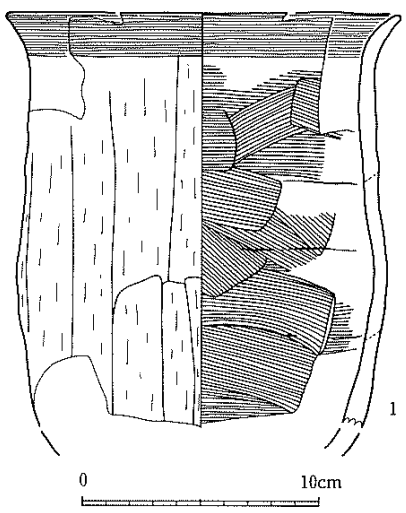


No	土　色	土性	備　　考
1	黒褐 10YR3/1	シルト	炭化物含。
2	褐灰 10YR4/1	シルト	地山ブロック含。



No	種類	遺構	特　　徴	口径	底径	器高	残存	写真図版	登録No
1	土師器・甕	SX3091	外：手ケズリ 底：木葉痕 内：ヨコナデ→ヘラナデ	(22.4)	8.8	31.5	1/2	20-1	091-1





No	土　色	土性	備　　考
1	褐灰 10YR4/1	シルト	地山ブロック含。

第369図　SX3091・3114 土器埋設遺構

〔埋設土器〕埋設された土師器甕は非ロクロ調整の長胴甕である。口径22.4㎝、器高31.5㎝の大型品で、最大径は口縁部にあり、胴上半部に膨らみを有する。外面をヘラケズリ調整されており、胴部外面には、煤や付着物が認められる。

【ＳＸ3114土器埋設遺構】（第315・369図）

掘方を掘り、土師器の甕1個体を正位に埋設したものである（第369図）。

〔重複〕（新）ＳＤ3097・3140

〔位置〕道路によって区画される敷地内のほぼ中央部に位置する。

〔掘方〕ＳＤ3097・3140に壊されているため、形態等は不明である。深さは0.4m程残存する。埋土は地山ブロックを多く含む、褐灰色粘質シルトである。

〔埋設土器〕埋設された土師器甕は非ロクロ調整で、胴部下半に膨らみを持ち、頸部に軽い段を有している。外面はヘラケズリ調整されており、胴部下半には煤が付着している。

Ｋ　溝跡

区画溝と屋敷を区画する堀以外の溝で、38条ある。主要なものについて、ＳＤ3014より北側のものと南側のものとに分けて説明する。

北側のグループ

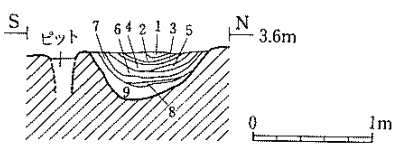
【ＳＤ3129溝跡】（第315・371図）

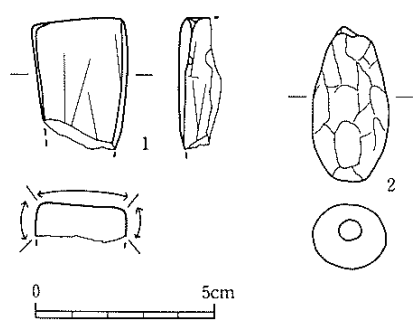
素掘りの東西溝で、方向はＥ－8°－Ｎで、長さは6.2mである。

〔重複〕（古）ＳＫ3657、ＳＤ3014　（新）ＳＢ3413

〔規模・堆積土〕上幅0.4～1.0m、下幅0.3～0.7mで、深さは0.2mである。堆積土は酸化鉄、炭化物を含む、自然堆積の黒褐色シルトである。

〔出土遺物〕土師器、須恵器、平瓦、丸瓦、釘などが出土している。土師器坏は非ロクロ調整とロクロ調整とがあり、図示した2点以外はすべて非ロクロ調整である。須恵器坏は底部に回転ヘラケズリ調整が施されるものとヘラ切り無調整がある。第371図－12の須恵器壷からは炭化米が出土している。

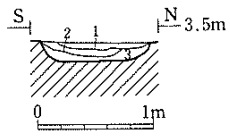




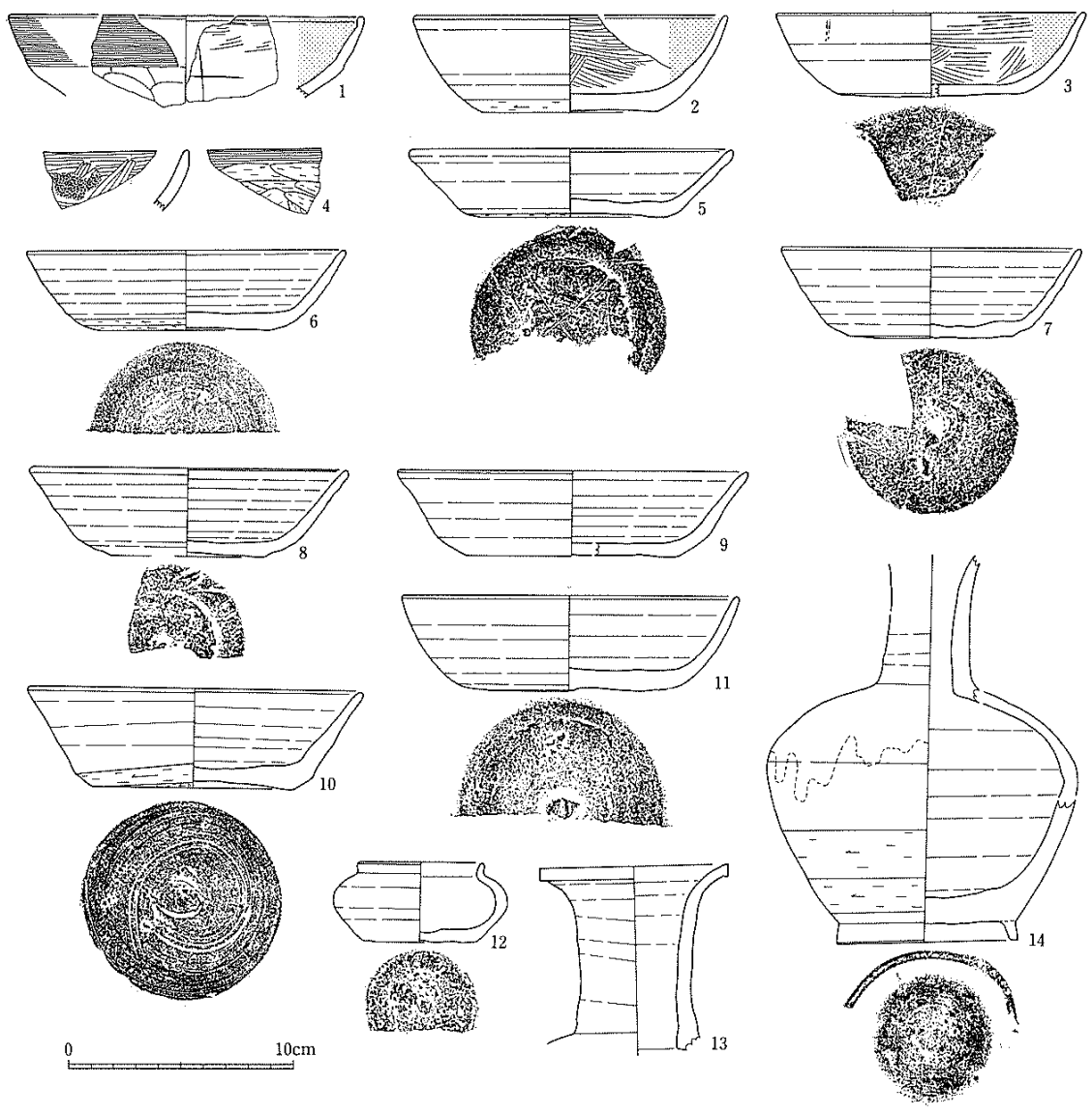
No.	土　色	土性	備　　考
1	黒褐 10YR3/2	シルト	地山小ブロック含。炭化物含。
2	黒褐 10YR3/2	シルト	地山土多量含。
3	黒 10YR2/1	炭化物層	
4	黒褐 10YR2/2	粘質シルト	砂と炭化物含。
5	黒 10YR2/1	炭化物層	
6	黒褐 10YR2/2	粘質シルト	砂と炭化物含。
7	黒 10YR2/1	炭化物層	
8	黒褐 10YR2/2	粘質シルト	砂との互層。

No.	種類	層位	特　　徴	口径	底径	器高	残存	写真図版	登録No.
1	砥石	－	凝灰岩	長3.7	幅2.5	厚0.9	一部		155-1
2	土錘	最下層		長4.3	幅2.1	孔0.6	完形	27-21	155-2

第370図　SD3155 溝跡



No.	土色	土性	備考
1	黒褐 10YR2/2	シルト	酸化鉄と炭化物含。
2	黒褐 10YR2/3	シルト	酸化鉄多量含。炭化物含。
3	黒褐 10YR3/2	シルト	酸化鉄多量含。



No.	種類	層位	特徴	口径	底径	器高	残存	備考	写真図版	登録No.
1	土師器・坏	—	外：手ケズリ→ヨコナデ 内：ミガキ→黒色処理	(15.8)	—	—	一部	線刻「×」		129-13
2	土師器・坏	—	外：ロクロナデ→回ケズリ 底：回ケズリ 内：ミガキ→黒色処理	(14.0)	(7.8)	4.3	1/3			129-9
3	土師器・坏	—	外：ロクロナデ 底：手ケズリ 内：ミガキ→黒色処理	(13.8)	(8.0)	3.8	1/4	ヘラ書		129-10
4	土師器・坏	—	外：手ケズリ→ヨコナデ 内：ミガキ→黒色処理	—	—	—	一部	内面に漆付着		129-14
5	須恵器・坏	—	内外：ロクロナデ 底：ヘラ切り→回ケズリ	(14.4)	(8.0)	3.0	1/3	ヘラ書「×」		129-3
6	須恵器・坏	—	外：ロクロナデ→回ケズリ 底：回ケズリ 内：ロクロナデ	(14.3)	(7.5)	(3.6)	1/2		21-9	129-8
7	須恵器・坏	—	内外：ロクロナデ 底：ヘラ切り	(13.2)	(7.2)	4.1	1/2		21-8	129-5
8	須恵器・坏	—	内外：ロクロナデ 底：ヘラ切り	(15.6)	(9.0)	3.8	1/4			129-11
9	須恵器・坏	—	内外：ロクロナデ 底：ヘラ切り	(14.0)	(6.8)	3.9	1/4			129-4
10	須恵器・坏	—	外：ロクロナデ→回ケズリ 底：回ケズリ 内：ロクロナデ	(14.8)	8.8	4.5	2/3		21-11	129-2
11	須恵器・坏	—	内外：ロクロナデ 底：回ケズリ	(14.8)	(8.0)	4.3	1/2		21-10	129-1
12	須恵器・短頸壺	—	内外：ロクロナデ 底：ヘラ切り	(5.7)	(6.0)	3.6	1/2		21-7	129-6
13	須恵器・長頸瓶	—	内外：ロクロナデ	(8.4)	—	—	一部	大戸		129-12
14	須恵器・長頸瓶	—	外：ロクロナデ→回ケズリ 底：回ケズリ→ロクロナデ 内：ロクロナデ	—	(8.0)	—	1/3		21-12	129-7

第371図　SD3129 溝跡

【ＳＤ3155溝跡】（第309・370・381図）

ＳＫ3154に接続する素掘りの東西溝で、西側は調査区外に延びている。方向はＥ－16°－Ｓで、長さは8.7m以上である。

〔重複〕（古）ＳＢ3408・3410、ＳＤ3165　（同）ＳＫ3154

〔規模・堆積土〕上幅0.8～1.1m、下幅0.4～0.6mで、深さは0.5mである。堆積土は8層に細分され、1・2層が地山や砂のブロックを含む黒褐色粘質シルトで、人為的に埋め戻されており、3～8層は地山や砂のブロックを含む黒褐色粘質シルトと、炭化物を多く含む黒・黒褐色粘質シルトの互層で、自然堆積である。

〔出土遺物〕土師器、須恵器の他、1・2層から砥石、3～8層から赤焼土器、火打ち石、丸瓦、土錘、カラス貝などの淡水産の貝類が出土している。

【ＳＤ3174溝跡】（第308図）

円形に巡る素掘りの溝で、北東部は中世の溝に壊されている。円の直径は5.0～5.7mである。

〔重複〕（古）ＳＢ3846　（新）ＳＢ3409、ＳＤ3123・3133・3171　（不明）ＳＢ3407

〔規模・埋土〕上幅0.4～0.7m、下幅0.3～0.4mで、深さは0.3mである。埋土は地山ブロックを含む黒褐色シルトで、人為的に埋め戻されている。

〔出土遺物〕土師器、須恵器、平瓦、丸瓦が少量出土している。

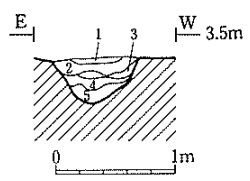
【ＳＤ3187溝跡】（第305・311・372図）

北西～南東に延びる素掘りの溝で、さらに調査区外に延びている。方向はＮ－48°－Ｗで、長さは52m以上である。

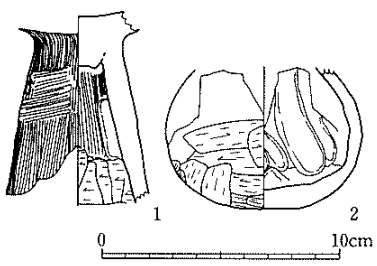
〔重複〕（新）ＳＢ3400・3446・3811・3835・3837・3839・3840、ＳＤ3138・3150・3171・3204・ＳＤ3302・3303・3304、ＳＫ3084　（不明）ＳＢ3816・3817、ＳＤ3064

〔規模・堆積土〕上幅0.6～1.4m、下幅0.3～0.6mで、深さは0.5mである。横断面形は「U」字状である。堆積土は地山ブロックや炭化物を含む黒褐色のシルトなどである。

〔出土遺物〕土師器、須恵器、ウマ歯などが出土している。



No	土　色	土性	備　　考
1	黒褐 10YR3/1	シルト	地山粒含。
2	黒褐 10YR3/1	シルト	地山ブロックと炭化物含。
3	黒褐 10YR3/1	シルト	地山ブロック多量含。炭化物含。
4	褐灰 10YR4/1	シルト	地山土を斑状に含。
5	黒褐 10YR3/1	シルト	地山ブロック多量含。



No	種類	層位	特　　徴	口径	底径	器高	残存	備　　考	写真図版	登録No
1	土師器・高坏	－	外：ナデ 内：ナデ→手ケズリ	－	－	－	一部			187-1
2	土師器・壺	底面直上	外：手ケズリ 内：オサエ	－	－	－	一部			187-2

第372図　SD3187 溝跡

【ＳＤ3204溝跡】（第305図）

素掘りの東西溝で、東側は調査区外に延びている。方向はＥ－0°－Ｎ・Ｓで、長さは13m以上である。

〔重複〕（古）ＳＤ3187　（新）ＳＢ3400・3810・3836、ＳＤ3669・3680

〔規模〕上幅1.2～2.0m、下幅0.6～1.2mで、深さは0.2mである。

〔出土遺物〕土師器、須恵器、平瓦が少量出土している。

【ＳＤ3300溝跡】（第305・373図）

調査区の北西端にある素掘りの溝で、西端は南に屈曲しており、ＳＤ3309に壊されている。方向はＥ－26°－Ｓで、長さは10m以上である。

〔重複〕（古）ＳＢ3840、ＳＫ3314　（新）ＳＤ3309　（不明）ＳＸ3646

〔規模・堆積土〕上幅0.5～0.8m、下幅0.3～0.5mで、深さは0.2mである。堆積土は酸化鉄を含む、暗オリーブ褐色砂質シルトで、自然堆積である。

〔出土遺物〕土師器、須恵器、砥石などが少量出土している。

【ＳＤ3301溝跡】

素掘りの東西溝で、西端はＳＤ3302に壊されている。方向はＥ－27°－Ｎで、長さは8m以上である。

〔重複〕（古）ＳＢ3326・3340・3341、ＳＤ3309　（新）ＳＤ3302　（不明）ＳＸ3646

〔規模・堆積土〕上幅0.6～0.8m、下幅0.4m前後で、深さは0.1mである。堆積土は酸化鉄を多く含む、暗オリーブ褐色シルトで、自然堆積である。

〔出土遺物〕土師器、須恵器が少量出土している。

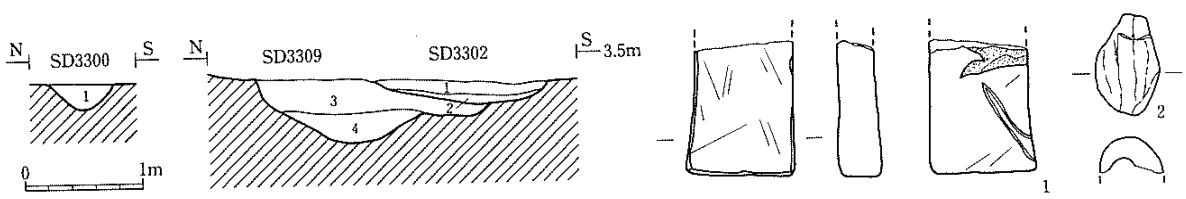
【ＳＤ3302溝跡】（第305・373図）

素掘りの東西溝で、西側は南に屈曲し、両端とも調査区外に延びている。方向は東西方向部分がＥ－2°－Ｓで、南へ屈曲した部分がＥ－27°－Ｎである。長さは42m以上である。

〔重複〕（古）ＳＢ3340・3341・3401・3812・3839・3840、ＳＤ3187・3301・3309・3735　（新）ＳＤ3303　（不明）ＳＸ3646

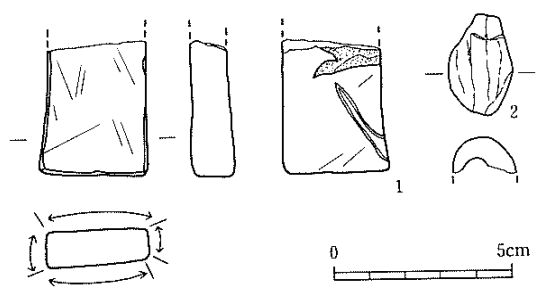
〔規模・堆積土〕上幅0.5～0.7m、下幅0.2～0.3mで、深さは0.3mである。堆積土は砂混じりの灰黄褐色粘質シルトで、自然堆積である。

〔出土遺物〕土師器、須恵器、土錘などが出土している。



No.	土色	土性	備考
1	暗オリーブ褐 2.5Y3/3	砂質シルト	酸化鉄含。

No.	土色	土性		備考
1	オリーブ褐 2.5Y4/3	砂質シルト	SD3302	酸化鉄含。
2	オリーブ褐 2.5Y4/3	砂		粘土若干含。
3	黒褐 10YR3/2	粘質シルト	SD3309	酸化鉄多量含。砂含。
4	黒褐 10YR3/1	シルト		地山ブロック含。

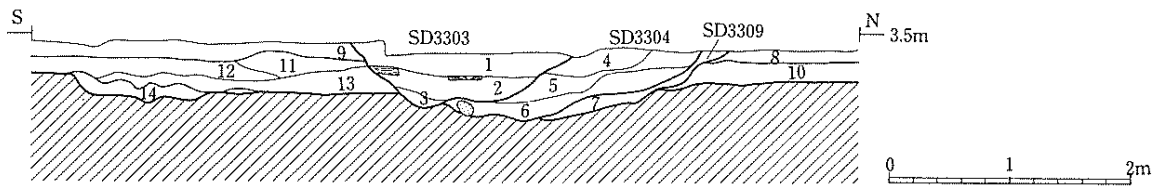


No.	種類	遺構	特徴	口径	底径	器高	残存	写真図版	登録No.
1	砥石	SD3300	凝灰岩	長3.7	幅2.9	厚1.0	一部	28-38	300-1
2	土錘	SD3302		長2.9	幅1.8	－	一部	27-22	302-1

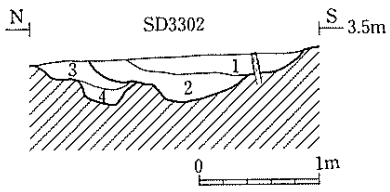
第373図　SD3300・3302 溝跡

【ＳＤ3303溝跡】（第305・374図）

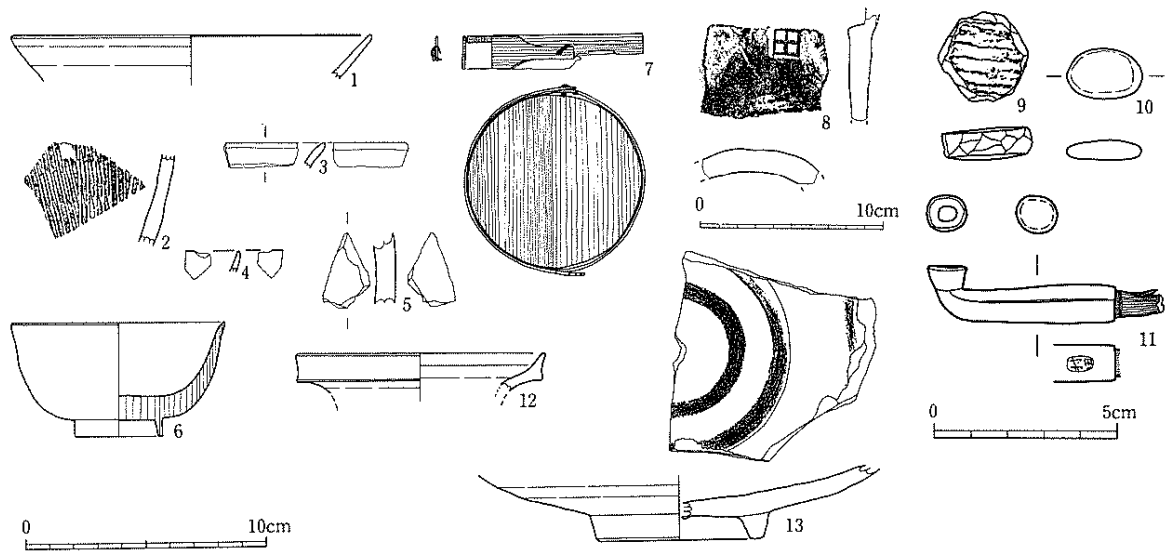
素掘りの東西溝で、やや蛇行しており、両端とも調査区外に延びている。方向はＥ－5°－Ｎで、長



No	土色	土性	備考		No	土色	土性	備考	
1	暗オリーブ褐 2.5Y3/3	シルト	SD3304	酸化鉄含。	8	オリーブ褐 2.5Y4/3	シルト	近世以前の自然堆積層。	
2	黒褐 2.5Y3/2	シルト		砂多量含。	9	オリーブ褐 2.5Y4/3	シルト	近世以前の自然堆積層。酸化鉄多量含。	
3	黒褐 2.5Y3/1	シルト			10	暗灰黄 2.5Y4/2	シルト	SX3646	砂若干含。
4	黒褐 2.5Y3/2	粘質シルト	SD3303	炭化物含。	11	黄褐 2.5Y5/6	シルト		暗オリーブ褐色（2.5Y3/3）シルトブロック含。
5	黒褐 2.5Y3/2	粘質シルト		砂ブロック多量含。炭化物若干含。	12	黒褐 2.5Y3/2	シルト		酸化鉄含。
6	黒褐 2.5Y3/2	シルト		砂多量含。	13	暗オリーブ褐 2.5Y3/3	シルト		砂若干含。
7	暗オリーブ褐 2.5Y3/3	シルト	SD3309	炭化物と地山粒少量含。	14	黒褐 2.5Y3/1	粘質シルト	SK3784	地山ブロック含。



No	土色	土性	備考	
1	黒褐 10YR3/2	粘質シルト	SD3302	炭化物と酸化鉄若干含。
2	黒褐 10YR3/2	粘質シルト		地山ブロック若干含。
3	黒褐 10YR3/2	粘質シルト	SD3309	酸化鉄多量含。砂含。
4	黒褐 10YR3/1	シルト		地山ブロック含。



No	種類	遺構一覧	特徴	口径	底径	器高	残存	備考	写真図版	登録No
1	青磁・椀	SD3303	内外：ロクロナデ	(15.0)	—	—	一部			303-2
2	陶器・擂鉢	SD3303-2		—	—	—	一部			303-10
3	磁器・椀	SD3303	端部：釉剥ぎ	—	—	—	一部			303-9
4	磁器・椀	SD3303-2		—	—	—	一部			303-12
5	陶器・椀	SD3303	鉄釉	—	—	—	一部			303-8
6	漆器・椀	SD3303-2	内外：黒漆塗り	(8.8)	(3.6)	(4.7)	2/3			303-7
7	曲物・蓋？	SD3303-1		径7.5	—	高1.4	一部			303-6
8	丸瓦	SD3303-1	凹：布目 凸：縄タタキ→ロクロナデ 刻印「田」A	—	—	—	一部			303-3
9	土製円盤	SD3303	須恵器甕を転用	長2.4	幅2.5	厚0.7	一部		27-50	303-4
10	碁石	SD3303		長2.0	—	厚0.7	一部		27-23	303-5
11	煙管（雁首）	SD3303	長5.1、火皿径1.1、首部径1.1、「村田」の銘	—	—	—	—			
12	須恵器・長頸瓶	SD3304	内外：ロクロナデ	10.4	—	—	一部			304-1
13	磁器・皿	SD3304-1	内：蛇の目に釉剥ぎ	—	6.9	—	一部		26-7	304-2

第374図　SD3303・3304・3309 溝跡

さは50m以上である。西端付近の南岸で、打ち込み杭としがらみによる護岸施設を検出した。
〔重複〕（古）ＳＢ3401・3791・3811・3835・3838・3839・3840・3862、ＳＸ3646、ＳＫ3185、ＳＤ3187・3302・3309・3339・3183　（新）ＳＤ3304
〔規模・堆積土〕上幅0.7～1.3m、下幅0.3～1.0mで、深さは0.2mである。堆積土は砂混じりの黒褐色粘質シルトで、自然堆積である。
〔出土遺物〕青磁、近世陶磁器、土師器、須恵器、灰釉陶器、平瓦、丸瓦、漆器、曲物蓋、土製円盤、煙管、碁石などが出土している。
【ＳＤ3304溝跡】（第305・374図）
　素掘りの東西溝で、両端とも調査区外に延びている。方向はＥ－8°－Ｎで、長さは56m以上である。
〔重複〕（古）ＳＢ3791・3804・3835、ＳＫ3676、ＳＤ3303・3339、ＳＸ3646　（新）ＳＢ3838　（不明）ＳＢ3840
〔規模・堆積土〕上幅0.7～1.0m、下幅0.3～0.5mで、深さは0.3mである。堆積土は炭化物、酸化鉄を少量含む黒褐色シルトで、自然堆積である。
〔出土遺物〕磁器、土師器、須恵器、平瓦、丸瓦、鉄滓、ウマ歯などが出土している。磁器皿は、内面を蛇の目に釉剥ぎした後、鉄釉が塗られたものである。
【ＳＤ3309溝跡】（第305・374図）
　素掘りの東西溝で、途中で「く」字状に屈曲しており、西端は調査区外に延びている。方向は西側がＥ－15°－Ｎ、東側がＥ－35°－Ｎで、高さは12m以上である。
〔重複〕（古）ＳＫ3327、ＳＤ3300、ＳＸ3646　（新）ＳＤ3301・3302・3303
〔規模・堆積土〕上幅はＳＤ3302・3303に壊されているため不明であり、下幅は0.1～1.0mで、深さは0.6mである。堆積土は酸化鉄を多く含む黒褐色シルトで、自然堆積である。
〔出土遺物〕ロクロ調整の土師器、須恵器、灰釉陶器、平瓦、丸瓦などが出土している。
【ＳＤ3792溝跡】（第305図）
　素掘りの東西溝で、西端は調査区外に延びている。方向はＥ－5°－Ｎで、長さは11m以上である。遺構確認のみで掘り下げは行っていない。
〔重複〕（新）ＳＢ3786・3787、ＳＤ3793　（不明）ＳＢ3788・3789
〔規模・埋土〕上幅は0.6～0.7mである。埋土は地山ブロックや炭化物、焼土粒を含む黒褐色シルトで、人為的に埋め戻されている。
〔出土遺物〕土師器、須恵器がごく少量出土している。
【ＳＤ3793溝跡】（第305・375図）
　素掘りの南北溝で、北端は調査区外に延びている。方向はＮ－2°－Ｅで、長さは15m以上である。
〔重複〕（新）ＳＢ3812、ＳＤ3792　（不明）ＳＢ3341・3796、ＳＤ3183・3302・3306
〔規模〕上幅は0.4～1.1m、下幅は0.2～0.9mで、深さは0.1mである。
〔出土遺物〕土師器、須恵器、緑釉陶器などが少量出土している。

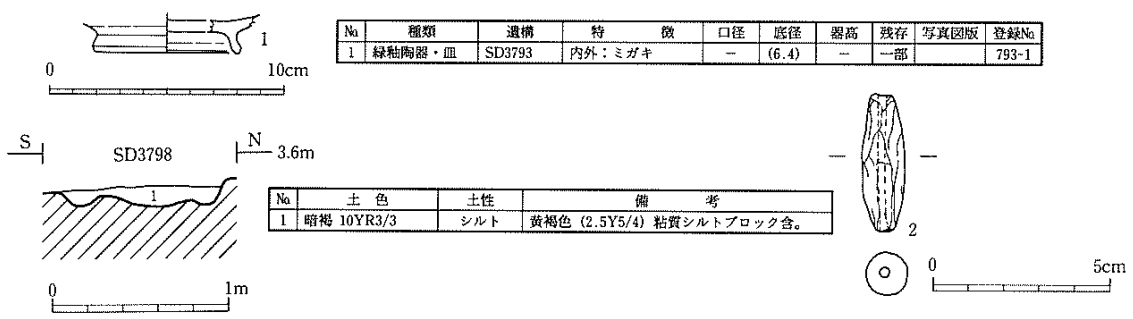
【ＳＤ3798溝跡】（第308・375図）

屋敷内の北側に位置する、素掘りの東西溝である。方向はＥ－17°－Ｎで、長さは約8.5mである。

〔重複〕（新）ＳＢ3813・3814

〔規模・堆積土〕上幅は0.8～1.2m、下幅は0.5～0.8mで、深さは0.1mである。堆積土は地山ブロック、炭化物を含む暗褐色シルトで、自然堆積である。

〔出土遺物〕ロクロ調整の土師器、須恵器の他、丸瓦、土錘、鉄滓などが出土している。



No	種類	遺構	特　徴	口径	底径	器高	残存	写真図版	登録No
1	緑釉陶器・皿	SD3793	内外：ミガキ	—	(6.4)	—	一部		793-1

No	土　色	土性	備　考
1	暗褐 10YR3/3	シルト	黄褐色（2.5Y5/4）粘質シルトブロック含。

No	種類	遺構	特　徴	口径	底径	器高	残存	写真図版	登録No
1	土錘	SD3798	外：ナデ・オサエ	4.0	1.2	0.3	一部		798-1

第375図　SD3793・3798 溝跡

【ＳＤ3906溝跡】（第302図）

ＳＸ3900道路跡路面下で検出した、素掘りの東西溝で、両端は調査区外へ延びている。方向はＥ－3°－Ｓで、長さは7m以上である。

〔重複〕（新）ＳＸ3900

〔規模・埋土〕土幅は0.5～1.1m、下幅は0.3～0.5mで、深さは0.2mである。埋土は黒褐色シルトのブロックを含む褐灰色シルトで、人為的に埋め戻されている。

〔出土遺物〕遺物は出土していない。

【ＳＤ3907溝跡】（第302図）

ＳＸ3900道路跡北側溝の上で検出した、素掘りの溝である。方向はＥ－38°－Ｓで、南岸のみが調査区にかかっており、長さは2m以上である。

〔重複〕(古) ＳＸ3900

〔規模・堆積土〕上幅や下幅は不明で、深さは0.2mである。堆積土は自然堆積の褐灰色シルトである。

〔出土遺物〕遺物は出土していない。

南側のグループ

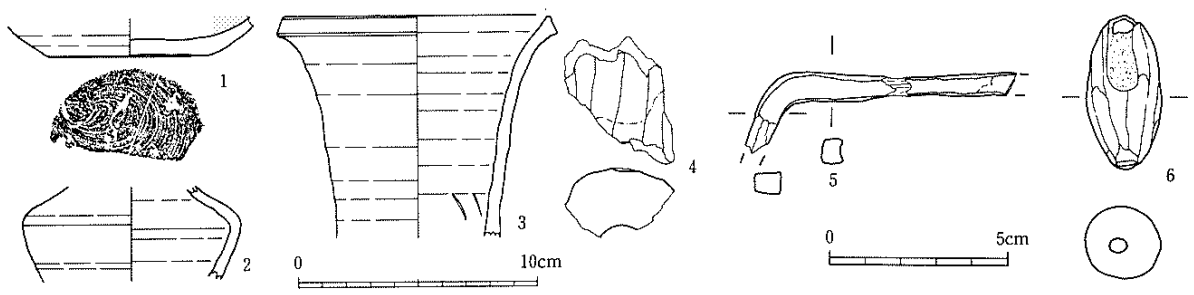
【ＳＤ3031溝跡】（第328・376図）

調査区南西隅から北東に延びる、素掘りの溝で、両端は調査区外へ延びている。方向はＮ－37°－Ｅであり、長さは36m以上である。基本層位第Ⅱ層上面から掘り込まれている。

〔重複〕（古）ＳＢ3419・3432・3826・3827・3856・3861、ＳＩ3634、ＳＸ3029、ＳＫ3041・3067・3610・3640・3641、ＳＤ3055・3063・3065・3250　（不明）ＳＢ3856

〔規模・堆積土〕上幅は0.3～1.1m、下幅は0.3～0.8mで、深さは0.3mである。堆積土は地山ブロックや炭化物を少量含む黒褐色シルトで、自然堆積である。

〔出土遺物〕土師器、須恵器、平瓦、丸瓦、鎹、土錘、羽口などが出土している。

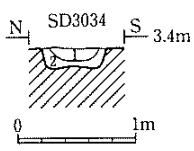


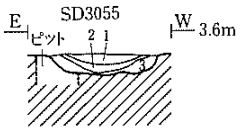
№	種類	層位	特　　徴	口径	底径	器高	残存	備　考	写真図版	登録№
1	土師器・坏	－	外：ロクロナデ 底：回転糸切り 内：ミガキ→黒色処理	－	(6.8)	－	一部	ヘラ書「一」		031-2
2	須恵器・小瓶	－	外：ミガキ 内：ミガキ→口縁部：ナデ	－	－	－	一部			031-1
3	須恵器・長頸瓶	－	内外：ロクロナデ	(11.2)	－	－	一部	大戸		031-3
4	羽口	－		－	－	－	一部			031-4
5	鎹	－		－	－	－	一部		27-7	031-6
6	土錘	－	ナデ	長4.3	幅2.1	孔0.5	完形		27-20	031-5

第376図　SD3031 溝跡出土遺物

【ＳＤ3034溝跡】（第328・377図）

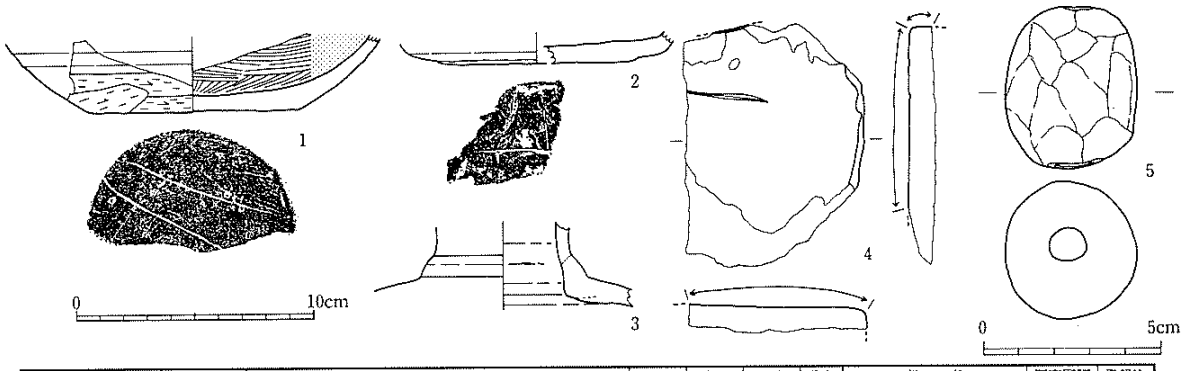
素掘りの東西溝で、西端でクランク状に折れ曲がっており、調査区外へ延びている。方向はN－4°－Eで、長さは26m以上である。





№	土　色	土性	備　　考
1	褐灰 10YR4/1	シルト	炭化物と地山粒含。
2	黒褐 10YR3/1	粘質シルト	地山土多量含。

№	土　色	土性	備　　考
1	黒褐 10YR3/1	粘質シルト	褐灰色（10YR4/1）の砂質シルト多量含。
2	黒褐 2.5Y3/1	粘土	炭化物との互層。
3	褐灰 10YR4/1	砂質シルト	地山土多量含。



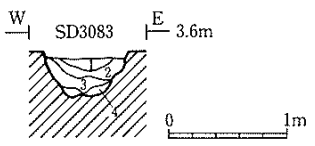
№	種類	遺構	特　　徴	口径	底径	器高	残存	備　考	写真図版	登録№
1	土師器・椀	SD3055	外：ロクロナデ→手ケズリ 底：手ケズリ 内：ミガキ→黒色処理	－	(8.8)	－	一部	ヘラ書「＝」		055-2
2	須恵器・坏	SD3055	内外：ロクロナデ 底：ヘラ切り	－	(8.4)	－	一部	ヘラ書「×」?		055-1
3	須恵器・長頸瓶	SD3055	内外：ロクロナデ	－	－	－	一部	大戸		055-3
4	砥石	SD3055	砂岩	長10.1	幅7.4	厚1.1	一部			055-4
5	土錘	SD3055		長4.6	幅3.7	孔1.1			27-23	055-5

第377図　SD3034・3055 溝跡

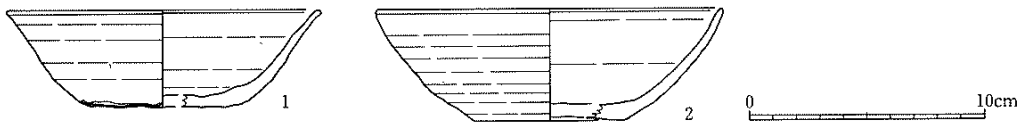
〔重複〕（古）ＳＢ3822・3852、ＳＤ3705　（新）ＳＢ3829・3830、ＳＸ3029、ＳＤ3025
〔規模・埋土〕上幅は0.4～0.7m、下幅は0.2～0.5mで、深さは0.3mである。埋土は地山ブロックを含む褐灰・黒褐色シルトで、人為的に埋め戻されている。
〔出土遺物〕土師器、須恵器が少量出土している。
【ＳＤ3046溝跡】（第322図）
素掘りの東西溝で、方向はＥ－18°－Ｎであり、長さは7.5mである。
〔重複〕（古）ＳＢ3858、ＳＫ3045　（新）ＳＢ3431　（不明）ＳＢ3429
〔規模・埋土〕上幅は0.5m、下幅は0.3mで、深さは0.1mである。埋土は地山ブロックを多く含む褐灰色粘質シルトで、人為的に埋め戻されている。
〔出土遺物〕土師器、須恵器がごく少量出土している。
【ＳＤ3055溝跡】（第315・328・377図）
南北溝で、北端は調査区外へ延びている。方向はＮ－3°－Ｅで、長さは30m以上である。
〔重複〕（古）ＳＢ3413・3419、ＳＫ3106・3152・3613、ＳＤ3097・3098・3099・3140　（新）ＳＫ3056
〔規模・堆積土〕上幅は0.7～1.1m、下幅は0.6～0.9mで、深さは0.3mである。堆積土は炭化物を多く含む黒・黒褐色シルトで、自然堆積である。
〔出土遺物〕土師器、須恵器、平瓦、丸瓦、土錘、砥石、ウマ歯などが出土している。土師器が最も多く、坏は回転糸切り無調整や、切り離し後、手持ちヘラケズリされるものが多い。
【ＳＤ3077溝跡】（第320図）
素掘りの東西溝で、方向はＥ－5°－Ｓであり、長さは17.0mである。ＳＢ3423の柱筋と方向が一致する。
〔重複〕（古）ＳＢ3421Ａ・3441、ＳＫ3076、ＳＤ3064・3075　（新）ＳＢ3442
〔規模・堆積土〕上幅は0.2～0.4m、下幅は0.1～0.2mで、深さは0.1mである。堆積土は炭化物を含む自然堆積の褐灰色シルトで、上面には灰白色火山灰が認められる。
〔出土遺物〕ロクロ調整の土師器、須恵器、平瓦、丸瓦などが出土している。
【ＳＤ3083溝跡】（第328・378図）
素掘りの南北溝で、南端は調査区外に延びている。方向はＮ－6°－Ｗで、長さは6m以上である。
〔重複〕（新）ＳＢ3423　（不明）ＳＢ3821・3851
〔規模・堆積土〕上幅は0.6～0.8m、下幅は0.4～0.6mで、深さは0.4mである。堆積土は4層に細分され、1層が地山粒を少量含む自然堆積の灰黄褐色シルトで、2～4層は地山ブロックを含む褐灰シルトで、人為的に埋め戻されている。
〔出土遺物〕土師器、須恵器、平瓦、丸瓦が出土している。土師器坏はロクロ調整で、切り離し後、底部に再調整を施すものが多く、須恵器坏はヘラ切り無調整や回転糸切り無調整のものが多い。
【ＳＤ3098溝跡】（第315・378図）
素掘りの南北溝で、北端は調査区外に延びている。方向はＮ－7°－Ｅで、長さは6m以上である。
〔重複〕（古）ＳＫ3110　（新）ＳＤ3055・3097　（不明）ＳＤ3140

〔規模・堆積土〕上幅は0.8～0.9m、下幅は0.4～0.6mで、深さは0.2mである。堆積土は酸化鉄、炭化物を含む、自然堆積の黒褐色シルトである。
〔出土遺物〕土師器、須恵器、灰釉陶器、丸瓦などが出土している。
【ＳＤ3259溝跡】
　素掘りの南北溝で、方向はＮ－3°－Ｅで、長さは3.4mである。
〔重複〕（新）ＳＫ3099　（不明）ＳＢ3857
〔規模・堆積土〕上幅は0.6～1.3m、下幅は0.5～0.9mで、深さは0.1mである。堆積土は酸化鉄や地山を含む黒褐色シルトで、自然堆積と考えられる。
〔出土遺物〕土師器、須恵器が少量出土している。
【ＳＤ3901溝跡】（第328・378図）
　素掘りの南北溝で、両端が調査区外に延びている。方向はＮ－6°－Ｗで、長さは9m以上である。
〔重複〕（古）ＳＢ3823・3824・3825・3854、ＳＫ3905
〔規模・堆積土〕上幅は0.9～1.2m、下幅は0.4～0.6mで、深さは0.3mである。堆積土は褐灰色粘質シルトで、自然堆積と考えられる。
〔出土遺物〕ロクロ調整の土師器がごく少量出土したのみである。

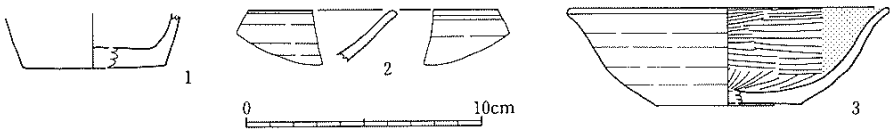
　なお、上記以外の溝跡からも多くの遺物が出土している。（第379・380図）



No	土色	土性	備考
1	灰黄褐 10YR4/2	シルト	地山粒少量含。
2	褐灰 10YR4/1	シルト	地山小ブロック少量含。
3	褐灰 10YR4/1	シルト	地山ブロック含。
4	褐灰 10YR4/1	シルト	地山ブロック多量含。

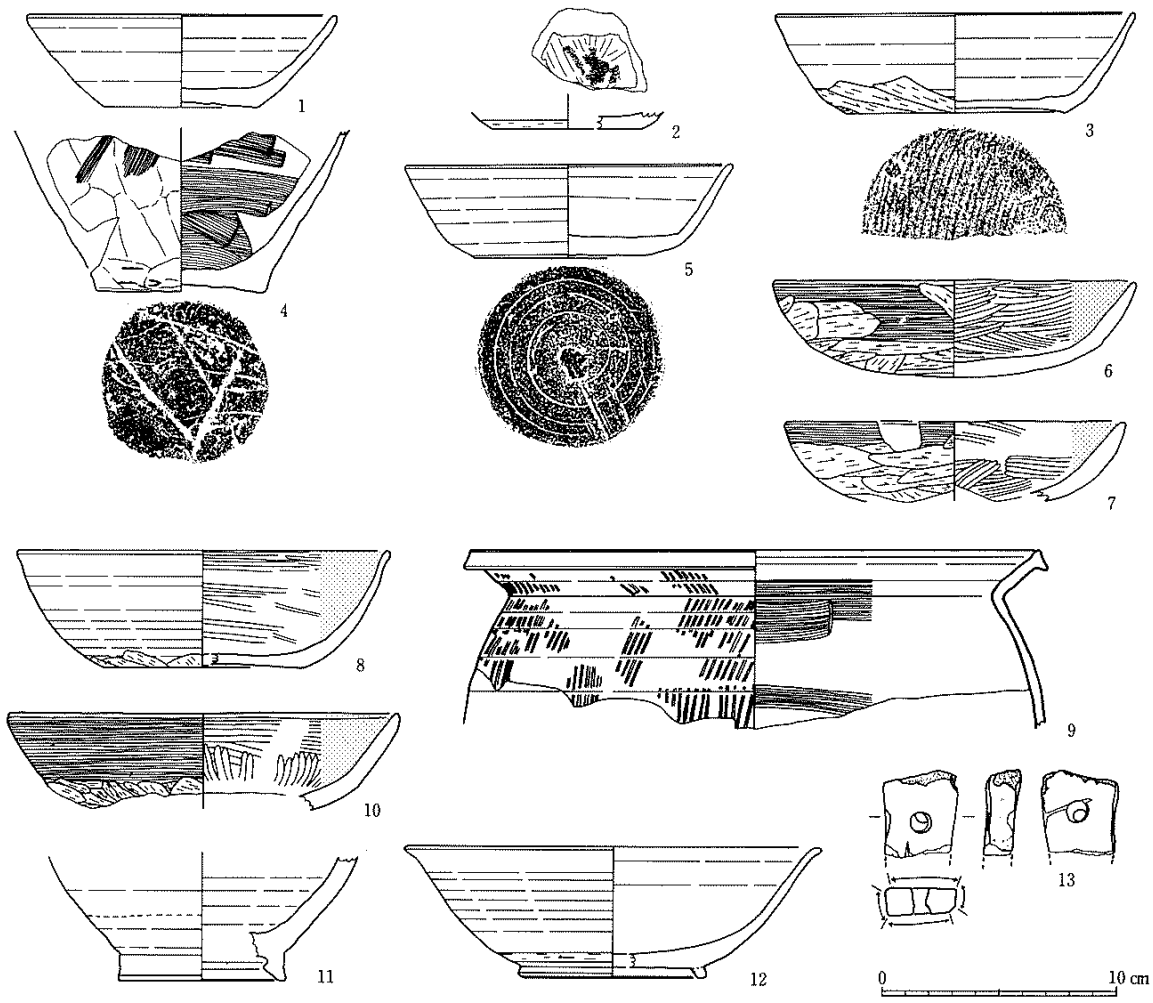


No	種類	遺構	特徴	口径	底径	器高	残存	備考	写真図版	登録No.
1	須恵器・坏	SD3083	内外：ロクロナデ 底：ヘラ切り	(13.4)	(7.2)	4.2	1/4			083-1
2	須恵器・坏	SD3083	内外：ロクロナデ 底：回転糸切り	(14.8)	(6.4)	4.8	1/4	火膨れあり		083-2



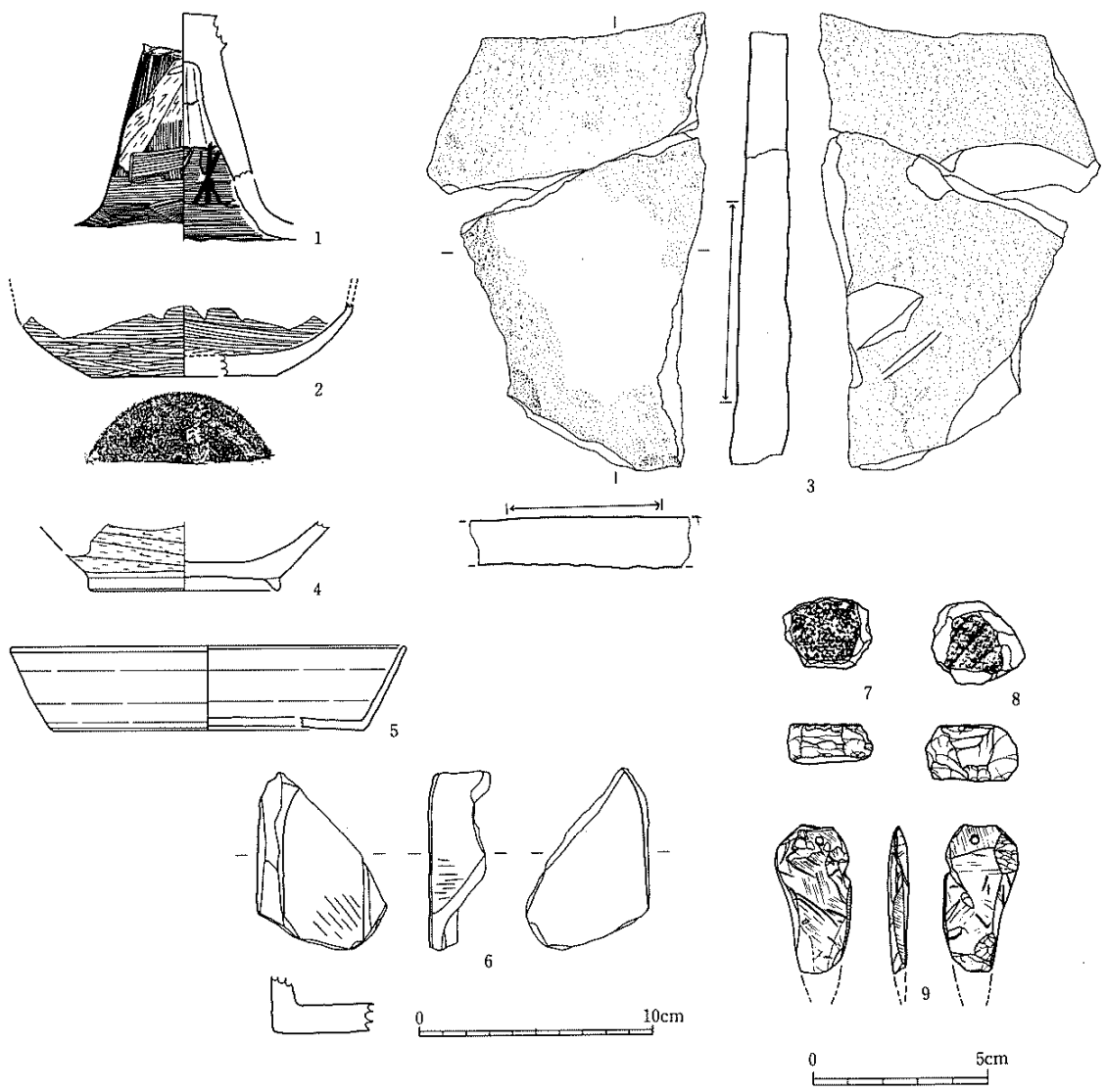
No	種類	遺構	特徴	口径	底径	器高	残存	備考	写真図版	登録No.
1	須恵器・壺	SD3098	内外：ロクロナデ 底：回ケズリ	－	(6.1)	－	一部			098-1
2	灰釉陶器・椀	SD3098	内外：ロクロナデ	－	－	－	一部	釉薄い		098-2
3	土師器・坏	SD3901	外：ロクロナデ 底：回転糸切り 内：ミガキ→黒色処理	(13.7)	(6.2)	4.2	1/4			901-1

第378図　SD3083・3098・3901 溝跡



No.	種類	遺構	特　　徴	口径	底径	器高	残存	備　　考	写真図版	登録No.
1	須恵器・坏	SD3000	内外：ロクロナデ 底：回転糸切り	(13.2)	(6.6)	4.0	1/3		21-1	000-1
2	土師器・坏	SD3005	外：ロクロナデ→回ケズリ 底：回ケズリ 内：ミガキ→黒色処理	—	—	—	一部	内面底部に漆付着		005-2
3	須恵器・坏	SD3005	外：ロクロナデ→手ケズリ 底：静止糸切り 内：ロクロナデ	(15.4)	(9.2)	4.3	1/3		21-2	005-1
4	土師器・甕	SD3008	外：指頭痕 底：木葉痕 内：ヘラナデ	14.2	7.2	—	一部			008-1
5	須恵器・坏	SD3017	内外：ロクロナデ 底：ヘラ切り	(14.0)	(7.8)	4.0	3/5		21-3	017-1
6	土師器・坏	SD3063	外：ヨコナデ→手ケズリ 底：手ケズリ 内：ミガキ→黒色処理	(15.5)	—	4.2	1/4		21-4	063-1
7	土師器・坏	SD3063	外：ヨコナデ→手ケズリ 内：ミガキ→黒色処理	(14.6)	—	—	1/6			063-2
8	土師器・坏	SD3125	外：ロクロナデ→手ケズリ 底：手ケズリ 内：ミガキ→黒色処理	16.0	8.5	5.0	1/2		21-5	125-1
9	土師器・甕	SD3125	外：タタキ→ロクロナデ 内：ロクロナデ→ヘラナデ	(24.4)	—	—	一部			125-2
10	土師器・坏	SD3137	外：手ケズリ→ヨコナデ 内：ミガキ→黒色処理	(16.8)	—	—	1/4			137-1
11	須恵器・瓶	SD3202	内外：ロクロナデ	—	(7.0)	—	一部	大戸		202-1
12	灰釉陶器・椀	SD3903	外：ロクロナデ→回ケズリ 底：回ケズリ 内：ロクロナデ 角高台	(17.6)	(8.0)	5.6	1/3	SD-3031と接合	26-5	903-1
13	砥石	SD3094		長3.4	幅3.0	厚1.1	一部		28-37	094-1

第379図　その他の溝跡出土遺物(1)



№	種類	遺構	特　　徴	口径	底径	器高	残存	備　　考	写真図版	登録№
1	土師器・高坏	SD3156	外：ナデ→ヘラケズリ→ヘラナデ 内：ヘラナデ→ヨコナデ	—	—	—	一部	脚部		156-1
2	須恵器・椀	SD3156	外：回ケズリ→ミガキ 底：ヘラ切り→回ケズリ→ミガキ 内：ミガキ		(7.8)					156-3
3	砥石	SD3156		長18.1	幅9.5	厚2.0	一部	SD-3171 と接合		156-2
4	須恵器・瓶	SD3669	外：回ケズリ→ナデ 底：回ケズリ→ナデ 内：ロクロナデ	—	(8.0)	—	一部	大戸		669-1
5	須恵器・坏	SD3764	内外：ロクロナデ 底：回ケズリ	(17.0)	(13.2)	3.7	1/7			764-1
6	風字硯	SD3642		—	—	—	一部			642-3
7	土製円盤	SD3642	須恵器・甕	長2.0	幅2.4	厚1.0	一部		27-51	642-2
8	土製円盤	SD3902	須恵器・甕	長2.4	幅2.6	厚1.5	一部		27-49	902-1
9	石製模造品	SD3642	剣 粘板岩	長4.3	幅2.1	厚0.6	一部		28-11	642-4

第380図　その他の溝跡出土遺物(2)

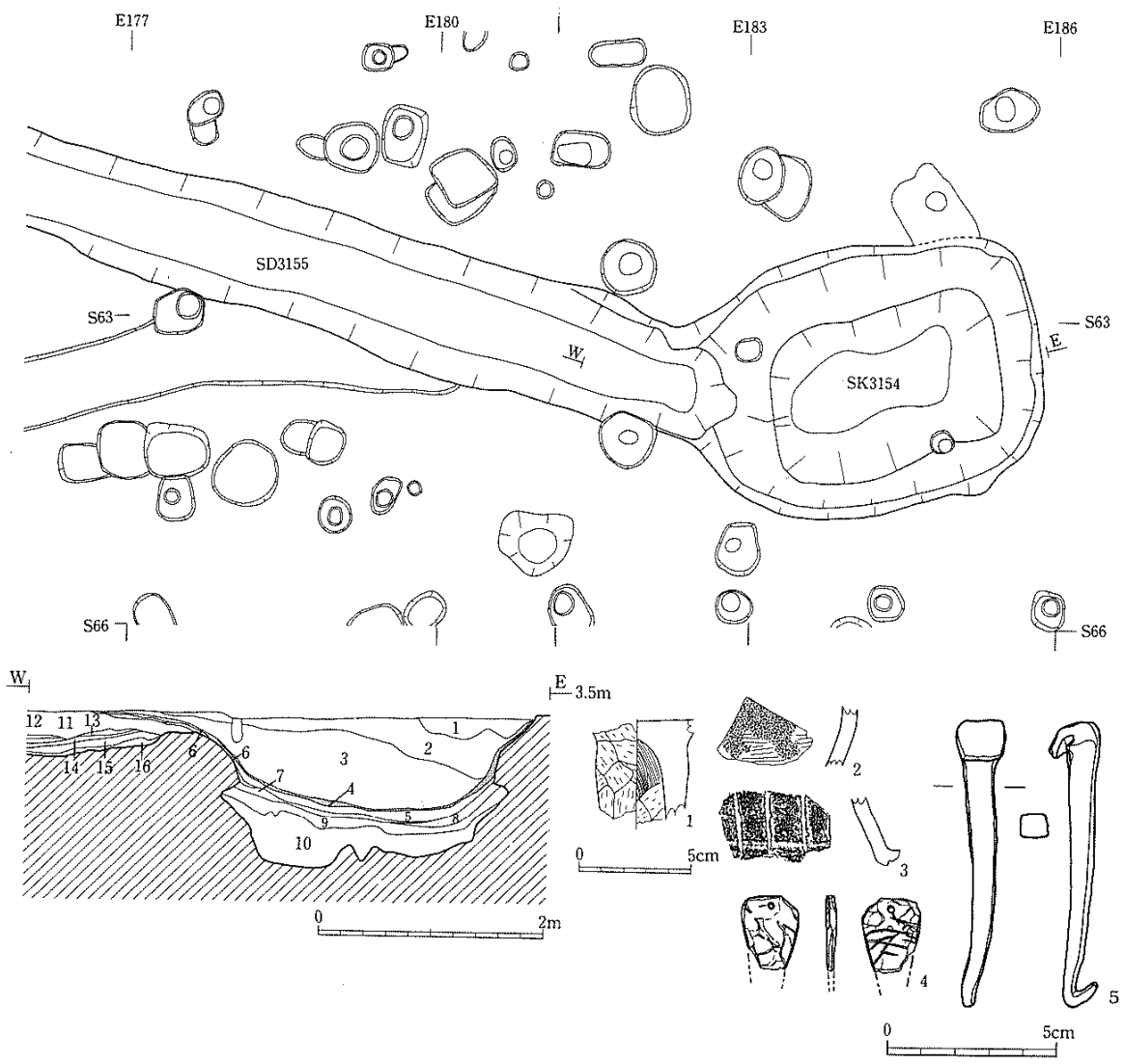
L　土壙跡

74基あり、主要なものについて、ＳＤ3014溝跡より北側のものと南側のものとに分けて説明する。

北側のグループ

【ＳＫ3154土壙跡】（第309・381図）

隅丸長方形の土壙で、人為的に埋め戻した土で底面を作り出している。底面上に自然堆積土が堆積した後、埋め戻されて廃絶するが、埋土の下には全面に、薄い、植物の茎などからなる層が入り込ん



No	土色	土性	備考		No	土色	土性	備考	
1	灰黄褐 10YR4/2	砂質シルト	SK3154	凝灰岩ブロック少量含。炭化物若干含。	9	黒褐 10YR3/1	粘土	SK3154	
2	灰黄褐 10YR4/2	シルト		地山粒と凝灰岩粒多量含。炭化物少量含。	10	オリーブ黒 5Y3/1	粘土		地山ブロック多量含。グライ化。
3	褐灰 10YR4/1	砂質粘土		地山ブロックと黒褐色（10YR3/1）シルトブロック多量含。	11	にぶい黄褐 10YR5/3	シルト	SD3155	地山ブロック多量含。植物遺体含。
4				植物層	12	黒 10YR2/1	粘土		
5	オリーブ黒 7.5Y3/1	粘土		地山ブロック少量含。炭化物若干含。	13	黒褐 10YR3/2	シルト		地山小ブロック少量含。
6	褐灰 10YR4/1	シルト		砂との互層。	14	黒褐 10YR3/1	粘土		炭化物と植物遺体との互層。
7	灰オリーブ 5Y5/3	砂			15	黒褐 10YR3/2	粘質シルト		にぶい黄褐色（10YR4/3）粘質シルトブロック含。
8	黒褐 2.5Y3/1	粘質シルト			16	黒褐 10YR3/2	粘質シルト		植物遺体層との互層。

No	種類	層位	特徴	口径	底径	器高	残存	備考	写真図版	登録No
1	土師器・高坏	3層	外：手ケズリ 内：ナデ→手ケズリ	—	—	—	一部	脚部		154-1
2	土師器	10層	外：手ケズリ 内：ミガキ→黒色処理	—	—	—	一部	内面に漆付着		154-3
3	円面硯	—		—	—	—	一部			154-2
4	石製模造品	—	剣 粘板岩	長2.2	幅1.7	厚0.3	一部		28-8	154-4

第381図　SK3154 土壙跡

でいる。この層については、①敷き詰められたもの、②上部を覆っていたものが落ち込んだものなどの可能性が考えられるが、決定できない。

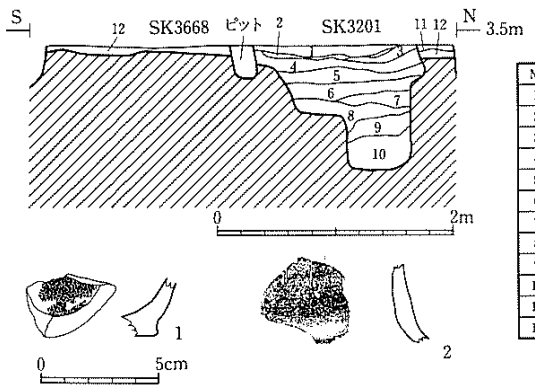
なお、位置関係からＳＤ3155が連結していたと考えられるが、溝の方が早く埋め戻されている。

〔重複〕（古）ＳＢ3408・3410　（同）ＳＤ3155

〔規模・堆積土〕長辺3.2m、短辺2.6mで、深さは1.3mである。堆積土は9層に細分され、1～3層が褐灰色やオリーブ黒色のシルトで、人為的に埋め戻されたものであり、4～8層が自然堆積の褐灰、灰オリーブ、黒褐色等のシルトや粘質シルトで、9層が地山のブロックを多量に含むオリーブ黒色粘土で、人為的に埋め戻されており、上面が底面となっている。

〔出土遺物〕堆積土各層からロクロ調整の土師器、須恵器、灰釉陶器、平瓦、丸瓦、釘、砥石、石製模造品（剣形）などが出土している。また、土師器の中には漆が付着したものも含まれている。

【ＳＫ3201土壙跡】（第305・382図）



No.	土色	土性	備考	
1	黒褐 10YR2/2	シルト	SK3201	焼土粒と炭化物粒含。
2	黒 10YR2/1	シルト		炭化物粒含。
3	黒 10YR2/1	シルト		地山ブロック少量含。炭化物含。
4	黒 10YR2/1	シルト		地山ブロック含。炭化物多量含。
5	黒褐 10YR3/2	シルト		地山ブロックと炭化物粒含。
6	黒褐 10YR3/2	シルト		地山ブロック多量含。
7	黒褐 10YR3/1	粘質シルト		
8	黒褐 10YR3/1	粘質シルト		地山ブロック多量含。
9	黒褐 10YR3/1	粘質シルト		
10	黒褐 10YR3/1	粘質シルト		地山ブロック多量含。
11	褐灰 10YR4/1	シルト	SK3668	地山土多量含。
12	黒褐 10YR3/1	シルト		地山土含。

No.	種類	層位	特徴	口径	底径	器高	残存	写真図版	登録No.
1	土師器・甕	—	非ロクロ調整。内外：ナデ？　内面に漆付着	—	—	—	一部		201-2
2	円面硯	—		—	—	—	一部		201-1

第382図　SK3201 土壙跡

ＳＫ3900道路跡の南側に位置する不整形の土壙で、底面に段を有する。

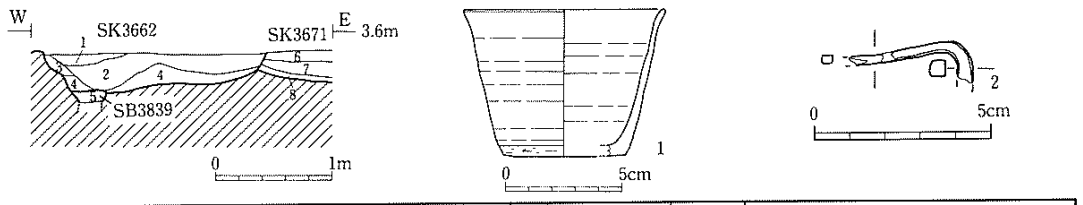
〔重複〕（古）ＳＢ3837　（不明）ＳＢ3400

〔規模・堆積土〕長径1.6m、短径1.2mで、深さは1.1mである。堆積土は10層に細分され、1・2層が炭化物を含む、自然堆積の黒褐色シルトなどで、3層以下が炭化物や地山ブロックを含む黒褐色シルトなどで、人為的に埋め戻されている。

〔出土遺物〕土師器、須恵器、円面硯、平瓦、丸瓦、鉄滓、火打ち石、ウマ骨などが出土している。また、土師器の中には内面に漆が付着した坏や壷なども含まれている。

【ＳＫ3662土壙跡】（第383図）

屋敷跡北東側の外に位置する、不整形の土壙である。

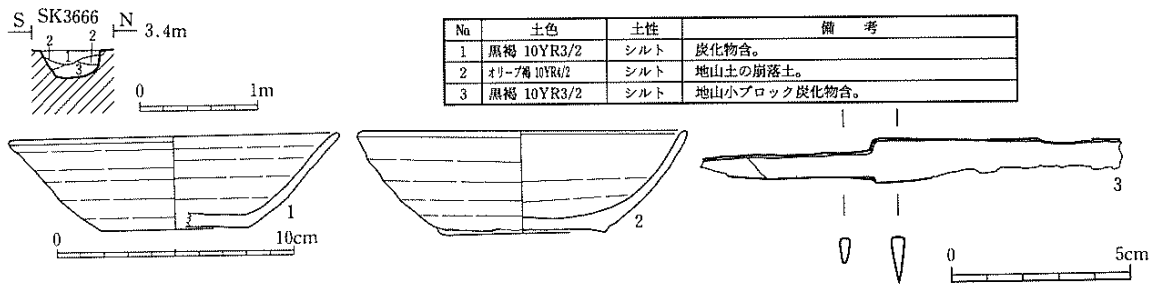


No.	土色	土性	備考		No.	土色	土性	備考	
1	黒褐 10YR2/3	シルト	SK3662		5	黒褐 10YR3/1	シルト	SB3839	地山ブロックと炭化物含。
2	黒 10YR2/1	炭化物層			6	黒褐 10YR3/2	シルト	SK3671	地山ブロックと炭化物含。
3	黒褐 10YR3/1	シルト			7	黒褐 10YR2/2	シルト		炭化物含。
4	黒褐 10YR2/2	シルト		地山土含。	8	黒褐 10YR2/2	シルト		地山ブロック含。

No.	種類	層位	特徴	口径	底径	器高	残存	備考	写真図版	登録No.
1	須恵器・坏	—	外：ロクロナデ→回ケズリ 底：回ケズリ 内：ロクロナデ	(8.7)	(5.3)	6.3	1/4		24-7	662-1
2	鎹	—		—	—	—	一部			662-2

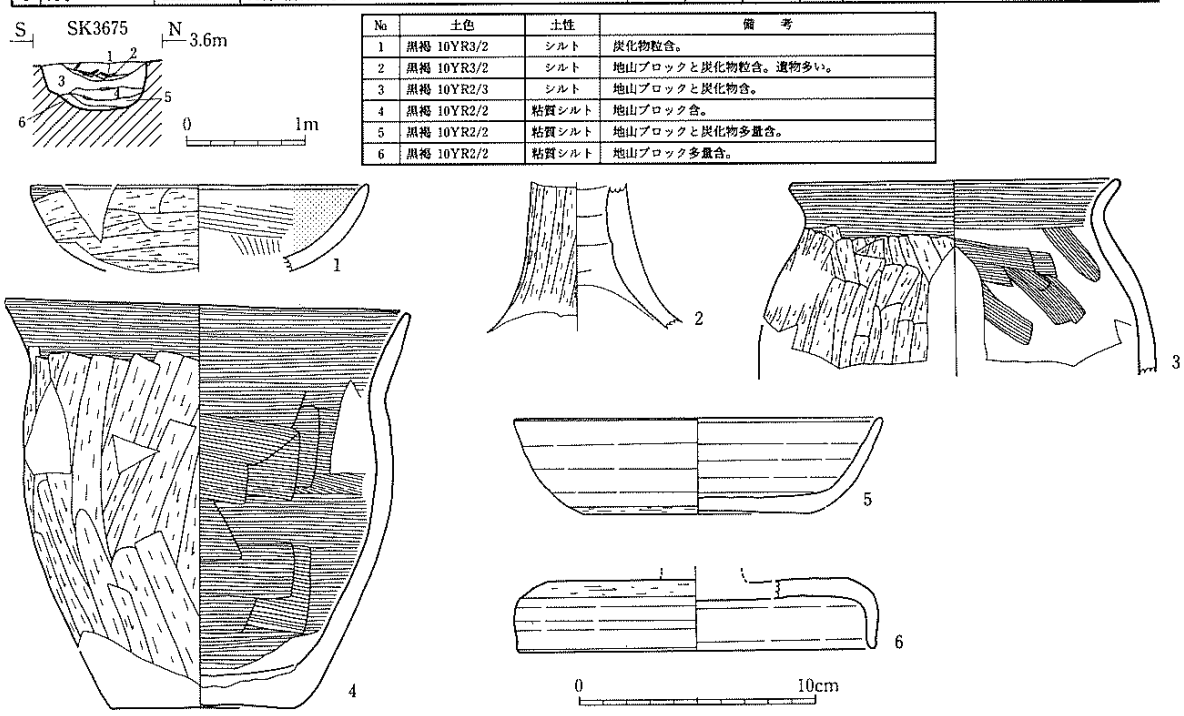
第383図　SK3662 土壙跡

〔重複〕（古）ＳＢ3839、ＳＫ3671
〔規模・堆積土〕長径2.3m、短径1.4mで、深さは0.3mである。堆積土は炭化物を含む、自然堆積の黒褐色シルトなどである。
〔出土遺物〕土師器、須恵器、鎹、羽口、砥石などが出土している。土師器はすべて非ロクロ調整である。
【ＳＫ3666土壙跡】（第305・384図）
　ＳＸ3900道路跡とＳＤ3303溝跡の間に位置する、ほぼ円形の土壙である。
〔規模・埋土〕直径0.6mで、深さは0.2mである。埋土は炭化物、地山ブロックを含む黒褐色シルトで、人為的に埋め戻されている。
〔出土遺物〕ロクロ調整の土師器、須恵器、赤焼土器、灰釉陶器、刀子が少量出土している。
【ＳＫ3675土壙跡】（第384図）
　屋敷跡北東側の外に位置する、楕円形の土壙である。
〔規模・埋土〕長径1.0m、短径0.8m程で、深さは0.4mである。埋土は6層に細分され、炭化物、地山ブロックを多く含む、黒褐色シルトなどで、人為的に埋め戻されている。第2層上面には土器片がまとまって廃棄されていた。
〔出土遺物〕非ロクロ調整の土師器坏・甕、須恵器坏・蓋、丸瓦などが出土している。
　土師器坏は無段平底で、外面はヘラケズリ、内面はヘラミガミ後、黒色処理が施されている。土師器甕は鉢形と体部中央に張りを持ち、やや球胴形に近いものとがあり、共に体部外面にヘラケズリ調整が施されている。
　須恵器坏は口径推定15.6㎝、底径9.6㎝と底部がやや大きめて回転ヘラケズリ調整が施されている。須恵器蓋は短頸壷と組み合うと考えられるもので、天井部は平坦で口縁部が長く下垂している。
【ＳＫ3796土壙跡】（第306・384図）
　屋敷跡の北西隅に位置する、楕円形の土壙である。
〔規模・埋土〕長径1.8m、短径1.6m程で、深さは0.2mである。埋土は地山ブロックを多く含む黒褐色シルトで、人為的に埋め戻されている。
〔出土遺物〕土師器、須恵器、平瓦、丸瓦などが少量出土している。須恵器坏には回転糸切り無調整のものとヘラ切り無調整のものとがある。
【ＳＫ3797土壙跡】（第308・349図）
　屋敷跡の北西隅に位置する土壙で、西半を排水溝に壊されている。
〔重複〕（古）ＳＢ3805、ＳＥ3801
〔規模・堆積土〕南北2.9m、東西1.8m以上で、深さは0.7mである。堆積土は4層に細分され、1・2層が地山ブロックを多く含むオリーブ黒色シルトや暗緑灰砂質シルトで、人為的に埋め戻されており、3・4層が砂とオリーブ黒色粘土の互層で、自然堆積である。
〔出土遺物〕土師器、須恵器、赤焼土器、灰釉陶器、平瓦、丸瓦、鉄滓などが出土している。



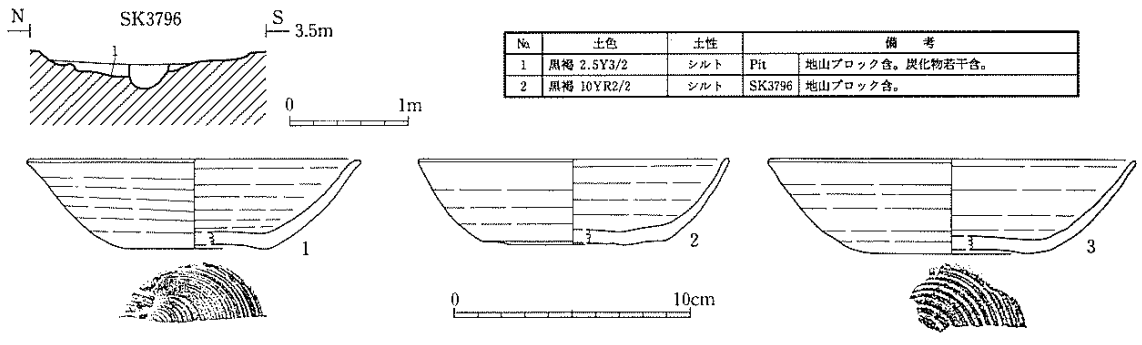
№	土色	土性	備　考
1	黒褐 10YR3/2	シルト	炭化物含。
2	オリーブ褐 10YR4/2	シルト	地山土の崩落土。
3	黒褐 10YR3/2	シルト	地山小ブロック炭化物含。

№	種類	遺構	特　徴	口径	底径	器高	残存	備　考	写真図版	登録№
1	須恵器・坏	SK3666	内外：ロクロナデ　底：回転糸切り	(14.0)	(6.2)	3.9	1/4			666-1
2	赤焼土器・坏	SK3666	内外：ロクロナデ　底：回転糸切り。内面平滑。	(14.0)	7.0	4.5	2/3	淡黄色		666-2
3	刀子	SK3666	刃部 幅1.3 厚0.4	—	—	—	—			666-3



№	土色	土性	備　考
1	黒褐 10YR3/2	シルト	炭化物粒含。
2	黒褐 10YR3/2	シルト	地山ブロックと炭化物粒含。遺物多い。
3	黒褐 10YR2/3	シルト	地山ブロックと炭化物含。
4	黒褐 10YR2/2	粘質シルト	地山ブロック含。
5	黒褐 10YR2/2	粘質シルト	地山ブロックと炭化物多量含。
6	黒褐 10YR2/2	粘質シルト	地山ブロック多量含。

№	種類	遺構	特　徴	口径	底径	器高	残存	備　考	写真図版	登録№
1	土師器・坏	SK3675	外：手ケズリ 内：ミガキ→黒色処理	(14.3)	—	—	1/5			675-2
2	土師器・高坏	SK3675	外：手ケズリ 内：ロクロナデ	—	—	—	一部			675-3
3	土師器・甕	SK3675	外：ヨコナデ→ヘラケズリ 内：ヘラナデ→ヨコナデ	(14.0)	—	—	一部			675-4
4	土師器・甕	SK3675	外：ヨコナデ→手ケズリ 底：手ケズリ 内：ヘラナデ	17.2	7.8	17.1	≒完		24-6	675-5
5	須恵器・坏	SK3675	外：ロクロナデ→回ケズリ 底：ヘラ切り→回ケズリ 内：ロクロナデ	(15.6)	(9.6)	4.1	1/2		24-3	675-1
6	須恵器・壺蓋	SK3675	内外：ロクロナデ	(15.2)	—	—	1/6			675-6



№	土色	土性	備　考	
1	黒褐 2.5Y3/2	シルト	Pit	地山ブロック含。炭化物若干含。
2	黒褐 10YR2/2	シルト	SK3796	地山ブロック含。

№	種類	遺構	特　徴	口径	底径	器高	残存	備　考	写真図版	登録№
1	須恵器・坏	SK3796	内外：ロクロナデ 底：回転糸切り	14.1	6.0	3.8	1/2	にぶい橙色	25-10	796-1
2	須恵器・坏	SK3796	内外：ロクロナデ 底：ヘラ切り	(13.0)	(7.2)	3.6	1/5			796-2
3	須恵器・坏	SK3796	内外：ロクロナデ 底：回転糸切り	(15.5)	(6.2)	4.0	1/2			796-3

第384図　SK3666・3675・3796 土壙跡

南側のグループ

【ＳＫ3003土壙跡】（第322・385図）

調査区南東隅に位置する隅丸長方形の土壙である。

〔重複〕（古）ＳＢ3428

〔規模・堆積土〕長辺1.3m、短辺0.9mで、深さは0.5mである。堆積土は炭化物や地山ブロックを含む黒褐色粘土で、自然堆積である。

〔出土遺物〕土師器坏・甕、須恵器坏・蓋・甕、平瓦、漆紙文書などが出土している。土師器の多くは非ロクロ調整で、ロクロ調整のものは甕の破片に数点みられる程度である。また、土師器甕の中には内面に漆が付着したものも認められる。

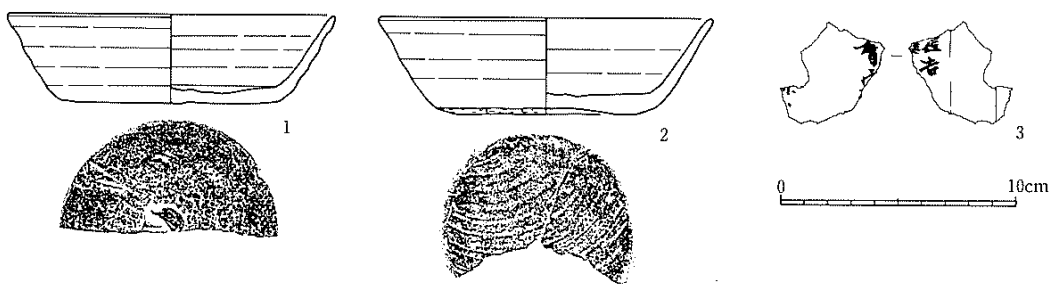
【ＳＫ3011土壙】（第322・385図）

調査区南東隅に位置する不整形の土壙である。

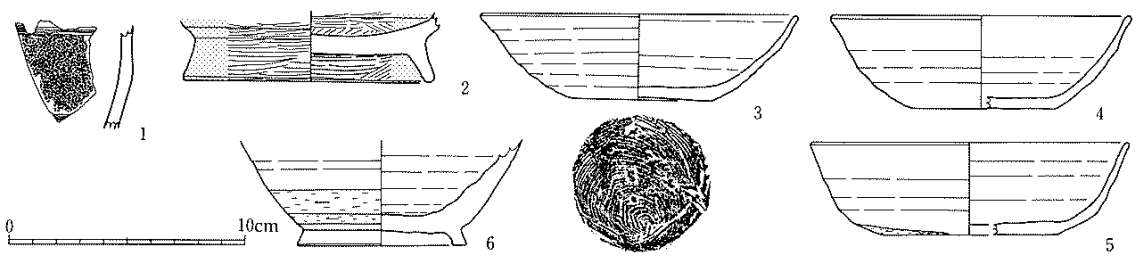
〔重複〕（新）ＳＤ3915・3918　（不明）ＳＢ3430

〔規模・埋土〕長径3.6m、短径1.1mで、深さは0.2mである。埋土は地山ブロックを含む暗褐色シルトで、人為的に埋め戻されている。

〔出土遺物〕土師器、須恵器、軒平瓦、平瓦、丸瓦などが出土している。土師器はロクロ調整のものが中心で、坏類では切り離し後、底部や体部に再調整を加えるものが多い。須恵器坏ではヘラ切り無調



№	種類	遺構	特　　徴	口径	底径	器高	残存	備　考	写真図版	登録№
1	須恵器・坏	SK3003-1層	内外：ロクロナデ 底：ヘラ切り→ナデ	(14.0)	9.2	3.9	2/5		21-14	003-1
2	須恵器・坏	SK3003-3層	内外：ロクロナデ 底：回転糸切り→手ケズリ（周辺部）	(14.2)	7.8	4.2	1/2		21-15	003-2
3	漆書文書	SK3003-3層	表面：4文字程度の墨書 漆面：墨痕は不明	縦4.4	横4.9	－	破片			003-3



№	種類	遺構	特　　徴	口径	底径	器高	残存	備　考	写真図版	登録№
1	土師器・高台椀	SK3011	内外：ヘラケズリ→黒色処理	－	10.7	－	一部			011-5
2	土師器・甕	SK3011	外：ヘラケズリ 内：ヘラナデ	－	－	－	一部	内面に漆付着		011-6
3	須恵器・坏	SK3011	内外：ロクロナデ 底：回転糸切	13.6	5.7	3.6	3/5		21-17	011-1
4	須恵器・坏	SK3011	内外：ロクロナデ 底：ヘラ切り→ナデ	(12.8)	(6.0)	3.9	1/3		21-16	011-2
5	須恵器・坏	SK3011	内外：ロクロナデ 底：手ケズリ	(13.6)	(7.4)	3.9	1/3		21-18	011-3
6	須恵器・瓶	SK3011	外：ロクロナデ→回ケズリ 底：ナデ 内：ロクロナデ	－	(7.2)	－	一部			011-4

第385図　SK3003・3011 土壙跡出土遺物

整のものが主体を占める。また、土師器甕には内面に漆が付着したものも認められる。

【ＳＫ3016土壙跡】（第322・386図）

調査区北西隅にある東西に細長い溝状の土壙である。

〔重複〕（古）ＳＢ3858・3860　（新）ＳＢ3859

〔規模・埋土〕長辺9.7m、短辺1.8～3.1mで、深さは0.1mである。埋土は地山ブロックを多く含む黒褐色粘質シルトで、人為的に埋め戻されている。

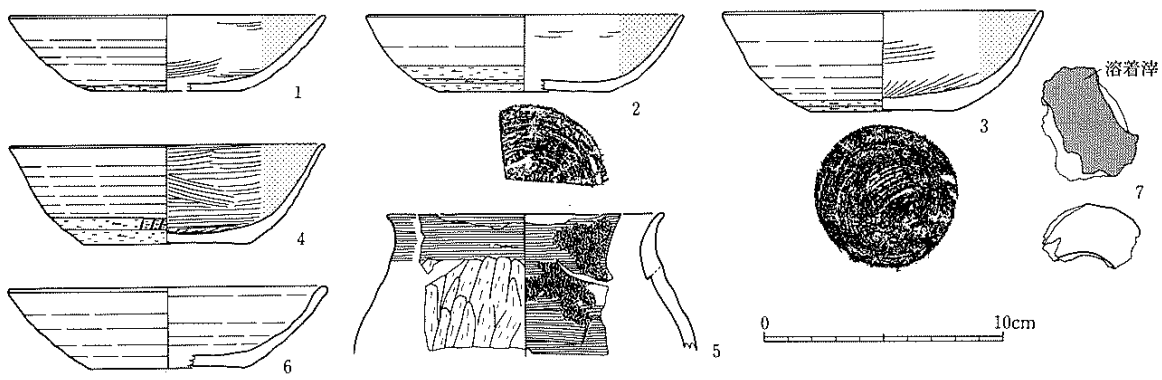
〔出土遺物〕土師器坏・甕・鉢、須恵器坏・高台坏・甕・壷・瓶、羽口などが出土している。土師器はロクロ調整のものが中心で、坏類では切り離し後、底部や体部に再調整を加えるものが多く、胎土に金雲母を多く含むものも認められる。土師器甕には内面に漆が付着したものもある。須恵器坏はヘラ切り無調整のものが約半数を占める。

【ＳＫ3028土壙跡】（第322・386図）

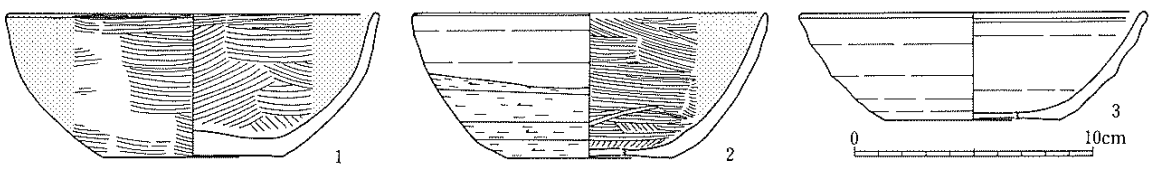
ＳＸ3024の東側に位置する、楕円形の土壙で、西半はＳＤ3025溝跡に壊されている。

〔重複〕（新）ＳＤ3025

〔規模・埋土〕長径2.0m、短径1.2m以上で、深さは0.6mである。埋土は地山ブロックや炭化物を含む黒褐色シルトで、人為的に埋め戻されている。



No	種類	遺構	特　徴	口径	底径	器高	残存	備　考	写真図版	登録No
1	土師器・坏	SK3016	外：ロクロナデ→手ケズリ 底：手ケズリ 内：ミガキ→黒色処理	(13.3)	(6.3)	3.3	1/4			016-2
2	土師器・坏	SK3016	外：ロクロナデ→回ケズリ 底：回転糸切→回ケズリ 内：ミガキ→黒色処理	(13.2)	(7.2)	3.3	一部			016-5
3	土師器・坏	SK3016	外：ロクロナデ→回ケズリ 底：回転糸切→回ケズリ 内：ミガキ→黒色処理	(13.4)	6.0	4.3	3/5		22-1	016-3
4	土師器・坏	SK3016	外：ロクロナデ→回ケズリ 底：回ケズリ 内：ミガキ→黒色処理	(13.2)	6.9	4.2	1/2	金雲母多量		016-4
5	土師器・甕	SK3016	外：ヨコナデ→手ケズリ 内：ヨコナデ・ヘラナデ	(11.6)	－	－	一部	内面に漆付着		016-7
6	須恵器・坏	SK3016	内外：ロクロナデ 底：ヘラ切り→ナデ	(13.4)	(6.6)	3.4	1/4			016-1
7	羽口	SK3016	外：ヘラケズリ？	－	－	－	一部			016-6



No	種類	遺構	特　徴	口径	底径	器高	残存	備　考	写真図版	登録No
1	土師器・椀	SK3028	内外：ロクロナデ→黒色処理 底：手ケズリ	(15.4)	(7.4)	6.0	1/2		21-20	028-3
2	土師器・椀	SK3028	外：ロクロナデ 底：手ケズリ 内：ミガキ→黒色処理	(14.8)	(6.8)	6.1	1/4			028-2
3	須恵器・坏	SK3028	内外：ロクロナデ 底：回転糸切り 内面平滑	(14.6)	(7.2)	4.5	1/4	黒斑 灰白色		028-1

第386図　SK3016・3028 土壙跡出土遺物

〔出土遺物〕土師器、須恵器、丸瓦などが出土している。坏類は土師器、須恵器ともに回転糸切り無調整のものが多く、須恵器坏は内面を平滑に仕上げ、灰白色を呈するものもある。

【ＳＫ3040土壙】（第328・387図）

ＳＢ3423掘立柱建物跡の東側に位置する、楕円形の土壙である。

〔重複〕（古）ＳＢ3419、ＳＤ3063・3065・3066、ＳＫ3067

〔規模・埋土〕長径2.3m以上、短径1.8mで、深さは0.1mである。埋土は地山ブロックや炭化物、焼土を含む黒褐色シルトで、人為約に埋め戻されている。

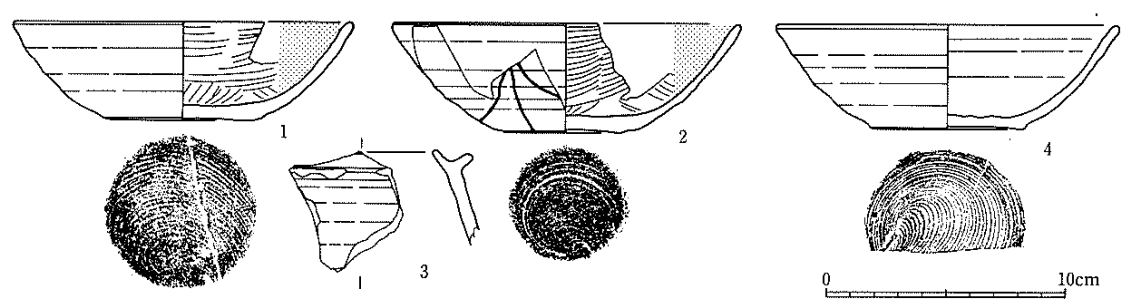
〔出土遺物〕土師器坏・羽釜、須恵器坏、赤焼土器坏、平瓦、丸瓦、鉄滓などが出土している。

【ＳＫ3047土壙跡】（第328・387・388図）

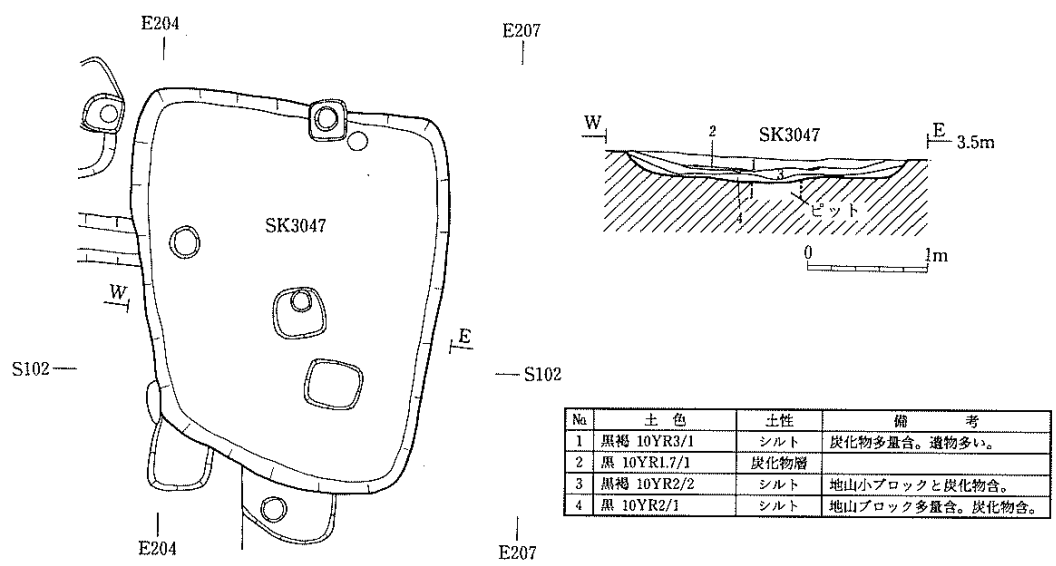
ＳＢ3423掘立柱建物跡の東側に位置する、隅丸長方形の土壙である。

〔重複〕（古）ＳＢ3419・3441、ＳＫ3599、ＳＤ3066　（新）ＳＤ3510

〔規模・堆積土〕長辺3.2m、短辺2.4mで、深さは0.2mである。堆積土は炭化物を多く含む、黒褐色シルトで、自然堆積である。

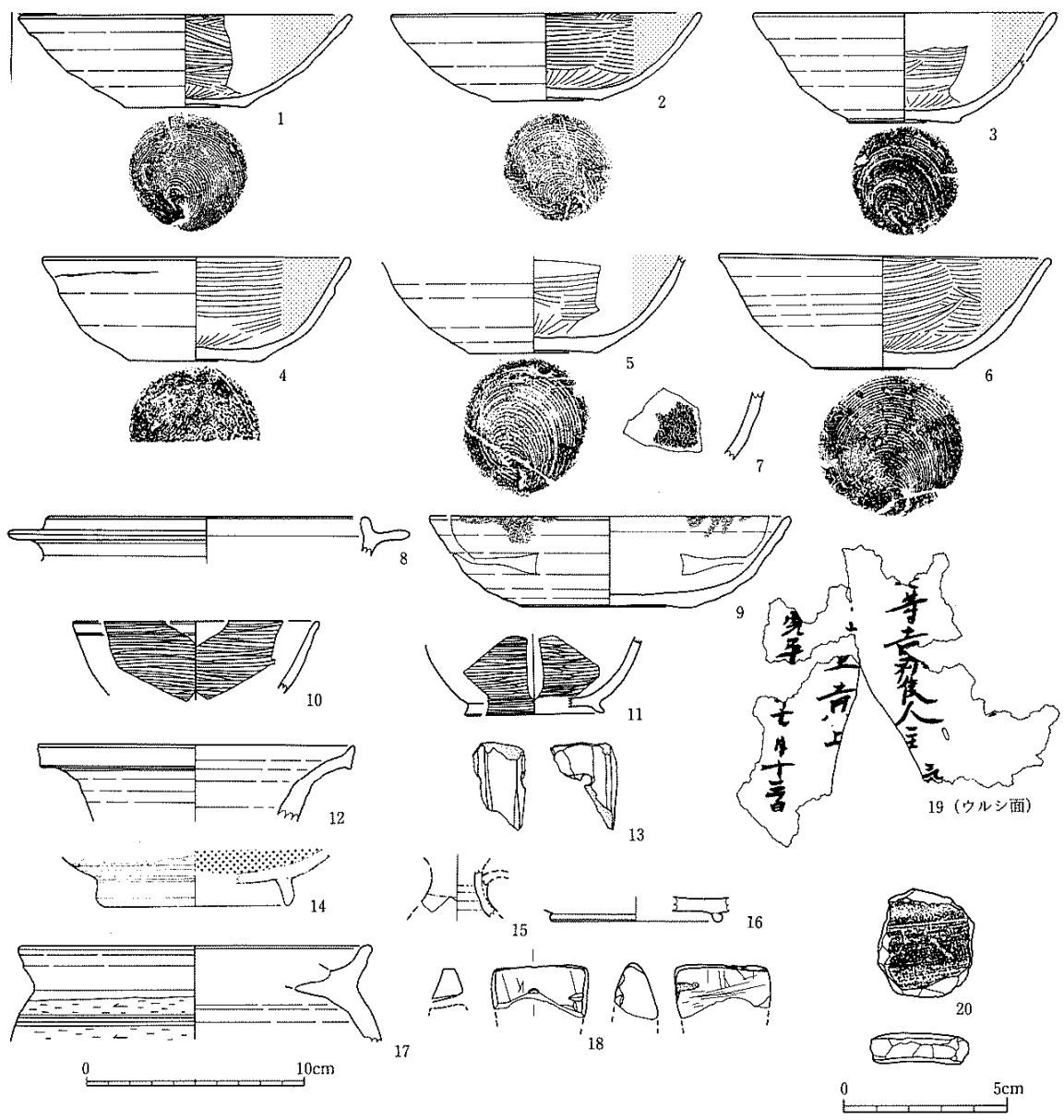


No	種類	遺構	特　　徴	口径	底径	器高	残存	備　　考	写真図版	登録No.
1	土師器・坏	SK3040	外：ロクロナデ 底：回転糸切り 内：ミガキ→黒色処理	(14.2)	6.6	4.2	1/3			040-2
2	土師器・坏	SK3040	外：ロクロナデ 底：回転糸切り 内：ミガキ→黒色処理	(14.6)	5.0	4.6	2/5	ヘラ書「林」?		040-1
3	土師器・羽釜	SK3040	内外：ロクロナデ	—	—	—	一部			040-3
4	赤焼土器・坏	SK3040	外：ロクロナデ 底：回転糸切り 内：ロクロナデ	(14.4)	6.4	4.4	1/3	浅黄色	22-2	040-4



No	土　色	土性	備　　考
1	黒褐 10YR3/1	シルト	炭化物多量合。遺物多い。
2	黒 10YR1.7/1	炭化物層	
3	黒褐 10YR2/2	シルト	地山小ブロックと炭化物合。
4	黒 10YR2/1	シルト	地山ブロック多量合。炭化物合。

第387図　SK3040・3047 土壙跡



No	種類	層位	特　　徴	口径	底径	器高	残存	備　　考	写真図版	登録No
1	土師器・坏	3・4層	外：ロクロナデ 底：回転糸切 内：ミガキ→黒色処理	(15.4)	5.6	4.3	1/4			047-5
2	土師器・坏	3・4層	外：ロクロナデ 底：回転糸切 内：ミガキ→黒色処理	(14.4)	5.0	4.0	1/2		22-14	047-4
3	土師器・坏	3・4層	外：ロクロナデ 底：回転糸切 内：ミガキ→黒色処理	(13.9)	(5.2)	(5.1)	1/4			047-3
4	土師器・坏	1・2層	外：ロクロナデ 底：回転糸切→手ケズリ 内：ミガキ→黒色処理	(14.2)	6.0	4.3	1/4			047-6
5	土師器・坏	1・2層	外：ロクロナデ 底：回転糸切 内：ミガキ→黒色処理	—	6.0	—	1/5			047-2
6	土師器・坏	1・2層	外：ロクロナデ 底：回転糸切 内：ミガキ→黒色処理	15.2	6.6	5.2	≒完		22-12	047-9
7	須恵器・坏？	3・4層	内外：ロクロナデ	—	—	—	一部	内面：漆付着		047-18
8	土師器・羽釜	確認	内外：ロクロナデ	14.4	—	—	一部	使用痕あり		047-8
9	赤焼土器・坏	—	内外：ロクロナデ（内平滑） 底：回転糸切	(16.4)	8.2	4.2	一部	浅黄色 油煙付着		047-7
10	須恵器・坏	3・4層	内外：ミガキ	(11.4)	—	—	一部			047-21
11	須恵器・高台坏	3・4層	外：ヘラケズリ→ミガキ 底：ロクロナデ 内：ミガキ	—	(6.4)	—	一部			047-20
12	須恵器・長頸瓶	確認	内外：ロクロナデ	(14.6)	—	—	一部	大戸		047-13
13	須恵器・壺？	確認	ヘラケズリ	—	—	—	一部	耳部		047-1
14	灰釉陶器・椀	確認	外：ロクロナデ→回転ケズリ 内：ロクロナデ 三日月高台 重ね焼き	—	8.6	—	一部	内面全体に金泥	26-6	047-12
15	灰釉・手付小瓶	3・4層	内外：ロクロナデ	—	—	—	一部			047-15
16	灰釉陶器	3・4層	内外：ロクロナデ 角高台	—	(7.8)	—	一部			047-14
17	転用硯	3・4層	外：ロクロナデ→回転ケズリ 内：ロクロナデ	16.3	—	4.4	一部			047-17
18	砥石	1・2層		長1.8	幅4.4	厚1.3	一部	石材・凝灰岩		047-11
19	漆書文書	1・2層	不整形 二つ折り 一部切断がみられる	径16.0以上		表面：不明 漆面：4行21字				047-19
20	土製円盤	—	土師器甕を転用	長3.3	幅2.9	厚0.7			27-52	047-16

第388図　SK3047 土壙跡出土遺物

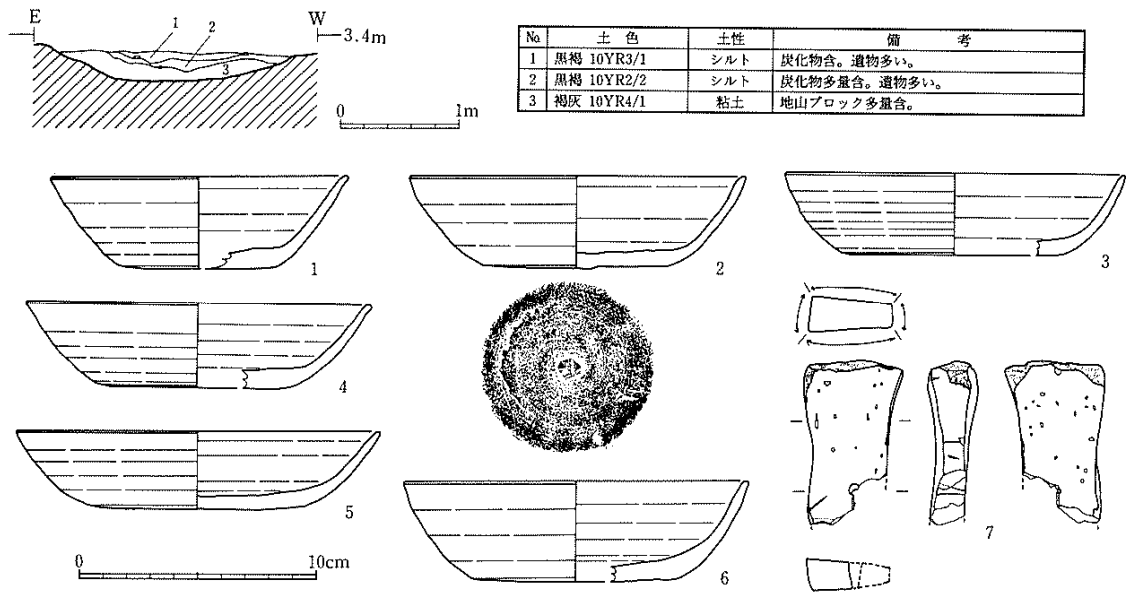
〔出土遺物〕堆積土各層から、土師器、須恵器、赤焼土器、灰釉陶器、平瓦、丸瓦、円面硯、土製円盤、砥石、「寛平」(889～898)の年号が記された漆紙文書などが出土している。これらの中には、内外両面をヘラミガキした須恵器高台坏や、内面の下半全面に金泥の付着した灰釉陶器椀などがある。赤焼土器は確認面のみから出土している。

【ＳＫ3052土壙跡】（第328・389図）

ＳＢ3423掘立柱建物跡の東側に位置する、不整形の土壙である。

〔規模・堆積土〕長径2.1m、短径1.5mで、深さは0.3mである。堆積土は、土層が炭化物を含む自然堆積の黒褐色シルトで、下層が地山ブロックを含む褐灰色粘土であり、人為約に埋め戻されている。

〔出土遺物〕主に1・2層から、土師器、須恵器、平瓦、丸瓦、砥石などが出土している。土師器はほとんどが小破片のため詳細は不明であるが、非ロクロ調整のものが多く、ロクロ調整は少数である。須恵器坏はヘラ切り無調整のものや、軽くナデ調整されるものが多い。



No	土　色	土性	備　　考
1	黒褐 10YR3/1	シルト	炭化物含。遺物多い。
2	黒褐 10YR2/2	シルト	炭化物多量含。遺物多い。
3	褐灰 10YR4/1	粘土	地山ブロック多量含。

No	種類	層位	特　　徴	口径	底径	器高	残存	備　　考	写真図版	登録No.
1	須恵器・坏	1・2層	内外：ロクロナデ 底：ヘラ切り→ナデ	(12.6)	(6.6)	3.9	1/4			052-4
2	須恵器・坏	1・2層	内外：ロクロナデ 底：ヘラ切り	(14.2)	7.7	3.9	1/2		22-5	052-6
3	須恵器・坏	1・2層	内外：ロクロナデ 底：ヘラ切り→ナデ	(14.4)	(9.4)	3.5	1/4			052-2
4	須恵器・坏	1・2層	内外：ロクロナデ 底：ヘラ切り→ナデ	(14.4)	(7.8)	3.6	1/4			052-1
5	須恵器・坏	1・2層	内外：ロクロナデ 底：ヘラ切り→ナデ	(15.4)	(9.2)	3.3	2/5			052-5
6	須恵器・坏	1・2層	内外：ロクロナデ 底：ヘラ切り	(14.6)	(8.8)	4.3	1/2		22-4	052-3
7	砥石	1・2層	凝灰岩	長6.9	幅3.5	厚1.7	一部		28-33	052-7

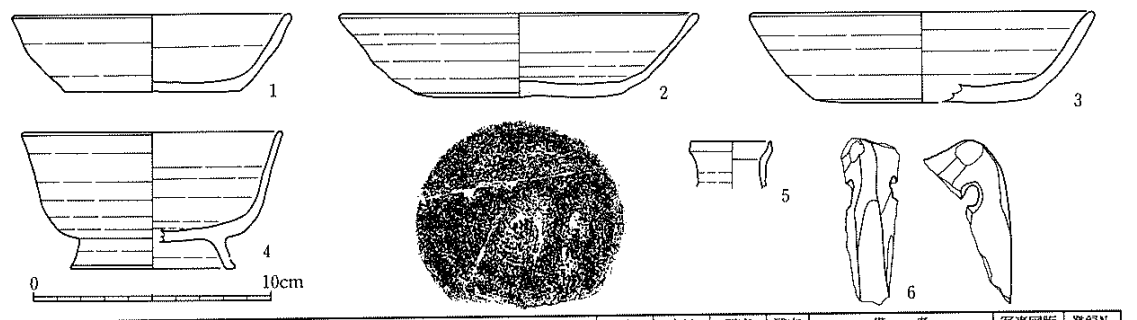
第389図　SK3052 土壙跡

【ＳＫ3053土壙跡】（第328・390図）

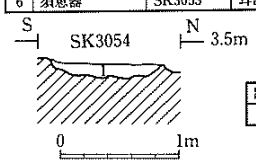
ＳＢ3423掘立柱建物跡の東側に位置する、楕円形の土壙である。

〔規模・堆積土〕長径1.3m、短径1.0mで、深さは0.2mである。堆積土は炭化物や地山ブロックを含む、自然堆積の暗褐色シルトである。

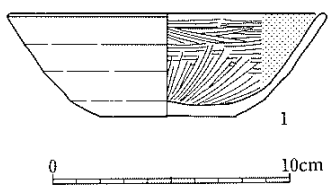
〔出土遺物〕土師器、須恵器、風字硯などが出土している。土師器は小破片が多いが、すべて非ロクロ調整である。須恵器坏はヘラ切り無調整のものや、軽くナデ調整されるものが多い。



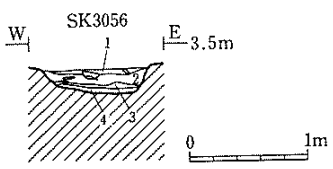
No	種類	遺構	特　徴	口径	底径	器高	残存	備　考	写真図版	登録No
1	須恵器・坏	SK3053	内外：ロクロナデ 底：ヘラ切り	(11.8)	7.4	3.3	1/2			053-2
2	須恵器・坏	SK3053	内外：ロクロナデ 底：ヘラ切り→ナデ	(15.2)	8.8	3.6	1/3			053-3
3	須恵器・坏	SK3053	内外：ロクロナデ 底：ヘラ切り→ナデ	(14.4)	(13.2)	3.9	1/5			053-1
4	須恵器・高台坏	SK3053	内外：ロクロナデ 底：ヘラ切り→ロクロナデ	(11.0)	(7.0)	5.8	1/3		22-7	053-4
5	須恵器・小瓶	SK3053	内外：ロクロナデ	3.4	—	—	一部			053-5
6	須恵器	SK3053	耳部	—	—	—	一部			053-6



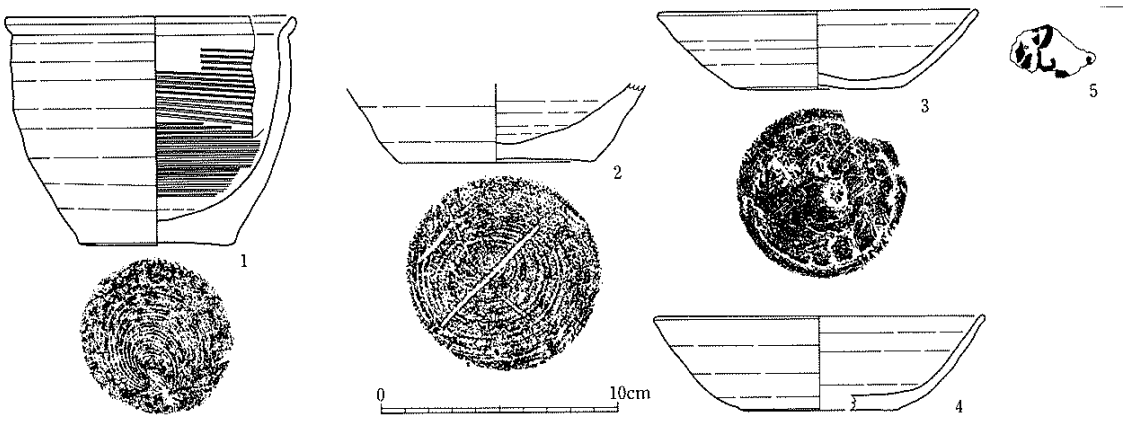
No	土　色	土性	備　考
1	暗褐 10YR3/3	シルト	地山ブロックと炭化物ブロック多量含。



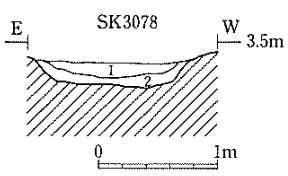
No	種類	遺構	特　徴	口径	底径	器高	残存	備　考	写真図版	登録No
1	土師器・坏	SK3054	外：ロクロナデ 底：回転糸切り 内：ミガキ→黒色処理	(13.4)	5.7	4.4	1/3		22-8	054-1



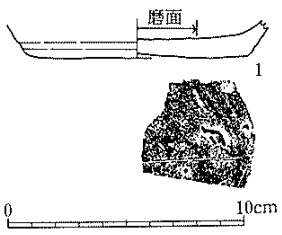
No	土　色	土性	備　考
1	黒褐 10YR2/2	シルト	炭化物含。
2	黒 10YR2/1	シルト	炭化物多量含。地山ブロック含。
3	黒 10YR1.7/1	炭化物層	
4	黒 10YR2/1	シルト	地山ブロック多量含。炭化物含。



No	種類	遺構	特　徴	口径	底径	器高	残存	備　考	写真図版	登録No
1	土師器・甕	SK3056-2層	外：ロクロナデ 底：回転糸切り 内：ロクロナデ→回転ハケメ	(12.0)	6.6	9.7	3/5	口縁部にスス状の付着物	22-11	056-3
2	土師器・甕	SK3056-1層	内外：ロクロナデ 底：回転糸切り	—	8.4	—	一部	ヘラ書「一」使用痕有		056-4
3	須恵器・坏	SK3056-2層	内外：ロクロナデ 底：ヘラ切り	(13.6)	7.2	3.9	1/2		22-9	056-2
4	須恵器・坏	SK3056-2層	内外：ロクロナデ 底：回転糸切り	(14.0)	(6.6)	4.0	2/5		22-10	056-1
5	漆書文書	SK3056-1層	表面：墨痕あり 漆面：不明	縦2.3	横3.6	—	破片			056-5



No	土　色	土性	備　考
1	黒褐 10YR2/3	シルト	地山小ブロックと炭化物含。
2	黒褐 10YR2/3	シルト	地山ブロック多量含。炭化物含。



No	種類	遺構	特　徴	口径	底径	器高	残存	備　考	写真図版	登録No
1	転用硯	SK3078-2層	須恵器坏を転用 底：手ケズリ	—	9.4	—	一部	ヘラ書		078-1

第390図　SK3053・3054・3056・3078 土壙跡

【ＳＫ3054 土壙跡】（第 328・390 図）

ＳＢ3420 掘立柱建物跡の掘方を壊している、楕円形の土壙である。

〔重複〕（古）ＳＢ3420

〔規模・堆積土〕直経 1.3m、短径 1.0mで、深さは 0.2mである。堆積土は炭化物や地山ブロックを含む、自然堆積の暗褐色シルトである。

〔出土遺物〕土師器坏・甕、須恵器坏・甕、平瓦などが少量出土している。

【ＳＫ3056 土壙跡】（第 328・390 図）

ＳＢ3423 掘立柱建物跡の東側に位置する、ほぼ円形の土壙である。

〔重複〕（古）ＳＢ3419、ＳＤ3055

〔規模・埋土〕直径 1.2mで、深さは 0.3mである。埋土は地山ブロックと多量の炭化物を含む黒褐色シルトなどで、人為的に埋め戻されている。

〔出土遺物〕主に 1・2 層から土師器坏・蓋・甕、須恵器坏・甕・壷、平瓦、丸瓦、漆紙文書などが出土している。土師器坏は小破片が多数を占めるものの、ロクロ調整が多く、須恵器坏はヘラ切り無調整のものが主である。また、土師器甕の中には底部にヘラ書きされたものも含まれている。

【ＳＫ3078 土壙跡】（第 315・390 図）

ＳＢ3423 掘立柱建物跡の北で、ＳＤ3064 溝跡の西側に位置する、ほぼ円形の土壙である。

〔規模・埋土〕直径 1.3～1.5mで、深さは 0.2mである。埋土は地山ブロックや炭化物を含む黒褐色シルトで、人為的に埋め戻されている。

〔出土遺物〕ロクロ調整の土師器や須恵器、転用硯、丸瓦などが少量出土している。

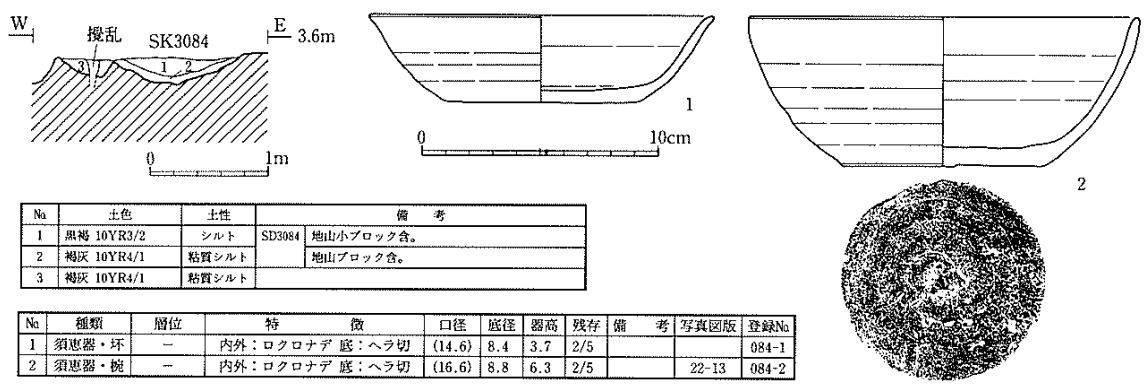
【ＳＫ3084 土跡】（第 315・391 図）

ＳＢ3423 掘立柱建物跡とＳＤ3097 溝跡の間に位置する、楕円形の土壙である。西半はＳＤ3075 溝跡に壊されている。

〔重複〕（古）ＳＢ3418　（新）ＳＤ3077

〔規模・埋土〕長径 1.2m以上、短径 1.2mで、深さは 0.3mである。埋土は地山ブロックを含む黒褐色や褐灰色のシルトで、人為的に埋め戻されている。

〔出土遺物〕土師器、須恵器の他、丸瓦などが少量出土している。



No	土色	土性	備考	
1	黒褐 10YR3/2	シルト	SD3084	地山小ブロック含。
2	褐灰 10YR4/1	粘質シルト		地山ブロック含。
3	褐灰 10YR4/1	粘質シルト		

No	種類	層位	特徴	口径	底径	器高	残存	備考	写真図版	登録No
1	須恵器・坏	－	内外：ロクロナデ 底：ヘラ切	(14.6)	8.4	3.7	2/5			084-1
2	須恵器・椀	－	内外：ロクロナデ 底：ヘラ切	(16.6)	8.8	6.3	2/5		22-13	084-2

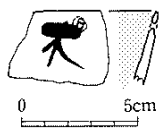
第391図　SK3084 土壙跡

【ＳＫ3108土壙跡】（第315・392図）

ＳＤ3055と3064溝跡の間に位置する、隅丸方形の土壙である。南半はＳＤ3097に壊されている。

〔重複〕（新）ＳＤ3097、ＳＸ3114　（不明）ＳＤ3140

〔規模・堆積土〕東西1.8mで、南北1.1m以上であり、深さは0.2mである。堆積土は炭化物を含む、黒褐色シルトで自然堆積である。



第392図　SK3108 出土

〔出土遺物〕土師器が出土しており、坏はロクロ調整で底部回転糸切り無調整のものが多い。

【ＳＫ3110土壙跡】（第315・393図）

ＳＤ3097溝跡の北東側に位置する、隅丸方形の土壙である。西半はＳＤ3098溝跡に壊されている。

〔重複〕（古）ＳＫ3102　（新）ＳＤ3098

〔規模・堆積土〕南北1.2mで、東西0.7m以上であり、深さは0.3mである。堆積土は炭化物を多く含む、黒色や黒褐色のシルトで、自然堆積である。

〔出土遺物〕ロクロ調整の土師器、須恵器、丸瓦などが出土している。土師器が最も多く、坏は回転糸切り無調整のものが多い。須恵器は少量である。

【ＳＫ3111土壙跡】（第315・393図）

ＳＤ3014溝跡の南側に位置する、隅丸方形の土壙である。

〔重複〕（古）ＳＤ3097・3140、ＳＢ3416

〔規模・堆積土〕東西3.4m、南北3.2mで、深さは0.3mである。堆積土は自然堆積の黒褐色シルトである。

〔出土遺物〕土師器、須恵器、平瓦、丸瓦、土製円盤、石器などが出土している。坏類では土師器が最も多く、回転糸切り無調整のものや手持ちヘラケズリされるものが多い。また、これらの中には漆が付着したものも含まれている。

【ＳＫ3116土壙跡】（第393図）

ＳＤ3097溝跡の南側に位置し、円形と思われる土壙で、南半はＳＤ3099溝跡に壊されている。

〔重複〕（古）ＳＤ3125　（新）ＳＤ3097

〔規模・堆積土〕直径1.4m以上で、深さは0.2mである。堆積土は炭化物や地山ブロックを含む、自然堆積の黒褐色シルトである。

〔出土遺物〕土師器が少最出土しており、口縁部付近に油煙が付着したものも含まれている。

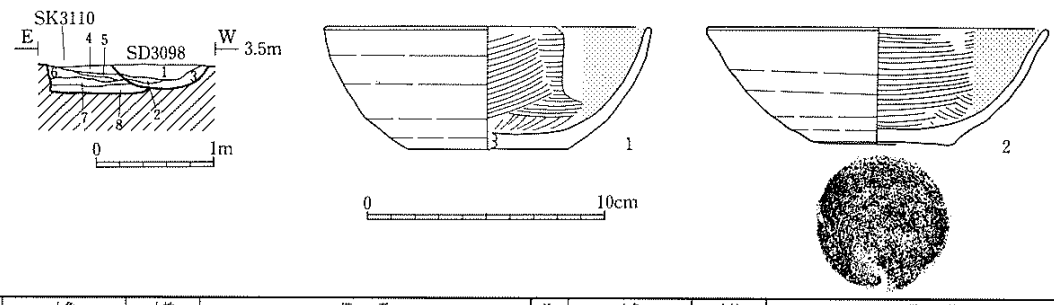
【ＳＫ3117土壙跡】（第315・394図）

ＳＤ3014溝跡の南側に位置する、隅丸長方形の土壙である。

〔重複〕（新）ＳＢ3415　（不明）ＳＫ3121

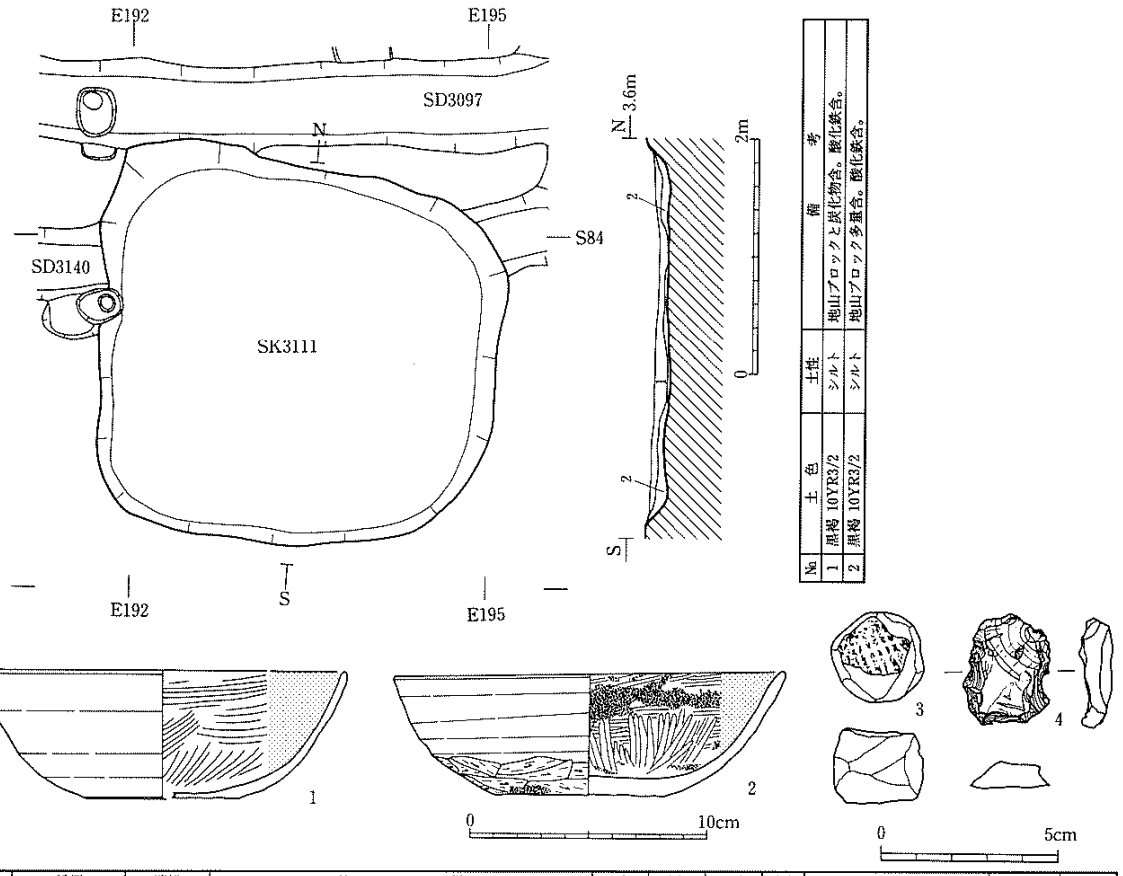
〔規模・埋土〕長辺1.8m、短辺1.0mで、深さは0.6mである。埋土は地山ブロックや炭化物を含む黒褐色粘質シルトなどで、人為的に埋め戻されている。

〔出土遺物〕土師器、須恵器、平瓦、丸瓦、漆紙文書、銅製品、布などが出土している。土師器は非ロクロ調整で、坏や甕などには漆が付着したものが多く含まれている。



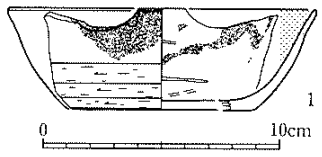
No	土色	土性	備考		No	土色	土性	備考	
1	黒褐 10YR2/2	シルト	SD3098	炭化物と酸化鉄含。土器片含。	5	黒褐 10YR2/2	シルト	SK3110	炭化物含。
2	黒褐 10YR2/2	シルト		炭化物と酸化鉄含。	6	黒 10YR2/1	シルト		地山ブロックと炭化物含。酸化鉄含。
3	黒褐 10YR2/2	シルト		地山土含。	7	黒 10YR2/1	シルト		地山ブロックと炭化物含。
4	黒褐 10YR3/2	シルト	SK3110	炭化物と酸化鉄含。	8	黒 10YR1.7/1	シルト		地山ブロックと炭化物含。

No	種類	遺構	特徴	口径	底径	器高	残存	備考	写真図版	登録No
1	土師器・坏	SK3110	外：ロクロナデ 底：回転糸切 内：ミガキ→黒色処理	(13.8)	(6.8)	5.2	1/4			110-1
2	土師器・坏	SK3110	外：ロクロナデ 底：回転糸切 内：ミガキ→黒色処理	14.5	5.6	4.9	2/3		22-19	110-2



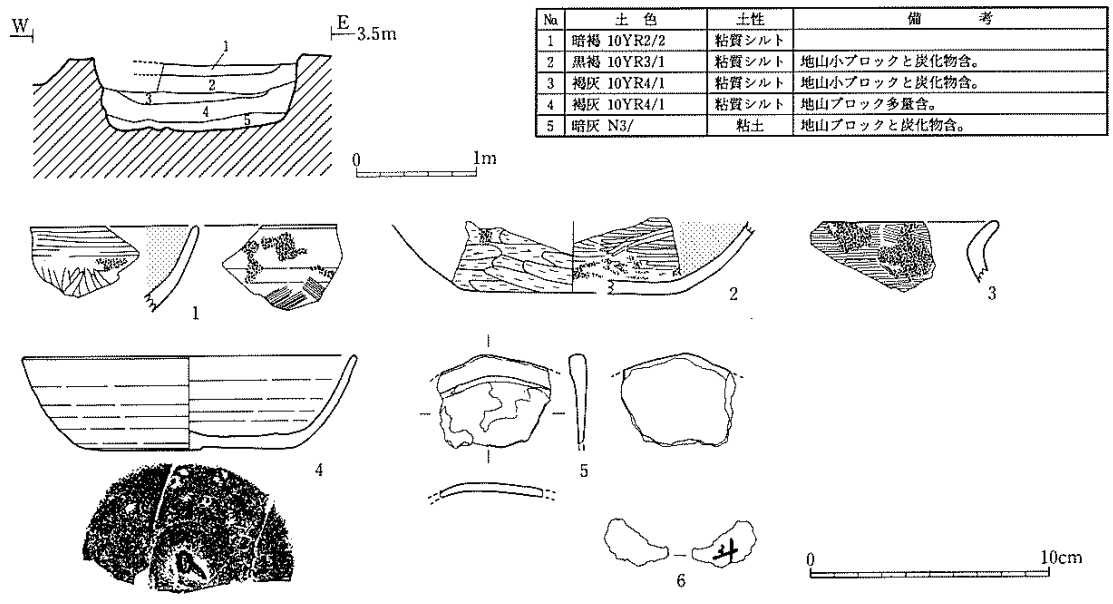
No	土色	土性	備考
1	黒褐 10YR3/2	シルト	地山ブロックと炭化物含。酸化鉄含。
2	黒褐 10YR3/2	シルト	地山ブロック多量含。酸化鉄含。

No	種類	遺構	特徴	口径	底径	器高	残存	備考	写真図版	登録No
1	土師器・坏	SK3111	外：ロクロナデ 底：回転糸切 内：ミガキ→黒色処理	(15.6)	6.8	5.4	1/2		22-20	111-1
2	土師器・坏	SK3111	外：ロクロナデ→手ケズリ？ 底：手ケズリ 内：ミガキ→黒色処理	16.5	7.1	5.1	3/4	内外面に漆付着	25-16	111-3
3	円盤	SK3111		長2.6	幅2.6	厚1.9	一部		27-54	111-2
4	石器	SK3111	黒曜石	長3.0	幅2.3	厚0.9	一部		28-19	111-4



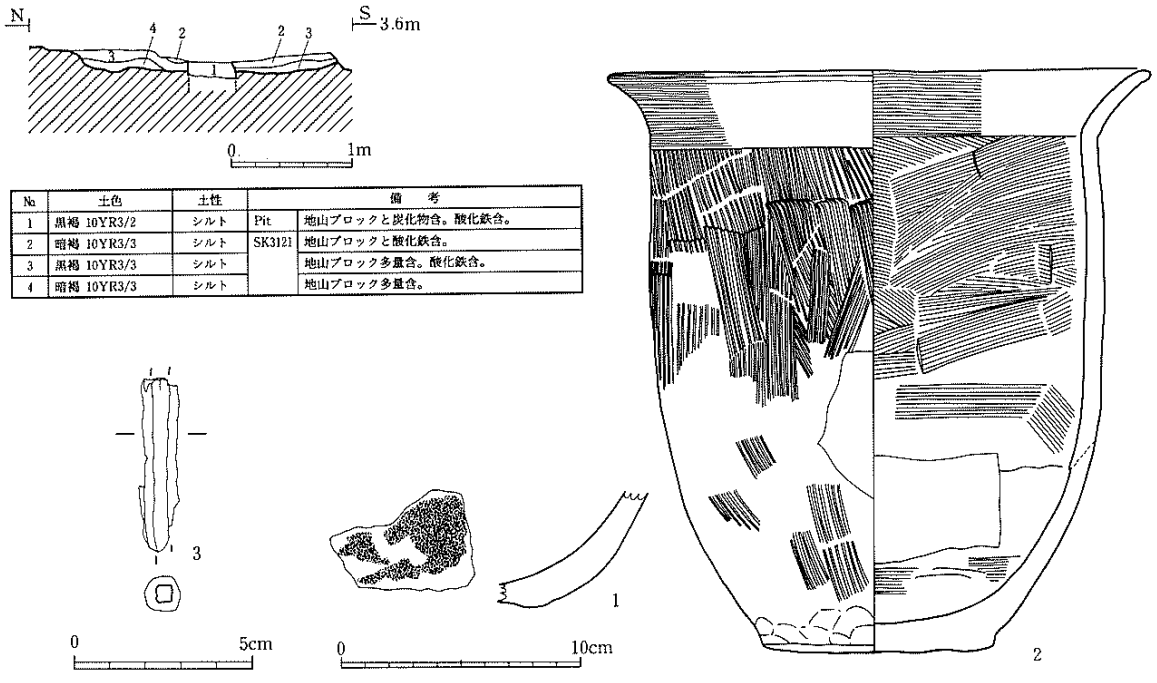
No	種類	遺構	特徴	口径	底径	器高	残存	備考	写真図版	登録No
1	土師器・坏	SK3116	外：ロクロナデ→回ケズリ 底：回ケズリ 内：ミガキ→黒色処理	(13.1)	(7.8)	4.3	1/4	油煙付着 金雲母含		116-1

第393図 SK3110・3111・3116 土壙跡



No	土　色	土性	備　　考
1	暗褐 10YR2/2	粘質シルト	
2	黒褐 10YR3/1	粘質シルト	地山小ブロックと炭化物含。
3	褐灰 10YR4/1	粘質シルト	地山小ブロックと炭化物含。
4	褐灰 10YR4/1	粘質シルト	地山ブロック多量含。
5	暗灰 N3/	粘土	地山ブロックと炭化物含。

No	種類	層位	特　　徴	口径	底径	器高	残存	備　　考	写真図版	登録No
1	土師器・椀？	SK3117-2層	外：ロクロナデ 内：ミガキ→黒色処理	—	—	—	一部	内外面に漆付着		117-4
2	土師器・椀	SK3117-4層	外：手ケズリ 底：手ケズリ 内：ミガキ→黒色処理	—	15.4	—	一部			117-3
3	土師器・甕	SK3117-2層	内外：ヨコナデ	—	—	—	一部	内面に漆付着		117-5
4	須恵器・坏	SK3117	内外：ロクロナデ 底：ヘラ切り→ナデ	(14.0)	8.8	3.9	2/5			117-1
5	不明銅製品	SK3117-1層		—	—	—	一部		27-8	117-2
6	漆書文書	SK3117-2層	表面：1文字「斗」 漆面：不明	縦2.0	横2.7	—	破片			117-6



No	土色	土性	備　考	
1	黒褐 10YR3/2	シルト	Pit	地山ブロックと炭化物含。酸化鉄含。
2	暗褐 10YR3/3	シルト	SK3121	地山ブロックと酸化鉄含。
3	黒褐 10YR3/3	シルト		地山ブロック多量含。酸化鉄含。
4	暗褐 10YR3/3	シルト		地山ブロック多量含。

No	種類	層位	特　　徴	口径	底径	器高	残存	備　　考	写真図版	登録No
1	土師器・甕	1層	内外：ナデ	—	—	—	一部	内面に漆付着		121-3
2	土師器・甕	1層	外：ハケメ→ヨコナデ→指オサエ 底：木葉痕 内：ヘラナデ→ヨコナデ	22.7	9.6	24.4	5/6		23-1	121-1
3	釘？	1層		—	—	—	一部			121-2

第394図　SK3117・3121 土壙跡

【ＳＫ3121土壙跡】（第315・394図）

ＳＤ3014溝跡の南側に位置する、長楕円形の土壙で、南半は溝跡に壊されている。

〔重複〕（古）ＳＤ3120　（新）ＳＢ3415、ＳＤ3097・3140　（不明）ＳＫ3117

〔規模・埋土〕直径4.5m、短径1.6mで、深さは0.2mである。埋土は地山ブロックを含む暗褐色粘質シルトで、人為的に埋め戻されている。

〔出土遺物〕土師器、須恵器、釘などが出土している。土師器甕は非ロクロ調整で、器面調整は外面がハケメ後ヨコナデ、内面はヘラナデ後、ヨコナデがなされている。また、土師器には漆が付着したものも含まれている。

【ＳＫ3142土壙跡】（第395図）

ＳＤ3014溝跡の北西側で重複する、円形と思われる土壙である。西半は調査区外に延びている。

〔重複〕（新）ＳＤ3014

〔規模・埋土〕直径1.4m以上で、深さは0.6mである。堆積土は3層に細分され、1・2層は地山ブロックを含む黒褐色粘質シルトで、人為約に埋め戻されており、3層が砂と黒褐色粘土の互層で、自然堆積である。

〔出土遺物〕土師器、須恵器、石製模造品（鏡形）などが出土している。

No	種類	層位	特　　徴	口径	底径	器高	残存	備　　考	写真図版	登録No
1	土師器・坏	－	外：ヨコナデ・手ケズリ 内：ミガキ→黒色処理	(15.0)	－	－	1/4			142-1
2	石製模造品	－	鏡 粘板岩	長2.3	幅2.4	厚0.4	一部		28-2	142-2

第395図　SK3142 土壙跡出土遺物

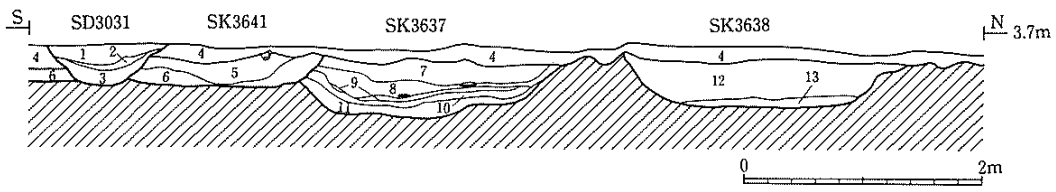
【ＳＫ3637土壙跡】（第328・396・399図）

ＳＸ3029工房跡の西側に位置する、隅丸方方形と考えられる土壙である。西半は調査区外に延びている。

〔重複〕（古）ＳＢ3853　（新）ＳＩ3634

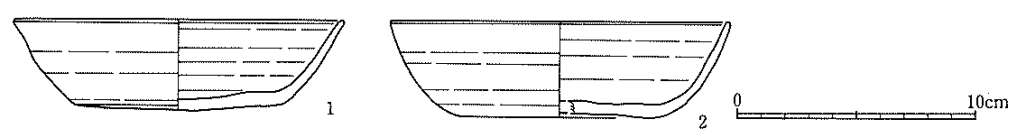
〔規模・堆積土〕長辺2.2m以上、短辺1.8m以上で、深さは0.5mである。堆積土は5層に細分され、第3層の炭化物層をはさみ、1・2層は炭化物を含む自然堆積の褐灰色や黒褐色のシルトで、4・5層は地山ブロックを多く含む褐灰色粘質シルトで、人為的に埋め戻されている。

〔出土遺物〕主に1～3層から土師器、須恵器、丸瓦、円面硯、漆漉布などが出土している。須恵器が最も多く、坏類はヘラ切り無調整が約半数を占め、次に、切り離し後、回転ヘラケズリされるものが多い。また、「壷Ｇ」と考えられる底部破片が出土している。土師器はほとんどが小破片であるが、ロクロ調整のものも少量含まれている。坏類の中にはヘラ書土器も含まれる。



No	土色	土性	備考	
1	黒褐 10YR3/1	シルト	SD3031	地山ブロック少量含。
2	黒 10YR2/1	粘質シルト		
3	黒褐 10YR3/1	シルト		炭化物若干含。
4	黒褐 10YR3/1	シルト	基本層位第II層	炭化物多量含。
5	黒褐 10YR3/2	シルト	SI3634	炭化物少量含。
6	黒褐 10YR3/1	シルト		地山小ブロック含。炭化物若干含。

No	土色	土性	備考	
7	褐灰 10YR4/1	シルト	SK3637	炭化物少量含。
8	黒褐 10YR3/1	シルト		地山ブロック多量含。植物遺体含。
9	黒 10YR2/1	粘土		炭化物多量含。
10	褐灰 10YR4/1	粘質シルト		地山ブロック含。
11	褐灰 10YR4/1	粘質シルト		地山ブロック多量含。
12	褐灰 10YR4/1	シルト	SK3638	炭化物少量含。地山ブロック若干含。
13	褐灰 10YR4/1	シルト		炭化物多量含。



No	種類	遺構	特徴	口径	底径	器高	残存	備考	写真図版	登録No
1	須恵器・坏	SD3638	内外：ロクロナデ 底部：ヘラ切り	(13.9)	8.8	4.8	1/2		24-1	638-2
2	須恵器・坏	SD3638	内外：ロクロナデ 底部：ヘラ切り	(14.3)	(8.2)	4.0	1/4			638-1

第396図　SK3637・3638 土壙跡

【ＳＫ3638土壙跡】（第328・396図）

ＳＸ3029工房跡の西側に位置し、円形と思われる土壙である。東半は調査区外に延びている。

〔重複〕（古）ＳＢ3852・3853　（不明）ＳＢ3822

〔規模・埋土〕直径2.1m以上で、深さは0.4mである。埋土は炭化物や地山ブロックを含む褐灰色シルトで、人為的に埋め戻されている。

〔出土遺物〕土師器、須恵器、平瓦、丸瓦などが出土している。須恵器が多く、坏類はヘラ切り無調整が多数を占める。土師器はほとんどが小破片であるが、ロクロ調整のものも少量含まれている。

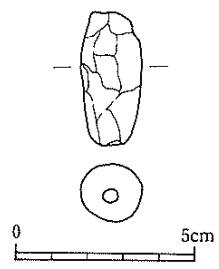
【ＳＫ3640土壙跡】（第328・397図）

ＳＸ3029工房跡の西側に位置する、隅丸方形の土壙である。南半はＳＤ3031溝跡に壊されている。

〔重複〕（古）ＳＢ3826・3827、ＳＩ3634　（新）ＳＤ3031

〔規模〕東西1.9m以上、南北1.8m以上で、深さは0.2mである。

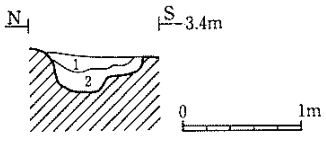
〔出土遺物〕土師器、須恵器、平瓦、丸瓦。土錘、羽口などが出土している。土師器、須恵器ともに少破片のため、詳細は不明であるが、土師器はロクロ調整のものが多い。須恵器坏にはヘラ書きされたものも含まれる。



第397図　SK3640 土壙跡出土遺物

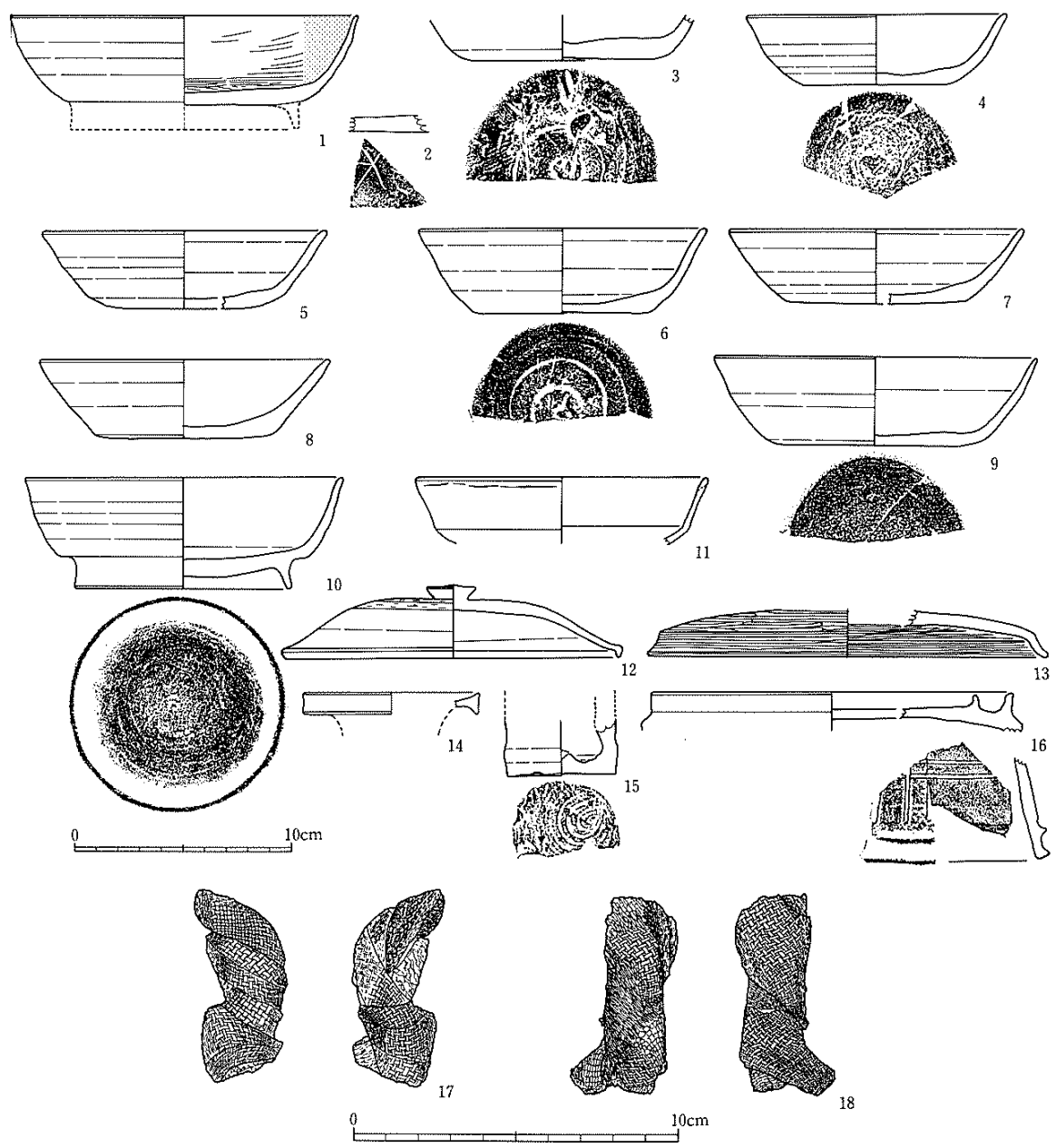
【ＳＫ3657土壙跡】（第315・398図）

ＳＤ3014溝跡の東側で重複し、やや溝状を呈する土壙である。底面には凹凸が認められる。



No	土色	土性	備考
1	黒褐 10YR3/1	シルト	炭化物ブロックと酸化鉄含。
2	黒褐 10YR2/3	シルト	地山ブロックと酸化鉄含。

第398図　SK3657 土壙跡断面図

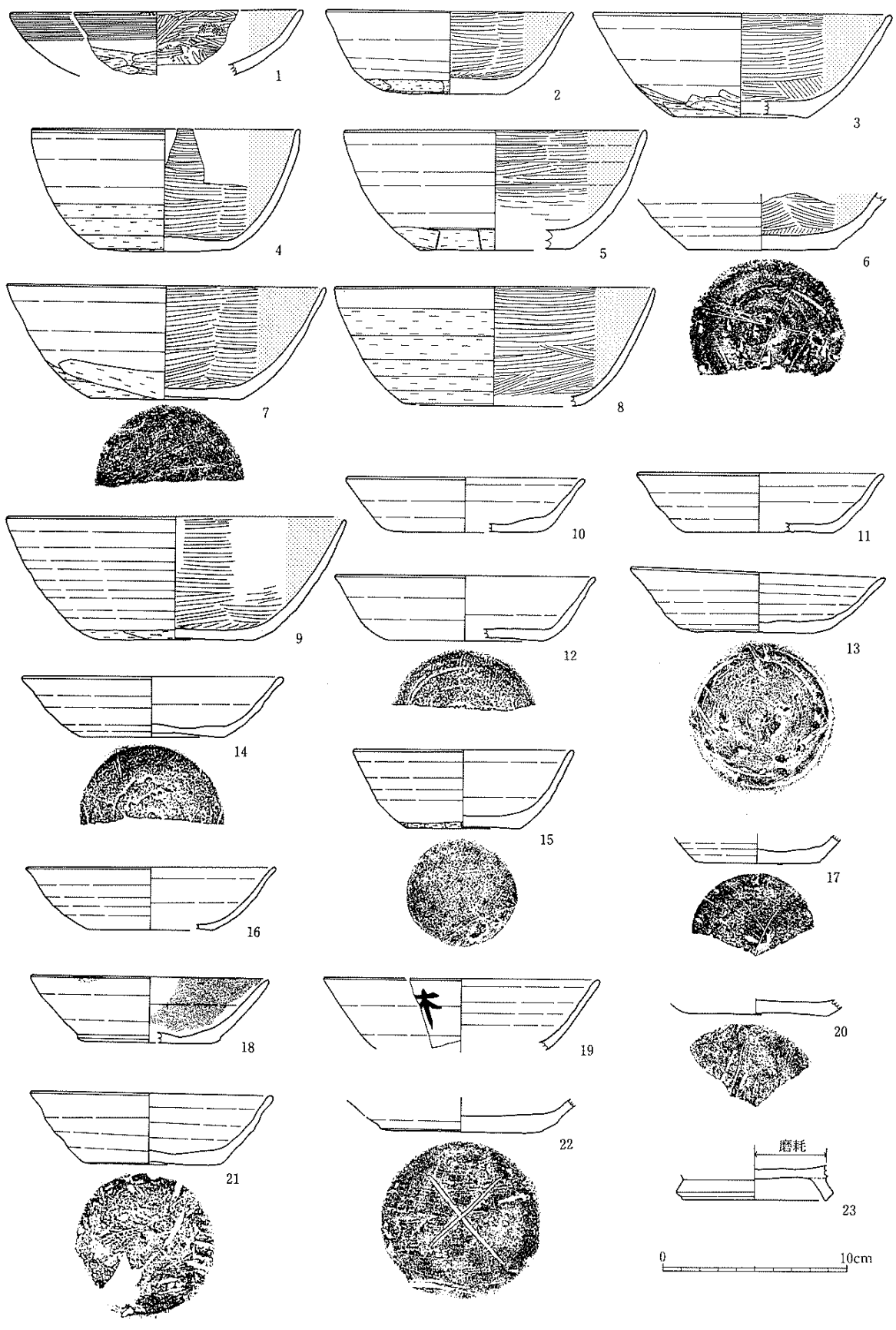


No.	種類	層位	特　　徴	口径	底径	器高	残存	備　　考	写真図版	登録No.
1	土師器・高台坏	—	外：ロクロナデ 底：回・糸→回ケズリ→ロクロナデ 内：ミガキ→黒・処	—	—	—				637-12
2	土師器・坏	4・5層	内外：ミガキ→黒色処理	—	—	—	一部	ヘラ書		637-13
3	須恵器・坏	1-3層	内外：ロクロナデ 底：ヘラ切り	—	8.7	—	一部	ヘラ書「一」?		637-7
4	須恵器・坏	1-3層	内外：ロクロナデ 底：ヘラ切り	(12.1)	(6.6)	3.3	1/4			637-5
5	須恵器・坏	1-3層	内外：ロクロナデ 底：ヘラ切り	(13.2)	(7.4)	(3.6)	1/4			637-6
6	須恵器・坏	1-3層	内外：ロクロナデ 底：ヘラ切り	(13.3)	(8.3)	4.0	2/5			637-1
7	須恵器・坏	1-3層	内外：ロクロナデ 底：ヘラ切り→ナデ	(13.6)	(8.3)	3.5	2/5		23-9	637-2
8	須恵器・坏	1-3層	内外：ロクロナデ 底：ヘラ切り→ナデ?	(13.4)	(8.4)	3.7	1/3			637-4
9	須恵器・坏	1-3層	内外：ロクロナデ 底：回ケズリ	(15.5)	(8.8)	4.1	1/3			637-3
10	須恵器・高台坏	1-3層	内外：ロクロナデ 底：回転糸切り→ロクロナデ	(14.5)	10.1	5.1	3/5		23-10	637-8
11	須恵器・高台椀	1-3層	内外：ロクロナデ	(13.6)	—	—	一部	浅黄色（不良）		637-9
12	須恵器・蓋	1-3層	外：ロクロナデ→回ケズリ 内：ロクロナデ	15.6	—	3.4	3/4		23-7	637-10
13	須恵器・蓋	1-3層	外：ロクロナデ→回ケズリ→ミガキ 内：ロクロナデ→ミガキ	(18.6)	—	—	1/8			637-18
14	灰釉陶器・長頸瓶	1-3層	内外：ロクロナデ	(8.0)	—	—	一部			637-14
15	須恵器・壺	1-3層	内外：ロクロナデ（内は工具によるもの）	—	5.0	—	一部	「壺G」		637-11
16	円面硯	1-3層		16.8	—	—	一部	硯面と脚部	26-14	637-15
17	漆漉布	1-3層		長6.0	幅2.4	—	一部			637-17
18	漆漉布	1-3層		長6.1	幅1.9	—	一部			637-16

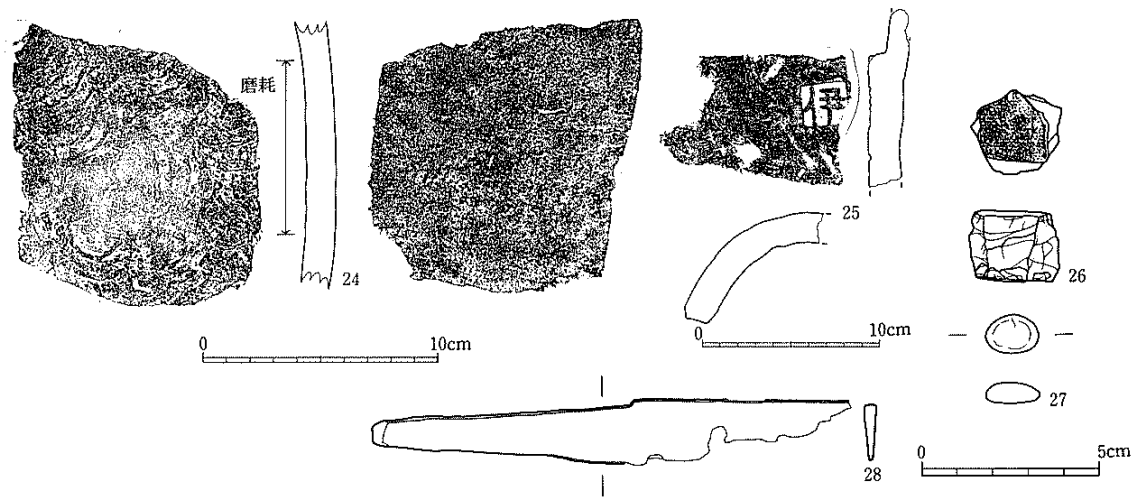
第399図　SK3637 土壙跡出土遺物

〔重複〕（古）ＳＤ3014　（新）ＳＫ3391、ＳＤ3129
〔規模・埋土〕長辺 3.1m、短辺 0.9mで、深さは 0.4mである。埋土は炭化物や地山ブロックを含む黒褐色シルトで、人為的に埋め戻されている。
〔出土遺物〕土師器、丸瓦が少量出土している。
【ＳＫ3727 土壙跡】（第 322・400～402 図）
ＳＤ3026 溝跡の東側に位置する、不整形の土壙で、底面に段を有している。
〔重複〕（古）ＳＤ3764　（新）ＳＤ3026　（不明）ＳＢ3431、ＳＫ3035、ＳＤ3051
〔規模・堆積土〕長径 4.4m以上、短径 3.4m以上で、深さは 0.8mである。堆積土は 9 層に細分され、1～3 層が炭化物を多く含む、黒色や黒褐色シルト、4～9 層が黄灰砂質シルトや、地山ブロックを多く含む黒褐色シルトである。
〔出土遺物〕土師器、須恵器、転用硯、平瓦、丸瓦、土製円盤、砥石、碁石などが出土している。土師器、須恵器の坏にはヘラ書や墨書されたもの、丸瓦には「伊」の刻印瓦もみられる。
1～3 層からは土師器、須恵器、丸瓦、土製円盤、碁石、刀子などが出土している。
土師器坏・椀はロクロ調整で手持ちヘラケズリや回転ヘラケズリが施されている。須恵器坏は口径が 13㎝ 程のものが多く、底部の切り離し・調整は手持ちヘラケズリ調整が施されるものとヘラ切り無調整のものが多い。
4～9 層からは土師器、須恵器、土製円盤、砥石などが出土している。
土師器坏は非ロクロ調整の平底で体部下端に沈線を有するものと無段のものとがある。外面調整は前者がヨコナデ・ヘラケズリ、後者がヨコナデ・ヘラケズリ後ヘラミガキが施されており、内面はともにヘラミガキ後黒色処理である。椀はロクロ調整で底部から体部下端にかけて手持ちヘラケズリ調整が施されている。甕は長胴形と鉢形があり、ともに非ロクロ調整で鉢形のものは頚部に軽い段を有する。体部外面の調整は前者がヘラケズリ、後者がハケメである。
須恵器坏は手持ちヘラケズリ調整が施されるものと、ヘラ切り無調整とがあり後者が多い。1～3 層出土のものと比較すると口径は 14㎝ 以上のものが主でやや大きめである。高台坏は内外面をヘラミガキされており、高さ約 0.5㎝ の低い高台が付く。高台椀は高台部を欠損しており、底部から直線的に立ち上がる椀部のみが残存している。
【ＳＫ3904 土壙跡】
調査区西南隅にある、円形を呈すると思われる土壙である。西半は攪乱溝に壊されている。
〔規模・堆積土〕径 0.9m以上で、深さは 0.2mである。堆積土は褐灰色シルトである。
〔出土遺物〕土師器、須恵器、円面硯などが出土している。

なお、上記以外の土壙跡からも多くの遺物が出土している（第 403～406 図）。



第400図　SK3727 土壙跡 1 ～ 3 層出土遺物(1)

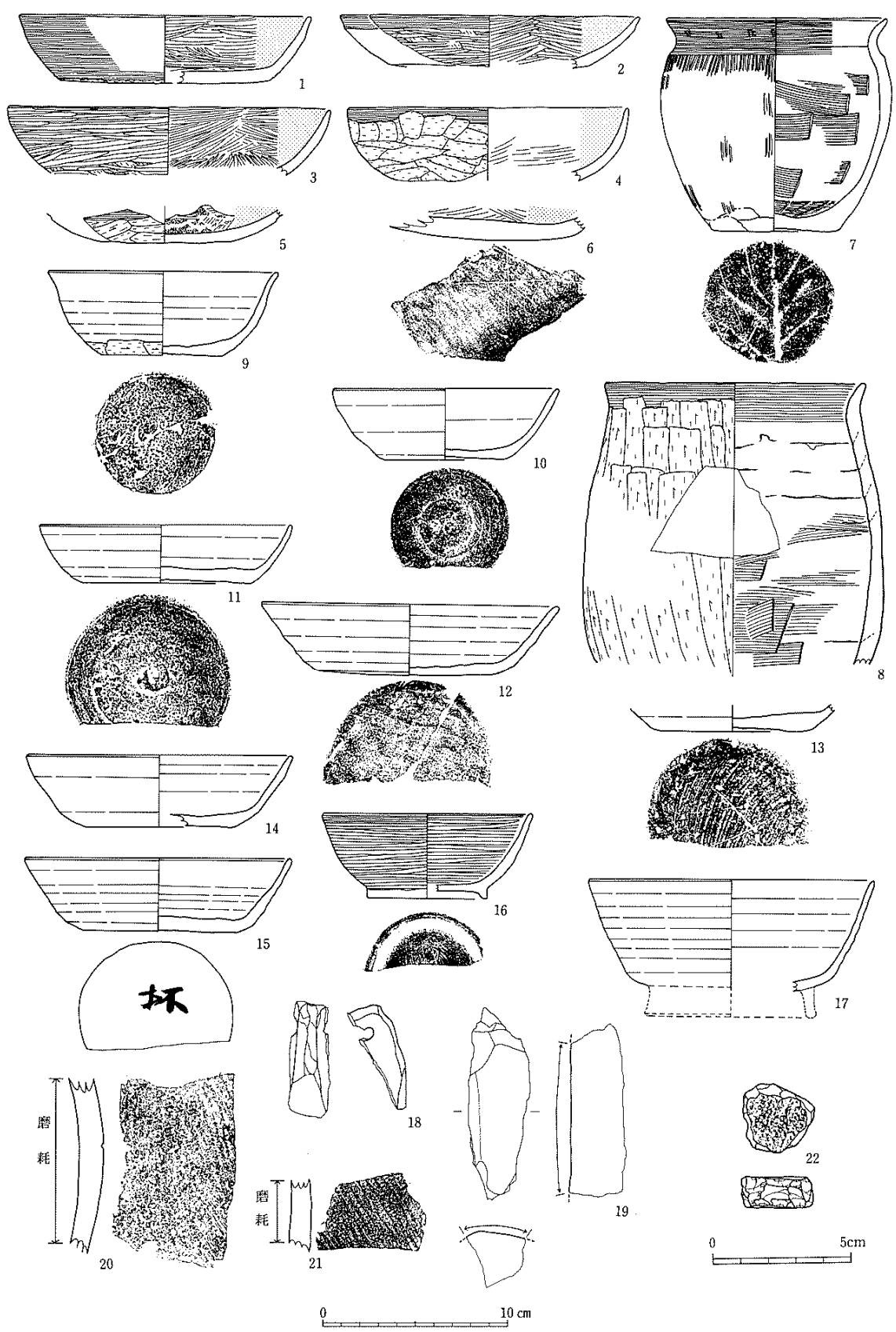


No	種類	層位	特　　徴	口径	底径	器高	残存	備　　考	写真図版	登録No.
1	土師器・坏	1～3層	外：ヨコナデ・ヘラケズリ 内：ミガキ→黒色処理	(16.0)	－	－	一部	内面に漆付着		727-42
2	土師器・坏	1～3層	外：ロクロナデ→手ケズリ 底：ヘラ切→手ケズリ 内：ミガキ→黒・処	13.4	6.7	4.6	3/4		24-9	727-19
3	土師器・椀	1～3層	外：ロクロナデ→手ケズリ 底：手ケズリ 内：ミガキ→黒色処理	(16.2)	(7.2)	5.7	1/3			727-32
4	土師器・椀	1～3層	外：ロクロナデ→回ケズリ 底：回ケズリ 内：ミガキ→黒色処理	(14.6)	7.5	6.7	1/5			727-23
5	土師器・椀	1～3層	外：ロクロナデ→手ケズリ 底：手ケズリ 内：ミガキ→黒色処理	(16.4)	(8.2)	6.6	1/5			727-24
6	土師器・坏	1～3層	外：ロクロナデ 底：ヘラ切 内：ミガキ→黒色処理	－	8.3	－	一部	ヘラ書「×」		727-50
7	土師器・椀	1～3層	外：ロクロナデ→手ケズリ 底：手ケズリ 内：ミガキ→黒色処理	(17.2)	(8.4)	6.2	1/3		24-11	727-21
8	土師器・椀	1～3層	外：ロクロナデ→回ケズリ 底：回ケズリ 内：ミガキ→黒色処理	(17.4)	(9.8)	(6.5)	1/5			727-25
9	土師器・椀	1～3層	外：ロクロナデ→手ケズリ 底：手ケズリ 内：ミガキ→黒色処理	(18.5)	8.5	6.7	2/5			727-22
10	須恵器・坏	1～3層	内外：ロクロナデ 底：ヘラ切り→ナデ	(13.8)	(8.2)	3.0	1/5			727-14
11	須恵器・坏	1～3層	内外：ロクロナデ 底：ヘラ切り	(13.4)	(8.0)	3.2	1/3	橙色 焼けはじけ有		727-9
12	須恵器・坏	1～3層	内外：ロクロナデ 底：ヘラ切り→ナデ	(14.2)	(8.2)	3.6	2/5	海綿骨針多量	25-1	727-6
13	須恵器・坏	1～3層	内外：ロクロナデ 底：ヘラ切り	13.8	7.7	3.3	4/5		25-2	727-1
14	須恵器・坏	1～3層	内外：ロクロナデ 底：ヘラ切り	(14.2)	7.8	3.3	1/4			727-7
15	須恵器・坏	1～3層	外：ロクロナデ→手ケズリ 底：手ケズリ 内：ロクロナデ	(12.1)	(6.2)	4.4	1/3	橙色（硬質）		727-10
16	須恵器・坏	1～3層	内外：ロクロナデ 底：ヘラ切り？	(13.6)	(6.8)	3.4	1/6			727-15
17	須恵器・坏	1～3層	内外：ロクロナデ 底：手ケズリ	－	(7.8)	－	一部	ヘラ書「×」		727-47
18	須恵器・坏	1～3層	内外：ロクロナデ 底：ヘラ切り	(13.0)	(7.8)	3.6	1/4	内外面に油煙付着		727-12
19	須恵器・坏	1～3層	内外：ロクロナデ	(15.0)	－	－	一部	墨書「林」?		727-16
20	須恵器・坏	1～3層	底：手ケズリ 内：ロクロナデ	－	(7.8)	－	一部	ヘラ書「土」?		727-45
21	須恵器・坏	－	内外：ロクロナデ 底：ヘラ切→手ケズリ	13.3	7.5	3.9	3/4	底部内外面に黒斑	25-3	727-3
22	須恵器・坏	1～3層	内外：ロクロナデ 底：手ケズリ	－	8.8	－	一部	ヘラ書「×」		727-48
23	転用硯	1～3層	須恵器高台坏を転用	－	－	－	一部			727-40
24	転用硯	1～3層	須恵器甕を転用	－	－	－	一部			727-38
25	丸瓦	1～3層	凹：布目 凸：タタキ→ロクロナデ	－	－	－	一部	刻印「伊」		727-34
26	土製円盤	1～3層	土師器甕を転用	長2.4	幅2.5	厚1.8	一部		27-46	727-36
27	碁石	1～3層		長1.5	－	厚0.5	一部			727-44

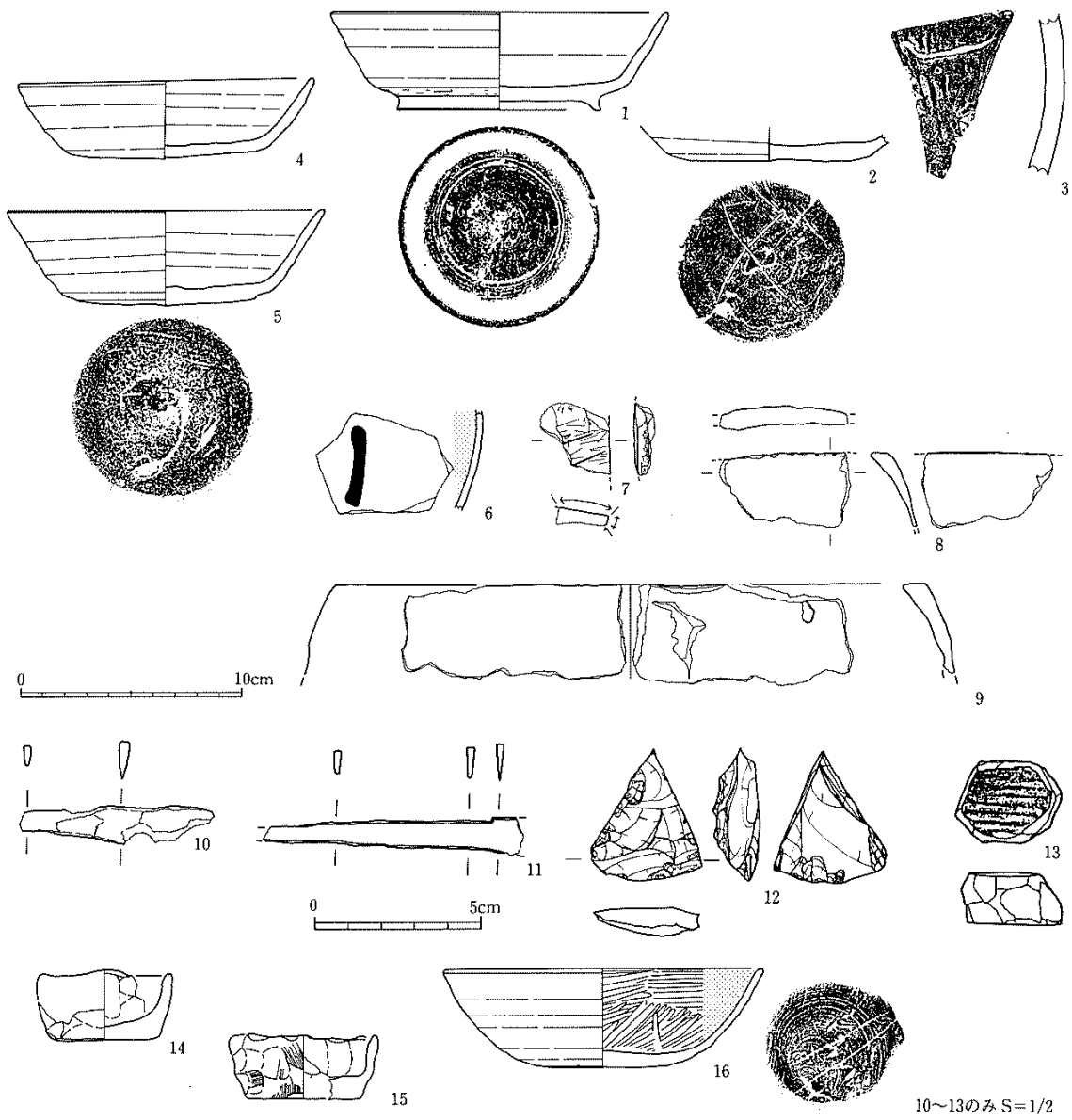
第401図　SK3727 土壙跡 1 ～ 3 層出土遺物(2)

SK3727 － 4～9 層出土遺物観察表

No	種類	層位	特　　徴	口径	底径	器高	残存	備　　考	写真図版	登録No.
1	土師器・坏	4～9層	外：ヨコナデ　底：手ケズリ　内：ミガキ→黒色処理	(15.8)	(11.6)	3.7	1/4	海綿骨針多量	24-10	727-20
2	土師器・坏	4～9層	外：手ケズリ・ヨコナデ→ミガキ　内：ミガキ→黒色処理	(16.2)	－	－	1/6			727-28
3	土師器・坏	4～9層	外：手ケズリ→ミガキ　内：ミガキ→黒色処理	(17.4)	－	－	1/6			727-27
4	土師器・坏	4～9層	外：ヨコナデ→手ケズリ　内：ミガキ→黒色処理	(15.2)	－	－	1/4			727-26
5	土師器・椀	4～9層	外：ヨコナデ→手ケズリ 底：手ケズリ 内：ミガキ→黒色処理	－	－	－	一部	内面漆付着		727-43
6	土師器・椀	4～9層	外：ミガキ　内：ミガキ→黒色処理	－	－	－	一部	ヘラ書「×」		727-51
7	土師器・甕	4～9層	外：ハケメ→ヨコナデ 底：木葉痕 内：ヘラナデ・ヨコナデ	(12.0)	6.9	11.6	1/2	内外スス付着	24-13	727-29
8	土師器・甕	4～9層	外：ヨコナデ→手ケズリ　内：ヨコナデ・ヘラナデ	(14.0)	－	－	1/4	外面スス付着	24-12	727-30
9	須恵器・坏	4～9層	内外：ロクロナデ　底：ヘラ切り→手ケズリ	(12.5)	6.5	4.6	1/2	橙色	25-4	727-5
10	須恵器・坏	4～9層	内外：ロクロナデ　底：ヘラ切り→ナデ	(12.4)	(6.5)	3.9	1/4			727-11
11	須恵器・坏	4～9層	内外：ロクロナデ　底：ヘラ切り→ナデ	13.6	9.1	3.1	3/4		25-5	727-2
12	須恵器・坏	4～9層	内外：ロクロナデ　底：ヘラ切り→手ケズリ	(16.1)	(9.2)	3.9	1/3			727-8
13	須恵器・坏	4～9層	内外：ロクロナデ　底：静止糸切り→手ケズリ	－	8.8	－	一部	ヘラ書「×」?		727-49
14	須恵器・坏	4～9層	内外：ロクロナデ　底：ヘラ切り	(14.4)	(8.0)	3.9	1/5			727-13
15	須恵器・坏	4～9層	内外：ロクロナデ　底：手ケズリ	14.4	8.2	4.0	3/5		25-6	727-4
16	須恵器・高台坏	4～9層	内外：ミガキ　底：回転糸切り→ナデ	(11.4)	(6.5)	4.6	1/3		25-7	727-17
17	須恵器・高台坏	4～9層	内外：ロクロナデ	(16.4)	－	－	一部			727-18
18	須恵器	4～9層		－	－	－	一部	自然釉付着		727-31
19	砥石	4～9層		長9.2	幅3.0	厚2.8	一部			727-33
20	転用硯	4～9層	須恵器甕を転用	－	－	－	一部			727-39
21	転用硯	4～9層	須恵器甕を転用	－	－	－	一部			727-41
22	土器片製円盤	4～9層	須恵器甕の破片を加工	長2.4	幅2.6	厚1.0	一部		25-27	727-37



第402図　SK3727 土壙跡 4 ～ 9 層出土遺物

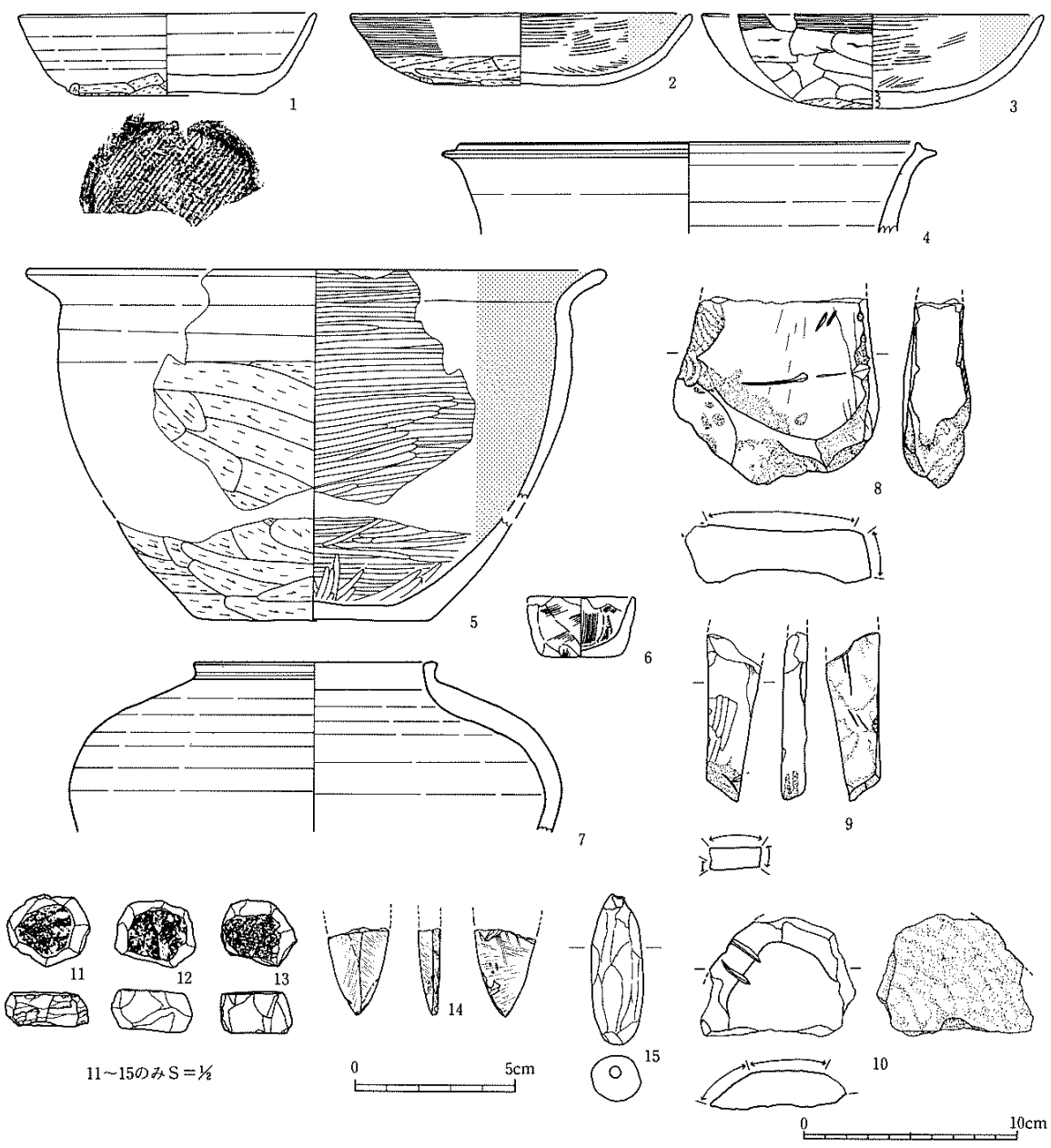


No	種類	遺構	特　　徴	口径	底径	器高	残存	備　　考	写真図版	登録No
1	須恵器・高台坏	SK3023	外：ロクロナデ→回ケズリ 底：回ケズリ 内：ロクロナデ	4.5	15.3	9.2	4/5		21-19	023-1
2	須恵器・坏	SK3042	内外：ロクロナデ 底：ヘラ切	—	6.2	—	一部	ヘラ書「×」		042-1
3	須恵器・甕	SK3042	外：タタキメ→ロクロナデ 内：ロクロナデ	—	—	—	一部	ヘラ書「—」		042-2
4	須恵器・坏	SK3044	内外：ロクロナデ 底：手ケズリ	13.4	7.7	3.5	1/2		22-3	044-1
5	須恵器・坏	SK3044	内外：ロクロナデ 底：ヘラ切→オサエ	14.3	8.0	4.3	4/5		22-6	044-2
6	土師器・椀？	SK3095	外：手ケズリ→ミガキ 内：ミガキ→黒色処理	—	—	—	一部	墨書「—」?		095-1
7	砥石	SK3095		長2.8	幅2.4	厚0.5	一部			095-2
8	金属製容器	SK3095		—	—	—	一部			095-5
9	金属製容器	SK3095		—	—	—	一部		27-6	095-3
10	刀子	SK3095		—	—	—	一部		27-9	095-6
11	刀子	SK3095		—	—	—	一部		27-10	095-4
12	石器	SK3095	頁岩	長5.1	幅3.3	厚0.9	一部			095-7
13	土製円盤	SK3041	須恵器甕の破片を加工	縦2.6	横3.1	幅1.5	一部		27-36	041-1
14	手捏土器	SK3101	内外：ナデ・オサエ 底：ナデ	(6.0)	(5.0)	3.2	1/2			101-1
15	手捏土器	SK3101	外：ナデ 底：ナデ 内：オサエ・ナデ	(6.4)	5.2	2.9	1/2			101-2
16	土師器・坏	SK3106	外：ロクロナデ 底：回転糸切 内：ミガキ→黒色処理	(14.4)	5.8	4.5	1/2	ヘラ書「＝」?	22-15	106-1

第403図　その他の土壙跡出土遺物(1)

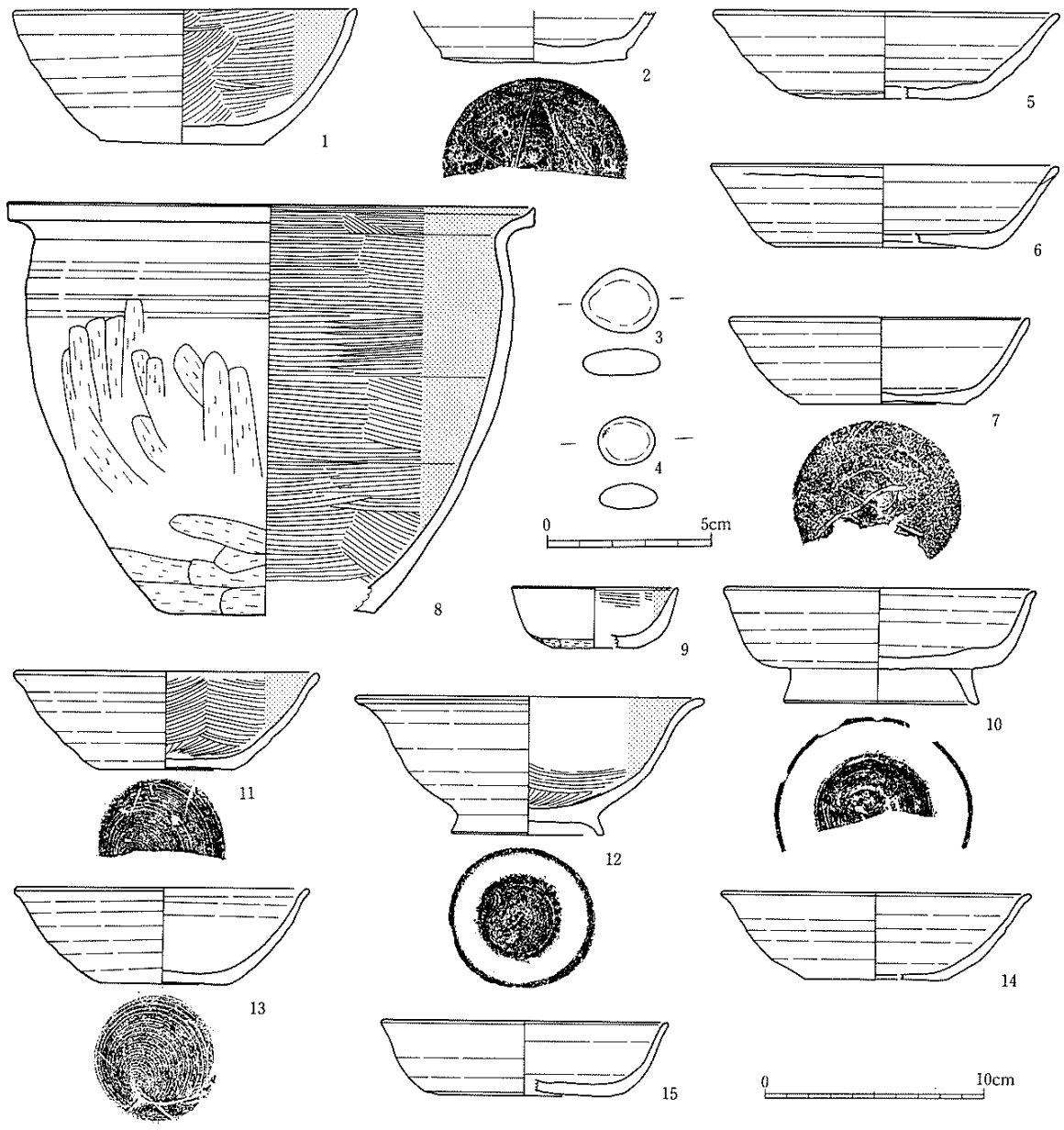
No.	種類	遺構	特　　徴	口径	底径	器高	残存	備　　考	写真図版	登録No.
1	土師器・坏	SK3109	外：ロクロナデ 底：回転糸切り 内：ミガキ→黒色処理	(13.4)	(7.6)	4.2	1/3			109-3
2	須恵器・坏	SK3109	内外：ロクロナデ 底：回転糸切り	(14.0)	6.2	4.3	1/3		22-18	109-1
3	須恵器・坏	SK3109	内外：ロクロナデ 底：回ケズリ	14.3	7.6	4.0	1/2		22-16	109-2
4	須恵器・小瓶	SK3109	外：ロクロナデ→回ケズリ 底：ロクロナデ 内：ロクロナデ	5.0	5.7	13.1	完形	ヘラ書「一」大戸	22-17	109-4
5	土製円盤	SK3109	須恵器甕の破片を加工	長2.4	幅2.4	厚0.7	一部		27-38	109-5
6	土製円盤	SK3109	須恵器甕の破片を加工	長2.1	幅2.3	厚1.1	一部		27-41	109-9
7	土製円盤	SK3109	須恵器甕の破片を加工	長2.3	幅2.3	厚1.0	一部		27-43	109-10
8	土製円盤	SK3109	須恵器甕の破片を加工	長3.1	幅3.3	厚1.1	一部		27-34	109-7
9	土製円盤	SK3109	須恵器甕の破片を加工	長2.5	幅3.0	厚1.4	一部		27-42	109-8
10	土製円盤	SK3109	須恵器甕の破片を加工	長2.3	幅3.0	厚1.5	一部		27-37	109-6
11	碁石	SK3109		長1.9	－	厚1.0	一部		28-28	109-11
12	碁石	SK3153		長1.7	－	厚3.5	一部		28-24	153-1
13	土師器・甕	SK3127	外：ヨコナデ→ヘラケズリ 内：ヨコナデ・ヘラナデ・ナデ	(14.8)	－	－	1/4		23-2	127-1
14	土師器・甕	SK3127	外：ヘラケズリ 内：ヘラナデ	－	(7.8)	－	一部			127-2
15	須恵器・坏	SK3144	外：ロクロナデ 底：回転糸切→手ケズリ 内：ロクロナデ	(13.0)	(7.6)	4.3	1/3	浅黄橙色		144-1
16	須恵器・坏	SK3163	外：ロクロナデ→手ケズリ 底：手ケズリ 内：ロクロナデ	(13.8)	6.8	4.1	1/4	油煙付着	23-3	163-1

第404図　その他の土壙跡出土遺物 (2)



No.	種類	遺構	特　徴	口径	底径	器高	残存	備　考	写真図版	登録No.
1	須恵器・坏	SK3197	外：ロクロナデ 底：静止糸切り 内：ロクロナデ→手ケズリ	(14.0)	(8.2)	3.8	1/3			197-1
2	土師器・坏	SK3244	外：ヨコナデ→ヘラケズリ 底：ヘラケズリ 内：ミガキ→黒色処理	16.0	—	3.4	1/2		23-4	244-1
3	土師器・坏	SK3258	外：ヨコナデ→ヘラケズリ 内：ミガキ→黒色処理	(16.0)	—	4.5	1/2			258-1
4	須恵器・甕	SK3385	内外：ロクロナデ	(21.6)	—	—	一部	大戸		385-1
5	土師器・鉢	SK3336	外：手ケズリ→ロクロナデ 底：手ケズリ 内：ミガキ→黒色処理	(27.2)	11.6	(16.5)	1/6		23-5	336-1
6	手捏土器	SK3456	外：オサエ・ナデ 内：ナデ	(5.0)	(3.6)	2.9	1/3			456-1
7	須恵器・短頸壺	SK3457	内外：ロクロナデ	(11.0)	—	—	1/3		23-6	457-1
8	砥石	SK3221	砂岩	長8.5	幅8.6	厚1.8	一部		28-40	221-1
9	砥石	SK3589	粘板岩	長7.3	幅2.3	厚1.0	一部			589-1
10	砥石	SK3627		長5.1	幅6.3	厚1.6	一部			627-1
11	土製円盤	SK3157	須恵器甕の破片を加工	長2.3	幅2.6	厚1.0	一部			157-1
12	土製円盤	SK3166	須恵器甕の破片を加工	長1.9	幅2.6	厚1.2	一部		27-40	166-1
13	土製円盤	SK3367	須恵器甕の破片を加工	長2.0	幅2.3	厚1.2	一部		27-47	367-1
14	石製模造品	SK3195	剣 粘板岩	長2.9	幅1.9	厚0.7	一部			195-1
15	土錘	SK3606		長4.7	幅1.5	孔0.3	完形		27-17	606-1

第405図　その他の土壙跡出土遺物 (3)



No	種類	遺構	特　　徴	口径	底径	器高	残存	備　　考	写真図版	登録No
1	土師器・坏	SK3635	外：ロクロナデ 底：手ケズリ 内：ミガキ→黒色処理	15.7	7.5	6.1	7/8		23-8	635-2
2	須恵器・坏	SK3635	内外：ロクロナデ 底：ヘラ切り→ナデ	－	8.4	－	一部	ヘラ書「×」?		635-1
3	碁石	SK3635		長2.3	－	厚0.8	一部		28-26	635-3
4	碁石	SK3725		長1.8	－	厚0.8	一部		28-27	725-1
5	須恵器・坏	SK3648	内外：ロクロナデ 底：ヘラ切り	(15.7)	(7.0)	4.0	2/5		24-4	648-1
6	須恵器・坏	SK3659	内外：ロクロナデ 底：ヘラ切り→ナデ	(15.6)	(10.0)	3.8	1/3		24-2	659-1
7	須恵器・坏	SK3670	内外：ロクロナデ 底：ヘラ切り→ナデ	13.7	7.5	3.9	4/5	ヘラ書「×」		670-1
8	土師器・鉢	SK3665	外：ロクロナデ→手ケズリ 内：ミガキ→黒色処理	(24.0)	(10.0)	(18.8)	1/4		24-5	665-1
9	土師器・坏	SK3726	外：ロクロナデ→手ケズリ 底：手ケズリ 内：ミガキ→黒色処理	(7.6)	(3.8)	3.8	1/4	金雲母含む		726-1
10	須恵器・高台坏	SK3676	内外：ロクロナデ 底：回転ヘラ切り→ロクロナデ	14.2	8.9	5.3	1/2		24-8	676-1
11	土師器・坏	SK3794	外：ロクロナデ 底：回転糸切り 内：ミガキ→黒色処理	(13.9)	(6.0)	4.5	1/2		25-8	794-2
12	土師器・高台椀	SK3794	外：ロクロナデ 底：ヘラ切り 内：ミガキ→黒色処理	(16.0)	7.0	6.3	1/3		25-11	794-3
13	赤焼土器・坏	SK3794	内外：ロクロナデ（内平滑） 底：回転糸切り	13.4	5.9	4.4	ㄅ完	にぶい黄橙色	25-9	794-4
14	赤焼土器・坏	SK3794	内外：ロクロナデ 底：回転糸切り	(14.2)	(6.4)	4.0	1/6	灰白色		794-1
15	須恵器・坏	SK3905	内外：ロクロナデ 底：ヘラ切り	(13.1)	(8.0)	3.4	1/3			905-1

第406図　その他の土壙跡出土遺物 (4)

M　墓跡

【ＳＸ3748墓跡】（第311図）

東西に長い長方形の墓壙を掘り埋葬したものである。

〔重複〕（古）ＳＤ3064

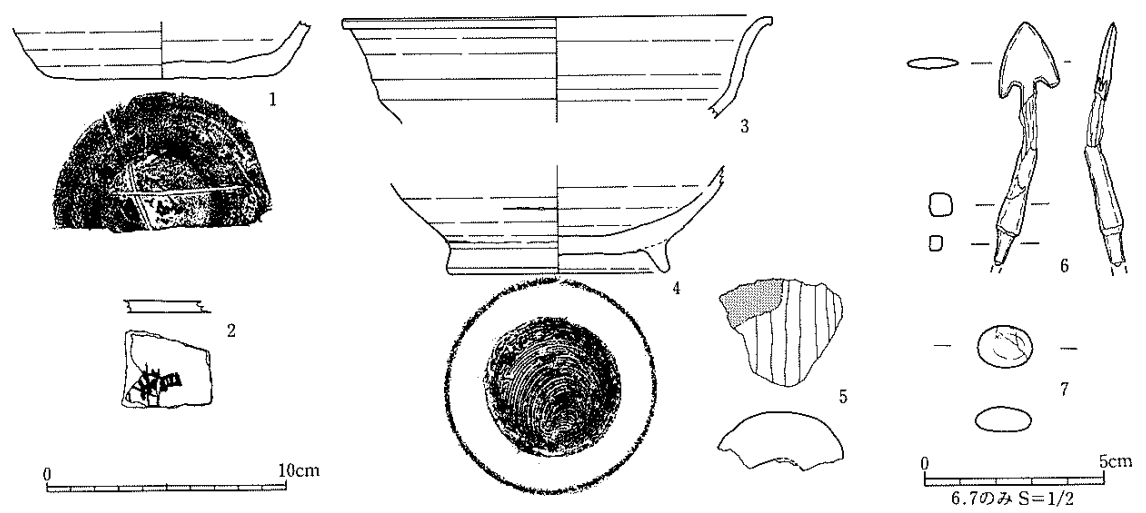
〔墓壙〕南北0.4m、東西1.2mの長方形で、深さは0.2mである。堆積土は地山土混じりの黒褐色シルトである。壁は直立する。

〔棺〕棺の痕跡はなく、歯が西側に寄って5本以上検出された。

〔出土遺物〕遺物は出土しなかった。

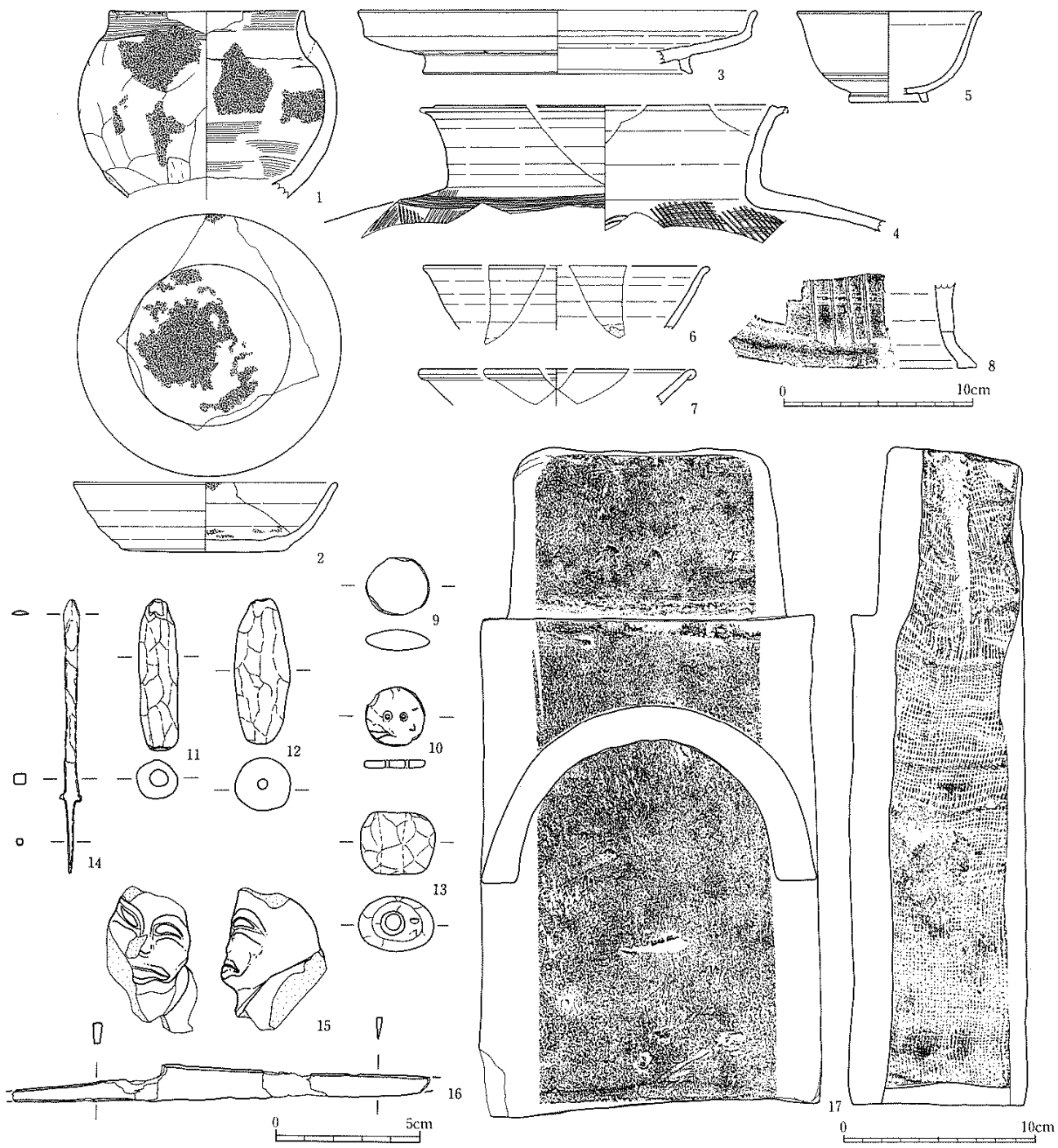
基本層位第Ⅱ層・表土の遺物

土師器、須恵器、赤焼土器などの他、施釉陶器、中近世陶磁器、瓦、硯、羽口、鉄鏃、刀子、土錘、土製円盤、土人形、石製模造品、碁石などが出土している。但し、中世以降の遺物が出土するのは表土のみで、基本層位第Ⅱ層からは出土していない。



No	種類	層位	特　　徴	口径	底径	器高	残存	備　考	写真図版	登録No
1	須恵器・坏	Ⅱ層	内外：ロクロナデ 底：ヘラ切り→ナデ	－	(9.8)	－	一部	ヘラ書「×」		基2-3
2	須恵器・坏	Ⅱ層	底：回ケズリ	－	－	－	一部	墨書「曰理」、ヘラ書「□」		基2-4
3	須恵器・高台椀	Ⅱ層	内外：ロクロナデ 底：ヘラ切り	(18.0)	－	－	一部			基2-1
4	赤焼土器・高台坏	Ⅱ層	内外：ロクロナデ 底：回転糸切り→ロクロナデ	－	9.0	－	一部	浅赤橙 内面平滑		基2-2
5	羽口	Ⅱ層		－	－	－	一部			基2-5
6	鉄鏃	Ⅱ層		－	－	－	一部		27-2	基2-7
7	碁石	Ⅱ層		長1.5	－	厚0.7	一部			基2-8

第407図　基本層位第Ⅱ層出土遺物



№	種類	層位	特　　徴	口径	底径	器高	残存	備　　考	写真図版	登録№
1	土師器・壺	表土	外：ヘラケズリ？ナデ→ヨコナデ　内：ヘラナデ？	10.2	—	—	一部	内外面漆付着	25	基1-80
2	須恵器・坏	表土	内外：ロクロナデ　底：ヘラ切り	14.0	8.6	3.7	1/4	内面底部漆付着		基1-79
3	須恵器・高台盤	表土	内外：ロクロナデ　底：回・ケズリ→ロクロナデ	(21.0)	(14.3)	3.3	1/5		25	基1-2
4	須恵器・甕	表土	外：ロクロナデ→タタキ→ヘラナデ　内：ロクロナデ	(19.0)	—	—	一部	大戸		基1-21
5	陶器・椀	表土	色調：やや緑がかった灰白色。高台は無釉。貫入	(9.7)	(4.2)	4.8	2/5		26-8	基1-99
6	灰釉陶器・椀	表土	内外：ロクロナデ。重ね焼き。内面：金泥付着。	(15.2)	—	—	一部			基1-32
7	白磁・椀	表土	内外：ロクロナデ	(24.6)	—	—	一部			基1-35
8	円面硯	表土		—	—	—	一部		26-15	基1-61
9	碁石	表土		長2.2			一部			基1-83
10	石製模造品	表土	鏡。石材：粘板岩。	長2.1	幅2.1		一部		28	表-21
11	土錘	表土	ナデ	長5.3	幅1.4	孔0.7	完形		27	表-17
12	土錘	表土	ナデ	長5.1	幅1.9	孔0.4	完形		27	表-10
13	石製品	表土		長2.2	幅2.6	厚2.0	一部		28	基1-82
14	鉄鏃	表土		—	—	—	一部		27	基1-73
15	土人形	表土		—	—	—	一部			—
16	刀子	表土		—	—	—	一部		27	基1-76
17	丸瓦	表土	凸面：縄タタキメ　凹面：布目	—	—	—	一部	II Ba	26-12	基1-54

第408図　表土出土遺物

第VI章　市川橋遺跡中谷地地区

市川橋遺跡中谷地地区は、山王遺跡八幡地区の砂押川の対岸（北側）にあり、試掘調査の結果、大半が湿地であり、時期の特定できない水田跡や溝跡などがわずかに発見されていた（試掘A～Wトレンチ）（第1図）。

そこで、本地区では、遺構の存在が予想された八幡地区に近い部分にやや密にトレンチを入れ、遺構の有無の最終確認調査を実施した（確認A～Dトレンチ）（第2図）。

以下、トレンチごとに概要を記す。なお、出土遺物は少量で、図示できるものはない。

確認Aトレンチ（第410図）

柱穴や水田跡、溝跡、土壙跡などが発見された。これらは大半が地山面（八幡地区の基本層位第III層以下）で検出されたが、現代の耕作土の下に分布する堆積層から掘り込まれているものもある。

柱穴はトレンチ南側にあり、一辺が0.2～0.4mほどの隅丸方形や楕円形で、南北に並ぶものもある。時期は不明である。

水田跡はトレンチ北側にあり、平面的に3時期（A～C）確認されており、いずれも灰白色火山灰層よりも古い。方向はA・C期がほぼ発掘基準線に一致し、B期が北で西に傾いている。規模は、トレンチ調査のため不明だが、C期では、東西が7m以上で、南北が5～6mほどと推定される。A期では、南北4.7m、東西5.3m以上のものがある。

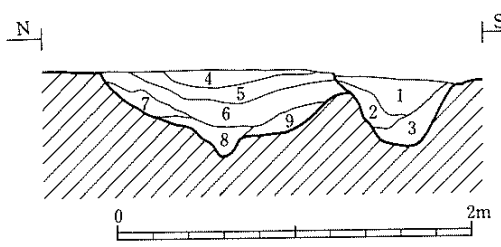
なお、断面で、灰白色火山灰層の上で、1～2時期の水田を確認した。

溝跡は5条あり、比較的南側にある。溝跡1は東西溝で、溝跡2より新しい。幅0.6m、深さ0.4m程で、堆積土は黒褐色の粘質シルトである（第409図）。

溝跡2は東西溝で、幅1.5m、深さ0.5m程で、堆積土は灰白色火山灰を含む黒褐色粘質シルトなどである（第409図）。

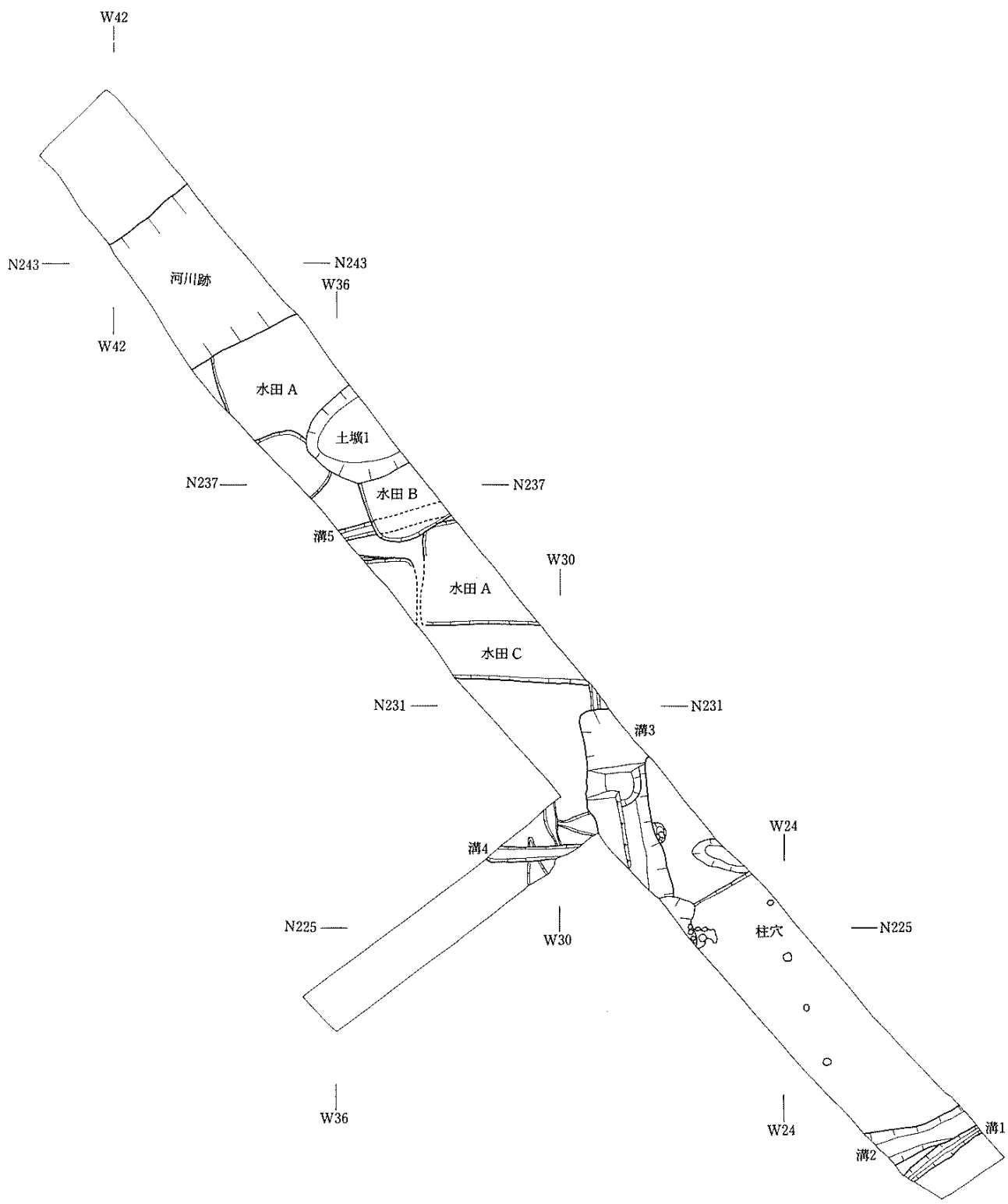
溝跡3は南北溝で、北端部で東側に直角に折れ曲がっている。幅2.5m、深さ1.0m程で、堆積土は灰白色火山灰を含む黒褐色粘土などである。堆積土から赤焼土器坏が出土した。

溝跡4は東西溝で、西へ延び、確認BトレンチやCトレンチでも確認されており、灰白色火山灰が



第409図　溝1・2断面図

No.	土色	土性		備考
1	黒褐 10YR2/2	粘質シルト	溝1	地山の粒を含む。
2	黄灰 2.5Y4/2	シルト		地山の粒を含む。
3	黒褐 10YR2/3	粘質シルト		地山のブロックを多く含む。
4	黒褐 2.5Y3/1	粘質シルト	溝2	
5	灰白 5Y7/1			灰白色火山灰土の堆積層。
6	黒褐 2.5Y3/1	粘質シルト		
7	黒褐 2.5Y3/1	粘質シルト		地山の粒を含む。
8	黒 10YR2/1	粘土		炭水化物を若干含む。
9	黒褐 2.5Y3/1	粘質シルト		地山の小さいブロックを含む。



第410図 A トレンチ平面図

混じる層を掘り込んでいる。幅0.7m、深さ0.5m程で、堆積土は黒色粘土である。

溝跡5は東西溝で、A期の水田跡より新しく、B期の水田跡よりは古い。幅0.7m、深さ0.2m程で、堆積土は黒褐色粘質シルトである。

土壙跡1は楕円形と思われ、東西3.3m以上、南北4.5m程と思われ、灰白色火山灰より新しい。

この他、トレンチ北端で、灰白色火山灰を挟んで新旧2時期がある河川跡を検出した。

遺物は、少量の土師器、須恵器、赤焼土器、中世陶器が出土した。土師器はロクロ調整の坏で、糸切り・手持ちヘラケズリされているものがある。中世陶器は甕の破片である。

確認Bトレンチ（第409図）

Aトレンチから延びてくる溝跡1条が発見された。その他、断面で、灰白色火山灰より新しい、1〜2時期の水田を確認した。

確認Cトレンチ（第409図）

Aトレンチから延びてくる溝跡1条と、土壙跡1基を検出した。また、トレンチ北端で灰白色火山灰より古い河川跡を確認した。その他、断面で、灰白色火山灰より新しい水田を確認した。

試掘D・Eトレンチ（第409図）

灰白色火山灰層の上で2時期、下で1時期の水田を確認した。

試掘F〜Lトレンチ

灰白色火山灰層の上で、多い場所で3時期の水田を確認した。

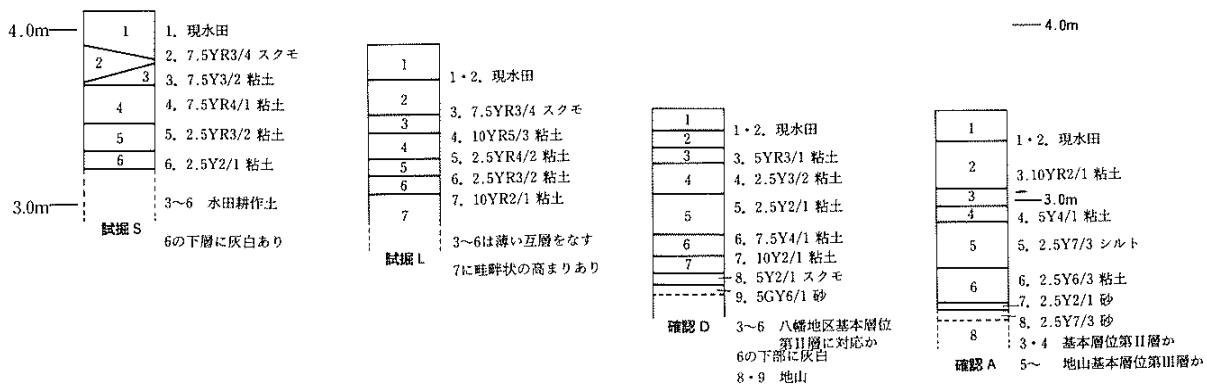
試掘M〜Rトレンチ

灰白色火山灰層の上で、水田ないしは水田の耕作土と考えられる層が1枚検出されている。

なお、平成8年の補足調査では、水田の下層で、灰白色火山灰が入る溝跡1条と、さらに下層で溝跡5条が検出されている。

試掘S〜Wトレンチ、確認Eトレンチ

灰白色火山灰層の上で、多い場所で3時期の水田を確認した。



第411図　トレンチ柱状図

以上の結果、柱穴や溝跡、土壙跡などの遺構が存在するのは確認Aトレンチだけであり、こういった遺構は中谷地地区では、南端部の東側にやや希薄な状態で存在していることが明らかになった。これより西・北側は、粘土や砂・スクモの互層となっており、居住域ではなくて、耕作域であったことが確認された。時期的には平安時代以降のもので、それ以前と考えられるものは発見されなかった。

こういったことから、平安時代に多賀城跡南面に施行された道路による方格地割りは、本地区には及ばなかったことが判明した。また、多賀城の西門跡から城外へ延びる道路は、西へ直進していないことが確かめられた。

一方、水田跡は全域で検出され、本地区が水田耕作域であったことが明らかになった。これらは、粘土や砂などで覆われているものが多く、連続的に営まれたものではなく、洪水などでたびたび埋没していると思われる。

なお、時期ははっきりと限定できないものの、10世紀前葉の灰白色火山灰の降下前後の水田や、これより古い水田は、本地区の南側に存在しており、耕作者は山王遺跡八幡地区に居住していた可能性が考えられる。

第Ⅶ章　考　　察

今回の調査では、道路跡をはじめとして、掘立柱建物跡、塀跡、竪穴住居跡、井戸跡、屋敷跡、小溝状遺構群、溝跡、土壙跡など多数の遺構を検出した。また、各遺構からは多量の遺物が出土している。ここではまず、出土遺物について検討し、次に各遺構ごとに年代や特徴について述べ、八幡・伏石地区の全体的な遺構の変遷について検討してみる。

1　出土遺物について

今回の調査では、縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、陶磁器、石器、石製品、土製品、木製品、金属製品などが出土している。

これらには良好なまとまりを示す遺物がほとんどないことや、大半を占める平安時代の土器群が多賀前地区のものと同じ内容（菅原・佐藤他；1996）であることから、これらの年代については従来の見解や多賀前地区の成果に基づいている。以下、本地区と特にかかわることについて、個別に記述することにする。

A　各遺構出土土器について

【ＳＩ491 竪穴住居跡】土師器には坏、高坏、甕、甑があり、須恵器には蓋、高坏、 瑤、甕、鉢がある。当該時期に、竪穴住居跡から土師器と共にまとまった量の須恵器が出土する例は、東日本では稀であり、本住居跡出土土器は極めて良好な資料といえる。

土師器坏は口縁部と底部との境に段を有し、丸底で、段から上部は外反して立ち上がるものが主体である。他に無段丸底坏も少量認められる。法量は無段坏が口径 9.2㎝ であり、有段坏が口径 13.9～17.4㎝ とばらつきがある。調整は、外面は口縁部がヨコナデ、底部がヘラケズリ調整で、内面はヘラミガキ後、黒色処理が施される。甕は長胴形、球胴形、鉢形の 3 器形に分けられる。すべて口縁部と胴部との境に段を有し、口縁部は外反している。長胴形の甕は胴部下半に最大径がくる。調整は口縁部がヨコナデ、胴部外面はハケメ調整が基本で、その後下半部がヘラケズリ調整されるものもある。内面はナデないしはヘラナデである。甑は無底式で、口径 24.4～27.4㎝ の鉢形を呈している。口縁部は外反し、甕と同様口縁部と胴部との境に段を有する。調整は口縁部はヨコナデ、胴部はヘラミガキ調整が施されている。以上のような土師器の特徴は東北南部の土師器編年（氏家；1957）の「栗囲式」期に相当するものであり、類例としては名取市清水遺跡第 42 号竪穴住居跡（丹羽；1981）などがあげられる。

須恵器蓋は高坏と組み合うもので、口径 16.0㎝、器高 5.8㎝ で、釦状のつまみを持つ。天井部には回転ヘラケズリ後、カキメ調整が施される、高坏は無蓋で、脚部を欠損する。口径 15.8㎝ で底部から強く内湾して立ち上がり、体部上半は直立して口縁部に至る。上半には 2 つの軽い段を有し、その間に櫛歯刺突文、下にはカキメ調整が施されている。瑤 は口縁部を欠損しているものの、最大径は口縁部にあったものと推測される。体部はそろばん状で、頸部は基部が径 2.5㎝ と細く、大きくラッパ状に

開いている。最大径は中央よりやや上にある。頸部に2条の沈線があり、体部中央に櫛歯刺突文とその上下に沈線、底部にはカキメ調整が施される。甕は口径17.2㎝の中形品で、底部を欠損している。胴部上半に張りを有し、頸部で「く」の字に屈曲して、外反しながら立ち上がっている。口縁端部は肥厚している。頸部は無文、胴部外面はタタキメ後、カキメ調整がなされ、内面には同心円状のオサエメを残す。鉢は平瓶の体部を転用したもので、割れ口を磨って口縁としている。口径17.9㎝、器高8.6㎝で丸底である。外面にはヘラケズリ後カキメ調整がなされている。

これらの須恵器の胎土には砂粒や白色粒子が含まれており、各器種すべてにカキメ調整を施し、概して厚手に仕上がっていることなど特徴が共通することから、在地の同一窯において製作されたものと考えられる。県内の該期の生産窯については、現在のところ知られていない。そこで、資料的に豊富な大阪府陶邑産須恵器との比較を試みれば、有蓋高坏蓋、無蓋高坏は器形的にはＴＫ43型式に、甕はＴＫ209型式に比較的類似するものが認められる。

年代は、前出の名取市清水遺跡第42号竪穴住居跡からはＴＫ209型式に類似した須恵器が出土するなど、土師器、須恵器ともに共通する要素が多く、これらについては7世紀前半頃と考えられており、本住居跡出土土器の年代もこれらとほぼ同時期の、概ね7世紀前半に位置づけられるものと考えられる。

【ＳＤ677溝跡】3層土面から土師器と須恵器が一括廃棄された状態で出土している。

土師器坏は有段丸底と無段平底があり、後者が多い。有段丸底坏は口縁部が短く、直線的に外傾している。口径は14.6～14.8㎝で、調整は外面が口縁部はヨコナデやヘラミガキ、体部はヘラケズリ、内面はヘラミガキ後、黒色処理されている。無段平底坏は口径11.4～18.2㎝で、内外両面をヘラミガキ後・黒色処理されたものと内面のみ黒色処理されたものがある。後者の外面はヨコナデ後、ヘラケズリされている。高台坏は両面黒色処理されており、高さ1.5㎝程の高台が付く。器壁は薄く、ロクロを使用して成形されたものと考えられる。甕は長胴形、鉢形の2種類がある。法量は前者が口径21.7～28.6㎝、器高31.0～36.0㎝と大型で、後者は口径12.6～18.4㎝、器高13.0～16.0㎝と小型である。すべて非ロクロ調整で、口縁部と胴部との境に段を持たないものが多く、段があるものも明瞭ではない。長胴形の甕は胴部上半に最大径がくる。調整は口縁部ヨコナデ、胴部外面はハケメ調整、内面はヘラナデである。甑にも長胴形、鉢形の2種類がある。法量は前者が口径13.4㎝、器高28.0㎝で、後者は口径が推定24.8㎝、器高21.0㎝である。どちらも非ロクロ調整で、長胴形には口縁部と胴部との境に段はなく胴部中央に最大径がくる。鉢形のものは軽い段を有する。調整は口縁部ヨコナデ、胴部外面は長胴形はヘラケズリ、鉢形はハケメ調整後、ヘラミガキ、内面はともにヘラナデである。

須恵器坏は口径14.0～16.0㎝、器高3.5～3.9㎝のやや扁平なものが多く、底部から内湾気味に立ち上がるものと直線的に立ち上がるものとがある。底部調整は静止糸切りないしはヘラ切り後、回転ヘラケズリや、手持ちヘラケズリ調整したものが多い。蓋は口径16.4㎝、器高2.7㎝とやや扁平で釦状のつまみが付く。口縁部は折り返されている。甕は口径18.2㎝の中型品で、底部を欠損している。胴部上半に張りを有し、頸部で「く」の字に屈曲して、外反しながら立ち上がっている。口縁帯は上下に引き出されている。頸部は無文、胴部外面はタタキメ、内面には同心円状のオサエメを残す。鉢は

口径19.3㎝、器高11.0㎝の小型品である。

上記のような、特に坏類の特徴は、天平宝字七（763）年の具注歴が共伴する八幡地区ＳＤ180Ｂ溝跡出土土器（千葉他；1997）、8世紀中葉とされた本遺跡多賀前地区第1群土器（菅原・佐藤；1996）、共伴する瓦の年代観から天平十一（739）年を前後する時期とされた色麻町日の出山窯跡群第III群土器（古川；1994）に近い様相を呈している。したがって、これらの年代は概ね八世紀中葉頃と考えられる。

【ＳＥ3038井戸跡】井戸側内底面から、ほぼ完形に近い状態でロクロ調整の土師器坏・椀や須恵器坏がまとまって出土しており、底面に砂などが堆積する以前の井戸構築ないしは使用開始時の遺物と考えられる。以下、これらについて検討する。

土師器坏はすべてロクロ調整で底部から内湾して立ち上がり、体部で直線的に外傾、あるいはやや外反して口縁部に至るもので、底部や体部下端には手持ちヘラケズリ調整が施されている。また、体部外面に横位で「百」と墨書されており、いずれも同筆と考えられる。これらについては胎土に金雲母を多く含むことも共通する特徴である。椀は口径17.1㎝、器高6.1㎝の大型品で底部からの立ち上がり形態は坏とほぼ同様である。底部から体部下半にかけては回転ヘラケズリ調整が施されており、底部外面には「大」の墨書も認められる。

須恵器坏は底部から直線的に立ち上がり、口縁部で外反するものと、底部から内湾して立ち上がり、体部で直線的に外傾、あるいはやや外反して口縁部に至るものがあり、底部はともに回転糸切り無調整である。

こうした特徴は、多賀城跡ＳＥ2101Ｂ井戸跡第III層出土土器（真山；1991）や、多賀前地区ＳＫ844土壙出土土器（菅原・佐藤他；1996）に類似する。伏石地区内ではＳＸ3029、ＳＫ3016・3024出土土器も同様の特徴を有しており、器形や調整技法のみでなく、土師器坏については胎土に金雲母を多く含むことも共通した特徴である。ＳＥ2101Ｂ井戸跡III層出土土器の年代は、共伴する漆紙文書や墨書土器などから9世紀第2四半期に位置づけられている（柳沢；1994）。多賀前地区ＳＫ844土壙出土土器についても、9世紀前半に位置づけられる多賀前地区第2群土器に属し、多賀城跡ＳＥ2101Ｂ井戸跡第III層出土土器との類似から、第2群土器の中でも、比較的新しい傾向を有することが指摘されている。したがってＳＥ3038井戸跡底面出土土器の年代も、これらとほぼ同時期と考えられる。

【ＳＸ3012土器溜】土師器や赤焼土器がまとまった状態で多量に出土している。ただし、同じく土器溜とされている多賀前地区ＳＫ503・551土壙の出土遺物は完形品が多いのに対して、本土器溜出土遺物は完形品が少なく、土器の遺存状況に違いが認められる。

赤焼土器坏や高台坏が主体を占めており、そのほとんどは内面が平滑に仕上げられている。色調は多くが淡黄橙色を呈し、その他に淡黄色や橙色のものもみられる。胎土は砂粒を少量含むものが多い。坏は口径12.7～14.6㎝で、器高3.0㎝程度のやや皿状を呈するものがあり、口径12㎝未満の小型坏や小皿は共伴していない。

土師器坏は回転糸切り無調整で、底／口比が0.37と小さいものも含まれている。

上記のような土器の特徴は多賀前地区ＳＫ551土壙出土土器（菅原、佐藤；1996）や高崎遺跡ＳＸ1080土器捨て場跡2層上面出土土器（千葉；1994）などに共通するものである（註1）。これらはともに灰

白色火山灰降下以後に廃棄されており、前者は多賀前地区第4群土器に属し、10世紀前葉、後者は10世紀前半に位置づけられている。以上のことからＳＸ3012出土土器についても、灰白色火山灰との関係は不明であるものの、概ね10世紀前半頃の年代が考えられる。

Ｂ　大戸窯の須恵器について

福島県会津郡大戸窯の製品は供給圏が広く、福島県全域の他、宮城・山形・岩手・新潟の各県でも出土が確認されている（石田；1992、石本；1992）。多賀城周辺では多賀前地区（菅原・佐藤他；1996）などにおいて、胎土の特徴から大戸産と考えられる製品が瓶類を中心に数多く認められ、今回、八幡・伏石地区からも長頸瓶、短頸壷、坏、高台坏、蓋、甕、円面硯が出土している。以下、それらについて述べることとする。

【八幡地区】長頸瓶（第9・17・28・122・140・241・261・263・271・278図）、短頸壷、坏、高台坏（第271図1・2）、稜椀（第271図3）、蓋、甕（土製円盤ー第273図12）が整理用コンテナで5箱程出土している。中でも瓶類が圧倒的に多い。小型品は小破片が多く、数は少ないものの、坏（43片）、高台坏（43片）、稜椀（1片）、蓋（8片）と器種が豊富なのが特徴である。

瓶類を窯式別にみてみると、8世紀末から9世紀前葉とされる上雨屋12号窯式から、9世紀後葉頃とされる上雨屋107号窯式にかけてのものが多い（石田；1994）。これらのうち、焼台痕跡を明瞭に残し、上雨屋12号窯式あるいは南原19号窯式と判別できるものには第9図9・10、第271図7、第278図14などがある。全体量からみれば焼台痕跡を残さないものの方が若干多い。その他には、現在のところ、最も古い窯跡とされる8世紀後葉頃（註2）の南原33号窯式のものが1点あり（第261図4）、10世紀前葉とされる上雨屋112号窯式以降のものは表土出土のものに1点認められるのみである。広口瓶は表土から3点程が出土している。

【伏石地区】総破片数で381片出土している。器種別には長頸瓶（第303・351・353・362・371・376・379・380・388・405図）、甕（第316・362・406・408図）、坏、円面硯（第303図14、第408図）があり、瓶類が80%以上を占める（第2表）。

瓶類は小破片が多く、厳密な同定は困難であるが、八幡地区と同様上雨屋12号窯式から上雨屋107号窯式にかけてのものが多い。ただし、焼台痕跡を明瞭に残すものは第379図11のみであり、また、上雨屋112号窯式以降のものは第362図7の他、表土から2片出土しているにすぎず、窯場での生産年代からみれば、瓶類は概ね9世紀後半代を中心に出土している状況が窺える。広口瓶は灰白色火山灰粒が混入するＳＢ3401掘立柱建物跡柱痕跡から出土しているのみである。

後述するように9世紀後半は伏石地区ｄ期にあたり、建物などが急激に増加する時期である。上記のような出土傾向は、概ねそれと連動した状況を示していると言えよう。一方、ＳＥ3038井戸跡からは「会津郡主政」と記された題箋軸が出土しており、本地区に「会津郡主政」が存在したことを示すものである。時期的には北1道路跡が整備された9世紀前半代のｃ期と考えられる。しかしながら、その頃の大戸窯の製品である上雨屋12号窯式や南原19号窯式のものは少なく、「主政」の存在が大戸窯の須恵器の出土状況に大きな影響を及ぼすことはなかったものと言えよう。

以上、八幡・伏石地区における大戸窯産の須恵器の出土状況を述べた。多賀前地区（註3）と同様、両地区においても瓶類を中心に大戸窯産の須恵器が多く出土しており、伏石地区でみると須恵器壷・瓶類全体に占める大戸窯製品の割合は約20%と比較的高い割合を示している（第1表）。八幡地区もほぼ同様の出土状況を呈し、多賀城及びその周辺は遠隔地であるにもかかわらず、大戸窯製品の主たる消費地の一つであったことが分かる。窯式別では南原33号窯式期の製品が認められ、大戸窯須恵器生産の比較的初期の段階から多賀城及びその周辺に製品が供給されていた状況が窺える。ただし、主体は上雨屋12号窯式から上雨屋107号窯式段階にかけての、概ね9世紀代のものが中心である。こういった状況は、この時期に大戸窯の生産体制が強化され、窯数が増加している（石田；1993）ことと連動している可能性が考えられる。

また、ごく少量ではあるが坏類が出土していることも注目される。大戸産と考えられる坏類の出土が報告されているのは、宮城県内では仙台市中田南遺跡（太田；1994）、矢本町赤井遺跡（佐藤敏幸；1995）があるが、類例は少なく、その流通経路や規模については不明な点が多い。今回出土したものが、瓶類とともに多賀城周辺への流通経路にのって供給されたものか、人的な移動などにより偶然に持ち込まれたものであるかは不明である。しかしながら、須恵器坏類全体の出土量からみれば大戸産須恵器坏類の出土はごく微量であり、後者の可能性が高いことから、本遺跡周辺への恒常的な流通経路が確立されていたのは、瓶類に限定されていたと考えるのが妥当であろう。

第１表　壷・瓶類の底部破片数

	破片数	%
大戸産	26	20.2
その他	103	79.8

第２表　大戸産須恵器の破片数

	口・頸部	体部	底部	計	%(全破片)	%(底部)
壷・瓶類	66	254	26	346	90.8	83.9
甕	7	22	4	33	8.7	12.9
坏	1	0	1	2	0.5	3.2

※　第１・２表とも伏石地区

C　伏石地区の緑釉・灰釉陶器について

伏石地区出土の緑釉・灰釉陶器は破片数にして227点を数え、その内訳は第3表に示したとおりである。

灰釉陶器は産地別に見ると愛知県猿投窯の製品が多く、他に美濃窯の製品も含まれる。窯式別には黒笹90号窯式期（美濃窯光ケ丘1号窯式含む）の製品が最も多く、全体の79%を占める。その他には黒笹14号窯式の製品が21%有り、黒笹14・90号窯式に前後する折戸10号窯式や53窯式期の製品は確認できなかった（註4）。

次に、共伴する在地土器の特徴や遺構の重複関係から緑釉・灰釉陶器が出土する遺構の年代をみてみると、ＳＤ3203道路側溝やＳＢ3789掘立柱建物跡など、9世紀後半以降の遺構を中心に出土している。また、9世紀前半に機能していたと考えられるＳＸ3029工房跡の掘方埋土からも灰釉陶器椀の破片が出土している。これについては、小破片のため、窯形式は不明であるが、9世紀前葉頃には本地区内に、すでに施釉陶器類が持ち込まれていた状況を窺わせるものである。

また、これらの中には内面に金泥が付着した灰釉陶器椀もみられる（第388図14、第408図6）。出土地点は異なり接合はしないものの、胎土の特徴から第388図14と第408図6は同一個体と考えられる。

金泥は内面下半全面に薄く付着しており、椀が金泥容器として使用されたものと思われる（註5）。

第３表　施釉陶器出土破片数

種類	器種	口縁部	体部	底部
緑釉	椀・皿類	4	7	3
灰釉	椀・皿類	62	65	34
	瓶　類	16	34	2

※残存良好のものは底部に数えている。

第４表　灰釉陶器椀皿の窯形式別出土状況

	底部破片数	%
黒笹14号窯式	6	21
黒笹90号窯式	22	79

註1　高崎遺跡ＳＸ1080土器捨て場跡2層上面出土土器には実測図にはないものの、口径12.0㎝未満の坏が少量含まれており、若干の違いがみられる。

註2　大戸窯の初現は8世紀中葉頃と考えられている。（石田；1993）

註3　多賀前地区からは整理用コンテナで39箱ほどが出土しており、これは出土土器の全体の5%弱に相当する。瓶類が主体を占め、殆どは東西大路・西2道路跡、北1西3区、南1西2区からの出土である。八幡・伏石地区では、大戸製品の割合は出土土器全体の1%にも満たない状況であり、多賀前地区が突出した様相を呈していると言えよう。多賀前地区の北1西3区、南1西2区は9世紀代には「国司館」の存在が推定されており、施釉陶器が多量に出土している。上記のような大戸製品、特に瓶類の豊富さは、これらが日常雑器としてではなく、施釉陶器等の奢侈品に準ずるものとして取り扱われ、比較的階層の高い人々を中心に消費されていたこと示すものと考えられる。

註4　表土出土の中に釉を漬け掛けしたと思われる椀、あるいは皿の小破片が一点ある。

註5　金泥の付着した土器の類例は、県内では山王遺跡千刈田地区（石川・相沢；1991）より出土した灰釉陶器椀がある。また、多賀城跡政庁地区からは、金泥用の土師質風字硯が出土している（宮多研；1982）。

2　各遺構の特徴と年代

A　道路跡

道路跡は9条検出された。これらはいずれも両側に素掘りの側溝を持つ道路跡で、多賀城南前面に施行された方格地割の道路と考えられている（赤澤；1991、他）。以下、これらの変遷や年代、区画などについて検討する。

ｉ　変遷と年代

北2ａ道路跡では、ＳＸ500→ＳＸ390の重複状況があった。それ以外の道路跡は、ＳＸ390と側溝がそれぞれ接続しており同時期に存在していたことは明らかである。したがって、道路跡は、Ａ：ＳＸ500→Ｂ：ＳＸ299・300・390・400などの、新旧2時期に大別できると思われる。

以下では、時期ごとに各道路跡の検出状況や変遷についてまとめ、次に全体の変遷や年代などについて検討することにする。

①道路跡Ａ期

【ＳＸ500道路跡】北2ａ道路跡（＝ＳＸ390・710）の下層にあり、路幅が大きく異なることから同一の道路跡とは考えられない。ただし、北2ａ道路跡は本道路跡と路線が同一なことから、本道路跡の役割を受け継いだものと考えられる。

本道路跡は、西5道路跡より西へは延びていない。一方、東側の市川橋第10次調査区では検出されているが（古い道路跡）、砂押川の東側の館前地区では本道路跡は存在しないことが確かめられている

（千葉；1995）。したがって、本道路跡はおよそ200m検出されたことになり、さらに東へ延びて、砂押川付近までは延びていたと思われる。

〔方向〕路線が北2ａ道路跡とほぼ重複しており、これと同一と考えておきたい。

〔変遷〕側溝は2回改修されており、少なくとも3時期あったことがわかる。

〔年代〕8世紀後半頃と考えられるＳＤ100河川跡や、それより新しくやはり8世紀後半頃と考えられるＳＤ461より新しいことから、概ね9世紀以降と考えられる。

一方、出土遺物からみると、道路跡側溝出土遺物と側溝に接続するＳＤ450の出土遺物はロクロ調整後に底部に再調整される土師器坏や、ヘラ切り無調整の須恵器坏が主体であり、多賀城政庁第Ⅲ期の瓦が共伴している。こういった特徴は9世紀前半頃と考えられている多賀前地区第2群土器（宮原・佐藤他；1996）と同じである。したがって、本道路跡の年代は、概ね9世紀前半頃と考えられる。

〔他の道路との関係〕本道路跡と直接接続している道路跡は、今回の調査では検出されていない。しかし、多賀前地区の北1西3道路跡交差点では、年代的に本道路跡と同時期である最も古い時期に、北1道路跡以北の西3道路跡が存在しており、本道路跡と東西大路とは西3道路跡を通じて連絡していたと思われる。

一方、県道調査区の西5道路跡（ＳＸ2650）とこれとＴ字形に交差する北3道路跡（ＳＸ2651）は、削平により側溝の残存状況は良くないが、Ａ～Ｅの5時期が確認されている（後藤他；1994）。Ａ・Ｂ期とＣ期以降の側溝は位置を変えており、路幅が大きく変化していることから、この付近の道路跡にはＣ期に大きな変化があったと思われる。本地区での道路の大きな変化は、道路跡Ａ期→道路跡Ｂ期の変化であり、北3・西5道路跡の路幅の変化はこれに対応している可能性が考えられる。したがって、Ａ・Ｂ期が道路跡Ａ期で、Ｃ～Ｅ期が道路跡Ｂ期と思われる。

また、後述する小区画溝のうち、ＳＤ450は本道路跡と接続しており、ＳＤ450と同時期の市調査区（Ｌ区）のＳＤ5459・5466・5467・5478は北3・西5道路跡と接続している可能性がある。これらのことからも、この時期には、本道路跡より北側には北3・西5道路跡が存在していた可能性が考えられる。

②道路跡Ｂ期

【西4道路跡】北2道路跡と北2ａ道路跡間がＳＸ700で、それより北側がＳＸ750である。また、県道調査区（ＳＸ750）と市調査区（ＳＸ5340）でもこの道路の延長が発見されており、これらを合わせると本道路跡は総長208mが検出されたことになる。方向はＮ－4°－Ｅである。

〔変遷〕ＳＸ700・750・5340は側溝がそれぞれ3回改修されており、少なくとも4時期あったことがわかる（註1）。3時期目の側溝には灰白色火山灰が入っており、10世紀前半頃には機能していたことがわかる。一方、県道調査区のＳＸ750は2時期確認されており、廃絶の時期は10世紀前半以降と考えられている。したがって、本道路には概ね4時期の変遷があり、10世紀前半頃には確認された道路は全区間が機能していたと思われる。

【西5道路跡】北2ａ道路跡より北側がＳＸ400である。北2道路と北2ａ道路間は変則的な交差点で、東側溝のみが存在する。また、北側の県道調査区（ＳＸ2650）や市調査区（ＳＸ2650）、南側の市

調査区（ＳＸ5150）でも検出されている。これらを合わせると本道路跡は総長191m検出されたことになり、方向はN－2°－Eである。

〔変遷〕ＳＸ299の東側溝・400・5150の側溝は3回改修されており、少なくとも4時期あったことがわかる。3時期目の側溝には灰白色火山灰が入っている。

また、前述のように、県道調査区の西5道路跡（ＳＸ2650）とこれとＴ字形に交差する北3道路跡（ＳＸ2651）は、Ｃ～Ｅの3時期がこの時期の道路跡と思われ、Ｄ期の側溝には灰白色火山灰が入っていることが確かめられている（後藤他；1994）。

こういったことから、西5道路跡には3～4時期の変遷があり、灰白色火山灰降下前後には同様な変遷をたどったものと思われる。

【北2道路跡】西4道路跡より東側の伏石地区（ＳＸ3900）、西4道路跡と西5道路跡の間（ＳＸ300）、西5道路跡より西側（ＳＸ299）で検出されている。また、西延長上の市調査区（第15次調査区）で西6道路跡との交差点が検出されている（ＳＸ579）。したがって、本道路跡は総長290mが検出されたことになる。方向はW－3°－Nである。

一方、砂押川の対岸の館前地区ではこの道路の延長が検出されており、南北大路と交差し、さらに東へ延びていることが明らかになっている。また、西側では、今年度の東町浦地区の調査で、最も西側で確認されている南北道路である西9道路跡より西側で、この道路の延長とみられる道路跡が検出されている。したがって、南北大路の西側では1400m以上延びていたことになる。

〔変遷〕ＳＸ299・300の側溝は2回改修されており、少なくとも3時期あったことは明らかである。また、2時期目の側溝には灰白色火山灰が入っており、10世紀前葉頃には機能していたことがわかる。ところで、西側の市調査区のＳＸ579では3時期確認されており、3時期目の側溝は灰白色火山灰が入る路面堆積層を切っていた。一方、東側の市調査区のＳＸ300では4時期あり、3番目の側溝に灰白色火山灰が入っていた。さらに東側のＳＸ3900では3時期確認されており、3時期目の側溝には灰白色火山灰が入っていた。しかし、火山灰は側溝の底面近くに入っており、火山灰降下後も側溝として機能しうる状態であったと思われる。したがって、本道路跡は、灰白色火山灰降下後に1度改修されており、東西両端で火山灰降下前に2度改修されていることから、道路全体としては同様な変遷をたどったものと思われ、4時期の変遷が考えられる。

【北2ａ道路跡】西4道路跡の東側（ＳＸ710）と、西4道路跡と西5道路跡の間（ＳＸ390）で検出されている。また、東側の市調査区（市川橋遺跡第10次調査）でも検出されている（新しい道路跡）。

西側はＳＸ299と変則的に交差しており、西5道路跡より西へは延びず、北2道路と合流している。また、東側は砂神川の対岸の館前地区では、延長上に道路が存在しないことが確認されている。

したがって、本道路跡はおよそ200m検出されたことになり、方向は西4・西5道路跡間でＥ－2°－Nである。

〔変遷〕ＳＸ390・710の側溝は2回改修されており、少なくとも3時期あったことがわかり、3時期目の側溝には灰白色火山灰が入っている。

なお、西4道路跡との交差点では、火山灰降下後は西4道路の側溝に接続する側溝は検出されなか

った。また、西５道路跡との交差点では、火山灰降下後に路面が桝によって壊されている。こういったことから、本道路跡は火山灰降下後には機能していなかったと思われる。

次に道路跡Ｂ期全体についてまとめてみる。

〔変遷〕これらの道路跡は各期の側溝がそれぞれ連結しており、出土遺物からの年代や灰白色火山灰との関係から、同時期に存在していたことは明らかで、本地区全体を方形に区画していたことになる。

このうち北２・西４・５道路跡は３回改修されており、少なくともA→B→C→Dの４時期あったことがわかる。C期の側溝に灰白色火山灰が入っていることから、火山灰降下後に１度改修されている。

北２ａ道路跡は２回改修されており、３時期目の側溝に灰白色火山灰が見られることから、C期までは方格地割の道路と同様な変遷をたどったものと思われる。一方、灰白色火山灰降下後には改修されておらず、他の方格地割の道路より早く廃絶したものと考えられる。

〔年代〕９世紀前半頃と考えられる道路跡A期より新しいことから、９世紀前半以降と思われる。また、３時期目の側溝に 10 世紀前葉頃の灰白色火山灰が含まれることから、この頃には機能しており、さらにその後に１度改修されていることから、10 世紀前半頃までは存続していたものと考えられる。

出土遺物からは、最も古い側溝出土遺物をみると、ロクロ調整で回転糸切り無調整の土師器坏や、回転糸切り無調整や回転ヘラ切り無調整の須恵器坏が多く、多賀前地区第３群土器とほぼ同じ内容であり、９世紀後半頃の年代が考えられる。また、最も新しい側溝の堆積土出土土器には、赤焼土器の坏などは含まれるが小皿は含まれないことから、多賀前地区第４群土器と同じで、10 世紀前葉頃の年代が考えられる。したがって、B 期の道路跡の年代は、９世紀後半から 10 世紀前半頃と考えられる。

ⅱ　道路跡による区画

本地区は道路跡によって区画されている。以下、道路跡の時期ごとに検討する。

①道路跡A期

前述のように、ＳＸ500 の他に、西３道路跡、ＳＸ500 以北の西５道路跡、北３道路跡の存在が考えられた。他に、南側には北１道路跡が存在していたと考えられており（菅原・佐藤他；1996、石本；1993）、東側の市川橋遺跡第 10 次調査区では、ＳＸ500 に接続する南北道賂跡（古い時期の道路跡）が検出されている（石本；1994）（第 412 図）。

位置関係は、ＳＸ500 と北１道路跡の間が、西３道路跡付近ではおよそ 165mで、西５道路跡付近ではおよそ 135mである。また、ＳＸ500 と北３道路跡の間が、西５道路跡部分で約 107mである。

一方、西３道路跡と西５道路跡の間はおよそ 250m程と推定され、両者の間に存在する古い時期の通路跡と西５道路跡の間はおよそ 200mである。

したがって、本地区のこの時期には、道路による整然とした地割りは存在しなかったと思われる。

②道路跡Ｂ期

方形に区画された各区の名称は多賀前地区と同様に、区画の北側と西側の道路名で代表させることとする。すなわち、今回の調査では、北３西６区（A区北側）、北２西６区（A区南側）、北２ａ西５

区（B区）、北3西5区（C・D区）、北2西4区（伏石地区）の5地区が発掘されたことになる。また、北2西5区は市調査区である。以下、各区画ごとに説明する。

【北3西6区】南側がＳＸ299で、東側がＳＸ400であり、西側はＳＸ582（石川；1992）である。北側は西5道路より西側では北3道路は存在せず、かわりに西6道路が湾曲して西5道路と接続していると考えられている（後藤他；1994）。この区画の名称となっている北3道路は存在しないが、ここでは便宜的にこのように呼ぶことにする。したがって、西・北辺の状況は明らかではなく、区画の形状も不明である（第412図）。

規模は、東西長が区画の南側の内法でおよそ120m程である。南北については、交差点が発見されておらず不明だが、東側では140m以上である。

【北2西6区】北側がＳＸ299で、東側がＳＸ5150であり、西側は北2道路との接続部が発見されている。一方、南側は未調査であり、平面形は不明だが、北1道路跡は東西大路と平行すると考えられており（菅原・佐藤他；1995）、そうした場合この区画の平面形は台形と考えられる（第412図）。

規模は、東西長が北辺の内法で約125mである。

【北3西5区】北側がＳＸ2651で、東側がＳＸ750であり、西側はＳＸ400で、南側がＳＸ390である。

平面形は、西4道路と北3道路の交差点が発見されていないが、北3道路と北2ａ道路が平行していないことから、台形と思われる（第412図）。

規模は、東西長が南辺の内法で約112mである。南北長は西側の北3、北2ａ道路間が約107mで、区画の内法が約102mである。東側は92m以上である。

【北2ａ西5区】北側がＳＸ390で、東側がＳＸ700であり、西側はＳＸ299で、南側がＳＸ300である。

平面形は東西道路が平行しておらず、台形である（第412図）。

規模は、東西長が北辺の内法で約112mであり、南辺の内法で約111mである。南北長は西側の北2、北2ａ道路間がおよそ27m程で、区画の内法が約21mであり、東側は通路間が約36mで、内法が約29mである。

【北2西4区】北側がＳＸ3900で、東側がＳＸ4013であり、西側はＳＸ5340で、南側がＳＸ4012である。

平面形は東西道路が平行していないことから、台形と思われる（第412図）。

規模は、南東と北西の交差点が検出されているが各辺の長さは計測できず不明であるが、東西長がおよそ130m程であり、南北長は東辺で130m程と推定される。

【北2西5区】北側がＳＸ300で、東側がＳＸ5500・5628であり、西側はＳＸ5150で、南側がＳＸ670である。

平面形は東西道路が平行していないことから、台形と思われる（第412図）。

規模は、東西長が北辺の内法で約112mであり、南北長は東辺でおよそ120m程と推定される。

iii　小区画施設

道路による区画内をさらに区画する溝が検出されている。これらの位置関係や変遷などについて、道路跡の時期ごとに検討する。

①道路跡A期

ＳＸ500の北側にあるＳＤ450と、南側にあるＳＤ3034・3064・3075・3120がある。

【ＳＤ450】ＳＸ500の北側溝と接続していることから、道路跡A期と考えられる小区画溝である。市調査区（Ｌ区）のＳＤ5440と一連であり、東西に区画する南北溝である（第416図）。

〔位置関係〕南側はＳＸ500と接続しており、Ｌ区で南北に区画する区画溝（ＳＤ5469）と接続している。また、前述のように西5道路跡がこの時期に存在した可能性が考えられることから、これらによって南北が長い長方形に区画されていることになる。規模は、東・西辺がおよそ58m、南辺が約39m、北辺がおよそ30mである。

なお、Ｌ区では南北の区画溝や道路跡が検出されており、この小区画の北側にも、同様な小区画が存在したと思われる。

〔変遷〕ＳＤ5440では1度掘り替えられており、少なくとも2時期あったものと思われる。

〔年代〕どの時期かは確定できないが、ＳＸ500の北側溝に接続していることから、9世紀前半頃と思われる。

【ＳＤ3034・3064・3120】南北方向のＳＤ3064と、東西方向のＳＤ3034・3120は方向がほぼ直交し、重複する区画溝の中で最も古いものであることから、同時期に存在していた可能性がある。重複状況や出土遺物の年代から、道路跡A期の小区画溝と思われる（第417図）。

〔位置関係〕ＳＤ3120とＳＸ500との距離はおよそ100m程であり、北1道路跡との距離はおよそ60m程である。したがって、ＳＤ3120は東西道路間を概ね3等分する位置にあると思われる。ＳＤ3120とＳＤ3034の距離はおよそ30mであり、ＳＤ3034は3等分された小区画をさらに2等分していると思われる。また、西3道路跡とＳＤ3064の距離はおよそ60m程である。

〔変遷〕掘り替えの痕跡はなく、改修されなかったものと思われる。

〔年代〕ＳＤ3034・3064は9世紀前半でも比較的新しい時期の工房であるＳＸ3029より古く、9世紀前半以前と考えられる。また、ＳＤ3064からはロクロ調整で糸切り無調整の土師器坏などが出土しており、概ね9世紀以降の年代が考えられる。したがって、これらの年代は、9世紀前半頃と思われる。

②道路跡B期

道路による方格地割が成立しているため、各地区ごとに検討する。

【北3西6区】東西に区画するＳＤ07・08と、南北に区画するＳＤ10とがある。このうち、ＳＤ07とＳＤ10は接続しており、同時期に存在していたものと思われる（第412図）。

なお、ＳＤ07・08はそれぞれＳＸ299の北側溝と接続しているが、調査時には道路側溝と区画溝という認識がなく、それぞれの対応関係の吟味は不十分である。

〔位置関係〕ＳＤ07とＳＸ400の想定される西側溝との距離はおよそ40m程であり、ＳＸ582の東側溝との距離は約80mである。ＳＤ08はＳＤ07の4m東にある。この区画の東西長はおよそ120mであることから、両者はこの区画の東からおよそ1/3ほどに位置すると思われる。

ＳＤ10とＳＸ299の北側溝との距離は約6mで、この間は空閑地となっている。道路側溝と近接して存

在する溝跡は、北2西5区北側西部（ＳＤ5117）や北2西4区北側（ＳＤ3204）にも存在し、いずれも側溝と溝跡の間は空閑地となっており、区画内の宅地と道路との緩衝地帯としていた可能性が考えられる。

〔変遷〕ＳＸ299との接続状況からは、ＳＤ07・10→ＳＤ08の2時期があると思われるが、前述のようにこの接続状況は保留しておきたい。出土遺物からは同時期と考えた方が妥当性があると思われる。なお、ＳＤ07・08は改修された可能性があり、その場合は細分されると思われる。

〔年代〕ＳＤ07・10はＳＤ07がＳＸ299の北側溝に接続していることや、堆積土中にロクロ土師器を含み、赤焼土器を含まないことや灰白色火山灰を含まないことから、9世紀後半頃と思われる。

ＳＤ08は、少量の赤焼土器を含むが他の遺物はＳＤ07とほぼ同様であり、同様の年代が考えられる。

ところで、ＳＤ07とＳＤ08は同時期に存在していた可能性があり、その場合、これらは道路側溝として機能していた可能性も考えられる。

【北2西6区】

南北に区画するＳＤ53・59と東西に区画するＳＤ73・75がある。ＳＤ73・75はＳＤ53・59と直交し、接続はしないもののすぐ南側から始まることから、両者は同時期に存在した可能性がある（第412図）。

〔位置関係〕ＳＤ53・59とＳＸ299の南側溝との距離は約22mである。この区画の南北長が不明なことから、区画内の位置は推定できない。ＳＤ73・75とＳＸ5150の西側溝との距離は約41mである。この区画の東西長は約120mであることから、ＳＤ73･75はこの区画の東からおよそ1/3に位置すると思われる。また、これらの溝跡より西側はＳＤ100河川跡である。

〔変遷〕ＳＤ59→ＳＤ53、ＳＤ75→ＳＤ73の2時期があり、それぞれ1度ずつ改修されている。両者は同時に存在していたと推定されることから、改修も同時期であったと考えられ、Ａ：ＳＤ59・75→Ｂ：ＳＤ53・73の2時期があったと考えられる。

〔年代〕Ｂ期のＳＤ53は10世紀前葉頃に廃絶したＳＥ76より古く、10世紀前葉以前と考えられる。また、堆積土中から赤焼土器が比較的多く出土しており、多賀前地区第4群土器（菅原・佐藤他；1996）に類似していることから、Ｂ期の年代は10世紀前葉頃と思われ、Ａ期はそれ以前と考えられる。

【北3西5区】

東西に区画するＳＤ402がある。また、北側の市調査区（Ｌ区）には、南北に区画するＳＤ5453と、東西に区画するＳＤ5455がある（第412・419図）。

ＳＤ402はＳＸ390の北側溝と接続はしないもののすぐ北側まで延びていることから、両者は同時期に存在した可能性がある。また、方向から、市調査区のＳＤ5453に接続している可能性が考えられる。

〔位置関係〕ＳＤ402とＳＸ400の東側溝との距離は約42mであり、方向が異なるため北へ行くほど両者の距離は大きくなる。この区画の南側の東西長は約112mであることから、ＳＤ402はこの区画の西からおよそ1/3に位置すると思われる。

また、前述のように、市調査区のＳＤ5453と接続していると考えた場合、この区画の東南部を方形に区画していることになり、規模は東西42～46m、南北およそ60m程である。

なお、Ｌ区では、北3道路跡の南側溝に接続していると思われる小区画溝（ＳＤ5455）が検出され

第412図　八幡・伏石地区全体図

ていることから、この方形区画の北側に方形に区画された一郭があったと思われる。

〔変遷〕ＳＤ402には重複は確認されなかったが、ＳＤ5453・5455には2時期ある。後者には新しい時期に堆積土に灰白色火山灰が入っており、前者には灰白色火山灰が入っていないことから、古い時期にはこれらが同時に存在したが、新しい時期には後者のみが存在したと考えられる。

〔年代〕ＳＤ402は北2ａ道路跡の北側溝に接続していると見られること、堆積土中からロクロ調整された糸切り無調整の土師器坏が出土し、赤焼土器が含まれないことから、古い時期の年代は9世紀後半頃と思われる。また、後続する新しい時期との関係から、9世紀後半でも比較的新しい時期と考えられる。新しい時期は堆積土に灰白色火山灰が入ることから、10世紀前葉頃に埋没したと考えられる。

【北2西4区】

東西に区画するＳＤ3025と南北に区画するＳＤ3097・3140・3177、鍵の手状に巡るＳＤ3026・3123・3133がある。このうち、ＳＤ3177はＳＤ3123・3133の南北方向部分が北端で東へ直角に折れ曲がった部分の西延長上にあることから、同時期に存在した可能性が考えられる。同様に、ＳＤ3140も西へ直角に折れ曲がった部分の東延長上にあることから、同時期に存在した可能性が考えられる。

また、ＳＤ3025とＳＤ3026の南北方向部分は平行していることから、同時期に存在し、両者の間は道路として使用されていた可能性が考えられる。この両者は後述するように年代的にＳＤ3097と同時期に存在していた可能性が考えられる（第420図）。

一方、西側の市調査区（Ｇ区）には南北に区画するＳＤ5632があり、西4道路の東側溝と接続している。方向や位置関係からＳＤ3097・3120・3140・3123・3133のいずれかと一連の可能性があるが、確定できない（第412図）。

〔位置関係〕北2道路の南側溝とＳＤ3177（＝ＳＤ3123・3133の北側）との距離は約32mであり、ＳＤ3097・3140（＝ＳＤ3123・3133の南側）との距離は約68mである。

一方、西4道路の東側溝とＳＤ3123・3133の南北方向部分との距離は約59mである。

ところで、北2西4区は台形を呈し、南北長は120～130m程で、東西長は130m程と推定される。先述のようにＳＤ3123・3133・3140・3177を同時期のものとみると、これらはこの区画のおおよそ北半分を区画していると考えられる。すなわち、ＳＤ3123・3133の南側の東西方向部分とＳＤ3177とでこの区画を南北に分割し、それをさらにＳＤ3123・3133の北側の東西方向部分とＳＤ3177とで南北に二分割している。また、ＳＤ3123・3133の南北方向部分は南側の小区画をおよそ二分割していると考えられる。

また、ＳＤ3097はこの区画を南北に二分割する位置にある。

一方、ＳＤ3025・3026はこの区画をおよそ東西に二分割していると考えられる。

〔変遷〕中央部でＳＤ3133→ＳＤ3123→ＳＤ3097の3時期がある。また、位置関係から、ＳＤ3097はＳＤ3025と同時期と考えられ、ＳＤ3177とＳＤ3140はＳＤ3123もしくはＳＤ3133と同時期と考えられる。後者については、ＳＤ3140が後続するＳＤ3097とほぼ同位置であることから、ＳＤ3123と同時期である可能性が高い。したがって、小区画溝跡には大きくＡ：ＳＤ3133（・3140・3177）→Ｂ：ＳＤ3123（・3140・3177）→Ｃ：ＳＤ3025・3026・3097の3時期の変遷があると思われる。

〔年代〕B期のＳD3123は9世紀前半頃のＳD3120より新しく、9世紀前半以降と思われる。また、堆積土からはロクロ調整で糸切り・無調整・手持ちヘラケズリの土師器坏が多く出土しているが、赤焼土器は含まれていない。こういった特徴は多賀前地区第3群土器と一致し、年代は概ね9世紀後半頃と考えられている。一方、C期のＳD3026の堆積土上部には灰白色火山灰が堆積しており、10世紀前葉頃に埋没したと考えられる。したがって、これらの小区画溝は、9世紀後半頃から10世紀前半頃にかけて機能していたと考えられる。

B　掘立柱建物跡

掘立柱建物跡は314棟発見された。A区で44棟、B区で37棟、C・D区で126棟、伏石地区で107棟である。以下、これらの規模や構造、年代などについて検討する。

〔規模〕桁行・梁行ともに様々であり、桁行3間、梁行2間程で、床面積が10～20㎡程度の小規模なものや、桁行が長大で、床面積が60㎡以上の大規模なもの、その中間のものなどがある。数的には前者が大半を占める。

〔構造〕側柱の建物跡と総柱の建物跡がある。数約には前者が大部分である。側柱建物跡の中には梁行が1間のものや、同一建物内で桁行の間数が異なるものがある。

また、東西棟で東半部が床貼りとなっている建物跡がある（ＳB303・357）。西半部は土間であったと推定され、建物内での使い分けが窺われる。

一方、どちらかの妻側に片寄った間柱を持つ小規模な建物跡は（ＳB301・1534・1577・1587・1589・1618・1634・3843）、狭い部分が床貼りで、広い部分は土間と推定されており、同様に内部の使われ方の違いが窺われる。

廂を持つもの、縁または廂を持つもの、張出しを持つものがある。

〔柱穴〕平面形は、方形・隅丸方形を基調とするものと円形・楕円形を基調とするものとがある。規模は、一辺（直径・長径）が0.2～1.0mのものがあり、0.2～0.3m前後のもの、0.3～0.4m前後のもの、0.5m以上のものとに大別される。

これらの関係をみると、①：平面形が方形・隅丸方形を基調とし、一辺が0.5m以上の比較的大きな掘り形のもの、②：平面形が方形・隅丸方形を基調とし、一辺が0.3～0.4m程の比較的小さな掘り形のもの、③：円形・楕円形を基調とし、直径が0.2～0.3m程の小さな掘り形のものとに大別されるが、②、③については明瞭に区別できないものも存在する。

なお、③の建物跡は柱間のバラつきが大きく、平面形が歪むものが多い傾向にある。

〔方向〕建物の方向をみてみると、A：北で西へ振れるもの、B：ほぼ真北方向のもの、C：北で東へ振れるものとに大別され、さらに、東・西に振れるものには、1：7°前後の比較的振れの小さいもの、2：14°前後のもの、3：30°程度の振れの大きなものとに細分される（註2）。したがって、建物跡の方向はA1～C3までの7グループがあることになる。数的にはA1・B・C1の3グループが大半を占め、次にA2グループが多く、A3・C2・C3グループはごくわずかである。

〔年代〕遺構の重複関係や出土遺物からある程度年代を推定できるものは以下のとおりである。各区ご

とに検討する。

A区

【ＳＢ56】8世紀後半頃のＳＥ84を壊しており、「新しい屋敷跡」の最も古い時期の堀であるＳＤ31に壊されている。また、柱穴埋土中から回転糸切り無調整の土師器坏や赤焼土器坏が出土していることから、年代は10世紀前半頃と思われる。

【ＳＢ80・1507】10世紀前半頃のＳＦ47・48に壊されていることから、それ以前と考えられる。

【ＳＢ140】8世紀後半のＳＤ100－1層に覆われ、ＳＤ100－2層上面で検出されたことから、8世紀後半と考えられる。

【ＳＢ141】9世紀後半頃のＳＤ08に壊されていることからそれ以前と考えられる。

【ＳＢ316】9世紀後半頃のＳＤ10に壊されていることからそれ以前と考えられる。

【ＳＢ318】ＳＢ316より古いことから9世紀後半以前と考えられる。

【ＳＢ319・320】10世紀前半以前のＳＤ59より古いことからそれ以前と考えられる。

【ＳＢ1622とＳＡ1623】8世紀後半頃のＳＤ100－2層に覆われ、ＳＤ100－3層上面で検出されたことから、8世紀後半と考えられる。

ところで、A区の南側では、中世と考えられる土壙や溝は特徴的な黒色土で埋まっており、同様な黒色土が柱穴埋土中にみられる、ＳＢ301～307・1501～1506・1509・1510・1532～1534・1628・1632・1634・1635・1665・1666、ＳＡ1629～1631・1633・1636・1637は中世と考えられる。

B区

【ＳＢ245・1521】ＳＤ100－1層よりも古く、ＳＤ100－2層より新しいことから、8世紀後半頃と考えられる。

【ＳＢ246】ＳＤ100－2層よりも古く、ＳＤ100－3層より新しいことから、やはり8世紀後半頃と考えられる。

【ＳＢ358】ＳＤ100－3層よりは新しく、灰白色火山灰が入るＳＦ188より古いことから8世紀後半～10世紀前葉頃のものであると考えられる。

C・D区

【ＳＢ434とＳＢ636】いずれも南廂付きの建物で、柱筋が揃っていることから同時期に存在した建物跡と考えられる。両者の柱穴には比較的多くの土器片が含まれており、その中に少量の赤焼土器が含まれていることから、建築されたのは概ね10世紀前半頃と考えられる。

【ＳＢ475・554・655・1580・1651】9世紀後半頃のＳＤ402より古いことからそれ以前と考えられる。

【ＳＢ577】9世紀頃のＳＫ495に壊されており、それ以前である。

【ＳＢ581】9世紀前半頃のＳＤ450より新しく、9世紀後半頃のＳＤ402よりは古いことから9世紀代と考えられる。

【ＳＢ588】8世紀代のＳＩ506に壊されており、それ以前と考えられる。

【ＳＢ623・1648】8世紀後半のＳＤ461より新しいことから、8世紀後半以降と考えられる。

【ＳＢ643】埋土中に灰白色火山灰の小ブロックが上方から混入した状況が確認されており、10世紀前

葉以前と思われる。
【ＳＢ648・1571】9世紀後半頃のＳＫ474より古く、8世紀後半のＳＤ461より新しいことから、8世紀後～9世紀後半と思われる。
【ＳＢ655】8世紀代のＳＩ519より新しく、9世紀後半頃のＳＤ402より古いことから、8～9世紀頃と考えられる。また、ＳＢ1580の建て替えと考えられることから、ＳＢ1580もこの頃と思われる。
【ＳＢ680】8世紀後半頃のＳＩ493より古いＳＤ521よりさらに古いことから、8世紀後半以前と考えられる。
【ＳＢ899】9世紀後半頃のＳＤ402より古く、8世紀後半頃のＳＫ898より新しいＳＦ896よりさらに新しいことから、8世紀後半～9世紀後半と考えられる。
【ＳＢ1556】8世紀後半～9世紀後半のＳＢ648より古く、9世紀後半以前の年代が考えられる。
【ＳＢ1558】8世紀後半のＳＤ461より新しく、9世紀後半以前のＳＢ1556より古いことから、8世紀後半～9世紀後半の年代が考えられる。
【ＳＢ1564】灰白色火山灰が入るＳＦ395よりも古く、10世紀前葉には廃絶していたＳＥ413と関連する施設の可能性があることから、概ね9世紀後半頃の年代が考えられる。
【ＳＢ1572】9世紀前半のＳＤ450より古いことから、それ以前の年代が考えられる。
【ＳＢ1582】8世紀代のＳＩ506より新しく、9世紀後半頃のＳＫ495より古いことから、8～9世紀の年代が考えられる。
【ＳＢ1588】9世紀後半頃のＳＤ487より古く、それ以前と思われる。
【ＳＢ1596・1598】9世紀後半頃のＳＫ474より古く、それ以前と思われる。
【ＳＢ1599】8世紀後半頃のＳＩ493より新しく、9世紀後半頃のＳＤ402より古いことから、8世紀後半～9世紀後半の年代が考えられる。
伏石地区
【ＳＢ3400・3787・3790】後述するＳＢ3401よりも古く、10世紀前葉以前に建築されたものと考えられる。
【ＳＢ3401】柱痕跡に灰白色火山灰粒が認められるものの、柱穴埋土には含まれておらず、建物は灰白色火山灰降下以前に建てられたものと考えられる。一方、柱穴埋土からは赤焼土器が出土しており、建築年代は、概ね10世紀前葉に収まるものと考えられる。
【ＳＢ3408】9世紀後半頃のＳＤ3133より古く、それ以前と思われる。
【ＳＢ3410】10世紀前半頃のＳＤ3155より古く、それ以前と思われる。
【ＳＢ3411】9世紀後半頃のＳＤ3123より古く、8世紀前半頃の可能性があるＳＡ3158より新しいことから、8～9世紀頃と思われる。
【ＳＢ3416】9世紀前半頃のＳＤ3120より古く、それ以前と思われる。
【ＳＢ3417】9世紀後半頃のＳＤ3140より古く、9世紀前半頃のＳＤ3064より新しいことから、9世紀代と思われる。
【ＳＢ3418・3821】8世紀後半頃と考えられるＳＤ3075よりも古く、それ以前と思われる。

【ＳＢ3419】9世紀後半でも、比較的新しい時期と考えられるＳＫ3047より古く、柱穴埋土から出土した鉄滓は、9世紀前半でも比較的新しい時期のＳＸ3029起源と考えられることから、概ね9世紀後半頃である可能性が高い。
【ＳＢ3420・3443】9世紀前半頃のＳＤ3064より古く、それ以前と思われる。
【ＳＢ3423】8世紀後半頃と考えられるＳＤ3075よりも新しく、それ以降と思われる。
【ＳＢ3424・3806】柱痕跡に灰白色火山灰が上方から入り込んだ状況が見られ、火山灰降下以前に廃絶していたと思われ、10世紀前葉以前と推定される。
【ＳＢ3429】柱穴埋土から鉄滓が出土しており、9世紀前半でも比較的新しい時期のＳＸ3029よりは新しいと思われ、9世紀後半以降に建築されたものと思われる。
【ＳＢ3431】9世紀後半以降のＳＢ3429より新しく、それ以降と思われる。また、ＳＢ3430は本建物跡と柱筋が揃っており、同時期に存在したと思われる。
【ＳＢ3432・3826】ＳＸ3029工房跡より新しく、9世紀後半以降に建築されたものと思われる。
【ＳＢ3433】ＳＸ3029工房跡より古く、これ以前と思われる。
【ＳＢ3441】9世紀前半頃のＳＤ3064より古く、それ以前と思われる。
【ＳＢ3789】上記のＳＢ3401よりも新しく、10世紀前葉以降に建築されたものと考えられる。
【ＳＢ3807】柱痕跡に灰白色火山灰粒が認められるものの、柱穴埋土には含まれていないことから、10世紀前葉以前と考えられる。
【ＳＢ3810】柱切取り穴に灰白色火山灰粒が入っており、10世紀前葉頃に廃絶したものと考えられる。
【ＳＢ3829】柱穴埋土から鉄滓が出土しており、ＳＸ3029よりは新しい建物跡であると推定される。また、9世紀後半のＳＤ3025より古いことから、年代は9世紀後半頃と考えられる。
【ＳＢ3852】ＳＸ3029工房跡より古いＳＤ3034よりさらに古いことから、9世紀前半以前に建築されたものと思われる。
【ＳＢ3858・3860】9世紀前半でも新しい時期に埋め戻されたＳＫ3016より古いことから、これ以前に建築されたものと思われる。
【ＳＢ3859】9世紀前半でも比較的新しい時期に埋め戻されたＳＫ3016より新しいことから、これ以後に建築されたものと思われる。

なお、本地区では、八幡地区Ａ区南側と同様に、中世の遺構に特徴的な黒～黒褐色粘質シルトが含まれており、柱穴埋土中に同様のシルトが含まれるＳＢ3405・3815・（3816・3817）は、中世以降の建物跡と考えられる。

次に規模や構造などから年代について検討してみる。

建物規模との関係をみてみると、数は少ないものの、桁行や梁行が長く、床面積の大きなものはいずれも中世のものであり（ＳＢ306・1504・1505・1532・1533・1632）、年代が決定できない他の大規模なものについても、同じ年代が考えられる（ＳＢ1516・1524・1559・1565・1569・1595・1601）。なお、ＳＢ1517はＳＢ1516の建て替えと考えられるので、中世と考えられる。

構造からみると、柱穴が比較的小規模で、円形・楕円形を基調とし、廂または縁を持つものや張出

しを持つもののなかで、年代のわかるものはいずれも中世以降である（ＳＢ306・1504・1505・1532・1533・1632・1516・1517）。このような建物跡は、多賀城市新田遺跡（千葉他；1990）、仙台市鴻ノ巣遺跡（田中；1992）、仙台市王ノ壇遺跡（小川；1995）、川崎町本屋敷遺跡（古川他；1986・1987）、大和町下草古城跡（天野；1996など）などで発見されており、年代は概ね中世と考えられている。したがって、本遺跡におけるこういった構造の建物跡の年代は、概ね中世と考えられる（ＳＢ1524・1528・1559・1565・1567・1569・1601・1653・1616）。

柱穴の形状は①～③に大別できた。①の建物跡のうち年代のわかるものは、すべて奈良・平安時代かそれ以前であり（ＳＢ140・141・316・318・358・475・655など）、中世のものはない。また、山王遺跡を始め、多賀城跡や他の県内の遺跡をみても、このような柱穴の建物跡は、奈良・平安時代かそれ以前と考えられている。したがって、このような建物跡は、概ね奈良・平安時代かそれ以前と考えられる（ＳＢ81・321など多数）。さらに、これらのうち、柱穴に赤焼土器が含まれるものは、10世紀以降の平安時代に限定できると考えられる。

②の建物跡のうち年代がわかるものは奈良時代であるが（ＳＢ245・246）、本遺跡では他には限定できる例がなく確実な時期決定はできない。

③の建物跡のうち年代のわかるものは大半が中世である。また、他の遺跡で検出された中世の掘立柱建物跡の柱穴は、いずれも円形もしくは楕円形を基調とするものである。したがって、ここでは、年代の決定できないこういった建物跡は、概ね中世のものと考えておきたい。

建物の方向は7グループに分けられた。これらを、柱穴の形状によって中世とそれ以前の建物とに分け、各グループごとの新旧関係を検討してみる。

中世のものは建物間の重複がほとんどなく、新旧関係は不明である。また、後述のように、新しい屋敷跡の各時期の建物跡は方向がまちまちであり、この時期には方向に対する規制はあまり強くなかったようである。

中世以前の建物には、

ＳＢ1541（A1）→ＳＢ640（B）→ＳＢ637（B）→ＳＢ636（C1）
ＳＢ1557（A1）→ＳＢ502（B）
ＳＢ1556（B）→ＳＢ648（C1）
ＳＢ1583（A2）→ＳＢ530（A1）
ＳＢ411（C1）→ＳＢ648（C1）
ＳＢ3420（A1）→ＳＢ3441（A1）
ＳＢ3421（A2）→ＳＢ3423・3445（C1）
ＳＢ3429（B）→ＳＢ3431（C1）
ＳＢ3858（C2）→ＳＢ3429（B）→ＳＢ3431（C1）
ＳＢ3841（A2）→ＳＢ3344（B）
ＳＢ3403（C3）→ＳＢ3405（B）
ＳＢ3409（B）→ＳＢ3408（C1）

といった重複状況がある。これらからは、C1グループが最も新しいことがわかる。また、年代的にはA1グループは8世紀～9世紀前半頃であり、C1グループは9世紀後半以降である。Bグループは、A1グループより古いものも存在するが、A1グループより新しく、C1グループより古いものが多い。したがって、若干の例外は存在するものの、建物の方向は概ね、北で西へ振れるものから、北で東へ振れるものに変化したと思われる。こういった変化とは、本遺跡内では県道調査区（後藤他；1994）で確認されているが、他地区では異なる変化が確認されており、本地区周辺のみの傾向と考えられる。

C　竪穴住居跡

竪穴住居跡は31棟調査した。A区で1棟、B区で2棟、C・D区で26棟、伏石地区で2棟である。この他、C・D区で平面的に45棟を確認している。以下、地区ごとに年代などについて検討する。

A区

【ＳＩ44A・B】B期の床面直上層からは多賀城政庁第Ⅱ期の平瓦が出土しており、年代は天平13（741）年以降と考えられる。また、土師器はすべて非ロクロ調整であり、9世紀代までは降らないものと思われる。したがって、B期の住居跡の年代は、8世紀後半頃と考えられる。

なお、須恵器坏には、静止糸切り後、手持ちヘラケズリされるものなどがあり、これらは天平11（739）年を前後する時期に位置づけられている色麻町日の出山窯跡第Ⅲ群土器（古川；1994）等に類例が求められることから、推定される年代幅の中でも、比較的古い時期のものである可能性が考えられる。

A期の住居跡については出土遺物が乏しいため詳細は不明であるが、B期以前であり、時間的に大きな差違はないものと考えられる。

B区

【ＳＩ185・190A・B・C】ＳＩ185は周溝内から、ＳＩ190はB期の床面直上層から、ＳＩ44Bと同様に多賀城政庁第Ⅱ期の平瓦が出土している。土師器もまた、ロクロ調整のものはほとんど出土しておらず、これらの住居跡の年代についても8世紀後半頃と考えられる。ただし、これらの住居跡については、ＳD170溝跡を挟んで、ＳＩ185→ＳD170→ＳＩ190A→ＳＩ190B→ＳＩ190Cという新旧関係が認められることから、それぞれは短い時間幅で変遷したものと推定される。

C区

【ＳＩ464】8世紀後半頃のＳD461よりも古いことから、年代は8世紀後半以前と考えられる。また、掘り方のみが残存していたため、出土遺物は少ないが、有段丸底で、内面黒色処理された土師器坏が出土している。こういった特徴の土器は東北地方の古墳時代後期の栗囲式期（氏家1957；、加藤1989）の範疇に含まれると考えられ、本住居跡の年代は栗囲式期であると考えられる。

【ＳＩ468】8世紀後半頃の区画溝であるＳD673・674よりも新しく、8世紀後半～9世紀後半頃と考えられるＳB648よりも古いことから、年代は8世紀後半～9世紀後半頃と考えられる。

また、非ロクロ調整で平底の土師器坏やロクロ調整で回転ヘラケズリ再調整された土師器坏が出土していることから、本住居跡は、8世紀後半頃の年代が考えられる。

【ＳＩ489】後述する7世紀前半頃に位置づけられるＳＩ491より新しい。土師器坏は有段丸底のものであり、栗囲式期のものである。また、共伴する須恵器蓋は口径10.7㎝で、やや短めのカエリが付く。須恵器蓋のこうした特徴は、概ね大阪府陶邑における須恵器編年（田辺；1981）のＴＫ217型式に並行する段階のものと考えられることから、本住居跡の年代は、ほぼ7世紀中頃に位置づけられるものと考えられる。

【ＳＩ491】土師器坏・高坏・甕・甑、須恵器有蓋高坏蓋・無蓋高坏・鼓・甕・転用鉢（平瓶）が出土している。前項の「出土遺物について」で述べたように、土師器は栗囲式に相当するもので、須恵器は在地の同一窯において製作されたもので、有蓋高坏蓋、無蓋高坏は器形的にはＴＫ43型式に、鼓はＴＫ209型式に類似しており、本住居跡の年代は、7世紀前半頃に位置づけられるものと考えられる。

【ＳＩ492】7世紀前半頃に位置づけられるＳＩ491より古く、それ以前の住居跡である。

【ＳＩ493Ａ・Ｂ】Ｂ住居跡から、土師器坏・甕と須恵器坏が出土した。土師器坏はロクロ調整のものもごく少量みられるが、ほとんど非ロクロ調整であり、甕はロクロ調整である。須恵器坏は、ヘラ切り無調整が多い。こういった特徴は、8世紀末頃に位置づけられる築館町伊治城跡ＳＩ173竪穴住居跡出土遺物（菊地；1991・1993・1994）などに類例を求められ、Ｂ期の住居跡の年代もそれとほぼ同時期のものと考えられる。Ａ期の住居跡は、Ｂ期と時間的にはさほど隔たらないものと考えられる。

【ＳＩ498・533・747・756・767・874】有段丸底の土師器坏と、外面ハケメ調整で頸部有段の土師器甕などが出土しており、栗囲式期と思われる。

【ＳＩ499】栗囲式期のＳＩ498よりも古く、栗囲式期以前の住居跡である。

【ＳＩ506】土師器坏・甕、須恵器坏が出土している。土師器はいずれも非ロクロ調整で、坏は無段平底であり、甕は外面ヘラケズリ調整で、頸部に段を持たないものである。須恵器坏はヘラ切り・無調整であり、こうした特徴から本住居跡の年代は概ね8世紀代と考えられる。

【ＳＩ519】ロクロ調整の土師器は出土しておらず、無段平底の土師器坏が出土していることから、8世紀代の住居跡と考えられる。

なお、同じく8世紀代と考えられるＳＩ506とは直接の重複はないものの、極めて近接しており、同時期に存在した可能性は低いと考えられる。

【ＳＩ560】栗囲式期と考えられるＳＩ533より古く、それ以前の住居跡である。また、カエリの付く須恵器蓋が出土していることから、栗囲式期の住居跡である可能性が考えられる。

【ＳＩ624】9世紀前半頃のＳＤ450より古く、それ以前と考えられる。また、土師器にはロクロ調整で、回転ヘラケズリ調整が施される坏がみられることから、住居の年代は概ね8世紀後半頃に限定される可能性が高いと考えられる。

【ＳＩ649】9世紀前半頃のＳＤ450よりも古く、それ以前の住居跡と考えられる。

【ＳＩ746・748・749・754・765・766・875】栗囲式期のＳＩ747・756・757よりも古く、栗囲式期以前の住居跡である。また、ＳＩ746・748・749・754出土の土師器坏は内面が黒色処理されているものがほとんどであり、これらについては、概ね栗囲式期におさまるものと考えられる。

伏石地区

【ＳＩ3634】8世紀末頃と考えられるＳK3637よりも新しく、それ以降と考えられる。

床面出土の土師器甕はロクロ調整で、長胴形と鉢形がある。一方、土師器坏は、堆積土出土のものを含めて非ロクロ調整のものが多く、ロクロ調整のものは少ない。須恵器坏の底部にはヘラ切り後、手持ちヘラケズリ調整が施されている。これらの特徴は、8世紀末に位置づけられる伊治城跡ＳＩ173出土土器（菊地；1991・1993・1994）に類似しており、本住居跡の年代も同様に考えられる。

したがって、ＳK3637→ＳＩ3634という新旧関係は存在するものの、両者は短い時間幅の中で変遷したものと考えられる。

D　工房跡

伏石地区で、その可能性のあるものを含め、2棟発見された（ＳX3024・3029）。堆積土からは多量の鉄滓や炉壁、羽口が出土しており、鍛冶工房と思われる。以下、これらの年代について検討し、さらに残存状況の良いＳX3029について工房内の様子について検討する。

〔年代〕両者とも、土師器はロクロ調整で、坏類は切り離し後に再調整されるものが多い。こういった特徴は、後述するＳE3038井戸跡底面出土土器と同様であり、概ね9世紀前半でも新しい時期のものと考えられる

〔床面の様子〕土壙1～4がある。土壙1はこの中では最も大きいもので、底面は焼けたり硬化した痕跡はみられない。工房の隅に位置することから、原料や製品を保管しておく場所の可能性がある。土壙4は溝状で、これに接続しており、これと関連する施設の痕跡であると思われる。

土壙2は床面のほぼ中央にあり、浅い窪みが連結したような状況で、床面に据えてあったものを抜き取った痕跡と思われる。鍛冶工房には床面の中央部に焼面などがみられる例が多く、炉が据えられていたと考えられており、そういったものが撤去された可能性が考えられる。

土壙3は溝状で、両端がやや窪んでいる。壁と直交し、壁から主柱穴の北側柱筋まで延びているこから、壁際に存在した何らかの施設の痕跡と思われる。

なお、主柱穴のうち、南側の2本は壁と接しており、床面を広く利用しようとした意図が窺える。同様の構造の工房（註3）は築館町伊治城跡で発見されている（ＳＩ384、菊地；1995）。

〔壁柱穴〕東壁、南壁東側、西壁南側にある。このうち、西壁南側にあるものは、この部分にあるテラス状の張出し部に対応する位置にあり、出入り口の施設に関するものの可能性がある。

一方、東壁とか南壁東側の壁柱穴の存在から、少なくともこの部分には壁が存在したと思われ、壁立式（宮本；1996）の工房であったと思われる。

E　井戸跡

八幡地区で22基、伏石地区で9基発見された。これらの年代や構造について検討してみる。

ｉ　年代

出土遺物や遺構の重複状況からある程度年代を推定できるのは以下の通りである。

A区

【ＳＥ41】16世紀代の「新しい屋敷跡」の堀であるＳＤ28より新しく、16世紀以降と考えられる。

【ＳＥ66】裏込め土中や側内堆積土にロクロ調整で手持ちヘラケズリされた土師器坏が含まれており、赤焼土器を含まないことから、9世紀代に構築され、廃絶したものと考えられる。

【ＳＥ76】側抜取り穴中に灰白色火山灰が堆積しており、10世紀前葉をそれほど遡らない時期に廃絶したものと考えられる。

【ＳＥ84】裏込め土中に非ロクロ調整の土師器坏やロクロ調整の土師器甕、須恵器坏、蓋などが含まれており、概ね8世紀後半頃に構築されたものと考えられる。

【ＳＥ93】中世の建物跡に切られており、中世以前と考えられる。また、堆積土が中世の遺構に特徴的な黒色土であることから、概ね中世のものと考えられる。

B区

【ＳＥ217】側内堆積土最上部に灰白色火山灰がブロックで入り込んでおり、側内堆積土からは回転糸切り無調整の土師器坏が出土していることから、10世紀前葉以前に廃絶したものと考えられる。

【ＳＥ297】裏込め土に灰白色火山灰がブロックで入り込んでおり、10世紀前葉以降に構築・使用されたと考えられる。

C・D区

【ＳＥ413Ａ・Ｂ】B期の側抜取り穴中に灰白色火山灰が堆積しており、10世紀前葉をそれほど遡らない時期に廃絶したものと考えられる。また、側内堆積土からは赤焼土器坏が、裏込め土からは赤焼土器とロクロ調整の土師器坏が出土しており、10世紀紀前後に機能していたことがわかる。ＳＥ413Ａはこれに先行する井戸跡である。

【ＳＥ467Ａ・Ｂ】裏込め土や側内堆積土の上部にだけ灰白色火山灰の粒が混入しており、10世紀前葉頃には既に埋まっていたと考えられる。また、B期の裏込め土からは回転糸切り調整の土師器坏が、堆積土からはヘラ切り無調整の須恵器坏が出土している。これらの土器は、多賀前地区第2群土器に含まれていることから、9世紀前半頃に構築・使用されたものと考えられる。

【ＳＥ505】抜取り穴の堆積土からは非ロクロ調整で有段丸底の土師器坏が出土しており、7世紀前半頃のＳＤ516を切っていることからそれ以降の年代が考えられる。

【ＳＥ511】側内堆積土から非ロクロ調整で無段平底の土師器坏やヘラ切り無調整の須恵器坏、瓦などが出土しており、8世紀後半頃に廃絶したと思われる。

【ＳＥ517】ＳＥ511が本井戸跡の作り替えと考えられることから、ＳＥ511以前の年代が考えられる。

【ＳＥ569】8世紀後半のＳＤ461より新しいことから、それ以降の年代が考えられる。また、裏込め土から糸切り無調整の須恵器坏が出土していることから、概ね9世紀以降と考えられる。

【ＳＥ570・571】8世紀後半のＳＤ100より古いことから、それ以前であると思われる。

【ＳＥ606】9世紀前半のＳＤ450より古いことから、それ以前のものと思われる。

【ＳＥ630】側抜取り穴から多数の瓦が出土しており、多賀城政庁第Ⅱ期の瓦が大部分であるが、第Ⅲ期の瓦も少数含まれている。第Ⅳ期の瓦が含まれないことから、9世紀前半～中頃に廃絶したものと

思われる。

伏石地区

【ＳＥ3038】井戸側内底面から、ほぼ完形に近い状態でロクロ調整の土師器坏・椀や須恵器坏がまとまって出土しており、これらの年代は、前項で述べたように、9世紀第2四半期頃と考えられる。したがって、井戸の構築年代もこれに近い時期と考えられる。

一方、側内部には底面から1.8m程流入土が堆積しており、井戸廃絶後から井戸側抜取り時まで、長期間開口していたことが推測される。抜取り穴からは、回転糸切り無調整の土師器坏が多く出土し、赤焼土器が出土していないことから、井戸側を抜取った時期は概ね9世紀後半頃と考えられる。

【ＳＥ3164】裏込め土から非ロクロ調整で両面黒色処理された、無段平底の土師器坏などが出土しており、側内堆積土からはロクロ土師器が出土しなかったことから、8世紀後半頃に構築・使用されたと思われる。

【ＳＥ3167・3801】堆積土が中世の黒色土と類似していることから、概ね中世のものと考えられる。

【ＳＥ3310】裏込め土に灰白色火山灰がブロックで入り込んでおり、10紀前葉以降に構築されたと考えられる。また、人為的に埋め戻された埋土からは、後述するＳＸ3012土器溜出土土器と類似した特徴を持つ赤焼土器が出土しており、本井戸跡が埋め戻された年代は、10世紀前半頃と推定される。したがって、本井戸跡の年代は概ね、10世紀前半頃と考えられる。

【ＳＥ3728】10世紀前半頃のＳＥ3310より古いことから、それ以前のものと思われる。

ⅱ　位置

平安時代の井戸についてみてみると、大部分が区画施設（通路・溝）のそばに存在しており、掘立柱建物跡が密集していない場所に作られていることがわかる。また、同じ場所で作り替えられるものや近接して存在するものが多いことから、区画内での井戸の位置はある程度限定されていたのではないかと思われる。多賀前地区でもこの傾向は窺える（第413図）。

ⅲ　構造

井戸側を持つものと素掘りのもの（ＳＥ41・93・566・606・3801）がある。井戸側の構造には、板材の組み方や保持の仕方など細部で違いがあるものの以下のようなものがある。

①：方形の側で、板材を縦に組んで四隅の柱や横材で固定したもの（ＳＥ66・84・217・467Ｂ・511・569・3038・3310）　この中には、最下部に横板組の側を持つものもある（ＳＥ84・3038）。

②：方形の側で、板材を横に組んで四隅の柱や横材で固定したもの（ＳＥ413Ｂ）

③：長方形の側で、長辺では板材を横に組み、短辺では板材を縦に組むもの（ＳＥ3164）

④：曲物を重ねたもの（ＳＥ297）

⑤：桧り抜きのもの（ＳＥ571）

そのほかに、抜き取られていて不明なもの（ＳＥ76・413Ａ・467Ａ・505・517・630）がある。また、側の下に水溜の曲物を据えているものもあり（ＳＥ84・413Ｂ・467Ｂ・569・3728）、曲物だけが検出されたＳＥ240・349・570についてもこういった可能性が考えられる。さらに、ＳＥ3728は上部が不明なものの、最下部が②であり、①～③のいずれかの可能性が考えられる。

ところで、多賀城内やその南側にある山王・市川橋・高崎・新田遺跡などでは多くの井戸跡が発見されており、多くは平安時代や中世のものである。このうち、中世のものはほとんどが素掘りのものである。

また、奈良・平安時代の井戸では、側を持つものが大部分であり、その構造は基本的には上述のものと同じである。数量的には①の縦板組の側を持つ井戸が多く、時期的には9世紀代のものが多いが、10世紀前半頃にも存在している。

一方、横板組の井戸側を持つものは上記のＳＥ413Ｂのほかに、水入地区（森；1982）、多賀城跡第37次調査（白鳥；1980）、山王遺跡8次調査（相沢；1990）、山王遺跡16次調査（相沢；1992）で発見されており、年代はいずれも灰白色火山灰の降下を前後する10世紀前葉頃と考えられている（註4）。したがって、多賀城跡周辺では横板組の側を持つ井戸はこの頃に多く作られるようになったと思われる（註5）。

ⅳ　規模

井戸側の大きさは一辺が0.4～1.0mであり、0.6m×0.7m程度のものが多い。多賀前地区や他の周辺の遺跡においても同様である。

一方、平城宮や平城京内では、井戸の規模の差はその場所の格式の差を表していると指摘されている（黒崎；1976）。多賀城跡南面の方格地割内では、多賀前地区の北1西3区、南1西2区、千刈田地区の北1西7区は「国司館」と推定されており、後二者は「国守館」とされている。それぞれ井戸跡が検出されており、井戸側の大きさは南1西2区で一辺（長径）が0.8m程度であり、他の地区よりもやや大きい傾向が窺えるものの、そのほかの2地区では他地区と大差はなく、多賀城周辺では場所の格式の差は井戸の規模には明確には反映されていないようである。

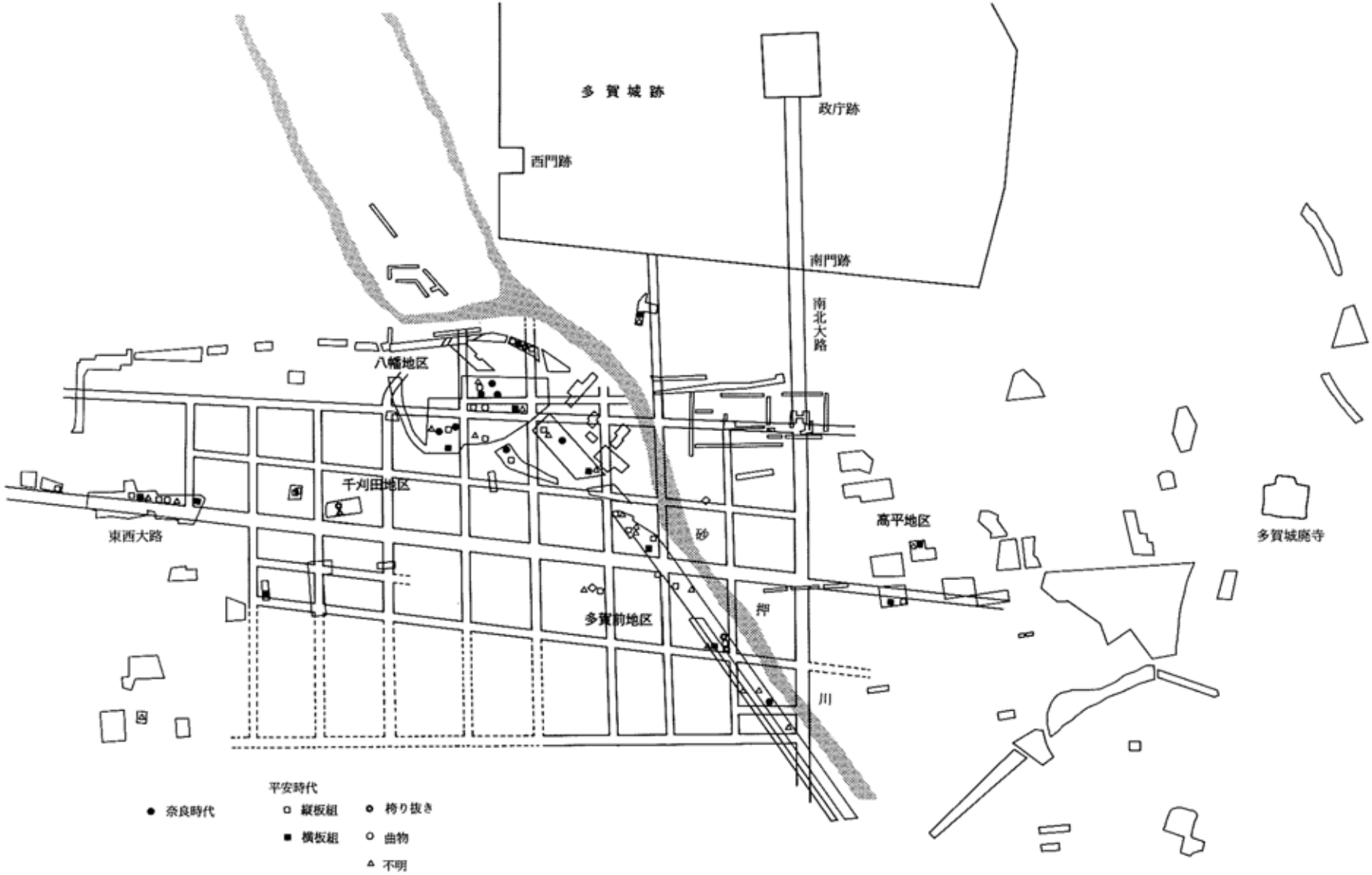
一方、南1西2区と北1西7区では、内法が0.7m前後の刳り抜きの井戸側を持つ井戸が発見されている。刳り抜きの井戸側は他地区でも発見されているが、内法は0.4m程で、前者に比べればかなり小規模である。したがって、現時点では、大規模な刳り抜きの井戸側を持つ井戸は、「国守の館」に限って存在しているといえる。

ⅴ　祭祀

ＳＥ3038の井戸側底面から土師器坏の完形品がまとまって発見されており、何らかの祭祀行為があったと推定される。祭祀の時期については、水溜部が素掘りで底面は埋没しやすいことから、井戸構築時のものの可能性が高いと考えることができる。また、裏込め土からは斎串が出土しており、やはり構築時に祭祀が執り行われた可能性が考えられる。祭祀の具体的な内容については不明であるが、坏3点には同一人による墨書「百」が認められ、祭祀の内容に関係するものと考えられる。

他の井戸跡については祭祀が行われたかどうかは不明である。

なお、多賀城跡南面地域では、底面から完形の土器がまとまって出土した水入地区の第1井戸（森；1982）、斎串・檜扇などが出土した多賀前地区のＳＥ1606（菅原他；1996）で、祭祀が執り行われた可能性が考えられる。



第413図　井戸跡分布図

ⅳ　県内の例

古代の側を持つ井戸を見てみると、官衙や集落などの調査例は多いものの、多賀城とその周辺以外ではわずかに仙台市郡山遺跡（木村；1984）、名取市清水遺跡（丹羽他；1981）と石巻市田道町遺跡（芳賀・岡他；1995）の例があげられるだけである（註6）。側を持たない井戸の報告例もほとんどないことから、当時の一般集落では井戸は必要不可欠な施設ではなかったと思われる。

F　区画施設

今回の調査で検出された区画施設は、前述の道路跡関係を除くと、溝跡3条（ＳＤ180＝2552、ＳＤ3014＝ＳＤ5633、ＳＤ461＝2124・2561）と塀跡6条（ＳＡ549、ＳＡ670Ａ・Ｂ＝2564、ＳＡ3158、ＳＡ5226、ＳＤ525）である。これらによる区画の規模や年代などについて検討する。

【ＳＤ180】南東～北西へ延びる溝で、北側では県道調査区のＳＤ2552に連続すると考えられており、さらに北へ延びている（後藤他；1994）。南側では市調査区で南へ屈曲してさらに南へ延びている（千葉他；1997）。したがって、ＳＤ180は南北230m以上にわたって延びており、ＳＤ100河川跡などの地形的な凹凸を無視してほぼ直線的に延びることから、区画のための溝であると思われる（第412図）。

〔変遷〕北側のＳＤ2552では重複は確認されていない。南側の市調査区（Ｅ区）では堆積状況の違いからＡ・Ｂ2時期に分けて考えているが、改修などはされていない。一方、Ｂ区ではＳＤ180より古いＳＤ250が確認されているが、浅く、部分的である。したがって、ＳＤ180は大きな改修は受けておらず、自然に埋没したと思われる。

〔年代〕8世紀後半頃のＳＤ100河川跡上層に覆われており、栗囲式期の遺物が出土しているＳＤ100下層より新しい。また、市調査区では、堆積土上部から8世紀中頃～後半頃の漆紙文書や土器などが出土しており、この頃にはほとんど埋没していたと考えられている（千葉・平川他；1997）。また、堆積土下部から出土した土師器や須恵器の年代は、おおよそ8世紀前半頃と考えられている。したがって、この区画溝は、8世紀前半頃を中心に機能していたと思われる。

【ＳＤ3014と材木塀跡】ＳＤ3014は東西溝で、その北側には平行して延びるＳＡ3158があり、両者は同時に存在した区画施設と考えられる。また、西側では市調査区でＳＤ5633とＳＡ5636が検出され（千葉他；1997）、東側では昭和57年の市調査区で2号溝と4号溝が検出されており（高倉他；1991）、それぞれ直線上に位置することから一連のものと考えられている（佐藤憲；1993）。したがって、これらは東西190m以上の区画のための溝と塀であると思われる（第412図）。

〔変遷〕ＳＤ3014は埋め戻されており、改修はされておらず、ＳＡ3158も造り替えられていないことから、改修などはされなかったと考えられる。

〔年代〕8世紀後半頃と考えられるＳＤ3129より古く、それ以前と考えられる。

底面直上から坏部有段の土師器高坏とカエリの付く須恵器蓋が出土している。須恵器蓋は口径10.4㎝と小型で、カエリは短く口縁端部から突出しない。こういった須恵器蓋は、日の出山窯跡第1群土器（古川；1994）や郡山遺跡第24次調査ＳＩ289竪穴住居跡（木村・長島；1983）、第35次調査ＳＩ390竪穴住居跡（金森；1984）から出土しており、年代は前者が8世紀初頭、後二者が7世紀後半頃とさ

れている。また、本溝跡は埋め戻しにより、その機能を失っているが、埋土中からは739年を前後するとされた日の出山窯跡第Ⅲ群土器に類似した須恵器坏が出土しており、8世紀中葉から後半頃に埋め戻された可能性が高いと考えられる。埋め戻し時には流入土等はほとんど堆積しておらず、掘り込み後、比較的短時間で埋め戻されたものと推測されることから、溝の掘り込み年代は概ね8世紀前半頃と考えられる。

ところで、上述のＳＤ180とＳＤ3014は、規模や横断面形が類似することや、機能していた年代が重なることなどから、一連のものと考えられている（佐藤憲；1993）。その場合、東西およそ240m以上（南辺＝ＳＤ3014・ＳＡ3158＝ＳＤ5633・ＳＡ5636）、南北300m以上（西辺＝ＳＤ180＝ＳＤ2552）の広大な範囲が区画されることになる（第412図）。

【ＳＤ461と材木塀跡】「コ」字状に巡る溝と塀で、北側の県道調査区では西側がＳＤ2561とＳＡ2564であり（西辺）、東側がＳＤ2124とＳＡ2089・2092・2096であり（東辺）（後藤他；1994）、市調査区ではＳＤ5458とＳＡ5475・5476・5477である（西辺）（千葉他；1997）（第412・414図）。

また、ＳＤ525はＳＤ461に伴う材木塀の可能性が考えられる。

〔規模〕東西約92m、南北130m以上の南北に長い長方形に区画していると考えられる（後藤他；1994）。北辺については、県道調査区のすぐ北側に現在の砂押川があり不明であるが、さらにその北側の中谷地地区では検出されていないことから、それほど延びないと推定される。

〔変遷〕東・南辺では改修は確認できなかったが、西辺ではＣ区北側で、位置を若干ずらして掘り替えており、さらにそれぞれ1回改修されていることから、4時期の変遷があると考えられる（ＳＤ674→ＳＤ673→ＳＤ601→ＳＤ461）。

また、内側の材木塀は東辺で3時期、西辺ではＣ区で3時期（ＳＡ670Ａ→ＳＡ670Ｂ、ＳＤ525）の変遷があり、南辺では1時期（ＳＤ525）確認されている。

したがって、全体としては4時期の変遷があったと考えられる。

〔年代〕ＳＤ461は8世紀後半頃に埋没したＳＤ100河川跡より新しく、9世紀前半頃のＳＸ500やＳＤ450より古いことから、年代は8世紀後半頃～9世紀前半頃と考えられる。また、ＳＤ461の堆積土から、多量の非ロクロ調整の土師器と、少量のロクロ調整の土師器、多賀城政庁第Ⅱ期の瓦などが出土している。非ロクロ調整の土師器坏は無段平底であり、ロクロ調整の土師器坏は底径が大きく回転ヘラケズリ調整されたものである。こういった特徴からＳＤ461は8世紀後半頃に埋没したものと考えられる。したがって、これらの区画施設は8世紀後半頃に構築・機能・廃絶したものと考えられる。

【ＳＡ549材木塀跡】南北方向の材木塀であるが、部分的な検出のため区画の対象や規模などについては不明である。

〔変遷〕南端で部分的に改修されており、2時期あった可能性がある。

〔年代〕9世紀前半頃のＳＤ450より古いＳＤ547より古いことから、概ね8世紀以前と考えられる。

なお、これらの他にＣ区にＳＤ503が存在する。この溝跡は、ＳＤ100河川跡付近で途切れているが、県道調査区のＳＤ2563の延長上にあり、ほぼ直線的に延びていることから、区画施設の可能性も考えられる。年代は古墳時代後期栗囲式期である。

Ｇ　小溝状遺構群

小溝状遺構群は28面あり、八幡地区で22面、伏石地区で6面検出された。これらは畑の痕跡とされているものである。以下、時期や所在する場所などについて検討してみる。

ｉ　時期

各遺構や堆積層との関係、出土遺物から年代がわかるものは以下の通りである。

【ＳＦ21・22、ＳＦ130】ＳＤ100－2・3層との関係が不明なもののＳＤ100－1層よりは古いものである。ＳＤ100－1～3層は8世紀後半頃に堆積したと考えられることから、これらの年代は8世紀後半以前であることは明らかである。また、ＳＦ22の堆積土中からヘラ切り無調整の須恵器坏が、ＳＦ130の堆積土中からはヘラ切りで手持ちケズリ調整や回転ケズリ調整の須恵器坏が出土していることから、概ね8世紀後半頃と考えられる。

【ＳＦ47・48】底面に10世紀前半頃の灰白色火山灰が堆積しているものや、ブロックで入るものがあり、火山灰降下時には存在し、降下後にも耕作されたものと考えられる。したがって、本遺構の年代は10世紀前葉頃と考えられる。

【ＳＦ131・132、ＳＦ138、ＳＦ197、ＳＦ202・206】ＳＤ100－1層より古く、ＳＤ100－2層より新しいことから、8世紀後半頃と考えられる。

【ＳＦ188、ＳＦ395】堆積土中に灰白色火山灰がブロックで入っており、概ね10世紀前半頃と考えられる。

【ＳＦ213、ＳＦ226】ＳＤ100－2層より古く、ＳＤ100－3層より新しいことから、8世紀後半頃と考えられる。

【ＳＦ237、ＳＦ262】ＳＤ100－3層より古いもので、8世紀後半以前である。

【ＳＦ426・427】9世紀頃の炭化物層より古く、ＳＤ100－1層より新しい。したがって、これらの年代は8世紀後半～9世紀頃と考えられる。

【ＳＦ578】周辺の遺構の中で最も古く、ＳＩ477に壊されているＳＤ480よりも古い。ＳＩ477は遺物が出土しておらず時期を確定できないが、八幡地区では最も新しい竪穴住居跡は8世紀後半であり、ＳＩ477もこれ以前である可能性が高い。したがって、本遺構の年代は8世紀後半以前と考えられる。

また、ＳＦ578の方向は区画溝であるＳＤ180とほぼ直交し、同時に存在していた可能性が考えられる。この場合、ＳＤ180は機能していたのが8世紀前半頃と考えられているので、ＳＦ578の年代は8世紀前半頃となる。

【ＳＦ3908・3909】後述するように、10世紀前葉頃には既に廃絶しているＳＢ3423より新しいため、概ね10世紀前半以降と考えられる。

【ＳＦ3915、ＳＦ3916】堆積土が中世の遺構に特徴的に入る黒褐色シルトであることから中世と考えられる。

まとめると、①：8世紀後半以前（ＳＦ237、ＳＦ262、ＳＦ578）、②：8世紀後半頃（ＳＦ21・22、ＳＦ130、ＳＦ131・132、ＳＦ213、ＳＦ226）、③：9世紀頃（ＳＦ426・427）、④：10世紀前半頃（ＳＦ47・48、ＳＦ188、ＳＦ395）、⑤：10世紀前半以降（ＳＦ3908、ＳＦ3909）、⑥：中世（ＳＦ3915、

ＳＦ3916）と考えられる。

ii　立地

これらはＳＦ429・430 とＳＦ578、伏石地区のものを除いて、ＳＤ100 河川跡とその周辺に存在する。また、他の八幡地区の調査を見ると、ＳＤ100 河川跡とＳＤ2050 河川跡の合流点（ＳＦ809）、市調査区の北 2 道路跡の南側（ＳＦ5993、ＳＦ5994）と西 6 道路跡の交差点付近や西 6 道路の西側（ＳＦ5990）にも畑跡が存在する。いずれも、掘立柱建物跡や竪穴住居跡は存在しない場所である。

一方、伏石地区や多賀前地区では、方格地割り成立後は、掘立柱建物跡などと重複するものもあるが、建物跡が密集するような場所は避けて存在している。また、区画施設の周辺、言い替えると区画の隅に存在する傾向がある。成立以前は、多賀前地区では河川の窪地に存在する。

したがって、これらが所在する場所は、方格地割成立以前は居住域から若干離れた、周辺より低い住居に適しない土地であり、方格地割成立後は居住区域としている区画内の片隅の空いている土地であったと思われる。

iii　方向

畝の方向は大きく分けて、①：若干の振れはあるものの真北方向を基準とするもの、②：東で北へ 30°程振れるものの 2 種類があり、②はＳＦ578 とＳＦ5990 だけである。

①は時期的には奈良・平安時代を通じて存在し、広範囲にみられる。方格地割成立後は道路や小区画溝に規制されていたと思われる。一方、方格地割成立以前にも方向がほぼ一致していることから、この時期に既に方向に対する何等かの規制があったことが窺われる。

②は区画溝であるＳＤ180 と方向が直交することから、これに規制されている可能性が考えられる。

H　屋敷跡

屋敷跡は、堀によって区画し、内部に数棟の建物跡や井戸跡などを配置したもので、八幡地区に新旧 2 区画あり、伏石地区に 1 区画ある。前者は、「新しい屋敷跡」と「古い屋敷跡」、後者は「伏石地区の屋敷跡」と呼ぶことにする（第 412 図）。

「古い屋敷跡」は大部分が市調査区にあるため、ここでは「新しい屋敷跡」と「伏石地区の屋敷跡」について規模や変遷、年代について検討してみる。

【新しい屋敷跡】

〔変遷〕屋敷跡の区画の堀には、重複状況や接続状況からＡ～Ｆの 6 時期があると考えられ（第 5 表）、順次敷地を拡大している。

〔屋敷の形状・規模〕各時期の区画の堀などを模式的に示すと第 421 図のようになる。

Ａ期は、東辺南側に区画がなく、南辺は不明であるが、堀の心心で東西およそ 34m、南北 54m以上の方形と思われる。

Ｂ期は、東西・南北ともおよそ 48mのやや歪んだ方形となり、Ａ期より南北は小さくなるものの、東西は拡大している。また、内外を明確に区画しており、堀の規模も大きくなる。

Ｃ期は、Ｂ期の区画より西辺南半部が 5m程西へ張出した、東西 53m、南北 48mの方形である。

D期は、C期の区画より南へ6m程拡張した、東西53m、南北56mの方形である。

E期は東側に14.5m、西側に7.5m、南側に2.5m以上拡張しており、東・南側に張出す、東西73m、南北59m以上の方形で、D期よりかなり大規模になる。F期はE期と規模などは変わらない。

第5表

	A期	B期	C期	D期	E期	F期
東辺	SD5042 SK5037	SD5029A	SD5029B	SD5029C	SD5007 SD5003A	SD5007 SD5003B
南辺	調査区外	SD5051	SD5560	SD5561	SD5561 SD5562	SD5561 SD5562
西辺	SD31	SD29	SD28	SD28	SD20A	SD20B
北辺	SD40	SD27	SD27	SD27	SD27	SD27

〔建物跡の性格〕堀の内部には多くの掘立柱建物跡などが存在している。これらは位置的に、中央部に存在する規模の大きなグループ（SB306・1504・1505・1532・1533・1632）、その西側に存在するグループ（SB305・307・1503・1506・1534・1635、以下「西の建物群」と呼ぶことにする）、東側に存在するグループ（SB5158・5159・5164・5166・5169、以下「東の建物群」と呼ぶことにする）、北側に存在するグループ（SB303・304・1501・1502・1628・1665、以下「後ろの建物群」と浮ぶことにする）、さらに北側に存在するグループ（SB301・302・1509・1510・1666・1668、以下「北の建物群」と呼ぶことにする）に大別することができる。

中央部のグループはいずれも大規模で、一貫して区画の中央部に位置することから、「新しい屋敷跡」の主屋と考えられる（以下「主屋群」と呼ぶことにする）。その周辺に存在する建物跡は、それぞれのグループ内で位置や規模・構造が若干変動はするものの、概ね一貫しており、小規模であることから、主屋に附属する建物群と考えられる。

〔屋敷跡の変遷〕主屋と附属建物、堀にはそれぞれ5〜6時期の変遷があり、位置や規模・構造などが概ね一貫していることから、計画的に配置され、同時期に改修されたと思われる。主屋群には6時期あることから、概ね6時期の変遷が考えられる。各建物群の具体的な変遷については後述する。

〔年代〕C期の堀であるSD28から、多量の漆塗りの椀や「元豊通寶」などが出土している。また、EもしくはF期の土壙跡であるSK33からも、多量の木製品や中国製の染め付け椀・皿が出土した。このうち、染め付けの椀・皿は16世紀前半頃のものである。

市調査区（E・I区）では、A期のSX5037から16世紀頃の笄が出土しており、屋敷の成立はこの頃と考えられている。また、F期のSD5003Bからは16世紀後半頃の美濃焼の皿が、SD5561からは16世紀中頃の美濃焼の椀・皿が出土しており、屋敷の廃絶は16世紀後半頃とされている（註7）。したがって、「新しい屋敷跡」は概ね16世紀代に存在したと考えられている。

【伏石地区の屋敷跡】

〔規模と変遷〕東辺が拡張されており、新旧2時期あったと思われる。古い時期は堀の心々で最も広い部分で東西・南北とも約35mである。また、内側のSD3171内の利用可能範囲は東西・南北とも約30m

である。

一方、新しい時期は堀の心々で東西40m、南北約35mであり、内部の利用可能範囲は東西約36m、南北約30mである。

〔内部の様子〕掘立柱建物跡（ＳＢ3405・3411・3438・3815など）や井戸跡（ＳＢ3167）、土壙跡（ＳＫ3797）などが存在するが、中央部から西側が攪乱によって壊されているため、内部の様子は明確にはしがたい。掘立柱建物跡はいずれも小規模なものである。

なお、区画の堀の北東部からは多くの鉄滓が出土しており、区画内のこの付近で鍛冶が行われていたと思われる。

〔年代〕古い時期の東辺の堀であるＳＤ3138の底面付近より永楽通寶が出土しており、屋敷の成立は15世紀以降と思われる。

Ｉ　土器埋設遺構

八幡地区で3基（ＳＸ01・133・292）、伏石地区で2基（ＳＸ3048・3091）発見されている。これらについて、年代や位置などについて検討してみる。なお、この他に八幡地区の市調査区で2基（ＳＸ581・5313）発見されている。

〔年代〕ＳＸ01は、埋設された土師器甕の特徴（非ロクロ、外面ハケメ調整）から8世紀以降で、10世紀までは下らないと考えられる。一方、9世紀後半～10世紀前半頃の道路の路面に埋設されていることから、9世紀後半頃の年代が考えられる。

ＳＸ133・292は、埋設された土師器甕の特徴（ロクロ、外面ヘラケズリ調整）から概ね9世紀以降と考えられ、9世紀後半～10世紀前半頃の道路の路面に埋設されていることから、9世紀後半～10世紀前半頃の年代が考えられる。

ＳＸ3048は、埋設された須恵器坏の形態や特徴（底部回転ヘラケズリ）から8世紀代と考えられる。

ＳＸ3091は、埋設された土師器甕の特徴（非ロクロ、外面ヘラケズリ調整）や器形から8世紀後半以降で、10世紀までは降らないと考えられる。

〔位置〕道路跡の路面上に存在するものと（ＳＸ01・133・292）、小区画溝が集中する部分に存在するもの（ＳＸ3048・3091）とがある。前者のうち、ＳＸ01・292は交差点付近に存在する。ＳＸ133は西5道路跡からおよそ55m離れており、北3西6区の区画溝であるＳＤ07のおよそ12m西に位置する。ＳＤ07・08間を道路として考えた場合、この道路の西15mに位置することになり、交差点の付近に存在することになる。

ＳＸ3048・3091は、いずれも区画溝が集中する部分に存在しており、小区画の端の方に位置していると思われる。このうち、ＳＸ3048は年代から、ＳＤ3075の時期の可能性が高い。ＳＸ3091はどの区画に伴うかは不明である。

〔埋設状況〕楕円形の掘方を掘り、土器を埋設したもので、掘方や土器の内部からは何も発見されていない。土師器甕を横位に据えたもの（ＳＸ01・133・292）、土師器甕を正位に据えたもの（ＳＸ3091）、須恵器坏を伏せて捉えたもの（ＳＸ3048）とがある。

位置との関係をみると、前者は道路上のものであり、後二者は小区画溝の付近にある。同様の埋設土器は山王遺跡や市川橋遺跡の各地で発見されており（菅原他；1996など）、やはり道路跡に埋設されたものは土師器甕を横位に据えたものである。

Ｊ　土器溜

伏石地区で1基検出されており（ＳＸ3012）、八幡地区には存在しない。年代は前項で述べたとおり、出土土器の特徴から10世紀前半頃と考えられる。

なお、本土器溜は、多量の土器が土壙にまとめて廃棄されているが、完形品は少なく、多賀前地区や千刈田地区で検出された土器溜が、完形品が重なっており、埋納されたような状態であるのとは異なっている。

Ｋ　ウマ集積遺構

八幡地区で検出された（ＳＸ200）。年代と性格について検討する。

〔年代〕8世紀前半頃に機能し、8世紀中頃～後半に埋まったＳＤ180より新しく、9世紀後半頃に埋まったＳＤ164よりは古い。出土した土器はいずれも非ロクロ調整の土師器坏である。したがって、年代は概ね8世紀後半頃と考えられる。

〔性格〕この遺構は、埋め戻されていないことや骨がある程度一括して投棄されたような状況で出土したこと、イヌの骨が混じっていることなどから、不要なものをまとめて捨てた土壙跡と考えられる。

この場合、比較的若いメスの個体が多く出土しており、頭部（下顎骨）と四肢骨はあるが胴骨は存在しないことから、この付近に集められた若いメスウマを、一括処理した結果とも考えられる。作業の目的については、遺存した部位以外の部位を得るためと推定され、具体的には、皮革、肉、上顎骨（下顎骨に比べて少ない）などがあげられる。

多賀前地区ではウマなどの解体処理工房もしくはそういった場所の存在が推定されており（菅原；1996）、本地区にもこういったものが存在した可能性も考えられよう。

Ｌ　平安時代の墓

平安時代の墓跡は2基発見された（ＳＸ123・135）。他に可能性があるものが1基ある。ここでは確実に墓と考えられる2基について特徴などをまとめてみる。

〔場所〕いずれもＳＸ299の路面上の北側溝付近にある。埋葬時はＳＸ299は道路として機能しており、意図的に道路に埋葬されたもので、この場所に葬ることに特別な意味があった可能性が考えられる。

〔埋葬方法〕いずれも植物の編物にくるまれて埋葬されており、棺などは用いられなかった。しかし、土器などが副葬されていることから、比較的手厚く葬られていると考えられる。

なお、墓壙の規模から被葬者は成人であると思われる。

ＳＸ135は、劣化した骨が北端に残っていることから、北に頭部があったと考えられる。その場合、不明木製品は胸の辺りに、土器は足元に置かれたと思われる。

〔被葬者〕平安時代には、庶民にとっては墓は必要不可欠のものではなかったと考えられており（註8）、本遺跡多賀前地区でも東西大路や西2道路跡の側溝、河川跡から遺棄された可能性がある人骨が出土している（菅原他；1996）。したがって、比較的手厚く葬られているＳＸ135の被葬者は、少なくとも路上で行き倒れになったような人物ではないと考えられる。

〔年代〕ＳＸ135には土師器坏と赤焼土器坏が副葬されており、土器の特徴から年代は10世紀前半頃と考えられる。ＳＸ123は基本層位第Ⅱ層に覆われており、ＳＤ100－1層を切っていることから、概ね平安時代のものと考えられる。また、ＳＸ135と埋葬方法が類似していること、路面の北側に近接して営まれたことから、ＳＸ135とほぼ同時期のものの可能性が考えられる。

Ｍ　近世墓

近世の遺構は墓跡が7基ある。ここでは埋葬方法や時期について検討してみる。

〔場所〕新しい屋敷跡の北辺の堀のほぼ中央部の5墓と、新しい屋敷跡の北東隅の2基との大きく2グループに分けられる。また、南側の市調査区でも2基発見されている。

〔被葬者〕棺や墓壙の大きさからみて、ＳＸ61・62・209・219は子供で、ＳＸ63・64・65は成人と思われる。両者には埋葬方法や副葬品に相違は見られない。

〔埋葬方法〕いずれも土葬で、遺体を木棺に納めたもの（ＳＸ61・65）、桶に納めたもの（ＳＸ62・63）、莚のようなものでくるんだと推定されるもの（ＳＸ64）とがあり、棺には平面形が正方形のもの（ＳＸ65）と長方形のもの（ＳＸ61）の2種類がある。

なお、ＳＸ209・219には木質や植物の痕跡が、全く見られなかった。墓壙内に漆器の椀が遺存していたことからみて、棺や桶、編物などが存在したとすれば残っている可能性が高く、これらは用いられなかったと考えられる。

また、ＳＸ63・65は棺の形状や骨の残存状況から座った姿勢で、ＳＸ64は墓壙が浅いことから横たわった姿勢で埋葬されたと思われる。

〔副葬品〕ＳＸ64を除いて、枚数の多少はあるがいずれも寛永通寶（六道銭）が副葬されている。また、漆器の椀（ＳＸ61・63・209・219）、櫛・キセル・三方・刀・数珠・蠟燭台・ヘラ状木製品（ＳＸ65）が副葬されていた。

墓ごとにみてみると、最も豊富なものはＳＸ65であり、棺の中に六道銭、キセル、刀、数珠、ヘラ状木製品などが納められ、棺の蓋の上に櫛が置かれていた。また、墓壙の北東隅には三方が供えられており、蠟燭台が一緒に埋められていた。最も少ないものはＳＸ63で、用途不明の細長い棒のみであった。他は六道銭と漆器の椀の組合せである。

他遺跡での調査例を見ると、六道銭や椀、櫛、キセルなどは例が多く、副葬品としては一般的である。一方、数珠、三方、蠟燭台などは、遺存状況にもよるのだろうが、発見例は少ない。

仙台市富沢遺跡泉崎地区では、折敷と提灯が棺の外で発見されており、野辺送りに使用されたものが一緒に埋納されたと考えられている（吉岡・篠原；1988）。本遺跡の三方や蠟燭台も同様に考えられる。

〔年代〕ＳＸ64を除くすべての墓から、六道銭が出土している。これらの六道銭にはいずれも新寛永が含まれており、墓の年代は17世紀以降と思われる。

ところで、ＳＸ61～65は、位置的にまとまっており、重複がなく、並んで存在することから、比較的近接した時期に埋葬されたと考えられる。ＳＸ65のキセルは雁首の形態から18世紀後半頃のものとされており（古泉；1987）、これらの年代も、ＳＸ65と同様に18世紀の後半頃と考えられる。

N　溝跡

溝跡は263条ある。A区で31条、B区で27条、C・D区で116条、伏石地区で89条発見された。このうち、重複状況や出土遺物から、年代がある程度判明するものは以下の通りである。

A区

【ＳＤ42】8世紀後半頃のＳＤ100－1層より新しく、9世紀後半頃のＳＤ08より古いことから、年代は8世紀後半～9世紀後半頃と考えられる。

B区

【ＳＤ164】出土量の多い堆積土1層の遺物をみると、土師器坏はロクロ調整のものが主で、底部が回転糸切り無調整のものが多く、赤焼土器が含まれないことから、概ね9世紀後半頃に埋没した溝跡と考えられる。

【ＳＤ170】8世紀後半頃のＳＩ185より新しく、同じく8世紀後半頃のＳＩ190より古いことから、8世紀後半頃の溝跡と考えられる。

【ＳＤ186・187】ＳＤ186はＳＤ187の掘り替えで、ともにＳＤ180より新しく、ＳＸ300道路跡C期より古い溝跡である。一方、ＳＤ186の出土遺物には赤焼土器坏があり、概ね10世紀前半頃に機能していたものと考えられる。ＳＤ187についてはＳＤ186よりやや古い年代が考えられる。

【ＳＤ193・194】8世紀中頃から後半頃に埋没したＳＤ180より新しく、9世紀後半頃のＳＤ164よりは古いことから、年代は8世紀後半～9世紀後半頃と考えられる。

【ＳＤ195・247】ＳＤ195→ＳＤ247という新旧関係はあるものの、ともにＳＤ100－1層より、ＳＤ100－2層上面で検出された溝跡で、8世紀後半と考えられる。

C区

【ＳＤ417】ＳＤ100－4層上面で検出した溝跡で、8世紀後半頃のＳＤ100－1～3層よりは古い。ただし、ロクロ調整の土師器坏などが出土していることから、8世紀前半代に遡る可能性は低いものと推定され、8世紀後半頃と思われる。

【ＳＤ471・472・473】基本層位Ⅱ層上面で検出した溝跡で、中世以降の溝跡である。

【ＳＤ487・488】土師器・須恵器ともに、底部が回転糸切り無調整のものが主である。また、赤焼土器は出土しておらず、こうした特徴は、9世紀後半に位置づけられる多賀前地区第3群土器（菅原・佐藤他；1996）にほぼ近い。したがって、本溝跡の年代もほぼそれに近いものと考えられる。

【ＳＤ503・645】「栗囲式」期の住居跡と考えられるＳＩ746・747、あるいはＳＩ533よりも古い溝跡である。出土遺物は土師器が大半で、内面を黒色処理された有段丸底坏や、頸部に段を有し、体部外

面をハケメ調整された甕が多く、住居跡よりは古いものの、同じく「栗囲式」期に属する溝跡と考えられる。

【ＳＤ516とＳＤ518・545、ＳＫ527】内面が黒色処理された有段丸底の土師器坏や、外面ハケメ調整で頸部有段の土師器甕などが出土しており、「栗囲式」に属する溝跡と考えられる。

【ＳＤ598】ＳＤ100－1層上面で検出した溝跡で、9世紀前半頃に整備されたと考えられるＳＸ400より古い。したがって、年代は8世紀後半～9世紀前半頃と考えられる。

【ＳＤ642】8世紀後半のＳＤ461よりも新しい溝跡である。また、出土遺物にロクロ調整の土師器はみられないことから、溝跡の年代は9世紀代までは降らないものと考えられる。

【ＳＤ677】底面からやや浮いた状態で、土師器と須恵器がまとまって出土している。これらの年代は、前述のように、概ね8世紀中葉頃と考えられ、溝跡の掘り込みはそれよりも若干遡った年代が考えられる。

伏石地区

【ＳＤ3031・3901】古代の遺構面を覆う、10世紀後半頃の基本層位Ⅱ層の上面から掘り込まれており、概ね中世以降の溝跡と考えられる。

【ＳＤ3055】最も新しい区画施設であるＳＤ3097溝跡より新しく、10世紀後半頃の基本層位Ⅱ層が底面近くに堆積していることから、この頃の溝跡である可能性が高いと考えられる。

【ＳＤ3129】堆積土出土の土師器坏は、図示した2点以外はすべて非ロクロ調整である。須恵器坏は底部に回転ヘラケズリ調整が施されるものとヘラ切り無調整とがあり、これらは山王遺跡八幡地区ＳＤ180溝跡出土土器の中に類例を見出すことができる。但し、ロクロ調整の土師器が共伴するなど、やや後出的様相を呈しており、溝跡の年代は概ね8世紀後半頃に位置づけられるものと考えられる。

【ＳＤ3077】堆積土上面に灰白色火山灰が認められ、火山灰降下時にはある程度、埋没していたと考えられ、10世紀前葉頃に埋没したと考えられる。

【ＳＤ3303・3304】堆積土から江戸時代以降の陶磁器が出土しており、それ以降と考えられる。

○　土壙跡

土壙跡は497基ある。A区で42基、B区で43基、C・D区で127基、伏石地区で285基発見された。このうち、重複状況や出土遺物から、年代がある程度判明するものは以下の通りである。

A区

【ＳＫ15】16世紀の屋敷跡に伴うＳＤ05より古く、堆積土から内外面をナデ調整された常滑産と考えられる中世陶器甕の体部破片が出土していることから、中世の土壙跡と考えられる。

【ＳＫ18】10世紀前半頃までは機能していたと考えられるＳＸ299道路跡より新しく、基本層位Ⅱ層に覆われることから、概ね10世紀後半頃に掘り込まれた土壙跡と考えられる。

【ＳＫ67】非ロクロ調整の土師器と須恵器が出土している。須恵器坏は底部を静止糸切り後、手持ちヘラケズリ調整したもので、土師器坏には有段丸底と無段平底とがある。これらは、ＳＤ677と同様に、多賀前地区第1群土器に比較的近い様相を呈しており、年代は概ね8世紀中頃と考えられる。

【ＳＫ125・144・145】8世紀後半頃のＳＤ100－1層ないしは2層除去後に検出されており、これらの年代も8世紀後半と考えられる。

B区

【ＳＫ199】ヘラ切りや糸切りの須恵器坏が出土しており、多賀前地区第2群土器（菅原・佐藤；1996）に近いと考えられ、概ね9世紀前半頃と思われる。

【ＳＫ204】ＳＤ180より新しく、ＳＤ164より古いことから、8世紀後半～9世紀後半頃の年代が考えられる。

C区

【ＳＫ452】8世紀後半頃のＳＤ461より新しく、9世紀前半頃のＳＤ450よりも古い。また、ロクロ調整の土師器は出土しておらず、ＳＤ461よりは新しいものの、同じく8世紀後半頃の土壙跡と考えられる。

【ＳＫ474】遺物が多く出土している1・2層出土土器をみると、土師器・須恵器坏は回転糸切り無調整が主で、土師器坏は切り離し後手持ちヘラケズリ調整されるのものも多くみられる。こうした特徴は多賀前地区第3群土器や多賀城跡D群土器（白鳥；1991）に近い。また、愛知県猿投窯黒笹90号窯式期の灰釉陶器なども共伴していることから、9世紀後半頃の土器と考えられる。また、下層も、出土量は少ないものの土器様相に大きな変化は認められず、本土壙跡の年代は9世紀後半代と思われる。

【ＳＫ495】出土量が少ないため詳細な検討は困難であるが、土器は概ねＳＫ474土壙跡1・2層出土土器と同様の特徴を有しており、本土壙跡の年代も9世紀後半頃と考えられる。

【ＳＫ535】9世紀前半頃のＳＤ450よりも新しい土壙跡である。赤焼土器が出土していないことから、概ね9世紀代には埋没していたと考えられる。

【ＳＫ683】出土した土師器はすべて非ロクロ調整で、須恵器坏は底部ヘラ切り無調整のものが主体を占めており、蓋は折り返し口縁のものであることから、8世紀後半頃と考えられる。

【ＳＫ761】有段丸底の土師器坏と、外面ハケメ調整で頸部有段の土師器甕などが出土しており、栗囲式に比定される。

【ＳＫ898】埋め戻された層や堆積土中からは非ロクロ調整で無段平底の土師器坏、ヘラ切り無調整の須恵器坏、瓦などが出土しており、ロクロ調整の土師器は含まれないことから、概ね8世紀後半頃の土壙跡と考えられる。

伏石地区

【ＳＫ3016・3024】ＳＥ3038底面出土土器や、ＳＸ3029出土土器と同様の特徴を持つ土器が出土しており、9世紀前半頃のものと考えられる。

【ＳＫ3047】堆積土1層から「寛平」（889～898年）の年号が記された漆紙文書が出土しており、1層は少なくとも889年以降に堆積したものであることがわかる。また、堆積土出土の土師器は多賀前地区第4群土器に近く、土壙跡の年代は概ね10世紀前葉に収まるものと考えられる。

【ＳＫ3040・3794】主に土師器、赤焼土器が出土しており、多賀前地区第4群土器に近いことから、土壙跡の年代は概ね10世紀前葉に収まるものと考えられる。

【ＳＫ3052・3053・3637】須恵器坏はヘラ切り無調整のものや軽くナデ調整されるものが多く、ＳＫ3637からは「壷Ｇ」と考えられる底部破片も出土している。これらは、8 世紀末頃に位置づけられる伊治城跡第 173 号住居跡出土土器に類似するもので、本土壙跡の年代もそれに近い時期と考えられる。
【ＳＫ3056】ＳＤ3055 より新しく、古代の遺構面を覆う基本層位Ⅱ層の上面から掘り込まれており、中世以降の土壙と考えられる。
【ＳＫ3675】非ロクロ調整で無段平底と考えられる土師器坏や、体部外面がヘラケズリ調整された土師器甕、底部が回転ヘラケズリ調整された須恵器坏が出土している。これらは多賀前地区第 1 群土器に近く、概ね 8 世紀後半頃に位置づけられるものと考えられる。
【ＳＫ3727】堆積土は上下 2 層に大分され、土器様相にも相違が認められることから、下層が堆積した後、上層が堆積するまでには若干の時間差があったものと考えられる。

上層出土の土師器の坏や椀は、ロクロ調整で、切り離し後、手持ちヘラケズリや回転ヘラケズリされるものが多い。須恵器坏は、ヘラ切り無調整が全体の約半数近くを占め、回転糸切り無調整のものもある。

こうした特徴は、ＳＥ3038 出土土器と同様、多賀前地区第 2 群土器（佐藤他；1996）に近い。但し、須恵器坏をみると底径／口径比が書 1：0.5 以下のものは含まれないなど、比較的古い様相を呈しており、概ね 9 世紀前葉頃に位置づけられると考えられる。

下層出土のものは、土師器のほとんどが非ロクロ調整で、坏は口縁部と体部との境に段や沈線を持たず、底部が平底のものが多い。須恵器坏の底部調整は 1 層出土のものと同様に、ヘラ切り無調整が多い。

以上の土器の特徴は、土師器坏については前出の山王遺跡八幡地区ＳＤ180 溝跡出土土器の中に類例を見出すことができる。但し、須恵器坏はヘラ切り無調整が主体を占めるなど、やや後出的であり、土壙の掘り込み年代は、8 世紀後半でも比較的新しい時期と考えられる。

Ｐ　河川跡

東流する河川跡で（ＳＤ100）、東側で北からの河川跡と合流している。多量の遺物が出土しており、上層（1～3 層）と下層（4～6 層）に大別された。また、Ｃ区の北岸の落ち際に炭化物層が堆積しており、河川跡最上部の堆積層と考えられる。以下、これらの年代について検討する。
〔炭化物層〕灰白色火山灰が入るＳＦ395 より古いことから、10 世紀前葉以前と考えられる。

出土遺物は、土師器には、坏・甕があり、坏には非ロクロ調整のものとロクロ調整のものとがある。須恵器には、坏・高台坏・蓋・瓶・甕などがある。これらのうち、編年的に最も新しい特徴を持つものは、土師器坏では、ロクロ調整で、底部が回転糸切り無調整のものであり、須恵器坏では、底部が回転糸切り無調整のもので、年代は 9 世紀後半頃と考えられるそれ以前の土器がある程度存在することや、河川のくぼみに堆積した層であることを考え併せると、炭化物層の年代は概ね 9 世紀代としておきたい。
〔上層〕8 世紀後半頃の区画溝跡のＳＤ461 よりも古く、8 世紀中頃～後半頃に埋没した区画溝跡ＳＤ

180より新しいことから、概ね8世紀後半頃と考えられる。

出土遺物は、土師器には、坏・壷・甑・甕などがあり、須恵器には、坏・高台坏・鉢・壷・瓶・甕がある。このうち、土師器坏では、非ロクロ調整で有段丸底・無段丸底のものが大部分で、他にロクロ調整されたものが一定量ある。須恵器坏は切り離し後底部に再調整されるものや、ヘラ切り無調整のものが大部分である。こういった特徴からこれらの年代は概ね8世紀後半頃と考えられる。

〔下層〕8世紀前半頃に機能していたＳＤ180より古く、それ以前と考えられる。

出土遺物は、土師器には坏・高坏・甕があり、須恵器には壷・提瓶などがある。このうち、土師器坏は有段丸底で、口縁部が外反するものが多く、甕は長胴形と球胴形があり、口縁部と体部の境に段を持ち、体部外面がハケメ調整されるものが多い。こういった特徴から、これらは「栗囲式」の土器と考えられる。

なお、これらの土器はＣ区東半部から出土しており、Ａ区からは出土していないことから、Ｃ・Ｄ区に存在する栗囲式期の集落から廃棄されたものと考えられる。

註１　道路の改修がすべて同時に行われたという保証はないが、少なくとも側溝を掘り替えるというような大規模な工事は同時に実施されたと思われる。また、同時でなければ排水等の効果は期待できなかったと思われる。

註２　東西棟の場合は方向を 90°回転させて、座標北との関係に置き換えた。

註３　報告書では竪穴住居跡とされているが、床面に焼面があることから、工房の可能性が高いと考えられる。なお、これと計画的に配置されているＳＩ357 は、巨大なカマドを有していることから、工房の可能性が考えられる。床面では壁が倒れた状態で検出されており、壁立式であったと考えられる。

註４　水入地区の第１井戸の年代は、筆者が判断したものである。以下にその理由を簡単に記す。

井戸側の底面付近から赤焼土器の小皿が５点出土していることから、この井戸の使用時期の一端が 10 世紀の中頃であると思われる。井戸の使用期間は判断できないが、石組の井戸の使用期間が 30 年を越えないとの指摘もあり（泉；1981）、構築や廃絶の年代は 10 世紀の中頃前後と思われる。

註５　仙台市の郡山遺跡ではⅡ期官衙の井戸（7 世紀末～8 世紀初）が横板組に復元されている。また、名取市清水遺跡でも平安時代前半の井戸が相欠きほぞによる横板組の側を持つものである。したがって、横板組の井戸側そのものはかなり古くから存在する。

註６　他に、素掘り、もしくは側の有無が不明な井戸としては、古川市名生館遺跡（柴原・鈴木；1997）、河南町須江糠塚遺跡（高橋・阿部；1987）、蔵王町家老内遺跡（真山；1981）がある。

このうち、家老内遺跡例は、平安時代とされている。堆積土からの出土遺物は平安時代のもののみだが、周辺には中世の掘立柱建物跡が存在することから、年代が下る可能性も考えられよう。

註７　多賀城市埋文センター千葉氏のご教示による

註８　庶民でも、簡便な墓壙に埋葬されたとする意見もある（五十川；1996）。いずれにしろ、ＳＸ135 は副葬品を有することから、比較的手厚く葬られたと思われる。

3　遺構の変遷

前節で検討した各遺構と遺物の時期は、年代的に、①縄文時代、②弥生時代、③古墳時代、④奈良・平安時代、⑤中世、⑥近世に大別される。以下では、大別時期ごとに所属遺構を示し、さらに時期的に細分が可能なものについて検討する。また、④については、道路などの区画施設により区画された場所ごとに各遺構が変遷しているため、各地区ごとにやや詳しく検討する。さらに、⑤では「新しい

屋敷跡」の全体の変遷について検討してみる。

A　各期の遺構

ⅰ　縄文時代

少量の土器が出土した。磨滅しており、別の場所からの流れ込みと思われる。遺構は発見されていない。

ⅱ　弥生時代

少量の土器が出土した。遺構は発見されていない。八幡地区では県道調査区東側（Ⅰ区西半～Ⅱ区東半）で、中期の桝形囲式の遺物包含層が検出されており、この地区の南側、すなわちD区の北側に集落が存在したと予想されており（後藤他；1994）、これと関連するものと思われる。

また、市調査区（Ｊ区）では、古墳時代前期の水田の下層で、畦畔の痕跡と考えられる段や足跡があることから、水田が存在したと考えられている（千葉他；1997）。

一方、伏石地区やその南側の多賀前地区では石包丁が出土しており、八幡地区の遺物包含層に相当すると見られる層が確認されている（菅原他；1995）ことから、付近に水田等の遺構の存在が推定される。

ⅲ　古墳時代

前期（塩釜式期）、中期（南小泉式期）、後期（栗囲式期）の遺構と遺物が発見されている。以下、時期ごとに記述する。

【前期】

少量の土器が出土した。遺構は発見されていない。八幡地区の県道調査区や市調査区で水田跡や遺物包含層が発見されている。

水田は調査区のＪ区で検出されており、大畦畔と小畦畔で区画されている（千葉他；1997）。

遺物包含層は県道調査区の中央部で発見されており、周辺に集落の存在が予測されている（後藤他；1994）。

なお、伏石地区の市調査区で、深掘りによって田下駄が発見されており、水田跡等が存在した可能性がある。

【中期】

今回の調査では河川跡（ＳD777）とその南岸に形成された遺物包含層（ＳX230）を検出した。これらについては既に報告書が刊行されている（吾妻・菅原；1994）。この他に、市調査区では、竪穴住居跡や鍛冶遺構、土壙跡が発見されている。

竪穴住居跡は市調査区のＦ区南半部と伏石地区の市調査区の北側に集中しており、20棟以上検出されている（千葉他；1997）。他地区には存在しない。なお、上記の遺物包含層はこの集落から廃棄されたと考えられている。

鍛冶遺構は上記の集落内にあり、鍛造剥片や高坏の脚部を転用した羽口、鉄滓が出土している。

【後期】

竪穴住居跡や溝跡、土壙跡、河川跡などが発見されている。

竪穴住居跡：ＳⅠ489・491・492・498・499・533・560・746～748・754・756・765～767・875

溝跡・土壙跡：ＳＤ503・516・518・545・645、ＳＫ527・761

河川跡：ＳＤ100下層

竪穴住居跡はＣ区の東半部からＤ区、県道調査区の東半部に集中しており、大集落を形成していたものと思われる。住居跡同士が重複するものが多く、かなり長期間存続していたと推定されている（後藤他；1994）。この場所は、東流する河川跡（ＳＤ100）と南流する河川跡（ＳＤ2050Ｂ）の合流点で、集落はＳＤ100の北側にあり、ＳＤ2050Ｂの東西に分かれている（第412図）。

河川跡（ＳＤ2050Ｂ）からは柄香炉や卜骨、多量の土器をはじめ多種多様な遺物が大量に出土しており（詳細については未報告）、集落から廃棄されたものと考えられる。

また、県道調査区では材木塀と溝による区画施設が検出されている。部分的な検出で、区画の規模や区画内の様子などは不明である（後藤他；1994）。

この集落は柄香炉などの特殊な遺物を有し、材木塀を伴う区画溝が存在することなどから、一般の集落とは異なっていると考えられる。

なお、今回調査した竪穴住居跡のうち、ＳＩ491は他に比べ規模が格段に大きく、出土遺物も豊富である。このような大型住居は、集落を構成する世帯共同体内の有力家族の住居の可能性が高いと考えられており（小笠原；1989）、ＳＩ491も同様に考えられよう。

これらについては、遺物がまとまって発見された遺構が少ないことや、当該時期の遺構の多くが確認されただけで未調査で残っていることなどから、時期の細分などの考察は、すべての調査が終了するの待って行いたい。

ⅳ　奈良・平安時代

隣接する丘陵上に多賀城が創建され、整備された時期である。それに伴って、周辺地域である本遺跡も塀跡や溝跡、道路跡などで区画され整備される。

本地区の区画施設には、ａ：ＳＤ180、ｂ：ＳＤ461と材木塀跡、ｃ：ＳＸ500、ｄ：ＳＸ299・300などがあり、それぞれ時期的に、ａ＝8世紀前半頃、ｂ＝8世紀後半頃、ｃ＝9世紀前半頃、ｄ＝9世紀後半～10世紀中頃と考えられる。また、数は少ないもの道路跡廃絶後の遺構（ｅ＝10世紀後半頃）もあり、この時期はａ～ｅの5時期に細分される。

ａ　8世紀前半頃

区画施設や畑跡などがある。本調査区内では遺構や遺物は少ない。

区画施設：ＳＤ180・3014、ＳＡ3158

畑跡：ＳＦ578

溝跡・土壙跡：ＳＤ677、ＳＫ67

河川跡：ＳＤ100

ｂ　8世紀後半頃

掘立柱建物跡や竪穴住居跡、区画施設、井戸跡、畑跡、溝跡、土壙跡などがある。

掘立柱建物跡：ＳＢ140・245・246・1521・1622

竪穴住居跡：ＳＩ44・185・190・468・493・506・519・624・3634
井戸跡：ＳＥ84・511・517・3164
区画施設：ＳＤ461、ＳＡ670、ＳＤ525
畑跡：ＳＦ21・22・130・131・132・138・197・202・206・213・226
溝跡・土壙跡：ＳＤ170・195・247・417・642・3129、ＳＫ3052・3053・3637・3675・3727
河川跡：ＳＤ100上層

ｃ　9世紀前半頃
多賀城の南前面に道路による区画が成立した時期である。道路跡は2度改修されている。
道路跡：ＳＸ500、ＳＸ400？
小区画溝：ＳＤ450・3034・3064・3075・3120
工房：ＳＸ3024・3029
井戸跡：ＳＥ467・630・3038
土壙跡：ＳＫ199・3016・3024・3727

ｄ　9世紀後半～10世紀中頃
本地区に方格地割の道路が建設され、整備された時期である。道路跡は2～3度改修されている。
道路跡：ＳＸ299・300・390・400・700・710・750・3900
土器埋設遺構：ＳＸ01・133・292
小区画溝：ＳＤ07・08・10・53・59・73・79・402・3025・3026・3097・3123・3133・3140・3177
掘立柱建物跡：ＳＢ434・636・1564・3401・3419・3424・3906・3829
井戸跡：ＳＥ76・217・297・413・3310
土器溜：ＳＸ3012
畑跡：ＳＦ47・48・188・394・395
墓跡：ＳＸ123・135
溝跡：ＳＤ164・186・187・497・488
土壙跡：ＳＫ474・495・3040・3047・3794

なお、上記の他に、明確な所属時期は判断できないものの、ｂ～ｄ期のいずれかに属すると思われる掘立柱建物跡などが多数存在する。これらについては、後に区画ごとに再検討する。

ｅ　10世紀後半頃
道路廃絶後の時期で、遺構、遺物とも極端に減少している。
溝跡：ＳＤ3055
土壙跡：ＳＫ18

ｖ　中世

堀によって方形に区画された屋敷などが存在する。時期的には、ａ：12世紀に遡ると考えられる「古い屋敷跡」と、ｂ：16世紀頃の「新しい屋敷跡」・「伏石地区の屋敷跡」とがある。

ａ　「古い屋敷跡」

屋敷の堀跡：ＳＤ87・150・151

ｂ1　「新しい屋敷跡」

屋敷の堀跡：ＳＤ05・06・20・27・28・29・31・40

掘立柱建物跡・塀跡：ＳＤ301～307・1501～1506・1509・1510・1532～1534・1628・1632・1635・1665・1666・1668、ＳＡ1629～1631・1633・1636・1637

溝跡：ＳＤ30・68・92・325～327

土壙跡：ＳＫ32・33・35～38・45・49

ｂ2　「伏石地区の屋敷跡」

屋敷の堀跡：ＳＤ3138・3150・3171・3178・3181・3307

なお、屋敷の周辺にも多数の掘立柱建物跡などが存在するが、どの屋敷跡に属するのか、または別の時期なのかは明らかにできなかった。

掘立柱建物跡：ＳＢ353・357・575・1516・1517・1519・1520・1522～1531・1536～1543・1545・1546・1549・1550・1552～1555・1559・1561・1562・1565～1570・1573～1579・1581・1585・1587・1589～1591・1593～1595・1597・1600～1603・1613～1618・1620～1622・1638・1639・1645・1647・1649・1652～1655・1657・1659・1660・1663・1664・3405・3411・3438・3815～3817・3834・3843・3846・3853・3863・3864、ＳＡ1563・1641～1644・1656・1661

井戸跡：ＳＥ3167・3311・3730・3801

畑跡：ＳＦ3915・3917？

溝跡：ＳＤ152～156・177・359・403・471～473・482～484・486・843・846・3031・3901

土壙跡：ＳＫ15・157・485・494・3056

ｖｉ　近世

少量の出土遺物と墓跡や溝跡が検出された。

墓跡：ＳＸ61～65・209・219・3748

溝跡：ＳＤ3303・3304

溝跡は伏石地区の北端部で、墓はＡ区と伏石地区で検出された。他に試掘調査（Ｄ区東側）で、溝跡や水田、木簡などが発見されている（鈴木；1988）。出土遺物からいずれも江戸後期と考えられる。他地区からは少量の遺物が発見されている。

Ａ区の墓は「新しい屋敷跡」の堀に造られており、堀に沿って並んでいることから、この頃まで堀が埋まりきらずに残っていたと推測される。

B　奈良・平安時代の区画内の様子と遺構の変遷

奈良・平安時代は5時期に細分され、各期に区画施設が存在し、区画ごとに内部の様子や変遷が異なっている。そのためここでは、時期ごとに区画内の様子などを検討してみる。なお、ａ～ｅ期のうち、ｅ期は本地区では遺構、遺物ともに少ないため、ａ～ｄ期について検討する。

ｉ　ａ期（第412図）

ＳＤ180・3014などによって大きく区画されている。区画内のＣ区に畑跡がある。他の時期に比べ、遺構の数は少ない。

ところで、本遺跡多賀前地区では、建物の方向は、若干の振れはあるものの、付近の区画施設の方向と一致していることが明らかになっている（菅原；1996）。このことから、ＳＤ180の付近にある、これらと方向が近い掘立柱建物跡（A3グループ＝ＳＢ1551）はこの時期に存在していた可能性が考えられる。

また、市調査区のＳＢ5151も、ＳＤ180からやや離れているがこの時期のものの可能性がある。

なお、ＳＤ180では、この時期の遺物は調査区（Ｅ区）に多く、Ｂ・Ｃ区からはほとんど出土しない。また、ＳＤ100河川跡からもこの時期の遺物が出土しないことから、居住の中心は南側のＥ・Ｆ区付近であったと思われる。

ⅱ　ｂ期（第412図）

Ａ区北西部、Ａ区南東部、Ｂ区東側、Ｃ区東側、伏石地区南側に遺構がまとまって検出されている。

Ａ区北西部には、掘立柱建物跡（ＳＢ140）や畑跡（ＳＦ21・22・130～132・138）が存在する。

Ａ区南東部には、竪穴住居跡（ＳＩ44）や井戸跡（ＳＥ84）が存在する。

Ｂ区東側には、掘立柱建物跡（ＳＢ245・246・1521）、竪穴住居跡（ＳＩ185・190）、畑跡（ＳＦ197・202・206・213・226）、溝跡（ＳＤ170・195・247）、ウマ集積遺構（ＳＸ200）が存在する。

このうち、掘立柱建物跡には、ＳＢ246→ＳＢ245・1521の時期差がある。また、竪穴住居跡には、ＳＩ185→ＳＩ190Ａ→ＳＩ190Ｂ→ＳＩ190Ｃ、畑跡には、ＳＦ213・226→ＳＦ202・206の重複や時期差がある。したがって、それぞれの関係はとらえられないが、同時に存在した遺構の数は少ない思われる。なお、ＳＢ246とＳＦ202・206は検出面が同じであり、同時に存在した可能性がある。

Ｃ区東側とＤ区には、ＳＤ461と材木塀跡（ＳＡ670）による長方形の区画や竪穴住居跡（ＳＩ468・506・519・624）、井戸跡（ＳＥ511・517）、溝跡（ＳＤ417・642）、土壙（ＳＫ452・683・898）が存在する（第414図）。

上述のように、建物の方向は、付近の区画施設の方向と一致していることから、ＳＤ461や材木塀跡の付近にある、これらと方向が近い掘立柱建物跡（A2グループ＝ＳＢ553・577・652・1560・1583・1599・1612）はこの時期に存在していた可能性が考えられる。

これらは区画施設の外部にあるものと（ＳＩ468、ＳＢ1560）、区画の内部に存在するものとに分けられる。

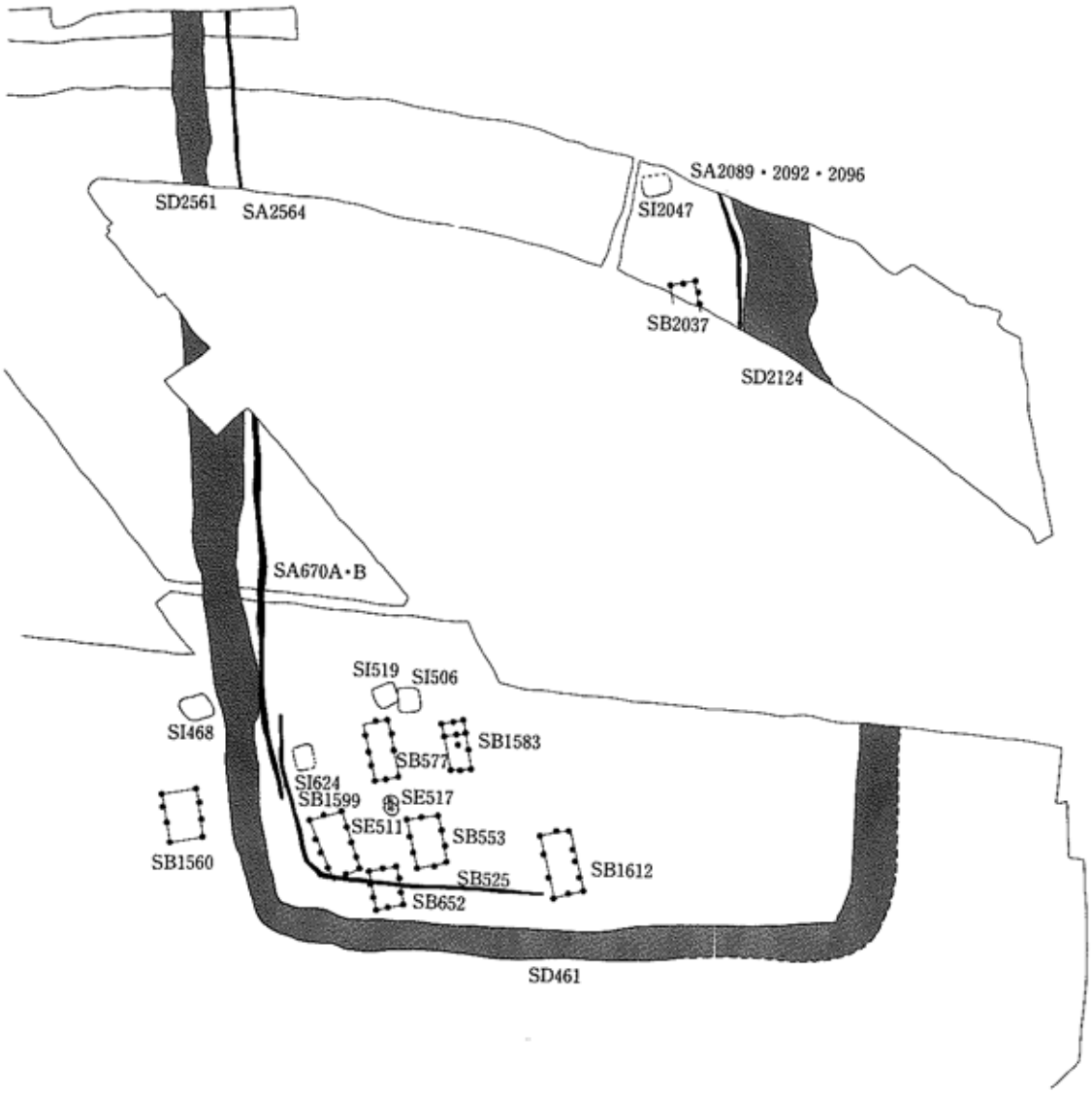
後者について見てみると、区画施設には4時期の変遷があり、掘立柱建物跡と竪穴住居跡には位置関係から最低2時期、井戸跡には2時期の重複があり、同時期に存在した遺構の数は少ないと思われ

る。これらは区画の南東部に集中しており、北側や東側には存在しない。

また、県道調査区では、区画内の北東部に掘立柱建物跡（ＳＢ2037）と竪穴住居跡（ＳＩ2049）があるが、西側には存在しない（後藤他；1994）。こういったことから、区画内でもこれらの遺構は特定の場所に集中していた可能性が考えられる。

伏石地区南側には、区画溝（ＳＤ3075）と竪穴住居跡（ＳＩ3634）、井戸跡（ＳＥ3164）、溝跡（ＳＤ3129）、土壙跡（ＳＫ3052・3053・3727）などが存在する（第415図）。

また、ＳＤ3075の付近にあり、これと方向がほぼ一致する掘立柱建物跡（A2グループ＝ＳＢ3416・3421）はこの時期に存在していた可能性が考えられる。また、この付近にはやや方向が異なるがこれらより古い建物群（A1グループ＝ＳＢ3418・3420・3821・3852）が存在する。ａ・ｂ期いずれと

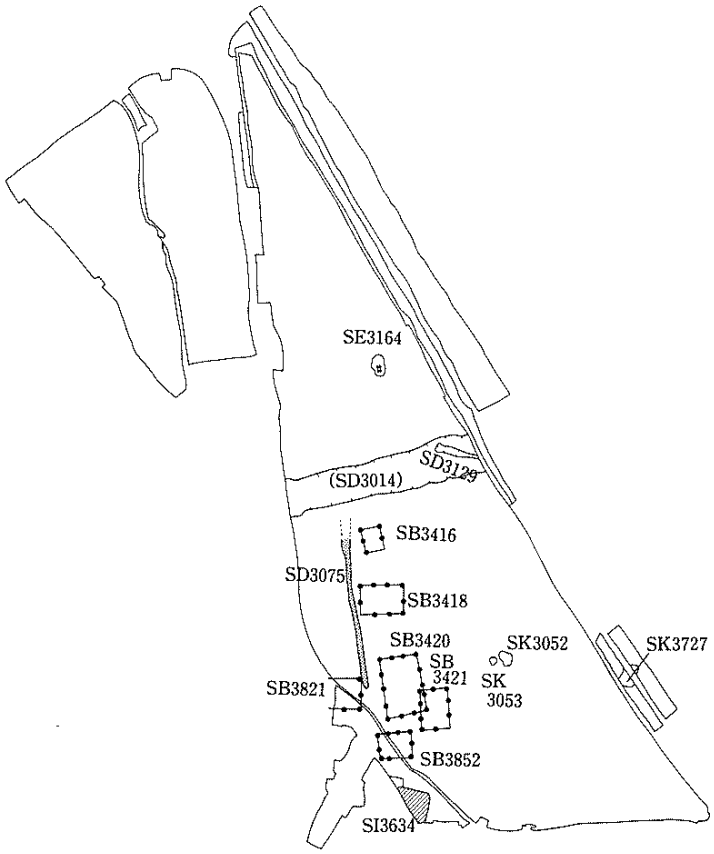


第414図　Ｃ・Ｄ区ｂ期遺構模式図

も方向が異なるため明確な時期は不明だが、周辺からはａ期以前の遺物がほとんど出土しないため、ここではｂ期に属するものと考えておきたい。この場合、伏石地区のｂ期には新旧2時期あることになる。

一方、県道調査区では東端部で竪穴住居跡（ＳＩ2226）が検出されている（後藤他；1996）。

以上のことからこの時期には、1～2棟の掘立柱建物跡や竪穴住居跡を中心として、その付近に井戸跡、畑跡などが伴うというあり方が一般的で、この地区にはこのような遺構のまとまりが点在していたと思われる。



第415図　伏石地区ｂ期遺構模式図

ⅲ　ｃ期

本地区にＳＸ500道路跡が成立した時期で、遺構数の比較的多いＣ区と伏石地区について検討する。道路跡南側のＢ区や、道路が存在しないＡ区では遺構・遺物共に少ない。

【Ｃ区】

〔区画〕南側はＳＸ500で画されている。西側はＳＸ400道路跡が、北側はＳＸ2651道路跡が、東側は西3道路跡がこの時期に存在した可能性があり、それぞれ区画されていたと思われる。

上記の大きな区画を、ＳＤ450でさらに東西の小区画に分割している。西側の小区画は、東側がＳＤ450で、北側は市調査区（Ｌ区）のＳＤ5469で区画され、方形を呈している。また、北東隅には道路が取り付けられている（第416図）。

東側の小区画は、西側がＳＤ450で、北側はＳＤ5459で区画されているが、東側の区画施設は存在しない。

なお、西側の小区画の北側にも、道路と溝で方形に区画された一郭があったと思われる。

以下、東西の小区画毎に記述する。

①　西側の小区画

〔遺構〕井戸跡（ＳＥ467）などがある。また、ＳＤ450付近で、これと方向がほぼ一致する建物（A1グループ＝ＳＢ579・635・643・1547・1548・1558）はこの時期の建物である可能性がある（第416図）。

〔変遷〕中央部の建物には少なくとも2時期の重複（ＳＢ1547→ＳＢ1548、ＳＢ635は北廂でＳＢ1547・1548と位置的に同時に存在し得ない可能性高い）があり、西側の建物は同時には存在し得ない。し

たがって、この場所には少なくとも2時期があったと考えられる。

〔内部の様子〕小区画のほぼ中央に廂付東西棟があり、その東西に南北棟がある。こういった位置関係から中央の建物跡が主屋で、東西にある南北棟は副屋であったと思われる。東側の東西棟のそばに井戸跡がある。この区画内では上述のような変遷があるが、同時期に存在したのは主屋と副屋それぞれ1棟程と井戸跡であったと思われる。

② 東側の小区画

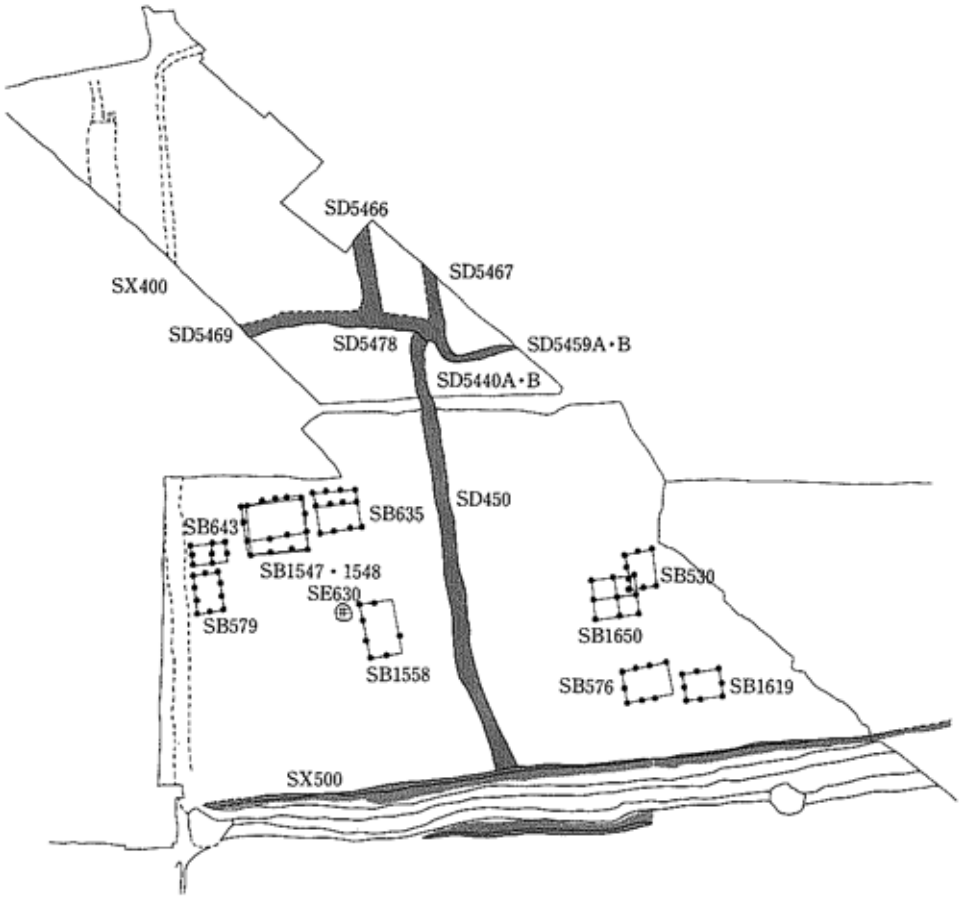
〔遺構〕井戸跡（ＳＥ630）などがある。また、ＳＤ450付近で、これと方向がほぼ一致する建物（A1グループ＝ＳＢ530・576・1619・1650）はこの時期の建物である可能性がある（第416図）。

〔変遷〕掘立柱建物跡は重複しており、少なくとも2時期があったと思われる。

〔内部の様子〕ＳＤ450からやや離れた場所に掘立柱建物跡が4棟ある。同時期存在したのは建物2棟ほどと井戸である。建物間には格差が見みられない。

【伏石地区】

〔区画〕南側には北1道路跡が、東側には西3道路跡がこの時期に存在したと思われる。北側にはＳＸ500が存在するが、かなり離れている。西側には道路などは存在しなかった可能性がある。



第416図　Ｃ・Ｄ区Ｃ期遺構模式図

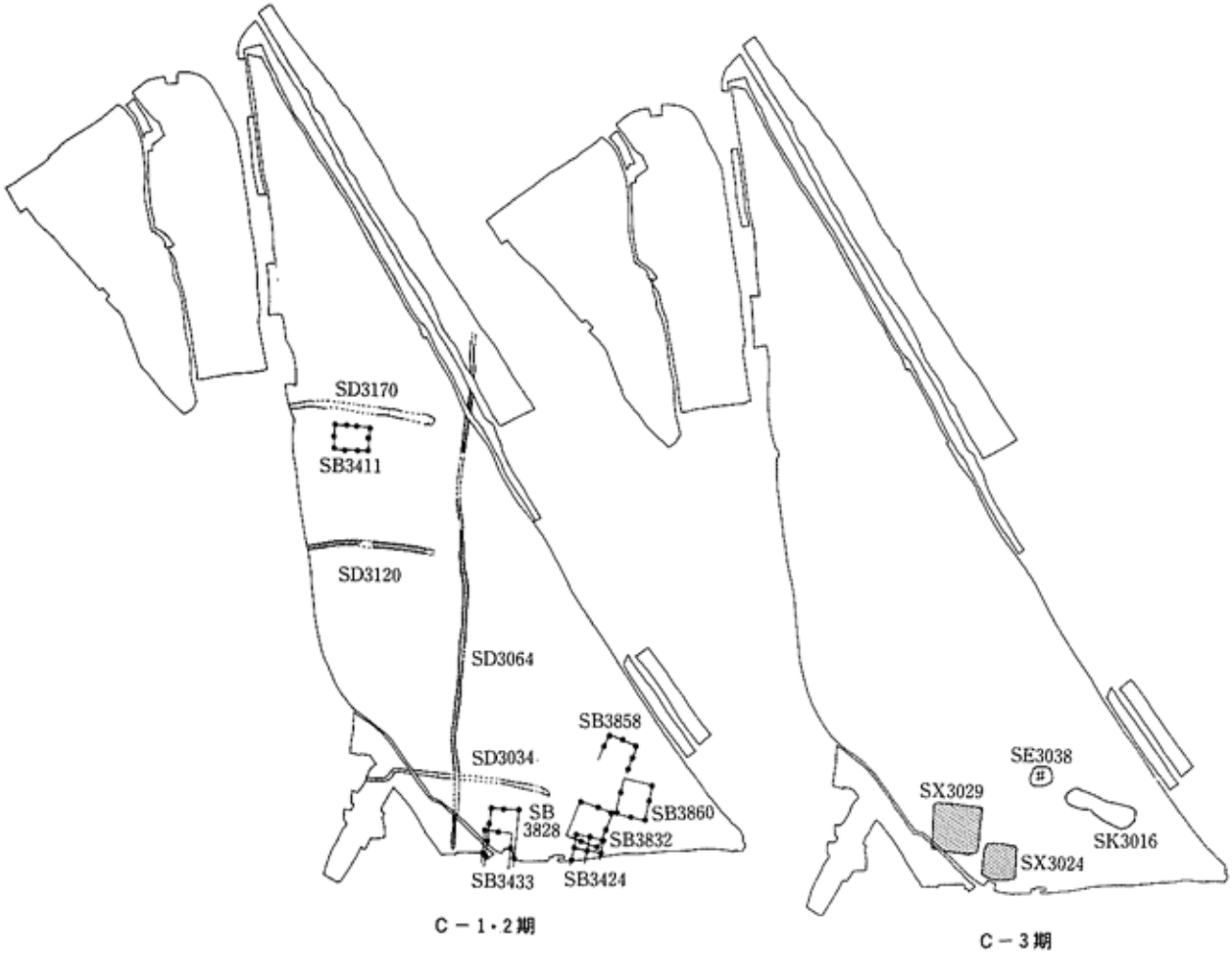
この部分は、ＳＤ3064で東西に分割されており、さらにＳＤ3034・3120・3170によって南北に細分されている（第417図）。

〔遺構〕工房跡（ＳＸ3024・3029）、井戸跡（ＳＥ3038）、土壙（ＳＫ3016）などがある。また、小区画溝付近で、これと方向がほぼ一致する建物（Ｂグループ＝ＳＢ3411・3428・3433）はこの時期のものと考えられる。また、ＳＫ3016より古いＳＢ3832・3858・3860は方向がＢグループの建物とやや異なるものの、ｂ期の建物とは大きく異なっていることから、この時期のものと考えられる。

〔変遷〕工房跡や井戸跡、土壙跡は出土遺物から同時期に存在したと思われる。建物跡はこれらより古く、（古）建物跡→（新）工房跡などと変遷したと思われる。また、建物跡には重複があり、少なくとも2時期はあったと考えられる。したがって、この時期には少なくともＣ－1、Ｃ－2、Ｃ－3の3小期があったと思われる。

〔内部の様子〕ＳＤ3064の東西で様子が異なっている。西側ではさらに南北に細かく区画されているが、掘立柱建物跡は1棟発見されただけである。上述のいずれの時期に属するかは判断できない。

東側では、3時期の変遷がある。Ｃ－1・2期には、それぞれ掘立柱建物跡が3棟ほど同時に存在



第417図　伏石地区Ｃ期遺構模式図

したと考えられる。いずれも小規模な建物である。C－3期には、小区画溝や掘立柱建物跡は存在せず、かわって工房や井戸が造られ、場の使われ方が変化している。

この場所は使われ方が変化するが、一貫して主要な建物は存在せず、北1道路跡沿いに存在が推定される主要な場にかかわる副次的な場所であったと思われる。

iv　d期

本地区に、道路による方格地割が成立した時期である。また、この区画をさらに細分する小区画溝が検出され、各区画内でそれぞれ数時期の変遷が明らかになっている。以下では、区画内を広く調査した、北3西5区（C・D区）、北2ａ西5区（B区）、北2西4区（伏石地区）について検討してみる。

【北3西5区】

〔区画〕南北が北2ａ・3道路跡、東西が西4・5道路跡によって区画されており、東半部は確認調査で止まっているため、西半部について検討する。

西半部は、ＳD402によって東西の小区画に分割されている。西側の小区画は、北側が市調査区（L区）のＳD5453によって、西側が西5道路跡、南側が北2ａ道路跡によって区画されており、方形を呈している。東側の小区画は、東側の区画施設が存在せず、北側はＳD5423によって、南側が北2ａ道路跡によって区画されている（第418・419図）。

なお、西側の小区画の北側にも、方形の小区画があったと思われる。

〔遺構と時間差〕掘立柱建物跡や井戸跡、畑跡、溝跡、土壙跡がある。これらは区画の西半部に集中しており、東半部は確認調査が実施されているが、この時期の明確な遺構は検出されていない。

掘立柱建物跡のうち、区画溝であるＳD402と方向がほぼ一致する建物（C1グループ＝ＳB411・434など）は、同時期のものである可能性が考えられる。

ところで、本地区には小区画溝であるＳD450やＳD402のいずれとも方向が異なり、方向が真北方向にほぼ一致する建物群（Bグループ）が存在する。小区画施設は存在しないものの、これらの建物による1時期が存在した可能性が考えられる。

方向による建物群の変遷は、基本的には、A1グループ→Bグループ→C1グループであることから、ｃ期→Bグループ→ｄ期の変遷が考えられる。一方、本地区に新たに建設された方格地割の道路（北2道路跡、西4道路跡）は、方向がBグループの建物に近い。これらのことから、ここではB期の建物群の時期は、本地区に方格地割が成立したｄ期と考えておきたい。

したがって、ｄ期のこの区画には大きく、Bグループの掘立柱建物跡などの時期（ｄ－1期）と、ＳD402とC1グループの掘立柱建物跡などの時期（ｄ－2期）とに分けられる。

以下、時期ごとに記述する。

〈ｄ－1期〉（第418図）

〔遺構〕掘立柱建物跡（Bグループ＝ＳB410・475・502・526・554・637・640・899・1555・1556・1571・1584・1586・1592）がある。また、ＳB581は方向が異なるものの（註1）、ＳD450より新しく、ＳD402より古いことから、この時期のものであると考えられる。このほか、畑跡（ＳF426・429・430）

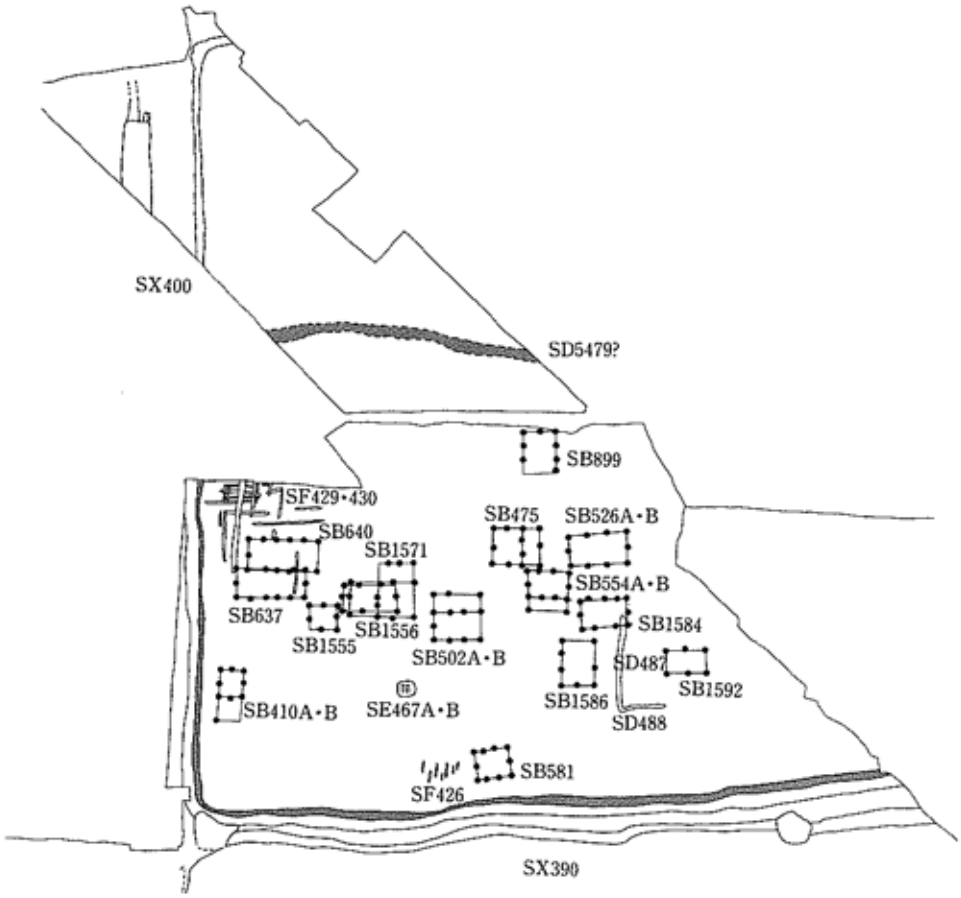
と溝跡（ＳＤ487・488）は方向がほぼ一致するのでこの時期に属する可能性がある。

なお、北側の市調査区では、ｃ期の区画溝（ＳＤ5478）より新しく、ｄ－2期の区画溝（ＳＤ5453）より古い溝（ＳＤ5479）がこれらとほぼ同位置に存在することから、この時期の北側の区画溝であると考えられる。

〔変遷〕建物跡のうち、ＳＢ475とＳＢ899、ＳＢ475とＳＢ526Ａ・Ｂ、ＳＢ526Ａ・ＢとＳＢ1584はほぼ柱筋が揃うことから、これらの建物は同時に存在したと思われる。同様に、ＳＢ502Ａ・ＢとＳＢ554Ａ・Ｂ、ＳＢ554Ａ・ＢとＳＢ1586、ＳＢ502Ａ・ＢとＳＢ1556はほぼ柱筋が揃うことから、同時に存在したと思われる。また、ＳＢ637・640は位置をやや変えての建て替えであり、ＳＢ410Ａ・Ｂは同位置での建て替えであることから、主要な建物と考えられる廂付建物が建て替えられている後者のグループに属する可能性がある。ＳＢ1571は規模・構造が異なるものの、ＳＢ1556とほぼ同位置で重複しており、後者のグループに属すると考えることもできる。

したがって、d－1期には前者のグループの時期と、後者のグループの時期があり、後者のグループは建て替えられているものが多く新旧2時期あることから、少なくとも3時期あると思われる。前者のグループと後者のグループの新旧関係は不明である。

〔内部の様子〕区画内のほぼ全域に建物が存在するが、南端部と北端部は少ない。各期ともほぼ中央部に1～2棟の廂付きの建物があり、主屋と思われる。その周囲には3～4棟の建物が配されている。



第418図　北３西５区ｄ－１期遺構模式図

南・北側の建物が少ない部分には畑が営まれていたようである。

〈ｄ－2期〉（第419図）

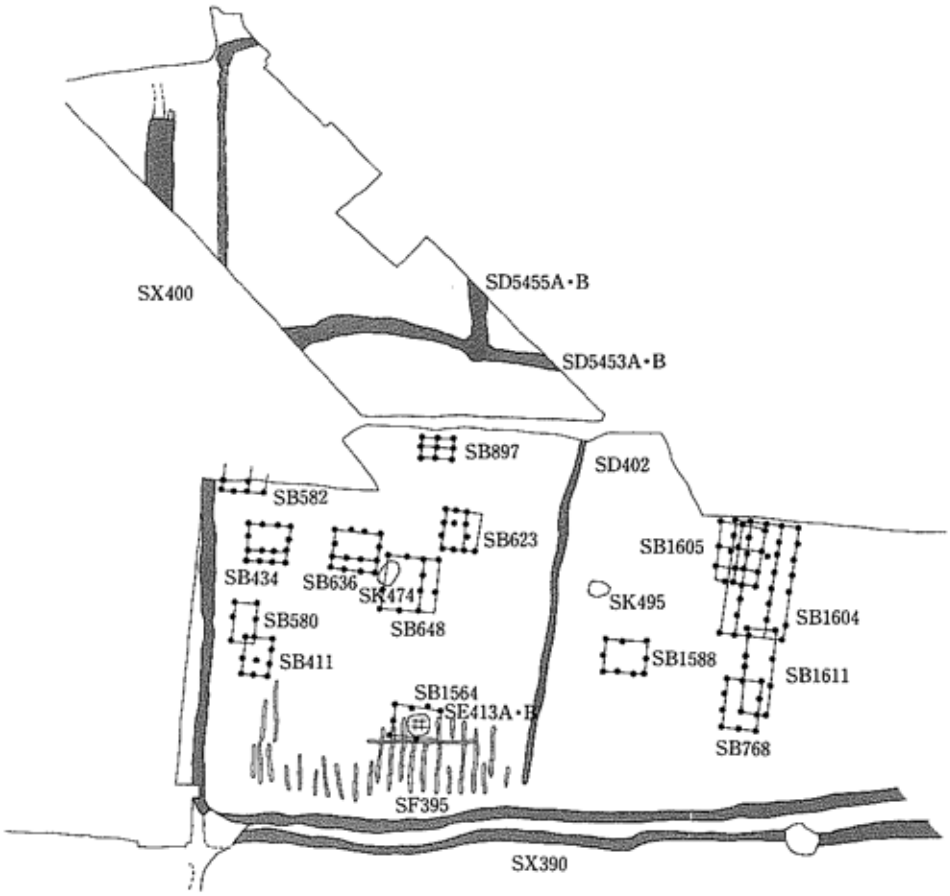
〔遺構〕掘立柱建物跡（C1グループ＝ＳＢ411・434・580・582・623・636・648・897・768・1564・1588・1604・1605・1611）や井戸跡（ＳＥ413）、畑跡（ＳＦ395）、土壙跡（ＳＫ474・495）がある。

〔変遷〕ＳＤ402によって東西に分割されている。西側の区画には9棟、東側には5棟の建物跡が存在する。

西側の区画では、ＳＢ434とＳＢ636、ＳＢ434とＳＢ411は柱筋が揃っており、3棟は同時期に存在したと思われる。ＳＢ648はＳＢ636と近接しており、同時には存在し得ないと思われることから、建物群には前者のグループと後者とがあると思われる。ＳＢ580はＳＢ411と重複しており、前者のグループには入らないことから、ＳＢ648と同時期であった可能性も考えられる。また、ＳＢ623はＳＢ648と近接していることから、前者のグループに属すると考えることも可能である。ＳＢ582・897・1564はいずれに属するか判断できない。

したがって、この区画には前者のグループの時期と、後者のグループの2時期があり、これらの新旧関係は不明である。

東側の区画では、重複状況から、ＳＢ768・1604とＳＢ1605・1611との2グループに分けられ、2時期あったと思われる。ＳＢ1588はいずれに属するか判断できない。



第419図　北３西５区ｄ－２期遺構模式図

上述のように、建物群には2時期あることから、この地区のｄ－2期には新旧2時期あったと考えられる。なお、小区画溝であるＳD402には改修の痕跡はみられなかったが、いずれの時期にも区画を意識した建物配置となっており、区画としては生きていた可能性も考えられる。

〔内部の様子〕西側の区画では、両時期とも、中央部と西側の西5道路跡寄りに建物が存在する。南側の北2ａ道路跡寄りには井戸が掘られ、その周囲に畑が営まれている。

前者のグループの時期には、少なくとも5棟の建物があり、廂付きのものが多い。ＳB636はほぼ中央にあり、南廂付きの東西棟であり、規模もやや大きいことから主屋と考えられる。ＳB434はこれと同構造で、並んで建てられていることから、これとほぼ同格であったと思われる。

後者のグループの時期には2～3棟の建物があり、廂付きの大規模なＳB648が主屋と考えられる。

東側の区画では、両時期とも2～3棟の建物が存在する。ＳB1604・1605は大規模であることから主屋と考えられる。

【北2ａ西5区】

〔区画〕南北が北2・2ａ道路跡、東西が西4・5道路跡によって区画された地区で、東半部は市調査区（Ｆ区）である。

〔遺構〕前述のように東半部は市調査区であるため、区画の西半部について述べる。掘立柱建物跡や井戸跡、畑跡、溝跡、土壙跡がある。

ところで、ａ期の区画溝であるＳD180は、この時期の排水溝と考えられるＳD164などが掘り込まれており、痕跡的にこの時期にも残っていたと推定される。このため、この地区の遺構はＳD180を境として大きく東西に分かれている。

西側には、掘立柱建物跡と井戸跡があり、東側には掘立柱建物跡、井戸跡、畑跡、土壙跡がある（第412図）。

〔内部の様子〕区画の西側では、北側～中央部に掘立柱建物跡、南側に井戸跡（ＳE217）がある。この場所にある掘立柱建物跡は小規模で、柱穴が小さく、中世のものと区別しがたいが、建物の方向から見て、ＳB228・353・1537・1544・1545などがこの時期のものの可能性がある。建て替えや位置的に同時に存在し得ないものがあり、同時期に存在したのは2～3棟と思われる。

区画の東側には、北西隅に井戸跡（ＳE297）があり、北側に畑跡（ＳF188）、土壙跡（ＳK199）中央部に掘立柱建物跡がある。この場所にある掘立柱建物跡は大半が中世と思われ、この時期のものは特定しがたいが、ＳB358などにその可能性が考えられる。

なお、西側のＳE217は9世紀後半頃、東側のＳE297とＳF188は10世紀前半～中頃であり、両者には時期差があったと考えられる。

ところで、東側の市調査区では、詳細は不明なものの、この時期のものと考えられる、規模や柱穴が比較的大きな掘立柱建物跡や、井戸跡が検出されている。したがって、この区画では、主な生活の場は東側であったと思われる。

【北2西4区】

〔区画〕南北が北1・2道路跡、東側が西3・4道路跡によって区画された地区で、西側には市調査区

（G区）がある。

この区は南北に長く調査されており、遺構は、北2道路跡よりの北側と中央部、南側の三カ所に大きく分かれている（第420図）。以下、まとまりごとに検討する。

〈北側の遺構群〉

〔小区画施設〕北2道路沿いの場所で、南側にＳＤ3177・3097があり、中央部や南側の遺構群と隔てている。そのほかの区画施設は存在しない。

〔遺構〕井戸跡（ＳＥ3310・3728）が存在する。道路と方向がほぼ一致する掘立柱建物跡（Ｂグループ＝ＳＢ3401・3788・3790・3807・3811・3812・3835、Ｃ1グループ＝ＳＢ3400・3786・3787・3810・3836・3839）はこの時期に属する可能性がある。

〔変遷〕掘立柱建物跡のうち、ＳＢ3400・3786・3787は柱筋が揃っており、ＳＢ3340・3786も柱筋が揃っていることから、これら4棟は同時に存在していたと思われる（グループＡ）。また、ＳＢ3810・3836も柱筋が揃っており、同様に同時期と考えられる。一方、ＳＢ3401・3810は柱抜き取り穴に灰白色火山灰が入っており、同時期に存在していた可能性が高い。ＳＢ3807は柱痕跡に灰白色火山灰が入っていることから、前記の建物と同時期の可能性が考えられる（グループＢ）。

これらは重複状況から、グループＡ（古）→グループＢ（新）と変遷していることがわかる。また、両者の間に入る建物跡（ＳＢ3400・3788・3790）やグループＢより新しい建物跡（ＳＢ3789）がある。前者は、新旧関係は不明だが、同時には存在し得ないことから、この場所には、5時期の変遷があったことになる。ところで、前者の建物のうち、ＳＢ3400Ｂ・3788はグループＡの建物の建て替えであり、この時期の部分的な変遷である可能性もある。したがってここでは、①：ＳＢ3340・3400Ａ・Ｂ・3786・3787・3788・3811→②：ＳＢ3790→③：ＳＢ3401・3807・3810→④：ＳＢ3789の4時期の変遷があったと考えておきたい。他の建物については、ＳＢ3341・3812が②期以降と考えられるが、それ以外は詳しい限定はできない。

〈中央部の遺構群〉

〔小区画施設〕鍵の手状に巡るＳＤ3123・3133や東西溝で区画している。

〔遺構〕ＳＤ3123・3133と方向がほぼ一致する掘立柱建物跡（Ｃ1グループ＝ＳＢ3413・3414・3417・3445・3446・3865）がこの時期に存在したと思われる。

〔変遷〕小区画施設には、既述のように①：ＳＤ3133→②：ＳＤ3123・3140・3177→③：ＳＤ3097の3時期の変遷がある。

一方、掘立柱建物跡には2時期の重複がある。これらのうち、ＳＤ3413とＳＢ3414、ＳＢ3413とＳＢ3417はそれぞれ柱筋が通っており、同時期に存在したと思われる。また、ＳＢ3446とＳＢ3445・3865は柱筋が通っており、やはり同時期に存在したと思われる。したがって、掘立柱建物跡には前者のグループと後者のグループの2グループがあり、位置関係から、前者は①の時期に、後者は②の時期に存在したものと考えられる。

〈南側の遺構群〉

〔小区画施設〕クランク状に巡るＳＤ3026と、南半部でこれと平行するＳＤ3025で区画している。両者

が平行する部分は道路となっていた可能性が考えられる。

〔遺構〕土壙跡（ＳＫ3047・3111・3144）や土器溜（ＳＸ3012）、畑跡（ＳＦ3909）がある。ＳＤ3025・3026と方向がほぼ一致する掘立柱建物跡（C1グループ＝ＳＢ3419・3423・3425・3426・3427・3429・3430・3431・3432・3445・3826・3829）はこの時期に存在した可能性がある。

〔変遷〕ＳＤ3026の堆積土上部に灰白色火山灰が堆積していることから、10世紀前半頃まで機能していたと思われる。時期的にＳＢ3423は同時期に存在したものと考えられる。また、ＳＢ3426・3427は柱筋が揃っており、同時に存在したものと考えられ、区画施設との位置関係から同時に存在した可能性が考えられる。

遺構の重複状況から、上述の遺構群より古いもの（ＳＢ3419・3425・3445・3829）と新しいもの（ＳＢ3859、ＳＦ3909）がある。

ところで、ＳＢ3430・3431は柱筋が揃っており、同時に存在したものと考えられる。この建物はＳＤ3026に近接しており、同時に存在し得ないと思われる。一方、上述の遺構群よりも新しいＳＢ3859とは方向が大きく異なっており、これら以前の可能性が高い。こう考えた場合、ＳＢ3429（古）→ＳＢ3431（新）の重複があることから、この場所には①：ＳＢ3429→②：ＳＢ3430・3431→③：ＳＤ3025・3026、ＳＢ3423・3426・3427→④：ＳＢ3859、ＳＦ3909の4時期の変遷があったことになる。

なお、ＳＢ3419・3445は柱筋が揃っており、①もしくは②の時期に同時に存在したと思われる。また、建物の方向は①期の建物とは異なり、③期に近いことから、②期のものの可能性が高いと思われる。このように考えた場合、ＳＢ3425は①期にＳＢ3829は②期に、ＳＢ3426・3432は②・③期のいずれかに属すると思われる。

また、ＳＢ3423は柱穴の規模が比較的大きく、同様に柱穴の規模が大きいＳＢ3423と同時期の可能性が考えられ、③期と思われる。

〔区画内全体の変遷〕この区画は中央部や南側の小区画溝によって分割されている。したがって、この区画全体の変遷もこれらの変遷で代表できると思われる。既述のように、小区画溝には大きく①：ＳＤ3133（・3140・3177）→②：ＳＤ3123・3140・3177→③：ＳＤ3025・3026・3097の3時期の変遷があったと推定されている。また、南側には③期より新しい時期が存在しており、この区画全体としては、①～④の4時期があったと思われる。

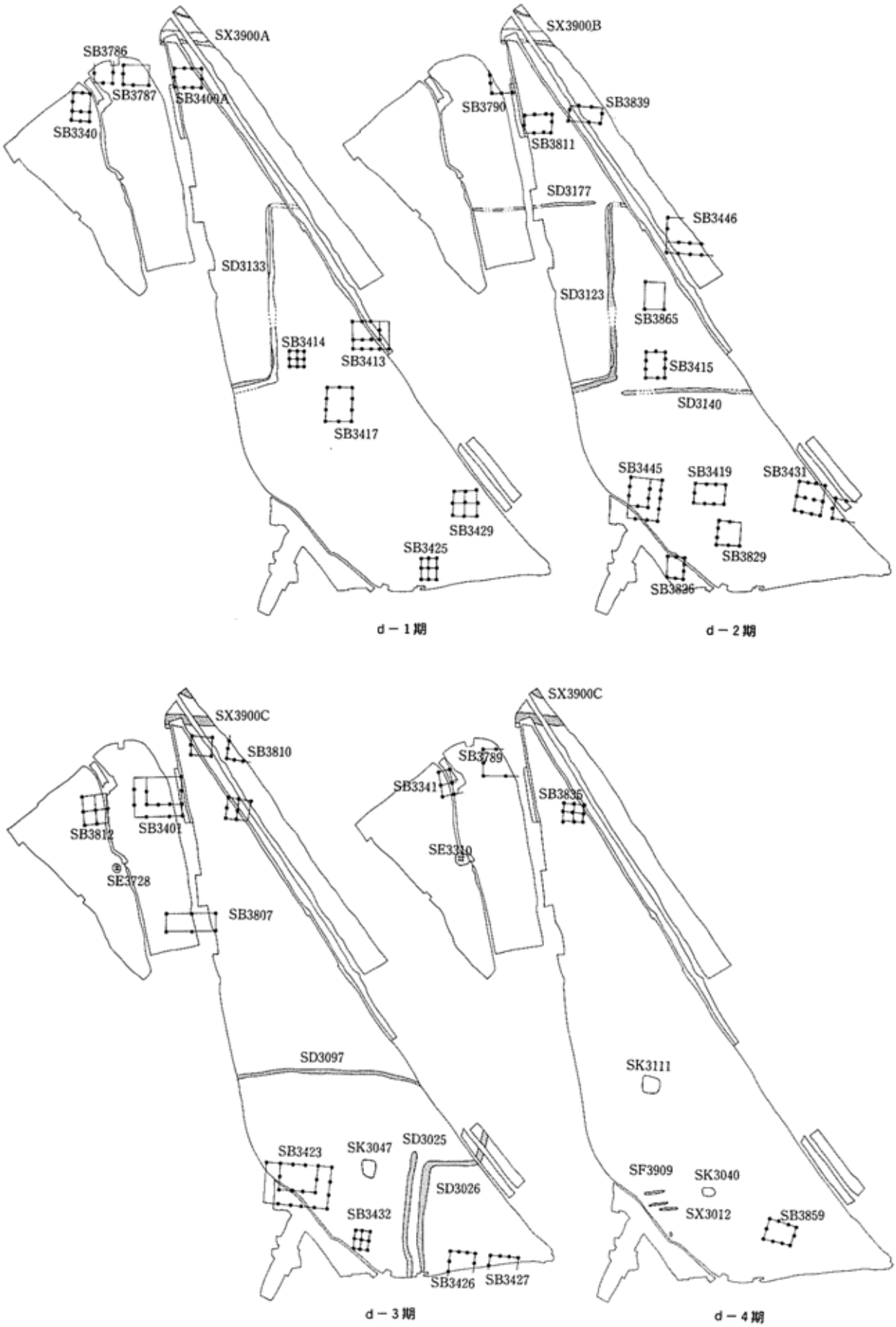
北側との対応関係について検討する。北側の③期の建物の柱抜取り穴には灰白色火山灰が入っており、同様の状況が見られる中央部・南側の③期と同時期と考えられる。したがって、この時期より新しい④期、古い①・②期はそれぞれ同時期に存在した可能性がある。

また、出土遺物の年代から、ＳＥ3728とＳＫ3047は③期に、ＳＥ3310とＳＸ3012、ＳＫ3040・3111は④期に属すると思われる。

〔内部の様子〕区画内の遺構を、変遷に基づいて模式的に表したのが第420図である。なお、詳しい限定ができなかった建物についても、それぞれの推定される時期に加えている。

①期は区画が南北に分割された時期で、建物は北・中央・南に分かれている。

北側では、東に東西棟、西に南北棟を配しており、いずれも小規模な建物である。南前面は広い空



第420図　北２西４区遺構模式図

閑地となっている。なお、ＳＢ3400Ｂは南廂付きの建物に建て替えられており、主要な建物であった可能性がある。

中央部では、廂付きの東西棟（ＳＢ3413）が主屋で、西側にある総柱建物（ＳＢ3414）と南北棟（ＳＢ3417）がこれに付属するものと考えられる。

南側では総柱建物があるが、中央部の建物群とは離れており、北1通路跡に面する場所に存在が推定される建物群と関連する可能性も考えられる。

②期は、北側、中央部西側、中央部東側、南側に区画内が細分された時期である。

北側では、小規模な建物が3棟存在する。南前面はやはり空閑地となっている。

中央部東側では、廂付きの東西棟（ＳＢ3446）が主屋で、西側に南北に並ぶ南北棟（ＳＢ3415・3865）がこれに付属するものと考えられる。

中央部西側では、建物は発見されていない。この場所は南西部が未調査で、他の場所は中世の堀や水道管の埋設などでかなり攪乱されており、詳細は不明である。

南側では、廂付きの南北棟（ＳＢ3445）が主屋で、東側にある東西棟（ＳＢ3419）や南北棟（ＳＢ3826・3929）がこれに付属する建物と考えられる。

③期は区画が再び南北に分割され、南側がさらに東西に分割される時期である。南側の区画の間は北1道路後から続く通路となっていたと思われる。

北側では、廂付きの東西棟（ＳＢ3401）が主屋で、北東側にある2棟（ＳＢ3810・3886）と南側にあるＳＢ3807がこれに付属するものと考えられる。なお、主屋の東西両側には総柱の建物が存在した可能性が考えられる。また、主屋の南側には井戸が掘られており、さらに南側は広い空閑地となっている。

南側西半部では、廂付きの東西棟（ＳＢ3423）が主屋で、東側の総柱の建物（ＳＢ3432）がこれに付属する可能性がある。

南側東半部では、2棟の建物が並んでいる。

④期は小区画溝が存在しない時期で、遺構は南北に分かれて存在する。

北側では、北2道路跡沿いに建物跡（ＳＢ3789）と井戸跡（ＳＥ3310）がある。これらは基本的には③期の構成を受け継いでいるようである。

南側では、建物は1棟（ＳＢ3859）だけで、畑跡や土壙跡、土器溜がある。南側に存在が予想される北1道路跡沿いの遺構群に関連するものの可能性が考えられる。

Ｃ　中世の屋敷跡について

ｉ　「新しい屋敷跡」の変遷と内部の様子

「新しい屋敷跡」には6時期の変遷があり、位置や規模・構造などが概ね一貫していることから、計画的に配置され、同時期に改修されたものと考えられる。ここでは、屋敷内の建物群の変遷について検討し、屋敷の時期ごとの様子についてみてみたい（註2）。

【建物群の変遷】主屋と附属建物にはそれぞれ5～6時期の変遷があり、計画的に配置され、同時期に

建て替えられたものと考えられる。建物群ごとに検討する。

〔主屋群〕6棟あり、A～Fの6時期の変遷が考えられる。これらの新旧関係について検討してみる。

これらの重複状況は、ＳB1505→ＳB1532、ＳB1505→ＳB1504、ＳB1632→ＳB306であり、他は新旧関係をとらえられない。各建物跡の方向をみると、東で北に傾くもの（ＳB306・1632）と、東で南に傾くもの（ＳB1504・1505・1532・1533）とがある。主屋は継続して存在しており、建物の方向もある程度前代を継承していると推定されることから、同じ方向のものは、連続して存在した可能性が考えられる。ところで、主屋群の建物跡は、ＳB1504を除いて、長大な東西棟で、廂または縁を持つものや張出しを持つものである。こういった構造が基本的に前代のものを継承したと考えれば、重複状況から、規模・構造が異なるＳB1504が最終のＦ期のものである蓋然性が高いと考えられる。その場合、方向が東で北に傾く建物が東で南に傾くものに先行し、ＳB1632がA期、ＳB306がB期と考えられる。また、ＳB1532・1533は構造や平面形が類似していることから、連続して存在した可能性が高いと思われ、その場合、ＳB1532に先行するＳB1505がC期と考えられる。ＳB1532とＳB1533の新旧は決められないが、規模が大きいＳB1533を後続するものと考え、ＳB1532がD期、ＳB1533がE期としておきたい。

〔後ろの建物群〕6棟ある。これらと主屋の関係について検討してみる。

これらの重複状況は、ＳB1665→ＳB304→ＳB1501、ＳB1502→ＳB1628であり、他は新旧関係をとらえられない。構造や平面形をみると、総柱の建物（ＳB304・1665）、東西棟（ＳB303・1501・1502）、南北棟（ＳB1628）があり、同じ構造の建物は連続している可能性が考えられる。また、ＳB303は東西棟で、東半部は床貼りとなっており、両者の要素を持っていることから、両者の中間に位置すると考えることも可能である。その場合、これらの順番はＳB1665→ＳB304→ＳB303→ＳB1501となる。

位置関係をみると、Ｆ期の主屋と附属する塀がこれらと重複しており、同時には存在し得ない。また、ＳB1628はA期の西の建物と近接しており、同時には存在し得ないと思われる。

以上のことから、後ろの建物群は、ＳB1665がA期、ＳB304がB期、ＳB303がC期、ＳB1501がD期、ＳB1628がE期と推定される。

なお、このように考えた場合、ＳB1502はいずれの時期の主屋もしくは後ろの建物と重複するため、ここでは「新しい屋敷跡」成立以前のものと考えておきたい。

〔西の建物群〕7棟あり、これらと主屋の関係について検討してみる。

まず、ＳB1534は、位置的に主屋群と同時存在せず、「新しい屋敷跡」の附属建物ではないと考えられる。

その他の建物跡の重複状況は、ＳB1506→ＳB305であり、他は新旧関係をとらえられない。構造や平面形をみると、南北棟（ＳB1503・1506・1635）と、東西棟（ＳB1669）、総柱建物（ＳB305・307）とがある。同じ構造の建物は連続すると考えると、南北棟から総柱建物へ変化したことがわかる。また、総柱建物はＦ期の主屋と同時存在せず、東西棟はA期の主屋より新しい。以上のことから、南北棟→総柱建物→東西棟と変遷したと推定される。

南北棟のうち、ＳB1506はＢ・Ｃ期の主屋と同時には存在し得ず、ＳB1635はB期の主屋と同時に

は存在し得ない。また、ＳＢ1503はA期の区画の堀よりも新しいことから、ＢもしくはC期と考えられる。以上のことから、ＳＢ1506はA区、ＳＢ1503はB期、ＳＢ1635はC期であると思われる。

一方、総柱建物は、ＳＢ307がＥ期の主屋と同時存在しないことから、ＳＢ307はD期、ＳＢ305はＥ期と考えられる。

〔東の建物群〕5棟あり、これらと主屋群の関係について検討してみる（註3）。

これらは主屋の東側に存在することで共通するが、位置的にはまとまっていない。新旧関係は不明だが、ＳＢ5164とＳＢ5169は平面的に重複しており、同時には存在し得ない。また、ＳＢ5169とＳＢ5166は近接しており、やはり同時には存在し得ないと思われる。

平面形は、ＳＢ5158が南北棟で、他の4棟は東西棟であり、ＳＢ5169には南側に張出しが付く。以下、各建物ごとに検討する。

ＳＢ5158は後ろの建物群の東側にあり、主屋のどの時期に属するかは決定できないが、Ｆ期に主屋が大きくなり、西の建物や後ろの建物が存在しなくなることから、それらのかわりとして建築された可能性もあり、Ｆ期のものとしておきたい。

ＳＢ5159はＥ期以外の主屋と平面的に重複しており、Ｅ期のものと考えられる。

ＳＢ5164・5169はD期の区画の堀を埋め戻した上に建築されており、ＥもしくはＦ期と考えられる。また、ＳＢ5166はC期の区画の堀を埋め戻した上に建築されており、D期の堀に近接していることから、ＥもしくはＦ期と考えられる。これらのうち、ＳＢ5169は他の2棟と同時には存在しないことから、ＳＢ5169とＳＢ5164・5166の2グループに分けられ、それぞれがＥもしくはＦ期に属すると思われる。これ以上の限定はできないが、ここでは一応、棟通りが揃うＳＢ5159とＳＢ5169が同時期でＥ期、ＳＢ5164・5166がＦ期としておきたい。

〔北の建物群〕6棟あり、これらと主屋の関係を検討してみる。

これらの重複状況は、ＳＢ1509→ＳＢ302であり、他は新旧関係をとらえられない。平面形をみると、東西棟（ＳＢ301・302・1666・1668）、南北棟（ＳＢ1509・1510）があり、それぞれ連続している可能性が考えられ、南北棟から東西棟に変化したと思われる。これらについてはこれ以上の限定はできない。

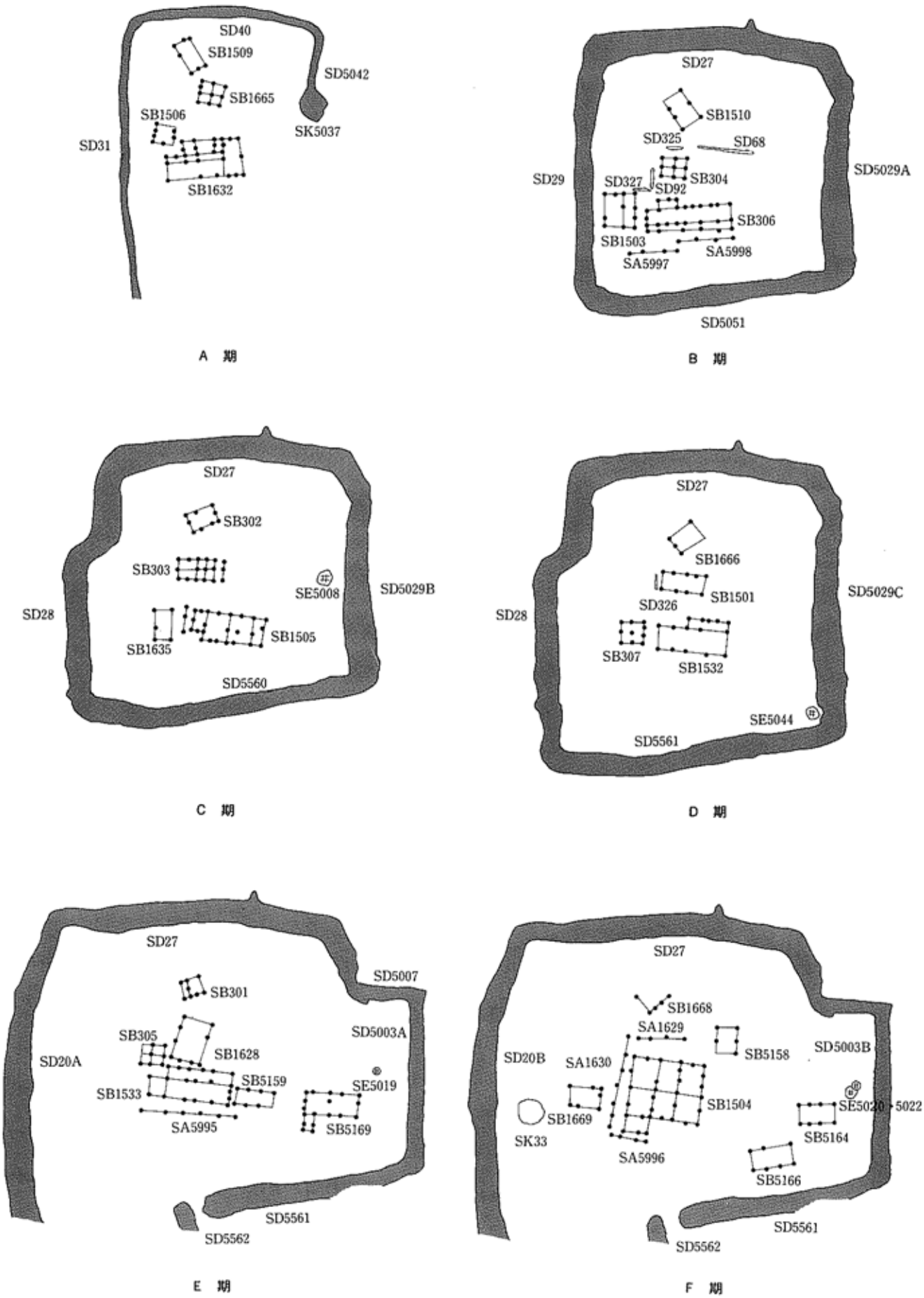
〔その他の遺構〕「新しい屋敷跡」に伴う可能性のある井戸跡は7基ある（ＳＥ41・5008・5019・5020・5022・5026・5044）。これらからは出土遺物がほとんどなく、時期を特定することができない。

位置的にはＳＥ41を除いて南東部に集中している。また、区画の堀の付近に存在し、屋敷地の隅の方に作られる傾向がある。

ＳＥ41は区画のD期の堀が埋め戻された後に掘り込まれており、Ｅ期以降のものと思われる。また、堆積土が他の井戸とは異なっており、近世以降の可能性もある。

ＳＥ5008は区画のA期の堀を壊しており、B期以降と考えられる。また、井戸が敷地の隅の方に作られる傾向を重視すると、B～D期のいずれかである可能性が考えられる。

ＳＥ5019・5020・5022は中世の堆積層の上面から掘り込まれており、「新しい屋敷跡」に伴うものであり、位置的に区画のＥもしくはＦ期であると思われる。



第421図　「新しい屋敷跡」変遷模式図（S＝1/1000）

ＳＥ5044は区画のＣ期の堀を掘り込んでおり、Ｄ期以降と思われる。

なお、これらの他にも、中世の井戸跡が存在しており、「新しい屋敷跡」の各時期に井戸跡は存在していたものと考えられる。

溝跡は3条あり（ＳＤ30・68など・326）、敷地の西・北側にある。

ＳＤ30は区画のＢ期の堀が埋め戻された後に掘り込まれており、Ｃ期以降のものと思われる。

ＳＤ68は、ＳＤ92・325・327と同規模で、方向が一致、あるいは直交することから、一連のものであると思われる。これらの内部には主屋と西の建物、後ろの建物が存在することから、敷地内の主要な場所とそれ以外の場所を区画するための溝跡と考えられる。時期は建物との位置関係からＢ期と推定される。

ＳＤ326はＳＤ68などより小規模な溝跡で、位置関係から、Ｄ期の後ろの建物であるＳＢ1501の雨落ち溝のようなものである可能性がある。

土壙跡は10基あり（ＳＫ32・33・35～38・45・49・5018・5021）、他に時期の特定できないものでこの時期に属するものが存在すると考えられる。位置的には、北西部にあるものが多く（ＳＫ32・35～38・49）、建物の周辺に存在している傾向が窺われる。

ＳＫ33は区画のＤ期の堀が埋め戻された後に掘り込まれており、ＥもしくはＦ期のものと思われる。

また、堆積土から多くの遺物が出土している。このうち、染付の椀・皿は中国産で、日常生活に用いられたものと思われる。一方、俵編み機の脚や錘などが出土していることから、こういった作業が屋敷内で行われていたことがわかり、生活の一端が窺える。

【内部の様子】上述のように、堀には6時期、建物にも6時期の変遷が考えられた。また、井戸跡や溝跡、土壙跡についてもある程度の位置づけが可能であった。

そこで、建物の変遷や主屋と附属建物の組み合わせに検討の余地を残すものの、これらを模式的に図示すると第421図のようになると思われる。

【その他の建物跡】屋敷内の建物の他にＢ・Ｃ区で多くの中世の建物が検出された。この中には屋敷の主屋クラスの大規模な建物も存在する（Ｂ区：ＳＢ1516・1517・1524、Ｃ区：ＳＢ1559・1565・1601など）。建物の規模からは、屋敷の主人とほぼ同クラスの人々が居住していたと考えられるが、堀による明確な屋敷地を持たない点で異なっている。

一方、小規模な建物は、屋敷もしくは付近にある大規模な建物に附属するものと思われる。

ii　八幡地区の屋敷跡

今回の調査では、「古い屋敷跡」と「新しい屋敷跡」、「伏石地区の屋敷跡」が検出された。

「古い屋敷跡」は市調査区にあり、方形に堀で区画したもので、規模は東西75m程、南北60m以上である。年代は12～13世紀頃と考えられており、内部の建物跡はそれほど大規模なものは存在しない。また、「古い屋敷跡」廃絶後に、「新しい屋敷跡」が成立するまでに自然堆積の間層があり、時間的な空白があったと推定されている。

「新しい屋敷跡」と「伏石地区の屋敷跡」は同時期に存在しており、年代は15～16世紀と考えられる。「新しい屋敷跡」には6時期の変遷があり、敷地内には、一貫して、主屋とそれを囲むように附属

する建物が存在していることが明らかになった。

ところで、県道調査区でも15～16世紀の堀で囲まれた屋敷跡（「北の屋敷跡」と呼ぶことにする）の北西部が検出されており（後藤他；1994）、調査区周辺では同時期に3ヶ所の屋敷が存在していたことになる。これらの位置関係は、「北の屋敷跡」が「新しい屋敷跡」のおよそ150m程北東にあり、「伏石地区の屋敷跡」のおよそ90m程北にある。また、「新しい屋敷跡」は「伏石地区の屋敷跡」のおよそ120m程西にある（第412図）。

こういった状況は、西側の新田遺跡でも確認されており、山王遺跡に至るまで、多数の屋敷が隣接して営まれていたと考えられている（千葉；1992）。本調査区の状況は、こういった状況の一部であり、連続する屋敷群の東端部にあたると思われる。

「北の屋敷跡」には少なくとも6時期の変遷があり、「新しい屋敷跡」と共に長期間存在していたことから、この地区の拠点的な役割を果たしていたと推定される。

一方、「伏石地区の屋敷跡」は2時期の変遷が確認されているが、他の2ヶ所の屋敷よりも存在期間は短かったと思われる。また、大規模な建物は存在せず、規模も小さい。このような差異は屋敷の居住者の階層の差を反映していると考えられる。

屋敷の住居者は留守氏と関連のある者と考えられている（赤澤；1990）。前述のように新田遺跡から本遺跡まで屋敷が隣接して営まれており、新田遺跡の屋敷が留守氏にかかわりのあった武士階級の屋敷と考えられている（千葉；1992）ことからも、この推定は裏付けられよう。

なお、屋敷跡間には多くの建物跡が存在し、各屋敷跡と密接な関連を有していたと思われるが、それぞれの時期が不明なため具体的には検討できなかった。

註1　最も近い区画施設である道路側溝の方向に規制された可能性がある。

註2　堀のA期は区画する場所がB期以降と同じことから「新しい屋敷跡」に含めて考えたが、区画が不十分なことや、堀がB期以降の堀よりもかなり小規模であることから、屋敷としては不十分なもので、主屋などが建築されるのはB期以降である可能性もある。一方、主屋は敷地が変化しても一貫してほぼ同位置にあり、A期の区画の東西方向のほぼ中央に存在することから、ここでは主屋などはA期から存在していたと考えておくことにする。

註3　東側は市調査区（E区）であるが、ここで検討することにする。多賀城市埋文センターの千葉氏には資料の提供をはじめ、様々なご教示を受けた。

4　道路跡と方格地割

道路跡は、前述のように、本地区では、A：SX500（9世紀前半頃）→B：SX299・390・400・700・710・750（9世紀後半～10世紀中頃）の2時期の変遷があったと考えられる。

ところで、多賀城南前面の道路には、多賀前地区の調査成果から、Ⅰ～Ⅲ期の3段階の変遷がとらえられており、本地区の変遷はA期がⅡ期に、B期がⅢ期に相当すると考えられている。これに伴い、方格地割も段階的に整備されたものと考えられている（菅原他；1996）。以下、本地区とのかかわりや方格地割について検討してみたい。

A　II期

東西大路の南北に各1条の東西道路（北1道路跡、南1道路跡）、南北大路の西側に少なくとも3条の南北道路（西1～3道路跡）が建設され、方格地割が成立した時期である。本地区にはＳＸ500がある。ほかに、ＳＸ400・2651がこの時期に存在した可能性が考えられる。

ＳＸ500は、方格地割の計画プランから外れており、南北大路とも接続せず、本地区のみに存在する。また、西3道路跡とＳＸ400・2651はこれと連絡する可能性が考えられるが、方形の区画は形成しない。したがって、本地区は、道路は存在するものの方格地割区域外であり、これらとは別の地区として存在したと思われる。

なお、多賀城へ行くには東西大路を経由すると大きく遠回りすることになる。前述のように、本道路跡は東へ直進しないことが確かめられていることから、八幡地区の北側で砂押川を渡り、五万崎地区の丘陵部を経て、南門や西門に連絡していたと推定される。

ところで、この時期の方格地割は、東西大路を中心として、北側は北1道路跡まで、南側は南1道路跡までの範囲に施行されたことは確実で、東西は、南北大路から西3道路跡までは確実に施行されている。以下、東西の施行範囲について検討する。

西側では、西7・9道路跡が発見されている。西7道路跡は2時期目が10世紀前半頃であり（千葉；1995）、建設時期が9世紀前半頃までは遡らない可能性が高い。西9道路跡は東西大路と接続しており、この時期に存在したと思われる。これより西側には南北道路は存在しない。これら以外の道路は未発見である。

遺構をみると、大路に面した千刈田地区では畑跡だけが確認されている。西9道路跡が存在する東町浦地区では、区画溝や掘立柱建物跡などが検出されており、八幡地区の遺構の状況に近い。

こういったことから、東町浦地区は八幡地区と同様に方格地割外と考えることもでき、現時点では、方格地割が確実に施行されたのは多賀前地区付近だけであり、千刈田地区以西については、施行されなかった可能性も含め、今後の検討課題としておきたい。

東側では、東西大路が存在するものの、それ以外の東西・南北道路が未発見で、この時期の遺構・遺物が少ないことから、方格地割は施行されなかった可能性が高い。

B　III期

Ⅱ期の区画の外側に新たに道路が建設され、方格地割が拡大した時期である。東西大路の北側には北2道路跡、南側には南2道路跡が造られ、南北大路の西側には西9道路跡までが確認できる。本地区には、北2・2ａ道路跡、西4・5・6道路跡がある。

北2道路跡は方格地割の北辺をなす道路で、方向は南北大路と直交しており、西9道路跡のさらに西側にまで直線的に延びている。したがって、この道路は、新たな方格地割のマスタープランに沿って建設されたものであると思われる。

北2ａ道路跡は方格地割からははずれた変則的な道路で、Ⅱ期のＳＸ500を踏襲したと考えられる。一方、西4・5道路跡はこれよりも北へ延びており、変則的ではあるものの方形の区画を形成するこ

とから、本地区は方格地割区域内に組み込まれたと思われる。

なお、北2ａ道路跡は他の道路より早く廃絶している。

この時期の方路地割は、各地点の調査から、南北大路の西側では、南北は東西大路を中心として、北2・南2道路跡まで、西側は西9道路跡まで施行されたと考えられる。また、北2道路跡の北側の八幡地区も、変則的ながらこれに組み込まれていたと考えられる。

なお、北2道路跡は西9道路跡のさらに西まで延びているが、それ以西の南北道路が存在しないことから、方格地割は西へは延びないと思われる。

ところで、市川橋遺跡の西2道路跡は、北2道路跡よりも北側で発見されている（白鳥；1980）。西1道路跡は北2道路跡より北へは延びていないことから、この付近には方格地割が施行されなかった可能性が高く、西2道路跡は方格地割区域と丘陵部である五万崎地区を結ぶ役割を果たしていたと思われる。

南北大路の東側では北2道路跡が発見されているが、ほかに側溝を伴った道路跡は発見されておらず、方格地割は施行されなかった可能性が高い。しかし、従来水田であった場所に盛土整地して宅地化しており、この区域まで町並みが拡がっていたことは間違いないと思われる。

第Ⅷ章　まとめ

ここでは、山王遺跡八幡地区を中心として、本遺跡および周辺地区の各時期の様子について概観してみたい。

1　縄文時代

少量の土器が発見されているが、遺構は発見されていない。

本道路に隣接する、多賀城跡が立地する丘陵上には、前期の貝塚があり、多賀城内の各地からも遺物が出土しており、集落などの存在が推定されている（宮多研；1973）。

また、多賀城跡の北側の沢の最奥部には、中期を主体とし、晩期まで続く貝塚がある。

こういったことから、本遺跡が位置する沖積平野は、前期に海水が流入し、中期頃から沖積化が進み、晩期には陸地化したと推定されている（後藤；1991、松本；1996）。

自然堤防上の新田遺跡後地区からは晩期の遺物と土壙跡が発見されており（石川；1995）、こういった推定を裏付けている。また、本遺跡内にこの時期の遺構・遺物が存在する可能性も考えられる。

2　弥生時代

八幡地区では県道調査区で、中期の桝形囲式の遺物包含層が検出されており、この地区の南側に集落が存在したと予想されている（後藤他；1994）。

また、市調査区（Ｊ区）では、水田の存在が考えられており（千葉他；1997）、伏石地区や多賀前地区でも、付近に水田等の遺構の存在が推定されている。

新田遺跡後地区では、中期の遺物包含層が検出され（石川；1995）、丘陵上の多賀城跡五万崎地区からは、土器と石包丁が発見されており、集落の存在が推定されている（藤沼；1991）。

こういったことから、本地区周辺の自然堤防上や低い丘陵上には、比較的広範囲に、農耕を基盤とした集落が展開していたと推定される。

3　古墳時代

1　前期

竪穴住居跡、水田跡、畑跡、方形周溝墓などが発見されている。

竪穴住居跡は、丘陵上の高崎遺跡と、自然堤防上の山王遺跡町地区で発見されている。前者は3棟あり、うち1棟は火災に遭っていた（宮多研；1975）。後者では1棟検出されており、地形から周辺に集落が形成されていたと推定される。なお、この場所では、竪穴住居跡→畑跡→方形周溝墓と、場所の性格が変化している（早川・星；1995）。

水田跡は、八幡地区、多賀前地区（菅原他；1995）や西町浦地区（千葉・高橋；1996）、町地区（早川・星；1995）、新田遺跡後地区（石川・三浦；1996）で検出されている。いずれも八幡地区と同様に

大畦畔と小畦畔で区画されている

畑跡は町地区で検出されている（早川・星；1995）。

方形周溝墓は、多賀城跡内の五万崎地区（宮多研；1977）と、町地区（早川・星；1995）で発見されている。規模が、前者では 20m程であり、後者では 10m程と差がある。なお、後者の中央部で、掘立柱建物跡が検出されている。

他に、新田遺跡南寿福寺地区で、溝跡（石川；1995）や遺物を多量に含む土壙跡（高倉；1991）が、多賀前地区の 25 次調査で水田の可能性のある遺物を含む層（鈴木；1995）が発見されている。

以上のことから、この時期には、丘陵上や自然堤防上の各地に集落が形成され、農耕を営んでいたことがわかる。また、墓域も形成されているようである。

なお、これらから出土した土器を見ると、前期の中でも概ね後半段階に集中している。

2　中期

本地区では、竪穴住居跡や鍛冶遺構、河川跡、遺物包含層、水田跡、祭祀遺構、古墳などが発見されている。

竪穴住居跡は、八幡地区では、Ｆ区南半部とＧ区北側に集中しており、他地区には存在しない。ほかに、西町浦地区（高倉他；1981）、山王一区（石本；1993）、町地区（東理・八嶋；1996）、新田遺跡後地区（高倉；1991）で発見されている。八幡地区の集落内では鍛冶が行われており、かなり早い段階から鍛冶技術が導入されていたことがわかる。また、西町浦地区の竪穴住居跡では石製模造品の製作が行われていた。

八幡地区の河川跡は、古墳時代後期～奈良時代の河川跡とほぼ重なっているが、これより大規模で、県道調査区の中央やや東よりから南流してくるもの（ＳＤ2050Ａ）と、Ａ区から東流してくるもの（ＳＤ777）が、Ｄ区東端で合流している。遺物包含層（ＳＸ230）はＳＤ777 の南岸の落ち際に堆積したもので、刀装具や儀仗、卜骨など多種多様な遺物が出土しており、南側に存在する集落から廃棄されたと考えられている（吾妻・菅原；1994）。

水田跡は、新田遺跡南寿福寺地区（石川；1997）で発見されている。小区画の水田である。

また、市川橋遺跡の南にある低丘陵上に丸山囲古墳があり、詳細は不明だが、この時期のものと考えられている（藤沼；1991）。

この他、西町浦地区では多量の土器や石製模造品が出土した祭祀遺構や、方形周溝墓の可能性のある細長い溝跡（高倉他；1981）が発見されている。また、東町浦地区では堰と考えられている木組遺構（相沢；1990）や、豪族居館の可能性のある「コ」字状に巡る大規模な溝跡（高倉；1991）などが発見されている。

出土遺物を見ると、土器は南小泉式期の中でも古い時期のものが大半で、町地区にやや時代が下るものも存在する。

また、東町浦地区では須恵器が比較的まとまって出土している。この時期の須恵器の出土例は少なく、この地区が一般的な集落とは異なる性格を有していた可能性が考えられている（高倉；1991）。さらに、北方系の遺物と考えられる黒曜石製の石器なども各地から出土しており、北方との交流を示し

ている。

このように、本地区周辺では、この時期に、地方豪族クラスとの直接的な関わりを窺わせる遺構・遺物が多く発見されており、この地域の中で中心的な役割を果たしていたと推定される。

3　後期

本地区では、溝跡や材木塀跡による区画施設、竪穴住居跡、溝跡、土壙跡、河川跡などが発見されており、ほかに祭祀遺構や横穴墓がある。

竪穴住居跡は河川の合流点付近に集中して存在しており、大集落を形成し、かなり長期間存続していたと推定されている（後藤他；1994）。

市川橋遺跡館前地区では、竪穴住居跡と河川跡が（東理・八嶋；1996）、新田遺跡後地区では、竪穴住居跡と祭祀遺構が発見されている（高倉；1991）。

出土遺物をみると、土器はいずれも栗囲式の古い時期のもので、現時点では、新しい時期のものは見つかっていない。

一方、多賀城跡の外郭南門西側の田屋場地区で、7世紀後葉～8世紀前葉頃の横穴墓が発見されている（丹羽；1986）。周辺ではこの頃の集落は発見されておらず、横穴墓を造営した集団については不明である。

本遺跡からやや離れるが、高崎遺跡の東側に、稲荷殿古墳がある。現存するのは1基だけだが、群集墳と考えられている。時期は7世紀後半頃であり、やはり、造営した集団は不明である。

本地区の集落については、調査が完了しておらず不明な点が多いが、柄香炉などの特殊な遺物を有し、区画施設を有することから、一般の集落とは異なっていると考えられる。また、すでにこの時期に仏教が伝わっていたということも特筆される。

4　奈良時代

隣接する丘陵上に陸奥国府多賀城が創建され、さらに大規模に改修される時期である。

8世紀前半頃

ＳＤ180は本地区を区画する溝であるが、区画の範囲が確定せず、同時期の遺構も少ないため、具体的な内部の様子などは不明である。数棟の掘立柱建物跡と畑跡があり、県道調査区に竪穴住居跡がある。時期的には多賀城創建頃と考えられている（千葉他；1997）。

市調査区のＥ・Ｆ区周辺からは、漆紙や漆壷、漆付着土器などがまとまって出土しており、漆工房が存在したと考えられている（千葉他；1997）。

これ以外では、栗囲式期後半以降からこの頃の遺構は極めて少なく、多賀城創建前後のこの地域はあまり利用されていなかったと推定される。

8世紀後半頃

〔本地区の様子〕Ｃ区では、ＳＤ461と材木塀で方形に区画された一郭が成立する。内部には掘立柱建物跡や竪穴住居跡、井戸跡などが存在する。しかし、区画内には遺構が存在しない場所も多く、中央部が未調査のため区画の性格等は不明である。

区画外には、掘立柱建物跡や竪穴住居跡、井戸跡、畑跡などが点在しているが、明瞭な区画などは発見されていない。

ところで、この時期の掘立柱建物跡と竪穴住居跡の方向をみると、C区の方形区画内とそのすぐ外側のものは区画施設の方向と一致しているが、区画施設から離れたものはほぼ真北方向である。したがって、従来から指摘されているように、この地区全体には真北方向の地割りがあり、新たに成立した方形区画の内部と周辺はその方向に影響を受けた可能性が考えられる。なお、方形区画の南辺はＳＤ100河川跡の北岸とほぼ一致しており、これに規制されたと考えられる。

また、引き続きＥ・Ｆ区周辺に漆工房が存在したと推定される。

〔他地区の様子〕多賀前地区の大路の北側の地区で、掘立柱建物跡や竪穴住居跡、井戸跡などが検出されており、八幡地区や伏石地区と同様の状況を示している。それ以外の地区では、遺構は判然としないものの、土器は少量ながらも出土しており、何らかの土地利用がなされ始めたものと考えられる。

5　平安時代

多賀城南面一帯に道路による方格地割が施行された時期で、本地区では大きく2時期の変遷があったと考えられ、Ⅱ期（＝9世紀前半頃）、Ⅲ期（＝9世紀後半～10世紀前半頃）に相当する。

Ⅱ期

ＳＸ500などによって区画された地区（Ｃ・Ｄ・Ｌ区）は、南北の小区画溝ＳＤ450と東西の小区画溝ＳＤ5469などによってさらに小区画に分割されている。

Ｃ区の小区画内には、主屋・副屋が1棟ずつと井戸が1基あり、これらで屋敷を構成していたと考えられる。伏石地区では、ほかに鍛冶工房が存在する。

方格地割内の大路に面した多賀前地区では国司や官人クラスの館が成立するが、方格地割外の多賀前地区南側では竪穴住居跡や畑跡、水田跡が存在し、方格地割内とは大きな格差がある。また、大路に面した千刈田地区では畑跡だけが存在している。さらに西側にある東町浦地区では、大路に接続する通路とそれに伴う区画溝、掘立柱建物跡などが検出されている。

南北大路より東側の水入地区では東西大路や掘立柱建物跡などが検出されており、この付近まで生活の場が広がったことが推定される。

丘陵上の高崎遺跡弥勒地区では、掘立柱建物跡や竪穴住居跡、工房などが多数検出されている（千葉；1997）。この場所は東西大路の東延長上に位置するが、道路は発見されなかった。

Ⅲ期

Ⅱ期の区画の外側に新たに道路が建設され、方格地割が拡大した時期である。東西大路の北側には北2道路跡、南側には南2道路跡が造られ、南北大路の西側には西9道路跡までが確認できる。本地区には、北2・2ａ道路跡、西4・5・6道路跡がある。

Ⅱ期と同様に、北3西5区の小区画内には、主屋・副屋・井戸で構成される屋敷がある。伏石地区でも同様の状況がとらえられる。これらⅡ・Ⅲ期の屋敷の居住者は、大路に面した多賀前地区との遺構・遺物の比較から、「下級役人」かと推定されている（高野・菅原；1997）。

ところで、本地区と南北大路東側の方格地割区域外の水入地区周辺を比較すると、本地区では存在しない竪穴住居跡が水入地区では存在し、10世紀頃に掘立柱建物跡に変わることや、廂付きの掘立柱建物跡が本地区では比較的多く存在するのに対し、水入地区周辺ではあまり発見されていないこと、本地区では明瞭な区画を持つ「屋敷」が存在するのに対し、水入地区周辺では「屋敷」は未確認であることなどの相違を指摘できる。こういったことから、これらの場所に居住する「下級役人」にも、さらに階級差があったことが推定される。

西側の千刈田地区では「国守館」が造営され、多賀前地区では「国司館」が存在する。南北大路の南側への延長や、南北大路東側の遺構の増大と併せ、多賀城南前面の沖積地全体に町並みが拡大している。また、丘陵上の高崎遺跡や小沢原遺跡、西沢遺跡でも掘立柱建物跡や竪穴住居跡、工房などが発見されている。

なお、東西大路沿いの多賀前地区などでは、10世紀後半頃まで道路が維持され、区画内にも人々が生活しているが、本地区では10世紀前半頃には、道路や屋敷は廃絶している。他地区でも10世紀中頃を境に本地区と同様の傾向が窺え、この頃から町並みは急速に縮小したものと考えられる。

6　中世

「古い屋敷跡」と「新しい屋敷跡」、「伏石地区の屋敷跡」が検出された。ほかに、「北の屋敷跡」が県道調査区にある（後藤他；1994）。

「古い屋敷跡」は12世紀に、「新しい屋敷跡」と「伏石地区の屋敷跡」、「北の屋敷跡」は16世紀に同時に存在していたと考えられる。また、「新しい屋敷跡」には6時期の変遷があり、敷地内には、一貫して、主屋とそれを囲むように附属建物が存在していることが明らかになった。

「新しい屋敷跡」と「北の屋敷跡」は、大規模でそれぞれの地区の中心であり、「伏石地区の屋敷跡」は小規模でこれらよりは格下と考えられる。

こういった屋敷は、西側の新田遺跡から連続して確認されており、屋敷の居住者はいずれも留守氏と関連のある者と考えられている（赤澤；1990、千葉；1992ｂ）。

7　近世

溝跡と墓が検出され、試掘調査時に（Ｄ区東側）、溝跡や水田、木簡などが発見されている（鈴木；1988）。出土遺物は多くないが、いずれも江戸後期のものである。この時期の建物跡は発見されていない。こういったことから、本地区では、この時期は居住域ではなく生産域であったと考えられる。なお、明治24年作製の地図には、本地区には人家はなく、八幡社があるだけである。

この時期の町屋は、東町浦地区（高倉；1981）や町地区（未報告）で発見されている。

〈引用・参考文献〉

相沢清利　1990　「山王遺跡ー第8次発掘調査報告書」『多賀城市文化財調査報告書』第22集　多賀城市埋蔵文化財調査センター

赤澤靖章　1990　「山王遺跡」『宮城県文化財調査報告書』第138集　宮城県教育委員会・多賀城市教育委員会・建設省東北地方建設局

吾妻俊典・菅原弘樹　1994　「山王遺跡」『宮城県文化財調査報告書』第161集　宮城県教育委員会・建設省東北地方建設局

天野順陽　1996　「下草古城跡ー下草古城跡ほか」『宮城県文化財調査報告書』第169集　宮城県教育委員会

荒井健治　1995　「国府周辺に広がる集落遺構の性格についてー武蔵国庁周辺の状況をもってー」『国立歴史民俗博物館研究報告』第63集　共同研究「都市空間の形成過程についての研究」　国立歴史民俗博物館

飯田充晴　1994　「道路築造方法について」『古代交通研究』第2号

石川俊英　1990　「市川橋遺跡調査報告書ー平成元年度発掘調査報告書」『多賀城市文化財調査報告書』第21集　多賀城市埋蔵文化財調査センター

石川俊英・相沢清利　1991　「山王遺跡ー第9次発掘調査報告書ー」『多賀城市文化財調査報告書』第26集　多賀城市埋蔵文化財調査センター

石川俊英・相沢清利　1992　「山王遺跡ほか」『多賀城市文化財調査報告書』第29集　多賀城市埋蔵文化財調査センター

石川俊英　1995　「多賀城市新田遺跡（第16次発掘調査）」『平成7年度　宮城県遺跡調査成果発表会発表要旨』

石田明夫　1992　「会津・大戸古窯跡群（大戸窯）
『東日本における古代・中世窯業の諸問題』大戸古窯群検討会・会津若松市教育委員会

石田明夫　1993　「会津大戸古窯ー大戸古窯跡群発掘調査報告書ー」
『会津若松市文化財調査報告書』第32集　会津若松市教育委員会

石田明夫　1994　『会津大戸古窯ー大戸古窯跡群発掘調査報告書ー遺物編
『会津若松市文化財調査報告書』第37集　会津若松市教育委員会

石松好雄　1983　「太宰府庁域考」『太宰府古文化論叢』上巻

石本敬・相沢清利　1986　「山王遺跡ー昭和60年度発掘調査報告書Ｉー」『多賀城市文化財調査報告書』第9集　多賀城市教育委員会

石本敬・千葉孝弥　1991　「山王遺跡ー第10次発掘調査概報ー」『多賀城市文化財調査報告書』第27集　多賀城市埋蔵文化財調査センター・建設省東北地方建設局

石本敬・相沢清利他　1993　「山王遺跡ほか」『多賀城市文化財調査報告書』第34集　多賀城市埋蔵文化財調査センター

石本　弘　1992　「大戸窯と福島県の諸窯ー特に須恵器坏の形態・技法の分析を通してー」
『東日本における古代・中世窯業の諸問題』大戸古窯群検討会・会津若松市教育委員会

五十川伸矢　1996　「古代・中世の京都の墓」『国立歴史民俗博物館研究報告』第68集　共同研究「死者儀礼と死の観念」　国立歴史民俗博物館

井上和人　1988　「都城の定型化」『特集古代の都城ー季刊考古学』第22号

今泉隆雄　1988　「多賀城の時代」『図説　宮城県の歴史』　河出書房新社

岩淵康治・田中則和　1976　「安久東遺跡発掘調査概報」『仙台市文化財調査報告書』第10集　仙台市教育委員会

氏家和典　1957　「東北土師器の型式分類とその編年」『歴史』第14輯　東北史学会

宇野隆夫　1982　「井戸考」『史林』第65巻第5号

近江俊秀　1995　「道路遺構の構造」『古代文化』第47巻第4号　古代學協會

小笠原好彦　1996　「古代の家族」『家族と住まい』考古学による日本歴史15　雄山閣出版

小笠原好彦　1989　「古墳時代の竪穴住居集落にみる単位集団の移動」『国立歴史民族博物館研究報告』第22集　共同研究「古代の集落」　国立歴史民族博物館

岡田茂弘・桑原滋郎　1974　「多賀城周辺における古代坏形土器の変遷」『研究紀要Ⅰ』宮城県多賀城跡調査研究所
岡田康博他　1988　「杢沢遺跡」『青森県文化財調査報告書』第130集　青森県教育委員会
小川淳一　1995　「王ノ壇遺跡」『仙台市史』特別編2　仙台市
加藤道男　1989　「宮城県における土師器研究の現状」『考古学論叢Ⅱ』　芹沢長介先生還暦記念文集刊行会
加藤道男　1993　「宮城県の土器様相」『北日本における律令期の土器様相』
金森安孝　1984　「郡山遺跡Ⅳ－昭和58年度発掘調査概報－」『仙台市文化財調査報告書』第64集　仙台市教育委員会
菊地逸夫　1991　「伊治城跡」『築館町文化財調査報告書』第4集　築館町教育委員会
菊地逸夫　1995　「伊治城跡」『築館町文化財調査報告書』第8集　築館町教育委員会
木下　良　1995　「日本の古代道路」『古代文化』第47巻第4号　古代學協會
木下良編　1995　『古代道路』　吉川弘文館
木村敬蔵　1988　「条坊制と条里制」『特集古代の都城－季刊考古学』第22号
木村浩二　1982　「郡山遺跡Ⅱ」『仙台市文化財調査報告書』第38集　仙台市教育委員会
木村浩二・長島栄一　1983　「郡山遺跡Ⅲ－昭和57年度発掘調査概報－」『仙台市文化財調査報告書』第46集　仙台市教育委員会
木村浩二他　1984　「郡山遺跡Ⅳ」『仙台市文化財調査報告書』第64集　仙台市教育委員会
木本元治他　1992　「善光寺遺跡－国道113号バイパス遺跡調査報告Ⅳ－」『福島県文化財調査報告書』第192集
工藤哲司　1982　「栗遺跡」『仙台市文化財調査報告書』第43集　仙台市教育委員会
黒崎　直　1976　「平城宮の井戸」『月間文化財』1976年4月号
小池伸彦　1996　「井戸と釣瓶」『家族と住まい』考古学による日本歴史15　雄山閣出版
古泉　弘　1987　『江戸の考古学』　考古学ライブラリー48　ニューサイエンス社
後藤勝彦　1991　「縄文時代の多賀城」『多賀城市史4』考古史料　多賀城市
駒見和夫　1992　「井戸をめぐる祭祀」『考古学雑誌』第77巻第4号　日本考古學會
斎藤孝正　1989　「灰釉陶器の研究Ⅰ」『名古屋大学文学部研究論集104　史学35』名古屋大学文学部
斎藤孝正　1994　「東海地方の施釉陶器生産－猿投窯を中心に－」『古代の土器研究　律令的土器様式の西東3－施釉陶器の生産と流通－』　古代の土器研究会
狭川真一　1990　「太宰府条坊の復原」『条里研究』第6号
狭川真一　1994　「太宰府における街区の成立と展開」　第20回古代城柵官衙遺跡検討会
佐藤敏幸　1995　「赤井遺跡－牡鹿柵・郡衙推定地－」『矢本町文化財調査報告書』第3集　矢本町教育委員会
佐藤則之・菅原弘樹　1991　「山王遺跡」『宮城県文化財調査報告書』第141集　宮城県教育委員会・建設省東北地方建設局
佐藤憲幸　1993　「多賀城市山王遺跡」『平成5年度　宮城県遺跡調査成果発表会発表要旨』
白鳥良一　1980　「多賀城跡出土土器の変遷」『研究紀要Ⅶ』　宮城県多賀城跡調査研究所
白鳥良一　1981　「第37次調査」『多賀城跡－宮城県多賀城跡調査研究年報』1980　宮城県多賀城跡調査研究所
白鳥良一　1982　「土器」『多賀城跡　政庁跡本文編』　宮城県多賀城跡調査研究所
白鳥良一・古川一明　1991　「土師器の編年　8 東北」『古墳時代の研究－6 土師器と須恵器』　雄山閣出版
菅原弘樹　1992　「山王遺跡」『宮城県文化財調査報告書』第147集　宮城県教育委員会・建設省東北地方建設局
菅原弘樹　1993　「多賀城周辺の様子」『日本歴史』1993年9月号
菅原弘樹　1994　「方格地割りと遺跡の性格」『古代都市の成立とその様相－第20回古代城柵官衙遺跡検討会資料』　古代城柵官衙遺跡検討会
菅原弘樹・佐藤憲幸他　1996　「山王遺跡Ⅳ－多賀前地区考察編－」『宮城県文化財調査報告書』第171集　宮城県教育委員会・建設省東北地方建設局
鈴木孝行　1995　「山王遺跡・市川橋遺跡」『多賀城市文化財調査報告書』第38集　多賀城市埋蔵文化財調査センター
鈴木真一郎　1988　「山王遺跡・市川橋遺跡の発掘調査について」『昭和63年宮城県内発掘調査成果発表会発表要旨』
高倉敏明　1980　「館前遺跡－昭和54年度発掘調査報告－」『多賀城市文化財調査報告書』第1集　多賀城市教育委員

会
高倉敏明他　1981　「山王・高崎遺跡発掘調査概報」『多賀城市文化財調査報告書』第2集　多賀城市教育委員会
高倉敏明他　1982　「高崎・市川橋遺跡調査報告ー昭和56年度発掘調査報告書ー」『多賀城市文化財調査報告書』第3集　多賀城市教育委員会
高倉敏明・滝口卓・石本敬　1983　「市川橋遺跡調査報告書ー昭和57年度発掘調査報告書ー」『多賀城市文化財調査報告書』第4集　多賀城市教育委員会
高倉敏明他　1984　「市川橋遺跡調査報告書ー昭和58年度発掘調査報告書ー」『多賀城市文化財調査報告書』第5集　多賀城市教育委員会
高倉敏明・滝口卓・相沢清利　1985　「市川橋遺跡ー昭和59年度発掘調査報告書ー」『多賀城市文化財調査報告書』第8集　多賀城市教育委員会
高倉敏明　1991　「新田遺跡」『多賀城市史4』考古資料　多賀城市
高倉敏明・石川俊英・千葉孝弥　1986　「山王遺跡調査報告書ー昭和60年度発掘調査報告書Ⅱー」『多賀城市文化財調査報告書』第8集　多賀城市教育委員会
高野芳宏　1974　「第22次調査」『多賀城跡ー宮城県多賀城跡調査研究所年報』1980　宮城県多賀城跡調査研究所
田中則和　1992　「川沿いの屋敷群」『みちのくの都多賀城・松島』よみがえる中世7　平凡社
田辺昭三　1966　『陶邑古窯跡群』　平安学園考古学研究クラブ
田辺昭三　1981　『須恵器大成』　角川書店
谷川章雄　1991　「江戸の墓地の発掘ー身分・階層の表徴としての墓ー」『甦る江戸』江戸遺跡研究会　新人物往来社
千葉孝弥　1990　「新田遺跡」『多賀城市文化財調査報告書』第23集　多賀城市埋蔵文化財調査センター
千葉孝弥　1992ａ　「山王遺跡ー第12次発掘調査概報ー」『多賀城市文化財調査報告書』第30集　多賀城市埋蔵文化財調査センター・建設省東北地方建設局
千葉孝弥　1992ｂ　「留守氏の館と市のにぎわい」『みちのくの都多賀城・松島』よみがえる中世7　平凡社
千葉孝弥　1993　「多賀城市市川橋遺跡」『平成5年度　宮城県遺跡調査成果発表会発表要旨』
千葉孝弥　1994ａ　「多賀城市周辺の道路遺構ー特集　古代の道と考古学」『季刊　考古学』第46号
千葉孝弥　1994ｂ　「城外の道路跡と方格地割り」『古代都市の成立とその様相ー第20回古代城柵官衙遺跡検討会資料』古代城柵官衙遺跡検討会
千葉孝弥　1994ｃ　「市川橋遺跡第11次調査」『多賀城市埋蔵文化財調査センター年報』第7号　多賀城市埋蔵文化財調査センター
千葉孝弥　1995ａ　「高崎遺跡第11次調査報告書」『多賀城市文化財調査報告書』第37集　多賀城市教育委員会
千葉孝弥　1995ｂ　「多賀城城外の道路と方格地割り」『古代文化』　第47巻第4号　古代學協會
千葉孝弥・菊池豊・鈴木孝行他　1997　「山王遺跡　Ⅰ」『多賀城市文化財調査報告書』第45集　多賀城市埋蔵文化財調査センター・建設省東北地方建設局
土肥　孝　1983　「日本古代における犠牲馬」『文化財論叢』　同朋社
土岐山武　1980　「安久東遺跡ー東北新幹線関係遺跡調査報告書Ⅳー」『宮城県文化財調査報告書』第72集　宮城県教育委員会・日本国有鉄道仙台新幹線工事局
西中川駿・本田道輝・松元光春　1991　『古代遺跡出土骨からみたわが国の牛、馬の渡来時期とその経路に関する研究』鹿児島大学農学部獣医学科
丹羽茂・小野寺祥一郎・阿部博志　1981　「清水遺跡ー東北新幹線関係遺跡調査報告書Ⅴ」『宮城県文化財調査報告書』第77集　宮城県教育委員会・日本国有鉄道仙台新幹線工事局
原口正三　1977　「古代・中世の集落」『考古学研究』第23巻第4号
早川　泉　1993　「古代道路遺構に残された圧痕」『東京考古』第9号
早川英紀・星　清　1995　「山王遺跡（八幡地区）」『平成7年度　宮城県遺跡調査成果発表会発表要旨』
早坂春一・阿部恵　1980　「西手取・手取遺跡ー東北自動車道遺跡調査報告書Ⅱ」『宮城県文化財調査報告書』第63集　宮城県教育委員会・日本道路公団

古川一郎　1986　「本屋敷遺跡ー東北横断自動車道遺跡調査報告書Ⅰ」『宮城県文化財調査報告書』第120集　宮城県教育委員会・日本道路公団
古川一明　1987　「本屋敷遺跡ー東北横断自動車道遺跡調査報告書Ⅱ」『宮城県文化財調査報告書』第121集　宮城県教育委員会・日本道路公団
古川一明　1994　「日の出山窯跡群ー詳細分布調査とC地点西部の発掘調査ー」『色麻町文化財調査報告書』第1集　色麻町教育委員会
藤沼邦彦　1991　「弥生時代の多賀城」、「古墳時代の多賀城」『多賀城市史4』考古史料　多賀城市
前川　要　1989ｂ　「平成時代における施釉陶磁器の様式論的研究（上・下）」『古代文化』第41巻第8・10号
前川　要　1996　「中世の家族と住居」『家族と住まい』考古学による日本歴史15　雄山閣出版
真山　悟　1981　「東山遺跡ー東北自動道遺跡調査報告書Ⅴー」『宮城県文化財調査報告書』第81集　宮城県教育委員会・日本道路公団
真山　悟　1992　「多賀城跡第60次調査」『宮城県多賀城跡調査研究所年報1991』　宮城県多賀城跡調査研究所
水野正好　1981　「鎮井祭の周辺」『奈良大学紀要』第10号
南　孝雄　1994　「平安京掘立柱建物の特性」『研究紀要』第1号　京都市埋蔵文化財研究所
宮本良二郎　1996　「竪穴住居の復元」『家族と住まい』考古学による日本歴史15　雄山閣出版
宮城県教育委員会・多賀城町　1960　『多賀城跡調査報告Ⅰー多賀城廃寺跡ー』
宮城県教育委員会他　1993　「山王遺跡ー多賀前地区第1次調査ー」『宮城県文化財調査報告書』第153集
宮城県多賀城跡調査研究所・宮城県教育委員会　1973　「第21次調査」『多賀城跡ー昭和48年度発掘調査概報ー』宮城県多賀城跡調査研究所年報1973
宮城県多賀城跡調査研究所・宮城県教育委員会　1982　『多賀城跡ー政庁跡本文編ー』
村田晃一　1992　「多賀城周辺における奈良・平安時代の須恵器生産」『東日本における古代・中世窯業の諸問題』
村田晃一　1994ａ　「土器からみた官衙の終末」『古代官衙の終末をめぐる諸問題』　第3回東日本埋蔵文化財研究会資料
村田晃一　1994ｂ　「藤田新田遺跡」『宮城県文化財調査報告書』第163集　宮城県教育委長会
村田晃一　1995　「宮城郡における10世紀前後の土器」『福島考古第36号』
森　貢喜　1982　「水入遺跡発掘調査報告書」『宮城県文化財調査報告書』第84集　宮城県教育委員会・日本電信電話公社東北電気通信局
森　貢喜　1983　「佐内屋敷遺跡ー東北自動車道遺跡調査報告書Ⅷ」『宮城県文化財調査報告書』第93集　宮城県教育委員会・日本道路公団
山中　章　1992　「古代条坊制論」『考古学研究』第38巻第4号
柳沢和明　1992　「第61次調査」『宮城県多賀城跡調査研究所年報』1991　宮城県多賀城跡調査研究所
柳沢和明　1993　「多賀城跡第62次調査」『宮城県多賀城跡調査研究所年報1992』　宮城県多賀城跡調査研究所
柳沢和明　1994　「東北の施薬陶器ー陸奥を中心にー」『古代の土器研究　律令的土器様式の西・東3ー施釉陶器の生産と流通ー』　古代の土器研究会
山本　博　1970　『井戸の研究』　綜芸社

付記　文 字 史 料

1．墨書土器と刻書土器

A　墨書土器

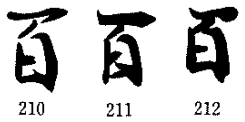
131点出土した。そのうち判読できたものは第6表にかかげている。まず、地区毎の出土数や墨書の内容をみると、八幡地区では101点が出土している。なかでも北2ａ道路とそれに面した区からの出土が顕著であり、北2ａ道路側溝から39点、それに面した区から25点が出土している。書かれた内容は32種ある。「厨」のような施設名、「丈」「伴」など人名、「万」「廿」「十」「○」などの数字や記号のようにある程度意味のわかるものもあるが、多くは意味を限定できない「山本」「申万」「富田」など複数字の墨書や「財」「又」「㊥」「器」「太」「得」など1字のみの墨書である。また、各種とも出土量は少なく、多いものでも「財」が4点、「又」と「㊥」が各3点あるにすぎない。一方、大部分が北2西4区にあたる伏石地区からの出土は30点と少なく、そのうち12点はＳＥ3038に集中している。書かれた内容は8種で、「曰理」のような郡あるいは郷名、「坏」のような物品名、「百」「十」「一」などの数字のほか、意味を限定できない「林」「大」「木」など1字墨書がみられる。このうち複数が出土したのは「百」と「林」のみで、「林」の1点以外はすべてＳＥ3038からの出土である。

次に、墨書土器の器種、及び記入部位や方向については八幡・伏石地区を合わせて第7表にまとめた。ほとんどが土師器と須恵器の坏に墨書されている。土師器坏はロクロ調整のものが多く、底部切離し後に再調整が施されるものが比較的多い。須恵器坏の底部切離しは回転ヘラ切りのものと回転糸切りのものとが半々程度みられ、いずれも切離し後に再調整が施されるものは少ない。墨書は9世紀代の土師器・須恵器坏に多く書かれたといえる。墨書が記入される部位は体部が7割をしめ、その方向は半数以上が正位である。

さて、上記の事柄をふまえて若干の考察をする。その場合、多賀城南面から出土した墨書土器の分布・内容については次のような特徴があることに注意したい。すなわち、東西大路周辺の地区に濃密に分布しており他の地区では分布が希薄であること、いくつかの墨書が特有の分布をもつこと、意味の限定できない1字墨書が多数でありその種類が多種類に及ぶこと、少数ではあるが官衙に関連するとみられる墨書もあることなど（吉野；1996）である。これらの特徴に留意しながら、八幡・伏石地区の墨書土器について検討する。まず、八幡地区101点、伏石地区30点という出土数は決して少ない数ではないが、多賀城南面ではそれほどの数量ではない。南東に隣接する多賀前地区の東西大路とそれに面した区から900点以上の墨書土器が出土していること（吉野；1996）（註1）に比すれば少数である。むしろ、八幡・伏石地区の出土数は多賀前地区の東西大路から離れた区における100点あまりという数に近い。八幡・伏石地区もともに東西大路から離れた場所にある。したがって、その出土数は東西大路から離れた場所における墨書土器の分布の希薄さを現出しているといえる。

次に多賀城南面ではいくつかの墨書が特有の分布をもつこと関してだが、八幡・伏石地区の墨書土器は各種とも出土量が少なく、考察は難しい。しかし、八幡地区の「財」と「㊥」、伏石地区の「百」

と「林」は多少の検討が可能と思われる。「財」は4点、「㊥」は3点にすぎないが、市調査区でも出土しており（註2）、他の墨書より明らかに多いとみられる。また、多賀城南面での類例は市川橋遺跡に「財」が1点あるのみである（註3）。したがって、「財」と「㊥」は市調査区のものも含めてやや広めの分布をもつものの、今のところ八幡地区に特有の墨書と思われる。



第422図　墨書「百」の書体

一方、伏石地区の「百」はＳＥ3038の井戸側内底面から一括出土した土器のうち、3点に書かれたものである。出土遺構がＳＥ3038のみなので、同地区に特有のものであるかは不明とせざるをえない。ただし、「百」にはほかに注目される点があるのでそのことを記しておきたい。「百」はすべて土師器坏の体部に横位で書かれている。書体（第422図）も大きさや全体の形、4画目の入り方や終わりのはね方、5画目の短さなど随所に類似点がみられ、同一人物の筆と断定できる。「百」はほどほどに大きい数であり、一括出土した土器には吉祥句と言われる「大」の墨書土器もあることから、「百」も同様に吉祥の意を示すものと思われる。こうした吉祥の意の墨書土器を含む土器が側内底面から一括出土していることからみて、ＳＥ3038では井戸に関わる何らかの祭祀が行なわれた可能性が考えられる。

つづいて「林」は5点ある。ＳＥ3038からの出土が多いが、ほとんどが小破片で、出土層位も側内底面に限定されないので「百」と同一のとらえ方はできない。多賀城南面での類例は多賀前地区の伏石地区にほど近い場所に1点があるのみである。したがって、伏石地区に5点あることは評価すべきであり、「林」は今のところ同地区に特有の墨書といえる。ＳＥ3038の裏込めからも出土しているので、井戸構築以前にその周辺で使用されたものとみられる。

以上より、八幡地区の「財」と伏石地区の「林」は今のところそれぞれの地区に特有のものとみられ、多賀城南面でそうした特徴を持つ墨書の1つに加えることができると思われる。

最後に墨書の種類に関してだが、八幡・伏石地区の墨書の種類は合わせて40種である。出土総数が131点であることからみると、多種類であるといえる。しかも、主体をしめるのはやはり意味を十分に特定できない1字のみの墨書である。しかし、一方では「厨」のように施設をあらわすものや「曰理」といったやや離れた地域の地名を書いたものもあり、多賀城の城下であるがゆえに存在すると考えられる墨書もある。したがって、その点についても八幡・伏石地区の墨書は多賀城南面の墨書土器の特徴と適合するものといえる。以上のような状況からみて、八幡・伏石地区の墨書土器はこれまでに報告された多賀城南面の墨書土器の特徴と適合し、それを補充するものととらえられる。

Ｂ　刻書土器

焼成前にヘラ状の工具で刻まれたヘラ書土器と焼成後に釘状の工具で刻まれた線刻土器がある。

ア　ヘラ書土器

182点出土した。それらのうち判読したものは第8表にかかげている。地区毎にみると八幡地区が87点、伏石地区が95点である。両地区ともヘラ書土器が特に集中する場所や遺構はみられない。書かれた内容は両地区とも十字状のヘラ書と一本線のヘラ書が多い。他には「七」「十」「卌」などの

第6表　主要墨書土器一覧表

遺構・層位	墨書内容	器種	土器分類	記入部位	方向	登録	図版	写真図版
SD107	太	土師器高台椀		体部	正位	101	18－2	
SD137	□大ヵ□	土師器坏	B1	底部		8		
SK143 1層	伴	須恵器高台坏		底部		9	111－9	29－3
SD163	□□万ヵ	土師器坏		体部	正位	11	14－8	29－16
SD192	右	土師器坏		体部	正位	15	15－5	29－20
SD192	玖ヵ	土師器坏		体部	正位	16	15－6	
SD192	（習書）ヵ	土師器坏	B4	体部	不明	17		
SK220	厨	土師器坏	B2	底部		18	145－9	29－1
SE349 1層曲物内	尺	須恵器甕		体部	正位	20		29－24
SD361 1層	万ヵ	土師器坏	B4	体部	倒位	23	26－6	
SD361 2層	⊙	土師器坏	B5	体部	正位	25	26－5	29－7
SD361 3層	得	土師器坏	B2	体部	正位	24	26－4	29－29
SD361	太	須恵器坏	4	体部	正位	22	26－9	29－26
SD362 2層	又上	土師器坏	B4	体部	正位	32	29－7	29－13
SD362 2層	又	土師器坏	B4	体部	正位	89	29－8	
SD362	㊥ヵ	須恵器坏		体部	倒位	26		
SD362	㊥ヵ	須恵器坏		体部	正位	27		
SD367 1層	廿	須恵器坏	3		底部	36	28－7	29－4
SD367	力	土師器坏		体部	正位	35	28－6	29－30
SD367	□山ヵ本	土師器坏		体部	横位	37	28－8	29－10
SD367	財…体・底	須恵器坏	4	体・底部	正位	38	28－11	
SD379	原	土師器坏	B2	底部		42	32－5	29－22
SE413 3層	㊥	須恵器坏	4	体部	正位	48	187－2	29－19
SE413 4層	定	土師器坏	B1	底部		49	187－1	29－27
SD425 2層	富田…底	須恵器高台坏		底部		55	31－12	29－12
SD451	天ヵ	須恵器坏	4	体部	正位	95		29－28
SE467B	又	須恵器坏	3	底部		57	189－2	29－17
SD562	万	土師器坏	B4	体部	正位	70	31－3	
SD562	大□吉ヵ	土師器坏	B4	底部		58	31－4	29－9
SD562	大□吉ヵ	土師器坏	B4	底部		59		
SD562	⌀、⌀、□	土師器坏	B1	体部	正位	90	31－2	29－8
SD562	□□丈部ヵ	土師器坏		体部	正位	99	31－5	29－2
SE569 掘方	財…体・底	須恵器坏	4	体・底部	正位	60	193－1	29－14
SK677	申万	須恵器坏	2	底部		96	236－4	29－11
SX750 深掘	又	土師器坏	B2	体部	正位	65	9－11	29－18
SX750 深掘	○	須恵器坏	3	底部		66	9－4	29－6
SX750 深掘	王ヵ	須恵器坏	4	体部	正位	98		
SD752 深掘	十	須恵器坏		体部	倒位	68	8－5	29－5
SD860 1・2層	至	土師器坏	B2	底部		74	6－2	29－23
SD861 3層	器	土師器坏	A	体部	横位	75	8－1	29－21
SD863 2層	丈	土師器坏	B1	体部	正位	80	7－2	29－25
表土	財…体・底	須恵器坏	3	体・底部	倒位	63	279－6	29－15
表土	財	須恵器坏	1	底部		100	279－7	
SD3026 1層	十	土師器坏	B2	底部		201	353－4	29－36
SE3038 掘方	林	須恵器坏	3	体部	正位	206	341－16	29－37
SE3038 掘方	林ヵ	須恵器坏		体部	正位	207	341－15	29－38
SE3038 底面	林ヵ	須恵器坏		体部	正位	208	341－6	
SE3038 底面	林ヵ	土師器坏		体部	正位	209	341－12	29－39
SE3038 底面	百	土師器坏	B1	体部	正位	210	341－4	29－33
SE3038 底面	大	土師器坏	B1	底部		211	341－3	29－40
SE3038 底面	百	土師器坏	B2	体部	横位	212	341－2	29－34
SE3038 底面	百	土師器坏	B2	体部	横位	213	341－1	29－35
SK3095 1層	一	土師器坏		体部	横位	215	403－6	
SK3108 1層	木	土師器坏		体部	正位	216	392－1	
SK3727 1層	林ヵ	須恵器坏		体部	正位	226	400－19	
SK3727 2層	坏	須恵器坏	2	底部		227	402－15	29－32
基本層位 II層	曰理	須恵器坏	1	底部		230	407－2	29－31

※1字墨書について、□玖ヵとすべきものは、玖ヵと表現した。
※土器の分類は土師器坏・須恵器坏について、ロクロの使用と底部切離し・再調整のあり方を中心に以下のように示した。
A…非ロクロ調整　B…ロクロ調整
1…回転ヘラケズリ　2…手持ちヘラケズリ　3…ヘラ切り無調整
4…糸切り無調整　5…その他・不明

第7表　墨書土器器種等集計表

		底部	体部 正位	体部 倒位	体部 横位	体部 他	体部 不明	内面	計
土師器	坏	14(9)	19(16)	7(1)	7(5)	1	19(1)		67(32)
	高台坏						1		1
	高台椀		1(1)						1(1)
	甕						1	1	2
須恵器	坏	18(7)	16(9)	4(2)		4(3)	11		53(21)
	高台坏	3(2)							3(2)
	甕		1(1)					1	1(1)
	蓋						1	1	2
計		35(18)	37(27)	11(3)	7(5)	5(3)	33(1)	3	131(57)

※（　）内は一覧表に載せたものの数を示す

第8表　主要ヘラ書土器一覧表

遺構・層位	墨書内容	器種	土器分類	記入部位	方向	登録	図版	写真図版
SD20	人ヵ	須恵器坏	1	底部		25		
SD20 1層	(十字)ヵ	須恵器坏	3	底部		26		
SD31	(二本線)	須恵器坏	3	底部		27	75－7	30－9
SK49 上層	(一本線)	土師器坏	B4	底部		28	94－3	30－7
SD88 1層	(十字)ヵ	須恵器坏	3	底部		29		
SD98 1層	(十字)	須恵器坏	3	底部		30	89－3	30－5
SD100 1層	木ヵ	須恵器甕		体部		1	261－2	30－14
SD100 1層	(十字)	土師器坏	A	底部		84	259－1	
SD112 2層	(一本線)ヵ	須恵器坏	3	底部		3		
SD112	(十字)ヵ	土師器坏	A	底部		32		
SD142	(一本線)	須恵器坏	3	底部		73		
SD164	(十字)	土師器甕		底部		85	130－9	
SE217	(十字)	土師器坏	B4	底部		4		
SD359 1層	(十字)ヵ	須恵器坏	3	底部		33		
SD361 2層	(十字)	土師器坏	B4	底部		34		
SD361	(十字)	土師器坏	B5	底部		35		
SD361	(十字)	土師器坏	B4	底部		36		
SD361	(十字)	土師器甕	B4	底部		37		30－6
SD361	(十字)ヵ	土師器坏	B2	底部		38		
SD362	(十字)ヵ	土師器坏	B4	底部		40		
SD367	(十字)	須恵器坏	4	底部		43		
SD367	(一本線)	須恵器坏	3	底部		44	28－9	30－8
SD371	(十字)	土師器坏	A	底部		86	25－2	
SD379 1層	(十字)ヵ	須恵器坏	3	底部		47		
SD379 1層	(十字)	土師器坏	B2	底部		48		
SD383	(一本線)	土師器坏	B4	底部		88	12－1	
SX400	(一本線)ヵ	須恵器高台坏		底部		50		
SD402	(十字)	土師器坏	A	底部		89	199－1	
SK409	(十字)	土師器坏	B4	底部		90	238－1	
SE413 4層	(一本線)ヵ	須恵器坏	3	底部		7		
SD420	(十字)	土師器坏	A	底部		91	264－1	
SD461 3層	(二本線)	須恵器不明		底部		52	209－4	30－10
SI468	(一本線)	土師器坏	不明	底部		55	164－2	
SK490 2層	(十字)	土師器坏	A	底部		57		
SI493	(十字)	須恵器坏	3	底部		92	172－1	
SE505	(十字)	土師器坏	A	底部		93	190－3	
SK516	(十字)	土師器坏	B2	底部		8		
SK650	(十字)	土師器坏	A	底部		94	249－1	
SD800	人	土師器不明	不明	底部		66		30－13
SD832 1層	十	須恵器坏	4	底部		71	7－6	30－2
SD862 2層	(十字)ヵ	土師器坏	不明	底部		72		
SK898	(十字)	須恵器坏	3	底部		95	254－1	
P1232	*	土師器坏	A	内面		20		30－12
炭化物層A 1層	十	須恵器坏	4	底部		74		30－3
基本層位 II層	(十字)	土師器甕	不明	底部		16		
基本層位 II層	(十字)	須恵器高台坏		底部		96	272－2	
基本層位 II層	上	須恵器高台坏		底部		97	272－3	
表土	七	須恵器坏	3	底部		58		30－1
表土	卌	須恵器坏	3	底部		78		30－4
表土	#	須恵器坏	1	底部		17	279－14	30－11
表土	#ヵ	須恵器瓶		底部		98	279－13	
表土	(二本線)	土師器坏	A	底部		99	275－1	
表土	(十字)ヵ	須恵器坏	4	底部		81		
表土	(十字)ヵ	須恵器坏	3	底部		82	279－9	
表土	(十字)ヵ	土師器坏	A	底部		100	275－3	
SD3025 1層	(一本線)	須恵器瓶		底部		203	351－5	
SD3031 1層	(一本線)	土師器坏	B4	底部		204	376－1	
SE3038 3層	(十字)	不明坏	2	底部		205		
SK3042	(十字)	須恵器坏	3	底部		210	403－2	30－16
SK3042	(一本線)	須恵器甕		体部	不明	211	403－3	
SD3055 1層	(十字)ヵ	須恵器坏	3	底部		214	377－2	
SD3055 1層	(二本線)	土師器椀	B2	底部		215	377－1	30－20
SK3056 1層	(一本線)	土師器甕		底部		216	390－2	
SD3075 1層	(十字)ヵ	須恵器坏	3	底部		217	355－3	
SD3097 1層	□	土師器坏	B5	底部		221	356－1	30－22
SK3106	(二本線)	土師器坏	B4	底部		223	403－16	30－21
SK3109 1層	(一本線)	須恵器瓶		底部		224	404－4	30－19
SD3113 1層	(十字)	須恵器坏	3	底部		225		
SD3123 1層	卌	須恵器坏	3	底部		226	358－5	30－15
SD3129 1層	(十字)	須恵器坏	3	底部		228	370－5	
SE3164 掘方	(十字)ヵ	土師器椀	B5	体部	不明	233	344－3	
SD3178 1層	(一本線)	須恵器坏	3	底部		234		
SD3178 2層	(一本線)ヵ	土師器坏	B4	底部		237		
SD3203 2層	□	須恵器甕		体部	不明	240	303－5	
SD3203 3層	(十字)	土師器坏	B4	底部		242	303－1	
SD3303	(十字)	須恵器坏	3	底部		245		
SB3423 抜穴	麻□…体　□…底	須恵器瓶		体・底部	倒位	251	318－6	30-26・27
SK3635 1層	(十字)ヵ	須恵器坏	3	底部		258	406－2	

SK3637 1層	(一本線) ヵ	須恵器坏	3	底部		259	399－3	
SK3637 1層	□	土師器坏		底部		260	399－2	30－24
SK3640 1層	(十字) ヵ	須恵器坏	3	底部		261		
SK3670 1層	(十字)	須恵器坏	3	底部		264	406－7	
SK3727 1層	土ヵ	須恵器坏	2	底部		265	400－20	
SK3727 1層	(十字) ヵ	土師器坏	B5	底部		266	402－6	
SK3727 1層	(十字)	須恵器坏	2	底部		267	400－17	
SK3727 1層	(十字)	須恵器坏	2	底部		268	400－22	30－17
SK3727 1層	(十字)	土師器坏	B3	底部		269	400－6	
SK3727 2層	(十字)	須恵器坏	2	底部		273	402－13	
基本層位 II層	(十字)	須恵器坏	3	底部		305	407－1	
表土	(十字) ヵ	須恵器坏	4	底部		285		
表土	(十字) ヵ	土師器坏	B5	底部		286		
表土	(十字) ヵ	土師器坏	B5	底部		289		
表土	(十字) ヵ	須恵器坏	3	底部		293		
表土	(十字)	須恵器坏	4	底部		295		30－18
表土	人	須恵器坏	3	底部		296		30－25
表土	＊	須恵器坏	1	底部		297		30－22
表土	(一本線) ヵ	須恵器甕		底部		300		

※表記方法は第6表に准じる。なお、一・二本線及び十字状のヘラ書は（ ）をつけて示した。

第9表　ヘラ書土器器種等集計表

		底部	体部 正位	体部 倒位	体部 横位	体部 他	体部 不明	内面	計
土師器	坏	47(33)						1(1)	48(34)
	椀	1(1)					1(1)		2(2)
	甕	7(4)					1		8(4)
	不明	2(1)					1		3(1)
須恵器	坏	93(44)					1		94(44)
	高台坏	6(3)							6(3)
	甕	1(1)	1				5(3)		7(4)
	壺・瓶	6(3)				1(1)			7(4)
	不明	6(1)					1		7(1)
計		169(91)	1			1(1)	10(4)	1(1)	182(97)

※（ ）内は一覧表に載せたものの数を示す

数字や「#」のような記号、「人」「木」「上」「土」といった意味を限定できないヘラ書などがあるが、各種とも出土数は少ない。ヘラ書土器の器種、及び記入部位や方向については両地区を合わせて第9表にまとめた。須恵器の坏が多く、土師器の坏がそれにつづく。どちらも墨書土器と同様9世紀代の坏が主体をしめる。記入部位は底部が圧倒的に多い。

ところで、両地区でのヘラ書土器の様相は、南東に隣接する多賀前地区の様相と大差がない。数量的には多賀前地区の各地区より若干少ない程度であり、墨書土器にみられるような偏差はない。また、特に集中する場所や遺構もないこと、内容的にも十字状のヘラ書と一本線のヘラ書が多いことなど、同じ様相を呈している。以上のような状況からみて、土器に記されたヘラ書は、本遺跡において積極的な意味を見いだすのは困難である。むしろ、焼成前に記されたものであることからすると、生産地で意味をなすものと思われる。

イ　線刻土器

八幡地区から10点、伏石地区から11点の合計21点が出土した。それらをまとめたものが第10表である。数量が少ないため分布状況を言及することはできないが、隣接する多賀前地区の出土数（14点）より多いことが注意される。書かれた内容は十字状の線刻が目立つ。他には「七十」「#」などの数字や記号、「田」「林」のような意味を限定できないものなどがある。「林」は伏石地区出土であり、同地区では墨書土器の「林」も複数出土していることが注目される。器種については土師器坏が多く、須恵器坏がそれにつづく。土師器坏にはロクロ調整でないものも7点ほどある。また、須恵器坏には回

転糸切りのものがみられず、全体的に墨書土器よりもやや古い様相を呈している。記入部位は底部に記されたものが多いが、内面に記入されたものも比較的多い特徴がある。内面に線刻のある土器はいずれも内黒の土師器であるが、それは内黒の土師器に線刻をする場合、外面より内面に記すほうが目立つことに由来すると思われる。また、記された文字をみると、記号はみられず、すべて記号よりも画数の多い漢字が書かれている。したがって、漢字などやや画数の多い文字を土師器に線刻する場合には、目立つ内面が記入場所として選ばれたものと思われる。

ところで、線刻土器については、墨書土器とほぼ同時期に登場したこと、8世紀半ばから後半には主要な役割を果たしたこと、墨書土器盛行期には墨書と同じ文字を刻線し墨書の補完的機能を果たしたことが指摘されている（平川；1993）。この指摘にもとずき、多賀前地区の線刻土器は墨書の補完的機能を果たしたものととらえられている。八幡・伏石地区の線刻土器についても、数量が少数であること、「林」のように墨書と共通する文字があることからみて同様のことが考えられる。なお、多賀前地区より出土数が多いことについては、土器自体の様相がやや古いことからみて、時期差によるものと思われる。

第10表　線刻土器一覧表

遺構・層位	墨書内容	器種	土器分類	記入部位	方向	登録	図版	写真図版
SD164	七十	土師器坏	A	底部		102	130－6	
SK377	(十字)	須恵器坏	3	底部		45		30－31
SD461	丈	土師器高台坏		底部		103	206－2	
SD503		土師器坏	A	底部		104	224－1	
SD800 1層	#	須恵器坏	3	底部		64		
表土	末ヵ	土師器碗		内面		14		30－28
表土	(十字)	須恵器高台坏		底部		15	279－12	30－32
表土	(十字)	須恵器坏	3	底部		80	279－11	30－33
表土	田	土師器坏	A	内面	正位	77		30－29
表土	#	土師器坏	A	内面		18	279－10	30－30
SX3012	四ヵ	赤焼土器坏		体部	正位	201	366－13	30－35
SE3038 掘方	林	土師器椀		体部	正位	207	341－13	30－34
SK3040 1層	林ヵ	土師器坏	B4	体部	正位	208	387－2	
SD3129 1層	(十字)ヵ	土師器坏	A	内面	不明	227	370－1	
SK3518 掘方	(一本線)及び(十字)	須恵器坏	1	底部		256		
SK3727 2層	(十字)	土師器坏	不明	底部		274	402－6	30－37
基本層位 II層	(十字)ヵ	土師器坏		体部	不明	303		
表土		土師器坏	A	内面	不明	277		
表土	(十字)	土師器坏	B5	体部	不明	290		
表土	#ヵ	土師器坏	B5	底部		294		30－36
表土		土師器坏	B5	内面		298		

＊表記方法は第6表に准じる。

2. 木簡

八幡地区から2点（第423図1、2）、伏石地区から1点（同図3）の合計3点が出土した。それらの出土遺構や形状、法量などについては第423図の表にまとめた。以下では、これらの木簡について内容を中心にみることにする。

1は一面に7文字程の墨書が認められる。文字の大きさは1.5㎝程である。判読されたのは「貴遣」のみであり、内容は不明である。もう一面にも同じ大きさの6文字程の墨書があるが、判読されたのは「古古」のみである。同じ文字が続くことから習書の可能性がある。2は墨のつき具合から文字ではなく、画が描かれているものと思われる。形状が完全でないため、描かれたものの全体像は不明である。

3は伏石地区ＳＥ3038井戸跡の裏込めから出土した題籤軸である。題籤部はほぼ完形で、縦5.8㎝、

横4.6㎝の長方形である。軸は3ヵ所で折れており、下端が失われている。残存する軸の長さは17.8㎝である。文字は題籤の両面にかなり明瞭に認められ、一面が「解文案」、もう一面が「会津郡主政益□継カ」と判読された。書体は行書で、字の大きさは1.0～1.8㎝程である。

さて、「解文」とは公式令に定める公文書の1つで、下級官司が上級官司に上申する文書のことであり、「案」とはその写し（控え）の意である。もう一面にみえる「主政」は郡司の3等官で文書の整理などにあたる官職、「益□継カ」はその名前（註4）とみられる。つまり、一面には巻付けられた文書名、もう一面には文書整理をした人物の職氏名が記されているのであり、本題籤軸には会津郡主政益

番号	遺構・層位	形状	法量(mm)	形式	木取	備考	写真
1	5層	2断片、上下端折れ	(160)×26×11	081	柾目		31-2
2	SK267 4層	複数片、上下端折れ	(236)×(68)×4	081	板目	墨画？	
3	SE3038 掘方	3断片、下端折れ、題籤軸	(289)×46×7	061	割出し		31-1

第423図　木簡見取図

継が整理した解文の写しが巻き取られていたといえる。なお、「解文」の具体的な内容は不明であるが、その「案」が題籤軸を用いて整理されていることからみると、おそらく内容の異なる複数の「解文案」が貼りつがれていたものと思われる。また、本題籤軸の年代は、出土遺構及びその遺物からみて 9 世紀初頭頃と思われる。

ところで、益継が本題籤軸を用いて文書を整理した場所については若干の検討が必要である。その場合、益継の肩書きが、単に「主政」ではなく「会津郡主政」とあることが注意される。「会津郡」も記されたことは、文書整理の場所が会津郡家ではないことを示している。もし、郡家であれば「会津郡」は自明なので記す必要がない。それを明示したのは、益継が郡家以外の場所で整理をしていたからとみられる。とすれば、その場所はこのが本遺跡から出土したこともふまえて、多賀城あるいはその城下に求められる。また、題籤軸については近年、木口木簡との対比から、それが文書処理上の一時的なインデックスであることが指摘されている（加藤；1993）。その場合、題籤軸が文書整理の場から遠く離れたところに廃棄されることはあまり考えにくい（註 5）。さらに、本題籤軸に巻き取られた文書はあくまで「解文」の「案」であり、下野国府跡出土のもの（註 6）のように国府に上申された「解文」そのものではないことも注意される。これらのことも考えあわせると、益継が文書を整理した場所も多賀城内であるよりは、むしろ城下であり、本遺跡の出土遺構の近辺とみるのが妥当と思われる。

以上のことから、本題籤軸は 8 世紀半ば～9 世紀初頭頃に会津郡主政の益継が多賀城下で解文の写しを整理していたことを示すものと考えられる。

さて、本題籤軸におけるこのような理解をふまえると、多賀城南面に広がる都市的な空間（城下）の様相についても、いくつか興味深いことがしられる。その 1 つは、城下にいる人々のなかには、遠く離れた郡の郡司層も含まれていたということである。本題籤軸によると、会津郡主政の益継は、郡司本来の執務場所が郡家であるにもかかわらず、多賀城下にいたとみられる。どの程度の期間かはわからないが、少なくとも文書整理にあたれる程度の期間は城下に滞在していたことがほぼ確実である。したがって、これまでにも城下には国司をはじめとする様方な階層の人々がいたとみられてはきたが、本題籤軸から郡司層の存在が証明されたといえる。

興味深いことは他にもある。それは、城下には益継のような郡司層の者が公務に従事する場所が存在したことである。益継は単に城下に滞在したのではなく、執務をしている。その内容は解文の案の整理であり、これが律令制的な公務の一端に位置付けられるものであることは明らかである。したがって、城下にはこのような執務を行なう場もあったことがしられる。ただし、そこの詳細な性格については解文の異体的内容などが一切不明であることもあり、よくわからない（註 7）。

3．漆紙文書

八幡地区から 5 点、伏石地区から 6 点の合計 11 点が出土した。それらの出土遺構や形状、法量などをまとめたのが第 11 表である。出土遺構に特に集中性はみられない。また小断片が多く、文書の内容がしられるものも少ない。図化できるものは釈文をそえて第 424 図に掲げたが、以下では、これらの

第11表　漆紙文書一覧表

番号	遺構・層位	形状	法量(推定径)	オモテ面の内容	ウルシ面の内容	写真図版
1	SD100　1層	断片　須恵器坏に付着	4.6×5.0cm	——	歴名様文書	31－3
2	SD362・367　1層	断片　土師器坏に付着	7.5×5.0cm	不明	——	
3	SD800	円形　漆器皿に付着	径14～15cm	文書末尾の署名	——	31－5
4	炭化物層E	3/4円形　元は二つ折り	径　13.2cm	——	不明	
5	1層	3/4円形　須恵器坏に付着	径　9.2cm	不明	——	31－4
6	SK3003　3層	断片	4.4×4.4cm	不明(墨界線有)	不明	31－6
7	SK3017　4層	断片	2.0～3.0cm	不明	——	
8	SK3017　底面	断片	3.0～4.0cm	不明	——	
9	SK3047　1層	断片　元は二つ折り	径　13cm以上	——	寛平年間の貢進文書	31－8
10	SK3056　1層	断片	2.3×3.6cm	不明	——	31－7
11	SK3117　2層	断片	2.0×2.7cm	不明	——	

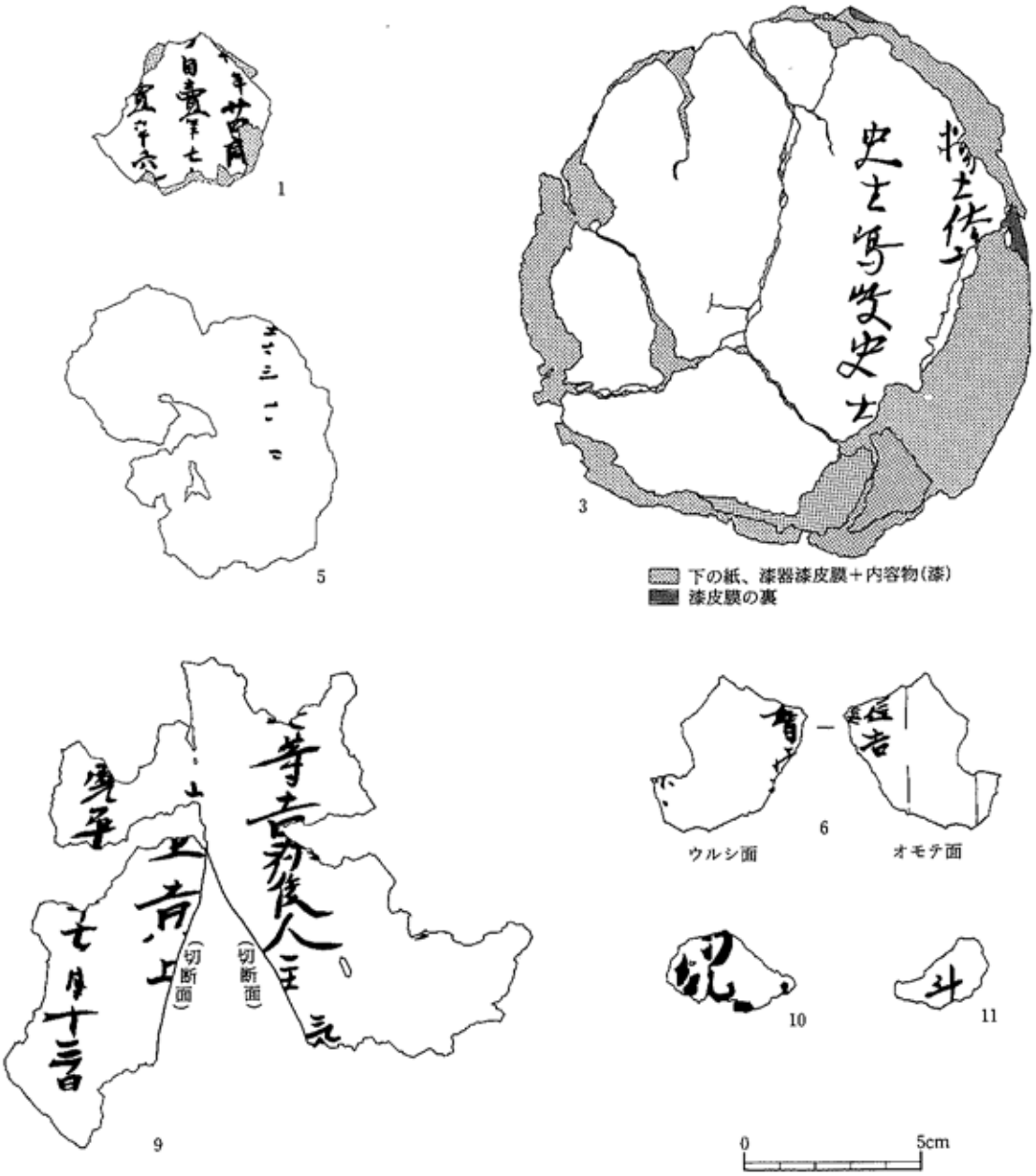
漆紙文書のうち、内容がある程度推測されるものについてみることにする。

1は須恵器坏の内面に付着した状態で出土した小片である。ウルシ面に3行15字程の文字が認められる。書体はやや崩れた真書で、字の大きさは0.6～1.1cm程である。行間は心心で1.3cm程ある。文字の内容は3行とも上半が人名、下半は年令の記載である。これらの書式や内容からみて本文書は歴名様文書の断簡と思われる。ただし、小片であるため戸籍や計帳などといった類別はできない。

3は漆器の皿に付着した状態で出土した。オモテ面の右側にのみ2行10字程の文字が認められ、左側は余白になっている。書体は行書で、字の大きさは0.8～1.5cmである。行間は心心で2.5cm程ある。文字の内容は2行とも上に官職名、下に人名が記されており、博士と史生が名を連ねて記している。この記載と左側の余白という書式からみてこの断簡は文書末尾の署名部分と考えられる。なお、この文書についての詳細な考察は概報でなされている（菅原・鈴木　1992）のでここでは割愛したい。

9は二つ折りの状態で出土した断片である。周囲の破損がひどく、もとの形状はよくわからない。また、二つ折りにした後に下半の一部が切断された状況が認められる。文字はウルシ面で4行21字程が確認された。書体は行書に近い。字の大きさは1.0～1.5cmで、行間は右から3.5・3.2・2.8cmである。記載された内容のうち1行目は不明である。2行目の「吉弥□$_{侯カ}$人主」は人名であり、その上の「七等」は人主の勲位とみられる。また、人名の下にある文字は右にずれていることから人主に関する何らかの割注の可能性がある。3行目には貢進を意味する「貢上」の文言が末尾に記されている。4行目は日付の記載で、年次が破損しているが、本文書が寛平年間（889～898）のものであることがしられる。

さて、以上のような記載をもつ本文書は、4行目が日付の記載であるので、3行目までが文書の実質的内容とみられる。そして、その末尾が「貢上」の文言で締めくくられていることから、本文書は寛平年間の貢進文書と考えられる。しかし、貢進物の具体的な内容や貢進主体などの詳しいところは、破損が激しいためよくわからない。2行目にみえる「吉弥□$_{侯カ}$人主」という人物についても、その詳細や本文書のなかにおける位置などは不明とせざるをえない。可能性としては、本文書が貢進文書であることを念頭におくと、人主が①貢進の使者、あるいは②人主自身が貢進される人であったことなどが考えられる。ただ、①の場合、使者の名は「貢上」「上進」といった語句の直前にあることが多いので、可能性は少ないと思われる。一方、人主が勲位所持者であり武勇に優れた才能を有していた者であることや、奈良・平安時代には才能のある人の貢進がよくみられることからすると、②の可能性は多少有力視される。その場合には、本文書は武勇に優れた人物を貢進した文書ととらえられる。



《釈　文》

1・□□年廿四歳
□自(カ)売年七□
□売年六□

3・博士□□□
史生鳴岐史□□

5・□□□□□

6・□位吉
□

・□□
□□

9・□(筋)
□七等吉弥□人主。
□□貢上
寛平　□七(年)月十三日

10・□

11・斗

第424図　漆紙文書見取図

ところで、寛平年間には本文書を考えるうえで興味深い史料がある。それは、寛平6年4月から9月にわたる新羅の賊の来着と討伐に関わる史料である（註8）。それらによると、同年4月に新羅の賊が対馬に来着したため、朝廷はまず大宰府に討伐を命じ、次に北陸・山陰・山陽道の諸国に精兵を選び警固に当ることを命じている。続いて東山・東海道からも勇士を召し、さらに陸奥・出羽に対しても警固を命じている。要するに新羅の賊の来着に対し、朝廷はほぼ全国的に精兵や勇士の動員と警固を命じたのであり、賊が討伐されて諸国の警固が解かれたのは同年9月のことであった。

さて、寛平6年の新羅の賊の来着と討伐に関わる史料と本文書とが関連するものかどうかは明確にできない。それは、本文書の年次が欠けることや、破損がひどく内容の位置付けが十分にできないためである。しかし、本文書の日付は寛平年間の7月であり、もし年次が6年ならば、新羅の賊の来着と討伐に関わる史料の期間内にちょうど納まる。また、賊の討伐に際して朝廷は東山・東海道からも勇士を召し、陸奥・出羽に対しても警固を命じたが、本文書には勲位所持者の人主のような武勇に優れた者を貢進したものである可能性もあるので、内容的にも符合する。これらの点からみると、文献史料の記事と本文書とが関連する可能性は十分にある。その場合、本文書は寛平6年の新羅の賊の来着に対して全国的に命じられた動員に伴い、武勇に優れた者を貢進したものと位置付けられることになるが、先述したような理由などからこのとらえ方はあくまで推測の域をでない。

註1　以下、多賀前地区の文字史料に関する言及はすべてこれによる。

註2　「㊥」は4点報告（千葉；1991）されている。また「財」については多賀城市埋蔵文化財センターの千葉孝弥氏の御教示による。

註3　多賀前地区に「本」はあるが「㊥」はない。

註4　名前のみ記されたのは題籤部の大きさの制約によるとみられる。その場合、姓を略したのは、同姓者により郡司が占められる傾向が会津郡にも存したからではないかと推測される。なお、文献上に会津郡の郡司はみられないが、郡司クラスの有力氏族に阿倍会津臣がいる。

註5　例えば、但馬国府について、稲ないし米の収納に関わる題籤軸の出土から、その周辺に稲に関わる部署の存在が推定されている（寺崎；1989）。

註6　「下野国府跡Ⅶ」所収2360・2361・3485号木簡など。

註7　郡司本来の執務場所が郡家であるにもかかわらず、郡司層が多賀城下に滞在して政務にあたっていたことの背景を少し考えておきたい。本題籤軸にみえる「解文」の具体的な内容がわからないので、背景は何通りか考えられると思われるが、とりあえずここでは2つほどをあげておく。

1つは、城下に郡の出先機関のようなものがあったのではないかということである。周知のように平城京には相模国調邸のような諸国の出先機関が存在した。これと同様じのものを国と郡のレベルでも想定するのである。何分、実例がないので論証はできない。しかし、郡司は元日朝賀を始めとして種々の政務の際に、しばしば国府を訪れることがあったとみられるので、そうしたものの想定も決して無理ではない。そして、その存在を背景とすれば、郡司層が多賀城下に滞在して政務をしていたことも理解できる。

もう1つは、郡司層の一部が城下に集められていたのではないかということである。これについては『類聚三代格』所収の大同元（806）年十月十二日太政官符、同四（809）年五月十一日太政官符などが参考になる。まず、大同元年官符は、陸奥・出羽国に対して正員以外に擬任の郡司と軍毅を置くことを特に認めたものである。その目的は、辺要にあるこれらの国の郡司と軍毅の人数を実質的に増員して、彼らを「防守警備」にあてるためであった。そして、大同四年官符によると実際に軍毅が

城柵に恒常的につめていたのが確認できる。一方、郡司についてはよくわからないが、大同元年官符の趣旨や軍毅の実例からみて同じように城柵に集められていた可能性が高い。ただし、郡司は基本的には文官なので城柵の「防守警備」ということよりは、恐らく城柵及びその周辺に関する種々の政務や経営にあてられたのではないかと思われる。特に大同元年官符がだされた8世紀末～9世紀初頭ころの陸奥国では、国府や城柵の造営が盛んに行なわれており、それに伴う労役や事務の量が増大していたと考えられる。城柵の造営には8世紀以来、伊治城の道嶋氏の例をあげるまでもなく郡司層が深く関与しており、国司の下で彼らが実際の造営の労役や事務を担う存在であった。大同元年官符が表面的には「防守警備」をうたいながら、文官の郡司も増員したのは、この時期にそうした造営が盛んに行なわれたことによるのではないかとも思われる。ところで、こうした郡司の実質的な増員は、年代的にも本題籤軸の年代や本格的な多賀城下の整備の年代と符合している。したがって、郡司層が多賀城下に滞在して政務にあたっていたことについては、上記のようなことを背景としてみることも可能と思われる。

註8　『日本記略』寛平六年四月十四日丙午条～同年十月六日乙未条

〈引用・参考文献〉

加藤友康　1993　「国・郡の行政と木簡　－「国府跡」出土木簡の検討を中心として－」『木簡研究』第15号

田熊清彦　1987　「下野国府跡Ⅶ」『栃木県埋蔵文化財調査報告』第74集　栃木県文化振興事業団

千葉孝弥　1991　「山王遺跡－第10次発掘調査概報－」『多賀城市文化財調査報告書』第27集　多賀城市埋蔵文化財センター

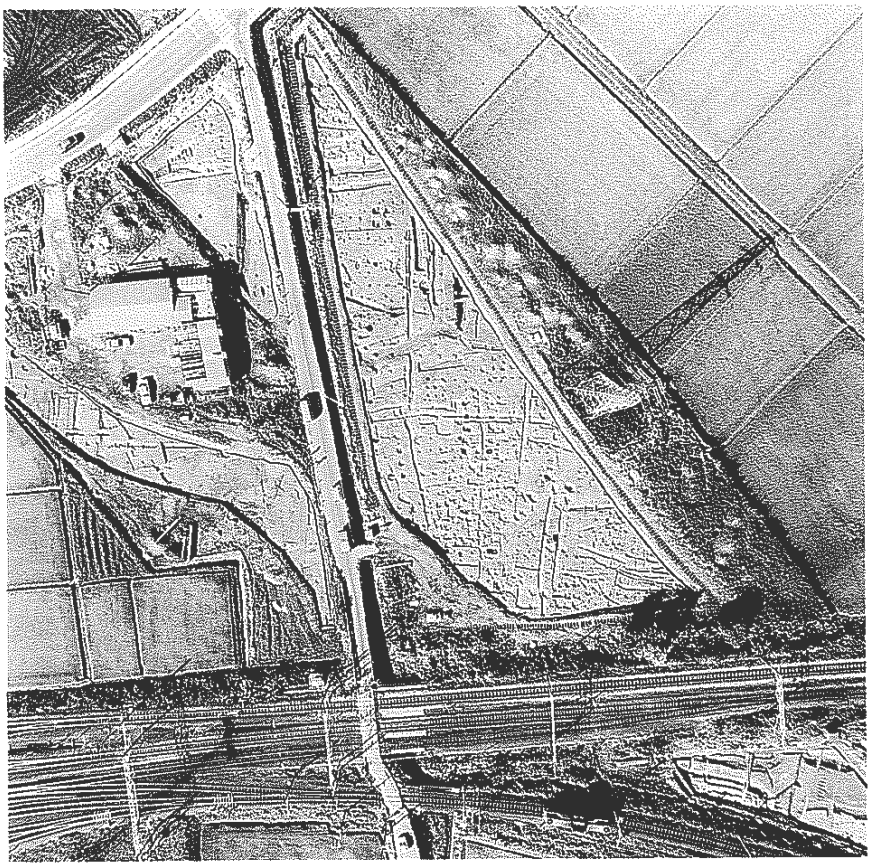
寺崎保広　1989　「但馬国符の木簡」『日高町文化財講演会記録』第1集

平川　南　1993　「土器に記された文字」『月刊　文化財』362号

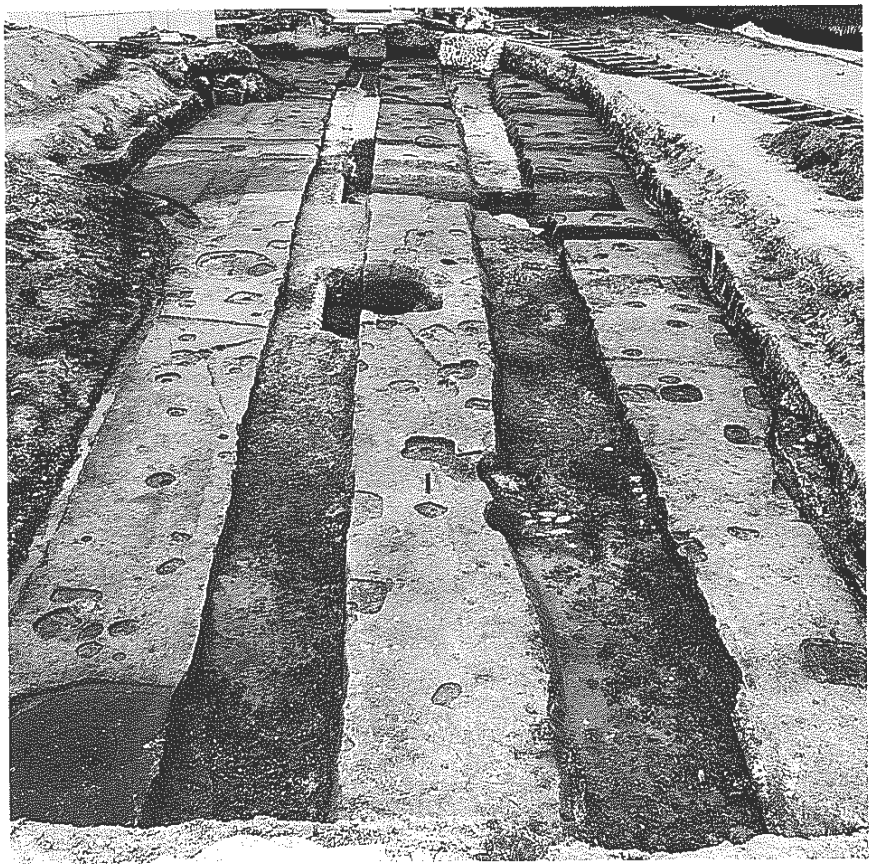
吉野　武　1996　「山王遺跡Ⅲ　－多賀前地区遺物編－」『宮城県文化財調査報告書』第170集　宮城県教育委員会

吉野　武　1996　「山王遺跡Ⅳ　－多賀前地区遺構・遺物考察編－」『宮城県文化財調査報告書』第171集　宮城県教育委員会

写　真　図　版

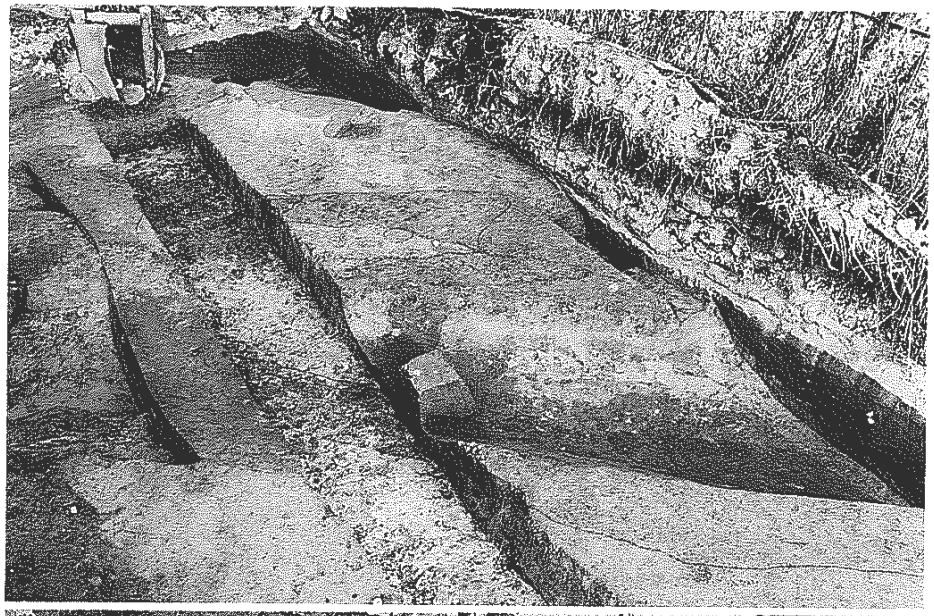


第１次
調査区全景

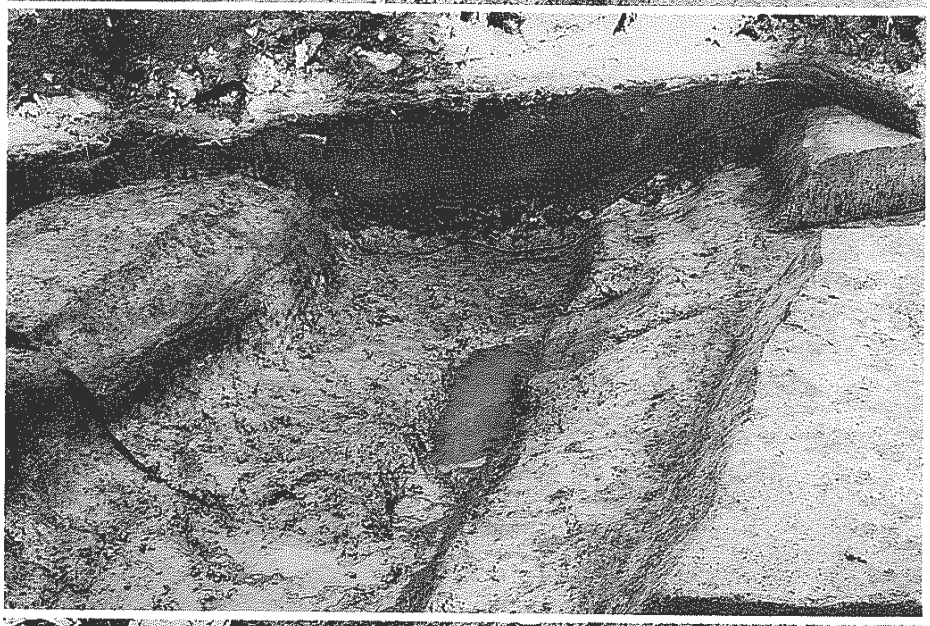


第２次
調査区全景

図版１



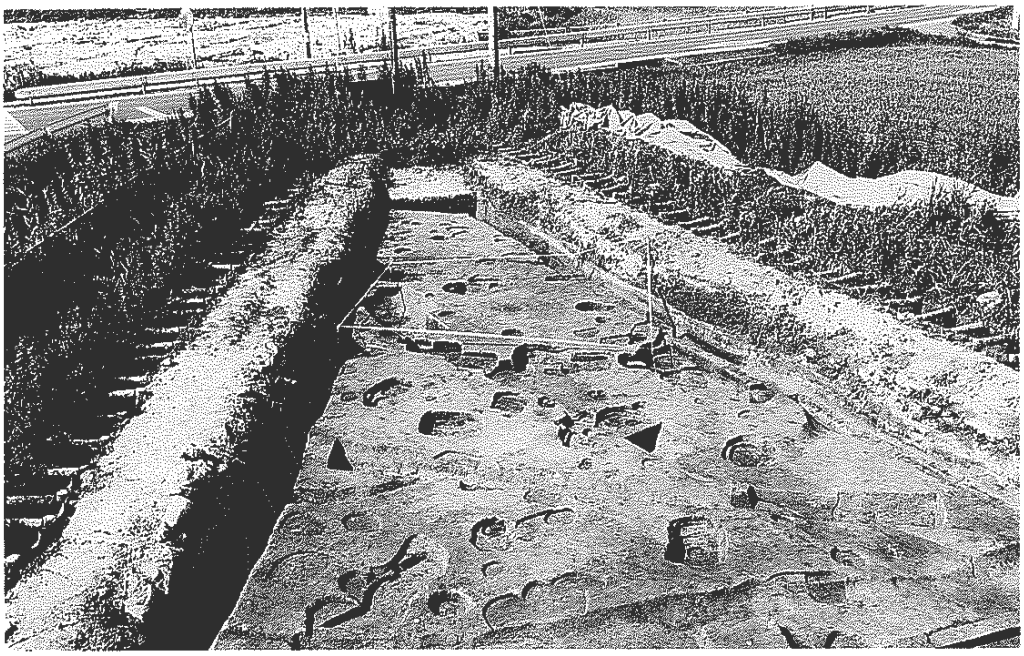
SX3900
（南から）



SX3900 南側溝
（西から）

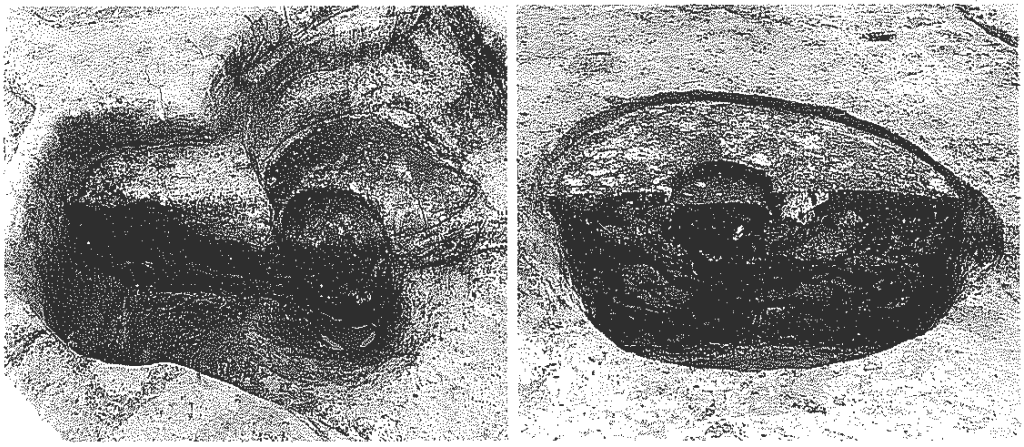
SX3900 南側溝
（東から）

図版 2



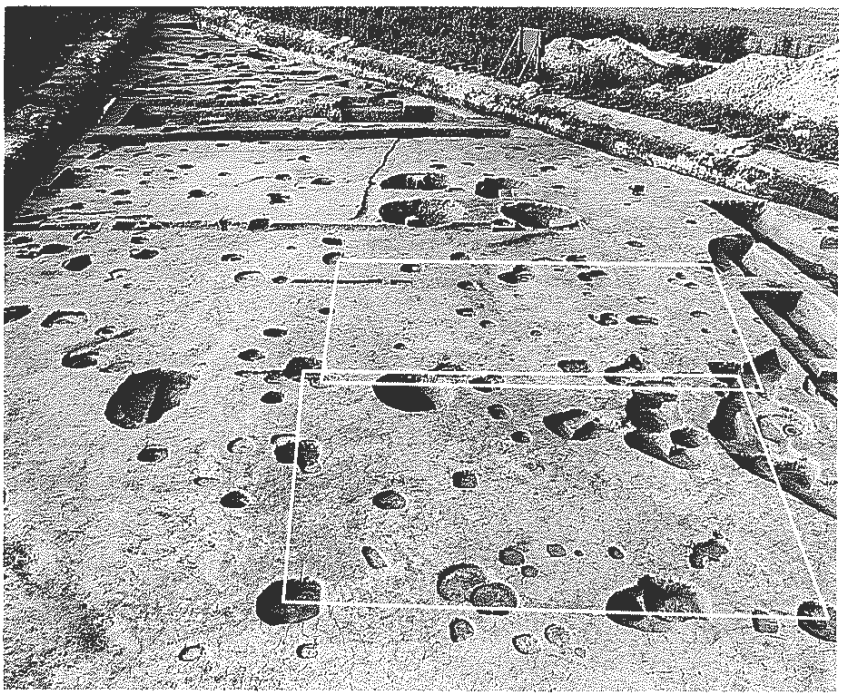
SB3400
（南から）

SB3401
（南から）

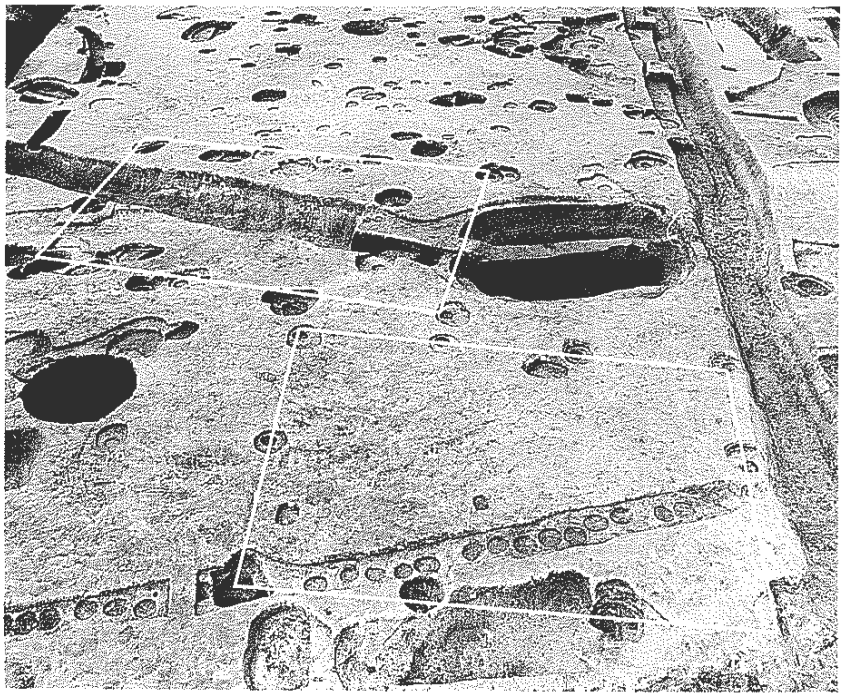


左 SB3400
右 SB3401

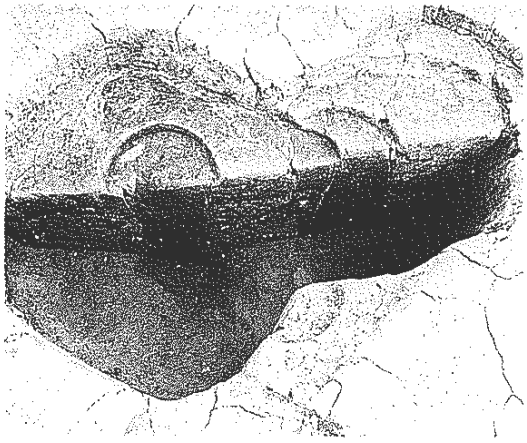
図版 3



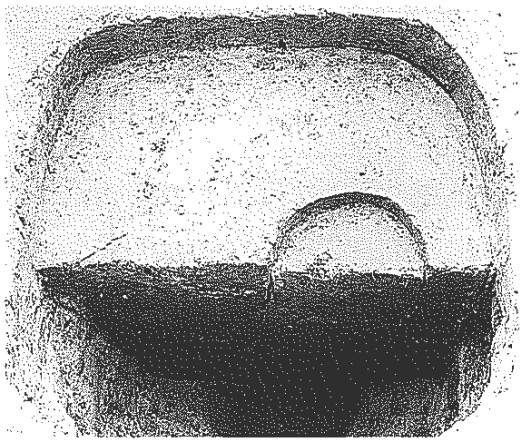
SB3407・3409
付近建物群
（南から）



SB3408・3410
3411（南から）

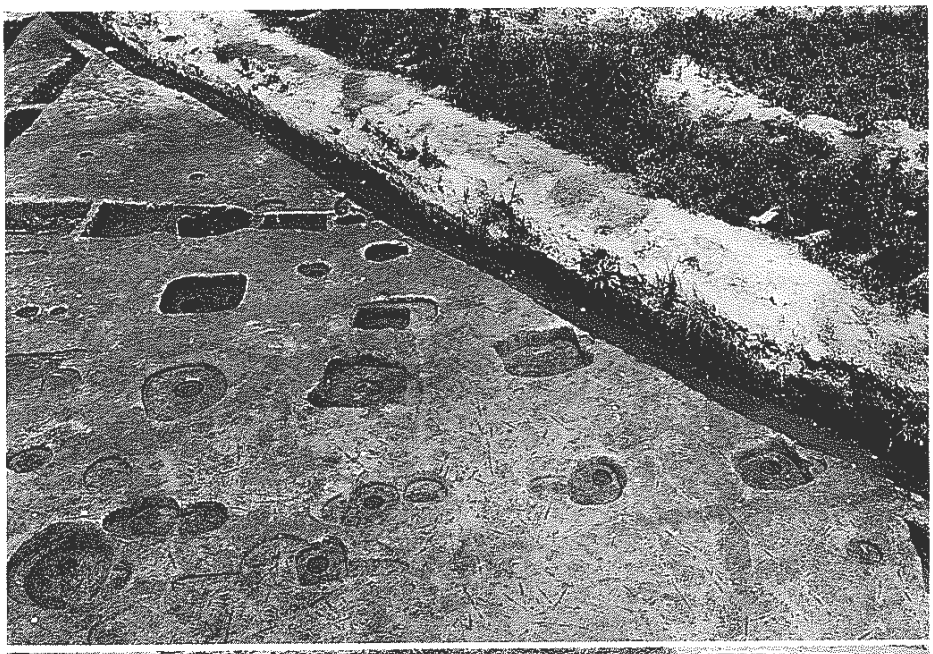


SB3407・3409



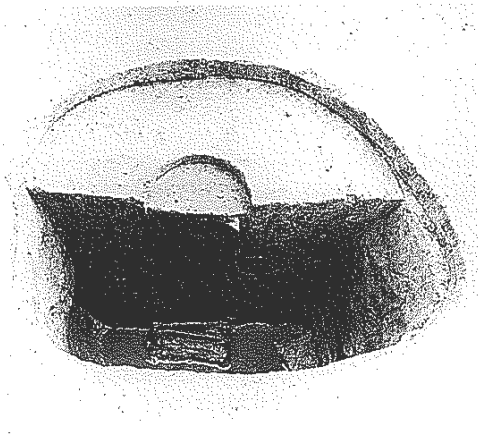
SB3446

図版 4

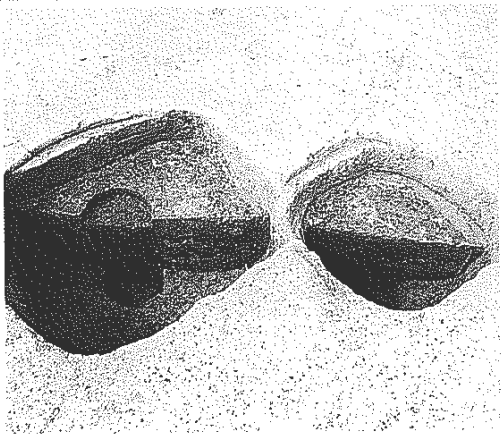


SB3413
（南から）

SB3414・3415
（南から）



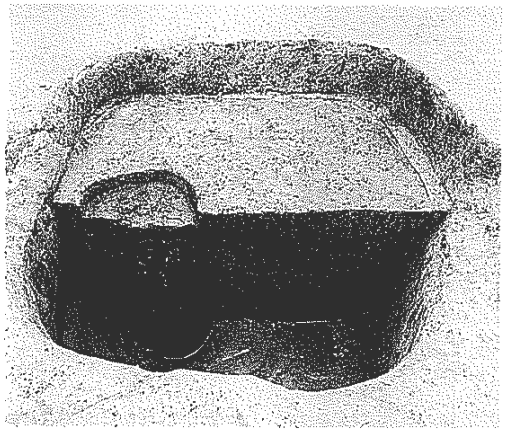
SB3413

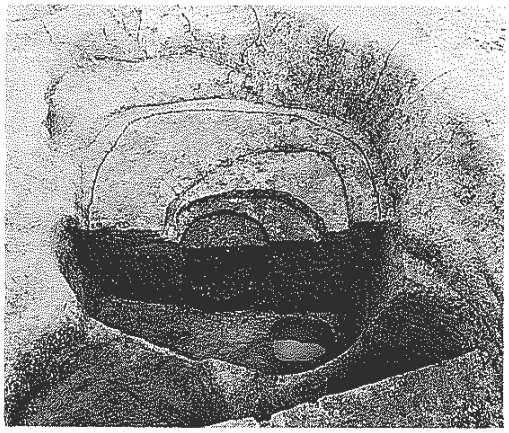


SB3414・3415

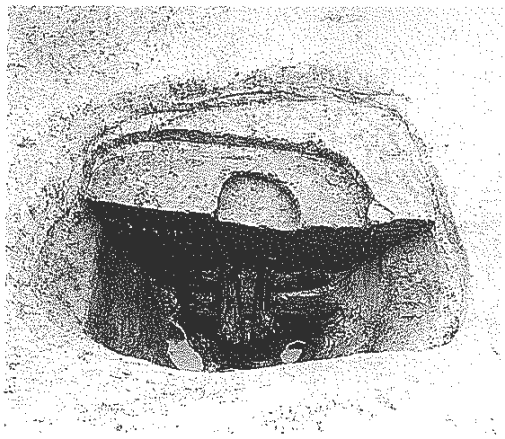
図版 5

SB3420・3421
3423(東から)





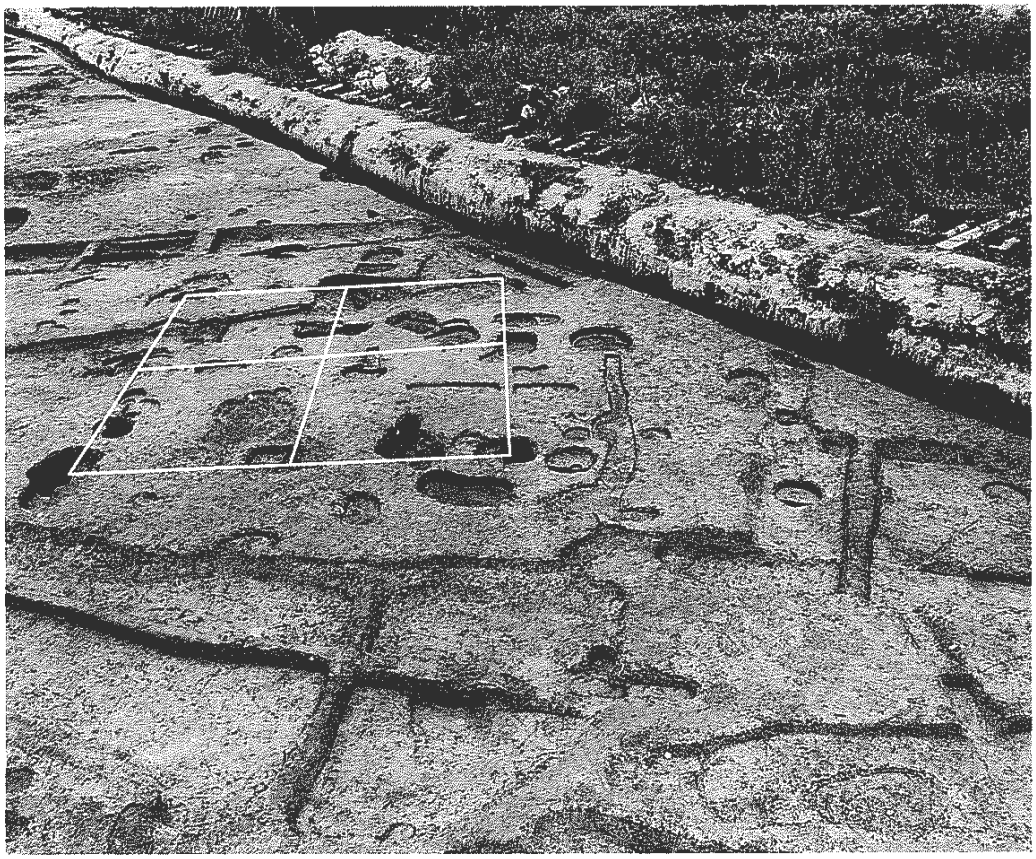
左・右
SB3423



SB3417

SB3425

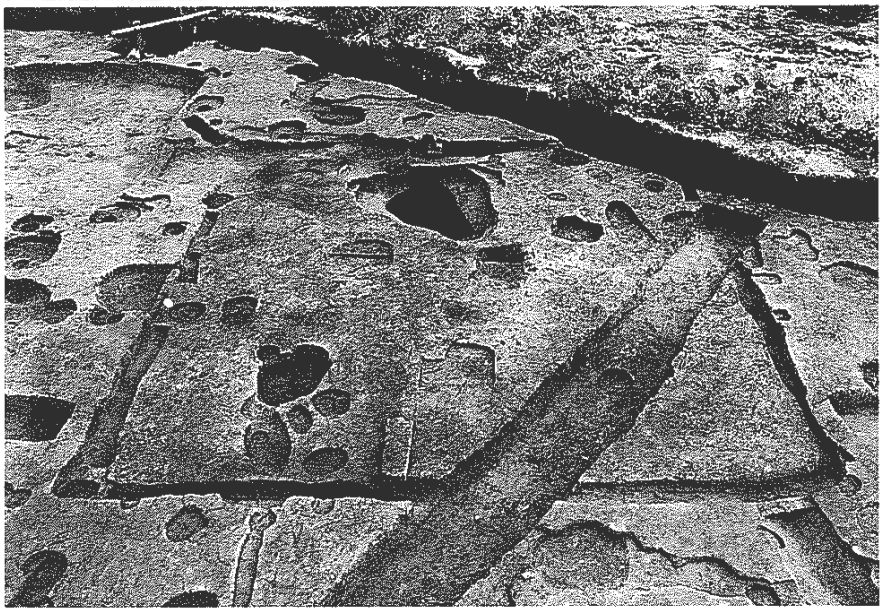
図版 6



SB3429・3430・3431（南から）

図版 7

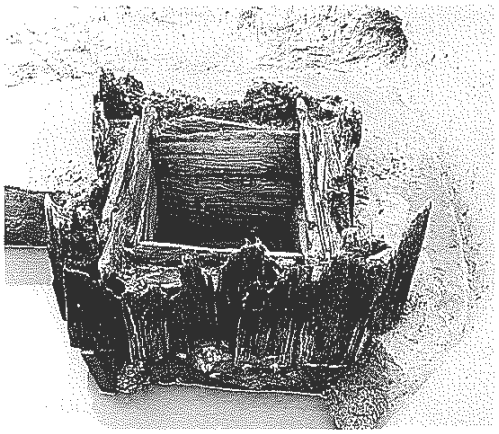
SI3799
（南から）

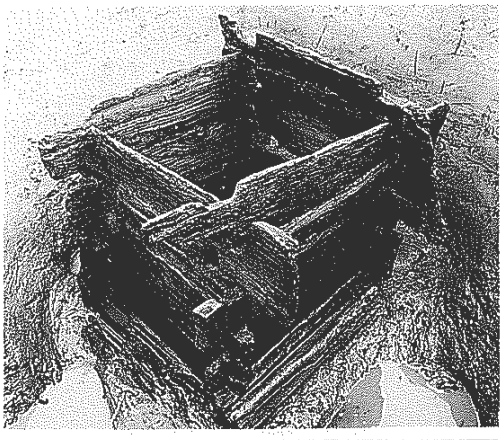


SX3029
（北から）

SX3024・3029
（北から）

図版 8

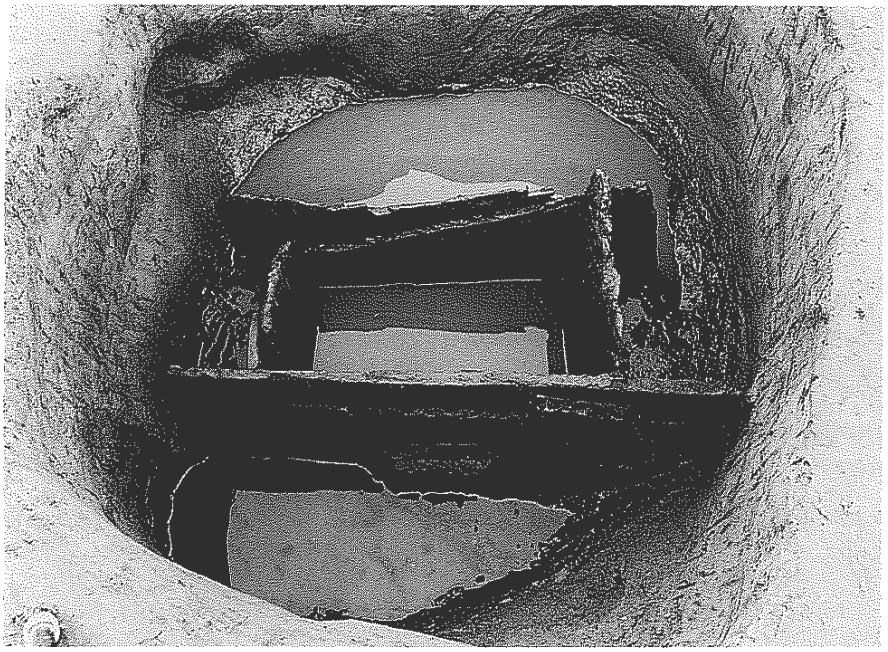




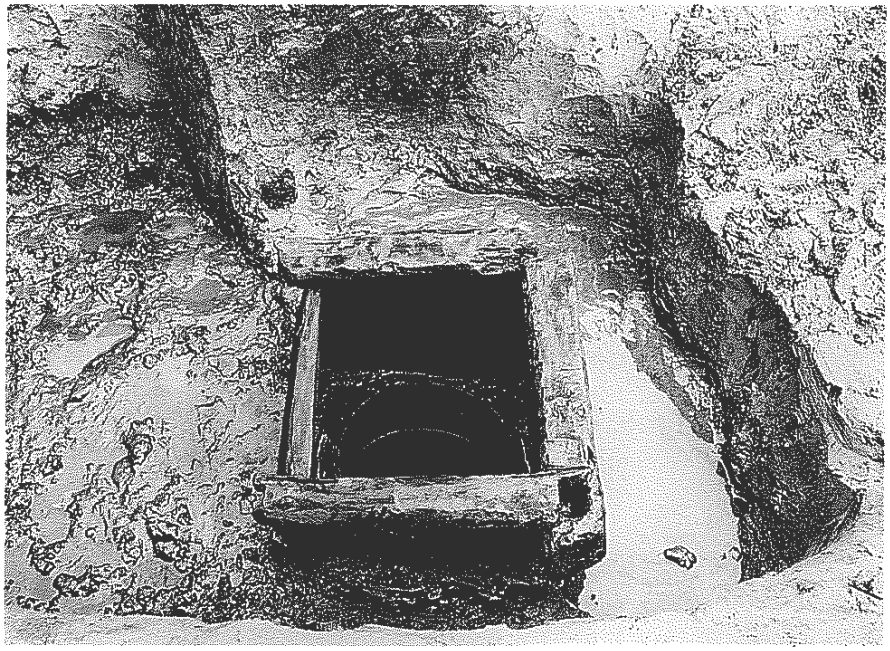
木簡出土状況

SE3038

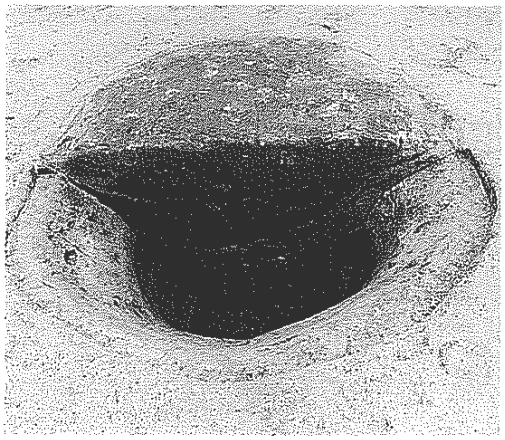
図版 9



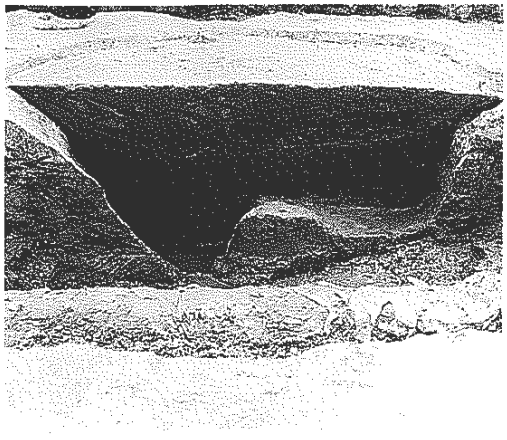
SE3164



SE3728



SE3311

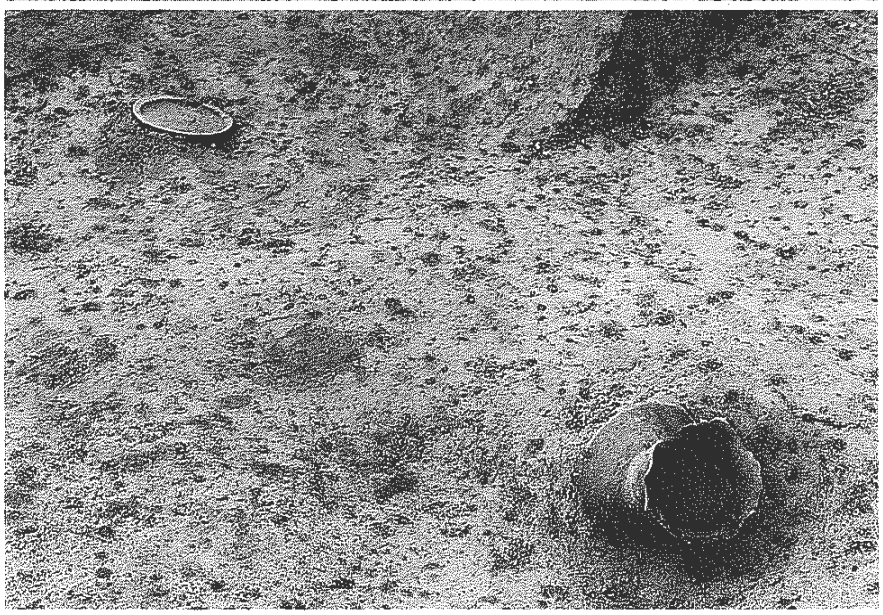


SE3801・SK3797

図版10

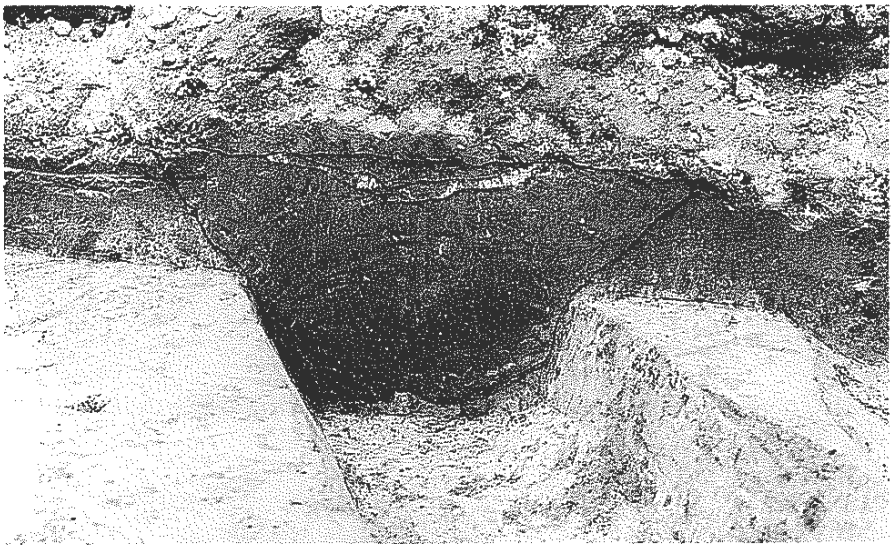
SA3158

SD3014

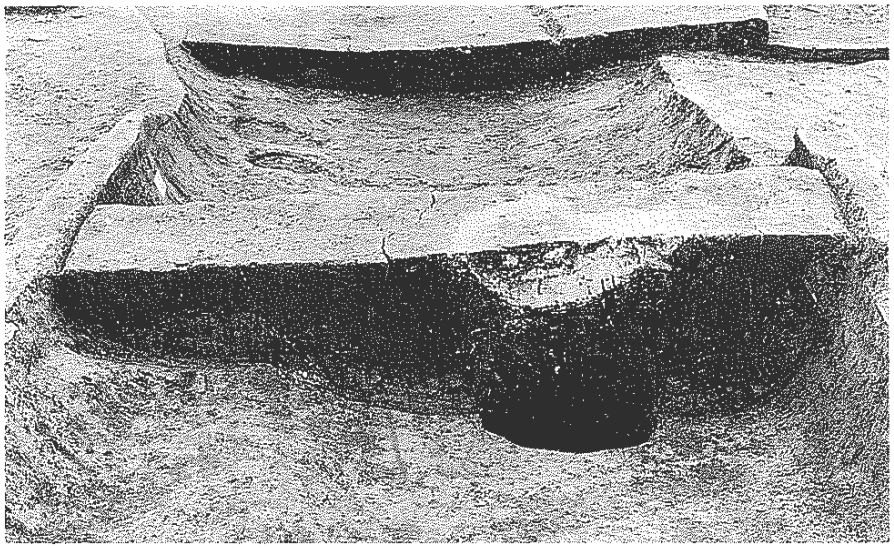


SD3014
遺物出土状況

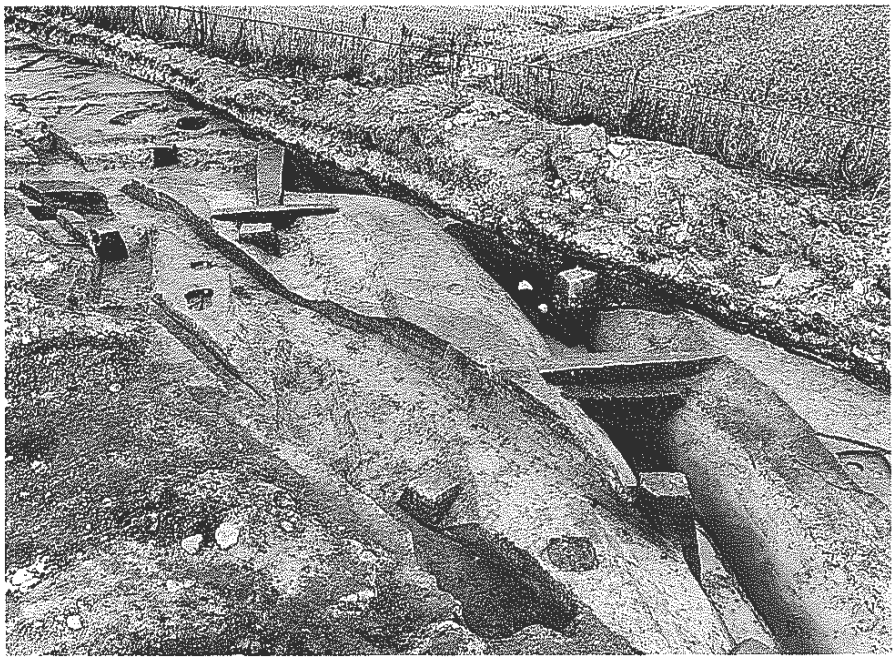
図版11



SD3026

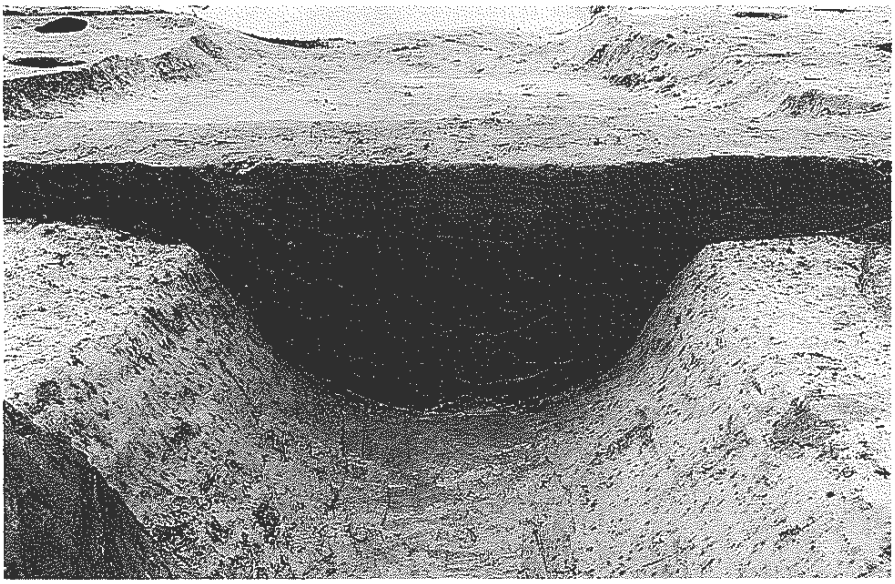


SD3123・3133

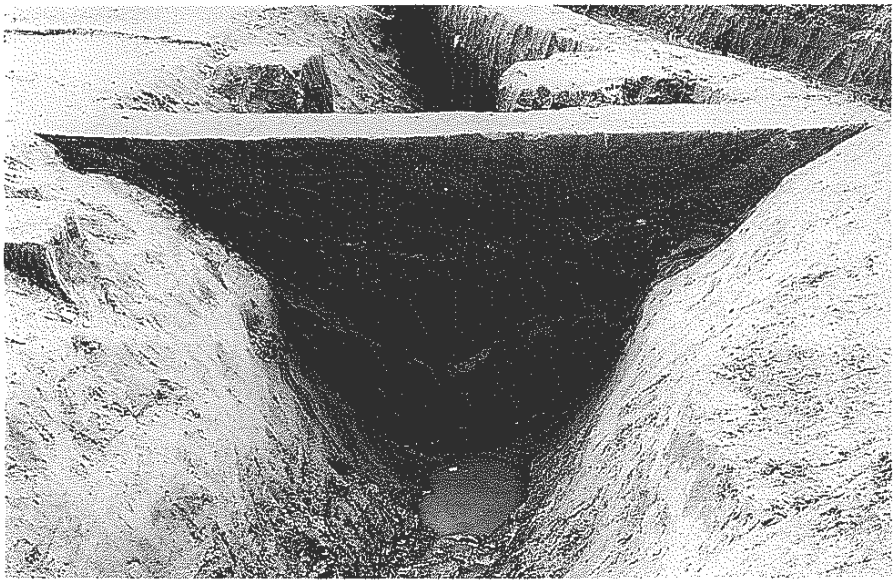


SD3138・3150・3181

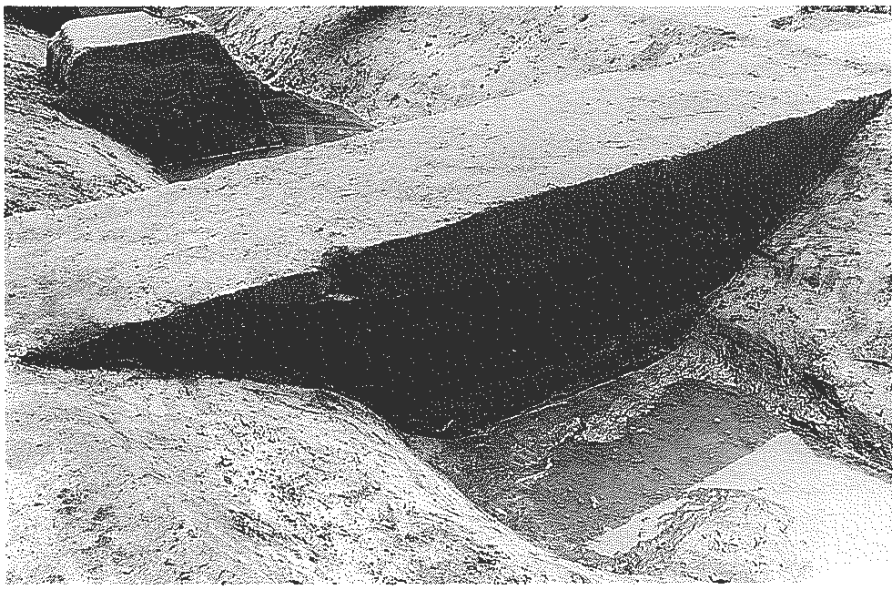
図版12



SD3138

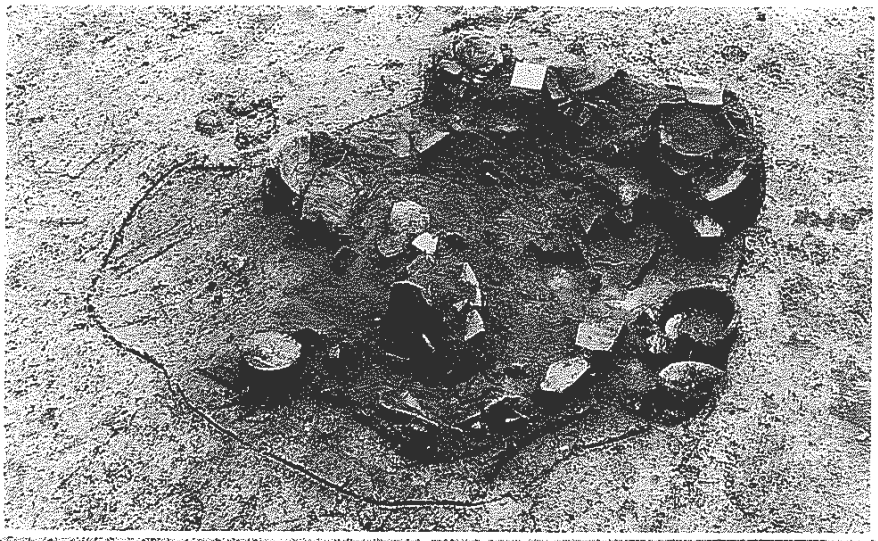


SD3150

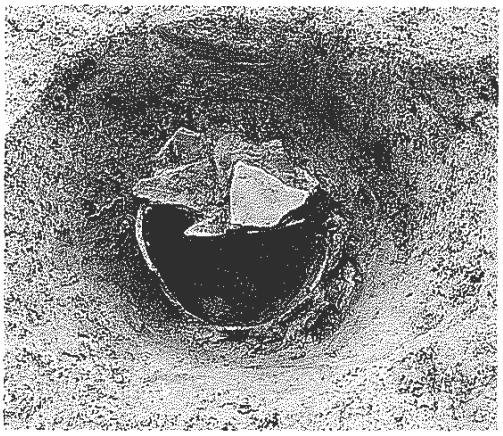


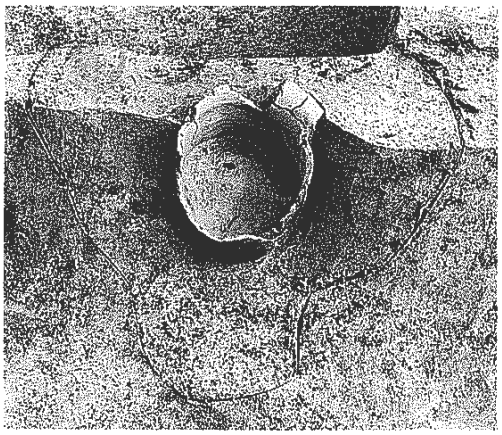
SD3307

図版13

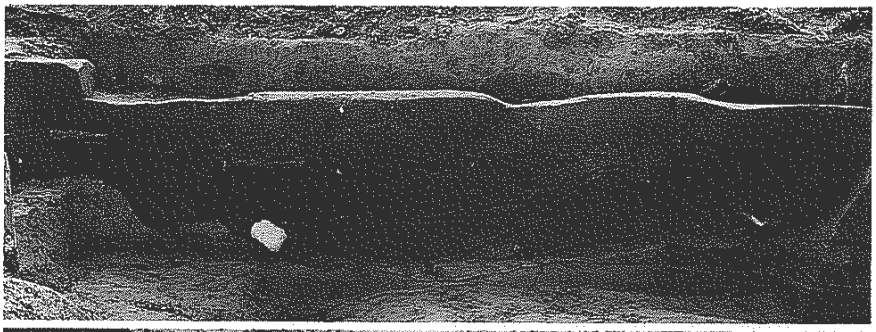


SX3012





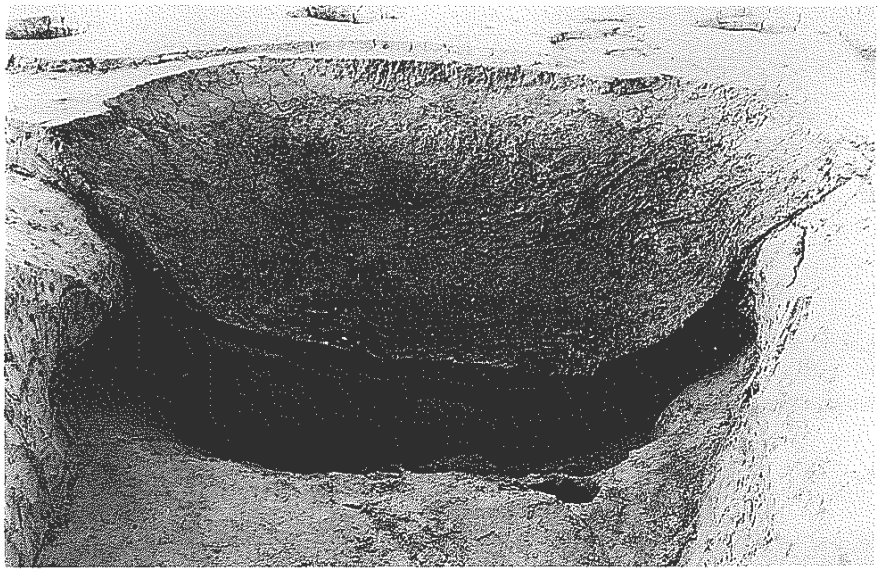
左　SX3091
右　SX3114



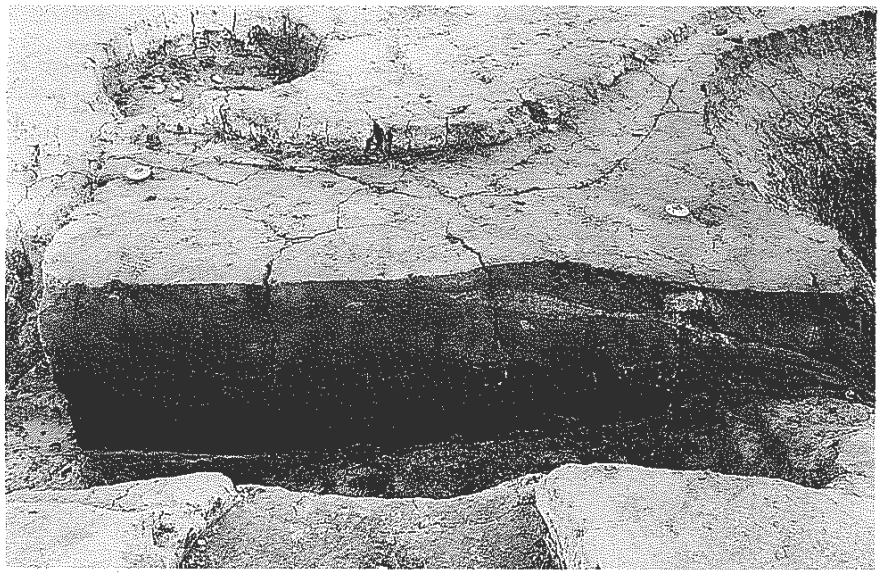
SD3303・3304
・3309

SD3303
杭列検出状況

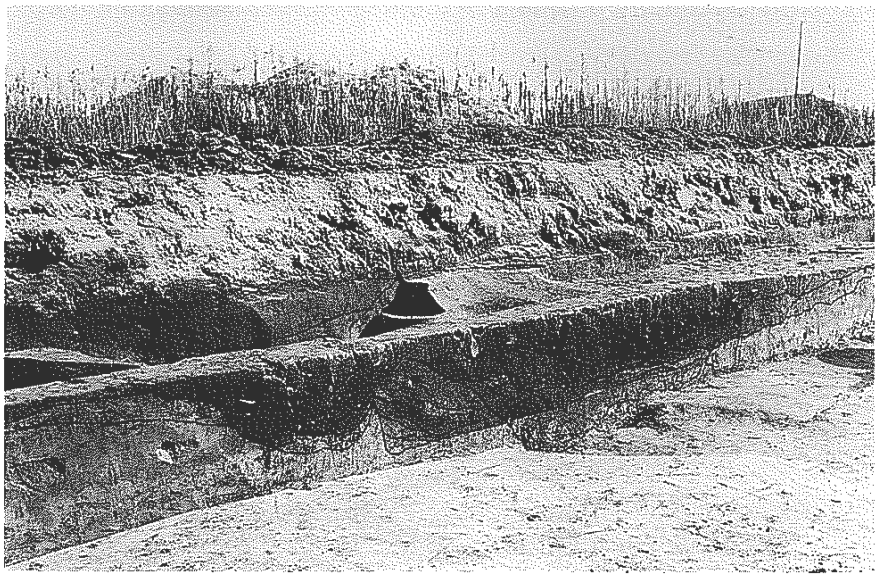
図版14



SK3154

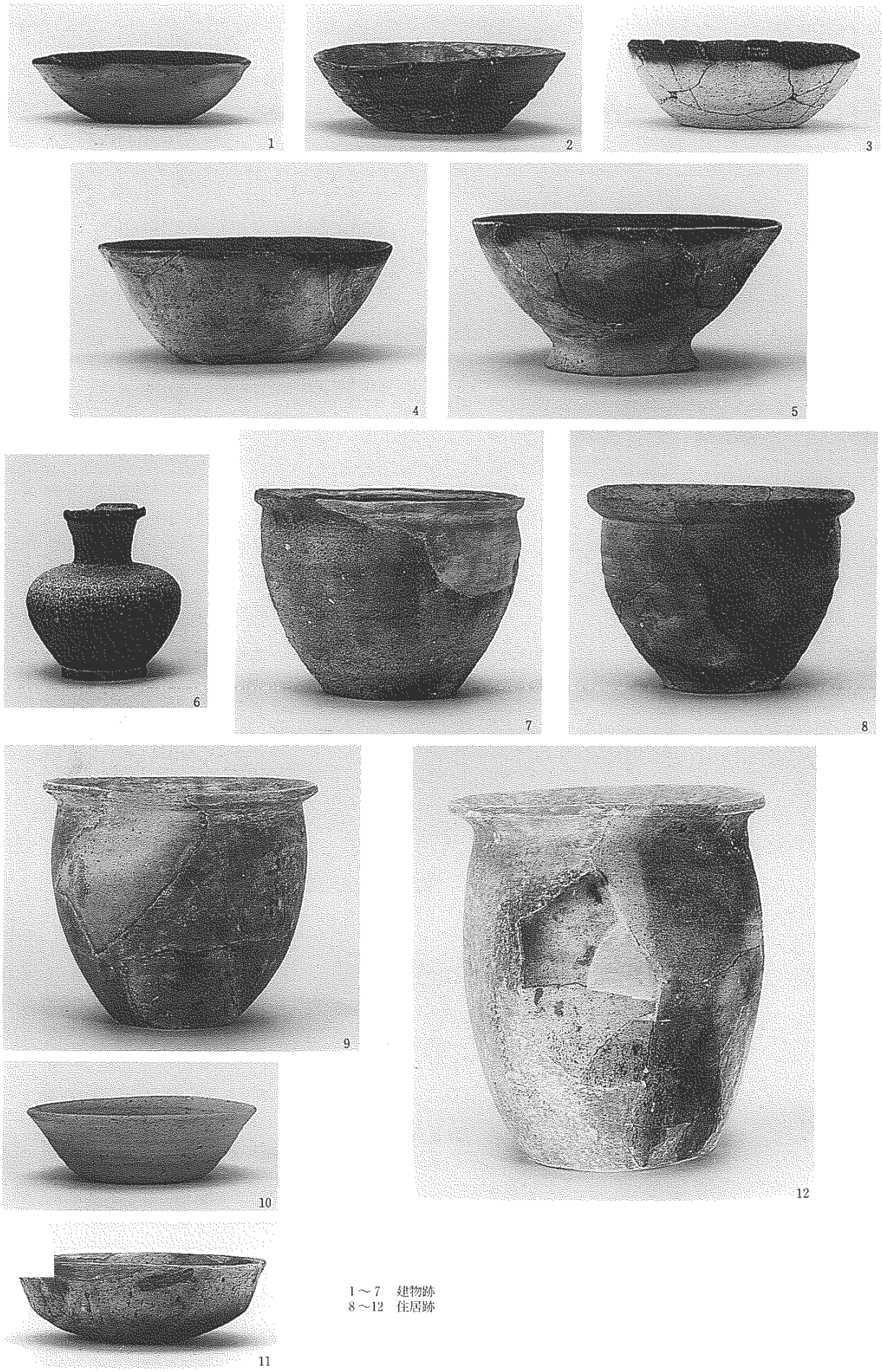


SK3154
SD3155



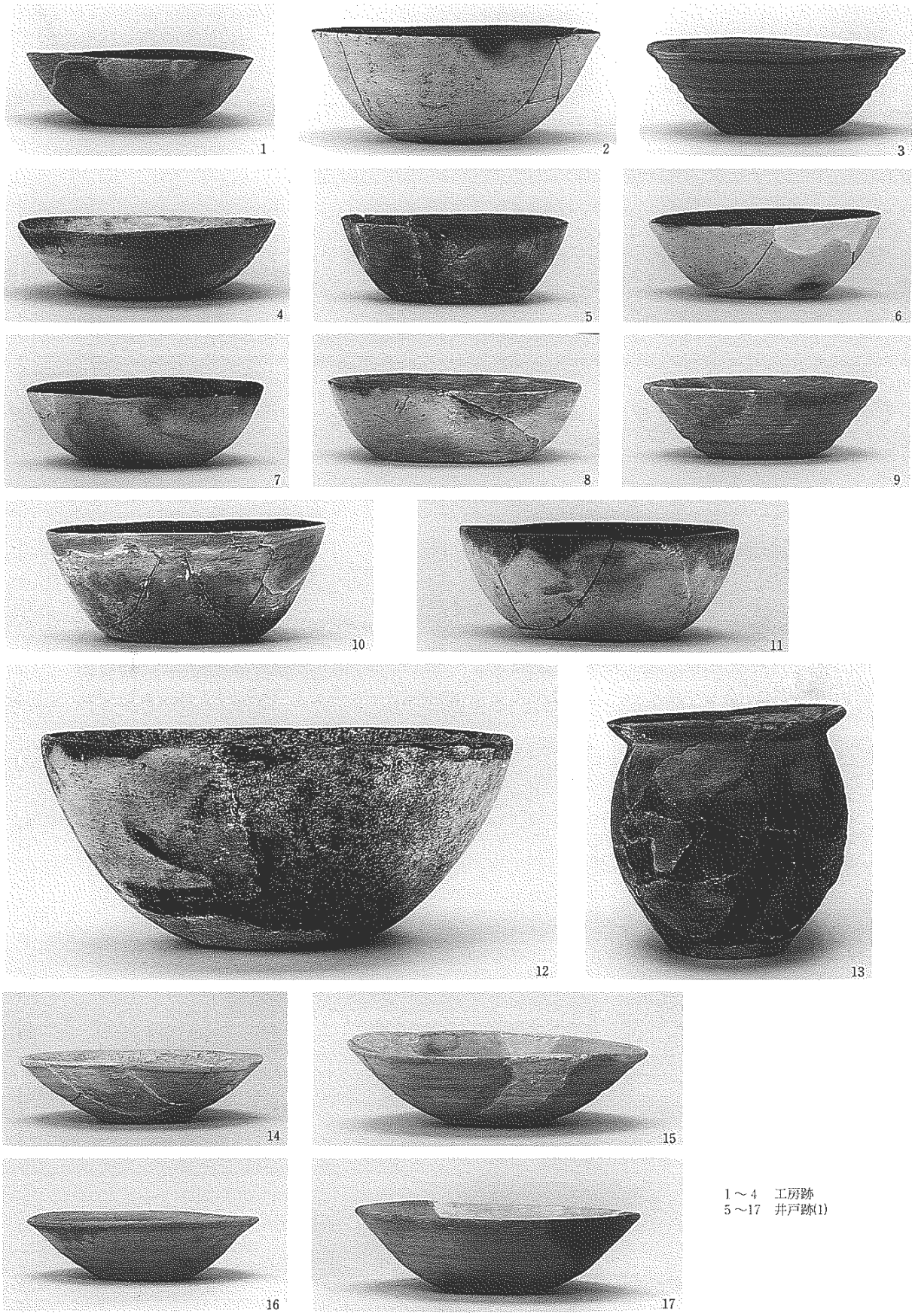
SD3026
・3764
SK3727

図版15



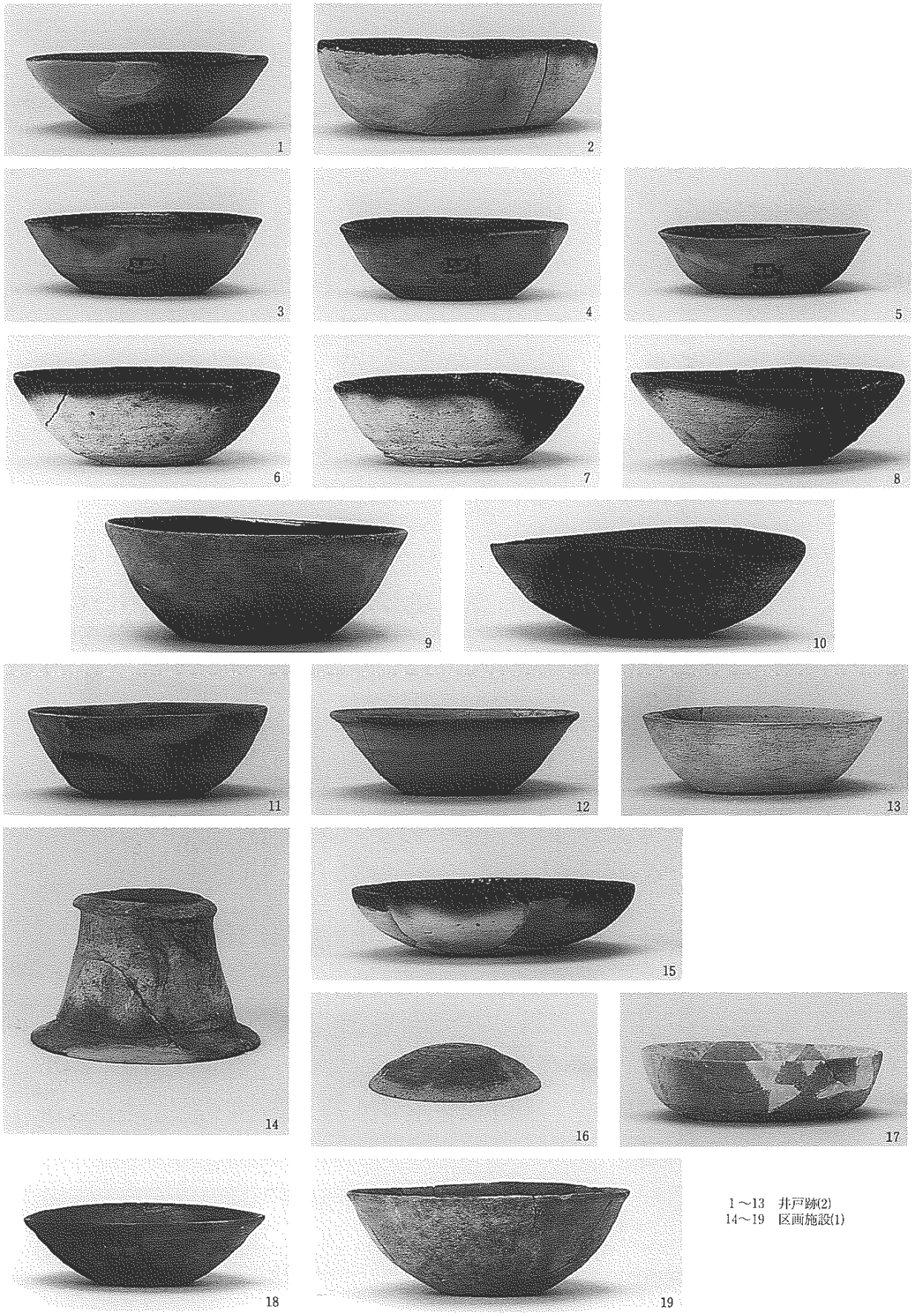
1～7　建物跡
8～12　住居跡

図版16　掘立柱建物跡・竪穴住居跡出土遺物



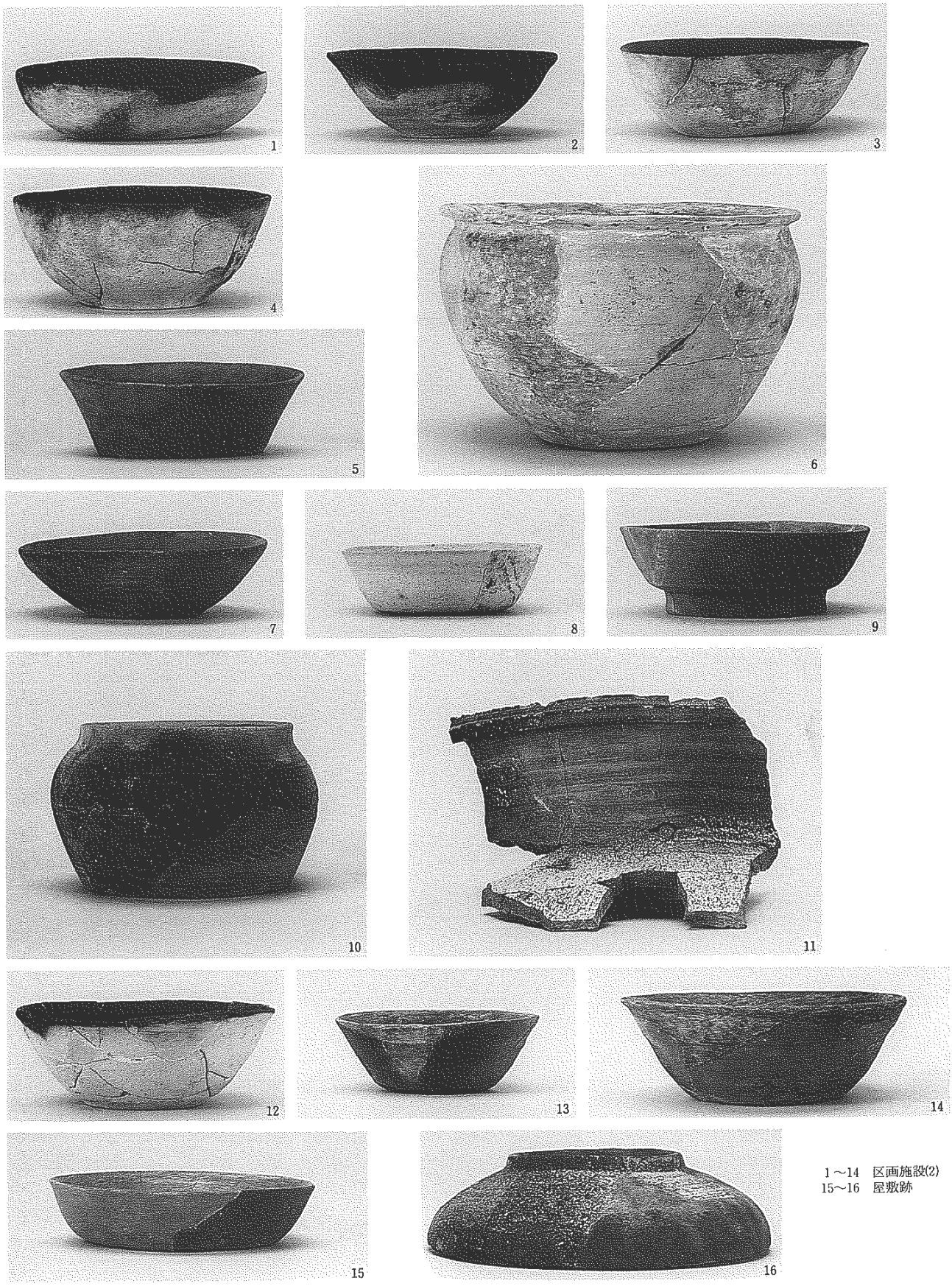
1～4　工房跡
5～17　井戸跡(1)

図版17　工房跡・井戸跡(1)出土遺物



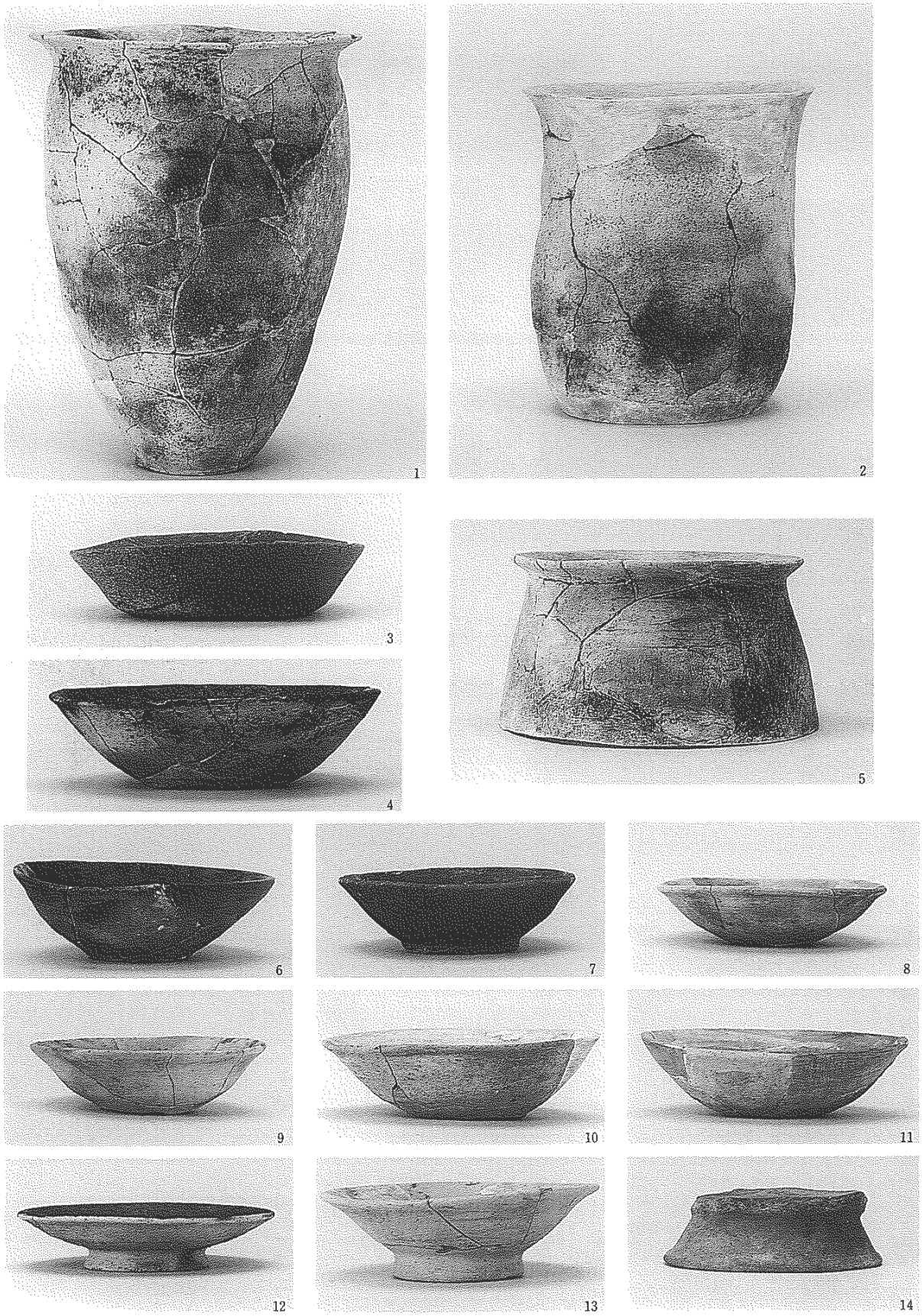
1～13　井戸跡(2)
14～19　区画施設(1)

図版18　井戸跡(2)・区画施設(1)出土遺物



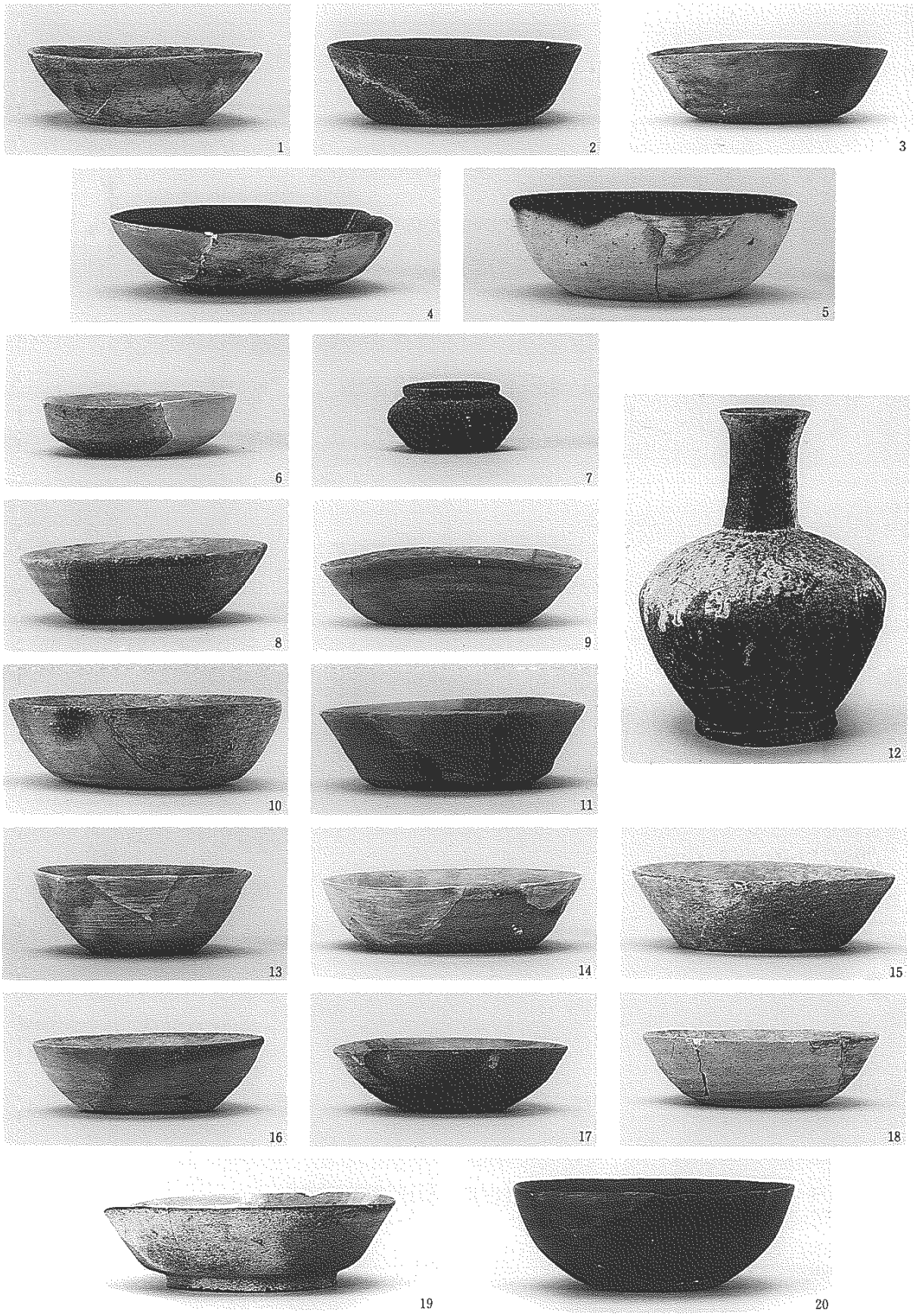
1～14　区画施設(2)
15～16　屋敷跡

図版19　区画施設(2)・屋敷跡出土遺物



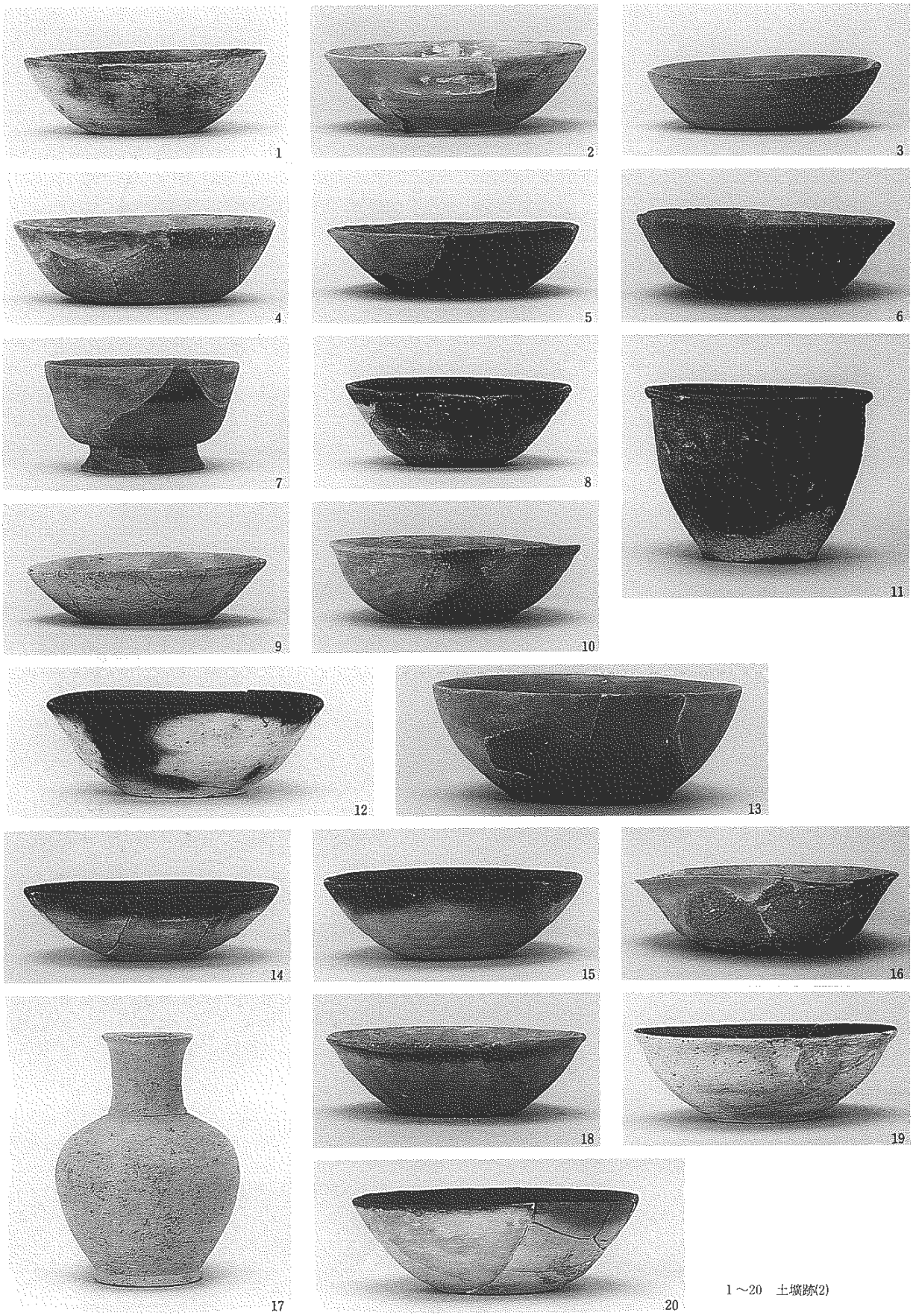
1～3　埋設土器
4～14　土器溜

図版20　土器埋設遺構(2)・土器溜出土遺物



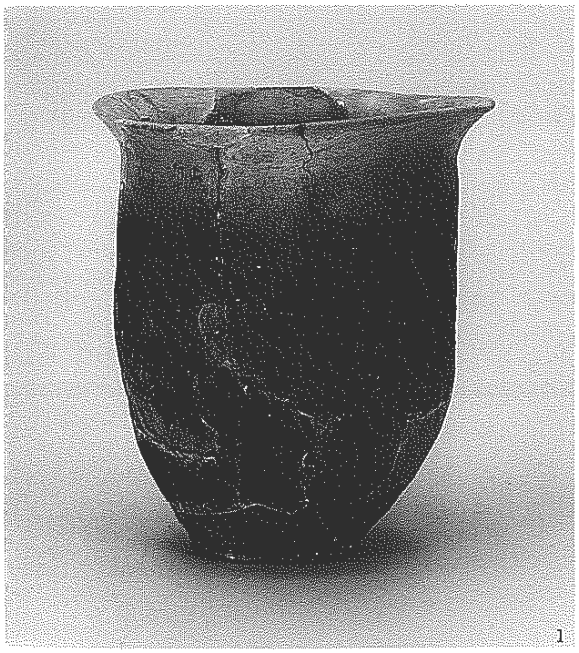
1～12　溝跡
13～20　土壙跡(1)

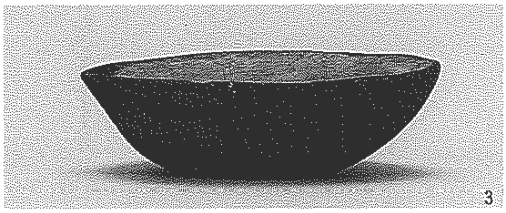
図版21　溝跡・土壙跡(1)出土遺物

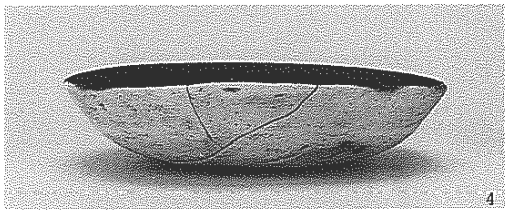


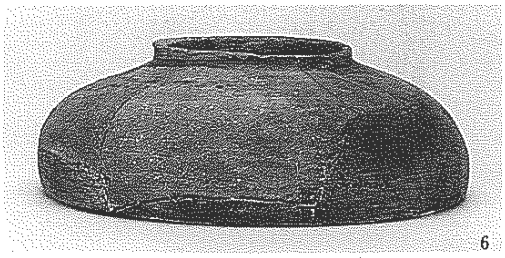
1～20　土壙跡(2)

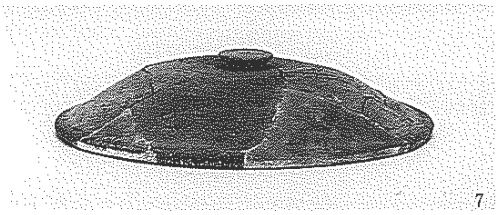
図版22　土壙跡出土遺物(2)

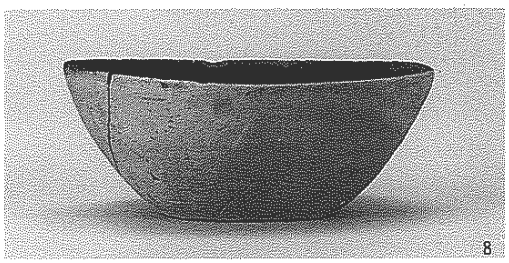


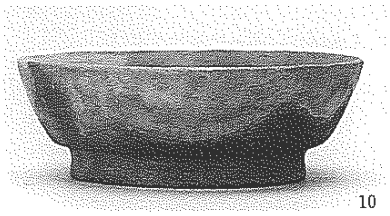


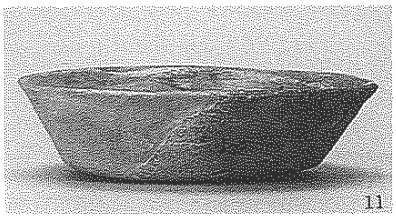






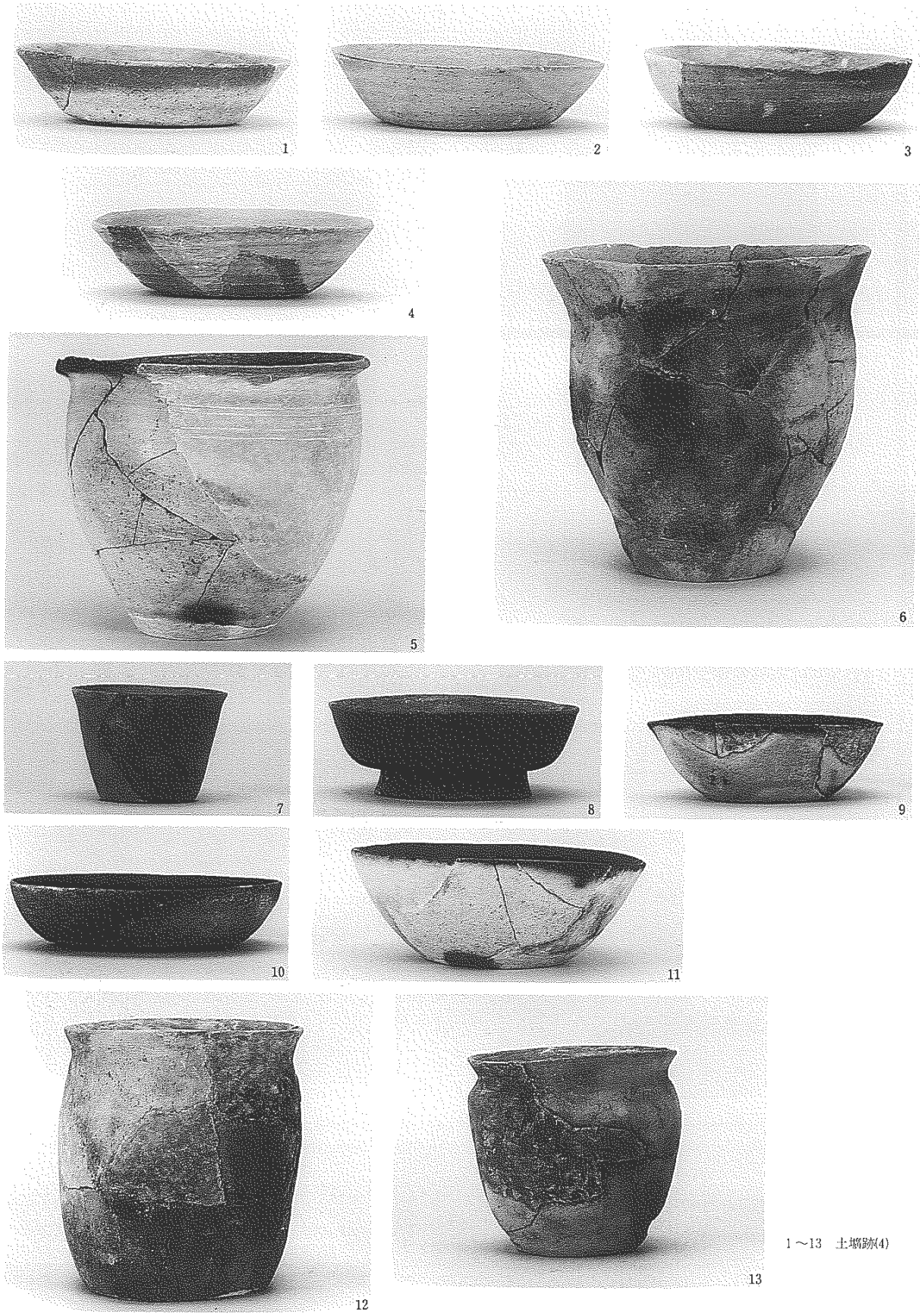






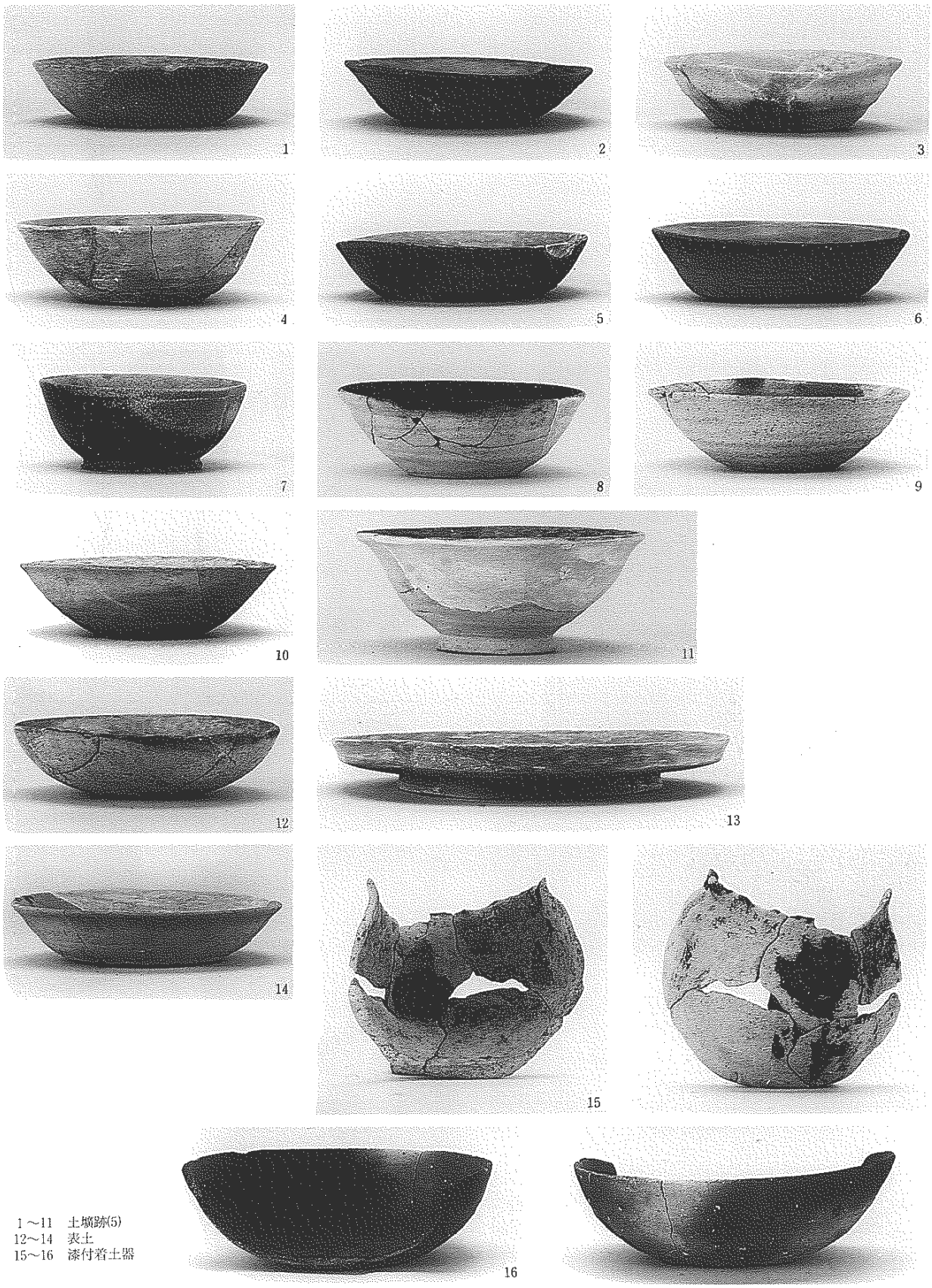
1～11　土壙跡(3)

図版23　土壙跡出土遺物(3)



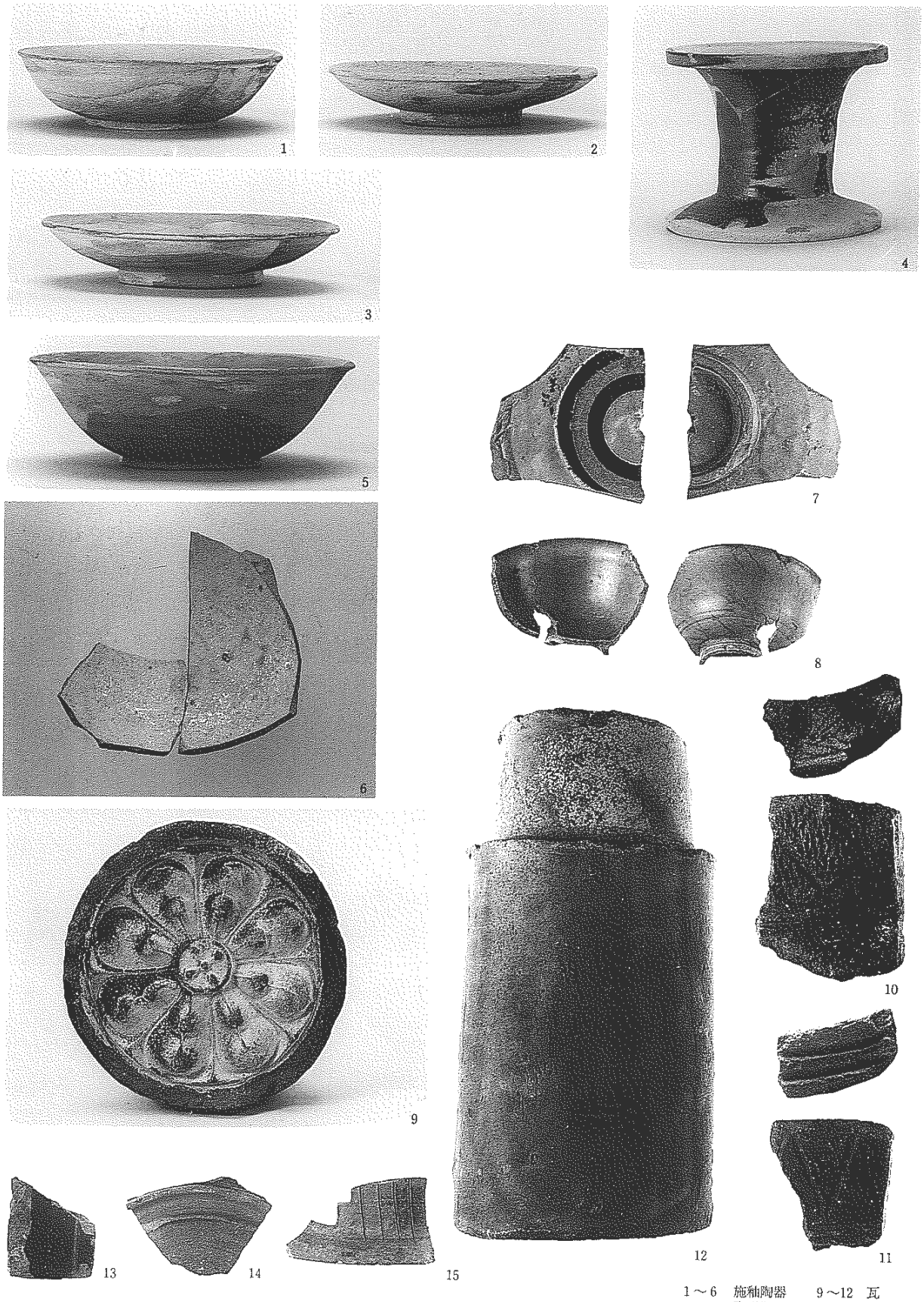
1～13　土壙跡(4)

図版24　土壙跡出土遺物(4)



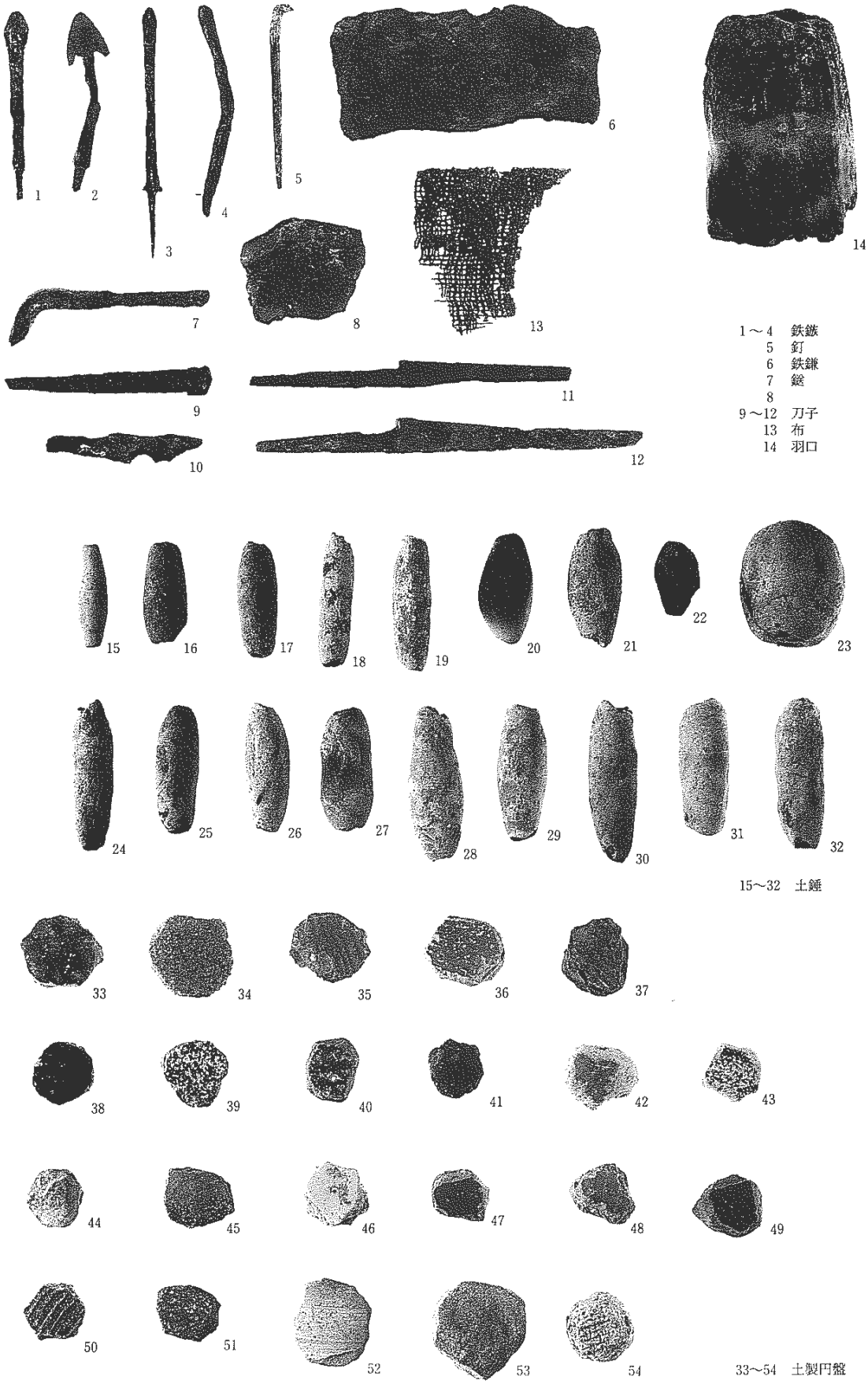
1～11　土壙跡(5)
12～14　表土
15～16　漆付着土器

図版25　土壙跡(5)・表土出土遺物　漆付着土器

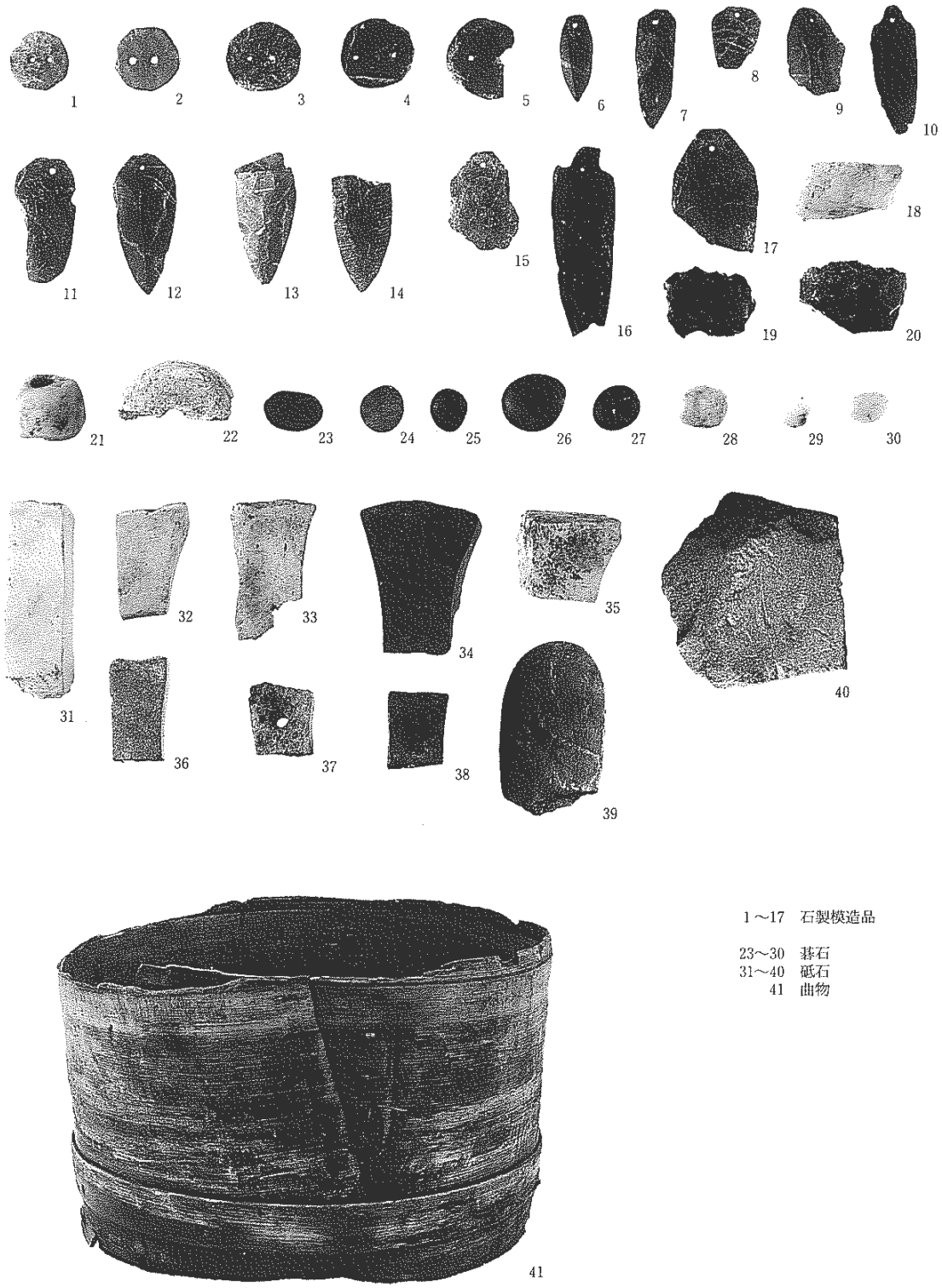


1～6　施釉陶器　　9～12　瓦
7・8　陶磁器　　13～15　硯

図版26　施釉陶器・陶磁器・瓦・硯



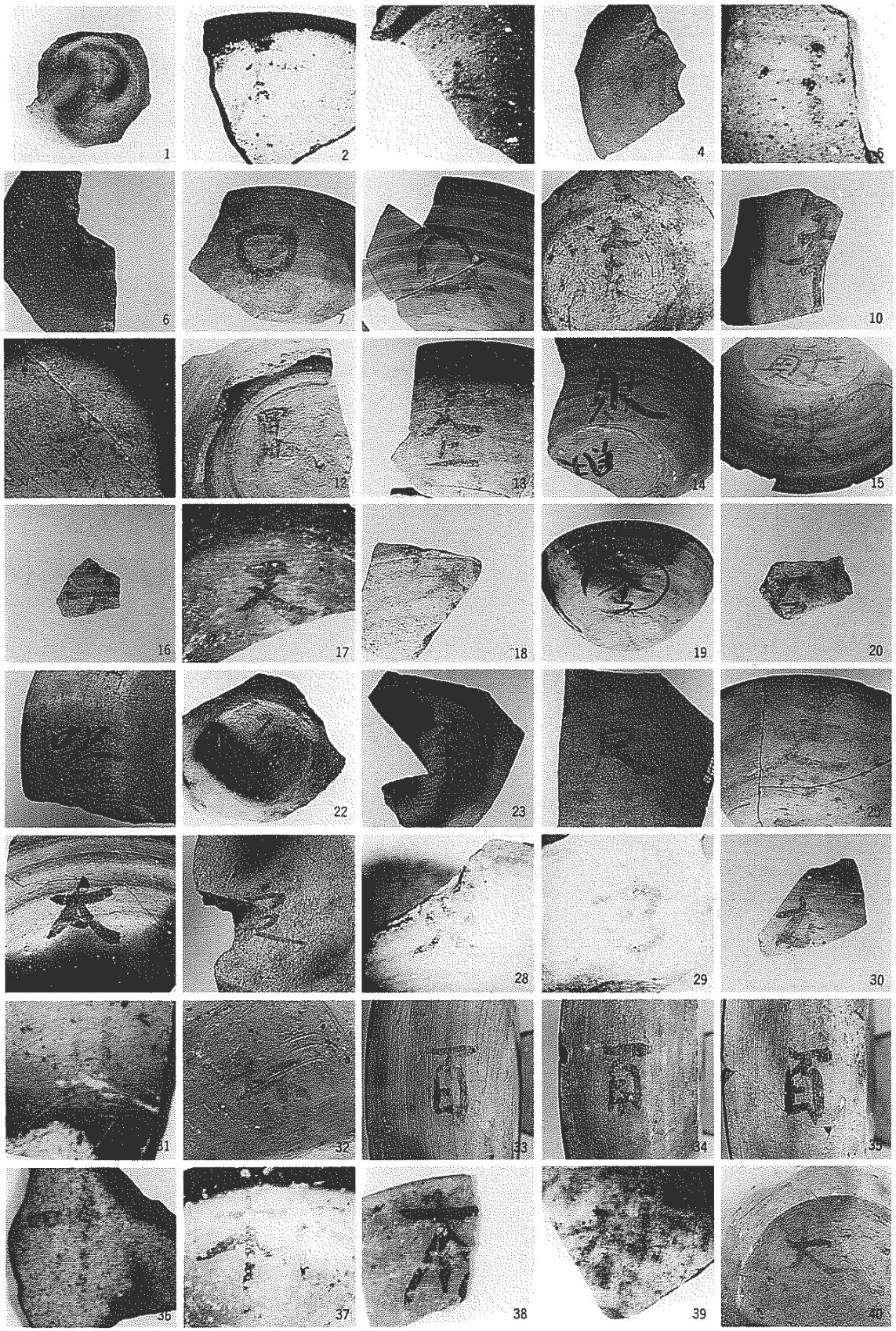
図版27　金属製品・繊維製品・羽口・土錘・円盤



1～17　石製模造品

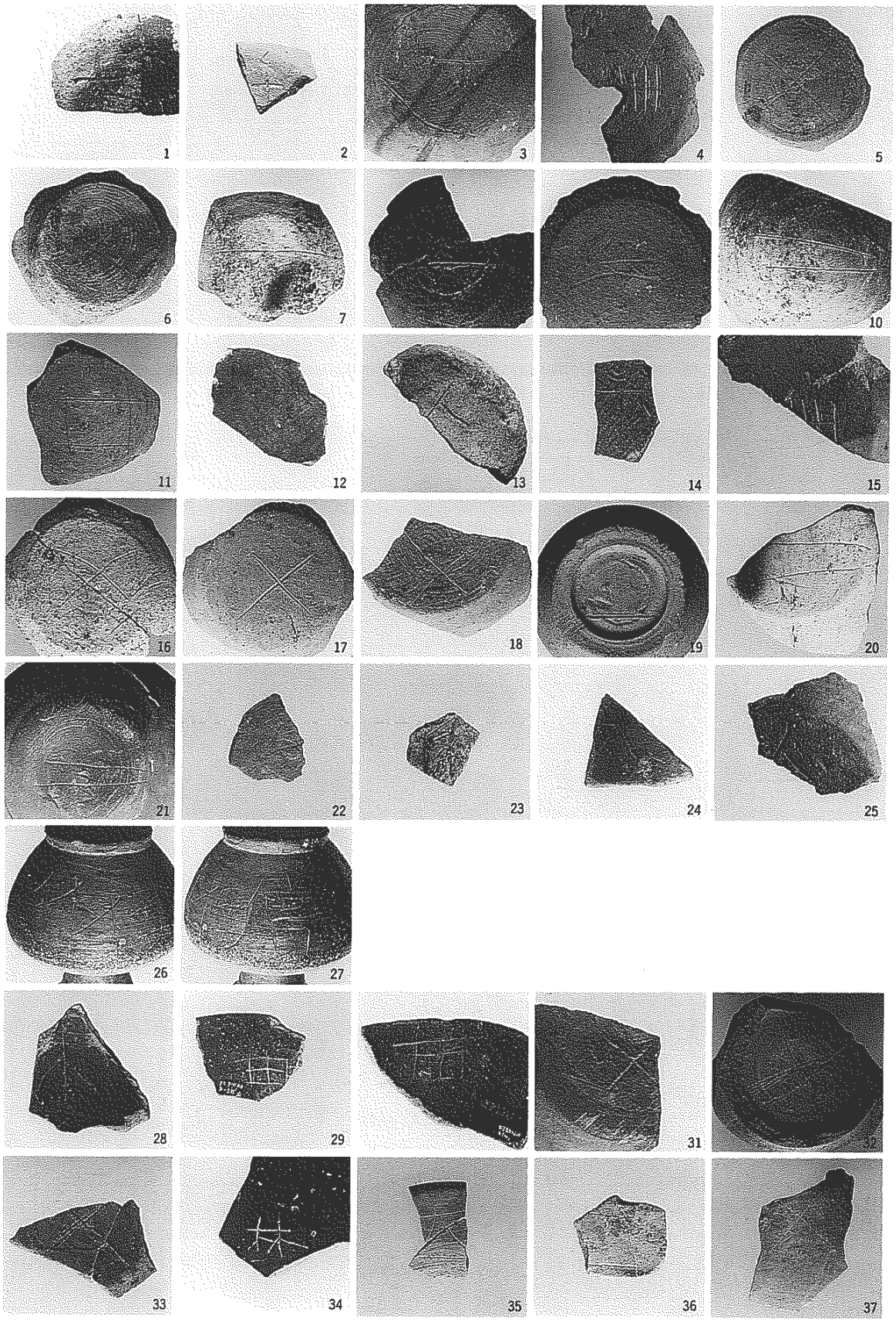
23～30　碁石
31～40　砥石
41　曲物

図版28　石製品・木製品(曲物)



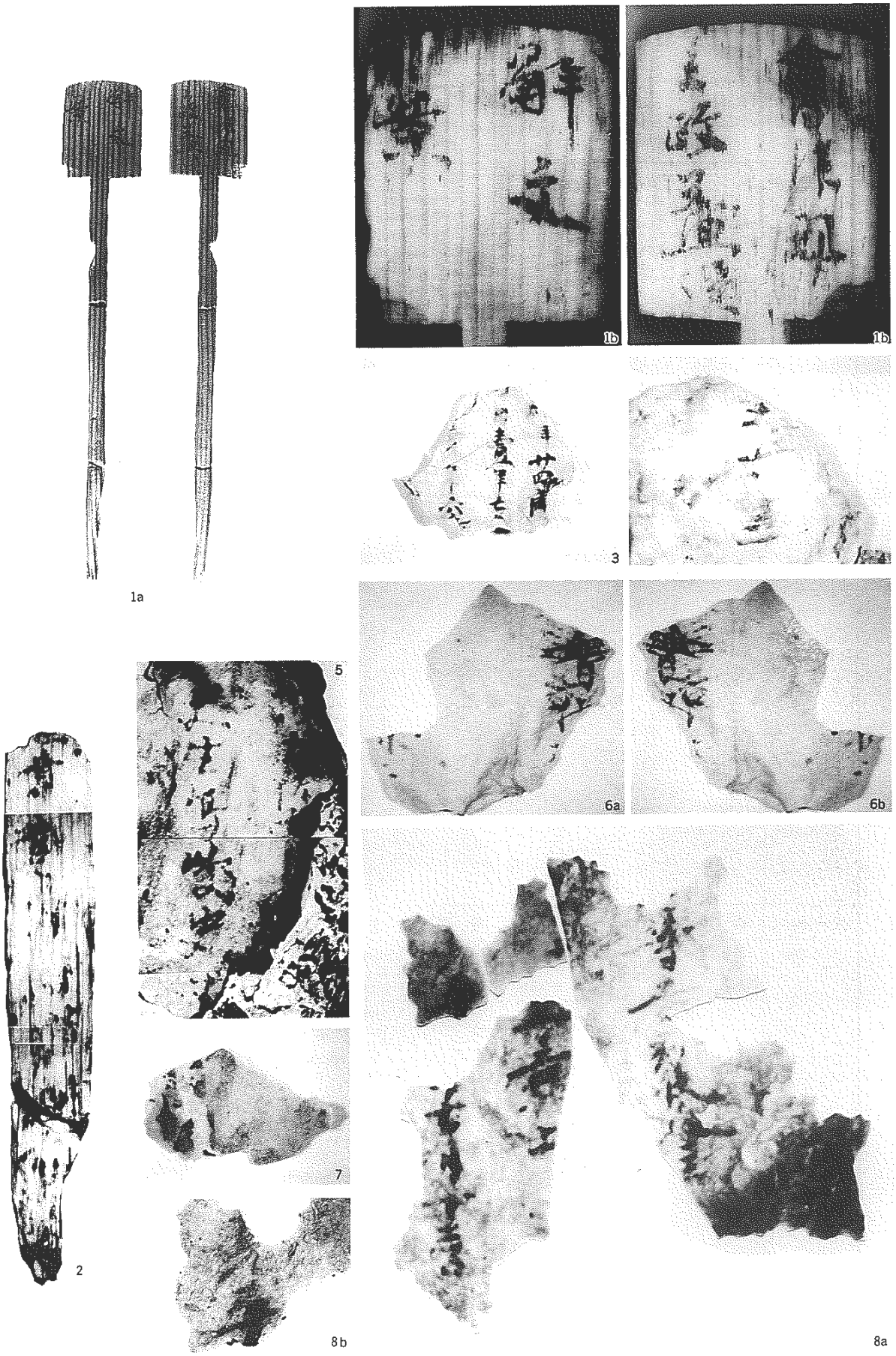
1．墨書18　2．墨書99　3．墨書9　4．墨書36　5．墨書68　6．墨書66　7．墨書25　8．墨書90　9．墨書58　10．墨書37　11．墨書96
12．墨書55　13．墨書32　14．墨書60　15．墨書63　16．墨書11　17．墨書57　18．墨書65　19．墨書18　20．墨書15　21．墨書75
22．墨書42　23．墨書74　24．墨書20　25．墨書80　26．墨書22　27．墨書49　28．墨書95　29．墨書24　30．墨書35　31．墨書230
32．墨書227　33．墨書210　34．墨書212　35．墨書213　36．墨書201　37．墨書206　38．墨書207　39．墨書209　40．墨書211

図版29　墨書土器



1. 刻書58　2. 刻書71　3. 刻書74　4. 刻書78　5. 刻書30　6. 刻書37　7. 刻書28　8. 刻書44　9. 刻書27　10. 刻書52　11. 刻書17　12. 刻書20　13. 刻書66　14. 刻書1　15. 刻書226　16. 刻書219　17. 刻書268　18. 刻書295　19. 刻書224　20. 刻書215　21. 刻書225　22. 刻書297　23. 刻書221　24. 刻書260　25. 刻書296　26. 刻書251　27. 刻書251　28. 刻書14　29. 刻書77　30. 刻書18　31. 刻書45　32. 刻書15　33. 刻書80　34. 刻書207　35. 刻書201　36. 刻書294　37. 刻書274

図版30　刻書土器



1a．木簡3　1b．拡大　2．木簡1　3．漆紙文書1　4．漆紙文書5　5．漆紙文書3　6a・b．漆紙文書6　7．漆紙文書10　8a．漆紙文書9　8b．拡大

図版31 木簡・漆紙文書

報告書抄録

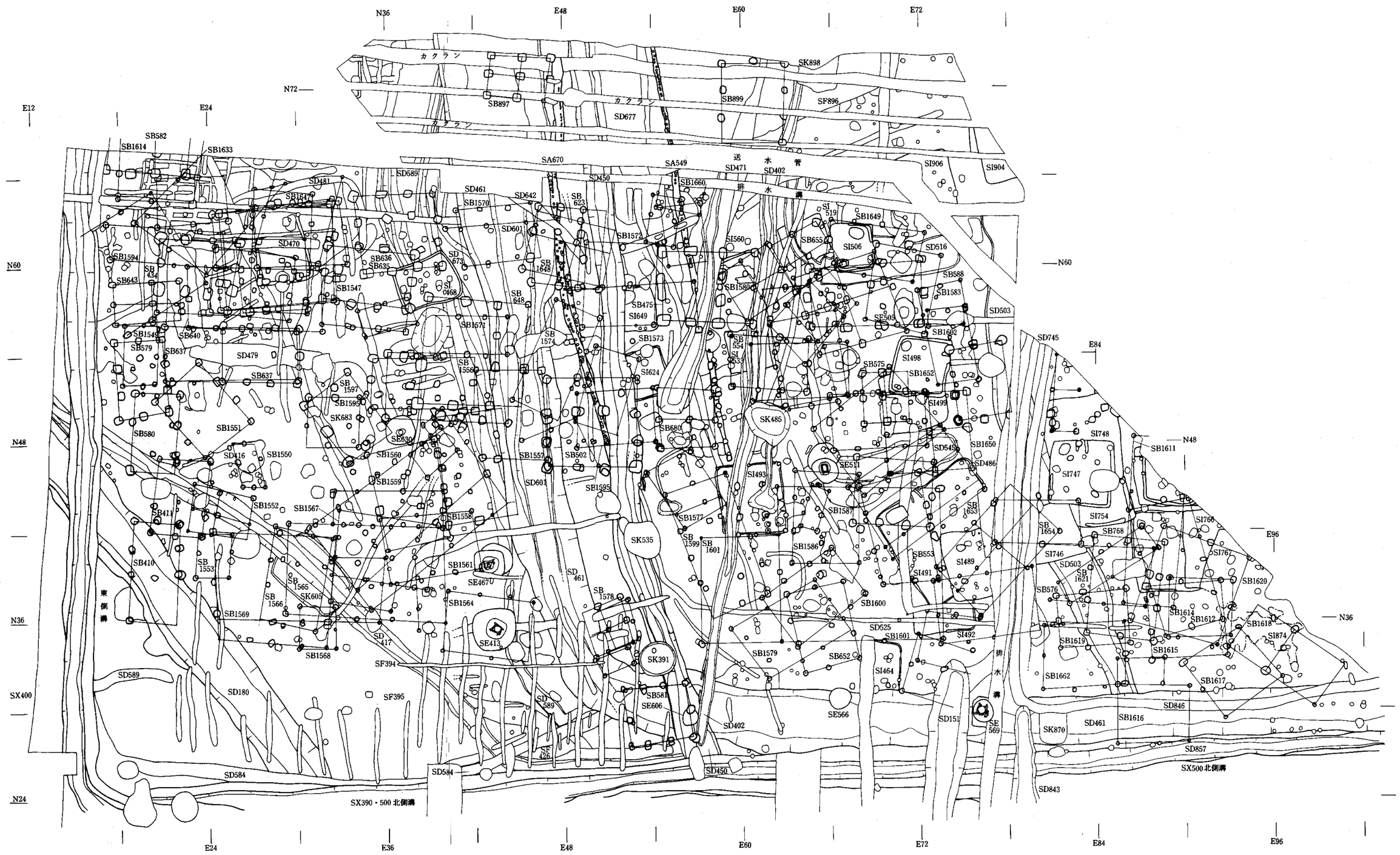
ふりがな	さんのういせきV
書名	山王遺跡V
副書名	仙塩道路建設に係わる発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	宮城県文化財調査報告書
シリーズ番号	第174集
編著者名	佐藤則之・古川一明・菅原弘樹・高橋栄一・吉野武・佐藤憲幸
編集機関	宮城県教育委員会
所在地	〒980-70 宮城県仙台市青葉区本町3-8-1　TEL 022-211-3684
発行年月日	西暦　1997年3月31日

所収遺跡名（ふりがな）	所在地（ふりがな）	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
山王遺跡（さんのういせき）	宮城県（みやぎけん） 多賀城市（たがじょうし） 南宮字八幡（なんぐんあざはちまん） 山王字伏石（さんのうあざふせいし）	042099	18013	38度 17分 55秒	140度 59分 10秒	八幡地区 1次調査 19890608～1214 2次調査 19900416～1218 3次調査 19910408～1220 4次調査 19940410～0626 伏石地区 1次調査 19930426～1228 2次調査 19940413～0627 補足調査 19941028～1109	八幡地区 約16,700 伏石地区 約4,600	道路建設
市川橋遺跡（いちかわばしいせき）	市川字中谷地（いちかわあざなかやち）		18008	38度 18分 10秒	140度 59分 00秒	中谷地地区 確認調査 19930322～0422 補足調査 19961029～1111	中谷地地区 約1,900	

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
山王遺跡	集落跡	古墳後期	竪穴住居跡 区画施設　溝跡 土壙跡　河川跡	土師器　須恵器 土玉　勾玉　ガラス玉 石製模造品　鉄鏃	7世紀前半頃の大集落を調査し、須恵器も多く出土している。
	都市	奈良平安	道路跡 掘穴柱建物跡 竪穴住居跡 鍛冶工房跡 井戸跡 土器埋設遺構 区画施設 材木塀跡 溝跡　土壙跡 小溝状遺構群 河川跡	土師器　須恵器 施釉陶器　瓦　硯 木製品 （弓・下駄・鋤・曲物など） 金属製品 （刀子・耳環など） 土製品 （土製円盤・土錘など） 石製品（石帯・砥石など） 骨角製品　動植物遺体 木簡　漆紙文書他	多賀城南面の街並みを広範囲にわたり調査し、街並みの形成過程や、区画ごとの時期変遷の解明により、古代の都市生活の様子が明らかになった。
		中世	屋敷跡	陶器 漆器　下駄 編機脚・木錘　木槌	新旧2時期の屋敷跡を発見し、16世紀頃の屋敷の構成が明らかになった。
		近世	墓跡 溝跡	三方　数珠　櫛 銭貨　煙管	
市川橋遺跡		平安・中世	水田跡 溝跡　土壙跡	土師器　須恵器 陶器	

L区
C区
D区
J区
A区
B区
E区
F区
H区
I区
G区（伏石地区）
G区（市調査区）
第15次調査区
SD2050
SX750
SX710
SX706
SD140
SD461
SX390・500
SX300
SX3900
SD3181
SD3014
SD5003
SD5051
SD5561
SD5560
SD5562
SD6029
SD5001
SD180
SD152
SD27
SX400
SX299
SD467
SD450
SD402

付図１　調査区全体図


N36
E48
E60
E72
N72
E12
E24
カクラン
SK898
SB897
SB899
SF896
SD677
SB582
SB1614
SB1633
SA670
SA549
送水管
SD471
SD402
SI906
SI904
SD481
SD589
SD450
SB1660
排水溝
SB1647
SD461
SB1570
SD642
SB 623
SI 519
SB1649
SD601
SB1572
SI560
SB655
SI506
SD516
SD470
SB1594
SB636
SB635
SD 673
SB 434
SB643
SB 1648
SB588
SB1583
SB1547
SI 468
SB 648
SB1580
SB475
SI649
SD503
SB1571
SE505
SB1549
SB640
SB579
SB637
SB 1574
SB1573
SB1602
SD745
SD479
SB 554
SI 533
SI498
SB575
SB637
SB 1556
SI624
SB1652
SB 1597
SB1595
SI499
SK683
SK485
SB580
SB1551
SE630
SB680
SI748
SB1611
SD416
SB1550
SB1560
SB1557
SB502
SD545
SB1650
SE511
SD486
SB1559
SD601
SB1595
SI493
SI747
SB411
SB1552
SB1567
SB1558
SB1577
SB1587
SB 1653
SI754
SI765
SB 1654
SB768
SB410
SB 1553
SK535
SB 1599
SB 1601
SB1586
SI746
SI767
SB1561
SD 461
SB553
SI489
SD503
SB 1621
SB 1565
SE467
SI491
SB1620
SB576
SB 1566
SK605
SB1564
SB 1578
SB1600
SB1569
SB1614
SB1612
SB1618
SD525
SB1601
SI492
SB1619
SI874
SD 417
SB1568
SE413
SK391
SB1579
SB652
SB1615
SF394
SI464
SB1662
SB1617
SD589
SD180
SF395
SB581
SE606
SD 589
SE566
SD846
SB1616
SD402
SD151
SE 569
SK870
SD461
SD857
SD584
SD584
SD450
SX500北側溝
SD843
SX390・500北側溝
東側溝
排水溝
N60
N48
N36
SX400
N24
E24
E36
E48
E60
E72
E84
E96

付図2　C区全体図

付図３　Ｄ区確認調査全体図